PL
777
.5
T3
v.6

Takagi, Kōji
Sharehon taikei

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

中みゑくらし 元
ほとゝきすに 津山のみゆ
一そのかし

貫之

Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

http://www.archive.org/details/sharehontaikei06taka

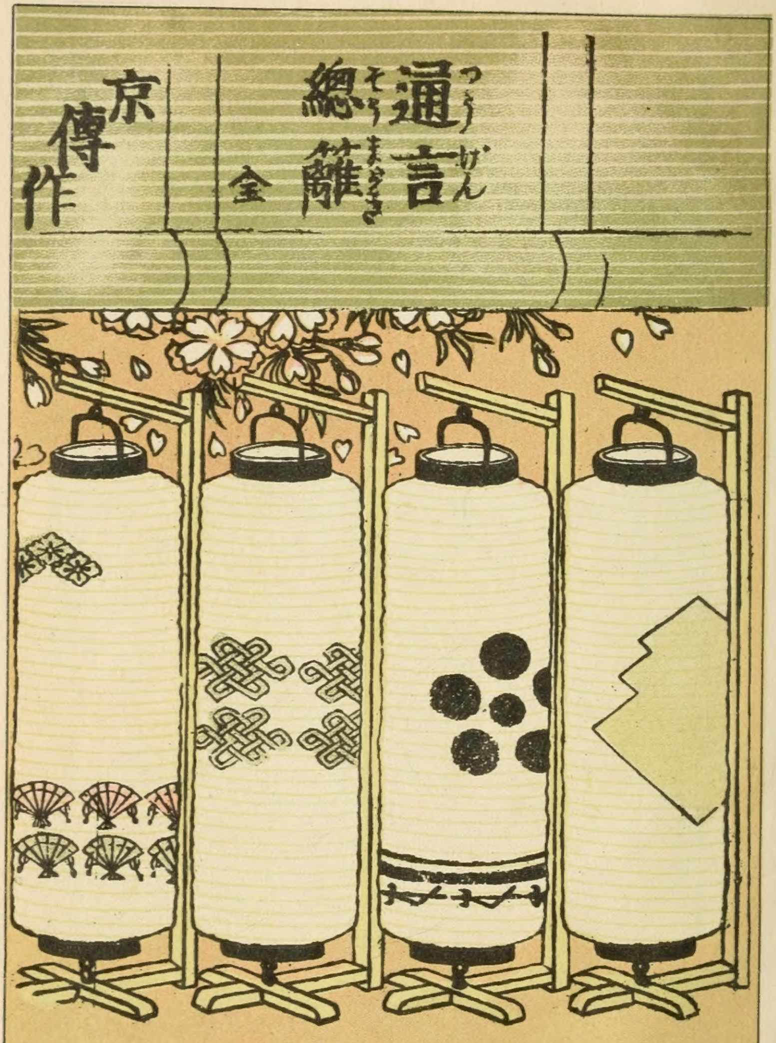
洒落本大系

第六巻

PL
777
.5
T3
V.6

LIBRARY
SEP 2 1966
UNIVERSITY OF TORONTO

1128121



通言總籬の袋

通言總籬の表紙

洒落本大系 第六巻目次

	解題	本文
解題	一—八〇	
彙軌本紀	一	一
角雞卯	四	一九
浮世の四時	八	四七
殘座訓	一〇	六五
太平樂記文	一三	八五
二日醉巵觶	一六	一〇一
誰が袖日記	二〇	一二九
大通どらの巻	二二	一四九

深川手習艸紙……二六……一五九
和唐珍解……三〇……一七三
令子洞房……三三……二〇一
無駄酸辛甘……三六……二三九
客衆肝照子……三八……二五三
短華蘂葉……四一……三〇三
其あんか……四四……三一九
人遠茶懸物……四六……三三一
福神粋語録……四九……三七七
無駄砂子……五二……四〇七
田舎芝居……五四……四四五

古契三娼……五九……四八一
通言總籬……六一……五一三
不仁野夫鑑……六五……五五一
面美知之娌……六七……五六九
一向不通替善運……六九……五九七
虛實情夜櫻……七三……六一九
一目土堤……七五……六四七
傾城觿……七八……六八九

目次終

解題

山口剛閲
高木好次記

▲彙軌本紀　原本　縦五寸一分 横三寸五分

島田金谷作　天明四年刊

書名は漢司馬遷撰と云はる「史記本紀」のもぢり、内題には「狂訓彙軌本紀」とある。彙軌は意氣、粋の意にあてたのである。作者島田金谷は平原屋（平秩）東作の跋に島田金谷と訓ませてあるが、實は大井川を挾む五十三驛の宿、島田金谷を採つたので、中井を利かせたのであらう。

島田金谷は書家中井董堂の匿名である。此事は既に山口剛氏が日本名著全集内の洒落本集解題に於て疑はれて居る、其理由は島田金谷作の滑稽本「新發幸大寺不實錄」（天明七年刊）が島田振袖校となつて居り本書は口唐出鳳臺校となつて居るが、兩者の序或は跋に同じ落款が用るてあつて、兩者同人である事、其島田振袖は當然金谷と共通の人物たる事、同書共に腹唐秋人

の序或は跋があり同一人の疑があると云ふ事、更に該書の廣告に秋人の著書、振袖の著書が竝んで居る事等に依つてである。此疑問は正鵠を得て居るものであつて、本卷採用の原本は式亭三馬の舊藏本であるが、夫に彼の自筆の書入が、口唐出鳳臺の序文の上に離して三ケ所に次の如くしてある。

此序貞九樓主人之作也、狂名腹唐秋人。

秋人は本町連大屋裏住翁と狂歌をともにす、これは自筆也。

中井敬義號董堂、以書爲業、家在山伏井戸。

而して本文も全く同一の筆蹟である、三馬とは同時代の人であり、筆蹟にも親んだであらうから、此斷定は信用し得ると思ふ。まして口唐出鳳臺は腹唐秋人と對をなす可き洒落である。之等から推して島田金谷は烏有の人物、腹唐秋人の別名と認むるは誤で無いと信ずる。

中井董堂は通稱嘉右衛門、名は敬義、字は伯直、號は董堂、春星、小笠、俳號を乙平、狂號を腹唐秋人と云ひ大屋裏住の門である。書道は董其昌を學び董堂と號したのである。本町二丁目に住み、金吹町播磨屋新兵衛の通ひ番頭であつた。書道で大家と稱せられ、諸侯に招聘せられるに至つたが、猶舊主家を尊重したので當時評判であつたと云ふ、文政四年七月廿六日歿、

年六十四歳、築地西本願寺地内、淨見寺に葬る。

本書は全篇狂文で、本格の洒落本ではない、江戸繁昌記、或は例の江戸ッ子の江戸自慢であり、其最後に意氣、大通の本義を述べたのである。劈頭に天の岩戸の故事を引用したのは、彼の先輩朱樂菅江の「大抵御覽」の中洲繁昌記の最初に思ひ寄せたのであらう。「此面白と目出度といふこと扶桑廣しといへども、東都に止る」と云つた所に作者の主眼が存する。江戸自慢に對し大坂人の反對を述べたのは所謂設問法である、更に之を駁し、江戸の名物名士をあげ、大坂の客を屈服せしめ、更に自己の生立を叙し幼年時代からの敎養をあげ、十五歳で初めて深川に遊び、更に吉原と向上しては、「はじめて知る深川の夷狄なるを」と悟つた。かくて郭通となつた、しかも要するに

> おもしろいの最上。靑ろうのたのしみ。智者となり愚者となり。通となり野暮となるも何や。正に金の多少による

と云ふのが作者の思想である。だから其金のために身を過つなと云ふが彼の所謂狂訓なのである。文中「余長命にして一一世の形勢を見るに」と老人らしい口吻をもらして居るが、當時彼は廿七歳の面白ざかりであるから、本書は要するに江戸自慢と、自己の通を示さんとする野

心の發露に外ならぬ作品なのである。然かも大通たる可き講釋をする程、理窟つぽくない狂文なのである、風來山人を模してあれほど不平味のない文である。（山崎麓記）

▲角雞卵　原本　縦五寸三分　横三寸七分

月亭可笑作　花山道人閲　天明四年刊

書名は花山道人の序に「遊友月亭のあるじ近曾堀の内詣の歸るさ、半途におゐて一夜を宿し、不意四角なる卵のある事を知て以て則爰に著」とあるので知られる。卵の四角と傾城の眞實はないといふ俚諺があるが、「一雞群にまことある」を知つたから、卽ち四角な卵の存在を認めてそれを書名にとつたのである。これに類した書名の洒落本には、寛政六年刊、百一誌作「北廓鷄卵方」、享和三年刊「眞櫻庵馬鹿人作「玉子四角」等がある。作者月亭可笑は傳未詳であるが、閲者花山道人の著書、文政五年刊「青樓怪談玉野語言」に、「嚮に二醉亭佳雪と共に角雞卵てふ甲驛の洒落をあらワセし」と述べて居るによつて、二醉亭佳雪とも號した事がわかる。花山道人の傳は、本大系第十二卷に所載の「青樓怪談玉野語言」を參照ありたい。この兩者は、文政十一年刊「鵆毛衣」、文政年間刊「津多加津羅」の人情本を共著で發表して居るほどである

から、相當深い交際のあつたことは察せられる。「青樓怪談玉野語言」の著作されたのが文政五年に相違なきものとすれば、既に「西の田舍」即ち、彼の郷里名古屋に歸つて居るが故に、然る後に於てなほ共著として居る點を考へると、玆に或は同一人ではあるまいかとの疑を抱かしめるのである。

梗概は、新宿で一二を爭ふ國佐屋のお梅、条之助といふ客に惚れぬいて、条之助と彼の友人金との狂言とも知らずに、金貸となつた金の怒鳴り込みを惚れた弱みに不憐と思つて、山城屋の忠左衛門を欺いて金二兩を無心して条之助に渡す。まんまとそれをせしめた条之助は、國佐屋を出て大和屋といふ茶店で金に落ち合ひ、その金を持て二人で同じ郭の増元屋へ書遊びと出かけたといふ筋である。

内東宿といふのは、内藤宿をわざと變へたのである。信州高遠の藩主内藤駿河守の邸があるので名稱となつた。元祿十一年に新驛開始、享保年間に中止、明和九年再興。

春の華唉はじめより雪氣催す冬の日ゝ堀の内の裏詣に祖師菩薩を名題に遣ひて遊びに耽る事は、安永年間刊、山手馬鹿人作「世說新語茶」（本大系第四卷所載）山下に

【宮】どふでも歸りなんすかへそんなら又何時來なんす【長】此比に來よゝいの【ミ】イ

ヽエ此比と斗りいひなすつちやァいつまでもけへしやァしやせん日をきやめてけへりなんし【長】そんなら廿五日比に來よれいの【ミ】天神樣を遣つてかへ勿躰ねへのとある如く、お寺參りや神信心をだしに遊び歩いた人々の消息をよく物語つて居る。

お部屋でも旦那さんがいひなさるにやァのお部屋は、樓主の居間をさすのであつて、吉原では內所と稱して居る。

毎日【禺中刻に來る飴賣】下りれよしかナ下り〳〵は、毎日午後十時頃飴賣が來るのであるが、當時の飴賣は上方下り飴と稱したものである。但しこゝでは淀橋の名物の飴であらう。

內陳道れこなたて御ざる御さいせんなら爰へ〳〵は座敷への廊下を社寺などの奧殿や奧院へ行く道にかけて洒落れたのである。

いろけなしといへバ。モシかういふはなしがありますといふ話といふのは、「新撰古今枕大全」に「艶道通鑑」を引用した、同書卷四「かたるにあらはれ」の章の中に出て居る。

藝者のこらすハイさよふならをきつかけにミな〳〵陳を引とる

客が床に入らぬ内に藝者の歸るのは吉原にはない事である。寛政十二年刊、笹浦鈴成作「大通契語」(本大系第八卷所載)に

或人曰未ゞ床もおさまらぬに藝者の歸るといふ事ハ吉原などにハなきほう(法)也こゝにかぎらずをか場所にハよくする事也此等の趣を以夷國といふ事を知るべし

と素破拔いて居る。

あげにのろふか

と云ひ出したのは、さげ輿に對する駕籠の義で、國佐屋の者に見られてはまづいから、垂れを下して外から見えぬ樣にして行かうといふのである。

条之助に首つたけのお梅が、此噂を聞いてやつきとなつたが、矢張り条之助の一計におさまるといふ後編の豫告があるけれ共、原本の發見されないところを見ると或は出なかつたものらしい。

条之助を慕ふお梅の眞情も一面では忠左衞門を欺く手管である。そこに戀愛合戰の虛々實々があるであらうが、お梅のつき詰めた戀の描寫は、やがて人情本に一轉すべき萠芽を示して居る。

▲鐘は並木か兩國歟 浮世の四時　原本　縱五寸三分 横三寸六分

南陀伽紫蘭作　天明四年刊

書名は、吉原を別世界と考へ、江戸を浮世とし此方と訓ませたのである、四時は郭の締切時刻を意味する。刊年は自序に天明辰とあるので、天明四年甲辰と推定する、作者は窪田俊滿の別號、傳記は本大系第四卷所載「玉菊燈籠辨」の項を參照あり度い。

天明四年四月十六日夜、京町一丁目丸海老屋物置から出火、吉原全郭燒失した、そこで假宅が、淺草馬道、並木、駒形、黒船、兩國附近に出來た。（火元は一說に水道尻提灯屋、或は同所秋葉常燈明からとも云ふ）本書は之を題材としたのである、角書に「鐘は並木か兩國歟」とあるは、假宅の所在地に思ひ寄せた芭蕉の句の洒落である、自序に夏五月とある点から見て、非常に素速い際物の作品たる事がわかる。劈頭

既に兩州に花街うつしと聞えければ

と書出したのは、「平家物語」卷之五「都うつりの事」、「源平盛衰記」卷之十七「福原の京の事」などに思ひ寄せたらしいが、別に本文をもぢつてはない。

【ありしば】あれ見なんし。また千ごりが來んしたよ

とあるは、假宅の樓上から兩國の大山參りの水垢離を眺めて居る光景である。

【豐二郎】あと三人かェ、トあとはヲ、それ〴〵かんしやう〴〵ノ【このはら】そしてへ【豐二郎】深草のせう〴〵にけわい坂のせう〴〵是で七人猩々といふのだ

六根淸淨をもぢつて浮世の事を知らぬ若い遊女をからかつて居るのであるが、此趣向を其まゝ採つたのが、山東京傳の黃表紙「福德果報兵衞傳」(寬政五年刊)である。

【ありしば】アノ子はいからしへ遣るといつでもらちが明キんせんよ

とあるは、兩國廣小路冠髮香五十嵐兵庫へ化粧品を貰ひにやると、廣小路の賑さに禿が氣を取られ、道草を食ふ意味である。

【とよ二郎】みんな前の砂村さんのゆづり物だ。そんならなるほど能西瓜種だろふ

菅原を砂村とわざと間違へた無駄である、砂村は深川の奥、小名木川以南の地、南瓜の名産地である。

こふ屛風を立まはした所は。きつい八人藝だ

とあるは八人藝が高座で屛風を立廻し、中で演ずるからである。當時流行したのは川島歌命

であらう、文化頃人氣のあつた川島歌遊の師匠である。八人藝は一人で諸種の樂器を鳴らし、老若男女の口吻を眞似、八人分の藝をするのである、足をも用ゐたので無作法なのと、又他に模倣されるのを嫌つて見物に見せなかつたのであらう「好色一代女」卷之一に

萬治年中に駿河國安倍川の邊より。洒樂といへる座頭江戸に下りて。屋敷方の御慰に紙帳の中に入て。鳴物八人の役を獨して間を合せける

とあるのも紙帳の中で演じたのである。

本書は兩國附近と云ふ變つた假宅描寫に興味をもつたのと、作中の人物の洒落に興味をもつた作品である。跋に「うき川竹の假の宿。おもしろそふにはなし本。洒落本見なんし大通さん」とあるはよくその間の消息を認めて居る。洒落本初期の傾向をよく傳へた書と云ふ可きであらう。（山崎麓記）

▲殘座訓 原本 縱五寸二分 横三寸六分

鈍九齋章丸作　天明四年刊

書名は、本文の「浮世をざんざぶしのうたてく見やり」の「ざんざ」の音を假りて斯く號け

しものであらう。作者鈍九齋章丸は傳未詳である。本書は霄床庵の壁中から出たといふが、その霄床庵の主人醉正先生といふのが鈍九齋章丸ではあるまいか、若しさうとすれば、「本所のかたほとり、世を避け德を懷にし、貧を甘じ浮世をざんざぶしのうたてく見やり、我ひとりすめりと閑居に日を送る異老」である。又「其さま儒者にあらず、佛者に非らず、醫者にあらず、神道者にあらずむしやくしやとして、狸のやふなるおやぢ」と云ふ。本書卷末の廣告によれば、鈍九齋文蒙とも云ひ、狂歌師であつたことが推察できる。

早里哥之介と云ふならず者が、霄床庵醉正先生の庵を訪れて、去年から今にかけて、世上甚だ困窮して世人誰一人として大通の話などして、浮かれて居る者もない。旣に我が道も衰へんとして居る。再び大通界にする謀略を教へてくれと賴む。醉正先生よしきたとばかりに、時の社會が、如何に不景氣に襲はれて居るかを、如實に物語る中に、自己の社會觀を織りなして、訓戒を與へるのが本書の梗概である。

貴人又は風雅の人物迄も、寄り集りての噺を聞くに、米高値の噂ばかりで、家ごとに粥所はさて置き、牛馬の喰物を人々が食ひ、江戸中かての飯を喰はぬ所は無く、百姓などは麥粟も大かた喰つくして、今は麥二分に糠ふすまを八分のかて飯でやつと死をまぬがれて居る。江戸の

大屋でも、お店もだん〱明き、店衆の中行方しれぬも有り、又宿無しになつた人さへある有様、勢ひ福の神も、路頭にまよひ、古道具屋へ鞍替へせられ、切見世女郎を見るやうに、買手の客を待つ哀れさ、目出度花街の吉原でさへ、かて飯喰ふ所あれば、櫓下なぞは、蒲團一枚持たぬ家も有といふ。日金が落ちて誠に結構であつた町藝者も、暮しもさん〲三下りで、根〆の悪い生業よりもと商賣替へをする。やゝ誇張的だが天明の飢饉の有様を克明に描寫して居る。天明二年あたりから六七年頃迄續いた大飢饉の眞最中が即ち本書の出た天明四年頃であつた。序にも特に仲夏としてあるのが際物としてのみでなく、その慘々と押し寄せる生活苦の怒濤の中から、急を告ぐる叫び聲が吾人の肺腑をつく感がする。

世からの悪きを悪む事、皆是智のくらきなり。生有れバ死あり、明れハくるゝ。暮れバ明るの理なり。必世をうらみ人をうらむる事なかれ。かゝる靜謐の御代に生れ合たるこそ。

有がたき事ぞかし

と輕く逃げては居るが、作者の心底には只ならぬ響動きのあるを見遁し得ぬのである。

本書は洒落本としては非本格的のものであり、第二義的のものではあるが、風俗資料としては、珠玉的存在であり、又正史の不足を補ふに缺くべからざる文字である。

▲太平樂記文　原本　縦五寸三分　横三寸六分

烏亭焉馬作　天明四年刊

本書名の「太平樂」は本大系第四卷所載「太平樂卷物」の解題の中に說明してあるからその項を參照ありたい。作者烏亭焉馬は、一名桃栗山人柿發齋と云ふ。同人の傳記は本大系第五卷所載「通人の寐言」の項を參照ありたい。

本書は、四方山人即大田南畝が寄た序に、甲辰初春とあるから、天明四年の甲辰と推定した。本文中の「寶合の會」より判定しても誤らぬところである。本書には文政六年癸未初春に出た再摺本がある。其際に初摺の「甲辰」を「癸未」に、「于時文錄十六兵衛はきためから寅のとし」を「于時文政六兵衛紙くず籠から未のとし」とし、卷末の「狂文寶合記」の廣告の末尾に「江戸橋四日市、東都書林上總屋利兵衛」とあるのが削除してある。尚又、初摺本には跋のあつた形跡は見受けられないが、再摺本には次の如く、跋が載つて居る。

跋

去年四月二十五日。柳橋の河内屋にて。寶合の內會をやらかせしに、如在のないたかい

手合。下馬のしつ珍万ン寶ウ宇宙最第ちよぼ一のさい賽を。盆茣筵のところせくまてはりかけて。披講の聲のたかつぱり。しこり切ッたるまつさい中。本所ゥの焉馬のおちい。摠てのおちをふつたくりにふりこんで。太平樂のまき舌に。坪皿の富類那が辯舌。抑き上たる詫宣の。かミは賽の目の二十一丁にたらずといへとも。江戸八ッ百八丁のすミから角まで。行ワたつたる一ッ卷を。くぎぬきつなぎのぬけめなき。かつさ屋のやどろくが。いちはやくうけつこして。此初はるの新板物。跋をしろとかなんとか角とか。否といつちやァ場形がすます。おほきな六拾くワん末に。なぐりつきぢの色男。艶書のいとまに是をしるす。

未のはつはる　　　　すかる述

柳橋河内屋に於ける寶合の會のあつた去年四月二十五日は天明三年であるから、本跋も初摺本には付いて居つたものと思ふ。「すがる」は爲輕、卽ち竹杖爲輕で、森羅萬象と同一人、其の傳記は本大系第四卷所載「眞女意題」の項を參照ありたい。竹杖爲輕は文化五年十二月四日に歿して居るから、「未のはつはる」と云ふのは、再摺の際に於ける入木と看做し得るのである。扨又、問題となるのは、本書の書名が果して「太平樂記文」なりやと云ふことである。初摺

本は元の題簽がなくて、後に書いた「太平樂記文」である。再摺本には、「太平樂卷物」といふ題簽が貼られて居る。而して内容を檢討して見るに、内題には「太平樂記文」とあり、本文中には、「あくたいれお江戸の花太平らくの卷物と題して考へれと」とある。題簽―外題と内題と必ずしも一致すると限つたものではないと云ふ點から、考察すれば、「太平樂卷物」にて然るべきであるが、又一面、本文にある通り外題に出したか何うか、これも亦保證しかたきが故に、初摺本にして完本發見せざる限りは疑問として殘して置き、本大系には一ト先づ初摺本通りに依ることにした。

本書の梗概は、廿四五の靑年が髮結床へ行つた。そこは先ヶ客で混んで居た。自分の順番の來るのを待つて居る間に、女郎買に行つた時の體驗談を太平樂一杯に陳べることが骨子をなして居る。

此ごろ狂歌さかんにはやりと、當時狂歌の流行盛んなりしを記して居る。この狂歌の黄金時代に於て、竹杖爲輕が主催で元ノ木網、四方赤良、朱樂漢江、鹿津部眞顏、加保茶元成等の後援によつて寶合の會を開いたその時烏亭焉馬に狂文の注文が來た、出來上つたのが本書である。

本書は卷末に「告が出て居る。「狂文寶合記」の前哨的宣傳である。寶合はこれより先、市ヶ谷左内坂の名主、島田左内が安永二年に催したことがある。寶合の記一卷を市ヶ谷左内坂、富田屋新兵衛が出版したが、「今は此本すくなし」と既に「奴師勞之」の作者が云ふて居る。それを眞似たのがこの「狂文寶合記」である。

狂歌道華かなりし時、時の文壇を風靡した狂歌師輩の得意の一面を紹介すると共に、髪結床の情緒を纏綿とたゞよはせ、式亭三馬の「浮世床」(文化八年より刊)に一片の暗示を與へたものと思考する。

▲二日醉扈觶　原本　縱五寸三分　横三寸六分

萬象亭作　天明四年刊

書名は自序に「二日替りの二日能を、とりもなをさす外題に居、大入盃の八はい機げん」とあるのでわかる。作者萬象亭は森羅萬象と同一人、其傳記は本大系第四卷所載「眞女意題」の項を參照あり度い。

梗概は、森田座の芝居がはねて、打出しの太皷につれて出る客の中に龜屋忠兵衛がある、船

頭茂兵衞をつれ、深川土橋に遊ぶ、忠は馴染の梅川と客八左衞門の事で痴話を起し、茂は大坂下りの藝者お三の切ない戀を容れて契ると云ふ筋である。

天明四年森田座の春狂言二の替りに、三桝德次郎上方下りで、松本幸四郞と閏正月廿八日から夕霧伊左衞門を演じ、更に梅川忠兵衞、おさん茂兵衞を二日替りに勤め、淨瑠璃富本齋宮太夫で、評判がよかつた、本書は之を題材としたもので、序に「天明四三月」とあるのは、四年三月で最新の際物たる事を示して居る。かく芝居の際物を用ゐた書には、此前に「三都假名話」(天明元年刊本大系第四卷所載)がある。最初に臺帳を出して、次に本文にかゝる趣向は、後に山東京傳が「廓の大帳」(寬政元年刊本大系第七卷所載)が模倣して居る。

【見物】ア、おもしろかつた。德桝は奇麗な物でござります【侍】いかさま十目の見る所十指のゆびさす所。たれが目にも美しくみへます

桝德は三桝德次郎の略稱、彼は一世三桝大五郞の門、桝屋漁江、大坂の若女形の名人である。文化九年八月廿五日歿、享年六十三歲。

けふは京傳と勘彌を見物にいつたか。どれもよくするよ

アレハ京傳が作の小紋裁の中の形だ

とあるは山東京傳の宣傳である、當時京傳は廿四歳で、該作者とは大口屋文魚を中心として親交があつたらしく、萬象亭は先輩として彼を引立ててやつたのであらう、本書の口繪も京傳に書かせて居るのである。「田舍芝居」(天明七年)の發表以前迄は、兩人の間は斯くの如くよかつたのである。(本卷所載「田舍芝居」の項參照)

【忠】(中略)御屋舗から賴まれた踊を藤間に誂やうと思つてこいつも忘た【女房】夫は日本橋のかへ

とあるは、藤間の家元勘兵衛か、植木店藤間勘十郎をさすのであらう。

【三】そないにひつしよなふひかつておくれな【茂】螢の臀しやァあるめへし。ひかるとは何ッのこつたナ

上方詞で叱るのをひかると云ふ、夫が江戶ッ子の茂兵衛にはわからないのだ。

爰を紋三でこぢ付れば。一條國廣の刀といふ所を。神田吉廣の納太刀とは。書もんだらふが子

とあるが、此年の森田座春狂言「初曆閙曾我」で尾上紋三郞(後二世坂東三津五郞)の十郎祐成が國廣の銘刀を持ち出すからである、神田吉廣は大山參りの納木太刀に書く刀銘である。

【長藏】モシ仙石屋に高麗やのむすこといふ所を揉こみの仕内はどふでござります

とあるは、二世中村助五郎（仙國屋魚樂）と市川高麗藏（後、五世幸四郎）をさす、共に當時の花形である。

本書は要するに、卷末に

しやんと納まる二タ女夫。二日替りのひやうばんを遠からんものはとり〳〵噂の音にも聞け。近きはよつて見物あれと贔負の臂をはるの口の御笑種と筆を納めぬ

と云ひ、序に

見かけは洒落本。世界は狂言。鳴聲鸚鵡石に似たりける

と斷つてあるので其創作の動機及態度がわからう。恐らく書中に

高麗やが部屋へいつたら文魚殿が來て居て大ばなしさ。あの人もきつい錦江びゐきだ

とある、その大口屋文魚の依賴を受け、四世幸四郎一座のために書いてやつたのではなからうかと推測される。十八大通の一人だけあつて、該作者も仲々の劇通なる事がわかり、「田舍芝居」の作があるのも偶然でないと點頭ける。深川の描寫に至つては、單に劇と結びつけただけで、他奇がない、梅忠、おさん茂兵衛の外、お花半七まで出してある。

白拍子のみ反故

▲誰が袖日記　原本　縦五寸二分 横三寸八分

寶嘉僧作　天明五年刊

書名の「袖日記」の袖は、今日袖珍型といへると同じ意味で、袖にでも樂々と入れ得られるほどの日記と云ふのである。

作者寶嘉僧は中出長左衞門、元日堂とも號す。神田花房町に住める彫工で、俳諧を好み幇間的生活をした。

本書の梗概は卷頭の諸譯によつて承知される。江戸橋町の女藝者の戀文を貰ひ受けて纒めたのが卽ちこれである。

たゞのやくしのまへ

は本所番場町にある。多田藥師は、慶長元年に多田宗玄といふ人が靈告を受けて、京都の東山の邊から藥師の像を持つて來て安置したのに始ると云はれて居る。

百川へ參り申候

伊勢町裏川岸にあつた料理屋で當時繁昌した店である。

ほりの內へ參り

堀內祖師様へ參つたのであつて、當時は參詣群集した。祖師様をだしの御客で新宿の郭の榮えたのもこの頃である。

門之介

二世市川門之介で、初世門之助の養子である。王子瀧ノ川に住んだ。四世團十郎の門に入つて、辨藏と云ひ、明和七年十一月、中村座にて始めて二世門之助を襲いだ。若衆方が專門であつた。荒事もしたが、和事に秀てゐた。寬政六年十月十九日歿、享年五十二歲。

平井のせうてんさまへ參り申候

葛西の平井の聖天様で、享保の頃から參詣が多くなつた。

深川升屋

深川洲崎にあつた江戸料理屋の代表的なもの。升屋宗助が經營した、宗助は升億と號し、後剃髮して祝阿彌と稱した。京都丸山の茶亭に何阿彌と云ふのがあつたがそれに倣つたものだらうと云はれる。庖丁に名を得た人である。其家の構、大廈にして美を盡し、數寄屋二三ヶ所の

外鞠場まで備へてあつた。貴人公子を初め當時の富商通人等も皆こゝに遊んだと云はれる。寛政初め（多分三年であらう）の津浪のために亡んでしまつた。

元山王

麹町區隼町のこと。

代地

代地には、大代地中代地がある。前者は淺草旅籠町、後者は淺草新片町の稱。

三弦ぼりの御宿下り御座候

三弦ぼりは三味線堀にて下谷區竹町にある堀の名　こゝでは多分佐竹右京の御宿下りであらう。

客に伴はれてあちこちと物見遊山に出かける樣から、愛猫黑が若林の犬にかまれたと云ふ藝者にとつては大きな事件の報告、唯今髮をしまひ居候まゝ紅粉ふでにてしたゝめ候との、軟き筆の跡。朧氣乍らも藝者の生活を寫し出した點が、洒落本中の珍品として評價される。

▲大通どらの卷、原本　縱四寸五分 横三寸五分

下界隱士作　天明五年刊

書名は「大通虎之卷」と云ふべきを「大通どらの卷」と洒落れたのである。又「どらの卷」は「放蕩之卷」である。大通のことは本大系第二卷所載「大通傳」、虎之卷は本大系第三卷所載「契情買虎之卷」の項を參照ありたい。

作者下界隱士は森羅萬象と同一人である。本人の傳記は本大系第四卷所載「眞女意題」の項を參照ありたい。

梗概は近頃專ら通と云ふことが流行するが、扨遊里に於ける「通といふものは面に通をぶら付かせず能ない灑然をもヲ、いゝと讃左迄ない事にても難有と育つる故人の照るといふことなく立テ引を專とする心より金がなくては娼妓は買はぬがまし聲花をせぬくらいなら大門をは潜らぬが能」と云ふ定見のもとに、斯くあるべきだと論ずるのである。

味噌は味噌ながら味噌臭はわろく粹も粹くさきは粹ならぬ物ぞとは誠に古今の通言なり

とは作者が通に對する意見を的確に表示して居る。

女郎に無心を云迚も折と時とがある物なりれつきとした通達でも遊廓の金には詰るならい遣つた□の金詰切双詰りし方角に□とも請合男づく頬を捨ての無心には女郎の心は知ねど

も共苦ハ誰がさす事ぞと氣の毒餘れハいとおしく人の譏りも顧ず裸にもなり年ンをも入レ身を粉に砕く黄金心ン中貸人の手柄借手の名聞氣の切レた女郎じやと立ッ浮名にハ客がふへ客がふへれバ金もでき首長はまる借金の淵ハ瀬となる

結構な遊びもあるけれ共、初會で一寸甘い言葉をつかはれて有頂點になり、裏には身揚りで居る筈だと約束の夜に行て見れば

女郎の方でもぬかりなく夕ア貰筈の客人が來いせんから今夜ハどふ共しておくんなんし今度ハきつと働いすォホンニしみ〴〵お氣の毒でござんすとどふしいせふの二ッ三ッもやらかして明透らしく見せ懸れバ今度は〳〵と思ふより木乃伊取迚又密人己が手に蹴返して罠に懸る白痴共去とてハ世に多し

とは蓋しこの間の消息を告げ得て妙と云ふべきである。

買切つた上からハ傾城の五輪五躰ハ我ものと決定し假令名染の客にもせよ貰引を聞入れずちつと床か不勤か又は床廻りが悪いと亡八を呼と切双廻し傍構ハすかなり出せハ心の内でハ親の敵のよふに思ひながらも何でも一夜の賜顧なれバおゆるしなんしと誤て小言いわる右流左さにまんぢりともせず勤ても商冥利かふする筈と客といふ字を眞向に差翳し腹一

盃に權威をふるへど定代の入日の外格別の金の入でもなし

と云ふ新五左の遊びは當世の女郎買にまだしもに見ゆると大通の元〆文魚先生が茶飯咄に云はれたが、通ぶつて、貫に來ぬ先に座敷をやるなぞは誠に粋が身を喰ふと云ふものだと斷じた所に、作者の思想が窺はれる。そこで

女郎ハ遊ひもの遊君遊女の遊の字ハあそぶといふ文字なれハ壹歩ならハ壹分だけ貳朱ならハ南鐐だけ客といふ字の位を落さす買といふ字を心に込悪穴を云ず悪洒落を決してせず見へをいわず嘘をつかず男氣を專らとして座敷の數を重ぬる時ハ需ずして通となり態とならざる仕内の中に自と出る面白味にハ傾城も思ひ付世間でも難有がるべし

と遊びの祕傳を敎へて居る。本大系第三卷所載「無頼通說法」の作者戀川春町も、書中に

浮世の穴を知つたをいわず。諸藝を殘らず知たを言ず。唯こゝろいきの通つた人を愚俗が宗旨の大通と言ひます

と云ふ點や、同じく、第三卷所載「大通法語」に

我樂にふかくきらふことは、悪振。已惚。利口張。趣向過の四ッ也

と擧げて居るなぞ、何れも共通點で、これ等が普遍的な通の定義であらう。

洒落本に於てもはたまた黄表紙に於ても、この通の取材は尠からざる數に上るが、本書の如きは區々に互つての通人の心得を說かすに、通の通たる根本義を論じたところは些か他書と趣を異にした作品である。「吉原でかいた恥が家の瑕瑾になるでもなく女郞に不實をしたればとて一家親類に見放されもせぬ物なれバ詰る所か理屈も入らず何して見るも樂しミ」だ、大いに遊んで靑大通の殼を脫出して浮世を丸飮の蟒蛇と成り給へと結ぶあたり仲々の譯知りである。

▲深川手習艸紙　原本　縱五寸二分　横三寸六分

十方茂内作　天明五年刊

書名は序にもある如く、「深川の、火の見櫓の全盛ばなし」を「無法やたらに書ちらし」たのであるから手習艸紙となしたことが分る。作者十方茂内は何人の匿名か未詳である。落款には「盲蛇不怖」との印記があるが、始めて洒落本に筆をつけたが、勿論「盲蛇不怖」式であるとの謙遜からである。

梗概は、芝居歸りの三人連の若者が深川の裏櫓と稱する色町へ出かけて行つた、中と留と云ふ二人は初會からもてたが、文といふのが好遇されない爲めに、惡態を一杯ならべると云ふ筋

である。

常やけふれちつと巣を替て裏へ行ぜ

の裏は裏櫓の略稱である。深川門前山本町の横町に物見櫓があつた。その山本町の岡場所を櫓下と稱する。表櫓横櫓裏櫓と三つに分れて居て、表櫓は現今の電車通り、黒江町に通ずる大通り、横櫓はその横町で震災前辰巳劇場のあつた通りの向側、裏櫓は表櫓の裏通りで、裾繼の裏と接して居る。

そういふ事も有うかね。成程お前れ見かけに寄（よら）ねへ革だのう

とある革は向「おめへの様な革羽織」とある革羽織の略で、なめし革で作つた羽織で、褐色や綠色に染めて、火事の時などに着用した。革羽織は仕事師や出入の職人の着るものであつて、それからそう云つた手合の代名詞となつたのである。

【てう】わつちれいくつだと思ひなせへす【中】本町糸屋の妹（いもうと）か

は有名なる手鞠歌「本町二丁目の糸屋の娘、姉は廿一妹ははたち、妹慾しさに宿願かけて、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕樣へは月參り」から、即ち廿かと云ふのである。

お前はいくつに成ンなはる【中】わつちけへ。ぶりかれんさ

は魚屋の符牒をつかつて廿九を示す。

十二の年に此島へ賣れて來たのと宮城のもどきも蟲がいゝは淨瑠璃「姉は宮城野妹は信夫　碁太平記白石噺」の文句を指すのである。この淨瑠璃は安永九年正月二日から江戸外記座で語られたが初めである。

遊女長がお客中に向つて

どふぞお前へわつちが所へ一通りならず來て。くんなへす氣は御坐いやせむかと。云てもおめへの樣な革羽織ハ。所詮情ハねへけれども。其情のねへ所がわつちハよふ御ぜへす。何所へも彼所へも情の有のハ面白く御ぜへやせんと。お前の心もしらねへで。いけあつかましく云でもねへのう

と初會の男に、それも情のないのを見込んでの惚れ樣、變つた刺戟に走る遊女の氣持を窺ひ得るのである。又民と云ふ女が初會の客、留に心情を披歷するために留の名を自分の二の腕に彫る。

【占】是じやァちつとハ。わかりやしたろう【留】わかつた所かわつちもほんに因果の種だお民さん夫をまたじき火あふりにハ御免だよ【占】お前それが實ならべ。わつちやァと

んだうれしいが。ほんに誠に眞實に。其お言葉を必反古に。しなせへすな。【留】ナニ

サわつちが詞より。お前の腕をどふぞ反古ニしなさんな

とあまり輕卒な態度と見られるが、心中、馳落は初會惚れに多いと吉原の或遊女屋の主人の物語を聞いて居る。尙又遊女の多くは越後者だが、これは越後者は情が硬いためであつて、感傷的な關東者ハ遊女には向かぬとも聞く。これから考へると恐らくお長やお民は關東者であつたであらう。一番貧乏鬮をひいた文は、お定りの太平樂をならべる。

まづ茶の湯誹諧河東節是ハ扨おき苦界の道も。瘡を仕廻ハ直うちがする。舟宿迄のみ一本ンが十六文。夫相應に酢も甘も承知して居る文さんだ……此胸惡の文さんを。扱へかゝつた心いきがおもしろへ。マア此文が因緣謂故事來曆ニ緣起濫觴抑由來。ちよつとつまんで云なら。ソレ南瞻部洲大日本ンの花の江戶。其水道の水上で。酒揚たる大通だ。ちつと男ハ小が。賽轉しも仕た野良だ

自稱大通の輩は大方こんなものであつたらう。斯る大通がえて振られるのである。しかし乍ら、斯くまで虐待された文も、「ホンニ遊びもげえるかつらい水だ。是でもやつはし懲ねへのさ」と僞らざる告白をして居る。

岡場所、裏櫓の輕い情緒を漂はす所に本書の價値が認められるが、粗雜な描寫は憾みなしとしない。

▲和唐珍解（ほうとんちんけい）　原本　縦五寸二分 横三寸六分

唐來參和作　天明五年刊

書名は和銅珍開を唐音で洒落れたものである。朱樂館主人の序に「和唐珍解（ホウトンチンケイ／わとうちんかい）」と讀ましてある。作者の傳記は本大系第五卷所載「通神孔釋三教色」の項を參照ありたい。

本書は長崎丸山の遊里を背景として唐人の遊興を描いて居る。登場人物を「國姓爺合戰」中のそれを假りて、主客の唐人を李蹈天、通譯を和田藤内、遊女を梅檀などゝ稱して居るのは、「國姓爺合戰」の普遍化を利用したものである。李蹈天の通譯をしながら案内人として出かけた和田藤内は、李蹈天の通じないのを幸として、主從轉倒の遊びをし、李蹈天の相方梅檀と人目忍んで逢ふといふ梗概である。

長崎は、德川三百年鎖國政策嚴しかつた折、日本唯一の開港場で、異國情緒こまやかに、殷賑を極めたのである。此處に於ける丸山の遊里が自ら他國のそれと情趣を異にするは當然であ

る。既に西鶴の「好色一代男」（天和二年刊）などにも紹介されて居る。

唐人が丸山で遊ぶことは、元祿二年四月十五日唐人屋敷落成以來禁止された。その代り「唐人行」といふ特定の遊女が唐人屋敷へ出入した。「阿蘭陀行」といふものがあるがそれらとは區別されて居た。然し「唐人行きの安傾城」とか或は「十善寺行」と格落ちに呼ばれて居た。これが爲め内地客の相手をするのをわざ〳〵「日本行」と呼んで區別した。

斯るが故に本書に描かれた唐人の遊興は當時に於ては既にあり得ない事である。「京の女郎に江戸の張を持たせ長崎の衣裳をきせて大坂の揚屋で遊」びたい、と云ふ若人の理想に引かれて丸山の遊里を取材したのである。しかし丸山も如實に描寫されたものではない。唐人を登場させ唐音を使つたところに丸山らしさが出て居るが、それを除いた後にはさまでの地方色は感受し難いのである。

通譯と唐人との關係はお店者と武左（田舍武士）とのそれに等しく、案内され乍ら結局は茶にされた遊びに終るのと何の變るところはない。通譯が相方の遊女と忍び逢ふなどは洒落本に於ける常套的趣向であつて何等目新らしいものではない。

彼がこの唐音使用に關しては出口剛氏も、江戸文藝第十二卷洒落本集の解題中に、多分明和

八年刊の「四鳴蟬」の暗示によるものであらうと云はれて居るが、吾人もこの說に同意するものである。今試みに兩者の酷似點を擧げて見る。

日-月五明懸。配ㇾ天豈偶然。浮-雲有ㇾ覆失ㇾ光年。幼王母后堪ㇾ憐。似ニ楚-囚ニ可ㇾ傷焉永井石馬頭宣明。領ㇾ命囚-監。（「四鳴蟬」―曦鎧記）

日月五明懸配天豈偶然浮雲有覆失光年幼王母后堪憐似楚囚可傷焉永井石馬頭宣明領命囚監（本書）

兀-的昆-蟲猶雙-飛。鳳蝶上-下不ㇾ失ㇾ偶。才貌相-攜倶有ㇾ情。（「四鳴蟬」―移松記）

兀的昆蟲猶雙飛鳳蝶上下不失偶才貌相攜倶有情（本書）

「四鳴蟬」に於ける「曦鎧記」は、享保八年二月十七日竹本座で初語りされた「大塔宮曦鎧」で竹田出雲の作である。「移松記」は享保三年正月二日竹本座で初語された「山崎與次兵衞壽の門松」のことで、近松門左衞門の作。

作者も自跋に「東の人のはらに合せて嘘と實の合の宿」と言譯を云つて居るによつても、只滑稽と云ふことを主とし、その滑稽を濃厚ならしめる爲めに、舞台を長崎にとり、唐人を拉し

來つたのと、自由なる唐音語法の得意さを表現するに努めたものである。唐音和語こき交せて輕妙を極め一讀破顔せしむる手法は、彼の黄表紙に於ける描寫と共にその才凡ならずと云ふべきである。

▲令子洞房　原本　縦五寸二分 横三寸六分

山東京傳作　天明五年刊

書名は、又息子部屋と書く。息子部屋、息子隔室、無粋語歴夜とも書く。作者自序に「革の極品なるを。ムスコビヤといひ。女郎の革羽織なるを。ミジマイベヤと云」はれて居る上に「印傳ならぬ京傳」が作であるから洒落れて斯く名付けたものであらう。然しムスコビヤなる語は、一面革の上等即ち印傳革といはれて居るものゝ名稱であるが、當時我が國に大きな刺戟を與へて居た露西亞の都モスコーの訛を失敬したと云ふ際物的な説もある。

作者は、灰田田藏、字は伯慶、幼名を甚太郎と云ひ、後傳藏と云ふ。又岩瀬醒と改め字を西生と云ふ。通稱は京屋傳藏、京橋に住した故に斯く稱した。山東は其居が千代田城の紅葉山の東に位したからであるがこれを山東と讀ましたのもある。因はそうであつても世間で山東と讀

むに至つて自分でも兩方用ゐたものであらう。山東庵、醒齋、甘谷、菊軒、醒々翁、葎齋等のほか、醒、菊を使つた號が多くある。狂名を身輕織助（折助、折輔とも書く）と云ふ。寶暦十一年八月十五日に生れ、京橋の銀座二丁目に住む。袋物商及び賣藥を業とした。青年期にはあらゆる方面に憧れを持ち、長唄と三味線を堺町の松永某に習ひ、繪を北尾重政に學んだ、北尾政演はその畫名である。文化十三年九月七日歿、享年五十六、兩國の回向院無緣寺に葬る。序を寄せた、戀川すき町は、北川嘉兵衞と云ひ、戀川春町の門人となつて戀川好町と號した。其他鹿津部眞顏、萬葉亭、鹿杖山人、狂歌堂、好屋翁、四方歌垣等の號がある。數寄屋河岸の家主で汁紛屋を生業として居た。誹諧狂歌に巧みで、狂歌は四方赤良の門人、後年家業を廢し、六樹園（宿屋飯盛）と共に狂歌の宗匠號を允許され、斯界の雙璧と目せられた。寶暦三酉年生。文政十二年六月六日歿、享年七十七。小石川光圓寺に葬る。

本書の梗概は、戀川好町の序にもあるごとく「女郎買の虎の卷と。傾城の智惠嚢」とを「通計都て十二篇」の項目に分けて、「底を叩て口訣を說。疊を叩て口舌を辨」じたもので、「海内の令子に授。郭中の花娘に與へたのである。各條項に於て、細い穿ちと適切な批評と懇切なる教訓とを記して居る。然して、彼は從來のこの種の洒落本に於て見るところの形式上の描寫はさ

けて、先づ本大系本卷所載「大通どらの卷」の意氣を數倍つゝこんだ描寫態度をとつて居る。形式上の事は本書卷末に廣告の出て居る「客衆氷面鏡」にゆづり本書にては此の心意氣、即ち遊びの根本を微細に亘つて描寫して居る。

彼の遊びに對する心持は

座敷のあそびハ風袋也床のあそびハ正味なり床にて我實情を見せ女郎の誠を掌に握らバ座敷のあそびも求ずして面白かるへし是正味多ければ風袋おのづから重くなるがごとし

にて知らるべく。世上、通とか粋とか云ふに對しては

女郎のかくす事を知りてもしらぬていにてすまし女郎に不實な事あれバさつぱりときれわけの立た事ハ何もいわずにをんくわにして此方の實をもつて女郎の實を得る天然自然の德あるを粋とハいふなり

と云ふ定義を下して居る。遊女に對しては

昔の貞女ハ今のたわけと思ふが當世女郎の十人並の心なり

とは云ふものゝ客も悪遊びをして遊女を「丸裸」にする者もあるから、結局

客にどろぼうあれバ女郎に追剝あり罪ハ五分〳〵と云べし

と斷定して居る。

然るにこれは皆机上の理論ではない、全く作者の經驗的事實が基礎をなして居る。京傳は當時廿四才の青年であつた。しかし夙より吉原に出入し、その起臥は月の中の三分の二は郭中に於て過したと云はれて居る。充分に郭情緒にしたり得た彼が、感興の涌くがまゝに、生來の才氣を自由にふるひ微細な觀察によつて描き出したのが彼の作品である。本書は洒落本に於ける彼の處女作であるが、この作品に於て既に代表作家たり得るの素地を露はして居る。洒落本作家の第一人者は、玆に於て認識されたのである。

▲無駄酸辛甘　原本　縦五寸二分　横三寸七分

千差万別作　天明五年刊

書名は、明和五年刊無跡散人作の「世間學者氣質」に、木火土金水の五行で生きて居る人間は心肝脾肺腎の五臟を酸苦甘辛鹹の五味でやしなはねばならぬと云ふて居る。こふした意味から名付られた安永四年刊で、役者の評をした「役者酸辛甘」の模倣であろう。

作者千差万別は本書跋に萬象亭郎ち森羅萬象が自分の門人と云ふて居るがそれ以外は傳未詳

である。

本書の梗概は、秀我と云ふ通人と國侍の錦洲とが猪牙船で吉原へ進む途中、沈醉先生に行き過ぎ、この先生も同船して出かける。船中で當時流行物の穴を洒落のめすのである。

去年までハさしも流行せし。ゑびす哥も。悪凶年ンニ及んでハ。皆ナ連ン中をまぬかれ。會へも不レ出して。狂名ィをけづる

天明初年の頃は狂歌の最も隆盛を極めた時代であつたが、それも天明二三年頃からの所謂天明飢饉の襲ふところとなり、世はあげて不景氣の叫びに滿ち、やつとその日〳〵を送る様になつた、狂歌を詠ずることが止んだのではないが何々連と稱して、作られて居た連中も入つて居ればとかく物入りが多いから去り、狂歌會へも不出席で、遂ひには狂名までけづる様になつて來たことを云ふて居るのである。

代地の文ン魚。高麗やをしきりにとゞめけれどもやむ事をゑずして舞臺を引キ。大坂中村久米太郎座へ。のぼる

高麗屋といふのは四世松本幸四郎、五世市川團十郎と不和となり、岩井半四郎と共に上坂した。天明四年十一月から中村粂太郎座へ出たが、火災の爲め其座も焼けたので再び江戸へ歸つ

た。こゝに兩優の關係を默止するにしのびず藏前の札差文魚が口をきいて和解した、それは天明六年の事である。文魚も上坂する時高麗屋をとゞめたことがわかる、この兩優の不和と和解の事は、天明六年刊の黃表紙「三升錦考中直里」に取材されて居る。

斯の如きは一例にすぎぬが當時の社交界に關係を持つ各方面を紹介して居るのである。この種の洒落本は數多あるけれ共、主として一部分に挿入されるのであつて、本書の如く殆んど全篇に亘つての描寫は尠い。

作者千差萬別は萬象亭の跋によれば、「新造作者、新姿婆の書物」をしたのであるが、仲々以て彼の穴の穿ちは、廣範に亘つてその得意をひけらかして居るのである。非本格的洒落本ではあるが、本格的洒落本の生み出される基礎の描寫として認むべき價値が存するのである。

▲客衆肝照子　原本　縦五寸二分　横三寸六分

山東京傳作　天明六年刊

書名は「役者氷面鏡」と同樣に、語學の書「紐鏡」からの思ひ付きである。又「客衆肝膽鏡」と書き、同作者の天明五年刊本卷所載「令子洞房」の卷末には「繪本客衆氷面鏡」とある。作者

の傳記は上記「令子洞房」の項を參照ありたい。序の一を寄せた屁燒猿人は通稱酒井忠因、名は文詮、字は暉眞、酒井雅樂頭宗雅の弟で出家して西本願寺文如上人の養子となり、根岸に住し雨華庵抱一又鶯村と號した、屁燒猿人は大田南畝が名付けたと云ふ。光琳派の畫に長じ、書俳句、狂歌等に秀でて居た。文政十一年十一月廿九日寂、享年六十八。築地西本願寺に葬つた。序の二を寄せた江戸浮世師富藏と云ふのは、茶番師で聲色の名人として知られたる富藏其人である。句を讀んだ三和は唐來三和で、その傳記は本大系第五卷所載「三教色」の項を參照ありたい。跋の花川戸羅月は、何人の匿名であるか分らないが、京傳と親交のあつたことは分つて居る。本卷所載「古契三娼」の京傳の自序にも、「花川戸羅月が別業、松風亭に毫をとる」と記して居る、想ふに可成の物持ちで京傳の後援者ででもあつたであらう。

刊行年月については、「令子洞房」卷末には天明五年正月の廣告として、「繪本客衆氷面鏡全一冊出來」を擧げて居る。然るに「客衆肝照子」の卷末廣告には、天明丙午即六年新板の部に他書と一緒に並べてある。玆に年代の矛盾が存するが、前者の廣告では版元が耕書堂白凰堂合板としてあるに對し、後者の方は單に耕書堂とのみしてある。又「繪本客衆氷面鏡」とあるに對して「客衆肝照子」とある。題簽も「客衆肝照子」である。尙作者の自序には、山東京傳二十五

歳の曉ニ書すとある。これ等を考へ合せると天明五年に出來の見込であつたものを何かの都合で出來兼てしまひ翌年に廻したものではあるまいか、序にも跋にも年月が入つて居らぬから今は前記の事情のもとに天明六年刊と推測して置く。

本書の梗概は尻焼山人の序に「山東京傳寫郭中遊人聲音行移輯爲一卷」とあるによつて察知される通り、振袖、新造、禿、おゐらん、勢ひ肌、半可通、河岸の女郎、船宿の女房、茶屋のかみさん、日濟貸、遣手、爲知振、引込禿、流粋、商人、坊主、踊子、俠者、かゝへ、通、等の風姿言葉遣ひ等を克明に描寫して居る。

自序に於て總括的に郭の雰圍氣を寫して居る。

作者が畫家であつただけに、それ等の人物を巧に畫中に浮び出させてゐること、またまた其の一々にせりふの項目を設けて言葉僻を細やかに捉へること、これが餘程味噌であつたために茶番師富藏に序を書かせたこと、抱一の序文が其點を特に重く考へて書いてゐること等が本書の評價に當つての重大な要素となる。

泰山を挾で北海を超るは手重しといへど。ちうさんを引連て角田川を渡るよりは心安いとは、こゝにも遊びといふものに對して作者の考へが如何に眞劍であるかをほのめかし

居るものと思ふ。

ふミのさき目の口紅ハ人情をまどわし涙にとく白粉ハ己をくやむ。奥二階のめりやすハ松藏が根〆なるべく内所のこれだかハ次判の間違ならん艾匂ふ屏風のうち。かふろ泣明洞房のくらかり。杉箸折れて小便所に捨り。金柑のほうづき煙盆に殘る廊下の拍子木寐耳にひゞけハ男來つて油をつぐふけ渡る夜や按摩はり。ねむさうな三ン下リ茶立蟲なく障子の腰田螺のなく聾蛙の聲。わけハ鬪へぬ睦言に。火の要心さつせへませふと鉄棒のちりゝんの音ハ五町にさへわたる

情緒纏綿として感興湧くところ抑へがたきをおぼへしめる。單に作者の文の流暢を以てばかりではない、細い描寫が切實にせまるのである。

▲短華蘂葉　原本　縦六寸三分 横四寸二分

玄卜作　天明六年刊

書名は一條兼良の「桃華蘂葉」の洒落であらうと想ふ、又は他の洒落か判明しない。

作者玄卜は大坂の人であることは想像出來るがそれ以外は傳未詳である。刊年は序末に丙午あるより天明六年と推定した。

梗概は、半兵衛と庄八との二人が友人彌吉が歸りを急ぐのを無理に難波島場所新屋敷の遊里へ誘ふ。ところが庄八や半兵衛はさつぱりと持てぬ、息子の彌吉ばかりがとても可愛がられるといふのである。

　小人島（こびとじま）の桶伏（おけぶせ）をかなしむ

無錢遊興をしたものを制裁するのに、風呂桶の如きものを伏せて中へ入れて置く。桶の胴へ僅な口をあけてそこから食料を入れてやる。吉原に多くあつた。これによれば大坂にもあつたと見える。

　新町に三月蚊帳（かや）つれば

非常な蚊であつたらしい。本書末に

【庄】（中略）ミつゐエライ蚊ナ【ミつ】サイナア【半】こゝは。かやはつらぬかへ【ミつ】

　紋日じやものかんにんしてやりいな

とある。紋日に限つて蚊帳はつらぬ、所の習慣で是非もないが、こんな時に行くお客は大へ

んだ。しかし紋日だから蚊のことなど考へずに行く客こそはじめて眞實のあるといふものである。書中に

せんかうもつて跡聞にくる爰はべつにかゝり子もなくほうばいの女郎が花を聞にくるなり

或は又

【鹿】（中略）むしがつくぞへ【彌】アノなつでもかへ【鹿】爰らのかしぶとんに。そんなとんじやくれ。ないわいなァ

この遊里の品位が想はれる。集つて來る客も略々見當はつく、書中に

【新】ヲ、よふねたナァモウいになさるか といゝながらのびをしてその手てあたまのどうぐをかぞへて見ろ、これハ人からのわるいきやくにもしたつあげられハせんかと見世つきのくせのこり也

遊女の花を聞きに來たお力が馴染の庄八が新造を呼んだを知つて啖呵を切る、庄八も是からお前は買はぬと應酬する。見兼ねた女中おさのが手管で其の場をおさめる。このゝ込引き（江戸の立引き）が見られて、江戸深川仲町の遊女のそれと比較するとなか〳〵興趣が多い。小息子の彌吉が受身の形で遊女お鹿の初會惚れに押される描寫などは大坂の洒落本としては類の少いところである。

【彌】ャァ半時うつじやないかサァこへじや〳〵【鹿】はんじのりんをふりや。どふする
へ。此嶋ハさミしうて。ぶつそふなゆへ。初夜過から。半時うつわいな

作者が斯うした淋しい遊里の描寫に筆を染めたのは、他意はなかつた。卷頭の大意の中に

千變万化の遊び氣質。いづれなさけの端た買ハ。傾城も夜發も道ハ一ツ也。意氣地あれば。込引有。以南鐐一片換日柄一日と。此所の風流も。見盡さずんば有るべからず

によつて其の動機と態度とを確認し得るのである。

▲其あんか

原本　縦五寸一分　横三寸六分

中橋散人作　天明六年刊

書名は、作者が尾竹屋の行火にあたり乍らこの書を著つたによつて其あんかと題したと自序に云うて居る。

作者中橋散人は、その傳詳かでない。或は本大系第三卷所載「大通愛想盡」の作者中橋猩吉と同人ではあるまいか。刊年は、序に「午のはつ春」とあるのみで確證はないが本文に「品川のミセかさつはりやけ」と云ふことがある、天明三年南品川大火の記事が増訂武江年表に出て

居る。これから推測して天明六年の午と假定して置く。

深川仲町の遊女お糸に馴染んで通つたきんろと云ふ男がお糸の眞情から金を得んためにきんろの名を艾にもしたのを誤解して切れてしまふとした。その虚に乘じてかねてきんろに心を寄せて居た、おきんと云ふ同じく仲町の遊女が、女中およしを媒にしてきんろに近づいた。きんろは遊び友達のき十やは十からお糸が引つ入むと云ふ話をきいてせき込む、おきんも足近かになる、お糸がこの事をきいてぐつとせき込んで踏み込まふか但しは譯をはなしておきんに切れて貰ふかと思案もして見たが、恨みのほのほ絶えかねてとう〳〵踏込んでしまふ、きんろに向つて啖呵をきるおきんにも向つて當り散らすと云ふ梗概である。

深川の任俠。しんに東都のきしやうといふへし

と云ひ

なか丁でたてひきのつゐゝこゝろいきのいゝおいとさんといふこどもしさ

又

なか丁のおきんさんがよ

と、仲町の心意氣を描すに努力して居る。深川の遊女は最もたて引きが强かつた。本卷所載

「古契三娼」の中で、お鷹とお蝶と云ふ二人の女が、黒といふ客をはさんでのたて引きなぞよくこの土地柄を表はして居る。

作者の着目は嘉すべきであるが、その描寫の粗野に至つてはこゝにもう少し粉飾が必要ではなかつたか、客と遊女二人との三角關係なぞ簡單な描寫といふ憾みが殘る。箇條書きの事件の展開に酒落本としての變つた行き方をして居るのが脚本的に興味がある。

是より二ばんめはじまりヽヽ

と二幕目を豫告して居るが、發表されたか何うか疑はしい。

▲人遠茶懸物　原本 縦五寸一分 横三寸六分

一拂齋編　天明六年刊

書名は、人の遠くにある時は目鼻口耳何れも明確には見定められない。無遠人眼の工夫は漢畫にはあるが、それをぐつと略して畫いたもの、茶にした懸物といふ意味からである。

作者一拂齋は通稱大伴寛十郎、淺泉居とも號した。江戸の人で芝全交の門に入り芝甘交と稱して黄表紙の作がある。文化元年二月十九日歿、享年四十餘と云ふ。跋を書いた以美散人は傳

未詳である。

鹿津部眞顏は、戀川好町の別號。本卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

宿屋飯盛は石川氏、名は雅望、字は子相、通稱を五郎兵衞といふ。逆旅主人、六樹園、五老齋、蛾術齋等の號がある。江戸小傳馬町三丁目の宿屋糠屋七兵衞の子である。七兵衞は石川豐信といふ浮世繪師の俗稱。宿屋の主人であり乍ら强訴健訟幇助をしたといふ嫌疑で江戸拂になり、多摩郡府中に居住した。幼少の頃から學問が好きで初め和歌を學び、後大田蜀山について狂歌を詠み遂に宗匠となつた。「雅言集覽」「源註餘滴」等の國語學的著述があるかたはら戲作も多數ある。文政十三年閏三月二十四日歿、享年七十八。

萬象亭（落款のみ）は本大系第四卷所載「眞女意題」の項を參照ありたい。

山東京傳は本卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

唐來參和は本大系第五卷所載「三教色」の項を參照ありたい。

東作は平秩東作と云ふ。立松氏、名は懷三、字は子玉、嘉穗庵、東蒙山人とも號した。尾張の生れで江戸へ出で內藤新宿の馬宿の株を買つて、稻毛屋金右衞門と稱した。四方赤良と共に天明狂歌壇の大家である。寛政元年七月七日歿、享年六十四、市ヶ谷善慶寺に葬る。

きん埒は銭屋金埒、馬場氏、通稱大坂屋甚兵衞、江戸數寄屋橋外に住し兩替屋を營んだ。物事明輔、滄洲樓、黒羽重二亭、四頭庵とも號した。狂歌をよくし、四方側の判者であつた。

四方赤良は大田南畝の狂名である。

蔦唐丸は蔦屋重三郎の狂名である。喜多川氏、名は珂理、煙蘿館の號もある。通油町書肆耕書堂蔦屋の主人、戯作もあるが代作が多い。寛政九年五月六日歿、享年四十八、淺草山谷の正法寺に葬つた。

戀川はる町は戀川春町、杜選大和尙とも號す。傳記は、本大系第三卷所載「無頼通說法」の項を參照ありたい。

酒上不埒は戀川春町の狂名。

華藍は未詳。

物我は未詳。

少交は未詳。

櫻川杜芳は通稱岸田豐次郎と云ふ。表具師、芝神明前三島町即ち芝櫻川に住んだ。岸田（或は單に櫻）杜芳とも稱した。狂名を言葉綾知。天明八年五月歿、黄表紙の作が多い。

元木網は又元杢阿彌とも書いた。落栗庵と號した。渡邊氏、名は正雄、通稱大野屋喜三郎。畫を嵩谷に師事して嵩松と號した。江戸京橋北紺屋町で湯屋を營んだ、後西久保に移住して、晩年剃髪して向島水神の森に閑居した。天明狂歌壇の大先輩である。文化八年六月二十日歿、享年八十八、深川正覺寺に葬る。

智惠内子は元木網の妻。

本書はこれを洒落本とすることには躊躇するのである、然し內容の個々を點綴し文章を加へたなら一つの洒落本として成立し得るのである。元則としては繪本とすべきであるが、この意味に於て最も廣義の非本格的所屬として採用した。

▲福神粹語錄　原本 縱六寸三分 横三寸六分

萬象亭作　天明六年刊

書名は、自序にも云ふ通り山手馬鹿人が「道中粹語錄」(一名、變通輕井茶話、本大系第四卷所載)を出して輕井澤を描寫した、その標題に因んで「福神粹語錄」と題號したのである。

作者萬象亭の傳記は、本大系第四卷所載「眞女意題」の項を參照ありたい。序の天竺老人は

二世天竺老人卽ち萬象亭その人である。自序の御存知も亦然りである。後序を書いた狐面堂柳郷は肩書にもある通り月地卽萬象亭の門人である。馬喰町に住んで筆工をして居た。

本書の梗概は、正月二日の初夢もすんで隊になつた七福神が、吉原へ傾城買に行つた。別に變つたこともなく、一ト通りの遊びをして歸るといふ筋である。

濱むら屋の聲色でするのじやさかい

と云ふは當時の名俳優三代目瀨川路考の聲色である。

大盡舞を見さいな。扨その次の大盡ハ夷大黑を先として

は「大盡舞を見さいな、その次の大盡、そも〳〵廓のはじまりは、弓削の道鏡勅を受け、初めて廓を建てらるゝ、くるとは客の來るゆゑに、わは和らぐの心にて、くるわと名付けそめにけり、ハァ、大盡舞を見さいな」をもぢつたのである。

たんすのかぎをぴんとおろして出て行

のは客の正躰が知れず、何一品盜まれてもと云ふ不安と、或は遊女の簞笥は得て中身薄だと云はれるからひよつと見られでもしてはと云ふ心遣ひからであらう。

〽下乙。乙乙。甲カケスカシテ。マアテ。甲ギヨウ

は琵琶ばかりでなく、笙の譜として用ひられて居る。

【芝】とりの町ハ正月もおさんすかへ【毘】あるとつて【芝】正月ハ何をうりいすへ【毘】おせちにつかうさと芋(いも)(寳)をうるのさ。そしての霜月のとりハちよぼいち。正月の酉ハさございの寳引さ

は鷲神社の酉の町が暮と正月の兩度にあると云ふ資料を殘してくれた。

さいしよの取組が谷風にみの嶋。中入過が小野川に關の戸

谷風梶之助、籏島權右衛門、小野川喜三郎、關の戸八郎治は何れも當代の名力士。

サテ筆工にこまります。しせきハ遲し。勘兵衛も彌五郎もずるけて間にあいませぬ

とは面白き消息を知らしてくれて居る。田舍芝居の筆工が狐面堂柳鄕であることの分つたのも思はざる喜びである。

本書は全く黄表紙の可笑味を洒落本に當てたと見るべきで、七福神と遊女との會話及遊女の名、女郎屋の名等のナンセンスが山になつて居る。又板元が作者に注文すると、作者がその夜筆を起して明朝間に合はせ、又その日の中に筆工もすんでしまつた、その速度の速さを得意になつて居る。作者も多少氣がひけたと見へて、「怠だから不出來だが」と逃げては居るが。これ

は天明六年十一月二十日から廿一日へかけての仕事である。作者が「來年の仕込物かの」と云へば、「イエ當年から賣出したいのでござります」と板元が急いで居るのも、押しせまつた大江戸の出版界の動きを窺ひ得て興深きをおぼへるのである。

▲無彈砂子　原本　縱五寸八分 横四寸二分

多羅福孫左衛門作　天明六年刊

書名は菊岡沾涼の編になる「江戸砂子」の洒落である。本卷採錄本二種共序文を缺いて居たが解題を書く時になつて序のある別本を發見した。別刷を以て補ふことにした。作者の傳記は未祥である。

梗概は、全く江戸砂子の摸倣である。正月の里、師走川、月見が崎、松魚が浦、菊見村、羽織ヶ嶽、毛古路橋、鳥の町、狂歌山、ひつべ河岸等と當時の社會相を洒落て書いたのである。

寶引村庄屋佐五左衛門むかし作りの達者おやぢなれどたんもちにてつねにぼこん／＼といふ

寶引、さあございい／＼の洒落である、當時お正月になれば町々を商ひにやつて來た、多くは

老人の仕事であつた。

床花紙花などありて詠めよし床花ハ山吹に似たる花なり紙花はとかく實のならぬ花なり

床花は遊女か自身部屋で貰ふ一種の祝儀であり、紙花は其の席で金を與へずに小菊と稱する紙だけで祝儀の代りとし後で金にとりかへるものである。實のならぬ花なりとはそこを云ふのである。

此橋（毛古路橋）至て短し二筋にて渡る三日十八日に渡錢おびたゝし

毛古路、ケコロ、といふ茶屋女は、下谷廣小路御數寄屋町、同提灯店、佛店、廣徳寺前、堀田原邊にあつた私娼である。三日と十八日は上野の兩大師への參詣人の歸りが遊ぶので殊の外賑ふのである。「此所泊なし」とは、こゝが主として晝の中だけの遊びであつて泊客の尠かつたのを明かにするものである。

女郎に見かぎられたる革羽織革たび出る

革羽織を着たり革足袋をはいたりする連中は、女郎にもてるのは尠い、結局、その惱みを酒によつて慰めるに至るのである。

折々樂師堂地口村などあり此道迷い安し

樂師は落首で、狂歌が往々落首や地口になつてうまいのが出來にくいのを指す。

女郎が身上りでまねくれどふりこそ尾花やなれべこそすいなあそひれ梅本か

尾花屋は深川永代寺門前仲町八幡側にあつた妓樓である。梅本は同じく仲町で尾花屋の反對側にあつた妓樓である。

本書は、當時の社會相描寫に洒落を以てするところに作者の態度がある。穿ちよりも洒落に重きが置かれて居る。卷末廣告「的物目待草」の條に「無理なる道理を八卦になそらへたるもの也」とある、同作者の著述であらう、作者の得意が何處に存するか察せられる。

▲田舍芝居（いなかしばい）　原本　縦五寸三分　横三寸六分

萬象亭作　天明七年刊

書名は只田舍芝居を本篇の骨子としたところからの名稱で別に意味はない。作者萬象亭は、本大系第四卷所載「眞女意題」の項を參照ありたい。序を寄せた中で風來山人門生無名子は詳かではないが恐らく萬象亭その人自身であらうと想ふ。七珍萬寶の傳記は、本卷所載「太平樂記文」の項を參照ありたい。褒言葉を掛合ふ竹杖爲輕は萬象亭の狂名で、森羅亭万倍は、萬象

亭の門弟と云ふことは分るが他は未詳である。或は千差萬別か七珍萬寶の初名か。天明六年新版の黄表紙「無束話親玉」の作がある。跋の狐面堂柳郷の傳は本卷所載「福神粋語錄」の項を參照ありたい。

梗概は越後國大沼郡妻有口南鐙坂村に於て、江戸の芝居が旅興行した。何せ田舍の事である、代官樣御寺樣御醫者樣の上流階級を初め、極くの下層階級に至るまでお祭以上の大騒ぎで觀覽に出かける、その時の樣子を方言をまじへて描寫する筋である。

五十三次の駄賃附を摺た油扇をかざし

當時駄賃附は、今日日記或はその他の手帳に添附してある郵便電報料金一覽表や、度量衡表といつたものと同じく必要かくべからざるものであつた、今日に於ても田舍へでも行けば往々畧暦の摺つてある團扇を見受ける。

辨當が一ト組で二百。酒が一舛で七拾貮匁ッヽの運上ハ。わたり芝居の式目だァ

旅興行をする者が辨當や酒へ運上をかけたとは面白いことであり、その運上を値ぎる見物の心事を思ひやれば尚更興趣がわく。

神事芝居たァ違ひ申す

村々によつては氏神様のお祭に煙火をあげたり芝居をかけたりする。片田舍にとつては年々一度の歡樂をこゝに求めて居る。神事芝居がこれで、その氏子にはちやんと座席を割當て、殘りは近村の人々の入場を許して居るが、本書の芝居は儲け仕事にかけたのであるからそれとは違ふと云ふのである。

こつちの水帳にない事をいふ人たちだァ

水帳は、土地の段別、所有者名、年貢高等を記載した、卽ち田籍を錄したものであるが、こゝでは、轉化したそんな定めはないといふ意で云ふて居るのである。

一番しやじきが代官どの。二番しやしきが等行寺(とうこうじ)ゐ。三ばんしやしきが傳龍ゐだァ。（中畧）代官ゐとおてらゐとお醫しやゐ。はや。どこでも威光(いこう)が強(つよ)い。角力(すまう)も芝居も錢なしだァ

封建制度下に於ける特權階級の横暴振りが、まざ〳〵と記るされて居る。その不合理を叫んで居る。が多くの觀客は何んでもないことに考へて居たらうと思はれるほど彼等は無自覺であつた。又六と云ふ男が遠い身内の孫作が先へ入場して良い場所をとつてるのに對して、自分の家の方が格式が上だからお前は後へ退がれと云つての喧嘩は、格別の可笑味を以て見られはするものゝ、斯うした社會組織の下に月日を過した庶民階級の生活を想ふと深き同情を寄せざる

を得ないのである。

銚子の浦方の芝居でハ、何の狂言でも、大切に張子の赤鬼を出さねば見物が立ませぬ。仙臺の釋迦堂などの芝居ハ。見廻りの役人が參ると。樂屋から居合拔の形に拵へた。役者が出て。やつとふ〱のしなへ打と申て居合をぬく眞似をするので。藥賣の体に成ます。

何の理由であるか分らぬが、斯うしたところにまで地方色の表現されて居ることは、郷土研究の一助ともなり得るのである。

本書は從來の洒落本とは全く型を異にして居る。底の底を穿とうとして八万奈落の汚泥を堀り出し、暗闇の事を明るみへ持ち出して女郎に迷惑をかけ、笑を取に失して苦笑を惹き出すのが今迄の洒落本である、是こそ過ぎたるはなほ及ばざるが如しと云ふのである、そこで洒落本の洒落を見て洒落る洒落は洒落た所が洒落にもならぬ、只可笑味を專一とすべし此れが戲作道の確論だと云ふ態度で本書が物され、この事が序にうたつてある、しかしこの序によつて、山東京傳が實は自分の事を耶喩して居るのだと考へて、以來交際を絕つたと云ふことが、曲亭馬琴作と云はれる「作者評類」の中に京傳の言としてあげてある。

洒落本對象の世界は、既に大田蜀山人作の「變通輕井茶話」（本大系第卷所載）に於て轉換

が試みられた。がそれは矢張り輕井澤に於ける飯盛と客との描寫に終つて居る。本書も同じく地方に取材して、しかも芝居に於ける可笑味の描寫で、配するに醫者の娘おさじと村の靑年茂作との甘い戀を以てしてあるが勿論戀の描寫が骨子をなして居るのでもない。

酒落本全體から見れば非本格的酒落本で、寧ろ滑稽本と稱すべきものである。鄕土味の描寫と、酒落本の主潮が自己の創作態度と容れざるに至り、延いては落伍せんとする自己擁護の爲めの反動作家の逃避であるところに本書の見るべきが存する。ひた押しに進む山東京傳の刄、受け損んじたる萬象亭の腕、京傳が天明八年以後矢次早に佳作の發表をなすに反して、萬象亭の名が酒落本界から消えて行つたのを思へば、彼にとつて田舍芝居が末期の喘ぎであつたのだ。そして又、黃表紙界に於ても、よく京傳を制し得ずして、筆を捨て勝ちにならざるを得なくなつた、斯くなると何處へもすがるに由なき爲輕ではあつた。

本書は享和元年に再版された。浪華凌雲堂、東都千鶴堂共版である。最初の序及び七珍萬寶の後序を除き、褒言葉を改めて竹杖万倍一人のにしてある。初板のとの異同が可成ある。

▲古契三娼(こけいつさんしやう)　原本　縱五寸三分 横三寸六分

山東京傳作　天明七年刊

書名は、虎溪三笑の酒落である。虎溪三笑は、虎溪三笑圖から出た語であつて、虎溪は廬山にある溪の名で、慧遠法師が道を談じて道途の遠きを忘れた故事を畫いた圖を云ふ。「廬山記」に「慧遠法師送レ客過二虎溪一虎輙鳴、送二陶元亮、陸修靜一與語、道合、不レ覺送過二虎溪一因大笑、世傳二三笑圖一」と云ふて居る。扉に、遊里雲談、陶淵明菊壽帶靑樓捨僧慧遠遊南驛稱山陸子靜乘猪牙入油堀とその據るところを明記して居る。然し、古き契情三人をして懷舊談をさせたために斯く古契三娼と名號したのである。作者京傳の傳記は本卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。序を寄せた、かふ義と云ふのは肩書に「山王町鳶のものあふさか市事」とあるだけで詳でない。閱者けいこうは鷄告と書き、黄表紙の著作があるが、それには京傳門人山東鷄告と署名して居る。然し山東京傳の別號と稱せられて來た。

本書は、吉原、深川、品川の三つの遊里が、序にも云ふて居る通り「言風俗(コトバフウゾク)各(ヲノヲノ)異(コト)にして人情(ニンジヤウ)亦異」なるを以て、吉、仲、品と云ふ三人の人物を作り、それが吉原、深川、品川に於て、

嘗ては遊女として店を張つた經驗からして、その人情風俗を語らしむるといふ構想である。鐘ひとつ賣れぬ日はなき繁榮の江戸の情勢から、園者の多くある金吾新道の様子を寫し、その新道に居住する園者三人の過去及現在の生活樣式を紹介していよ〳〵三人の話に移る。これは、「客衆肝照子」に於て序文を以て吉原の雰圍氣を出した手法と同じである。お吉、お仲、お品三人の話は微に入り細に亘つて吉原、深川、品川の風俗を述べて居る。

作者は同年本卷所載の「通言總籬」を發表したがそれに於て艶次郎、志庵喜之助が今の喜之助の妻おちせが元吉原の遊女であるところからそれを相手に「總籬」の穿ちをしたが、それをもう一歩出て深川、品川へと展開さした。

【およし】(中略)わつちもちつとよしわらのはなしをしたふふすが。ことし總籬といふしやれ本に。書盡しひしたから。いふわむだでおすよ。このぢう旦那がもつてきておさいしたから。よんで見いしたが。すつぱり松葉屋ノせかいさ。女郎衆のくせまでかきひした

と云はしめて、兩者の重複するを避けて居るのである。

吉原、深川、品川と所變はれば品變はるで雰圍氣が全く違ふ、それ〴〵の特色を備へて居る。吉原松賀屋の初島と云ふ遊女が手どりであつた話や、深川で、黒、忠と云ふ二人の客をめ

ぐつてお鷹お蝶と云ふ二人の遊女の達引きや、品川で松坂屋の野風と芝の介と云ふ客との手練手管の一件など矢張りその土地柄を寫し得て居る。

從來の洒落本が斯る場合にとつた態度は、殆んどその優劣の論爭であり乍ら結局は不徹底に終つて居るが、本書の如きは、三者對等の地位に列せしめて各々をして靜かに物語らしめたところに、京傳の非凡な周到な用意を窺ひ得るのである。序に於てかゝる義が「京傳きはめて三ツの色町にあかるく」と推稱して居るが、全く、「令子洞房」「客衆肝照子」を次々と發表し今又本書によつて、その知識の如何に深きかを痛切に感ぜしめるのである。かゝる義をして若し京傳にとやかふ云ふ者があるなら腕づくをもて是をふせがんと力ましめるも亦むべなりと信ずる。

▲通言總籬　原本　縦五寸一分 横三寸六分

山東京傳作　天明七年刊

書名は、「蓋總籬ト題セルハ。流行ニ後タル古句ノ。雜荒ヲ以ッテセリ」と凡例にあげてあるによつて知られる。作者山東京傳の傳記は本卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。序を寄せた文きやうは、櫻川文橋であらう。文橋は時鳥館主人と號し、浮世書家であり自畫作の黄

表紙がある。寛政二年新版の「呼繼金成植」に京傳が序を書いて居る。兩者互に助け合つたのである。「猿人郷と共に京傳を愛す」とも云ふて居る。尻焼猿人は、酒井抱一その人で共に京傳贔屓であつたのだ。

本書の梗概は、凡例に「此書ハ論語ニ所謂。損者三友ヲ以テ大意トス」とありてこれを骨子として居ることが分る。損者三友は、論語季子篇に「損者三友、友ニ便辟、友ニ善柔、友ニ便佞、損矣」と云ふて交りて益なき友の意で、登場人物、仇氣屋艶治郎、北里氣之介、悪井志菴、の三人が卽ちそれである。艶治郎と志菴とが日本橋伊勢町にある氣之介の宅を訪れた。氣之介の女房おちせは嘗ては吉原で遊女を勤めたのである。四人一座で吉原品川新宿其他流行物の穴を話しあつた後、艶治郎、氣之介、志菴の三人が吉原に出かけて茶屋駿河屋で一杯飲んでから松田屋へ移る、矢張り酒落と穿ちで賑かに遊ぶ、隣座敷の遊女と客は、死ね死なふといふ中と見へて廻し屛風の大公望も涎れを流すばかりの睦言であつたが、ふとした事から喧嘩となり遊女は出て行く客は腹立まぎれにまじ〳〵して居る、その中夜もあけて皆ゝ歸へるといふ筋である。

この松田屋といふのは松葉屋のことで、遊女おす川は瀬川、玉夕は川夕、等實在の人を描いて居る。おす川の座敷のことを述べて居るが、瀬川のそれの寫實であらう。おす川の隣座敷、

客と遊女の喧嘩の始末も事實であつたと云はれて居る。

〽水無月も流れ〱たへぬ浮世のきしに夜舟こぐてふふり袖のかほにまがきのあとつくほどに、はてなうきなのてならひもくさめ〱のやるせなく。（中略）【喜の】京傳がいつぱいにうがつた文句だ

と自己宣傳をするかと思へば

【しあん】もし羅月がいもうと〱いつ梅と。やうじやのおいくを。そうじめへにしたといふかほだねへ。あれでうすいもがねへといゝ娘さ

と花川戸羅月の妹を紹介に及び

【おす川】もしへ下ッでめりやすの本をもらつて參りました。長崎屋でぶんきようさんがおひろめなんしたのでおすいつそあだでようすよ

と櫻川文橋をも褒め

それ〱ふくい町の豐國か所から人がきたら此ぢうのやしきのを二分やるのだよ

とやうやく浮世繪師として擡頭しかゝつた、歌川豐國を引立てることを忘れないで居る。當時の出版界に於てはこの種の宣傳が種ゝ行はれては居るが自然の中に宣傳功果をはかる京傳の

如才なさが窺はれるのである。

京傳は凡例に於て云ふても居るが天明五年新版黄表紙に「江戸生艶氣樺燒」を自畫作で出した。卷中の半可通の主人公を指して、艶次郎といひ遂に流行語となつた、京傳も「艶治郎ハ青樓通句也」と云ふて居る。艶治郎の鼻を低く畫いたによつて京傳鼻の名が起り、本書に於ける艶治郎の鼻もそれをとつて居るが、爾來京傳の作には自像の鼻を低く畫いてある、北里氣之介、惡井志庵共に黄表紙に出た人物である。「通言總籬」は「江戸生艶氣樺燒」の續編と見られる。黄表紙に於ては「碑文谷利生四竹節」を寛政元年新版として出したが勿論前兩書の評判のよかつたによつたのである。「江戸生艶氣樺燒」は、主人公艶治郎の演ずる矛盾によつて生ずる笑に興味の中心點がある。吉原の描寫も多く、穿ちも深いが、骨子がこゝに存しない。然るに「通言總籬」は、同一人物を配して、黄表紙に於ける評判を延長し以て本書を有利に導いて居るが只それだけに過ぎない。前者に於て描き足りなかつた吉原の穿ちを洒落本として本書に物したのである。「妹妓雛妓小妓ノ言。其儘ニ記シ」た如き例の細い觀察の表現が京傳の着眼點であつたのだ。卷末の廣告に「吉原の人情をのべ五町のあなをうがちて手のある遊をしるしちつともすいた事のなきほんなり」と適切な評を下して居る。

京傳が松田屋事松葉屋の描寫に微に入り細に亘り得たのは彼が松葉屋歌姬に馴染んで入りびたつて居たによる。彼は松葉屋を描いてその手法を自負する一面、馴染の關心をも買へるか。

▲不仁野夫鑑（ふじんやぶかゞみ）　原本　縱五寸三分 横三寸六分

東湖山人作　天明七年刊

書名は醫は仁なりと云ふが、近頃不仁にして名醫尠くほとんど籔醫のみである。そこを名にとつたのである。作者東湖山人は、駿河の人で醫を業とした事は四方山人の序にも、亦本文にも記してある。四方山人は大田蜀山の別號である、同人の傳記は、本大系第三卷所載「深川新話」の項を參照ありたい。同じく序を寄せた竹室梧泉は駿河の人であること以外は未詳である。

本書の梗概は、當今の醫者は昔醫術を學んだものとは違つて、其の術拙く、務口給にありと云つた工合で唯便佞を以て病家をたぶらかし、名利をのみ事として居て其の技術を外になして居る。周禮にも醫師を以て天官の部に入れてある。蓋し活人の業で其生道を學ぶ者であるからであらうが、其の術つたなき時は却て不仁となる。近世此道を學ぶ者醫は仁なりといふ事を知

らずして不仁の道を學ぶものが多い。醫師ばかりではない法師に於ても人を敎化し衆生を濟度するを以て出家の本意たるべきであるのに、名聞を先とし利慾を本として、俗に向つてのみの俗の一大事を投げよ捨てよ、とすゝむるけれ共、其の敎を用ふるものは出家にもない、まして在家に於てをやである、斯く云ふ著者も不仁の道を學び稚きより京師に遊び其の道を聞いたがぬける方に心ひかされ、祇園囃の白狐にうかされ、夜晝なしの學問にのぼりつめて一年の榮花をなし、夢さめて又師につき學ぶこと八年に及んだが無忠子は三年磨いても黑い、仁の仁たる道を知らずに不仁の仁を學び遂に籔醫者になつてしまつた。名醫といふのはその變化に應ずるを云ふのであるが、當世の醫者は人參專一に心得て居るが風俗文選の著者横[illegible]の俳人でさへ人參の利害を論じて居る、これを知らずに居るのは全く頭ばかりの醫者に過ぎ[illegible]ではないかと云ふのである。

作者は醫者である、自ら籔醫者と稱して居る。當世の醫界を見渡せば醫者らしい者[illegible]ない只頭ばかりまるめて、風姿のみ醫者であるが其實東波が云へる如く、書を學ぶ者は紙を[illegible]醫を學ぶものは人を費すのたぐひである、それが氣に入らぬ。實際自らを醫界に投じて裏[illegible]しよ[illegible]まで見通した時の心ある者の慨歎がこゝに吐露されたのである。裏面暴露によつてやる[illegible]心を

慰めて居る。事江戸時代の描寫である、然し世は進み、醫術の發達したにもかゝはらず、所謂不仁の道なほ盛なる今日、同じ思をいだかざる者なしとしない。

一楽頭坊主のはやり醫者一と心安き言葉もて序を寄せた四方山人その人も、世に容れられず不平の徒として一生を暮したのであつた。今兩者の慨氣相通するを思ひてうたた同情の念くを禁き難いのである。

▲面美知之姫（もみぢのが）　原本　縱五寸二分 横三寸七分

南朝山人作　天明七年刊

書名は、海晏寺の紅葉狩りからの思ひ付きに、品川海苔をきかしたのであらう。作者南朝山人は何人の匿名か分らない。門人南曉庵笑莽、鯉津和も亦未詳である。

梗概は第一回は金十、加德、石遊といふ三人連が品川の遊里へ出かけた。加德が馴染の桐屋へ上る。藝者を呼んで賑かに騷いでから床へ廻る。加德は並の遊び、石遊は、知つた振りをして畫師の北明を相弟子だといふ、ほんにかへと言ひ乍ら女郎は立つて行く、若者が來て麻布の北明さんとお兄弟だそうだからあの子は出されぬと云ふて斷られてしまふ。金十はさつぱり持て

ず女郎も來ず、獨りむしやくしやして居るところへやつて來た女郎と喧嘩をはじめた。第二回は遊女此綾と客五郎とのしつぽりとした口舌。第三回は、蓮本屋の別莊が東海寺の門内にある、そこへ戀病の增花が假住居して居る。戀の相手秋朴が誘ひ出しに來て兩人驅落をする、金十と加德とが神田の客から頼まれたとて增花を奪ふとするが相打して倒れる、そこへ石遊が來合せたが秋朴に切りつけられてこれも倒れる。寮預りの五助が責任を負つて兩人を逃がすといふ筋である。

本書は本卷所載「通言總籬」(山東京傳作)に眞似た所が多い。金十を北里氣之介、加德を仇氣屋艷治郎、石遊を惡井志庵にとつたのである。次の語句の如きは最も極端な眞似方である。

【加】チツトきなくせへ【石】ヲレダく芝居の雲か火鉢へふつたやうな匂ひだいめヱましい(本書)

【石】時にあの駕の來ると思やア跡へ歸らア【加】アリヤア駕の稽古だのナ(本書)

【おちセ】モシてへぶきたくさいよ。さんやそこじやあねへか【ゑん】ほんに芝居のゆきがらうそくへふつたといふにほいだ(「通言總籬」)

【友次郎】あれこそさつせへ　かつぎもとすぜへ。そこへたつ　あれはたしかかこをかき習ふ

のだ（「通言總籬」）
品川の事は谷山から三丁目迄の内へ何やの唐紙へ何を付る相印へ何て紋所へ何を付る谷山の小便たごか十一有も高輪から宿の入口迄石橋か七つ有も知て居る（本書）

これへ中の町の何屋のうらにやあ。せつちんが何軒あつて。何やの裏にやあはきだめがいくつあると。四ッ手にわかざりのかゝつている時分から。きつねのまいこむ時分まで三ッぶとんの上におしつまつていりやあ（「通言總籬」）

然し到底京傳に及ぶべくもない。第二回第三回を補足して見たが全くの蛇足に終つて居る。本書としては第一回がやゝ見るべきものである。第三の如きは既に人情本への展開を示して居る。

▲一向不通替善運　原本　縦五寸二分 横三寸七分

山跡蜂滿作　寛政六年刊

書名は一時代替れへ品かわる一と云ふ逆、さつぱり變りのない意をとり一向不通を冠したのである。不通は通用せざる戲作といふ作者の謙遜である。

作者山跡蜂滿は甘露庵とも號した、卷末の署名に「甘露庵山跡蜂滿夢中戲作並書畫」とある。又本書の挿繪は前は意氣眞人・後はうた麿が畫いて居る。これによると山跡蜂滿と意氣眞人と哥麿とが同一人となつて疑問を生ずる。

本書の刊年が序末には「とらの歳」とあり、卷末には天明八年とある。天明八年は申で、寅とすれば前に安永二年、後に寛政六年がある。書中に

おきちさんおめへ新淨瑠璃はおあげか【お吉】イヽヘ今たて山さまの所たよいつそおもしろひかんかあるね（中略）【三勝】へたて山さまへ願たてゝたばこたつのもわたしやおまへにそひたいばかり誠をいはゞ此そなたハ親のまゝにもならぬがならひ女子のすひた女夫ごと【おきく幸助名酒盛色の中汲】とくりかへし／＼二三べんもをしゆる

とあるによれば、こゝの寅年は寛政六年でなければならぬ、お菊幸助と呼ばれる富本の新淨瑠璃「お菊幸助名酒盛色中汲」が瀨川如皐によつて作られ、富本豐前太夫、同齋宮太夫、同安和太夫一派により市村座に上演されたのが寛政五年二月六日である。お菊の役は瀨川菊之丞、幸助の役は二世市川門之助である。書中に

そして門之助が幸介ハとんだいゝよあんな男を亭主にもちてへもんだね

と云ふて居るのもこの芝居を指したのである。よつて本書の發表されたのは寛政六年の寅と斷じて差支へないものと信ずる。然し卷末の天明八年は如何して斯くなつたか尙判斷に苦しむ。二序末にある「齡つもつて二紀の春」は哥麿にとれば寶暦三年生れで當年四十二歳である。二昔には當らない。

北多川哥麿は鳥山豐章、源姓、通稱は勇助、後勇記と改めた。鳥山石燕の門人である。浮世繪師として代表者であり、狂歌もよくし狂名を筆の綾丸と云ひ一窗主の號もある。始め根津に住し、辨慶橋に移り、久右衞門町に轉じ、又馬喰町三丁目に移る。文化三巳年五月二日歿。享年五十三。淺草區北松山町專光寺に葬つた。

梗概は留本三勝といふ女が富本の稽古所を開いた。そこへ種々の階級の連中が稽古に集つて來る。弟子の中で美光と云ふ男が三勝の色香に迷つて云ひ寄る、があつさりと斷られる、それもその筈三勝は稽古所の世話をやいてくれる　七といふ男と好い仲である。そして既に三勝は身重にもなつて居ると云ふのである。

三勝半七といふ膾炙された人物をつかつては居るが、重要な役割を演ぜしめて居るわけではない。稽古所の描寫に全力を注いで居るのである。

【三勝】コウミんなが糸錢をわすれなさんな（とこれへ女の子へ三ミせんたならふゆへ糸せんとて晦日に廿四文づゝ御定りなり）すると晝時分に來る甘酒屋【これへうら店の九つとけい】醴千代井アマイ〳〵〳〵【ミかつ】コウかゝさんあまざけが來たからモウお晝ださうだおまんまにしやう

とある如きは、山東京傳作寛政三年刊の「靑樓晝の世界錦之裏」（本大系第七卷所載）に

△針がね〳〵【げび】モシヘあれはりがね〳〵がきいしたから十二日でおざんしやう

と云ふのと同じく、物賣によつて時刻を知つた江戸生活の實寫であるが、斯うした細い觀察のもとに稽古所を描寫して居るのである。

けいこ所のせわやきハいつまでも師匠ということなりとこゝろえべし（中略）色男でなければ身にしミて世話ができずむすめの母を手まへの親のやうに心得かゝさん〳〵ととなへるもむりならず

と何時も變らぬ此の社會の一面を穿てる言葉として一しほ味深き感がする。

安永六年に佐伊坐散人作「淨瑠璃稽古風流」が發表された。取材は淨瑠璃の稽古所に於ける光景であつて、本書がこれより脫出したものと思はれるが、前者が單に稽古所に於ける稽古上の問題に重きを於けるに反して、後者は稽古所といふものの全般的情緒を主眼とした描寫態度

をとつて居る。三勝半七の戀を配したのも前者の意圖し得なかつた點である。前者が後者に及ばざること遙かに遠いところの價値の相違を認めしめるのである。遊里を對象とする洒落本の定義からは、非本格的に屬するのであるが、その所屬中でも最も本格的に近き作品なのである。細い觀察、銳い穿ちを買ふべきである。

本書には改題再摺本がある、卽ち「新續 婁子酒戲」がそれである。本文も挿繪も訂正があるので、再び本大系第七卷に採錄する事にした。其の項を參照ありたい。

▲虛實情夜櫻(うそとまことなさけのよざくら) 原本 縱五寸三分 横三寸七分

梅松亭庭鷺作 天明八年刊

內題には「虛實(うそとまこと)」とあるが作者の序文には「虛(うそ)も實(まこと)と題(だい)せり」と云ふて居る。「うそもまこと」と讀むべきで、內題の「うそとまこと」は筆工か或は彫師が誤つたものであらう。情の夜櫻は吉原の仲の町の夜櫻をとつたに過ぎない。作者梅松亭庭鷺は何人の匿名か未詳である。刊年は、只巾とのみあるので判然しない。本文の中に「今のが今度淺草へ額をあげた。よそほひかの」といふ話が出て居るからこれが詳になれば勢ひ判定もつくわけである。今は天明八年の

中と推定して置く。

言次郎、銀蝶、六三郎の三人が吉原武藏屋で遊ぶ。言次郎の馴染花哥の姉女郎に華町といふのがある。その華町が客を武藏野といふ遊女に色仕掛けでとられてしまつた。その遺恨を三人が晴らしてやる。六三郎は華町が深川に居た時分馴染んだ客で、それが原因で勘當になつた新といふ男で、遺恨を晴す狂言の中に分かるといふ梗概である。

華町、花歌、東路の三女が何うして郭の生活をする樣になつたか、各々その過去を物語つて居る。洒落本に描かれる女は、男にしてもだがその人物の過去の紹介されることは尠い。その點が山東京傳作天明七年刊の「古契三娼」（本卷所載）に出て來る、お吉、お仲、お品の三人の描寫と共に特筆に價するものである。

田舍侍、加之大の吃と化けた六三郎が、獨り居の寂しさにしつぽりと唄ふめりやすに、癪といつて六三郎を振つた武藏野がぐん／＼と引きつけられ、逃げる六三郎を追ひつめて、指まで切つての惚れ樣、六三郎は昔馴染の華町の恨を晴さんために益々じらす、この客と遊女の交渉の展開が本書の山である。

華町と六三郎が魂膽、花哥か敵が武藏野が客となるのを後編として出す樣な豫告をして居る

が發表されたか何うか判明しない。

▲一目土堤(ひとめつゝみ)　原本 縦六寸二分 横四寸三分

内新好作　天明八年刊

書名は、内容が本所一ッ目即ち本所千歳町、回向院前の八兵衞屋敷にある五軒の娼家に於ける描寫であり、又こゝを土堤側とも云ふので「一目土堤」と稱したのである。こゝの遊女を金猫銀猫と稱した、山東京山の「蜘蛛の糸卷」に「銀猫二朱、金猫一分」と價を記してゐる。近くの水戸侯の會所があるので三味線、拍手、大聲を禁じた。客が用がある時は疊を抑いて呼んだ。

作者内新好は、通稱内田屋新太郎、内魚堂魚堂、魚道、魯堂、有難山人、白銀壹一丸、新江等の號がある。茅場町の帆網屋主人、零落して神田小柳町に住み、更に本所石原に住み、俳諧の宗匠となる。一時幕府御用達小林筑後の養子となり小林新太郎と稱し、落款に小林と用ゐたこともある。跋を寄せた南都餘霞樓主人は何人であるか傳未詳だが、落款によれば小林とある、或は小林新太郎即内新好共人ではないかと想はれる。

本書は卷頭の口演にある通り市川門之助・市川八百藏、澤村宗十郎、坂田半五郎、松本幸四

郎を遊客に見立て、本所一ッ目での遊びを描寫したものである、安永八年刊黄山堂作北川豐章畫「善光寺御利生通鬼寐子の美女」と云ふ黄表紙にも取材されて居る。川柳にも多く詠れて居る。

シタガ當世ハ哥連哥俳諧柳だるでもねへてナ。とかく諸事狂哥の事さ

とある。狂歌の隆盛は天明の初年が最たるものであつた。然しそれを長く續くものではない旣に天明五年頃には衰徴の端を兆して居た、本卷所載「無駄酸辛甘」にも

去年まではさしも流行せし。ゑびす哥も。悪凶年ンニ及んで皆ナ連中をまぬかれ。會へも不レ出して。狂名ィをけづる

に至つた事を記錄して居る。

しかし最はや狂哥も一ッ花はやりてもとの何とやらで。今やうは狂哥をあんじる隙に。寧迫哥をよむが能ひ

と云ふ時勢にまでたち至つて居つたのである。

きのふ油通汚といふ洒落本を見たが吉原大全ニ有る事をヅブ書た子

これは本大系第四卷所載「舌講油通汚」の素破抜きである。「油通汚」は大通の講釋から進んで傾城買ひの通を說いたものであるが、作者窪田春滿は當時廿三歳の青年である。果して之迄

の悟りが得られたか何うか。山東京傳の如き人もあるから一概には云はれぬが、本書の言によつてその依つて來たるところがはつきりしたのである。といつて「油通汚」の價値の評價を云々するものではない。作者が自ら悟つた言でなく、「吉原大全」に云へることを理解し把握し得る知識の持主であつたといふ決定を得るのである。

此ごろのことさ三人連で開帳へまいて

の開帳は、本書の刊行から見れば、天明六年二月六日、回向院にて上總國千田村稱念寺齒吹彌陀如來の開帳を指すものであらう。神佛參詣の口實のもとに遊里通ひをした例は洒落本に多く見かけるところである。

まことにけいほど世にふびんなる物ハなし。夫に近年の略語本を閲するに女郎の穴を書べよひかと思つて。おゐらんの內しやうのやりくりかさねたんすの引出し。の隅からすミまであらひざらひを櫻木に彫るゝけいせいの身にとつてハ側刀針の呵責よりもくるしふあらん。又けいせいが見聞くならバ。素人となつて。むかしの入ぼくろを入込の浴室にて見らるゝよりもはづかしからん

先に萬象亭によつてもこの意味の言葉が言はれた。本卷所載「田舍芝居」が其の意志のもと

に發表された。然し時勢は塞ぐ由もなかつた。意を同じうする内新好がまた本書を以てそれに抗した。萬象亭などの當り方ではない、が酒落本界の主潮を快くは思つて居なかつた意志表示である。

白銀壹一丸と云ふ狂名のある内新好が何派の狂歌師であるか分らないが、或は竹杖爲輕の萬象亭系であつたかとも想はれないでもない。

　隣坐敷ハ旅人がこゝへハよく來るて

武藏上總の境に位し、兩國をつなぐ交通頻繁を極めた場所柄だけあつて、斯る客の多かつた事を知らしめてくれる。

近年の酒落本に對して反感をもつて居る作者である。一ッ口の遊里に於ける描寫であつても遊女共の他地方色の穿ちは寧ろ逃げて、通人と稱する連中が當時の社會相を穿つところに作者の態度が見られる。萬象亭の如く極端な行きかたはしない。然しやゝ妥協性を含みながらも皮肉な態度を露して居る。

▲傾城觿　原本　縱五寸二分 横三寸六分

山東京傳作　天明八年刊

書名は傾城買の洒落であつて、俳諧觽の模倣である。作者山東京傳の傳記は本卷所載「令子洞房」の項を參照ありたい。

本書は俳諧觽に比して名號したと作者の云ふて居る通り、吉原松葉館、鷄舌樓、玉樓、五明樓、⺌菱亭、鶴樓の遊女の氣質、嗜好、藝、幼名等を記して初心者の好伴侶としたのである。登場する遊女は京傳が常に共に遊んだ友達であつた、その遊び友達を描いたのである、觀察の細く行き屆いたのは其の比を他に見ない、長柄傘、模樣挑灯、合印の正寫し、定紋替紋は衣裳の雛形から寫し、筆蹟は、草紙扇面、短冊文章等からとつて載せた。斯うした根據ある用意は、遊里生活をした京傳のみのよくなし得るところである。附錄に載せた松葉屋、丁字屋、角玉屋、扇屋の通言も得意な穿ちである、書、茶、歌學、香、生花、歌三味線等を紹介して居るが、黃表紙などにも斯る描寫を散見する、當時の遊里が唯一の社交場裡であり、遊女等も亦時勢に遲れない教養を持つて居た事を證するものである。時勢のしからしむるところとは云へ、今日のそれと同日の論でない。

京傳は天明五年に「令子洞房」（本卷所載）を出した。傾城の心意氣と、客の意氣地とを描き、

辛辣な批評を加へて、洒落本の主潮を一變せしめるの端を發せしめた。次で、天明六年に「客衆肝照子」（本卷所載）を發表して「令子洞房」にて保留した客と遊女との風俗言葉癖等を克明に寫し、遂に萬象亭をして挑戰せしめるに至つた。そんな事には少しもとり合はず、いよいよ鋭い筆力を以て吉原松葉屋に於ける細い觀察を「通言總籬」（本卷所載）の上に展開した、更に「古契三娼」（本卷所載）によつて吉原、深川、品川の三遊里に育つた三人の女をして、各々の過去の生活を語らしめてその特色を描き、完全に洒落本作家として第一人者たるの地位を確保することゝなつた。斯る諸作の生れるのも一朝にしてなつたのではない。當時の彼の起臥は殆んど郭に於てなされ、鬚髯髭がぼう〳〵として居てもかまはず、見兼ねた遊女の好意によつて剃つて貰つたほど熱心に、忠實に、鋭い觀察の眼を休めなかつた努力の結晶である。「いまた馴染あさき遊客の一助とす」と凡例に於て放言し得る京傳の自信、眞に當るべからずである。而して本書の如き資料的控が既に出來て居たのであらう。たま〳〵發表されたのが天明八年ではあるが、斯る發表態度にも彼の周密な意圖を窺ひ得るものである。

後編傾城䑓の廣告をして、前編にもれた遊女を委しく記して出す由の豫告をして居るが、今日見當らぬところによれば或は出ずにしまつたものと想はれる。

录孰本纪

彙軌本紀序

昔者司馬仙人登龍門擬禹穴與天下之豪傑游作史記本紀今島田金谷入大門擬三階與天下之通人游作彙軌本紀彼唐人竊語也此江戸本枝也彼松江之鱸不如日本橋之初鰹彼新豐之酒焉及隅田川之諸白乎夫不竊河源者未睹崐崘不飲水道水者惡稱所謂大通者乎中立而不倚通哉通教訓而不仕彙軌哉彙軌本紀之名本不虚矣因染如在之序字以冠于手拭之端云爾

天明甲辰松王正月

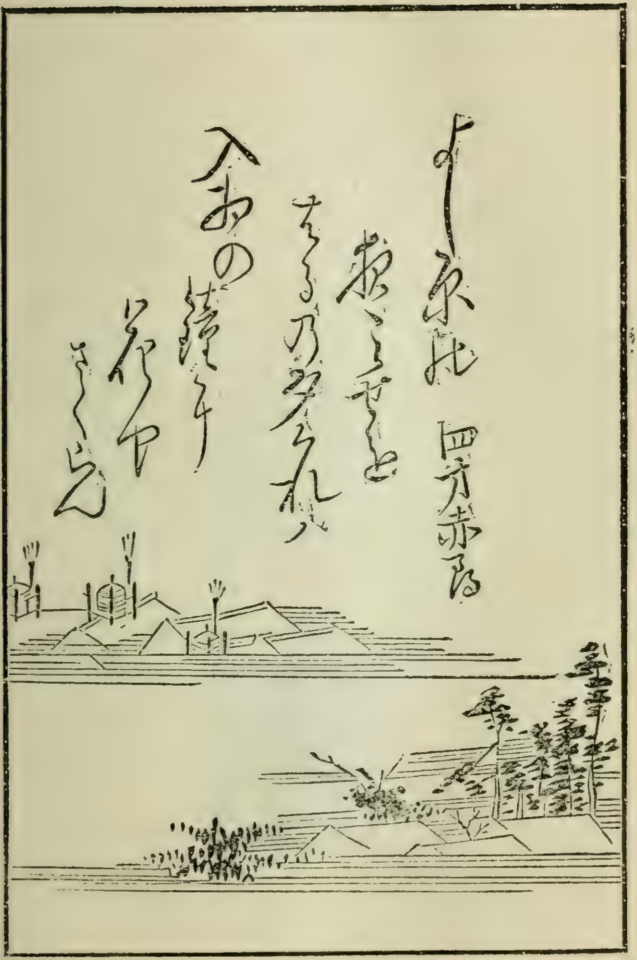
武部源藏高第四方山人書初

彙軌本紀序

一圓之木持千鈞之屋三分之金求傾城之美矣嗚呼東都之盛焉哉以言舉之亦宜也扶桑橋之魚鬻不過四時而靡一匹青樓之娼妓不待九時而靡一人矣辱以水道之水爲産湯自曳窓觀於鯱而爲長之德者則雖孰之何資於引氣况於息子株乎不可不饗也老子曰費大金若遣小錢是東都子之所顯氣情也友人烏田金谷著於彙軌本紀一卷槩扖於當時之竅泛聰之記於洒落以請序之余亦同穴之狢與應飲込山之寒鴉倶足繼於侫倜矣

天明四甲辰蔵孟春

口唐　出鳳臺　讓琰撰


四方赤良

狂訓彙軌本紀

雲筑　島田金谷纂輯
口唐　出鳳臺校訂

天照太神素盞嗚尊天津罪を侵したまいしヿを憎ませたまひて。天の岩戸を閉て隠れたまひしかバ。天下やみくもとなりにけり。八百萬の諸〻の神達　太神宮をすかし出奉らん爲に。庭燎を焚。神樂を奏して舞たまひけれハ。岩戸少しひらきて御覽しけるとき。世間明らかに人の面しろ〳〵と見けれハ。面白といふヿ。此時に起る。また岩戸を細目に明て。覗より日出度といふ詞もはじまると。齋藤俗談その外正しき書に載る所にして。今流行の詞。日本といへるも此ことより出たる歟。此面白と目出度といふヿ扶桑廣しといへども　東都に止る。名にしおふ日本橋の側。魚店軒をならべ四時にかゝわらす日〻に金を商ひ。ぶりかれん百かれんの唐音ハ輕子呼ふ卷舌と爭ひ。初松魚價百貫にして遠近に飛。鮟鱇ハ珠玉に換て東西に走る。鯛は諸侯に奉じ鮪は下賤の食もの。買上る河豚販食屋の廛。棒手振ハ生鰯鮭の魚

を售て妻子を養ふ。人物活〻として勢昇天の龍の如し。二合五勺の酒に醉ては源八と鬪諍に及び。親分柔訣と制すれハ雙方口を閉て止む。和睦の河漏ふるまい異客前帶と殷勤なり。さんげ〱の桃灯は兩國橋より長く。納太刀は梁よりも大なり。なんまいだん佛の大音にハ佛も耳を塞き。六根清淨の騷劇にハ不動も逆上すべく。梵天万度の振やう張込大平は親分の流義に隨ふ。遠慮延引の間違先刻先日の誤片言五によく通す。仙の字の手拭半顏をつゝみ。紅の褌寒風に飜る。般若の面女の首の入黶亂髮長髮ハ仲間の禮なり。相傳ふ顏見世の積物。虎屋が蒸籠けんびしの空樽大路に山をなし。若ィ者中の張札帳屋が筆跡と見事なり。紋〻の手拭は木戶錢をかすり。屯してうつ手柏子近隣に響て鳴雷かとあやまたる。木戶番海老藏仕着もの留場ハ八丈のきり立。花道を步行て棧敷の美人をはる。わり込人中を割て山之手の客をさらひこむ。新に蒙る饒の痣。喝采の張こみ口紅の色を失ふ。太夫內簾の綿帽子は降積む雪かと疑れ。五間續の黑仕立洒落止時なく。間來る翁屋か折箱鐐二片といたし。しらせの柏子木に聚客色を直し。頗が口上さらに聞へす。幕明の下り渠に辨當の箸を投る。暫の一聲吉例の角鬘。主膳が上瑠理は獅子の吼るに異ならす。立出る柿の素袍。悠〻として花道に至れば。譽る聲異口同音にして積上たる蒸籠の山に響く。年〻歳〻のせりふ花相似たり。打驚く

八

敵役聴して進むを能わず。はりおとす金巾地の冠は天幸も無きがごとく。姫君の危難を救ひ奉て。一刀の下に首百波を伐る。大なる哉東都の親玉株。尻もちは八百八街。風來散人飛だ噂な評して彼が氣象を賞す。柏筵ハ昔時の傑足下は今日の勇。奇なる哉市川の藝術。嗚呼つがも子へと。獨きほいて領を敲ぐ。傍に浪華の客ありむつとして曰。汝出る儘の東都自慢を上る。我問とあり。當世流行するものハ何〳〵ぞ。答曰。共一二を擧て云ぐ。三舛繋親和染。ひわ茶とび色大名縞。短脇差。長羽織因果地藏に富の札。巣立妓者に手打何漏。両脚㕝洒落本。虱紐。笛吹按摩女醫者。しやへると豆藏の如し。亦問今浪華に狂歌專ら行る。東都には誰〳〵ぞ。答曰四方赤良朱樂管江。から衣橘洲平原屋東作。もとのもく網。智恵の内子其外あげてかぞへかたし。扨テ誹諧ハ解庵獨庵木屋庵獅子眠を始して。是また云も盡されず。両脚㕝の作者ハいかに。喜三二春町芝全交此三子を上手とす。上瑠璃の方にては。鬼外先生没して後。紀の上太郎。辨治萬象實四揚黛鬼眼と覺たり。扨狂言ハ。次助市助惠助馬雪。河竹金井は休ミかぶ。云おくれたり浮世畫ハ。花鳥春章清長湖龍哥麿問となしやいかに。有とも〳〵料理家はハテ食類とはおもしろし。樽三舛屋大紋屋 。葛西太郎に大黒屋。浮瀬枕流山藤庵 樂庵百川四季庵の。四季おり〳〵の献立に。善盡し美盡せり。客是を聞ィて手を打ッて曰。恐るべき

は東都の盛なると。他邦の及ぶ所に非ず。長袖能舞多錢能商の大都。浪華の肩をならべんとハ虫のよきの甚きなり。願は先生。後に青樓の曲を辯じたまへ。余故郷に歸て早く童邊僕に傳へ。再ひ東都に來ッて扇屋の天井を見ざるの一助とせんと。泥空の求に應じ烟草四五ふくを食ッて。又味噌を擧て曰。翫其磧礫而不窺玉淵者未知驪龍之所蟠也。おなじ水道の流レを食ども俗中に交れバいまだ通のあるところをしらず。余長命にして一一世の形勢を見るに。母の胎内を出て。乳汁を食ひ。のち坊様となつては。鳥飼が羊羹を甘じ。旦暮に倚殘魚を食つて佗ゝ止時なく。丁稚が天顖は木魚を撃に等し。乳母が結立の髮をむしる。叱る聲四筵を驚し。踟躕膳に埃す。手代大にこまつて。番太郎へ丁稚を走らしむ。長松ぬからずして鉦の天神と。鼠の嫁入の艸双帋とを取來ッて坊様に獻ず二品を投出して是ではないと叱ると已前に培す。伴頭が口小言紛ゝとして。自身に人形丁へ至て。角力取の木偶を買ふ歸來ッてまた坊様に獻す。漸寛尓として床の間へかざり。長松を相手にして喜氣滿面に及ぶ。父母これを見て涎を流し。戯場事のきやうなるを。裏店の嚊に傳ふ。譽ること小栗殿の馬の如く。父母是に乘じて。はめをはづして騷劇をゆるす。菖蒲刀八疊の間を塞ぎ。画草帋長持に餘る長松買ものゝ錢を掠て飴棒をかぢり。大轉達摩糖の下卑に至ては。湯歸の鼻唄。按摩に犬をけしかけてハ手

下の伊之助にかぶらせ。坊様の御氣に入ッて。傍輩を茶にす。髪置袴着の御祝儀。大丸越後屋と來ッて錦繡を商ふ。定紋を俗なりとして篆字に壽の文字を縫せ。當日明神へ詣て密に往來の評判をきゝ。歸て味噌を上ヶたると火の見櫓より高く。乳母が鼻天狗に倍す。八歳の頃義之流の筆道を學ばせ。四書の素讀もすまざるに。唐詩選と太平なり。坊様の幼号ハ西風に吹散じ。輕薄子來ッて若旦那と稱す髮ハ頭上に曲し。羽織は地を拂ッて長く。自讃して曰。匪直也人秉心塞淵と。野暮を見ると。上野から下谷を見るが如し。茶は千家をしたひ。俳諧は和泉街にしたがふ。いまだ百韻一集もせざれども發句は諸集に載たり。十有五にしてはじめて。御出入の卜庵老と。深川の土橋にいたり。チンチ、律の調子に乘。怱劇すると甚しく。娼妓役者に通するの案内をしらず。お先につかわるゝと三年。率頭持の不風流若ひ者の生存在。船頭ハ諸侯の如く。客は倍臣に等しく。吉さん源さんと舌長なり。おてうさんおまつさんの割床新川の義兵衛に隣つて。終夜悪口の卷物をきく。口説なるか喧嘩なる歟更に分らず。八幡の鐘聲耳を貫き。閙しく形容を正し深閨を出てさん橋に至れば。娼婦漸送ッて。吉さん此間にへの一句にして言を斷。無情なること淡ゝたり。卑なるかな深川の遊び。檜木舞臺を踏ずんば迷の汚號を免れずと。發明して。一日知己相伴ッて青樓に至る。中之街にして沽妓酒を喫して。酒

落たると數刻。客を見て相集の徒れ。蘭爾東洲五調嘉隆目吉藤兵衛等。啌八百をならべ。大聲笑語して盛々たり。玆に於て魂はじめて宿替す。宴終ッて娼家に至れバ。窈窕たる老亂。嬋娟たる雛妓。琴を彈弦を鳴して。館中塵埃を拂ひ。およしなんし馬鹿らしいの廓言れ。十寸見が曲聲と爭ひ。高樓銀燭の光は白晝のごとく。並立たる臺のものれ座上に島あるかと疑る。食類は樽三舛屋が風流をしたひ。酒れ清潔の下流を汲む。錦手は了古の無禮を免さず。迴僕は雛妓の探索を戒む。閨中綾羅の三ッぶとん。金屏れ雪舟探幽と雲上なり。客に俠者なく傾城に鄙俗なく。濱街先生の筆意を學び。唐机に和漢の書を飾て玉章怯からず。温ミ和ミとして諸事。伴頭雛妓に任す。調度用物の價をしらず。孔方の數量もしらざれバ。是を性惡の與樣にたとふ。はじめて知る深川の夷狄なるとを。只の人の異見に曰。傾城に誠なし鷄卵は方なるなし。才此兩品あらバ。晦日の晩に月か出ると。これ俗徒の談にして。いまだ娼婦に眞あるの證を見ざる故なる。古語曰。臨レ淵而羨レ魚不レ知ニ退而結レ網ニさきの眞僞を論ぜんよりは。己が傾城をころすの才なきを愬べし。又謂傾城に誠があつて運の盡と。俳諧にいへるごとく。伴頭を顧れバ傾城に疎く。傾城に親からんとすれバ家おさまらず。こゝに是なるとかしこに非也。非を非としつて非をなすれ。傾城の誠心を見れバなり。商人の金を出して物を買ふも錢の

儲をしれバなり。其ミちはそれにしてほつするところ是一なり。あへて鉦者を譏べからす。おもしろいの最上青ろうのたのしみ。智者となり愚者となり。通となり野暮となるも何や。正に命の多少による無翼而能飛無足而よく行ヤッサコラサの二百まし。猪牙ハ舩州のうでにまかす。せめ來るすりものたい山をはりぬくべく。名廣の。會。万句の席河内屋が高ろうかみ〳〵おほしくお羽織を見てハ戴き山にせんことを欲しおきせるを見て譽をけわ〳〵しく。まくの棧敷顔見世のつかひもの。やミ雲にやり暗雲に驕る而のちに身上散々廢々となる。忠臣ハ退き佞臣ハすゝむ。息子ハ田舍に熱し。地面ハ野暮に被令各胸中甚高くべんは蘇秦張義を欺き。才ハ周公呂望に越。善あく邪正暗明こく白の理はよく知れども。行ハぐち文盲の人よりも非也。武士化して宗匠となり。商人へんじて居候となる。千柳が前ヘ句に曰。掛人むかしをいふとはりこまれと。相あたれり是憎れ口のいまだ止ざるか故なり。先人馬鹿百韻を作て尻をすぼめ。近ハ寶井大通山入を書て品川をしくぢる等。ミな領の達者より起る。魚街爺老沒して助六の初日寂しく。大山代参の咄もきかす。功成名遂て身退く輩。狗犯の油の香を忘れ。清次か本田もひとつ昔の噂となる。惜哉東都名物の衰たるを。半太夫少くおこなわれ野呂間再創る。土佐外記の二流は知る人希なり。願は夷狄の曲を避て一口も東都節の雅言をうなるへし

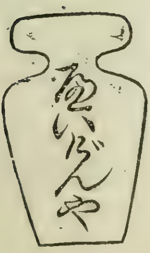
と寒夜に大肌を脱き三外の手拭をはち巻にして。いらざる世話を焼栗の杜撰の呵りを迯栗追栗はいかゞんテ誤白云爾

彙軌本紀跋

孟晋須といふ華人の詞に曰。居ハ氣を移し春畫ハ情を寫すと。凡大なるもの天下に三ツ。西京に堂塔伽藍あり浪花に交易運遭あり。智惠と膽氣とに至てハ。東都を除てまた何國にあらんや。吾友島田金谷子。其江都の中央。ぎやつといふて生しより前へ性根の七歩を進め。後へ野狐の七歩を退き。難陀が口より洒落を吐。跋陀が口より自慢を吐。武藏野の原を腹とし。冨士の山を準とはり。聰明叡智。いさゐ承知。生れ付たる智惠の甲折。牽頭末社に育られ。其丈三万三千丈。白髪の老翁にうんと云せ。放屁儒に誤たかと。きめても盡せぬ智惠の海。

硯を鞁せバ一句となり。墨を摺れバ一章となり。兎成角なり瓢。かしがましとて捨る人。有難とて拾ふ人ぐつと鵜飲の玉川鮎。水道の水のそれ。ナンとやらと平原屋東作。筆を酩酊の中に揮ふ

天明三癸卯歳春のめでたき日



白跋

淸盃ハ常に樂しミ。濁富ハ常に患ふとハ。往昔老夫山に紫刈。婆アゟ川に洗濯するの時代にして天びん棒上へそりたるの定矩にあわず。貧者ハ甘塩のさんまを賞し。富者ハ鯛のこそずを奇〻なりとせず。一升の米に追れて腹中さひしく。百斛の美酒をくらつて寒夜をしらず。豈たのしみ貧者にあらんや。もし古語を當世にあつる時ハ。婆ア樣山に柴刈。老夫川にせんだくし。桃太郎鬼が島へ渡ッて。若衆にさるゝに及ぶべし。箱根からこつちに野暮稀にして錢儲からず。化もの出ずして怪談の書廢れたり。此二ッの外に至ッて微なるものハ何也。山吹の色事也。

今予が著す彙記本紀ハ。全く鉦を進むるに非ず。かれを見。これを閲て以て。共しりのつまらざる事を隠し。此書を世界の息子たちに見せ。居候の難を免ん事を欲す。かせぐに追付貧乏なし。盡すに追付富貴なし。然りといへども。一槃に古風をしたわバ。沉香ハたかずして。屁を嗅のどんちやんあるべし。ゆだんすべからずと。まじめになつてしるすことしかり

天明甲辰歳孟春

島田金谷述

角雞卵

叙

古天地未開陰陽分れざりし時混沌たる雞卵の開闢してより已來。いまだ四角なる卵のある事を聞すと。爰に遊友月亭のあるじ近曾堀の内詣の歸るさ。半途におゐて一夜を宿し。不意四角なる卵のある事を知て以て則爰に著。其一部を閲するに契情爲好客を懐にあたゝめてハ曉鐘に分れをおしミ。かへる〳〵野郎の玉子の美言をもつてハ爲聞形を留るなど。實に其契の深重たるをいはゞあつ焼卵の厚を誌。其情のむまきを穿てハ大白入の湯卵の如し。予も此卷を味てよりおそろ感心寒卵とまことに舌を卷玉子。ほかに内東趣向の序末。ア、鷄群にまことある

角雛卯　　　二

かな

甲辰の春

苍山道人

目品

居続の契約
后の夜の手管
暁鐘の實情

甲驛妓談 角雞卵

月亭可笑編
苍山道人閲

居續の契約

鎌倉御所の西に傍て一巷街あり号て是を内東宿と唱中古の頃此所を開てより。年〻月〻に繁榮して日〻夜〻に遊客の會る事北郭南驛巽の里にもおさ〳〵劣らず春の華咲はじめより雪氣催す冬の日ハ堀の内の寒詣に祖師菩薩を名題に遣ひ爰にあそんで一夜の歡樂千金ならぬ南一片の契りに後夜を約してきぬ〴〵に別れを惜む夫驛中の朝景色を見れハ月は鳴子の高藪に落て雅三光院の林に啼ハ霜瓦庇に白く天領寺の平旦鐘ゴン〳〵と鳴て寐忘れ客の耳を貫き題宗寺の木魚の音ボク〳〵として醉倒れ客の胸に響くふられて歸る似た山の爲間風强腹まぎれの投節ハ一調子上て呻り抓れて還る交代侍ハこゝろ意氣のそゝり小聲で唄ふ廣袖着た通人あり細帶かけの艶客あり千差万別さま〴〵に軒を並べし娼家の中一二を爭ふ國佐屋の奥二階居續の客【粂之

助」 年の比廿四五にがミばしつていやミなきいろ男本場太織の茶じまの羽織黒つむぎの上着へぬいで絹のさらさ小もんの下着にもへぎ嶋のほそ帯を〆たるハ定めて相方の下〆なるへし床の上にあぐらかき三味せんを爪びきにしてかさね扇のめりやすを唄て居るそばに粂に首だけほれて居る女郎 「お梅」 年ハ十八九きりやうよく眉しり少し下りて仇な顔付いしやうハ角つなきもやうの板〆ちりめんの胴にむらさきちりめん星がのこへりとりむくをき黒じゆすにひどんすをくじらにした中巾帯をしどけなくむすび鬼面の火ばちに銚子をかけ鼻紙にてあふぎながら何かかんがへている様子 〽めりやす 妹脊かハらで逢ふ夜半をかさね扇の風かをるつい手枕のうつゝにもわすれぬ人を今さらにさらぬ別のしやらどけも ト爰にて三の糸ばつちり切レる 「お梅」 うつかりしていたるゆへこのをとにびつくりして顔を上 モシヱ心といふものハおつなもんだネ。十年も廿年もさきの事をおもつたりまた二年も三年も過たあとの事をかんげへたり。つらい事を思ひだしたりいろ〳〵な事を思ふもんだネ。それにこの五六日ハおめへさんのあしハとふしくよ〳〵思つてしんにふさいでばかりいるよ。夕ア(ゆんべ)もお綱さんやお悦さんがいふにやァ。お梅さんハこの頃じやァ粂さんが來なさるといつそいそ〳〵してげんきがいゝがそうでもねへときやァ病人を見たよふだなんのとなぶるわナわつちがぬしの事おもつてるのがよつぽど人目にかゝるそふでお部屋でも旦那さんがいひなさるにやァてめへの所へきさつしやる粂さんとやらハいひ男だ。てめへにハ過てる客人だずいぶんでいじにしたがいひ。しかし手前ハいろ男にやァこる性だから。あんまりこつて身のつまりにならねへよふにするがいゝといひなすつたがネ。わつちやァどふいふものか惚(ほれ)た客人のこたァ片時もわすれねへよ。こんなにこつち斗り(ほか)思つていてもおめへさんのほうじやァわつちが思ふ百分(ひやくぶ)一もおも

ひなさりやァしめへがちつたァかわいそふだとおもつてくんねへな。ながい先の事をいふよふだがねんもまだ二年あるが子。ねんが明るとなんでもかでもぬしのとけへいくからとふぞ世話をしてくんなよ【粂】そりやァおいらがよふなものでもせわにならふといふ氣ならずいぶん世話にもしよふが。ねんといつてもながい月日。まいばん〳〵かわる客。枕の數の其内にやァかミしめあんべへのいゝやつがきて見ろへ。又そのほうへのりけへてこつちハおさらばだ。じよふろの云ふ事を當てにしているといつでも腮がくひちがふよ【お梅】まだそんなうたぐつたことをいゝなさる。初かいやうらじやァ有めへし。嘘か實かハそぶりでもしれそふなもんだァナ【粂】そぶりやあんべいじやァおいらにやァわからねへ。女に惚られたことがねへから【お梅】にくいよ茶にしてばかりいなさる。ほんとうに續てきて見なせへわかるよふにしておめにかけよふから【粂】おめにかけねへでも此くらいくるからいゝじやァねへか【お梅】それでもわつちが思ふ程にハないハナ【粂】足がとをいといふのか。そりやァしかたがねへおれだつてわりいとけへくるよふじやなしきてへハ山〻だがこふいふと利におちるはなしだがひと比ハほう〳〵へいきちらかして。親にも苦勞をかけたから今じやァすこしかんげへてもいるし。それにむやミとつかつた跡だからむつかしいもむつかしゝやりくりさんだんをしてくるのだから何ゝ

といつても間どをに成のサ【お梅】そりやァぬし斗りじやァねへこゝへきなさる客人に。是ハ女郎けへにいく金と。のけておいてきなはる客人ハ一人もあるまいさ。おめへさんだつても都合のわりい時もあらふが。そんなこたァくろうにしねへできてくんなせへ。こんな事をいふときいた風の女だ。見くびつたことをいやァがると思ひなさらふが。なんぼはたらきのないわつちでも。ちつとやそつとのこたァどふともするわな【条】てめへそんな。うめへことをならべてかきのめすつもりだァろうか。そりやァ了簡ちげへだ。かいたつてどうせかきたよりハねへぜ【お梅】抓のめすなんのと。そりやァぬしのよふでもねへしんによびたいとおもやァこそこゝろ安だてなとをいつたもんの。はらがたつならかんにしてくんなせへョ。コレサ。あやまるわな【条】なにもてめへにあやまらせる利屈ハねへ。おいらァこふいふ事にこりてるから。ついそういつたんだ。氣にさわつたらこつちからあやまらァコゥ。酒がじィ〳〵いひ出した燗がてきたら中なをりに一ぺへやろう【お梅】ホンニわすれていたよ　トてうしを持てふとんの上へあがり　どくみして上ヶよふからマァまちな　トすゞりふたを引よせすミにふせてありし盃をとつてついでのミ条へさす　【条】めんどうた是にせふ　ト茶のミ茶わんをさし出すお梅ついでやる　一ぱいのんで又さし出す又つぐ半ぶんほどのんで　硯ぶたハなんだ。久しィもののばかりだな　トかまぼこをつまんでくひ半分の残りを吞又巾す　【お梅】よしなよ。そんなにつゞけてのまねへでもいゝわな【条】いゝよつぎねへな【お梅】それでもね。子

ァノ酔てかんじんのとが間にあわねへとたのしミがないわァ【粂】べら坊めおぢいさんじやァ有めへし・酔たつて間にあわねへといふがあるもんか・じやうだんいわねへでいゝからついでくりや【お梅】よしなよ情のこわへ女房の云とも・ちつたァきゝなァ ト茶わんを引たくり なぜそんなにのミたいへ・またねてしまをふと思つて【粂】なんのまだ酔もんかモゥ半ぶんだ ト茶わんをとろうとするをへだて【お梅】ひつっこいよしなといふのに・のちにしなせへな・女房のいふ事にわるいこたァないからいふ事をきいてマァこふなりな □□□□□□□□□□□□□□□□□□ これからぬしにきいてもらふとがたァんと有がて・いやだといふとァならねへによ【粂】こんな美しい可愛女のいふとだきかねへでどうするもんだ・【お梅】 ト粂が顔をながめてにっこりわらひ □□□□□□□ うれしがらせをいつてにくひ口た・ □□□□□□□□□ ナゼこんなにおもわせてくんなさる □□□□□□□□□□。【粂】□□□□□□□□□□□□□□□□□□□どふするのだ【お梅】どふするかかふするかおしへて上ふからじつとしていなせへ □□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□□□□□□□□□ この時毎日【禺中刻に來る飴賣】下りゝよしかァ下り〳〵

後夜の手管

へ、送て出やる肌うすな姿をミれハむねいつぱいむかしの身ならどのよふな仕よふもやうもあろけれど此身になつて一言のとばの禮より外ハないト調子はつれの新内を唄て來る三人連【龜】【安】【爲】コゥいけもしねへ聲でよせへげへぶんのわりい友達のつらァよごしやァがる【かめ】此こへで宿中の女を迷せよふといふのだ【やす】あきれらァ。龜が聲もむつかしい聲だぜ。ノゥ。有いらやくいんどこじやァねへつりがねを引ずるよふだ【ため】ちげへねへ。その證處にやァ顔をミや。いぼ〳〵の跡が附てらァ【龜】それめ〳〵そふいつても此中じやァ女郎と色の出きるハ龜さんばかりだ。梅田屋の女がいつでも達引よ。どふも色男ハしかたがないの【安】アニナカノ梅田屋のはりこの虎ミたよふに首をぐつと延した女か【爲】そうよこんにやくの幽靈が一ッほん橋をとをるやうに。ぐにや〳〵ばかりしていやァがる【安】うさァねへ【龜】なんとなといへ〳〵つま先から上へお取上ァねいのだ【爲】コゥそりやァそふとアレ見や行もの斗りある中にかごでけへるやつがあるハどふだァろう【安】今時分歸るやつハ店ものス【龜】店もんの四角に女郎の實があれバ三十日に月か出るッサ。おそれたァろう【安】ひとりで帰てるからいひ【爲】時に今夜ハどけへいく【龜】横丁へいくべい【安】ゐてきちが所か【爲】またぶッつかりやァしねへか【龜】かめさんが御承知だやつつけろ〳〵 ト上の方へ行過る。跡よりなまゑいの二人

づれ太織の羽織にさんとめじまの布子きたる四十斗の男　△源公はどふした。べ、べら坊にはへい足だゲイッフウ●コウ太ス公いくとかァどこだ○おいらにもしれねへやみくもいくべい獅子。ひつくりかへつて首をふる。おやじはまじめで笛を吹△テトテントンツチンシヤン　きなせい／＼むやみにやらかせ　トしやべりちらしゆくあとより茶やのなふく田屋とかいにかいたる大きなるふら燈灯を持【女】モシ／＼國佐屋はこつちらでござります○ヲイどこだ／＼頭さんまちねへとんだ門トちげへた【女】サア／＼おあがんなさいまし源さんはお先へいらつしやいましたヨ△ヲットそこか。ちら／＼してさつぱりみへねへ。太ス公／＼なによヲしている。ナニカ小べんかサ、先へ上ろふ／＼　トわや／＼いつて國佐屋へ上る折からあられ小紋鼠がへしの羽織何か黒のきれみじかきお太刀をさし廿七八の男みせさきへきたり【金】コウわけへ衆ちよつと頼みやす【若イ者】ハイ／＼【金】こゝのお梅さんといふ女郎衆のとけへくる粂といふがこんやきてるだろう【若】ハイきていらつしやいます【金】そんならのだれか逢ひてへとつて店へきているとちよッこらよび出してくんな【若】ハイ／＼かしこまりましたと　二階へ上りお梅が座敷のせうじを細目にあけ　モシ粂さん／＼【梅】だれだ加助どんかなんだ【若】ハイイエ粂さんにお目にかゝりてへとつて●どなたかみせへきてお出なさいます【粂】おいらにあいてへと●どんな人だへ【若】おめへさんぐれいのせかつこうででつくりしたお方で御さいます【粂】だれだつけナト　いひながらざしきを出はしごをおりるお梅も跡より付ておりの中じきりの所に立てみている粂はみせ先へ来り　だれだ●ヲヤ金さんか　トぎよつとしたよふす【金】コウ粂さんつまらねへもんだの●ぬ

しのとけへおつといもいく、きのふもいつたつけが内にとてハさつぱり居ねへス、けふハぜひともあつてどふかふのわかちを付よふと方〴〵を尋まハして、様子をきゐた所がこけへきているといふから來たのだが、コゥあんまりじやねへか、そりやァ女良けへもするがいひが。あんまり友達を茶にしねへがいひ。ぜんてい先月の十五日迄といつたのを三十日迄延し。其上まだ延しておとてへまでにやァぜひけへそふといつたじやァねへか。それにおとてへもきのふも。内にやァいねへでつまらねへ中から女郎けへどこでもあるめへぜ【条】なる程おめへのはらたつのハ尤だ。いつかも咄すとをり頼んでおいた所もあつたつけがそれががつたりまちがつてそれでつい。べん〳〵になつたのだァな【金】そりやァおいらだつても。おめへもしつてるとをり。身金といふじやァなし。てへ〳〵やりくりさんだんでかりたのじやァねへ。そりよゥこんなにされちやァどふかむかふハおいらかつかいこんでもいるとしかおもハねへハナ【条】こんやといつてどふも工面のしよふがねへ【金】しよふがないとつてぜんていおとゝいをこんやまでのばしておいたからこんやァせひくめんしてもらハねへけやァならねへ【条】そふいつてもしかたがねへわな【金】此とはにぐつとはらをたて コゥ仕かたがねへといやァすむかへ、ばか〴〵しい、そりやおめへ達がこゝいらへ遊びにきて大風をきめる所へもつてきて、こんな事をいつたからは

らがたつてのゐへさつかァしらねへが。あんまり手めへがつてのいひぶんじやァねへか。そんなにまたみゐばる氣が有なら借金を濟した上で女郎けいもするがいひ。たとへぬしがけへさぬといつたつてそのぶんにするもんか。借たときやァおめへのおとつさんの印判でかしたんだからおやじのめへで取てミせよふ内へけへりねへ。かくして押ても親父のいん判にはちげへはねへ。サア。おやじのめへで咄しゐへを仕よふけへりねへ〳〵（トこわ高に成しゆへ）【若イ者】モシ〳〵どふいふ譯かぞんじませんが。そんなに高聲でおつしやらずともわかりそうなこつてございます。それにみせ先で人ぎゝもわるふございますから靜になすつて下さいまし【お梅】（もしやうきいていたる事なれば此時店先へきて）コレ粂さんこんなとこでそんなにいひなさるとわりいわァ二階へいつておはなしゐへをしなせい。モシおめへさんもミせではわるふございますからわつちがへやへさなすつてお咄しあいをなさいまし。粂さんおつれ申て二階へいきなせへナ【若】それがよろしうございます二階へお出なさいまし。こゝで論をなさゐますと店の邪广にもなりますから【粂】そんなら金さん二けへゐ來てくんねへとつくりとはなしゐへをしよふから（ト金をつれて二階へ上りお梅も座敷にいり）【お梅】モシヱ女のさし出ていふよふだがネ。わつちやァはじめからきいてゐたがおめへさんのはらァ立なさるもむりやァねへ粂さんのいひよふがわりいわァ【粂】金さん今なァ出よふがわるかつた了簡してく

んねへおいらもこまつたうへでついこんな事も出そこなつたァな【金】何も了簡(りやうけん)もあやまるもいらねへがどふしてくれるきだよ【粂】どふといつて此うへのねげへだが。とてもの事にあすの晝まで待てくんなさらねへか。いづれそれまでにやァ工面をしよふ【金】あすのひるまでにみんなできるか【粂】ミんなといつちやァむつかしいが成たけ工面(くめん)をしようからョ【金】ヘテこまつたもんだしかし出來ないのをむりにといふも野暮才(やぼさい)そくたそんならあすの晝までにやァ半金成とも急度こせへてくんねへ【粂】そりやまちがやしねへ【金】そんならあすあをふト立て行にかゝる【お梅】お寒(さむ)いからおまちなさるまし今に下タで燗が出來ますから【粂】ホンニ一ツぺへ飲(のん)できねへ【金】イヤ〳〵酒ハのまねへ【粂】ちよつとやりねへ 此内かねてお梅がいひ付置しゆへなれはてうしざかなぶた出るこゝにてしばらく酒事あれどもたがひにきをかねあつてはねたる事もなければ略す斯くして 【金】サア〳〵モウけへりやしやう長居をしてとんだ御馳走になりやしたそんなら粂さん明日【粂】コレハモウ大きに【金】アイおめへこれハ大きにおやかましかつたろうね。お邪广をしやした【お梅】おめへさんもつとお遊ひなせへナ【金】アイ粂さん【粂】アイ左樣なら ト金へかへる粂へ何とたくらつむいて詞なし 【お梅】粂さんあんな事をいつてやりなすつてけへす當があるかへ【粂】何の當があるもんかァ、いわねへと納りがつかねへからサ【お梅】そうしてどふするつもりだへ【粂】どふのこふのと此ひどい中から仕かたハねへか又あすハあすの風がふかふ

れさ。しかしあすきてやかましくいふ事もぜひかねへが。親父の印判を盗出して手形をしてお
いたから親父へしれると内をかぶる利屈だが。こゝを一チ番こまつてるよ　トおゝきにふさぐ　【お梅】け
へす金ハいくらばかりだへ　【条】ミんなけへせバ五兩だがまづ二兩もやれバいひ　【お梅】二兩
くらひならどふぞわつちがさんだんをして見よふ　【条】さんたんをしよふといつたつて手めへ
にひどいことをさしちや氣のどくだ　【お梅】きのどくだなんのと他人がましいぬしの爲メにす
るもんだものをどんな事なとしてこしらへるハナ　【条】じつにこんな事を手めへにくろうさせ
るハ本意でもねへが。まことにこまつたからうへだ。どふぞ工面をしてミてくりや　【お梅】わ
つちが當テといふハ牛込からきさつしやる宗悦さんか。山しろ屋から來さつしやる忠さんか。此
二人の内へふミでもやつて賴むか。つがうよく來さつしやるとむしんをいつてこさへよふから
そんなに氣にやミなさんナ　ト出しなかはへ若イ者しやらじを明て　【若イ者】お梅さんちよつと　ト廊下へ呼出し　今山城屋から子
忠さんかお出なすつたといつてめへりやした　【お梅】ナニ忠さんがきなすつたと。ほんとふか
【若】いまいらつしやるそふでございます　ト座しきへはいつて　モシ条さんおきのどくながらどふぞ爰を
お明なすつて下さるまし　【条】ヲイ〳〵どけへいくのだ　【若】下タ座敷で御ざいます。御あん内
いたしませふ　トてうし盃其外いろ〳〵臺ふたへとりのせて　サアこちらへいらつしやりませ　ト先へたつて行程なく山しろやのきやく　【忠左ェ門】

年の頃三十二三てつぷりとふとり大たぶさの丸わけ黒七この羽織半上田の上着八丈縞腰鴫の下ぎ二ツつい厚板にしきの帯を〆少しほろへひきけんなり跡ゟ女藝者〔染吉〕〔哥吉〕男げい者〔佐八〕〔長九〕其外茶屋の女わかい者わや／＼いつてはしごを上ル

遠ひぞ御座敷ハどこだ／＼〔長九〕内陳道ハこなたで御ざる御さいせんなら爰へ／＼〔佐〕やかましい男だ〔染〕よくしやべるハしづかにしなせへ〔長〕またかゝァがしかるよ〔染〕なんだなかゝァなんぞと澤山そうに〔佐〕いふて下タんすなまだ毛ハはへぬ 足びやうしをふんでおどりの身ぶりをする 〔長〕そう／＼しい靜にあるかつしサア／＼爰だト みな／＼座敷へはいる跡ゟ仲イもさけさかなをもち來るほどなく 〔お梅〕ずつとはいつて ヲヤ忠さんトいつてこちらをミまハし ミなおそろいだネ〔長〕コレハ太夫さんの御來臨だ旦那御酒ハどふでございますチト おはじめなさいまし〔忠〕さつきのでごふぎと醉たヨト いひながら受て一ぱいのんで 先とし役だ佐八へさそふ〔佐〕おいたゞき申やしやう。しかし年役ハちりとお情ないネト 盃をうけるしばらくあちこちさかづき廻る事あり〔染吉〕盃をうけて モシ忠さんおりよげへ申ませう〔忠〕一ッおさへよふか〔染〕マア／＼おあがんなさいましナ〔忠〕かミ長の盃だ受るといふものにしよう〔長〕いづれ酒のゑへ手ハ女の事さネお前ハいろ男がいたしやしやう〔染〕コレサ／＼そんなに手をのばしてとつくりをころばしなさんな〔長〕セハァやくめへとつくりせうち致してるよ〔染〕にくい口だョ〔佐〕くちだとおれバ二階からまねくハちとふるいか〔長〕ふるいよりやァわからねへ〔忠〕コレ長九き公を此十日にお堀端でみかけたが差合なつれであつたから聲をかけなんだがどこへいつたェ〔長〕やはり金

ぴらへめへりました【忠】連があつたか【長】ござりました。則こゝにゐる娘でござります。イヤモウ子道〻私をくどくにはこまりきりました。人だちの中ともはゞからず手をにぎつたり袂を引たり。モシいろ男はうるせへ物で御ざります【哥】だれがそんなとをするもんかきかねへによトつめりにかゝる【長】コレサ又人中でちわをするよ【佐】ミつともねへこんな所でちわげんくわはよしたり〳〵【哥】おめへまでがおんなじよふにすかねへよ【佐】ぬしやすかねへでも又かはひがる物があるての【哥】たがかはひかるもんかいろけなしめ【長】いろけなしといへバ。モシかういふはなしがあります。さる所に佐八をミた樣ナとふしても色の出來ないといふぶ男があつた所が。此男つら〳〵思ふよふ。おれも一ッ生の内にどふぞ男にはじめての女といろがして見たいが。むすめつこやなどは。とてもおよバねへ事だからと。いろ〳〵工夫をする内その近邊に。まことにふ器量なはん額か累の二代目かといふよふな女があるから。あれはよもや男にあつた事はあるまいと。その女とかけ合た所が。さつそく承知して。いつ幾日のばんと約束をして其晩に成て出合て見た所が。とりまはしあんべへどふも初メてのよふすでもねへから。手めへこそはじめてゞあらふと思つたに初てゞはないそふだといふと女がとなたもさよふおつしやるよ【佐】おきやァがれ【忠】どなたもだけ有がてへァハヽヽ皆〻ァハヽヽ

ゝ〔佐〕ときに商賣(しやうばい)をちと身にしみて三弦(さみせん)を出スといふ法にしやうじやねへか ト是ゟ染吉がぶんご佐八がめりやす長九郎吉がいたこいろ／＼有りてのち染吉のこらすハイさよふならをきつかけにみなノ＼陣を引とるちや屋の女〔女〕忠さん御きげんよふお梅さん左よふなら〔お梅〕アイトいつた斗り〔忠〕コウあすの朝ハいつもより少しはやくむかひに來てくりやれ〔女〕ハイ／＼ ト中で行跡へわかいものそこら取かた付床を取て行あとハ二人さしむかいふとんの上に居り〔お梅〕なぜ此ごろハ來なさんねへそしてふみを上たがとゞいたかへ〔忠〕ぢきに届(とゞい)たこよふ／＼と思つて居ても何が用事がおゝくつてつい御ぶさたをしたヨ〔お梅〕おめへさん此ごらァ外へいきなさるそふだね〔忠〕ナゼ〔お梅〕三四度みを上ヶたのにたつた一チ度しかきなはんねへ。なんでもわきでおもしれへ事が出來たにちげへねへ〔忠〕むりな事をいふもんたぜこゝより外へいきもしねへものを〔お梅〕それでもわきへいきなさるをミたといふものが有ます〔忠〕だが見た〔お梅〕だれでもサ〔忠〕コゥかくさずといやな〔お梅〕それミなせへいきなさつたればこそきゝたがりなさらァ〔忠〕それだつてうそをいふからヨ〔お梅〕ナニうそなもんかそんならいふがねァノ店のわけへ衆(し)がいつかたかしまやへはいんなさるをミたといひましたヨ〔忠〕ソリャァ附合(つきあい)てたつた一チ度いつた斗リだ〔お梅〕それ見なせへほう／＼へいきちらかしてこつちで思ふよふにもない。男といふものハナゼそんなだァあらふねへ〔忠〕いきちらかすといふが一チ度や二度ハつきあへのとだもの。おゝめにミ

てくれてもいひじやねへか【お梅】わるいよ。つきゑへ〳〵といつていく内チにやァとんだ事(こと)かできるハナ【忠】とふして手めへといふ可愛(かはいゝ)もののあるのに外心か有てたまる物か【お梅】男のこゝろといふ物ハかわりやすいもんだから油断(ゆだん)がならねへよ　トせりふ最中らう下より小ぢよくのこゑで　お梅さん〳〵ちよつと【お梅】なんだナ　トらうかへ出てひそ〳〵いつて座敷へはいり　じれつてへヨゥ　トかほをしかめる【忠】てめへ客(きやく)があるか【お梅】いせ屋からきた初(しよ)けへさ　ト一ぷくすいつけ忠へわたし　ちよつといつてこよう　ト出てゆくしばらくしてきたれども座敷を出たりはいつたりしてとかくそれ〳〵と尻がおちつかずおかしきそぶりゆへ少ししやくにさへて【忠】コゥお梅はおりを出してくりや【お梅】どふしなさるへ【忠】けへるからさ【お梅】今時分(じぶん)なぜへ【忠】なぜでもサ【お梅】何ン時だとおもひなさる。そしてにわかに思ひ出したよふになせだノゥ【忠】何ンでもいひから羽織を出してくりやといふのに【お梅】そりやァだしちやァ上ヶよふが。ぬしやァはらをたちなすつたナ【忠】ナニ腹(はら)ハたゝねへが用があるからさ【お梅】うそをつきなせへナニ用があるもんかわつちがこんなにそれ〳〵するから。それではらァ立なすつたろうが。是にやァわけがあるよ【忠】わけがあると。そりやァどふいふ事だ【お梅】どふもぬしにやァいひにくひからさ【忠】いひにくひとつていわねへじやわからねへハ【お梅】そんならいふが子あいそをつかしなさんなへ。アノウヨ。いつそはつかしいよ【忠】なんだおもしろくもねへ【お梅】アノ子。こふたわないつかぬ

しにもお目にかけた。それわつちがこしれへたたいまいのかんざしとくし子。アノ代をやらねへでおいたが子きのふ迠にやァぜひはらふつもりさ。それたけれどしつていなさるとをりおつかさんの方のりくつや何かで子都合(つがふ)がわりいからモゥちつと待て下せへと頼のにならねへとつてやかましくいふからそれであつちこつちするのだハな【忠】そふかそんな事なら早くそふいへばいゝそして其金といふハいくら斗りだ【お梅】おめへさんがそんなにしん切(せつ)にいつておくんなさる程わつちやしんに身をきられるよりつらひが子。ほうべへ衆(し)のめへで小間物屋(こまもの)にいろ〳〵な事いわれてげへふんがわるくつて。くやしくつて〳〵ならねへわな。いつか中もむりな御むしんをいつて又こんな事をお咄し申ちやァ何とか思ひなさらふとそれがはづかしいわな【忠】なんと思ふもんかコゥそしていくら斗りだといふのに【お梅】笄(かんざし)と櫛(くし)とその外にちつとのこりが有から何かで二めへあれバいゝが子【忠】二兩か大かたあるてあらふトレ〳〵（鼻紙袋とりてカベ）（チヨロの金入より小粒八ツとり出し）ある〳〵サア（ト紙に包てわたす）【お梅】まことにおありがたふござります是を持ていつて見せつけてやろう【忠】こゝへよんではらへバいゝのに【お梅】商人(あきんど)ハ二階へ上ることたァなりませんからさホンニ人をミくびりやァがつてにくいといつちやねへよ此金を負(かな)へぶつ附てやろう（ト懐へいれて庭下へ出る）【不寝番が八ツの柏子木】カツチ〳〵〳〵カツチ〳〵

曉鐘の實情

雞鳴の鐘撞終て呻空中に消按摩の笛の音嵐に誘れて幽なり蒼麥宜哉の聲暫絶て犬の遠吠遠近に聞ゆ火の用心愼ませうの破竹軒下に響ていと寂莫たる下座敷の毎妓閣にハ【粂】隣り部屋の賣殘娼か高鼾耳にさわりて寐られせず火鉢に向て眞顔〳〵たるその折から・障子をそつと明ケて這入ハ【お梅】粂さんおさみしかつたァあろうそのかハりおミやがあるコレこまつかいのが八ッあるよ【粂】手に取て紙ひろげコリヤありがてへ〳〵實によくしてくれた・是で金がめへの皃もたつといふもんだ・とハいふもんの勤の身にこんな事をさして名利につきるだらふが・そのかわりにやァ此おんハ一ッ生わすれねへによ【お梅】わつちや恩にかけよふとつてこんなこたァしねへわナ・年が明たらぬしのとけへいつていろ〳〵な苦勞をするけいこの爲にするのだものを一生わすれねへなんのと他人がましいとをいひなさんな【粂】それだつておいらが方から手めへのたしになることそほんとうなれ是じやァありやこりやだ【お梅】それでも子・夫婦になつて世帶のせわをしたらおもしろからふ子【粂】あんまりおもしろくもあるめへよ・もし

も手めへがおいらがとけへきてこふいふくろうばかりしていたらその時こそよせばよかつたと思ふだろう【お梅】ナニそりやァないのさ子惚た男のそばにいるのだもの・どんなせつねへくらしでもちつともいとやァしねへよ【粂】そりやァそふとてめへあつちへいかねへでもいゝか【お梅】とる物を取たらいく氣がさつぱりなくなつたよ【粂】そりやァわりい了簡だ・あつちも大事にするがいゝいきねへ〳〵【お梅】邪广がりなさる子こゝにいちやァわるいかへ【粂】邪广がるじやねへがあつちれ・けつかうなおとくい様マだからさ【お梅】ホンニあの事でてへ〳〵氣ぼねを折たとじやァねへからこゝでちつとやすましてくんなせへ □□□□□□□□□□□ ぬしもそんな形をしていねへでほんとうにねなせへナ □□□□□□□□□□□□□□□□ □□□□□□□□□□□【粂】□□□□□□□□□□□【お梅】□□□□□□□□□□□□□ 是よりしばらくだんまりいかなる事をせしやこれ諸君子の高見にねがふのミ やゝあつて【粂】モウけへろふよ【お梅】はやくれないかへ【粂】はへいほうがよかろう トおきてしたくたし羽織をきて座しきへ出る【お梅】いつきなさるへ【粂】四五日の内にこよふ【お梅】そんならあの・金さんとやらによくたのんで子・そしておとつさんへしれねへようにしなよ【粂】ウ、〳〵【お梅】かならずいつこくなとをいわねへで跡の所をまつてもらいナ【粂】しようちだよ トいひ〳〵店へいづる【お梅】加助どん〳〵粂さんがかいらつしやるよ【若イ者】寝て居たりしが起て目をすりながら ハイ〳〵まだとんだおは

よふございます トいひながらわきざしを出して渡しはきものを直し錠をはね【条】お世話〳〵【若イ者】又おちかい内に トくゞり戸がらく〳〵
お梅も門口から外へ顔を出して【お梅】条さん〳〵【条】なんだ【お梅】モウ一ぺん皃をみせていつてくんな

其二

下街の外片側にたらぶ

と書たる方燈這入口に耀て行來を照らす朝歸の客こゝに來て足をとゞむ就中大和やといへる茶店わきて賑敷喰奴あり呑む徒あり思ひ〳〵に腹をやしなふそが中に奥の一間に只獨り友待かほの手酌ハ宵に國佐屋へ來りし【金】ちろり引寄せひとりで飲て居る【条】門口をすつとはいつて奥の座敷へ來る コウから汁一ぜん出してくんな トふすまを明金と皃見合 ヲヤ金さんおめへも夕ァハあそんだか【金】遊ハねへでさ。そりやァそうと彼狂言ハどうした【条】まんまと首尾よく是ミねへ トお梅を取し二兩の金を紙入から出し見せる【金】きめう〳〵山割たぜ【条】とんだ事をいふそうハいかねへ【金】ナゼ【条】おめへ金がしに成ていひ分シハねへがおいらァハけへものや何かのめへてひどひとをいわれて二ッ割じやかんぜうにかゝらねへ【金】それでも川瀧きどりてくつとやらかしたところハよつぽとよかつたァろう【条】うまくいつたぜ【金】その金を内へ持てけへるハ野暮な。りく

つだなんと是から書遊ひとぶつつけれどふた【条】増元へいくべい【金】しかしでいぶあかるくなつたからあそこのめへを通てめつけられちやァうまらねへぜ【条】あげにのろふか【金】それがいひ〳〵（トしたくをして）コゥ御亭主かんじやうれけへりにいつしやうにしやせう【亭】よろしう御ざいます【二人】アイおせわ（トこゝを出てかごやにいたり）ヲイたのむぜ・めんどうながらあげを二てう出してくんな（駕籠やの店にねていたるおとこ）ヘハイ〳〵（トあくびまじりにへんじをして）コゥ久次や〳〵あげが二てうでらァ・松や勘次をおこしてきや【久次】ヲイ〳〵（トおきて棒組をよび來りほとなくかごをこしらへ両人のりうつると条がのつたかごの先ぼうかごをあげつへをして）モシ旦那どけへやりますな【条】増元へやつてくんな【駕】かしこまりました（ト杖をはづして首の間へ一寸はさゝかけごゑ）ハイ〳〵〳〵〳〵ハイ〳〵

▲是より此二個の侠客増元へいたりての世界且國佐屋の娼お梅なるもの此噂を知て發憤となるされども条ひとつの計をもて是を防の一條草稿出來あれども丁數の多きを厭ひて一トまづ爰にて筆をとゞめて余れ後編にゆづり待りぬ

角雛卵後編

菖蒲談語

完

近ゝ出板の時を待て御もとめ御覧可被下候以上

浮世の四時

自序

天若不愛酒酒星不在天地若不愛酒地應無酒泉天地既愛酒と李白が洒落もくらいだおれの身に取ッてれありがた山の燗酒〳〵一ッ杯呑とぶん流しのながれ渡ッたよしれら假宅たかゞ素見の竹格子生醉の筆のまれらぬがちといふのもやつぱり手前の味噌吸四方のあからで飯かけ山の手の大先生それから御ろうじまし

天明辰の

夏五月

南陀伽紫蘭

戯作

鐘ハなミ木歟 両國歟　こつちの四時

既に両州に花街うつしと聞へければ上ハ扇屋中あふミなんどをはじめとして西河岸何かしのめん／＼にいたるまで内證の女房達ハ御鏡を抱膽夫ハ居刀の寶劒を守護しあまたの女郎ハ北ゆゝしく警固す是なん亭主の御玉ならん未だ御化粧の部屋さへしつらハぬに月卿雲客出茶屋に滿墨水の風に飪をさますさまこそ清凉でんとも言つへし須磨のうらハの裏茶屋ハ一ト盆三文の兄さんもいとおかしはま千鳥禿があとなき噺合手も共喜の字屋を引かへて今川焼の兒僕とハなんなりぬけふハ万屋八郎兵衛方ニよん所なき出入と見へて何町・仲間參會と丈長に書ておかもと屋が名札のわきに張おき見しりたる顔も大分出這入けるがほどなく參會もすミければあとハお定まりの通り貳朱膳の坪一ッをのけておいて音頭を取りのこらず車坐に居流れ向ふ鉢巻腕まくり【富九】是平ィさんおめへハあんまり大キいもちつと大ィャをへらして下タサヱ【吉兵衛】此男もけちな事を言じやァ子ェかァ、突かゝつて來る時に拔カ子ェでいつもふける時があるものかおれが乘ベィから山で明ヶやれ／＼　此席を座より雪やの新造共すき見なして【わか梅】雪うらさんァレ見な

んしあれハマァなんでありんすネ花のへさんマァちよつと來て見なんしナおかづをよそう物へ何か入てから〳〵とならしてハおきんすよ「花のへ」どれわつちにもおミせなサヱしヲヤ〳〵あれでもやつぱり双六かネ「雪浦」何サソレ時〳〵内證でも見んしたッケ「千代ます」そふさネいつそ貳朱銀やおわしがいかい事有よ「わか梅」ヲヤちよますさんハきたならしいことをお言なんすノゥ「花のへ」是〳〵わか梅さんアノ飛いろどんすの帯を〆ている人さんがネよく庄かさんに似ていんすよ「わか梅」ドレアノ人かへホンニネいつそよくにていんすヱコレ雪うらさんおめヱどの男衆がいつち好なんした「ゆきうら」わたしかヱ私ャアアノさやがたのけん法を着ている人がいつちヱ、ヨ「千代ます」ヲヤ〳〵わたしらハアノ茶がへしにかげのかたばミを付ているのがイ、ヨ「花のへ」それでもアノ人さんハまだ小僧らしいネ「わか梅」その隣の人を見なんしナきやんらしいネ「花のへ」わたしハこつちらのはつれ雪のゆかたを着ているが好たヨ「おまさ」此子達ハどふしたもんで有んすしりもせぬ人のうわさを參會座敷「吉兵衛」のぞきハはつとふだ〳〵それ見なさへ遣人衆に叩られさあいつらがふすまのうしろでペチャクチャ〳〵としやべりやァがるからそれが氣になつてねつから目が立ネヱ「いせ久」是吉公そんな毒を言ハッしやんナ此忠四郎ハ何所へ行ッた今まで居たとおもつたが見へネヱそしてあいつハ勝

ッたはづたが要助も見へ子ヱ下タへでも行ッて遊んでいるもしれ子ヱいま〳〵しいおれかせんぎをして來やふ（下々より万民わかいもの來り）へイ御免なされましモシ八郎兵衛申ます皆様に今日はどふぞおしづかになさつて下さりましと申ました隣でも事之外客が御坐りますからいつそせまがります【平治】ヲ、サ承知した是八郎兵衛殿ッにナ今に仕舞から氣遣ひをさつしやんなといつておかつサヱ（わかいもの下へおりる）【二郎吉】人をくそにしたどけヱ仕舞れる物歟此二はいに甚スとおれハ十匁のうへ呑んでいるものをノゥ藤ハ・ャ藤八も見へねへワヱころつと女郎買かゥフとんだ人かこけたハちつとづゝもおかさのやつらハだん〳〵ほしべりがたつ【近ッ長】モシ大徳の若旦那そんなに見て斗り居るものじやァ御坐りやせんチツト蚊に喰れぬやうに何ヱゾおつ付ケて御ろうじやし（大徳のむすこ）【市兄】わたしハどふも不得手で【祇鳩】モシ市兄さんこふしている事も子ヱ隣でちよつぴら遊べふしやチヱか見ているも大くつだ【市兄】ホンニ子先ッからそふすれハよかつた【豐二郎】是ハおもしろひ何てござへすわたくしもお供を【市兄】サァそんならバ祇鳩さんおめへすがわらを買ッて見ねヱ歟【祇鳩】何市兄さんお前買ハふと言はかりことだろふわたしと豐光ハ部屋持にしやせふ【豐二郎】わたくしハやつはり赤いびら〳〵にいたしやせふそれであとを參るうれいがなくつてやう御坐ります市兄さんまた向ふへ元成も來ておりやすに

香川といふ何ハ「市兒」ヲヽ御免ン〳〵（豊へ手をたゝく万やの男来）「豊二郎」是寉やのわかい衆を呼ンで下さる（男ハイと下へおり鶴居のわかいものをよこす）「久米八」ハイ御用で御座りますか「豊二郎」ウヽすがわらか有ル歟「久米八」ヘイ御ひまで御坐りましタツケ「豊二郎」そんならノすがわらとうつくしい部屋持を一人新衆をひとり出してくれべしだ「久米八」ハイさやうならこちらへお出遊べしましまだどふも仕切りがろくに出來ませぬハイ是ハ大工衆まつぴら御免ンよヲヽ曲尺で足を突たそふで血が出ます「大工」たもとックそを上やせふ歟モシわかい衆身へ金か這入からおいわいなさへし「久米八」なるほど是ハエヽ兒ン徳だサア旦那様がたマア是へお居り被成まし（男ハ下へおりあるべきかゝりの硯ぶたてうし盃持來ル）（女郎三人來り市兒へすかへら祇婦へひなてろ豊はまへりそありしば世おしきせ近り盃事すむ）「久米八」サテもふ何か事たらぬがちてヘイ是煙草盆も何所へ歟いつた一ッでおきませふ旦那様お一ッめし上りまし「市兒」つがつしやんな呑子エよ「久米八」御吸物も御存の通りゆへさし上ません一向まだ手がまハりませんで何かヘイさやうなら御茶づけを「豊二郎」エヽそふしておきだお茶づけ夜そせのすがヽきお後になつてさら〳〵と仕やせふ（男へさやうならと坐敷をかたつけ床をまへすがへらへ付まへしだけふすまにて仕切ひなてろありしばへわり床なり敷居鴨居ハいつれも床の上の取おきなり）（すかへら雛てるハ外へ行くありしばへのこりている所へ外の新造とも咄しに來る）「ありしば」あれ見なんしまた千ごりか來んしたよけふも是て丁度廿七たびでありんしたモシあれハなんのためにするのでありんす子「豊二郎」アレカお前達ハしるメエありやアノ遊ンで内へ

、歸ッても女房に燒餅なやかれヱ爲にョ「ありしば」おや／＼馬鹿らしいぬしハなんぼわつちがしりんせんとつてもあんまり人をおなぶりなんす「豐二郎」そしておメヱしつているか「ありしは」あれさマァしりんせんけれど子 びやうぶのすきまより外の新造どものぞいて モシありしばさんヱ「このハら」とミ春さんかお出なんし千ごりを來て見なんしナ「豐二郎」早く來て見なさへ千ごりが逃て行ザヱ「このハら」アレマァだまつてお聞なんしさんげ／＼六根しやう／＼と申シんすワナアハ、、、、、、何ンのこつてありんすね「豐二郎」ありやァノお前聞やうがわりいぞつこん猩〻といふ事だッナ「このハら」ャゥぬしハ人をおなぶりなんすョそれでもアレお聞なんし六こんしやう／＼と申シんす物ふ「豐二郎」ゥ、アレか六こんしやう／＼といふも有ル／＼祇鳩さんやつぱり七人猩〻の内だッヶのふ「祇鳩」ソゥサ「豐二郎」天しやう／＼地しやう／＼内外しやう／＼六根しやう／＼「このハら」それで七人かェまだ三人たりんせんョ「豐二郎」あと三人かェ、トあとハョ、それ／＼かんしやう／＼ノ「このハら」そしてへ「豐二郎」深草のせう／＼にけわい坂のせう／＼是で七人猩〻といふのだ「このハら」おや／＼はじめて聞んしたョ ひなてる來たり モシありしばさんかめじハまだ歸りんせんかの「ありしば」アノ子ハいからしへ遣るといつでもらちが明キんせんよァ、歸りんした／＼是かめじや手前ハ何をして居た「龜じ」何も一

してハおいらんせんァイ銀出しと紅粉【ありしば】ヲャ此子ハばからしい客人のいさつしやるにこゝへ出す事か有ものか是てめへまた見せ物を見て來たろふイ、呵リヤァ仕ねェからうそをつかずと咄して聞しや何を見て來たおいらんもおしかりなんすな【ひなてる】何呵リヤァいたしんせんサァ咄しやヨ【かめじ】アノ子十六らかんさんを見て來んしたよいつそいろ〳〵ならかんさんがおりいしたよありやァたしか子炭取にいたしんすやうな物でこしらいた顏だよ【とミはる】ヲャばからしい何ンのこつた子【豐二郎】何ふくべで拵た羅漢よ【ありしば】ヘエ、どふりてすミ取と申んしたまた何を見た【龜じ】アノ子龍宮の人ハいつそきたならしいヨあれよりかるわざかとんだおもしろふありんす【ひなてる】ソレ見やそんなに見てゐるからいつでもおそいはづだ子【豐二郎】お前たちもゐつて見たかろふ【このハら】何子供らしい【豐二郎】ソレでも白玉屋の狂言の太皷を聞チヤァ飛立ツやうに見たがるしやァねへかそれがこんな氣ばらしな所に居るからおふ〳〵としてさぞうれしかろふおしつけ花火も見あきをするザエ【とミ春】あさつて艘へ出るはづだノゥ・いつそたしのミでありんす【このハら】ゥ、そんな事ハイ、けれどいつそ二階が不自由さよしハらの内のやうじやァ子ヱのふそしておいらんの坐敷なんぞハいつそおしう有んすマァ子お聞なんし坐敷が三間でまいら戸がくろめ杉とやらの一

チまい板だとお大工の紋ッさんが響なんした〔豐二郎〕何くろめ杉小野川が部屋を見るやうな名だの大かた黑べ杉のこつたろふ〔このいら〕ァイ其黑べ杉さそしてかけものか三ッさ〔市兒〕三福對だの中の繪ハ何ンだ〔このいら〕繪ハ子眞中か唐の女を唐人が鏡のやうな物へ筆で寫て居る所さそのわきが芥子を見たやうな花に鷄さ片方が紅梅に靑いしつぽに玉の付ィている鳥さありやァなんとか言ッタッケ・ソレサたしかさんびやくとやらさ〔豐二郎〕何三百・一本迄に買なサェ〔このいら〕ェ、ぬしハ好子ェぞョヲ〔祇鳩〕何ンの繪だろふ子〔市兒〕唐女を寫ているハだれたろふェ、大かた王照君に毛延壽だろふ左右が美人艸に鷄と紅梅に山鵲だろふ〔祇鳩〕なるほどそふでごサェせふ〔このいら〕夜具が五色どんすさ隣かありつなさんの坐敷ダョ大よどさんの坐敷ハ奥の方でいつそうすつくらい所さそしておいらんの鳳凰ぶろが能よミんな前のすがハらさんからのゆづりものさ〔とよ二郎〕ミんな前の砂村さんのゆづり物だそんならなるほど能西瓜稀だろふホン＝此中おかしい事か御坐りやした九州部屋の手合が割下水へ行ッておたまじやくしをすくつて來て鯰の子だから煮て喰ふトッテ言ふからッリャァ蛙の子だよ鯰の子ならひげが有ルはづだと言ッたらハテ子供だ物ヲ何髯が有ル物歟と言やしたそれとさだおかしいハ初手中洲へ行ッた女郎が東中菴を醫者さまだとおもつたもェ、じやァ御坐りやせ

ん歟【祇鳩】こゝらも大笑た子モウ日かくれるそふだ市兄さん流しなさる歟【市兄】マアどふとも仕やせふ 禿鼻唄 其東ハ居眠りやる平吉こぴ茶の歯をかくし九町ハ酒のゝかたこと斗り言ウている【豊二郎】ソリヤアなんだ時花唄か【龜じ】アイ此比はやりんしたのさ【市兄】新歌一曲令二人ヲノ鱸一 すかハら来りて モシお待どふておざんしたろふまつひらおゆるしなんし【豊二郎】是ハおいらん入ッしやい左様なら私ハ【ひなてる】モシマアお出シなんしナ【豊二郎】イヽエモウ私ハ手前の部屋へ參りませふ と坐敷をたつ【ありしば】アレ主ハあんなにくい事をおいゝなんすよ【豊二郎】そして何と言やす部屋でなくつて小家歟【ありしば】エヽにくいノウ【豊二郎】ヲヽいたい抓りなさんな是腹ハお立なさるなこふ屏風を立まハした所ハきつい八人藝だ【ありしば】ぬしハよふ口を開なんすちつとだまつて居て見なんしアレマアおゆるしなんしけふハとふもあいにくとおきのどくで と脊中を抱かせる【豊二郎】中くだッエそふ云ウ氣ぐらいでは能女郎にならふ一寸の虫にも五分のたましいだ とおきて帯をしめ直す【ありしば】モシ何所へお出なんす【豊二郎】おか本の方へ連が行ッているから一寸付合に行ッて來るよ【ありしば】そんなら早くお歸りなんしエ と寐ている 豊は下へおりおかみのへゆく【豊二郎】是ワかい衆おらが連のいる所はどこた おか本のわかいもの ハイあなたがたハたしか哥またさまの御一坐で御座りましたッケ是で御坐りませふ びやうぶのうちより 豊さんか【豊二郎】ヲヽ要助さん忠公もいるの【要助】モウ歸る歟

「忠四郎」それもよかろふザヱ「豐二郎」サアそんなら歸らふ〳〵二階に市兄と祇鳩か居るがまだアノ手合は歸るこつチヤアねヱ　おか木の女郎　またおはやふありんす　とりちき一ツへんにとめる　「要助」モウ行やせふサア〳〵と　三人つれ立女郎二人おくりて出る　そんならまたとふぞお近い内にへ「要助」おさらばよおとゝい參りやせふ「豐二郎」是忠公はきものがかわつたザヱ「忠四郎」ほんにナ・サア是からなんと淺草をそゝつて歸らふじやァねヱ歟「豐二郎」おもしろ狸〳〵むだても言ながら四ッまでそゝろふそしてアッチヤア見せを張そふだこゝの油揚酒屋も角蔦が來るの外はなミ木がにぎやかだが客はこつちが有そふだ見付の橋もモウ通すの多田の藥師の川越やへもかなやが來たとよ柳橋の河内屋や・めうが屋へも來たらよかろふノヤあしたは第六天だは百兩とつたらこふしては居メヱの「要助」ソリヤアしれた事よじきに韮三買だサアほとなく來たなるほとにぎやかだこゝに一軒はなれて有ルのァ、貳丁目の扇やだ茶屋も大ぶ來ているのサアマア正直からのぞきやせふ「豐二郎」さてもきれい〳〵こちらの八丈なぞもいきのひろしま「要助」やくわんといふ古ル句だのむかふのふじ色は一ッ分ンかのお職と見へてこふてきと高い面だ時にとつての高面〳〵こゝの角はなんだね八玉屋か「豐二郎」彌八玉おもきかうへの小夜衣うしろへ屛風を立ッた所はきついさるとりをまつてゐるといふ顏だの大ふ女もそめくの「忠四郎」ウ、めづらしいからきん

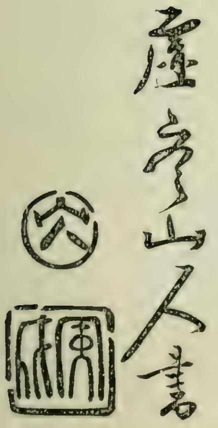
所のかミさん達が見て歩行なさるのだ【要助】そこハ何屋た【豐二郎】京屋かしらんたしか惣貳朱だの貳朱ァ馬鹿らしい【要助】貳朱鄽のせつ法屁ーッだ【豐二郎】アノ子ハこふぎと眞に成ッて彈て居なさる【忠四郎】きゞすだの【要助】何氣にすだろふ唄の文句を聞チェしいなどふしの赤仲とッサ突ぬけを打ッても拂の付カチェのだ【忠四郎】それでもとんだェ、直〆だ【豐二郎】其直〆を松風鬮のおぢいにたのんで藝を仕込で貰へばィ、こゝハ二文字屋歟【要助】そこれあやま針のりやうしスヨさしが有り【豐二郎】さしが有ル百度參りをすればィ、ごふぎと美なる女中がそゝる內よりおもてかありがたい兩の手にうまい物といふのだ貴色風と見へる【要助】馬道ちん傾だろふ【豐二郎】ドウりていきなりこふきやうの寺だ【忠四郎】これハ山城やかァノ黑ちりハ百疋かの【豐二郎】百疋ひやうどはなつ矢と見へるアレ見さつしァノこわいろを遣ゥ團扇を持ている女郎衆を見なきなッくさいとの鼻だのァノ隣の女郎衆を見な大きな團扇を持ッて居なさる【要助】ありやァ祭のお供に出なさるのだ【豐二郎】何そふじやァねェ谷風がでんかくを燒く團扇だ【忠四郎】サァいゝかげんに見さつし顏へ竹格子のあとがつくよ【豐二郎】こつちらハ赤桐屋歟【要助】何五千ンのきりやよこゝがわかまつや【豐二郎】ざつと見ンじやふザェ【忠四郎】大ふ大ヲまかに見たまだ殘ッているザェ【豐二郎】マァ歸りの

事さ先へ行ふ〳〵南せんじなぞハモウ見せが引ケた惣仕舞だそふだ【要助】何もくさじまだろふ【忠四郎】角のそばやが角町の大丸だの【要助】こゝの内へゆかたをあつらへておいたつけ【豊二郎】ウ、こゝの内ヂヤア天王さまの時道明寺を二タ樽出したうちよすだれのかけてある内ハ見にくいの【要助】女郎衆の顔がミんな横じまに見へるヨ【豊二郎】立じまを着ているハごばんじまに見へるの【忠四郎】アノ高尾を弾ている新がうつくしい【要助】一ト弾ひけば新造くやふだサア廣小路へ行ッてはい見ンの繪図としやふかげまんじ屋なぞもありが〳〵まづ此かれでハ松かねやかの山口なぞもきれい事【豊二郎】大ふ大いわやといふ内か有の横町にもさゝやといふあんどんが見へるころつハきつい虫うりの艛といふ内だ格子へ木瓜をはさんでおけばヱ、【忠四郎】こゝも大磐屋だの【要助】おらアワるく讀たッヱ大磐石とよむやつさこゝの見せもよくうれた女郎衆がたつた二タア人はかねヱ【豊二郎】何二ッはか子ヱそんなら勝負をしてひらけバイ、【忠四郎】こゝハ何ンだ【豊二郎】そこハ本助たろふ【要助】羅生門敷腕印だのこゝハ惣南だろふ【豊二郎】惣南の風をいのつたハ孔明だ【要助】そんならするけなしといふあんどんを出せバヱ、向ふ角の田村屋ぎりでモウ歸りヤせふヱ、いめいましい何かぐんにやりふん付た【忠四郎】ア、きたないッ【要助】何手ぬくいだそふだヲヤもふ四ッだハまた翌

の晩來やふか【豐二郎】先ッ今晩はこれ切にしやせふドコドン〳〵〳〵

浮世の四時跋

夫つら／＼つらりつと兩國並木こきまぜし華のながめにつきぬけてうき川竹の假の宿おもしろそふにはなし本洒落本見なんし大通さん南陀か氏のしやれ本にちよひとわれらかはしも書く



獅座馴

叙

残座訓は。實に宵床庵の。壁中より出しよし。門盲人價千泉にて。予に授ぬ。熟讀バ滑稽書也。吐悔過錢。しかはあれど。閑生の欝を熨するの端にもならんと。櫻木にちりばめ書肆のため。釣利の花をさかさしめんと。先爲之ものならし

天明甲辰仲夏

鈍々斎章丸

不亦樂乎

爰にうそにはあらぬ。本所のかたほとり。世を避け徳を懐にし。貧を甘じ浮世をざんざぶしのうたてく見やり。我ひとりすめりと閑居に日を送る異老あり。知る人稱じて宵床庵醉正先生と呼あへり其さま儒者にあらず。佛者に非らず醫者にあらず神道者にあらずむしやくしやとして。狸のやふなるおやぢとて。庵内八疊鋪に身をよせて。腹つゞミ打ッて樂しミ居けるに。同氣相引るのならひとて。御江戸うそ八百町に口を利く。早里哥之介とて。當世ならずものゝまめ男有けるに。面にハ。我大通の宗匠なりと。人目にはそらし。内には此醉正翁に親灸し。朝な夕な。大通論の買出しに來り。又賣をして。遊所又ハ若ひ者仲ヶ間ニて。醉通子ともてあふがれ。衆人を塵芥のごとく見なしけり。ある徒然のおり宵床庵に來り言ひけるは。抑とや是迄先生の高教により。大通論の意味深長なる事。頗得るに似たり。然る所去年より今に至りて。世上甚困窮し。いやしきハもとより。貴人又ハ。風雅の人物迄も。寄り集りての噺を聞くに。米高直の噂のミにて。我レ大通の論を。言ひ出んとすれバ。誰有つてよろこぶ顔色も見へず。すでに我道のおとろへんとするのきざしあらわれ。我是をやんぬる事。旦夕に有り。仰ねがわくは。先生ふたゝび大通界になすの謀略を教へ給へ。醉正翁寛爾として曰。善哉〳〵小子ヨイトコ〳〵。イヨサノサノサ。予。つら〳〵浮世のありさまを。觀するに。天道ハ滿るをに

くミ。満るをかくの理。論ずるハさらなる事ながら。世の諺にいふごとく。いつも月夜に米のめしばかり。腹八はいどうふ斗ではくへぬの。貳百の酒ハ飲めぬの。吸ものが無くてハいかぬの。さしミ酢の物が無くては呑ぬのと。すいもあまひもしらぬ。うてん通と言。堅山通人の。身の程を知らぬ者どもが。米のおめしが頭上に上りしより。米穀ぼさつ。是をかなしミ給ひ。方便のため。かりに米穀高直の象をあらわし給ひぬ。是らうてん通のミに限らず。凡の人。近来月ミにゑやうに年〳〵におごり。衣食住色の。足る事をしらざるの。しからしむる所以也。既に一休和尚ものたまハずや。一生の守り本尊ハめしと汁となり。そのめし汁にする處の味噌をやたらに。駄ミそをあげ。又ハ岡場所は月ミにふへ。干物どころか無塩の生まめをざらに喰ちらさす事ぞ。もつたひなき事也。夫のミにあらず近代の人。多くは猿豆口豆のたぐひにも。無益の豆をつひやす事ぞかし。分けて女などには大ぶん有ル也。そこ豆なども無益の中也。豆て勤るのまめでくらすの。まめにはたらくのなどは。入用の豆也。米には費のなき物と思へども。是も随分有る也。分ヶて喧嘩口論の上に。多く有る也いゝ米る。やり米る。振米る。なり米る。にじり米る。すつ米る。こはがりたて米る。是らのこめ無益のミにあらず。人の害に成るのむた米なり。米ろ。是らハ吝き家にてハ。無益の様に思へども。遣ひ能く重法に成る事

もあるなり。しかし地廻り米ろハあしゝ。田舍米ろがよし。されど色くろく。見付きハあしけれども。遣ひ減がせず。江戸へ出るとふへふとつて。そのくせはやくわるくならぬなり。中にも房州米ろハ。はやく虫の附く事も有。物也。有無益の米豆。凡日本國中にとりても。おびたゝしき事にて。米穀高直の世がらとハ成りたるぞ。智者ハ豐年に凶年を忘れぬにより。かゝる時節もあらんとまへびろに。粥くふべしとおしへ給ふを。久しひもんだとずい流しのすい呑。すいするけのすいぐらしに。日を送りけるが。はたして今に至りて。俄に目がさめ。興がさめ。誰異見せねど身代がいけんと。家ごとにかゆ所はさて置。牛馬の喰物を。人ゝ食しぬる事ぞおかし。粥を食する事。けんやくのミにあらず。第一脾胃の補によし。儒醫。貝原篤信先生の。養生訓に出しをある人狂哥し侍る

かゆばられ養生訓のおしえなり

人は嫌ふと我はとくしん

哥之助難じていふやふ。先生の高論是に似てワが意に落ず。かゆを食する事。養生けんやく兩用の德ありとなれど。病身もの。老人樂人或ハ。湯屋のばんとう。などは。しかるべふも存ずれども。其日かせぎの力ワざをなすものハ。喰ふよりはやく腹がへり。其日かせぎが。勤ま

りかねる也。とあつて。からめし。干葉めしハ咽につまり。はやく喰へざれハ。急なる仕事の間がかけるなり•挽わりも余りとくなる物でもなし•麦めしもはやくどかべりが來る物なり•ひしきめしハ水ッぽく力なし•雑水ハ咽がかわき•外へ出てから•茶の錢の費有り•そのうへ小便にたび／＼行てかせぎのさわり有ルなり•そら豆めしハ•すゝミ過て損也•さつまいもめしハなんくせなく•くつきやうへのめしと思ひしに•是もはやく胴がつぶれて•仕方なし•何とぞ右の外にて•食用にたるべき物•あらば•なを／＼教をたれ給へ•醉正翁のいわくア、汝いまだ大通の理にくらし•それ大通の道たるや•當世の風俗言語のミにあらず•今日の食事にも•其理備ハれり•いかんとなれバ•我たつとむ所の•大通の文字をよく／＼•轉讀し見るべし•大きに通ると讀也•左有れバ何にても•撰きらいなく•やミくもと喰ふべし•而后せつちんに至りて見よ•大キに通ゥづる事有べし•是則大通也•もし大キに通じ過キ急に腹へりぬれど•嚢中乏しく錢少き時は•カノ加古川本藏綱目のうちより思つきし•風雅でも無く洒落でも無く•せふまじりのわらびもちを求食ふべし•しかし田舎ものなどには喰はすべからす•はした錢にては腹にたまらぬもの也•其田舎者に附ておもしろき咄しあり•賣り申べし•賣と言て錢には及ハぬ•心遣ひなく聞べし•〽去る田舎者が江戸へ•口すきの爲とて來•夫婦

かけ向ひの家へ。有り付けるに。わづか四五日つとめ。やどへかへりいふやふ。おらハ今の所には得奉公いたし不申と言。親分問にハ。何故共やふな事をいふ。かゝる困窮の時節。大躰の事ならつとめひと云。奉公人云ふやふ。それに如才が御ざるべいか。今度有り附申た。御亭もかミさまも。狐なればおつかなし。おやぶん大キにわらひて云。いかに田舎ものなれバ迚。あんまりな馬鹿つくす。そのやふなはけものやしきへだれが奉公にやる物か早くかへれ去りながら御夫婦とも狐といふしやうこが有るか奉公人有るとも〳〵。おらが奉公に行申てより。今にいたり御夫婦とも。毎日〳〵あつきめしばかり喰申さると云。おやぶんおかしさこらえ。コナ大きなべらぼうで無ひか。此時節江戸中。かてのめしをくわぬ所は無ひ。あづき飯はまだしもけつこう也。はやく歸ッて勤ひ。奉公人云。イヤ夫ばかりで御ざり申さぬ。夕ァも寐しづまりてから。御かミ樣の御申やるには。此やふにつまつて來ては。わしは穴へも這入たひといわしやり申た。おや分ン大キにしかり。あきれはてた大馬鹿ものだはやく歸れと云。奉公人云。イヤ〳〵いかていの事でも歸り申さぬ。夫はかりておじやり申さぬ。御亭のいわしやり申にハ。なるほどかゝァのいやるハ。もつともた。おれもつまらぬ物と思ふて。居る。ァ、どふぞ。尻尾を見せともなひ物しやとの咄し。時世につれ。咄につまるやふな落し咄も有るそかし。武士ハ

能かろふとおもへども。知行扶持とりハ。かくべつ。浪々の身のたしなミも。しん大小がいかぬゆへ。さびれはてたる身のしのき。ふちかしらにもありつかまきの。江戸のめぬきのまん中に。興さめ果たる身なりにて。へんてつ鍔の不仕合。せつぱつまつてうるさやの。浪人の身のはてとくやミ言。なかんつく此ころハ。喰ハねとも高やうし。買ふへき小遣ひ錢にこまり。是てはつまらぬもの。もはや田樂くしもさされぬと。いもてんかくで片けハすまし。左リ團扇にあらで。ひたるひうちハまついもの。無くて一日もくらされぬ物は。米そかし。百性ハなを更麥粟も大かた喰つくし。今は麥二アに糠ふすまを八アのかてめし。されど糠ふすまハ。元來あぶらあかを落す物なれハ。喰へハくふほど胃ぶくろの垢ぬけ。いよ／＼腹へりて。農作をつとむるに力なく。近邊の百性新作の出來をたのしミ。こやしをはり込。つくらんとおもへど。こやし代今までの直にては勘定にかゝらぬ迚。或百性江戸に出。大店方へ行て。こやし代今年より半ンぶんにまけ下さるべし。夫ならバとり申べし。夫いかゞとなれバ。お店も去年よりたん／＼明き。店衆のうち行方しれぬも有り。又宿無しになられし人も有よし。表のお醫者。永居困久様のおはなし。殘る衆とては。わづかの人數。其うへろくなものをまいらぬかして。こやしに見がなく。ハくら入レてもきゝがうすく難義に存し申と。さもくさ／＼としたる顔色にて

ねがへば。家主ふんべつらしく云やう。なるほど尤なるねがひなれども。なんぎをいはゞ此方にもいくらも有なり。お手まへの聞くごとく。當時店子の者ども。大かた欠落宿なしになりたるにより。店賃よほどそんぶあり。されど店賃は地主へ納るものなれば。さのミ苦勞にもならず。ばん錢節句せんこやし代。是らハ我が役徳なり。中にこやしハ店子のものどもハ。不淨といやがれども。我等身にとりては。雪隱大菩薩のふんじん也と。有がたく思ふ也。しかるに店子すくなくなりしにより。なにかのかすり少く。甚以てめいわくせり。其にこやし代はむかしより。常直を以て申つくるに。不埒の願ひ。一リンもまけハなし。コナくそ百性めがとやり込れば。こへ取大きに腹を立。まからずハまからぬですむ事を。くそ百性とはきつくわるといひさま。こへたごひんだかへ。むしやう不淨と打付れば。かミゐ大におどろきて。くさミにたへかねむせびなき。くそ仕合とは何事と。長屋のめん〳〵。かけ付しが。くさミにむさと寄り付れず。鼻をつまんでやう〳〵に。こへ取を引出し。譯を聞ば。一理あり。といふて家主に引ちとらされまじと。こへとりのけんくわにゐんの有る。平四郎が。仲じやくにて。やう〳〵酒になりすましたシャン〳〵ヘッエ、くそのやくにも立たぬ事に錢つかひ。尻のつまらぬけんくわぞと。どつと笑ひに成にけり。此不景氣なる時節に無益の酒を買用をかく事。ともつぶ

れといふもの。しまつな親仁は。おかしき事にても。大きな聲にて笑へバ。腹がへり過るとて。くひしバりわらひ。あくびするにも。心得てするぞかし。職人ハ百性とちがひ。手に藝の有るわざなれバ。よきやうに思へども。是も世間不景氣にて。金持の家にても。世間を憚かり。普しん家作もせぬがちなれバ。日〻に食込ミ。職。食。の音有りながら。其日を過かね。たゝきやめば。くひ闇の夜に。ほうかむりしてこはだの鮓賣と。なれもせぬわざをおしつよく。足場のわるひ大長屋のどぶの中へふミかぶつたり。犬の尻尾をふんでかミつかれたり。艱難してあるけども。其貝ずしもなく。賣鯛のすし一ッぱいで。渡世にせうがを澤山にまけ。錢さへ取れバ。たてはゞかる事も無く。さらばさばのすしと。内へかえれバ。かゝのおまんずしが悦び。つるべずしの。水もらさぬ中ぞ。まだしものたのしミにや。商人ハばつち果しやう有つて。面白きやうに見ゆれとも。大商人ハかく別。其口すぎのかつぎ商人。兩がへ屋にあらで。てんびん棒で食ふせんざひものうりなどは。元ハ高し。大道ハ見たをす。食口ハ多し。地切ハきれる。六でない物を七にまげ。八九の竹の子の皮のやうに。壹枚ぬぎ貳枚ぬぎ。いつともなく。色青竹になり。笹ほさなる身のうへ其うへ。永〻のわづらひ。子を捨るやぶハあれどの世のたとへ。身を捨かねて。籔居養仙老の藥代御種人參の薬人じんのと。お葉打からし。元手も。細

根大こんにて。買出しにもゆかれぬよし。親類にむしんをいへバ。たび〳〵の叓とてきうり切ッて。よせ付ねバ。吐いきをつくいも長いもならず。氣をもミ大こんのありさま。見るもうとまし。かくある事よそ事に見なせど。今日ハしその身。なすハ我身にあるぞかし。ころばんさきのいき杖を忘れず。江戸中足を。そら豆になしてかせぐべし。又肴うりも。世間ひしことつまる時節。其うへうり人ハ大いわしにて。安くつけれバとて。はら太刀魚もならず。獨り身ならバ魚ハうるめいに。内にハ女ぼう子びらめ。ばさんまもあり。どふであまだいな事でハゆかじ。せいご。こんかぎりにあきなひの。かさごをこなさんと。氣を大びらめにもち。下町ハもとより。山の手切ッて。あぢこちほうぼう飛の魚にてうりあるけど。大なぐれにて魚をくさらし。是ではいかんと賣ものをかへ。あさりくらがりより。くれしゞミまで。ばか〳〵と馬鹿〳〵しく。かつぎあるけど。たれ。貝そな人も無。する事なす事。ぐれはまぐりの。かい人のないのはぜひもなし。なんぼう時節がわるくても。醫者ばかりハなくてハならず。まして此節。疫病神がそゝりあるけバ。よかろふと素人ハおもへども。是も世がらとて。まじなひ張札百万遍さんげ〳〵でしまひ。ちと錢のある手あいも。買藥で追ひなぐれバ。隣の寳をかぐばかり。一に俵屋で追出し。二に二陳湯で痰を化し。三に三和散で氣をめぐらし。四に四物湯で血

を補へバ。醫者の爲にハ何ンの益氣湯にもならず。大方買くすりですませばたれ有つて呼に。歸脾湯のやふもなし。儒者ハ從來。賢者ひだるく。儒者さむしの諺あれ共。あんまりひだるく。あんまり寒てハ。子曰の。なまよひ論も講じがたく。孔子た世間となるならバ。酒ハ斗なけれ共。亂ミやくに飲べきに。いらざる一ッ賢人をたて。きうくつな。九さいにしてやられ。今さらこう九也。浮世に四なかひも無手。五はらとは思へ共。時節十なれバぜひもなし。しよせん古文眞寶なる事ハ。できずとあきらめ。臂をまげて枕とし。顔淵のうけ賣をして。こんなくらしが唐にも有かいなといはれた。神道者ハ米高まが腹に。神とゞまりましてより。八百や萬屋の小ばらひさへ。はらひかね。夜ありやけもやめにして。床やミの夜にひとり言。目にもろ〳〵のほしいものが有れど。心にもろ〳〵の。ふじやうぶな山に金が入り。耳にもろ〳〵のおもしろき事をきけども。心にもろ〳〵のくつたく有り。鼻にもろ〳〵の。むまきかはやきなどの。にほひばかりなりとも。飯のさいにせんと欲すれども。身にもろ〳〵の瘡毒有りて鼻にとをらず。口にもろ〳〵の買くらいをすれ共二文三文の物なれバ。腹にもろ〳〵のたまろふやうもなし。是則貧道の奧祕とする。國所不立錢少尊の御利生也。かつ世に米かいしめの事人間のミにかぎらす。世俗福の神と信する大黑天。おの〳〵米貳俵ッヽ買しめざ

るはなし。夫のミならず。なんぞや小兒わらんべ。酒屋の小僧にひとしく。鼠をすき。世間ていハつかわしめと。人間ハよけれど。此鼠事一切禽獸の内にて何の用にもたゝぬもの也。雞は時をおしへ。犬ハ盗賊の用心に成りて。おの〳〵一藝有り。鼠ハ能なきのミにあらず。米櫃のやじりを切り米をぬすミ食ふ事不屆のいたり也。かゝる無益の居候を。つかわしめとなづけ飼ちらす事。神の身持にあるべきや。凡俗ハ福の神と信仰すれども。能〳〵思へバ。大貧窮神也。人にとりては内またかうやく。神仲間でハふたまた大こん神といやしまれん。是のミならず福の神と名づくるには。大ぶんまやもの有るなり。ゆだんすべからず。かの稲荷大明神も是にひとしく。稲荷とはいねなる神なるに。近年ハいねならずものゝ神となり。辨天などゝ色事をして。人の口の葉にかゝり。としまの狐に化されたなどゝ。はやりうたにさへうたハれ。神も心からとて。人の罰があたるなり。此ごろハもろ〳〵の福の神も。路頭にまよひ。古道具やへくらがへせられ。切ミせ女郎見るやふに。買手の客をまたるゝなり。あらおもしろからずの神道やと。寐言のやふにいわれた。又遊里はかくべつ。わけて北國よし原ハ。めて度花街にて。その詞つかひに。きゝんせんといへとも。此ころハかてめし食ふ所も有るよしをきゝんした。やぐら下にいて見れハ。夏もこたつにあたりましよとうたひさわけど。こたつハ元よりふ

とん一まひもたぬ家も有り。又朝鮮長屋なれハとて。めしのかわりに。雞をくわれもせす。なんぼう腹かへつたとて。大こん畠を切ミせにしてかねゝもならす。なんぼうやすくてうまひ物なればとて。舩まんちうては腹もふくれず。又六文にうるこんにやく嶋を。南鐐一片とはあんまり高し。又かげま茶屋ハ。本來弘法大師の流を受て。眞言秘ミつの所をうり。ゐようくわんくわつにくらすハ。大師の御かげ也。さるによつて。おかげの蔭の字を取り。かけまとハ名つけけらしぬ。さあらバ皆〳〵眞言宗をまもり。ノヲマクサンダラを唱ふべきに大方日蓮宗にて。フダダブ〳〵とくらひ付くやふに唱ふる事。いかに商賣がらなればとて。尻口がそろわぬなり。久しく大師をつき出しものにしておかバ。ついには商賣さひしく成り。お釜の烟もたへ〳〵にならん。扨とや町藝者ハ日金がおち。うまひものゝやふに人目ハよければど。去年の夏より大はづれにて。世間ていハ。見へぼうの本てうしで出かけれと。内證二あがりなければ。くらしもさん〳〵三下ッにて。娘ハもとより身だいもころびかゝればあぢなふうぶん。ねじめのわるひ。すぎわひをせふより。商賣をてんじかへ。娘を賣んと吐いきをつぎ〳〵ほにて。いひければ。親子げんくわがはしまりて。きゞすなくより娘が先へ泣にける。歌のふしよりたとへのふしに。下戸のたてたる藏もなしといへど。下戸のたてたる藏ハ。いくらも見れど。藝者の立

たる藏ハ見ず。これにこりて妹にハ。綿でもつミならわしなく〳〵。代ハ末世に及ぶといへども。佛法ハさかんなりといふ人有れど。是も大きにおちかしらあり。何某の大僧正。寺料のある和尚長老などはよけれど。今時の俄坊主妻子珍寶不隨者とあきらめ。火宅を出離せんとにはあらで。本來空と有れバ。此節食ふほと有かたき事ハなしと。妻子を置ざりにし。借錢を店請の置ミやげとし。分限者ハ。金の日やひで食ふなれば。我もたゞきがねの日やひにて食ふへしとたく鉢修行と出かけても。手の內入る人もなく。我なからかねのねもくわん〳〵ときこへける。又とら坊主がより合ての集錢だし。生鮹藥師を丸かぶり。如來のさひどに飯をくひ。勤はせんじゆ觀音で。大酒のんて寐はん象。たま〳〵出家らしき坊主と思へバ。よし町をけつじやう往生の極樂世界とおもひ。又欲にかぎりをしらぬ寺持ハ。此高い米酒を。食おふとも飲もふともいわぬ。如來たちをおさきにつかひ。本堂建立を大やにし。山師の岡右衛門と相談し。寶物をかりこして去る寺にて四月卅二日より。開帳をせんとて。まつ仕用帳をこしらへしを見るに。和尚緣奇の趣を好んで曰。中尊に安置し奉る所の。なミだ如來ハ。後白弼院の御自作で御ざる。ひだるひにかゝらせ給ふ圓光當前大じの御影ハ。何もくわんばく氣張公の御筆。右にかけ奉る女人成佛の御ッ誓紙ハ。いんらん上人の御筆。次にかけ奉る。拾六文らかんの繪ハ。御

なら茶の院の御寄附で御ざる。外にあわ雪の御さいが御座る。御信心のかた〴〵へハ。八文ッ、て出します賢約殿の額ハ。かての小路殿の御手跡。しるこの尊の象ハ。砂糖つぎのぶの守り本尊でござる。又こなたに安置し奉るしやれとうハ。大通寺の寶物なりしに。夢中に當寺へわたらせ給ふ也。よし原〳〵の御みさまハ。錢を上人の御自筆でござる。又更かけなんばん退治の圖ハ風鈴院殿の御寄附で御ざる。以上。困窮山。空腹寺。執事と書たり。かくのごとく世をいとふ出家すら。利欲の爲に法をうり。佛の御名をけがす事。もつたひなき事ぞかし。世からの惡きを惡む事。皆是智のくらきなり。生有れバ死あり。明れハくるゝ。暮れバ明るの理なり。必世をうらみ人をうらむる事なかれ。かゝる静謐の御代に生れ合たるこそ。有がたき事ぞかし。我ハ是より名利を捨。誠の道に入るべしと。すくにあたまをするめの附やき。夢まぼろしや粟餅の。うき世の中と悟り得て。行衛知れずに成にけり

残座訓　終

鈍九齋文蒙先生 著

近刻

狂哥ひとり相撲 出來

狂詩七才子 嗣出

教訓 力足踏止傳 嗣出

天明四年甲辰五月 繁榮堂藏版

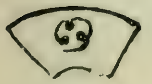
古琴乐论文

序

天竺の婆羅門組ん。偏袒右肩の片はだぬいで。せんだまとろぎや何ンの事だとはり込ゞ。もろこし燕趙ひかぬ氣の俠者は。ちんぷりかくさいちんないらう。しやぐわん〳〵でけつかれとほざく。わか日本は柔和理と。あなにえやの味事から二柱の親指か。國〳〵の小ゆびをうこ給ひしより。二千ン年ン來おこごしをすへた蒼生。唐天ン竺にけちりんほどもひけをとらぬ太平樂。その太平の御代につれて。此頃はやる狂哥師の。とつとむかしのお師匠さん。曉月房が酒百首に。醉てのち太刀ぬくハれ酒の入太平樂をまふかとそ見るといふ句があるか。太刀をぬく

だけまた野夫だよ。拔べき所をぬかりんと。ぬかぬ太刀の高名ハ。虚はないてふ本ン所の親分。相生町のはへぬきの。桃栗山人。太平樂の一巻ンに。ちよと兩國のはしつめまで。出てもらハふと聲懸られて。かた山の手も足もない。よもやに懸る巻のはしに。是がじよさいの序の字でも。ないじやァ〱ないか

甲辰初春　　四方山人



前漢、東方朔字曼倩平原厭次人武帝擧方正賢良文學材力之士侍以不次之位四方之士上書言得失自衒鬻者以千數朔上書曰臣少失父母長養兄嫂年十二學書三冬文史足用十五學撃劔十六學詩書誦二十二萬言十九學孫吳兵法戰陣之具鉦鼓之教亦誦二十二万言又常服子路之言年二十二長九尺三寸目若懸珠齒若編貝勇若孟賁捷若慶忌廉若鮑叔信若尾生若此可以爲天子大臣矣朔文辭不遜高自稱譽

東方朔ハ小でつちのころより兄嫁の居候となれと何でも角でもすいた所ハない男としまんたゝぐ天子につかへわが儘に身をたもつ事これ太平樂のはじめならすや楚人ハ沐猴にしてゐいくわんすと漢の高祖があくたいハ毛さる松とのとなるへし一トふしや竹取物語に大伴の大納

言の詞にかくや姫てふ大盗人のやつか人をころさんとするなりけりとなんありものゝふにいたりてもかゝるためしかぞふるとも筆におよばし片かハせう負の長か半源平の戰ひに平家の侍大將ゑつ中の二郎兵衞盛つぐふなやくらにつゝ立上りこん日よせ手の大將いま一度承ハらんと罵りける時に源氏の方ゟも伊勢の三郎義もり遠からん者ハ音にもきけ淸和天皇十代のこふいん右馬の頭よしともの八男けんびいし五位の尉源の義經なりと聞もあへず扨ハ平治の亂の折から野間の内海において長田にうたれおふちにくびをさらされたる義朝がわすれかたみ九條の院のそうし常磐がはらに出生なしたる牛若といひし小冠者なるがくら馬山に登つて兒となりしかこがねあき人の從者となり奥州へ下りしと聞たるが大將とハおこかましやとはらあしくものゝしりける義もりこらへずこハ非禮なる過言かけまくもかたじけなくも舌の根のかわかぬまゝにかくな申そ左いふおのれハ北國となミのたゝかいに打チ負からき命をのがれんとこつじきして都へ登りし越中の二郎ならんといひければ盛次いふ樣平家より所領を賜われバ乞食したる覺へなしさいふおのれこそ伊勢の國すゞかの關においてねん貢せうせい追おとし山賊夜盜の張本ゝときゝおよぶとたがいにあらそふ八しまの言葉たゝかい是すへの代に乞食野郎盗人やろふといふ始め成へし今四つの海しつかなる御代にいたりてハ喧嘩口論のうれいなく短氣りつぷくのやから

をバやほといひ又ふつうとせうす大言じまんに五割の利足もいですあくたいハあくたいにてかへせばはやりうたしらぬものゝ夜道ゆく連となんぬ禿をしかるやり手ハ黄泉におもむかぬと餓鬼ども〳〵といつてわれもがきの穢坐につらなり大道の馬士ハ片手にれいこくをもつてひよぐりながら馬をべらぼうやらうとしかる是馬鹿といふ文字にふんあらんか乞食をこじきといへバこじき大きにはらをたてども小やろふのあくたいにはつつけやろふといへハはつつけがものをいふものかといわれ相手もこまつてまたこく門やろうとのゝしるおれがこくもんならうぬも極門だと手間ひまいらぬへんとうごくもん〳〵のあらそいハかんにんすれとも一チ文たりぬ百の錢そのあらそいハ君子も甚やかましし行ちがひの船ハとりかぢおもかぢのまちがひよりこわたかにのゝしりすハ事こそと見れバ川上川下モへこぎ行ながらまちやァがれ〳〵とわかれゆくハあやまちなき支たくなるへし此ごろ狂歌さかんにはやりひねもす夜明しとりがなくあづまのかたに三十一文字ねぎも出家もやしきも町もつどひあつまればしちやになくうぐひすちやのあわせをきて根津をそゝりてかへるわれ〳〵までいつれもたわれ歌よミ侍る今ハた寳合となづけ太へいにたのしまんと家多錄ハ竹枝爲輕よりおやハもとの木網店かしらハ四方赤良朱樂漢江しりもちハ鹿津部眞顏加保茶元成不佞に狂文のこのめどももちろハ一ッせういりのふくべもおとや

かましくうつちやつて手で水のみのてうなこんすみかねも錢金におハれあくたいハお江戸の花太平らくの卷物と題して考へれと唐人の太平樂ハ切落へおちす通人のたいへいハ洒落本にくわしおどけはらつてまたはらつて高天が原のびんほう神かつたいせうりやう死人やろうのあくたい古物なれども見たをしも直に踏ずしかありとてやミなんもほいなくおさきまつくらこけおどしにはりこまんと趣向ハなにわの男達でハなけれと橋づめまて出て見れハ廿四五な若ひ者がかミゆひ床へはいりながら

親方まだこむか一ッか二ッならまつていべいどなたもごめんなさいァ、此あついにミつでもんでもよかろふにごふてきに湯をハかすの一ッぷく呑べいコレせんどの湯やのけんくわハすんだかあれもおれかいるとむつかしいよァ、アノ角力の札ハこつちてあづかつてかけるか毎日大きな世話なもんだのそのかハり一日ふつかハたゞ見せるたらふすまふもおもしろいやつよ一チにち見るとまいにち見たくなるハなむいらもちつともむとずいぶんまくの内ぐらいにハなられると額殿がすゝめたけれとめんどうだからよしにしたァよこねをやまねェまでハてへげへなやつらハぶつぼうりだしたわなちつとづゝやつつけておくとばかにしろゝねへのふそふじやァねへかへすまふへも顏をたさゞァなるまいコレとゝを此ごろハ女郎かいよやすくれねへよし原サお

と〻いかんのんさまからかへりに八と源とおれと三人でとまりにいつたァナすつとそ〻つてあるいたらい〻たまかあるから買ふとおもつたら八やろふがこ〻はよしてくれろおれがもちつきにきた内だといつて とほふもねへちんころのくそによつたよふに ほう〳〵をまごついてやう〳〵ふしみ町の下モへ来たらあのやろふか格子へくつついていのきゐ〻ねへわなこれこ〻へあがろふ二人ながら見たてろといふからとほうもないこけが五百らかんでおやをたづねるよふに見たて〻あがつたら酒がづふくらわれねへ二百のさけを壹升わかいものにかいよせてのからぴんぞろから茶わんでかつくらつたモシちつとのミねへと女郎へさしてそばへよつて貞を見たらきかつせへい〻ちく生じやァねへかこまァかなのちんきんぼりをミるよふなあばたにそばかすだらけどふこふあんのはきだめを見るよふなつらだ夫でもい〻かとおもつてこわらしいこんな大きなもいでとつんとしやァかつたおれもくつとはらがたつたからェこわらしいこわらしいよいふ風でもねへよし原にいるから女郎たとおもふがかやわらにいるとおふかめのはけ物たと思ふ大きな口だこわらしいといふ茶わんよりかぶとばちで大ふくをのむふうだそしてまァとんだ所へまミへをつけているのコレおめへのひたいへきわずミやまこもすみより神田川の常ざらいのつちでうめると床見世を十間斗ハ願われるはなしのよふなきいてあきれる見てびつくりする

とからすとふくぶつくらわしたらきのどくかつて八やろふがコレおのしハ場ぎやふをしらねへもんだあの衆もくがいだそんなにおろす事ハないといふからなんだくがいだこやすがいが聞てあきれるわいぶう〴〵貝かあさり貝あわび貝かおきやァがれあか子のばゝをさらいハ仕まいしときよくつてやつたらイヤサおのしでもねへと云もんだかんにんしやれな男といふものハかんにんが第一だ越後のけんしんハ千人のまたをくゞつたと云ハおのしハしるまいとおれをはじしめたあのやろうハ夜こふ譯をきくからとほふもないものしりたハなてェ〳〵よく何かをしつてるこつちやァないそふすると八か買てる女かいふにやァかんにんしなんし八さんハおとなしいがぬしハばからしいといやァかつたェなんたぬしやァはからしい稲荷橋のかつぱがいかさまにかゝりハしまいしなんぼ八を大事にしても九ハ大引へふミさげられる七ハうける事かならねへから一ッ生仲藏の氣づかいハないうつちやつてくんなさへとはりこんだァきかつせへとなり座敷に居たどこのはぐさき おひかしらねへが いけねへ やつよコレェ十方もない宵から いけそう〴〵しいやつらだ寢られるもんじやァねへとぬかしやァがつたそりようきくと源めが合てんしねへあいつハの〳〵だまりぼうだかごうてきにつよいわなかしらかまへの五十五かんちうばらにかるくかつく八町堀の熊藏どんや一ッ日の金兵衛殿と一所にあるいたわな石をもつのハたつ

しやよ此中も開帳の迎にさこはて大幟のとら綱が切てだれも持人かねへにあいつかどれおれが持ふとつてくつと〳〵はだをぬいたこのごろハ仕事にハ出す眞白だとう脊中にとゝのふといふ字をいつぱいになつているわナてうちんやのむすこか書たがよくかいたよ何がのぼりさほの木をぐつとひつつかまへてだッれも手をつけるなあふないそ〳〵といゝながらかァけて壹丁ばかりよおとゝしのまつりにもいゝ川まちの坂でおいらがてうの万度を大風のふくにぐつとつつぱつて千鳥にあよんだわなごうてきしやァねへかそいつが團十郎をおこしたもんたものおたまりやァねへ女郎ともがとめたらあいつもひどうな事もならねへからコレェとなりにいるはつつけめなんだやかましいとほつもねへやつじやァねへかくそがあきれるハいと握りこぶしではくてうの徳利をほかァりさおいらもきもをつぶしたァなとなりのやつもなァんともいわづたまァていた夫から女郎もこわもてにやろうめがいろ男よまたうそじやァねへが何所へいつてもおいらハ十いちやるもんじやァねへきかねへと云せうがにやァにんそうのいゝやつがかいたからしじやァねへかたくわんのおもしに茶袋かどうらくむすこに妹のいけんこけおどしの高飛車に八まんならくの白身ばんから赤鬼黒鬼かとらの皮の火事ばおりにかな棒ひいて十王十ッ躰がさいのかハら上納やしきといふてうちんをとぼして來てもこハがるのしやァねへのふ親かたそふじやァ

ねへかァ、そこハゆつてしまつたかおれもゆはふコレざつとたばねてのひげはかりすつてひたいをすつつけてくんねへこれハしたり人がらのワるい四文錢をおつことしたヱ、どろだらけにしたコレゆふべもめくりで壹分かこればかりさいゝちく生じやァねへかヲ、源がとふるハコレヱくワりやァどこへ行きとうこりにゆくかおれもゆくべいちつとまてコレ源ヱ、待ァ、しよにんなやろうふだ

右條々高聲咄無能雖狹客一言吐名言催笑　玄々亦玄是言友達呼不引一寸

不透五分依利不堪忍　言亦龜鑑也可恐重々時々口傳

無駄天號後胤白

十方茂内大謙張込公

狹家代々相傳

駄多大謙酒上笹巻

狹斜身中將吹貫朝臣

塩屋自慢　　虛言

于文錄十六兵衞

はきためから

寅のとし

烏亭焉馬狂名

野見てうなこんすゞ金

すみさしの尻にて述之

狂歌
繪入　狂文寶合記　全三卷

此書ハ當時東都狂歌之達人之詠中
并狂文章を加繪本となし春の歴とす

江戸橋四日市
東都書林上總屋利兵衛

二日醉危解

序

北溟に魚あり。化て鳥と成其名を錦江鳥といふ。おおひしげる森田が芝居に羽をのばす。片翅は名にしおふ。夜が明たら巣を作りの。重助といふ大鳥に。大坂下りの名鳥を。あはせて古今三鳥の。でんがら〳〵と櫓の太鞁。四方に響く評判の。尻尾にとりつく慾心者は。頭に聖代の御陰を蒙る。白鳳堂の鵰親仁。お三茂兵衛と梅川の趣向にたより。無駄本を書といふ。まかせて置ろと鵜のこに吞こみ。鶺鴒鳥の口から出次第。二日替りの二日能を。とりもなをさず外題に居。大入盃の八はい機げん。されども生酔本性たがはす。つゞりし文ゝ句のつまり〳〵は。

聞はつゝたるせりふ附の。正のものを正でお日にかける。丹波の生どり僞なし。見かけハ晒落本世界ハ狂言。鳴聲鸚鵡石に似たりける。鵺のやうなる化鳥な書キ物鴛鴦のつよくわるひ所ハ木兎曳の日引袖引笑ッておくれ〳〵

天明四　三月

万象亭述

本舞臺かざり附二の口村在所の道具幸四郎桝とく幾藏皆様御存のごとく齋宮太夫淨るりにて所作あり

上るり〽たがひに親ともわが子ともいはずいはれぬ世のぎりなみだわきづるみなかみと身もうくばかりになきかこつ

ト三人なきおとすと切まくの内にてばた／＼人聲する三人びつくりする思入

いく藏一アレ／＼あの人こゑわたしかにおつて此うら道の小川をわたり籔をぬければごぜ街道はやう／＼

桝とく一だん／＼のおこゝろざしありがたふ△リ升ルとてもの事におやぢさまのお顔をちよつと

トめんない千とりを取ふとする

いく藏一ア、これ／＼ちよつとでもかほみてわ妙かんどのへ孫エ門が立ぬみれんな事いはずとも此ところをはやう／＼

桝とく一サア夫ハ

いく藏一兩人さらば

ト花道のかたへ行キ立とまる

上るり〽子ゆへのやみの目なし鳥平沙のうとう血の涙

ト上るりの内に目かくしをはづしふりかへり幸四郎と顔を見合せ思入あり

梅川忠兵衛
おさん茂兵衛

ながき親子の別れにハやすかたならでやすからぬ心のこしてわかれ行〳〵

　トいく藏切まくへ這入と上るり切レる夫をきつかけに若い衆二人とり手の形にて出

二人 一忠兵衛うごくな

　ト幸四郎桝とくをうしろにかこひ見へ

四 一まつ今日ハこれきり

打出し

○あすハとうから〳〵と打出しの太皷につれ押合へしあふ老若男女【木戸番】つゞいて出ませう中木戸へ出ませう新狂言の評判惣役者のひやうばァん【見物】ァ、おもしろかつた桝徳ハ奇麗な物でござります【侍】いかさま十日の見る所十指のゆびさす所たれが目にも美しくミへます美人大坂より下る龍さいはじめて忝狂言の大當リてござる是あとな人あまり押まい鞘が割る【女中】徳次が着て出た萠黄の小そでハ能ッたねへ上方風の上づまさ【つれ】アイサ髪も上方ふうでいつそうつくしうござりやしたおばさんもつとしつかりとおひろいナ【おば】さッき茶うりめがしたゝ足をふミつけたからひきつつて歩にくいヨイタ〳〵【きやん】こんだァ高麗や

が強勢に骨を折ぜへ茂兵へなんぞと來ちやァならびやァねへあん美男おとこのとび出合におらが町の大纏がかつがせてへなんでも此お山にやァ高麗や島にトの丸を付て對に着やうぜ【つれ】こいつァいゝ思付たサァ是から原をそゝるへい「二人へ奈良のはたごや三わの茶やッサ〇群集の中にくつきりと水際のたつ色男黒龍紋の羽織に花菱の紋墨河小紋の小袖わきづけ胴亂さめ鞘の御太刀をきめ四町めの舟宿松本屋へは入【龜や忠兵へ】おはさんどふだ又茂兵衛が引かけたさうで明陶が脊くらべをしてゐるの【松本や女房】忠さんお出なさりやしたか昨日梅川がからおみが參りやした　ト大小の仕つけてある狀さしから出してわたす【忠】土橋のけいせいが名に梅川もおかしいよ小吉とでも替させやせう　ト云ながらふミをひらき　へしばし御めにかゝらねばわからぬ事遠からぬ御ともじをまつち山にて候。おきやァがれけふハ京傳と勘彌を見物にいつたかとれもよくするよシタカ扇やの新たちの見物にハ見つからふと思つてたふききだつたァノ夕霧の幕ハ十介が墨河で立た狂言だからあやめがおかねなんぞハ大せうちのやうすだつけ【女房】わたしらハ燈臺下くらしとやらできだ見やせんが德次ハ大ぶいゝさうでござりやす【忠】近ン年の稀ものさ三桝大五郎が弟子だから立役がいゝげな上に居た內。伊勢物語の豆四郎や忠臣藏の勘平ハ當ッたさうだ秋ハ何ンぞ立役をさせる歟。作りが故一に　中村重介か事　神田の隱居　狩田喜來か事　じやァ秋狂言もしめた物ンだ【女房】

紋ハ矢車のやうでござりやすねへ【忠】何さありやァ片かなのトの字を九ツよせたのさ。ソレ德次のト九の思入とミへやす本ンの紋ハ霜の丸感心ンハ幾藏だ大友をづふでする。功者なものハあやめ。高麗藏もとんだ上ッた。幕の間ダに樂屋をぶら付て見たら下座手合の中へ這入て五郎市が三味線。あれも久しい物ンだよ。ホンニ三弦で思ひ出した源次に賴て置た三弦ハ張替させてくれたかしらん。御屋鋪から賴まれた踊を藤間に誂やうと思つてこいつも忘た【女房】夫ハ日本橋のかへ【忠】インニエ南八丁堀の勘左エ門さお袋のおすてが弟子の中で。直次。おせい。娘分ンのお梅なんぞハやしき方にもいかゐ事ひゐきがあるいな。それから高麗やが部屋へいつたら文魚殿が來て居て大ばなしさあの人もきつい錦江びゐきだ。何ンのか噺しの序に新藏が覺がわるいとつて高らいやが小言をいつたつけ。夫だが水戸ッぽうであれほどにうたハふと云ハよつぽどきついやつだこつちの方ゥでハ善こうと（坂ぜんじ いな）赤坂の三こうが（坂東三木藏が事）が き大將で。中二階の手合を相手にして。三弁がハじまつてゐた（三弁とハ穴一のやうにたますを書て錢をなくろあそび也）素顔でも見たが桝德ハいゝつらだョ。留守居衆にもひゐきが出來たげな（ト噺しのうち帳頭茂兵へこうし嶋のひろ袖布子きぬ紅の丸ぐけひぢりめんのふんどし今日がさめたとミへて二かいより下り）【茂兵へ】忠公ゑンハ利かただと思つて女形ばつかりほめなさらァ【忠】今お日ざめか【茂】モシ此頃お前ゑンがそろへに出しなさつた道成寺格子の浴衣が土橋中とをりやし

た［忠］アレハ京傳か作の小紋裁の中の形だ。朝比奈なんぞハ手拭にも染たよ［女房］こゝでお唱しなさるよりあつちへお出なさんやし［忠］勿論さ。時に汐がそこりハ仕ねへかの［茂］今夜ハ大汐だから河岸から乘れやす トいひながら付たこしらへに行たぼうふとんを出す［忠］ふとんハ入ぬへ［女房］ヂモ今夜ハお寒ゥござりやすから トふんだかたにかけ河岸てうちんをさしだしておくり さァ召やし［茂］もやへをといてくんねへヱ［女房］ちやいたいき おしづかにめしやし［忠］いつて來やせう［茂］そのちやふねハ出すのかァ、夫じやァかハらねへ。棹を廻して鯔ざしにして來ねへ。おもかァだ〇船中のむださま〳〵あれと略す。とやかういふ内深川へ這入土橋の河岸へふねが着て候［茂］今夜螢勢に船が着ィたサァお上なせへし［忠］とんだ早くきた火繩が壹本半ハ立タなへ ト云ながら岡へあがり芳澤やの切戸口に立のり鳴子を引けばアイといふて娘おさよおきのぶらだともしこつまりぼん〳〵鈴まへびん〳〵切戸ぎり〳〵とあ［娘二人］ヲヤ忠兵さん御出なんしさつき迄叶兵さん善局の遊民さんたちが御出なはつたッけ［忠］そんなら見そこなひや箱根も來たらうノ［さよ］イヽヱ吉さんが來やした［きの］茂兵へさん能來なつたの［茂］よくも惡くもなへてうど飲かげんサ［忠］ありがてへこいらも茂兵へでんだ ト云ながら見廻シへ上る芳澤や内義［お玉］能御出なせへした今夜ハお寒ゥござりやす［忠］夫さ。あじに寒がらせる晩サ トわきざしをわたすお玉うけ取小づかを一め行ふとするを［茂］お玉さちよつと見せなへァ、能脇差だせへこともしやァ氷川の祭に出るはづさ其時かしておくんなんしこいつをさしてぐつと万ン度を

持ッてあるきてへ喧嘩(けんくわ)なんぞが有ルと差てゐる是で何ンでも【忠】すつぱ抜ハあやまるゼへ【茂】何さめつたに人を切ッてたまる物ンか人を切りや死(しな)にやァならなへとても人を切なら三四十もふつたぎつてしんす【玉】ヲ、いやな事切ラれぬ内に仕廻ましやう　ト脇差を持廊下へ出る茂兵へもつゞいて出【茂】梅川さんハあるかの【玉】梅さんハこつちに出て居なはるハな【茂】ソリヤァ市川やの奴膝兵へが乘て來る中の嶋の八右ヱ門だらふ【玉】よくしつてるの【茂】何ンにせへあの子をちよつとよんでくんなへ　ト云ながらかつて行【忠】おさよぼう。要介か文キを呼でくんなナ【さ】きゝにやりやせう　ト口をかけてやる此内皈もの酒いづる忠兵へハ梅川が八右ヱ門に出たと聞てふさいでゐる茂兵へハおきのな相人に酒のむ所へおさよ來て【さ】二人ながら江戸へ行やしたから大坂下リのかのお三さんにしやしたョ　ト茂兵へが方へゆびさす【き】あの子ハ茂兵へさんに大ぼれだよ【茂】とんだ事をいつた物ンだ。わしやァめくりのもちくいと女ハきついきれへだ【忠】茂兵へが女きれいハ通ッた物ンだ。せんちやうと新次が男の小町だといつたも能(いゝ)じやァなへか。そのむだかとんだ評判さ【さ】評ばんといへば山のお開帳が賑でごぜへす【忠】娘の口からお開帳もおかしい【さ】又そんな事を【き】おさんンコゥあの佛さんハ何ンとかいつたげのフ【さ】フゥ待ねへよ何ンでも覗(のぞ)くやうな名だつけヲ、それ〳〵如意輪(によいりん)さんよ【茂】こいつも大わらい【忠】ちやん〳〵ぼうずハふるいゼへ　ト云所へ内義出る【玉】茂兵へさんン梅川さんか今ァノ八さんの方をもらつて來なはる

よ忠ないたゝきやせう〔忠〕さらバけんしませうもかてへやつさォンニお玉さんお前ハ狂哥をよむさうたの〔玉〕ヲャくとんだ事ばつかり〔忠〕詠なへものが澤邊のあや子と云狂名ハナゼ付やした〔玉〕あやまりやした ト云所へげいしやお三とたいろつむきにもへぎぢらら金なしもうろの帶をしめ慶ナふう、つき袖にてちやんと立テ 〔三〕おとこに誤ると云事があるものか肝でいかんセく〔皆ゝ〕下リ引〔茂〕桝德しめたぞ〔三〕わしがやうなものを桝德なニと見立ておくれたかト そバへよつてすへる 〔茂〕この子ァおれさへ見るとわらび餅の樣にぐにやついた物だ• 燒鰑のやうにしやんとしてゐなへモットそつちへくうと寄なへく〔三〕そないにひつしよなふひかつておくれな〔茂〕螢の臀しやァあるめへしひかるとハ何ンのこつたナ〔三〕ひかるとハな• 鑓こゐ出してひかることいな〔忠〕ひかるついでに天拜山を唄て聞せねへ〔三〕あの哥をおまへどふして知てしやェ〔忠〕中洲の瀧藏じやァなへがおらァ上ミかた哥がきついすきよ堀江丁のおいほやおかのをとらまへてハうたハせるのさ二人ハめうだのゥ〔三〕おまへもゐふらい與太郎云じや ト云ながら二みせんを出ス與太郎とへうそつきの事 へ柔和の形相引替て朝の方をにらミつけ物くるわしく立給ふ白太夫ハきよつとしてこゝからねらましやましても朝の方へハとゞきませぬ御持病が起ッたら悲しうござると取つく梅王• はねとばし早天帝の迎ぞと梅花ふくんでぱつと吹ばたちまち雲井に鳴いかつちの音聞ケバゴロくく跡白浪とぞ成にけりヲ、これい事

〔皆〳〵〕ヤンヤ〳〵〔茂〕こいつハ小きミのいゝ唄だ〔忠〕跡でゆかりの月か鳥部山が聞たいね
ト云所へ梅川しと〳〵來る〔梅川〕忠兵ンよく來てくんなはつたの　ト忠兵へがそばへきてすはる忠しらぬかほしてだまつてゐる　何ンだかねつからわ
からねへお玉ゐモシおりよげへながら。ついでくんねへ　トつゝちやわんを出ス〔玉〕靑ッきりやァよしねへ
毒（どく）だ〔梅〕毒なら當リやセう當たら死やせうれな。いつそ死ンでしめへてへ　ト手しやくでのむ〔忠〕八幡
樣の。こま犬にうなされて今日が覺たと云頰（つら）にてう水（さ）をつかうと思つたらあびるのたのなるほ
と下戶の寄ッたハやぼな物ンだよ　トなんだかさへぬざしきのていそこへぬからぬお玉がきてん〔玉〕ちつとあつちへまき直して咄シ
やセうサァお出なセへし〔忠〕インニヤもふ一ッぱいのまふといふも付わたりのセりふつけう
ち連立床へ行〔玉〕おたばこ盆に火ハあるかの　ト云ながらあんどんたかき立　茂兵へゐ此行燈のむだ書を見ねへ
芝居なら桝とくが書置と云所だ〔茂〕ムゥ帆柱や二ッとまらぬ明からす〔忠〕ソリヤァ大橋へ
くらがへした金俳お角が發句だの〔玉〕さやうさ〔三〕こッちやの方に御ンまへゐなら死ンて
もいとひ申さず候とふてあるわいな　ト云なから茂兵へが方をじつとミる〔茂〕とんだいやミな文句だのそしてわりい
手だミゝずのたくり釘のおれ　トむかふの二かいて齋宮太夫が聲へ十一（上るり）の書ぞめに人形の首（くび）を書ならひ十二のくれ
ハ友だちに子供頭とたてられてはや十三の正月ハこりや又何ンのこつた何ンのこつたェ、わや
くむすこと浮名立〔大ぜい〕やんや〳〵豐後の氏神齋宮（いつき）さまゐ〳〵　トほめる聲聞へる〔忠〕いつきが來

たきうたの【玉】むかふに駒ゐが晝から御出なはるから芝居が濟と直にきやしたとさ【忠】なるほど清水やれ（いつきが家名）豊後のとう／＼だ（ト云内鳴子がぐわら／＼）【玉】おきやくださうだちよつといつて參りやせう【忠】時にお三ぼうれどこにゐる【三】わしが今ゐる家れな。はやりうたじやないが雨かふるとざんざ／＼、ともりたらひを當るやらすりばちを置やら月夜ざしにれ月かさし込風が吹バ行燈がきえて時／＼の家鳴。むきれ北向床れひくし二階れなしの平屋だて。いやもふ根からやくたいな所。長屋の古い人の咄に聞ば夫もそのはづ八十年も根繼をせぬ大破におよんだばけ物長屋なが居したならどんなめに逢ふと思ふていわんすさかいあつこの龜吉ゐン所へ相店には入つもりじやわいなシタが茂兵衛ゐン孫店ても家うつりにれあづき粥。たかざなるまいな【茂】何さ相店住であづきがへれ手重い餅を買て配ても十五六軒。壹本じやアたらねへ。そばでも一ツれやられなへ二ツづゝやると五百五六十が物ンだ當世セけんなミに輕くするがいゝ。夏いりに仕なへな【三】そないに眞ン身に云て下んすと便りすくない身にとつてれ大てい嬉敷こつちやないけれどとてもたのもしうして下んすなら【茂】ヱ、又いやらしい日つきをした物ンだ（トついとわきへよる）【忠】いかさま手めへのやうな女ぎらいもなへもんだ【梅】そんな御客がほしいもんだ性の能い【忠】手めへが耳がいたからふ（ト梅川をミかへる）【茂】その替リにやア力がありやす朝飯前

に五十メ目の石を手玉にでも取やす〔忠〕ほんに石で思ひだした手前に聞セる咄がある或所に力のつよい金平ラのやうで顔が色白で女ぼれがするけれ共どふいふ因果か廿八九になる迄女の肌をしらぬとさ〔茂〕ハテ似た事もある物ンだね〔忠〕其男が箱根山を通つたら西の河原で子供が大ぜいコレ〳〵貴ゐハ女に肌をふれぬからおいらが仲間だといつて取ッ付たり引ッ付たりとふ〳〵さいのかわらへ引こまれてしまつたとさ〔茂〕おらが様な野郎でも西のかわらへ行くのかねへ〔三〕そんなきミわるい所へ行んセぬやうに逐ういなるわいな（トうしろからだきつく）〔茂〕エ、お三ゐンよした〳〵（トつきはなし）何ンの事ッた取ッ付たり引ッ付たりおらァ女護の嶋より西の河へ行方が面白かろふイヤ忠ゐンモウお休ミなんし〔三〕仲人ハ宵のほどさられ御いとまハイ御機げんよふ（ト二人へ立て行梅川へさつきより物も云ずうつむいて夜ぎにもたれゐる）〔忠〕何ンだか今ン夜ハふさがセるのムウ聞へた八右エ門に出てゐる所をむりにお玉がもらつたからそのあたりであぢにするのかいゝハそんなら爰にゐずとも出てうしやァがれ（ト云さま手先を取）〔梅〕アイタ、、〔忠〕ホウこりやァなま〳〵しい血だァ聞へたいけもしなへで剃刀をいぢり襟をするとつてやつたのか（ト手先を見てむつとし）ついした事と思ひのほか・こいつァあま口な怪我じやァねへ起請を書たか爪をはがしたか〔梅〕指を切ッたわいな〔忠〕コレエ、指をたとはがり輕く云ッちやァすまなへとんだ重ィ事ッたぞよ〔梅〕サア今迄ハ切ラぬ

指じやけれど【忠】誰にやつた【梅】八右ヱ門さんに【忠】何がとふしたと。そいつ八右ヱ門と云ハすかぬ客なれども内證の都合にも成から合せて置のだといつたから。さうでも有ふとうつちやッて置たがそんならヲなァ木綿買より絹買と此忠兵へをつき出して八右ヱ門に乘替るのかコレエヘ我とおれが事ハこの土橋中でしられねへものハねへ入舟の湯ゥ屋でも此頃の口づけハざんざぶしと拗彌の評ばん三ッめにやァ手めへとおれが事の噂夫に今さらこんなわけの客が外にあつちやァ頰がたゝねへわへェ是此屛風の畫を見やァがれ牡丹ハ花の富貴なる物菊ハ花の隱逸なる物蓮ハ花の君子なり。僧正遍照が哥にもはちす葉のにごりにしまぬ心もて何かハ露を玉とあざむく。あざむかれたる忠兵へが心ハ濁き蓮の花。梅川さらばといつたらよかろふがさうハとるめへ譯のたゝねへ内ハこゝを出さねへ情なし女めふんはり女へよくおれに天川見しやァがつたな（ト身をふるわして齒かみをなす此の間では富士田新藏といふ聲にて梅川の新うた）へまことなき里の習ひと世の人の譏すことい　情なや買がありやこそさりとてハ【梅】忠兵へさん嘸腹か立やせうおまへのが。そんなもつともわたしが指を切たのハ今唄ふ文ンの句の通り【忠】誠なき里のならひと云事か【梅】イヽエじつがありやこそ指切ッた【忠】ソリヤァなぜ【梅】なまだをうかめ親たちにゆづり受た此からだ勤こそすれ體に疵をつけぬをせめての孝行と思ふてお前にさへ切らぬこのゆびをナ【忠】八右ヱ門にやりやァがつ

たか【梅】やつたればこそ四拾兩此金取ッて下さんせ（ト金を忠兵へがまへに直く）【忠】先月の中頃から廿日あまりに四十兩遣ひはたした茶やの下養子のかなしさにハ・お袋の妙閑さや手代どもか見はつてゐる故才角が出來兼たけれど・しがないやうにさげすまりやうとかくして居たが・そんなら夫を聞出して【梅】アイどうなりとしておめへの足のとまらねへやうにと思ふからこんな事を仕やしたれなとんだ付カねへ噺しだがわたしが爺さン婢さハ京の六條珠數や町に居なさるが其二親にかへてもおめへを大事と思ふけれどもおめへハその半分にも思つてくんなんねへなぜ・かう〳〵云わけだと噺し合てあかして物をしなさんねへ年ンを入てもどうかこうかしかねさうなわたしと思つてゐなさるかあんまり高をくゝつたしよふ去とハ水くさい心いきだ（トすゝり上てなみだをふく）【忠】ナルホドだん〳〵のいりわけを聞ケば聞ほど云譯のしやうも禮の云やうもねへ・さりながらわけをきかぬはじめのうちやァ一かたならず名染だてめへゆへはらの立ッたまぎれに・でほうだいの云廻し情ないものと思つたであらふがかんにんしやコレあやまつたあやまつたと心とけあふ屏風の內しゆすの帶なる音ばかり深きちぎりやむすぶらん〇下坐敷にハ船頭茂兵へ猪牙舟のふとんを敷寐樣とする所へ市川やの舟頭奴藤兵へのか〳〵來リ【藤】茂兵へじやァねへか此頃めくりの場で借た二兩の金を返してくりや【茂】ちつとくめんが惡ッて才かくせずに置た

モフ四五日〔藤〕待タれぬ〔茂〕たつた三日〔藤〕待ぬ〔茂〕そんなら二日〔藤〕いやだ〔茂〕あした〔藤〕置にしやればかく／＼しい人をちやにするのかお主か仕かたがわるいから待れぬ〔茂〕そりやアむりだ出來もしなへ物を〔藤〕できなへものをナゼ今ン夜返さふとかたくやくそくしたへ男がかたくやくそくして夫が今夜となり藤兵へ樣モフ四五日と手をついて詫言してもわりやァ男が立ッか〔茂〕いつもい念頭引かへておぬしやァきまじめでいふがどふいはれても金ハ〔藤〕できなへのか男ハ立ぱだがはたばりのなへ野郎だ金が出來ずハ形を取ふ〔茂〕その形に何を取のだ運上をたさねへ船番所のやうに棹か板子か〔藤〕インニヤ下にあづけてある忠兵衛が脇差を ト立上る所へお三立ふさがり 〔三〕まつてくだんせ藤兵衛さン〔藤〕用があるか〔三〕忠兵衛さンの座敷へ出た此お三その扨頭楽の難義さんすをゆふ／＼と聞てゐられもせず立引が仕て見たさ夫て留メやんした藤兵へ樣ン待て下さんせ〔藤〕藝者のこなたが此野郎が借金を〔三〕すましやんす濟すからしてハ脇差ハ渡さぬぞへ〔藤〕しれた事金さへ返せバ形ハ入ラなへンテその金ハ〔三〕たつた今〔茂〕アノこゝで〔三〕おまへの爲じやかへして見せませう ト身ぐるミをぬきじゆばん一重になり 金の形にハ合ぬものでもかう迄して渡す形代うけ取ッて下さんせ〔藤〕身ぐるミ引ッこぬいで茂兵へかなんぎをすくふ女でも意氣地が面白い了簡して・取てやるべい金の形代持て行のもお

三を一ばん立る藤兵へ魚心あれハ水心ありとやら・あすハきつと金も受取くどく云ぬが・通奴だ【茂】こつちも金を渡さにやァお三ぼうへたゝねへ【藤】あした逢ふさらはた トらう下の方へ出て行お三ハ夜寒ンにはださむくふるい居ル表ざしきにてハ吹太夫が聲にて大經師の茂太夫をかたる 〽茂兵衛が肌の紙入にたつた三歩のかねて〆思ひもよらぬ旅の空お三のはだ着代なして【茂】エ、時も時とていめへましい浄るりを語りやァがるそのたつた三分もなへからお三ぼうに肌着までぬがせた嘸寒からふ何ぞきせてへ物ンだが・それ〳〵此ふとんがいゝエ、つべてへふとんだ・ちつとのうち着て居ると煖になる人間の精ハ強い・灰團のかハりになつてふとんを煖めてやらふ ト帶をときふとんの上へはらばひになり 男勝りともどふともかうとも上もなへ志の立派さコレきついもんだゼあつたら者を女にして置なァ・男でミたがいゝ弟分にして連て歩くに・大事な物を落てきたなァ・是からハおれが妹だと思つて尻を持ッゼへ【三】そんならお前ハ眞ン實兄弟になつて下んすかへ【茂】きつと妹だよ・ァ、是に付ても金のほしさよだ・先ッ傳馬町の旦那と根岸の親方様ニさう申たら壹兩つゝハ只も下さらうァ、金かほしいわへかねじやァなへはねがほしいホンニ羽といへば羽ハミんな落と去年專道了様のはなし夫で道了様のおつしやるにハ江戸へいつて羽ねがほしいとおつしやつたを和尙が聞あやまつて金がほしいとおつしやつたと聞て今年俄の開帳で大きにはねたとさ はなしながらぐつとねてしまふお三ハあたりミまはし手をあハせ 【三】此

やうな首尾が又有ふか日比こがれた茂兵へ様今ン夜といふ今ンや願ひが叶ふた• いつそむねがだくついてヲ、しんき（ト云ながらそろ〳〵とにちりよりふとんの中へは入茂兵へきもをつぶして）【茂】ア、是さとんだ事ばつかり• たつた今兄弟契約をしたからそんな事をすると畜生になるからァ否だ誤たく〳〵（トいやがるをむりにおさへる此生のものが見たくへ木びき丁を見ン物すべしとなりの茶屋やでへお三の新うた）〽色はつひしたかごとよりうまし男のひざの上ちよつとあたつて恥かしいのがかはひのうらて突つめるのが戀の山【茂】はづかしいが産れてから今まで女の肌を知らず女と云物は沖くさくつてひた〳〵物をいひかけられると脇の下から汗が出たが今ン夜といふこん夜初めて物の目に合た面白可笑中〳〵おつりきな物ンだ是迄船頭中間の突合に海や堂前へ誘はれても道からにげて歸ッたが是を思へば大キなそんをした【三】モシ茂兵衛様ンなんにもわけては云ぬぞへ徒な女子じやと愛相をつかして下んすなへ【茂】何の愛相をつかしておたまりがある物ンかおれも男の部になつたから今迄のやうな悪がたい事はながして兄弟契やくのうらをいつて是からは夫婦のかためだ• ちよき舟冥利につきて舟床をこぐ報もあれ（舟床とはまんぢうふねの事）今輪際見すては仕なへ其證據にやァ彫ものを仕やう脊中は鬼の首でせきがたし肩の猪熊と整と云字の樋合にせうか• 夫じやァ外へ見へねへいつそからだ中お三小紋に仕やう夫がきに入ラざァ小鬢先から頬べたへお三命と彫ふか【三】夫程に誓言立て下んすりや千倍じやはいなァモフ〳〵

おまへも舟乗せずとわしと一ッ所に世帶して下んせそしたら端手な藝子ハ止て綿つんでなと髪結してなッと旦那なンにして養ぞへ【茂】眞ンにありがてへおれも外の事こそ出來めへけれ腕に力が有から荒五郎もどきに車引をしてなりとも倶稼にかせがふハさ【三】ほんぼの事かへ【茂】しれた事よ【三】かならずかハりなへ　トしつほりとなる所へ茂兵へか心安する刀やの手代半七相かたのお花と二人　【半七】茂兵衞どんこゝにか　トずつとは入レべ二人へはいめノお三にふとんをかぶせさあらぬてい　【茂】半公なンかいつ來なすつた【花】今朝來なはつたけれど私が遂むり留をして流しなはつたが夜が明て親方なンの前へ出やうがなへいつそ身でもなげやうと云なるから私ァいつそ苦勞だ。どふぞ能思案をかしてくんなへ　となみだぐむ　【半】爰を書て呉るハ貴なだこれだ〳〵　トおがむ　【茂】よしよし仕樣がありやす　ト神棚から納メ太刀を取て來て　此太刀を親方の前へ持て出て伯父の権龍が疫病が快氣いたしましたゆへ御禮垢離に參りましたが夫から酒を。ふるまはれまして夜が更ましたれハ夜中ハ物騷でござるからとてたつて留メられました故一ッ宿致しました此太刀ハ御山へ五十度參りまして疫病除になると中ゆへ借て參りましたと云なんし親方ハ御神酒講中だからお山と來ちやァ大がいの事ハだまつてゐるハな。爰を紋三でこぢ付れバ一チ條國廣の刀といふ所を神田吉廣の納太刀とハ。書もんだらふが子【花】茂兵へなンきついもんだ是ハわたしが心斗のお禮とやらだ　ト仕かけ文庫から帶と小袖を出し　お邪广だらふが何ンぞにしてくんねへ【半】

おれも負てハ男が立ねへ（ト金を二朱出し）是も何ぞにしてくんねへ【茂】そんならお前かたハ何もかも【二人】開た風な仕やうだと腹をたつてくんなはんな【茂】かゝァ左エ門お禮をいはつし（トお三ふとんの中より顔を出し手を合て泪をながす出の鐘なる）八幡ッ鐘だよお前舟ハ【半】岡を來たからなへが。川村やの長太が仲丁の福本かをばなやに。ゐるはづたもしもゐにやァ幾よしから三河やの長松か舟をやとつて歸らふ【花】おさらばよ（トおくつて行く）【茂】あの子の心ざしだ是を着たがいゝ【三】こッちやの方ゥむかんすなへ【茂】モフよしかヲ、丁度いゝ【三】きつしりじやハいな（ト云内烏がかあ／＼はやあけわたるしのゝめに舟出たいそく奴射兵衞）【藤】八ゐッよんべハ梅川が郎が御客の素干としやしたね【中の島八右エ門】海福寺の木魚をミたやうに浦とんの上にひとり寐さ土橋もおれにやァふさハねへ【藤】此脇差を指なんし【八】こりやアどふやら【藤】何ッでもよふごんすァ（ト河岸の方へ出て行）【忠】茂兵へや／＼モフいかふぜへ【梅】まだいゝハな【忠】けふハ田中の方に用があるから早く歸らふ脇差を取てきてくりや【茂】あァい（ト云ながら勝手へ行刀かけを見て）こりやァ忠兵衛ゐの脇差が違てゐる今ちらりと耳へ這入たが藤兵へめがすり替たにきハまつた生ッぷてへ野郎めだ。うぬゥ待ァがれ（ト尻ひつからげわきざしぼつこみかけ出し行）【三】茂兵へゐの今の吃相【忠】【梅】たゞ事でハあるめへ（ト三人つゞいてかけ出す此ものの音におどろき）【お玉】あハたゝしい何ッだへ忠兵へゐッ／＼（ト跡をおつかけ行）○川岸ばたにハ八右エ門ほうかふりして立てゐる。藤兵衞ハ形に取シ小袖と

帯をかゝへ片手に火縄箱をさけ桟ばしへ下りやうとする所へ茂兵へおつ付【茂】藤兵へ待・約束の金だうけ取レ【藤】よく拵たなツレ預り物を返すハ トお三がきものをなげ出し行ふとする【茂】待テ【藤】用でもあるか【茂】金の出入をすまして置て一チばんいふ事がある おらが旦那の脇差とどこの馬の骨かしれもしねへ毛才六の金ッぺらとうなァよくすり違やァがつたな泥坊やらうめ【藤】何ンだこいつァものにやァまちげへも有物ンだ差違たらどふするェ【茂】どふするもかうするもいらねへハ ト八右エ門かそばへつつとより コレ野郎ェ此脇ざしを返しやァがれと トひつたくる【八】おれが大方かうだらふと思つた【藤】おめへそんなに弱出る事ァねへコレェ、おらがお客をナゼ手込メにした【茂】手込メにしたらどふする【藤】手こめにされちやァ合点ならねへ トつかミかゝろ所へ忠兵へ梅川お三かけつけ【三ん】コレサ脇差さへもと／＼になつたら何も云合フ事ハなへ ト両方をなだめる内八右エ門梅川を見付【八】此出入もうぬからおこつた事だハへよく指の先の厚皮で四十両と云金を・ちやァふうに仕やァがつたな ト梅川がそばへつつとよりとらへんとする手先をむつととらへ【忠】おれが相かたをとらへどふするのだ トつきのけろ拍子に手拭落て見合すかほ ャア手前ハ手代の長蔵でハなへかこれハどふだ トいふところへお玉かけつけ【玉】是ニハ譯がござりますお前ゝンのお袋ゝほどあつて妙閑ゝハ大通さァノ長蔵ゝンを中の島の八右エ門と云敵に遣ッて梅川ゝの心ためしに金びらを切セた所が四十両の金がこしらへたいばつかりで・ゆびをきりなさつたゆふべの仕

内おまへゐンを眞ンからおもひなさる心中が知れたといつてアノ長藏ゐの。おはからひで夕べの内にさらりと身受ハすミやした【長藏】モシ仙石屋に高麗やのむすこといふ所を採こミの仕内ハどふでござります妙閑ゐのおつしやるにハ御新ン造ゐが梅川でハ濟ぬからお名をばお諏訪ゐとお替なせへしとさ【忠】【梅】あんまりうれしくつて物がいはれねへ【茂】そりやア濟だか此藤兵へが筋のわかれハ【玉】おめへもうすどんな事を云はんなナあの人がお三ゐンに取持を賴まれても一ト通りでハおめへツレ承知しなへもんだと口うらを引て合点して【藤】幾藏もどきで金の催促【三】狂言で身ぐるミを脱だのじやと思ふておくれな。眞ン實おまへの難義なりやあの通りのこゝろ意氣じやぞへ【茂】したり トよこ手をうつ【玉】その手ついでにしめませう【皆く】しやん／＼／＼しやんと納まる二タ女夫二日替りのひやうばんを遠からんものハとり／＼噂の音にも聞け近きハよつて見物あれと贔負の臂をはるの日の初笑種と筆を納めぬ

大尾

諺に。待身より待たるゝ身と云ハ。互に氣を鶺鴒の。むかひみに書る鳥の跡。其形二ッにして。その意一ッなる。比翼の鳥のふたつもじ。牛の角文字直なもじと。ゆがこもぢつた道行の。戀の飛脚ハ矢のごとく。當狂言奇語ながら。げに色事仕のこう麗や。響く情の水上と。名を結んだる觀世水。もらさぬ手取の京鶯も。かつ色見する梅川に。ます桝德ある定紋の。靏の丸で緣を取。鳥盡の首書をせし。兄分の万象亭。その尾にむだを囀れといふ。合点と繰出す珠數掛鳩。間言に三ン枝の禮も聞ねバ。とつ鷹見たかに筆をとり。鴉に反哺のこうもあらふかと。水雛のたゝくとにかくに。口まめまはしの言の葉を。とり集

ゐたる小冊の按合筆工するひまに。ぱた〳〵と羽根繕ひ。あさる雛子のしべ〳〵と。けんもほろゝもなきことを狂文鳥に燕て。雀の聲のちよつとした。晒落と戯場と女郎買。これぞ三ン光三ン雀の。尻尾にあらで喰ちかふ。鵙の觜のはしがきすと。名のりかけたる時鳥。八千八聲の評判を書肆諸に松毟と。口隼の一つかこに云事しかり。

泥田房述

もゝ千とり
さえつる春

忙々神日記

白拍子のみ反故

誰が袖日記

作者　寶嘉僧

諸譯

かやふに候ものハ。年ごろ此あたりの白拍子のかたをぶら附。いつもうか／＼くらし候ゆへにや。年のよらぬを人毎にワか德／＼と我名を呼び申候扱はよく／＼うけ給ハり候得バ。よほど月日もつもり候よし。いづれも手者と手者との色事。ねこのゑりにみを付けてかよわし。蝶のつばさに。哥を書て。きミがたもとにとまれかしとねがひし。むかしの戀路に引かへてほれやうのおもしろさ。手くだのこんたん。あまりせつなるふたりが中なれバ。とりかわしたる日毎のみをもらひため。はてなうき名もおもひ出と。成るものなれバ。こひ知りのかた／＼へ。口まめ鳥のはしたなひ事までをつげしらせ。あからさまにいわぬ所ハ。よきに推量し給ふべしと。まづその筋を述る。

ゆふしはひさ／＼にて御目にかゝり。御心のたけ。くわしく御あかし被下。御うれしく。是ま

蘭徳齋画

ではさのミそれ程とはぞんし不申。うわきかましきやふにも存候へども。ゆふしの御事にてこなたうたかひもはれ申候さやふのおほしめしに候はゝ。此うへいかやうなる御事になり候とも。つら〳〵いとひ不申候まゝ。御わすれ下されまじく候もつともワたくしはまい日〳〵出候まゝ。先〳〵のほど。御心もとなふ思しめし候御事。つら〳〵むりとは存不申候。御うれしく存候。まい日〳〵の御事。みもてくわしく御しらせ可申上候まゝさやふ思し召下されべく候それとても御まへゐ。いやからせ候所へは。まゐり申まじく候。その折から御はなし申あげし。やしきの事もへんがへ致しまゐり不申候まゝ。必〳〵御あんじ被成まじく候。外にも御はなし申上たき御事候へどもあと先御かんがへ。御しあんふかき。そなたゐ＝候へハ御あんしなされ候半とひかへ居候。何事も〳〵またの御目もじをたのしミまちまゐらせ候かしこ

九　日　よ　　おかへらせ候御あとにて

したゝめ申候

けふしは一しほゆふしの事思出し。御なつかしく存候折ふし小石川より人参り御仲間ふるまいのよしにて。山城屋のおやまをつれ。竹町の御下やしきへまゐり申候。ふねの内ゟ。何事も手に付不申大きにわらわれ。たゞのやくしのまへよりあがり。河岸通りを参り候所。はらにはの

かのかたに御目にかゝり申候。もつとも夜に入またく船にてかへりらく〳〵

十 日

十一日はミなく〳〵。近所の御方のよしにて。茶番（ちやはん）御坐候て。くれ方より。おとりとわたくしふたりニて百川へ参り申候夜に入。さくらだまゐり候て。御うわさ出候得ともわたくしはしらぬかほにて居候てうど。石町の九ッのかねと一ッ所にかへり申候

十二日は月なミの御より合ニて下谷へまゐり。わたくしと外におよしおミわ三人にてくれ〳〵まで居り候

十四日はあかばねへ参り夜に入り歸り申候。おふミをつれ参り候所。あちらより。女にて聲（こわ）いろ遣（つか）ひ候げいしや参り。大さわぎにて。扨〳〵けしからぬ御事御見せ申度。申くらし居候十四日ハ。鹿嶋よりさそわれ。きのふまゐり候はづをのび候てほりの内へ参り十五日には。根（ね）ぎしへ参り申候ちと〳〵おそくなり候ても。御まへさまの事。御そんじの所にて。申わけいたし候へバ。すミ候まゝ。ひる九ッ時分より。かならず〳〵御こしまち入候。御目もしもはや四五日ほどになり。御なつかしく候。わたくし心おかぬ所にて候まゝ。くれ〳〵御あんしなく御こし候へと。わたくしより先へ。御出なされ候ても。ずいぶん〳〵。よきやふにいたし置候まゝ。く

どくは御めもしと早々

十四日よ

いつもの方を一町ほど參り候ときくすり屋御さ候そのよこ町ひだりかわにてこまよせ御さ候このころこして參られ候いしやさまと御聞被成へく候そのよこ町にこまよせの御座候うちへそこ一ツ軒にて御さ候

きのふはゆる〳〵御めにかゝり。御うれしくしかしながら。先をいそぎ候まゝ御はなし申度事も殘し。誠にあふ時はかたりつくすと思へどもと申哥の心にて根岸(ねぎし)へ參り候所。思ひの外はやくほめられ〳〵。扨ハこよひはこざきゟ申參り候。かねて御まへさまいやからせ候所にて。わたくしもしミ〳〵いやに候まゝ。いろ〳〵と申ことわり候所しろこ屋より。申參りどふぞまゐりくれ候やふとの御事。よん所なふたのまれ候とくれ〳〵御申こし候まゝ先(さき)ハともあれ。しろこ屋の手まへ參り不申候てハあしく候まゝ。こよひぎりにて參り不申候まゝ。こよひハかんにん被成下されへく候。參り候とても。その心には成(なり)不申候まゝ。くれ〳〵御あんじなされましく候。此事申あけ候てはかへつてあしく候まゝ。申あけましくとそんし候へとも。御しらせ不申參り候ては。こなた心なを〳〵すミ不申候まゝ。じきに歸(かへ)り申候て御しらせ可申上候。もつともあひ口なものつれて參り候はゝいかゞ思召候半と存候まゝ中のわるひ。おうきをつれて參り候かしこ

十六日あさ

返ゝきのふは能ふそや。ゐしやさま方へよきもの遣され。大きによろこび。わたくしよりよろしくとの御事。ことにものよろこひのふたりのしうニ候まゝかへつてきのどくがり候御かへらせの跡にてそなたさまをほめ候まゝ。いつそ／＼うれしく存候

ゆふしはさぞ／＼。御あんし被成候半と。あちらに居り候内も。心ならすいつも夜ふけ候へども。九ッまへに歸り申候。くわしく／＼ゆふべのやふすしたゝめ上候ても。しよせんいつわりがましく。御きゝ被成候半まゝこよひ彥さまかたまで。ちよつと御出下されへく候。御目にかゝり不申候ては心もはなれ不申候。くれ／＼まち入ら／＼と

十七日あさ

としたゝめ置候所へ。男の方より夜明と早ゝ若徳にみをたのミ女のもとへ遣し候

夕ァのやふす。くわしくきゝまし度そんし候まゝ。後かた下谷さまより御手紙をもらひ坐しきを申遣し候まゝ夕かたゟ彥が方まで御出まち入候。どふも／＼。みにてハわかり不申候はかな事ながら。どふも心かゝりにて折ふし若徳見へられ候まゝ。此みけさほど遣し度。とめ申候。しかしなのら夕ァかわけ。わか徳へははなし不申候まゝ。箱さきいはなしハ。御むようにて御

座候。扨〻いろ〳〵のはなしいたし候へとも。どふもねられ不申九ッ過になり候とわか德は。ねぬかほにて。しら川夜ふね。こなたばかり夜の明る。をまちあかし候。あわれ御さつし下されへく候以上

十七日あさ

ゆふしは。つかう能く御目にかゝり。しかし御目にかゝり候はゝさぞ〳〵御腹立被遊候半と存候所。こなたの心御さつし被下御うれしくかならす〳〵。折から御はなし申上候　こなたのしんていれ。かならず〳〵御うたがひ被下ましく候。こよひわ何所へも参り不申居候此きせる持ふるし候へども彦さまへ御あげ可被下候。うち直させ上可申と存候へども。早ひがよからふと存候まゝ此まゝにて上候。明日はかの本鄕のゐしやさまゟ久〳〵にて呼に参り候。一度まゐり候節御まへさまにも御咄し申候通り。こり〳〵といたし候まゝ。さし合候と申ことわり申候もし

十八日

きのふは晝までやどに居候所。水道橋より。にわかの御客とて人参り。おちゐをつれ参り。四ッ過にかへり申候まゝ。いつものわきより駕をおりそなたさま横町のかうしのまへを通り。も

しや外ゟ御もどらせ候はゝ。御目にかゝり申さんと存候かひもなふ。いたづらにかへり申候さつそく御しらせ申さんハ。御まへさまいやからせ候黒。ワたくしるすの内。若林の犬にかまれ申候て。ワたくしをたづね候よし思ひ出すさへあわれにぞんし候以上

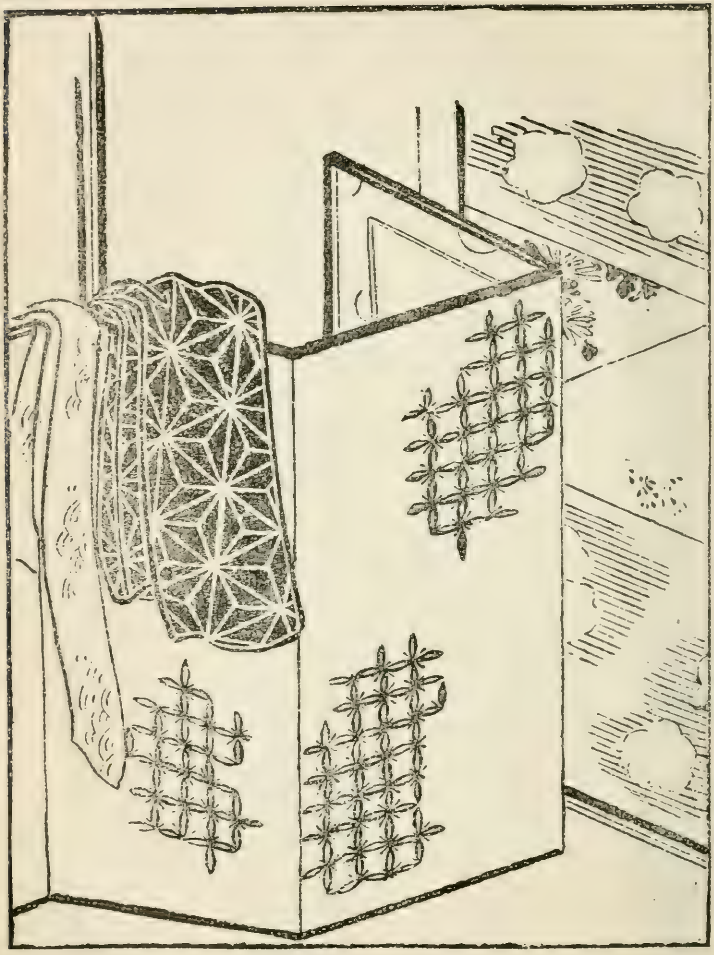
十九日

今日はあたごの下ゟ御人まゐり八ッ時分より参り申候。是ハ御まへさまもかねて御存の通り。御おもと様の方にはなく候まゝ。ことにより。御とめ被遊候と。二日も三日も居候事御坐候まゝ。さやふ思し召可被下候。何とぞいつぞや御見せ被成候。よしの川是もながすか花うるし。と申門之介のあふぎ。きつく御ひゐきの方御坐候まゝ上度候此者にねかひ上候。いさいハ歸り候て。また〳〵可申上候以上

廿日あさ

いよ〳〵御かわらせなふ候哉。おとゝひより御とめ被遊候て。きのふくれかたに。やう〳〵御いとまいたゝき歸り申候きのふは御下やしきへいらせられ候はづの所雨にて御見合被遊候扨よあちらに居候とてもやどに居候迚も。かわりし御事ハなく候得とも何所となふ遠々しくはる〳〵へたゝり居候様に。存しられ〳〵今日はいつそ〳〵。御まへさまを見たひと御申被成候。

一〇



山崎のかしんざうさまと平井のせうてんさまへ参り申候。大かたくれ〴〵には歸り候まゝ。しかと致候事ハなく候へ共もしや違ひ候ハゝ御ゆるし下され候思召ニて彦さまかたまて御出御まち可被下候。おとゝしのこよひはじめて御目にかゝり候日御さ候まゝとふそ〴〵ねかひ上候いさいそのふしニ早〻以上

廿二日

御みいさい心へ〳〵こよひ彦かたへ参りたのしミ待居可申候。黒か事若林の犬にかまれ候よしきやつもあたつきものにて。ちよこ〴〵出あるき候まゝ。かねて御しかり候へと申候にくやむハミなあとに成候て。あわれに覺候。きのふ久しぶりにて木挽丁へさそわれ夜に入り歸り申候折節京橋へかた付候おその見物に参りことつけ致し今にかへと申あたり長〴〵しひとわらひ申候。けしからす女房すかたうつくしく成候。又〻申さんハ。にわかにさそわれ舩ばしの太神宮様へ太〻講ニ参り候まゝ。殊(こと)により。成田(なりた)の方へ廻る事も御さ候まゝ。左(さ)やふ思しめし可被下候。いさい彦方にてと早〻申殘し候以上

廿二日

きのふは御もどらせされ候よし。茶わんやの源七さま。御見かけ申候とて御しらせ被成候いと

〳〵御きけんよく御つかれもなく候や。かす〳〵うけ給りたく存〳〵。すこしの間に御座候へども、まちどをにて。御かへりをまちくらし候。廿二日平井のかへり彦さまかたにて。御めにかゝり候より。御たよりもうちたへ。その折からハぬすミものゝやう＝てあまりそご〳〵なる事しかしながらその時のうつり香今に忘(わす)れやらす候

廿三日は岡田(をかだ)のさとひらきの御しう儀とて。晝よりくれまへまて居候

廿四日ハ深川升屋へ。ミつさま御仲間入らせられ。わたくしおむめおたけお松四人にて。わたくしどもハ暮方に御かへし被成候

廿五日はどふも心持あしき事御さ候まゝ一日きうをすへおり候

廿六日ハ元山王と申所へ大せいにて参り明方(あけがた)歸り申候

廿七日ハ新川より呼に参り。おかく。おミわおそのわたくし外に。かミ方の子二人堺町ゟゑんし三朝。仲五郎菊屋しらぬたいこ持二人そのさわぎやふ。つねならぬ御事＝て。その内よしさま本名ハしれ不申。是ハどふかおミわと。二三度も外＝て逢(あ)れ候よしのていにて重盛(しげもり)さま〳〵と申御方御座候大臣といわぬ斗の名かと思ひ候へハ。木の名ハ小まつや惣左エ門と申候よし。境町ゟ参り候民と申たのまれ候迚。いろ〳〵いやな事はかり申こまらせ候まゝ。大に腹を立。

りくつを申候へハ。その御方ハいつの間にやらかへられ候それより御きやく方も　歸られ候迚八ッ半時しまひ歸り申候。駕の内も一しほそなたさまの事のミワすれかね。御もどらせ此事御きかせ申候半ゝ。しぬる程御わらひ被成候半とおもひけるさへおかしくそんし居候まづハ御やうすかた〳〵早〻かしこ

廿八日朝

能ふそや御申こしよふ〳〵。きのふ歸申候。まづハかわりなふ御うれしく候。扨〻松橋は聞たより。いきな所にてどふぞつれて參り度。ミな〳〵とも申くらし候。どふもいへぬ所にて御さ候。御申のごとく廿一日彦方の御目もしひとしほのおかしさニて候廿七日新川しけもりどのゝ事。保元の昔ならべそふハ有るまひものといとしく候此中ちよつとかり候て。すぐにやうしさしへ入忘候。みゝかき返し申候道中扨〻用をたし申候。見合一日二日の内に逢申たく候。そなた〻便り御さ候ハゝせんり方へよく〳〵御傳へ被下へく候かしこ

廿八日

はいしら〳〵夕ァハきじ町へ參り候所。何とてしられ候や。おまへさまの事問ハれ候ゆへ。今ハたへ〳〵の御事と申まし候内御客ハミな〳〵。よしハらへ入らせられ。殘ハ御新造さまかた御

客にて。九ッ時分迠居候。御しらせ申さんハ。いつぞやの本郷のゐしやさま参られ。大小うらミをいわれこまり申候。今日ハばんばの下やしきへふるまひかた＝てワたくしおいしおあき三人にて参り申候。朝はやくとの事にておし付参り申候。ことによりくれ〳〵にハしまひ可申やと存候へども。はしめて＝御坐候まゝ。やうすしれ不申候。大分用事も御座候へども。唯(たゞ)今髪(かミ)をしまひ居候まゝ紅粉(べに)ふでにてしたゝめ候。よめかね候半まゝよろしく御さつし被下べく候

かしく

廿九日あさ

扨ときのふは。けしからさるめにミな〳〵あひら〳〵候ふるまひかたにて参り候所。三人ながらワたくしとも。せうちにて御さ候とてい主方のしう。うけ合候よしにて大にこまり申候。夫ゟ御客かたハふきやうになり。お秋ハ御そんしのむまれ付＝候まゝはらを立酒を過し。ミな〳〵暮がたゟ吉原に成。わたくしとも三人ハ。そう〳〵舟にて歸り申候舟にてゆられ候ゆへやら。おあき大つう＝て下〆にてはちまきいたし御目にかけ度なりにて御さ候ワたくしは。むしにかふられ舩より與七におぶハれ歸り申候まつとや御しらせ申さんハ。れいのむしにて。あと月その沙汰なく此月もけふまて。何ともなく候まゝくろふに成候へ共まつ〳〵是＝てくろふも一

ッヘりあんと致しまいらせ候むしさへかふり不申候へハ夕ァはやくハ有り彦さま方へ参り可申と存候へとも。此通りの譯(わけ)故すくに内へ歸り申候。おいしハ何所へかまわり申候まゝ御逢被成候ハゝ御なふり被成へく候かしこ

朔日

いさい御申こしまづ〳〵あんと致候しかしながら。ぬれぬ先こそ露(つゆ)をも。いとへに候へハ。さのミあんし候事もなく候へども。うき名をいとひ候ためには。壹ッハましかもにて御座候。隨分御いとひ可被成候。たゝしはんばにて何ぞ御坐候て。すくにそれになられ候やら。心もとなく候おいし事こゝろへまいらせ候あさつてあたりハぜひ〳〵あひ申候。お秋いかゝ心よく候や御ついても候ハゝ。よろしくたのミ入候。入るまひとハそんし候へども。あたりよく候まゝ。つゝら笠とゝのへおき候まゝ。こゝもとへたより御坐候て彦方へ出し置候まゝとりに遣されへく候かしこ

朔日

朔日の御返事。夕ァとゞきはいしまいらせ候。ハたくし事もけさほどハさつはりと心よく御さ候まゝ御あんし被成ましく候よふぞやつゞら笠かね〳〵ほしくそんし居候へとも。さのミにもそんし不申候まゝうち過候に。能ふぞや御心にかけられさつそく。彦さまへとりによせ申候。お秋こ

とつてけさほど申候。なを又よろしくとの御事にて御さ候かしこ

三　日

ゆふべは代地(たいち)へ参り。おもわぬはや仕廻(しまい)にて。五ッ時分にかへり候まゝ彦さま方へ参り折ふし安兵衛さま御出被成候まゝ安兵衛さまの手紙にて。三度まで御やどへ人上ヶ候へども御こしなき故あた枕かなとやとへかへり。思ひ寐(ね)にあかしゟくかしこ

五日あさ

よふぞ夕ァハ人御こし安兵衛さまの手紙ぢきにそなたの事とすいりやういたし候夕ァハ。げんぶくのいわ井によばれ夜ふけて歸り。殘りおしく候。折ふしおうき参りいつぞやの。箱さきの事聞まし候かしこ

五　日

五日六日と三弦ぼりの。御宿下り御さ候て。芝居へ参り。七日は向ふ嶋かあや瀬(せ)の方へとの事にて御さ候。扨ハいつぞやのこん屋ハ。石町の何屋と申候哉一寸御書附遊され下されへく候以上

けふし

今日むかふ嶋より。あやせへ参り候。夫に附きうに参り度候まゝ。明日御開帳より何方へなりとも思し召次第にいたし候まゝ。小川屋のおとミさまと與七はかりにて。いつぞや御まち申候所へ船をつけ置候まゝ。くれ〴〵間ちかひなく四ッ時分ゟ。かならず〳〵。まち入らくこのぢうの笠にて参り申候彦さまへも御さたなしにねかひ上候かしく

七日よ

なを〳〵九日には。ふく田屋の御ゐんきよふるまひにて参られ不申候まゝくれ〳〵〳〵〳〵まちかひなく。たのしミ居り候。少しくらゐのふりには。かまひ不申候。何も〳〵この折からめてたくかしく

どらの巻

自序

夫レ本ン覺の佛ハ形なく法性の神に姿なしといへり如く寔の通といふものハ面に通をぶら付かせず能ない饒然をもヲゝいゝと讃左迄ない事にても難有と育つる故人の照るといふことなく立テ引を専とする心より金かなくてハ娼妓ハ買ハぬがまし聲花をせぬくらいなら大門をハ潛らぬが能と天の岩戸に固籠れバ世は常不變にお府眞暗わいだめもなき虚に乘て神や末社の濫吹共神集に寄合て魂膽咄しの意氣ちよんを閉て居るのも無益數殘口翁か口眞似に勃然としたる惡口ハ世上の通を壁と見て達磨大師のはりこ夾をおきやァかれ小法師といわバいへ頭を振て構ハ

ぬ而已

天竺老人門人誌　　下界隠士

天明五巳のあら玉

大通どらの巻

大通は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける花に行無駄人月に通ふ遍鋋もいづれか通を知らざりける夫大通といふ文字ハ唐土の俗語にて大いに人情に通したるを稱したる字の通りの詞なり近比世上一般の通語と成て晝三買の意氣人より切店そゝりの俠客に至る迄假にも通を唱へざるハなし彼通に差別あり極眞の大通ハ上方の達衆に等しくくつきり立チし水際ハ水道水の名物男意氣地の立テ引男氣ハくた〳〵言を環結なり夫より次へ落て來て木葉通といふ溝飛あつて彼大通の大びらに錢金つかふを鈍漢と譏り熱鉄のぐい飲に高慢の脂をさげ我慢己惚の鼻高く四ッ手の翼の自在を得ざればつち尻端折の悋惜を用ひ羽折ハ長きを厭ハず身幅ハ廣きを嫌ハず流行様の□□□□追れて工面のとさんに何所に否なる味の出るハ腐の付るなり腐付ハ万の物も嗅し嗅味の付族に眞物ハなしと知るべし味噌ハ味噌ながら味噌嗅ハわろく粋も粋くさきハ粋ならぬ物ぞとハ誠に古今の通言なりかたのごとき鈍漢めらが盡した衆の魂膽咄を得手の道へ引ッかけてとかく女郎を買ふなら魂膽か第一にて壹文成ッとも引キずと出ねハ手に入たとい

ふでハないと手前勝手なよこぞつほう馬鹿の上盛り鈍間の下タ積よく積ッても見るがよし女郎に無心を云迚も折と時とがある物なりれつきとした通達でも遊廓の金にハ詰るならい遣つた□の金詰切及詰りし方角に□とも請合男づく頰を捨ての無心にハ女郎の心ハ知ねども共苦ハ誰がさす事ぞと氣の毒餘れハいとおしく人の譏りも顧ず裸にもなり年ンをも入レ身を粉に碎く黃金心ン中貸人の手柄借手の名聞氣の切レた女郎じやと立ッ浮名にハ客がふへ客かふへれバ金もでき首長はまる借金の淵ハ瀨となる陰德陽報つかふ長の金も遣ハす何が癖やら寐がつてやらまだ氣も知レぬ傾城にから一双から魂膽とハ穴の貉の盆暗ども適登樓の後朝にハ先友達の所へ欠込態と寐むたい顏付にてマア聞てくんなさヱ斯いやアどふか味噌を上ケる樣だがつかもねヱ難有てヱ句が有サどふしたもんかめつきりと書か付くよマア斯だゆふべ少切ッ懸の有傾を張やした所で床が納るとサアつがもねヱ銘句を吐やすそりア又恐敷櫻田が狂言に高麗やが魂膽で廿五點といふ所をヅドン〳〵と當た所か先刻承知の山櫻裏ア身揚で居る筈だが隙ならおめへもあいばねヱか連の壹人や貳人アロ鉾ではたらかセる何ンても強敵に引ミんたんのッレぼん突出しだかとわへじやねヱかへと繻件て咽をメながら唇反した自慢顏約束の夜にいて見れバ女郎の方でもぬかりなく夕ア貰筈の客人か來いセんから今夜ハどふ共しておくんなんし今度ハきつと働

いすホンニしみ〴〵お氣の毒てござんすとどふしいせふの二ッ三ッもやらかして明透らしく見せ懸れバ今度は〳〵と思ふより木乃伊取迚又密人已が手に蹴返シて鼻に懸る白痴共去とてハ世に多し是より段ヽ惡業が入金のとれぬ腹居せに無理にせこめて髮をきらせ墨彫せて嬉しかり坊主に俗にもござれ〳〵の起請文亦ハ盜人證文の當テ名ハ誰ともお望次第指の先の□□でも刖せれハ早手のものと悅ふハ去□□狹き了簡ならずや近松翁の傾城請狀にみにハうそを書ならい床にて人を燒ならハ寐むたくとも居眠らず泣ともなく共絹〳〵の別れに泣せ申べし起請誓紙に身の內の血をば惜ませ申ましと書たる如く思ひまいらせぬといふみもなくかわりませふと書誓文もなきものにて臨機應變御緣次第に股潛の書人と見れバ主に苦勞ハ懸いせんと夫相應の調子に合せ所詮いふても錢にハならず三度來たなら三度だけ客帳の駄目を差レ賣の込のが得なりと十把一トからげに見縊られる心恥敷事にあらずや大通の元〆□魚先生が茶飯咄に曰今の浮世の女郎買にまだしもに見ゆる物ハ新吾左の遊ひなり買切ッた上からハ傾城の五輪ガ躰ハ我ものと決定し假令名染の客にもせよ貰引を間入れずちつと床か不勤か又は床廻りが惡いと亡八を呼と切双廻し傍構ハすかなり出せハ心の內でハ親の敵のよふに思ひながらも何でも一夜の賜顧なれバおゆるしなんしと誤て小言いわるゝ右流左さにまんぢりともせず勤ても商冥利かふする筈

と客といふ字を眞向に差翳し腹一盃に權威をふるへど定代の入目の外格別の金の入でもなし又聞た風の通ともか書人とか魂膽師とか名を付て諸事扣へ目に立廻り面白くさへて居ル最中に件の如き客か來テ差合ならハ貰ふて出せと言譯聞すたゝけ散せばまだ貰にも來ぬ先に爰が通だと氣を通しありやァ手めへが客人かつがもねェとんちきだのしたがあんな奴が爲に成おりやァゐェから勤たがいゝあんな横倒しやァ座敷もあけろといふだらふ口を明カせねェ様にこけェ入たがゐェとうぬが方から引ヶを取り氣を通す心遣ひ誠に粋か身を喰とハこれらが事をいふなるべし此調子にてだんじけち〱と立廻るを色仕立と号よしどこの仕立やが仕立るか去とハきうくつなしたてやう我等かよふな肥滿たものにハ尻かへばつて着憎しと笑ハれしも理なり斯の如く引ヶをとるも一ッたいの下タ心ハ女郎の內股へくひ付て一度振の勤なり共引ミん丹にせんと欲するむさき根性より起る事なり蓼喰虫も好〱ゆへ一概にハ云れねど左程身錢がだしとむなくバたかで遊びに行ぬがよし一度振の勤さへ工面の出來ぬごくどうなら假令氣の有女郎でもあいそをつくすハ知れた事なり行着までもつかつて見ぬ不甲斐なき魂にてハ傾城ハ扨置何事に寄らす行ものでハなし又席狹き遍綖が傾城に誠なしと四角な卯を引事にて無面目に云破れど女郎の子か女郎にもならねバ傾城の種じや迚禿の黃卷か有でもなし我ハ親兄弟の爲に沈ミし繚

の淵一ッ頭の朱唇万客嘗と聯しごとく入替り引替り来る客が惚られまいと思ふもなければ鐘愛可愛の情を述惚たほれぬのせりふにもげつふをして居矢先なればめつたに惚ぬも道理なり共又惚ぬ傾城を手に入やうと思ふには誠の一字をもつてすべし塩冶判官高貞の家士大星由良之助が喉から出た誠でなければ未か遂ぬといへるごとく魂膽狐のすつとの皮鈎留とする狩人は度〳〵の罠に金銀を費し果ハ直化實の化實か嘘にて嘘が實心の誠が誠に顯ハれ身の油の揚鼠で眞の甘味を喰ハせうどの様な白藏主でも眞實の尾先をあらハし手に入ル段に成つたなら懐春の處女や男ほしい待女の郤含切た浮氣より垢拔のしたいろごとなるべし併かやうに申せは迚親の讓の家を潰し居屋敷を打チこんで深ばまりいらぬもの只女郎ハ遊ひもの遊君遊女の遊の字ハあそぶといふ文字なれハ壹歩ならハ壹分だけ貳朱ならハ南鐐だけ客といふ字の位を落さす買といふ字を心に込悪穴を云ず悪洒落を決してせず見へをいわず嘘をつかず男氣を専らとして座敷の数を重ぬる時ハ需ずして通となり態とならざる仕内の中に自と出る面白味にハ傾城も思ひ付世間でも難有がるべしよしやそれハ千差万別女郎殺の魂膽にてお手に入のも有べけれど高か玭〴〵ない女郎の才角拾兩遣つて五兩ハ引けす假令五兩引た所か心盡しいくらの事なれ共是も得手勝手吉原でかいた恥が家の瑕瑾になるでもなく女郎に不實をしたればとて一家親類に見放されもせ

ぬ物なれバ詰る所か理屈も入らず何して見るも楽しミなれバ差徒に千年似た山に千年すつとの皮に千年のぬらりくらりの功を歴て青大通の殻を脱浮世くるめて丸飲の蝮蛇と成り給へと叢探の穴賢〱

深川手習草紙

序

過し御見の睦言を。忘るゝひまも内證の。云にいわれぬ言の葉を。書散したる懇膽は。名にあふ情深川の。火の見樓の全盛ばなし。大鉢を中に三人が。五德の形に居並んで。彼打寄の眞最中所を我が立聞して。直に其儘化粧もせず。無法やたらに書ちらし。手習艸紙と。なしに皃

こちらへ
きのとの巳

十方舎[illegible]

深川手習艸紙

成田屋重兵衛罷出。まづ今日は是きりで御さります。どゝどん〳〵と。打出す太鼓に數万の見物。中に一際三人連【中】廿四五なる男【留】廿斗の色男【文】廿三四の胸わる【文】ァ、ごうてきに遲くなつたのふ【中】ナニてうどいゝ。五井屋で一ッ呑ていこう【留】夫じやァおそく成やせう【中】むすこでへふせき込の。そんならゑへばつせへ【文】ナニサ酒なら爰で呑よりや。あつちで呑がかすりで御座へす【中】文さんいつもの市川やへいつて。常が。居るならいゝ付さつせへと云（二人ハ跡から行此内舟も出來間もなく二人も來る）【舟宿娘】ヲヤ仲さん留さんお珍らしうござりますね【中留】でへぶ寒くなつたがそんな替る事もねへか【中】又けふも息子達に引ずられて。來やした【娘】適ゝは宜しう御ぜへすと（はなしながら棧ばしへ行三人ともの る）【常】お吉さん。もえゝをとゐてくんなせへ【娘】ハイ左様ならどなたも御機けんよう【中】常やけふハちつと巣を替て裏へ行ぜ【常】夫じやァおめへあつちらへ【中】なに付合でいつたと云ァいゝのさ【文】常ハごうぎに腕前が達者だのう【留】足ハ入ッていろ。塩にやァ向ッてへきたのう【常】ナニ三人位がてうど押よ

う御ぜへす「三人」爰にて鬆色長哥淨瑠理おもひ〳〵に鬆のつふれろ程うたふ委敷書たけれどゝ前にむだ書多けれへすぐに川へと流して仕廻といふもやつはりむださ「文」モウ來たか飛ンた
早いのう「常」お待なさへし。今足場のいゝ所へ着やせう「留」イ、爰から上ろう「常」夫ン
なら靜におあんなせへし「文」靜ても義經でも前の船が邪魔に成「中」ナニ義つねならバ八艘
飛ゼ「常」北船へ傳を賴なせへし「中」のふ〳〵北船へ便船たさふのふ船州「留」常やそんな
ら松やから人をよこそう。待ていさつせへと三人連立松やへ行「松や女共」ヲヤどなたもよふ
御出なせへやした。此間ハきつひ御見限だね「中」けふもツイ門違さ「女染」茶と盃を持て來る そふ云て
遣りやせうね「留」コウまたつせへ。今日ハちつと口をけへて新子にしよう「染」およしなせ
へしかはいそげにッ いつそどなたも待て居なせへやした。夫ともけふ呼フと云なせへすに。當
りても有のかへ「文」あたり所か此間。付合で大和ヤの內で一坐して。少足代をくんで置たの
さ「染」又文さんが久しひもんだ。ほんにどなたも付ケてきやせう「留」おきよにお長にお民
さ「中」コウお豐ぼう。野良を二三人呼て來さつせへ「女豐」誰に仕やせう「中」造酒と龜と
露長にさつせへと云所へ「女半」銚子硯ぶた持て來る「染」おきよさんに造酒は御せへやせん「文」なく
ハ誰でもいゝ「そめ」お菊さんに仕やせうか「文」床せへ能けりやァだれでもいゝ「染」また
むだを云なせへす「半」どなたもこつちへ御出なせへし「女良」「長」「民」「菊」來る。間も

なく露長かめ次も来る【露龜】どなたも御機嫌よふ 受えお定りのさかづきすむ 【露龜】カノ山寺の大寺のアレハサノエ、引【文】コレハサノエ引から一ッ呑つせへと 露へ盃さす 【露】チト早々返上天津風と。出やせう【文】あんまりきうだマア呑つせへ【露】一ッ呑お染どん。久松氣どりで上やしやう【留】尾の生そうな久松だ【露】ナニサ長壽をして御ろうじやし。久松だつてこねへに成やす【中】こいつハとんだ虫がいゝ【女きせ】市川屋さんちつとあちれへお連中なせへ【露】サアめへりやせう【中】モウ一ッ呑ンでから。しかし息子ハあつちへ遣るかいゝ と云ひながらお民の方を見る 【豊染】マア仲さんも文さんも。あつちへ御出なせんしと皆〻つれ立床へ廻る【露龜】ヘイ左様ならどなたもお休ミなせへましと けい若もかへりつとめむすこ女郎も床へ来る

上の巻

【長】飛ンだ今夜アさむいねへナゼお前寝なはらねへ【中】寝むらねへて居たのかわるかアかんにしな【長】おつな事を云なせへすね。モシわつちらが内のお瀧さんやお澤さんがね。おめへの噂をいつそ。でう〳〵しなへすよ【中】夫りヤア人違か。氣ちがいたろう【長】ソレテモお前にちげへハねへ。仲さんと云なせへせうが【中】世間に似た名も御ざいせう。おはもしな

がらわつちも仲ハ仲さ。左りか過れバ赤仲さ。どふで人にハいやがられるのさ【長】ソンナ塩やァ云なせへすな。てへげへ人が見て置やす。【中】そういふ事も有うかね。成程お前ハ見かけに寄ねへ革だのう【てう】わつちハいくつだと思ひなせへす【中】本町糸屋の妹か【長】夫ンなら一舛貰やせう【中】貳舛なら。まだ若く見らァ【長】ホンニむまらねへわつちは實ハ十九だよ【中】随分見かけハそう見へるが。口をきかしてハ束から。日が出そうだ【長】おきなせへし。お前ハいくつに成ンなはる【中】わつちけへ。ぶりかれんさ【長】なんのこつたへ【中】しらねへ風俗でも。有めへが【長】主ァ人の心も知らねへで茶ばつかり。云なせへすが。なんと實の噺ハいやかへ【中】聞たくつても噺して聞せ人が御座へせん【長】噺したかつて居るものか。有めへ物でも御ぜへせんが有た時にハ夫ンなら聞てくんなはるか。どうをも主がさげしミなせへせうと思つて。云てへ事か有けれど。いわれやせん【中】思はせ振も能じやァねへか【長】夫なら云やせう。とふぞお前わつちが所へ一通りならず來て。くんなへす氣は御坐いやせむかと。云てもおめへの様な革羽織ハ。所詮情ハねへけれども。其情のねへ所がわつちハよふ御ぜへす。何所へも彼所へも情の有のハ面白く御ぜへやせんと。お前の心もしらねへで。いけあつかましく云でもねへのう【中】情の所は兎も角も。わつちが様な革草履か。女草履の

美しひ。おめへの心にあい形なら。直翌の晩うら付草履。夫より今夜も歸る氣ハ。中貫艸履で御ぜへすは。ホヽ敬而申【長】なる程お前と云ものハ。もう〳〵何も云やせん【中】コレサ今のハわつちが惡かつたが。實にそう云心ならと是より段〻はなし靜になりぬ

中の巻

【民】主しやァいやでも御せへせうが。とふぞ是を解ておくんなへゝし【留】あんまりいやてもねへけれども。つもられるのが恥しい【民】そふ云なはれバ。わつちをさげしミなせへせうが。必人にこんな事をハ。咄してくんなせへすな。わつちやァへ構ひハ仕やせんが。主の外聞に成やすよ□□□□□□□□【留】ナセそねへに人を嬉しがらせるのだ【た】どふした事やら今夜に限つて。こう仕てへのさ【留】おつァいふもんだせ。どなたへもじやァねへか【た】顔に似合ねへ憎ひ事を云なせへすのう。ホンニわつちやあんまりべたで恥しいが。いつそぬしにどうかしたよ【留】ナンタおもつちろくもねへ。夫よりこつちで首だけだ【た】まんざらかきでも。そう云れゝバ嬉しくつて成やせむ【留】共うれしいが氣かしれねへ【た】モシ氣がしれすァ今夜でも。わかる樣にしやしやうわな【留】よう輕はづミに仕そうなたちだ【た】ホンニお前が

承知なら。どんな事でも仕やせうから。なんてもかでも望なせへ【留】ナンボおめへの心中が見てへとつて初會から。どふあつかましく云れるもんだわつちを實に呼たへなら。おめへの胸に御こたへせう【た】よしく\何もいゝやせん（と云ながら下へ行丸を書と云て硯箱かりて來ル）【留】コゥお民何をする【た】何ンでも能から主の名を。此痩腕へ一ぺいに。いやであろうが書きなせへ【留】モゥそうしつと分つたよ【た】イン二へわつちが氣が濟ねへ【留】だつてもとふも余りたね（と云ながら左の腕へ書）【た】夫レて能ハへ針ハ爰に。最前おかくさんに彫ツて遣つたのが有よ。ヲヤいつそ錆て居るよサァ彫てくんな【留】おらァ終に彫た事がねへから。氣味がわりい【た】ホン二おめへハ情のねへ。どふして獨て彫れる物ンだ。いたかァねへからほつてくんなよ【留】どふもいつそいたそうだの（と云ツヽほりしまいて硯ばこなどかたす）【た】是じやァちつとハ。わかりやしたろう【留】わかつた所かわつちもほんに因果の種だお民さん夫をまたじき火あふりにハ御免だよ【た】お前それが實ならバ。わつちやァとんだうれしいが。ほんに誠に眞實に。其お言葉を必反古に。しなせへすな【留】ナニサわつちか詞より。お前の腕をどふぞ反古ニしなさんな【た】しつたかへ（と是より啣着くときれる）

下の巻

【文】コノあまァ海馬の雌犬を見たようだ。寢る程ねたら起ねへか。但ャ脉かあがつたか。寺まで人を遣せうか【須】置なせへしやかましい【文】やかましいのミ一袋か三文だ。正月やが十二文。此ふんばりが七百三十六文た【き】そう〴〵しいわな。わつちやァ今夜ハ名代だ寢めへもんても御せへせん【文】ソノそう〴〵しいや賑なて。しつて居れハ人間だ。爰じやァ一ばん云にやァならねへ聞ァあかれ。ソレ床へ廻ると聞たくもねへ身の上ばなし。十二の年に此島へ賣れて來たのと宮城のもどきも虫がいゝ。うぬが形の肥たといつちャァ小半年。川にひてた土左エ門を見た樣だ。夫でもなんだ五雨詰もあつかましい。伽羅の油じやあるめへし。よしなへゝしも聞にくい【須】わつちも云ハ云のだが。所詮いつても分りやせむ氣にいらざァ下リやせう【文】そうハさせねへ待ちやァかれ。玉を下ヶてハ曲がねへ。わへらが樣なふんばりやァ。世界の人の見せしめに。腹一へいに遊はねへじやァむまらねへ。マァ賑な此類で。是ても客の裏らが有が。是で苦界か勤まるなら。世上に盲がふへやした【き】ちつと斗ハ寢めえ物ても御ぜへせん。夫程寢るが嫌へなら。はりこの達摩を買なせへ【文】コレ其樣に酷のはへた洒落より

やァ。此指折の文様ンが店おろした間ャあかれ【き】ナニ店おろしへ。大根おろしがあきれやす【文】うぬらが樣な。俗な耳へハ通じめへが。通じる樣に云ァから。ふやけた骸をぶつつえて一チから十迄聞やァがれ。まづ茶の湯誹諧河東節是ハ扨おき苦界の道も。癖を仕廻ハ直うちがする。舟宿迄のみ一本ンが十六文。夫相應に酢も甘も承知して居る文さんだ（と段〻登高に成し故仲留民長も追〻に來ル）【中】文や何を筋ばるのだ【文】おめへ方も見なせへし。錢のいられねへ見せ物だ。いけあつかましいあの樣で。此胸悪の文さんを。扱へかゝつた心いきがおもしろへ。マァ此文が因縁謂故事來歷ニ緣起濫觴抑由來。ちよつとつまんで云なら。ソレ南贍部州大日本ンの花の江戸。其水道の水上で。洒揚たる大通だ。ちつと男ハ小が。褻穢しも仕た野良だ【中留】低くいつても分る事だ。あたり近所が囂ひ。ちつと靜にいはつせへ【文】お前方が向頬へ並ぶのか。こいつハちつと骨があつて。おもしろへ【留】ナゼおめへ今夜ハそねへな。愚智を云ァ【文】てん〴〵挊の遊びだから。手前斗が面白けりやよう御ぜへす【中】お菊さんも齒を染たやうにもねへ文に高へ聲をさせる事ァねへわさ【き】わつちも隨分勤める事ハ勉やした【民長】お菊さんだまつていねへ【留】モゥ歸るにいゝ時分だろう。一ッ吞て往やせう【中】ホンニ最遲いくれへだ。文一ッ吞て支度をさつせへ【た】（仲さんちよつと來ておくんなしとかげへ連行留が事をたのむ）【文】サァ歸るから跡祈禱に。料理番

でも呼つせへ（とむだ云なから皆つれ立下へおりる）【常】とんだお早ふ御ざへすね【中】早かァねへ明るくなつた【た】ナゼカいつそ今夜は夜が短けへよ【文】ミじかゝァ繼穂をするがいゝ【民長菊】ソンナラどなたも此間に【た】中さんおたのミ中やすよ【中】隨分承知次郎重忠さ（と云ひながら三人ともくゞりを出る）【留】中さん間なせへ八幡鐘だ【中】そうだろうもうはや東が白面で來た【文】ホンニ遊びもげえるがつらい水だ。是でもやつはし懲ねへのさ【松ヤ若者】左様ならどなた様も御機げんよう【三人】おさらバ〱コゥ常や。太義なからどうぞ急ひで貰おふと。云ッ、蒲團を引ッかぶり跡白なミの上をゴウ〱〱

跋

徃者ハ日々に疎。來者ハ日ゝに親シイごげんを願ふ君達へ。歩行を歩運三人連予も四ッ明に一二三度。取替貰て通ひしが。一度が二度。二度か三度。阿漕か浦に引網も。度重なれバ毛氈を。かぶつて蟄居の我身の上。身で身を惱とおもえども。未心には忘れ兼。梦〳〵と机に寄掛り。筆の命毛續まで。おもふ事のこ書記せり

和唐珍解

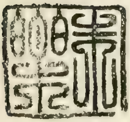
和唐珍解序

素聞崎乃繁華之地景勝之郷也就中丸山寄合之間
かねてながさきハはんくわなところですぐれてよいところとうけたまわるなかんづくまるやまよりあいのまちハ

名妓多少而粧扮好了客貨比他三估一估也我們久
よいぢよらうおほ〳〵いしやうなどもよいともふすそのうへものいりもはか〳〵よりこしろやすひげにござるわれらいち

思一遊焉万里行路無奈今般唐來三和作和唐珍解
どハないつてあそんでミたうござれどミちのこをいにいたしかたがござらぬところにこのたびとうらいさんなわどうちんかいといふさうしを

戲文是私的大造化閼一閼歡一歡朱樂館主人序
つくられたからこれてそわれらがおはしやわせとくりかへしミてハうれしがりくりかへしミてハうれしがりあけらくわんしゆじんじよす



序

夫支那の地まハりハ漢に游女ありとうたひ天竺の貝多羅ハ衒賣女色とかきのめすわが日本の二ばしらハ床柱にもより給ハす蒼海原の青傘に萠黄さなだの紐といて出合のひとつ穴にえやと天神七代五代參地色ばかりをかせぎ給へば人の代となりて伊勢源氏の物語にも指切髪切のまことなく二條后若紫もおいらんの意氣地心元なし今や京の女郎に江戸のはりをもたせ長崎の衣裳をきせて大坂の揚屋で遊ぶ自由自在の樂を得る時にあひて和漢の人の大一座晦日の月のまん丸山にむすび卵の四角な文字を唐來參和といへる中位な色男あらゆる贅にかきねの外ふらりと

さがる瓢簞で鯰をおさへた大あたりれ慥なる物から我等請人にたつものならし

四方山人

和唐珍解

唐來參和著

雲想衣裳花想容と清平調の詞の華花艶とて不如容人老て不如花華あれハ人人あれは華の都も余所ならぬ仇の浮名をなが崎の色の丸山角とれて和らぐ國も異國もかわらぬ戀の道芝を喇叭嗩吶吹立てそゝりぞめきの華人旅館の夕の徒然に通詞諸とゝ打連てうかれくるわの娼家入是客中の客ならん

大明李蹈天従者ニ向ひて【李蹈天】儞們可回厺【從者】領旨【李】明朝早些來我在這裏等候快些厺了不可路上作耍【通詞和田藤内】多勞多勞【從】厺了と皆〳〵かへりかゝるをよびとめ【李】儞們等一等【從】有何貴幹【李】休要賭錢【藤】崑崙奴有些事故不要厺【崑崙奴】領旨【從】明日再來迎接と皆〳〵かへるくろんぼうひとりのこる【藤】若者ハ居らんかわかひ者〳〵【若者】ハイ〳〵どつつさまだどなたさまだ是ハ藤内さま御あんないとハきよといぞ〳〵と飛下りしやれる李蹈天ハこれを見てはらをたちて【李】沒規矩奴【藤】コレ〳〵若ひ者兼てそういつて置に是ハどふしたものだ唐の客人にハそのやうにしやれてハはらをたつ翻身便拜すといひ又撲地拜下などゝいつて天窓を地へほりこまねへければかてん

せぬよ【若】ホンニそうで御ざりました是ハ大きに不調法【李】得罪我了我饒不得他【昆】苦哉苦哉【藤】請息怒他的不是了【李】狡猾的人下次再須要小心些【若】マア〳〵二階へ御あがりなされませ【藤】請上來坐【李】樓中有蜘蛛網【藤】蜘の巣だらけではないかとおつしやる【若】是ハまた悪口ばかりまづ〳〵皆々御通りなされませ【藤】崑崙奴偏跟著我來 ト皆〳〵娼家へ入り二かいへあがるくろんぼうハ供アヤへ入る【藤】李君且上面坐了【李】怎敢【若】今晩ハ能ふこそいらつしやりました【李】初相見【藤】始てあふたとおつしやる【若】ハイ是ハありがたう御ざります ト申てもしかし通じますめへ藤さまよろしく御うけを【藤】ソリヤアどふでもいゝ夫よりちと談る事があるちよつとあすこへきてもらおふ トたちあがる【李】哥哥那裡去【藤】有些事情【李】去了來 ト藤内へらうかへ出若者ニむかひ【藤】コレ外の事でもないがけふつれてきた唐人ハ大明の李蹈天といふ金持だからあいかたの女郎ハ梅檀を出してへものだそこいらハ手めへもソレよしか【若】しかしちとみかたミぐるしいね【藤】コレ家暮をいわつしやんな手を出さつせへ ト金を壱分はづむ【若】コレハありがたう御ざります シテおまへさまのハ此間の通り【藤】新造さ〳〵【若】よふ御ざります何事も方寸にありで御ざります【藤】しんのたのミだぜ ト藤内ハ座敷へ来る禿たばこぼんもち来る【禿】藤さんお出なんしたか【李】個裡來【藤】爰へこひとさ【禿】わつちやアいや氣味

がわるひ【李】沒有可怕的事【藤】マア側へいつてみや【李】愀住他、【禿】ヲヽこわヱヽ
モウ【李】爲甚奈使不得 トだき【禿】アレよしておくんなんしいつそ顏をなめさつしやる【李】
休要囉數【禿】ヱヽモウうるさい トふりきりにげて行【李】休要跑脱姐妓面前不可告知【若】
ちと召あがりまし【藤】いかさま李哥喫一抔【李】好了 女兩人出る【梅檀】どなたもよふ御
出なんした【藤】きつい御もつたいだね【梅】ナニそうじやァおざんせんけれども【李】這箇
杯兒奉獻娘子 ト此所和漢かわらず古風の通り歪事あり略之【李】今日爨始相見【新】モシ主がなんとかおつせへすぜ【藤】
はじめてお目にかゝつたとおいらんへの挨拶さ【若】とふでもからのお客さま方ハ御叮嚀で御
ざります【梅】こつちからも何とぞ相應にいつておいておくんなんし【藤】せうち〳〵。初接
高風不勝欣躍若蒙不鄙棄感謝不盡【李】這般殷勤折殺俺也【若】なんだか唐音
と申物はむづかしそうな物で御ざります【李】敢問娘子尊名【藤】喚作梅檀【李】青春
多少【藤】今年一八【李】衣裳齊整容貌嫖致生得出塵【藤】當時名妓數一數二【李】
多虧得名妓眞正多謝得緊【若】恐ながらあなたちとけんじませう【藤】壯客奉敬一杯喫【梅】
ソレ一葉お酌をしやな【禿】アイ【李】滿灑一盃【藤】しつかりつげとさ【新】せんてへあつ
ちの客衆ハ酒が强ふおざんすねへ【若】せん頃御出なされました朝鮮のお客さまハどふなされ

ました【藤】ム、功慶子か此頃ハ寄合町へ斗のぼせていくよ【梅】主なぞもお出なんせうね
【藤】ずいぶん折ふしめへりやす【李】娘子喫烟【藤】客から女郎へつけさしもありがてへ
それおいらんたばこを呑とさ【梅】よしなんしそんな事を言なんすな【藤】吸口を折て呑と腹
をたつぜ【梅】見つけなんせんからよふおざんす【李】藤内哥哥敬僩一盃【藤】どふも此酒ハ
ちと甘口だ是その子ァノ供部屋へいつてくろんぼうにそふいつて持參の酒があるはづだから持
てきや【禿】アイ【若】只そふ斗でハ不通で御ざりませう【藤】ホンニとういんでなければ幕
が通られへいつたらの那箇四角酒快些將來といふと拿進來とか何とか言つてよこすよ
【禿】なく子がすきだとへ【新】ホヽヽナニそふじやァねへわな【禿】それだつてもおかし
くてどふもいわれやせん【若】エヽ役にたゝねへ唐音も何もいらねへおれがいつて取て來よふ
卜立て行所へらうかよりほうばい女郎【青柳】藤さん【藤】なんだ【青】たゞ【梅】青柳さんおはいんなんし【青】アイ
とそべへ來て　藤さんわつちが客人ハなぜきなんせんへ【藤】ム、吳三桂かけふさそつたけれども用が
あるとつてこねへとによると跡からこよふよ【梅】たばこを呑なんし【青】アイ【藤】毛唐人
でもアリヤァ色男だからがうてきにのぼせるの【青】よしなんしきざな【藤】ハテそういひな
さんなあれも八九年も續てこつちへ來たろうが此國の女郎買の馬をりハッレおめへだハよしか

あれも日本の言語を覚へおめへも唐音をおぼへるほどの久しい馴染て床のこんたんにも何かゞゆかつて書合をしようといふものだからッレ一とをりじやァねへよ【青】どふだかしりいせん【藤】ナニしらねへ事がある物だァノせんこうの匂ひをかぎしめるがさいごのすけ【青】此通詞めがいわせておけばコレから哥さんそつからこそぐつてやんなんし【新】ァイ【藤】ァ、あやまつた／＼コレあんまりさわぐと此唐人かてれてゐるからまた機嫌がゆるひ【青】ナニ唐人にかまふ物だ【李】藤哥不可揷口喧嚷得緊【藤】請恕請恕○ソレ見たがいゝしかれた【李】俺的性兒不喜歡鬧動只喜歡閑靜【新】なんだとへ【藤】てめへにほれたとさ【新】へヱ、【藤】サア青柳さん一杯呑ねへ（ト盃をさし唐人に向ひ）爾認得他麼、【李】我竟不認得他【藤】與三桂的妾也【李】敢領尊盃【青】わつちかへそんならはゞかり申しいせう【梅】なるほど青柳さんハよくあの言葉を聞とりなんすぞ【李】酒壺酒壺【藤】在在（ほうばい女郎らうかよりそつとぬきあしして來り藤内が目をおさへ）【錦州】あてゝ見なんし【新】アレサだまつて押へなんすりやァいゝに【藤】ハテナ是斗ハ誰だかしれねへ【錦】ホ、、、なんにもならぬ事をした○今夜ハよくきなんしたね【藤】サア下に居ねへ【錦】ぬしやァへ【藤】あれハせんど咄した李蹈天といふ毛通人さ【錦】へヱ、（ト唐人にむかひて）モシおはつにお目にかゝり申しんした【李】（濁言）今日天色好【錦】とふぞ是からこつち

へも御出なんし【李】阿阿酒醒了些（あゝゑいがちとさめた）【錦】さやうさ【青】ホヽヽヽ、錦州さんそりやァまァなんの事だへ【錦】なぜへ【藤】おれもあまりがてんがゆかぬからだまつて聞てゐたがこいつハ大わらひだ【錦】マァ聞なんしあのわつちがねこと葉をかけいしたら近日どふとやらいひなんすからあてづつぽうにどふぞ御出なんしといひしたらァ、あつひとやらいひなんすからさやうさといひしたが違ひしたかへ【藤】氣がちがつたそふさ【梅】そしてぬしハなんといひなんしたのでおざんすへ【藤】ぜんたい唐人がこの子の言葉をかけたを聞つけねへで獨言にけふハ能天氣とか何とかいふとどふぞ御出なんしァ、醉がさめたといふと左樣さなんの事だかねつからおかしい【ミナ】ホヽヽヽハヽヽヽ【李】笑甚麼休要唉話我（なにをわらふおれをわらひものにするな）【藤】休要惡猜（じやすい〱よしやれ）○コレミんなわらハねへがいゝ手めへの事かとおもつて此毛むしがあつくなつた【李】敢問笑甚麼（そしてなにをわらつた）【藤】此妓好唉得緊（このこがおかしいから）【李】新來的在個裡頭要則箇（いまきたこゝにゐてあそびなせへ）【青】錦州さん爰であそべとさ【錦】アイ　若者酒を持きたり【若】サァ〱御酒をもつて參りました【新】ヲヤいかい事持てきなんしたねへ【梅】その中に居るのハなんだねへ【藤】こちらのハ蠑螈これが蛙その次のハ蛇【青】きミのわるい生ていゝすかねへ【藤】何こしらへ物さ【李】硝子透亮了好看（びいどろがすきとほつてミごとだ）【錦】此酒をマァ呑なんすかいやだノゥ【禿】モシアノ此事斗ふらそことといふとおもひゝしたら天井の事もふらそことい

ふねへ【青】ナニばからしいそりやァふな底だわな【李】我喫酒出酒鍾（おれハさけにしようちよくをだせ）【藤】酒を呑ふといふちよくを出しや【禿】アイどこにへ【梅】エ、この子もぢれつてへいつもの引出しにあるわな【禿】アイ（ト引出しよりこつふを出し唐人にわたすとさけをのミて）【李】最好且請試用一盃香氣妙極（づんどよひこゝろミにいつはひのミたまへにほひかミやうたよ）【藤】好了（よかろう）【青】わつちやァ一寸いつてきいせう（トたちあがる）【李】再坐喫談（まつといてはなせ）【錦】そんなら後にきこらい〳〵【青】パア〳〵【藤】覺るもんだの【青】ホヽヽヽヽヽ（ト笑ひながら出て行　藤内へさけをのミて）【藤】不但香氣好味道絕妙（にほいのいゝばかりでもないあぢわいがミやうだ）【若】此酒を女郎衆がのむとむしせうにその客人がかわいく成といふ事でわ御ざりませぬか【新】おいらわのむめへよ【李】担火來（ひをもつてこい）【藤】それ火かなひとよ【禿】アイ【李】少些拿來（ちつともつてきや）不要多（おゝくハいらぬ）ヒイレイイヒイレイ【錦】ヲヤ唐でもあの事わ火いれといひすかねへ【藤】何日本の言葉を覺たをじまんにいふのだ【若】どれいつて火をいけておかふ子供とりにきや（トたつて行）【梅】ア、言葉をおぼへなんすからめつたな事わ言われねへねへ【藤】ナニこの唐人などわことしはじめて來たから鼻の先でわるくいはれてもしらねへ【李】俺嘗認得那个娘子（あのこハおれがよくしつているよ）【藤】錦州さんおめへをバミたと言がおめへしつてゐるか【錦】いゝへ【藤】ム、夫ミ此中備前屋へつれていつた時おめへがミせにゐたからそれでだらう【梅】ナセあつちへわ行キなんせんへ【藤】鶏をぬすミにかゝつて見つかつて逃る拍子にまがきのどぶへ落てそれから面目ながつて行ねへべ

らぼうなやつさ【李】ハアクッサメ喫糞了【新】ヲヤくしやミハ唐でも同じ事だねへ【藤】ひとりでに出る物だから同じ事さ【李】ハアクッサメ那箇說我事也【藤】先刻そゞでわるくいふものをくさめも出ねへてどふするものだ【李】ハアクサメ傷風不耐煩【藤】是不好了【錦】ヲヤ羽織を着なんて李蹈天【李】多謝多謝○量尺正有了分寸不錯了眞正相像了【錦】したかたちハよくふくさんに似て居なんす【藤】福とハ福輪主が事かあれハ紅毛人だ【李】像不像比一比看【藤】どふしたか今のことゞがしれたそふだ【李】娘子休要客套【藤】モシ何さん客しんにするなとさ【梅】ついぞねへ【李】喫些酒麼【藤】他是淺量【李】愛的甚麼東西【藤】最愛彈唱【李】藤哥彈絃【藤】請免【錦】なんだとへ【藤】おれに三味せんをひけとよ【新】彈なんし【錦】コレ三葉そこの三味線を出しや【新】サアひきなんし【藤】どふもひさしくひかねへからなぞとうぬぼうもうつとふしいか○若辭不脫【李】又來自負了【梅】モシいつそね唐の唄を彈て聞かせなんし【藤】おもしろくねへやつのてつぺんだよ

一更裡天○一更裡天○月照紗窓○人也末眠○被襖兒○寒凍得渾身上腫○我的肝肝我的心肝

○何處貧花○撇下了我○撇下了我○爾在花街上闖○【李】越更感激【錦】モシそれで

こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ

しまひかねへ【梅】いつそばからしるもんだねへ【李】唱得妙端的是聲淸韻美字正腔眞
另外好聽【藤】唐人ひとりほめるやつさ【新】それより日本の淨瑠理をかたつて聞かせなんし
【藤】それではまたこいつが譯がしれねへからてれる【錦】ソリヤアよふおざんさァな【藤】
そんなら斯ふしよふ此中あれが淨瑠理をのぞむから唐音に直して置たそれをかたつて聞かせう
【梅】それハ又こつちでわけがしれへすめへ【新】なんでもマァかたつてきかせなんし【藤】
何にしようなム、嚱鎧の身替り場にしやう【李】快些唱來【藤】又調子を直して日月互明懸配天
豈偶然浮雲有覆失光年幼玉母后堪憐似楚囚可傷焉永非右馬頭宜明領命囚監折から若者きたりて【若】
モシおつれさまかお出なされました【藤】吳三桂か【若】さやうで御ざりまちす【李】那箇來了
【藤】吳三桂的【李】他也來得好【梅】是ふた葉その三味せんをかたつけや【禿】アイ【錦】
わつちやァいつてきいせう【藤】ナセマア遊びなせへ　錦州ハかへる吳三桂ハずつと通り座敷へ入【李】我等兩人老早到
這裏等候先生先生却如何恁地來遲了【吳三桂】飛也似奔將過來了越發越不明白列位
早至等久了恐懼不過【梅】今夜ハ能お出なんした【吳】多福【藤】那廂坐【吳】列位
在這裏我豈敢占上坐　靑柳來りてさしきへ入ル【靑】今夜ハとつち風が吹たかよくきなんしたの【吳】僑
居冷淡過日如年了【靑】それで來なんしたのかへ大かたそんな事でなくハきなんすめ

へうわ氣だのう【呉】小生不浮浪之徒不勝戀慕所以特地走將過來【靑】ソリヤァ寄合町の事かへ【呉】俺曉得儞今宵因有些障礙却來這裡戯弄我【靑】よしかそんな事を言なんすなたれも客ハおざんせぬ【呉】莫說慌【李】彼此雖辨可否【藤】我自心裏曉得了今夜差不多好了【呉】信不得【若】今晩ハよふこそ【呉】怎様久不相見【若】ハイ／＼鳥渡マァいつてまいりませう（トたつて行）【新】呉さん約束の小人島をもつてお出なんしたかへ【藤】小人嶋とハ【新】イヽエ　アノ枕箱の引出しへかつて置いすからさ【呉】一兩日內拿來了【新】またたましなんすな【呉】不敢說謊請勿生疑【禿】おいらハ小人島も何もいらねへ手長嶋になりてへよ【梅】ナセ【禿】高ひ所へ手かとゞひたりまた酌や何かをするにいゝからさ【呉】少妓是有件要相托之事【藤】是ふたばよぶぜ【禿】エ【呉】拿茶來【靑】お茶をあげや【呉】溫々的從家好不要大熱【藤】ぬるいがいゝとよ【禿】アイ（ト立て行やりて茶を持來りて）【ヤリ】ハイ內所から【藤】孃出甚麼【ヤリ】藤さま此ころはすきと御出なされませんの【藤】俗川にかまけてさ【呉】常常壯健【藤】おかわりもなしかとさ【ヤリ】ハイありかたふござります【李】要與婆々陪話【靑】モシ近付にならふとさ【ヤリ】ハイどふぞこれからお目をかけられてくださりまし（禿茶を持來り）【禿】ハイモシそこなちつと御茶を持てめへりました【藤】どれ／＼爰へよこしや【ヤリ】御

膳ハまだかへ【新】ィ、ェ【ヤリ】らちのあかぬどれいつてせつついてこよふハイ後ほどトたつて行
【藤】吳哥一盃喫得大醉也好【吳】宿酒未醒請免請免【李】要和爾化拳【吳】這樣事尤好請李哥在對面坐則箇【禿】おいらハ見ようや【李】走開去休要在個裏纏繞【靑】コレふた葉もちつとあとへさぶりやな【李】一〇五〇十〇雨〇七〇無【吳】四〇九〇三〇八〇六〇二【吳】那裡了【梅】モシこればかりハ日本のとあまりちがハねへじやァおぜんせんか【藤】ぜんたい唐土から來た物さ【吳】我不敢當【李】錯過了氣著不迭 此所へ若者しつぽく膳をもち出て【若】ちとそこを【藤】これハ跡へさがらざァなるめへ【吳】衆皆個裡來【若】どふも何もさしあげる物ハ御ざりませぬ【李】調理好甚麼東西都好喫【藤】把官路當人情沒什麼欵待有罪有罪【吳】半東感激【藤】李蹈天葱茶猪兒怎麼樣【李】是大明了【藤】料理がいゝとつてほめるよ今いつたアタ、シンリヤウとハこつちでいふ日本だといふのと同じ事だ【若】それハありがたふ御ざりますまことに何もあげる物ハ御ざりませぬがその牛のあんかけが御馳走でござりますふるせでハ御ざりませぬ
【藤】いかさまこれハ新しそふだ【吳】牛兒煮了吃更妙燒的滋味不好【藤】失陪請飯【李】要喫【若】鷄の血ハそのうよくに御ざりますこちらのハ羊の油でござります【吳】先生飯桶剩些【藤】又來弄舌【新】モシ口のはたにまんまがついてゐやすよ【李】講甚麼

【新】イ、エエサ爰にまんまが【李】越鑷越生我也厭了這個鬍鬚（ぬけばぬくほどはへろおれもこのひげにはあきはてたよ）【藤】てめへがあごへ手をかけたから髭の事だと思つてるやつさ【李】韮客吃一杯如何（わかいものハいつはいなるかとうだ）【吳】他是海量（かれハじやうごだよ）【李】喫了（さけなのめ）【青】和介どんそれ酒を呑なんしとさ【若】ハイありがたう御ざります【李】賞發他（かれにかねをくれてやらん）【藤】ソレ花をくださるとき【若】はなとハありがた山櫻〇しかしこれハなんで御ざります【藤】銀錢だよおれがほうへ持てきやいつでも金と取かへてやらう【若】ハイこれハありがたふござります【藤】コレ〳〵そこが例の通り三拜する所だ【若】ホンニそうで御ざりましたこうかね【梅】ヲヤばからしいなりだね【皆】ホヽヽヽ〇（若者あまりぢぎをするひやうしにたもとよりゑつ巾ふんどしのまろめたるを落すりとうこん手早く取あげて）【李】什麼了（なんだ〳〵）【禿】ヲヤ見なんし此人ハいもじを落さしつたよ【青】けしからねへ【若】是ハとんだ物をおとした（ト赤面する）【李】先生是什麼了（せんせいこれハなんだ〳〵）【吳】我也不知（おれもしらぬ）【李】藤内是什麼東西（とうないこれハなんだ〳〵）【藤】なんだ〳〵とつて聞にハおれもくたびれたぞ〇日本頭巾（につほんのづきんだ）【新】アレ見なんし紐の結び目を口でくわへて解なんすハな【若】是ハどふもたまらぬあなへも入り度なつてきた【李】好這一頂新頭巾（こいつハいゝづきんだ）（トあたまへかぶりて紐をあごの下でむすぶ）【青】ヲヤどふせうのふかぶんなんした【藤】おれも言やうがないから日本の頭巾だといつたによつてさ【若】モシ藤さまおがみますおかへしなさるやうにおつしやつてくださりまし【禿】いつそおかしくつて腹がいたくなつた【李】這个頭巾甚麼價錢賤則我也要買（このづきんねだんハいくらだやすくハおれがかいたい）【藤】

價金三兩二分【李】價錢賤【藤】爲什麼【李】奉献大明皇帝【藤】わざハひも三年とやらァノふんどしを買たがるぜ【若】是ハとんだ事だシテ何になります【藤】國へ持つていつてあつちの大王へ献上物にするとよ【靑】いかな事でも【李】我强買了好好說一聲【藤】あれをむりに買といふが堀出しといふものだいつそうつて仕廻わねへか【李】怎麼樣准不准【藤】備細說知他說道現金賣不賒的【李】算還價錢　トふところより二兩二分金を出して渡す【吳】好枉費了錢財【藤】サァ〳〵若者此金ハやまわけだぜ【若】それでも【藤】ナニサかまふ事ハねへそつちへマァ金をバしまつておいたがいゝ【若】ハイ〳〵【李】買着了利市【藤】アレいつそよろこぶハな人をちやにしたせんきだ【梅】ついぞねへ【吳】崑崙奴在那裡來吃酒【藤】いかさまくろんぼうめを爰へよんでちと酒をのませてさわがせう【靑】なんぞ藝がござんすかへ【吳】他是手藝極多專做帮閑過日【梅】何をしいすへ【藤】かるわざがきつい物だよ【若】是ハついぞ見ませぬよんで參りませう【禿】わつちがいつてきいせう　ト立て行【梅】かるわざならむかふの舞臺でさせてこゝから障子をあけて見なんし【藤】それがよかろう○そこの三味せんをとつてよこしや【新】アイ【李】煎個燭心再明亮些【靑】らうそくのしんをきれとさ【若】ハイこゝいらへ置ませう○　らうかにて【崑崙奴】餘外有什麼客人若太拘禮我要辭了不敢去【禿】

アレサそつちでハおざんせんよいつそまつくろだからどこにいさつしやるかしれねへ【崑】那里那里黒地裏是個雖走【禿】一所にきなんし○サアはいんなんし【崑】有何事情【李】來來喫一杯【崑】感激不盡【藤】ぐつと大きな物であをらせるがいゝ【哭】儘着飮得眞個大海量【新】はやくかるわざをさせて見なんし【若】マア跡でさ○かさねてあかれツレお酌【李】異樣好看【藤】儞做輕捷【崑】領　旨（ト酒をかさねての三立あがり一ぶたいへかゝる藤内ハ三味せんをひく皆々けんぶつ）【哭】娘子們這拔宸有趣請看一看【青】せんだんさん見なんしとさ【梅】アイ【李】大干係得緊【哭】有趣得了不得【藤】衆位請喝采【哭李】妙極よ（くろんほうハいろ／＼の芸を仕習てくたつの所へすれる）【若】なるほどおそれいつた物で御ざります中／＼日本の人などにハ出來ませぬ事で御ざります【梅】わつちやアあぶなくてろくにミいせんわな【新】いつそおもしろかつたねへ【崑】阿阿疲倦【藤】多勞多勞【禿】アレ見なんし此人ハ鼻の下をいつそなでさつしやるよ【藤】あれハ今のかるわさの高慢さ日本でハあごの髭をなでるが唐土でハ何ぞといふと鼻の下のひげなでさ【梅】けしからねへ【李】再喫酒【哭】滿灑【崑】沒道理【李】豪傑勉强【若】ぜんたいつよい酒で御ざりますす【哭】使賭氣飮了好個海量【崑】此等歡喜事難再有了【新】アレきたねへ此人ハ鼻くそをとつて肴にさつしやるよ【皆】ホヽヽヽ【藤】あのさけをのんだら又おどりをおどらせう【青】どん

なおどりでござんすへ【藤】此比日本の跡をおぼへてへといふがそれよりはいつそこれが得手ながぼちやおどりがよかろうとおもつてふしも手も其まゝにして文句ばかりこつちの言葉に直して教て置たよ【梅】ミたいもんだね【藤】おとらせて見せう崑崙奴來做戯文【崑】領旨（トまた立あかる）【李】什麼了【藤】他是一味裡用心學日本小曲【巽】好了好了○（くろんほうへ立あかりておとる藤内へ三味せんたひく）【崑】へいきんのさまきのそのきのさまれ○じしんさまきのそのきのさまよ【藤】小曲差了○雪の柳のその樹のさまれ如期唱【崑】いきのさまきのそのきのさまれ○如此也不差麼【藤】兀自差了【李】大醉酩酊舌頭也不聽且罷休了【巽】使得了【青】モシありやァしやミこおどりといひすしやァおぜへせんか【藤】暹羅といふ國に甘波邪しやむろなどゝいふ國が類してある其國から出たおどりだからかぼちやおどりともいふ又しやむろ踊といふべきを指人がいひあやまつてしやミこおどりといふのさ【新】モシあの人の背中のぽち〳〵白ひれなんでおざんすへ【藤】アリヤア今夜灸をすへるはづでごふんで点をおろして置たのさ【梅】ほんにかへばからしい【崑】阿阿爛醉如泥請免請免（ト盃をなげ出す拍子ニ銚子がころぶ）【藤】これハしたりなんぞふく物を【若】ハイ〳〵【李】崑崙奴可惡【崑】有罪有罪請免請免【巽】初始相會不得無禮須要小心些【崑】請恕〳〵【若】サア〳〵雑巾【李】不要拭（ト雑巾を引たくり唐紙を出してふかせる）○

有趣綿布（おもしろいもめんだ）【藤】爲什麼（なにゝする）【李】要做盛烟袋（たばこいれにする）【青】ヲヤあれをたばこ入にしなんすとさ【梅】どふしてねへ【藤】大かた持ていつてぬれせるのだろう【崑】這个雛妓十分嫖妓忍耐不住（このこハいかふうつくしいどふもたまらぬこたへられぬ）ト禿にらうしろからだきつく【禿】エヽモウ此人ハいやらしいよさつせへな【藤】手めへにほれたせ【禿】すかねへ【崑】吃驚了扭轉身來不要瞞不要瞞【禿】アレしつらつこい背中に鼠が居るハな【藤】どれ出して見せや【禿】ヲヽくすくつてへまだ子でおざんす【梅】モウ目があいたか【畏】什麼了（なんだく）【青】ねづミの子で御ざんす【李】請一看（ミせやく）【藤】見せろとよ【禿】わつちやァいや【梅】お目にかけやな【禿】アイ【新】それにげた【藤】どつちだ【若】たしかこつちほうへ【崑】鼠兒（ねづミハ）在這裡（こゝにいたよく）ト鼠をつかまへそバのいり酒をつけてくつてしまふ【梅】ヲヤ【畏】休做沒良心的事（むごいことをするなよく）【崑】美味〳〵（むまいく）【新】けしからねへ此人ハくわしつたよ【若】これハとんだ事で御ざります【禿】エヽモウにくい人だせつかく人がかわいがつてかつて置く物をト泣顔になる【藤】なく事ハねへこんどおれがいゝのを持てきてやろうよ【李】笨物事動不動要癡呆（あほうものかやゝともすればたハけをつくす）【崑】ゲエ〳〵〳〵【若】これハどふかしたそうで御ざります【藤】マァ廊下へつれていくかいゝ【青】せなかをさすらつせへなト若者せなかをたゝくと鼠の首玉と鈴を吐キ出す【畏】嘔吐【李】是醃臢得緊（これハきたないく）【若】くびたまと鈴をのどへひつかけたそうで御ざります【崑】硬礫咬不碎【新】わつちやァ胸がわるくなつた【禿】いゝきひだいつそ今のでしんでしまへ

へいゝ【藤】あまり酒がすぎたから鼠をくつたりふざけたりするからモウいつぞ寐かすがよか
ろう【若】ホンニきついゑひよふた鳶いろになりましたサアくつれてまいりませう【吳】崑崙
奴厺房裡罷、【崑】多承厚欵感謝不盡列位安置【若】サアく一所に行かつせへ ト手をとりてつれて行く【李】
崑崙奴這厮跟跟蹌蹌的厺了也好笑【藤】くろんぼうで大笑ひをしたモウ何時たか ト頓の根付時斗をみて
モウ九つ半時だ【吳】夜深了【李】我也倦了些、【吳】角落頭房裡厺睡一覺也好 若者來り【若】
さて今ばんはいろくとおもしろい事をミました○ちとあちらへいらつしやりまし【藤】よか
ろうく【吳】厺了厺了【若】是子ども見通しへおつれ申しや【靑】なにさんついでにこ
のたばこぼんをあつちへ持て行なんし【新】アイ【李】那里那里【禿】サア御出なんし 是より二人共出る
ト藤内はひとりふとんの上に寐ている所へ新造來り【新】藤さんちよつと耳を出しなんし【藤】だれも居やアせすなんだ言やな
【新】イヽエ まだやりて衆やたにかゞむきてゐるからおいらんは後に見あれせて來なんすとさぞ
つとおめへさんにそういつてくれろといひなんした【藤】ソリヤアそれでいゝからちよつと火
を一つ持てきてくりや【新】火かねへとへアイついでに茶もくんできいせうか【藤】ふ、それ
も一はい【新】くんできいせう ト立て行李縮人へ奧の座敷に二たいくつになりしやきゞすを聞ふ簾開へる 〔兀的昆蟲猶雙飛鳳蝶上下不失
偶才貌相攜倶有情 此所へ禿來り【禿】藤さんくあのねおいらんの客人がさつきからニヤンツウニ

ヤンツウと言なんしたがねまたいま大きな聲をして何かおつせへすが何の事だかちよつと御出なんし【藤】ム、そりやァおいらんを呼べといふ事だ【禿】アレお聞なんし何かいつそ大きな聲で【藤】ドレ〽蝶也亦何知菜有味嗚呼俺不知趣他沒深情【藤】ム、ありやァたいくつしたからさゝすをうたふのだいやなやつの【禿】うつちやつて置てもいゝのかへ【藤】ム、【禿】おやすミなんし ト出て行新造來り【新】サァおあんなんし【藤】ありが〳〵【新】モシそれもどうか唐音のやうだね【藤】ナニ唐音でハカンキといふ【新】モシどうぞわつちにとういんをちとおしへてくんなんし【藤】ずいぶん〳〵【新】さつきしなんしたけんハあんまり違ハねへやうだねァレをマァおしへてくんなんし【藤】アレもむつかしいのさダリだのガレンだのロンジだのサイナンだのとつて急にやァ覺へられめへ【新】ナニほんとうのをおしゑてくんなんしいつそね書付てこんど持て來てくんなんし【藤】持てきてやろう其代りに手めへに無心があるきひてくれるか【新】なにをへ【藤】おいらんにかくして氣をやつてさせねへか【新】アレわつちやァいや【藤】いやな事ハねへおれがあいかたハ手めへだから爰へ入てねかさねへけりやァならねへ【新】アレサモウよしなんし藤さんしつぶかなア引 おりからうかニて【梅】から哥さん〳〵【新】アイ【梅】爰へちよつときなんし【新】アノ ト立て行此風の外にて兩人さゝやく【新】アノ香爐のかへ【梅】そつと引かへ

て【新】アイ ト新七ハ出て行せんだんハあたりを見て内へはいり夜着をまくつてぐつとねる 【梅】ヲヤ此あついに夜着をさかさに着なんし○何を
そんなに腹を立なんして挨拶もしなんせん【藤】盗人たけ〴〵しい腹をたつた譯ハ手めへの胸
にある事だ【梅】ナゼエわつちがむねにどふも【藤】ヲヽどふも言わけハあるめへ【梅】ナゼ
エあるのさ此中もいふ通りソレアノ客ハ畫踏衣裳をねだろふといふ所だから【藤】ヲキヤアガレ 畫
踏衣裳ハアノ髭むしやにさせるつもりだからそれで今狂夜言をかいてつり出した是程手めへを
思ふとはしらねへてそれにくつつゐて【梅】よしなんしそれだによつてあのきやくハなんでも
ねへ事にあいそつかしをして切てしめへやしたぜんてへこの比ハぬしが氣があぢになつたよつ
き合のなんのといふハ附たりより合町におもしろい事でも出來たろう【藤】そんなら寄合町
へいけバおれを長棹にしてつき出してしまをふといふのか【梅】どふいへばかういふとソリヤ
アぬしが邪心といふ物だ【藤】邪心だかおんりやうだか女の心ハしれねへ【梅】おなぐらを取ぐつと引よせ コレ
ぬしハ【藤】氣が違つたそふさ【梅】アイ氣がちがつたのさよくつもつて見なんしぬしが客な
ら突出すの長棹のといふ事もおぜへせうけれ共かうして苦勞氣兼をして人の目顔をしのんで逢
ふ中じやアおぜへせんかハテ突出す氣ならおむつさんといふおかさんの有をしりつゝかうして
【藤】かうしてどふした【梅】待なんしたれか來た ト夜着の外へ出ろから哥來る 【藤】誰だ【新】わつちでおざ

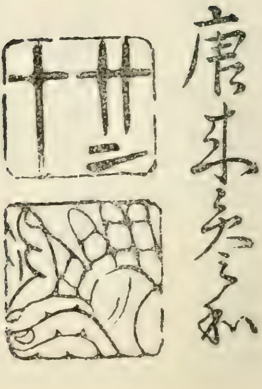
んす【梅】そんならいゝに出そんをした【藤】其持(そのもつ)てゐるのハなんだ【新】おいらんが此せん香(かう)の匂(にほ)ひをいやがりなんすから下(した)の佛(ぶつ)だんの蘭花香(らんくへかう)を持ていつてそつとすりかへてきいした【梅】唐人ハモウ寐言(ねごと)でも言(いつ)ていなんすか【新】ナニ色(いろ)〳〵の道具(とうぐ)をかざつてふとんの上(うへ)に待てゐなんした 折からりとう天らうかにて【李】白日地等到幾時(パツヘツテイテンタウキイスウ／いつまでうかうかとまつことだ) ○娘子〳〵(ニヤンツウ／おいらん〳〵) ○栴檀婦人那裡去(セエンタンウ、ジンニア、リイキユイ／せんだんふじんどこへいつたか) ○娘子〳〵(ニヤンツウ／おいらん〳〵) ○吳哥〳〵(ウヽカウ／ごさんけい) 聞つけて來り【吳】有何貴幹(ユウホウクイカン／なんだ〳〵)【李】栴檀那裡去(セエンタンナア、リイキユイ／せんだんハどこへいつたぞ)【吳】我也不知(フウエ、フツチイ／おれもしらぬ)【李】藤哥〳〵(テンカウ／とうない〳〵) ト藤内がざしきへはいりにかゝろあかりをふきけす【皆】ホイ

跋

九州郭中の五人に變窮變和氣の二人を加へて七人一座の間違ひだらけも時にとつての滑稽ならん其こつけいかうと鳥がなく東の人のはらに合せて嘘と實の合の宿落〻羅れおきに支那もろこしきいた風土の風俗にざつと小菊のはなをつまんで珍ぷんかん鍋の耳に殘りし事を中〻丸山唯まろかれとおもひ机に向ひしも方〻に筆の誤あれ〻御さげすみもあらんかと負おしみやら言譯やらちよつとしりへに此事鋸屑もいへばいふ

唐土乾隆五十

日本天明五年　乙巳初春



狂言鶯蛙集　全二冊
此書ハ家〱の狂哥秀逸をあらハす

狂詩選諺解　全一冊
四方先生の詩をゑらミくわしく註をしるす

和唐珍解　全一冊
唐土の宿に日本の遊君長さきのあげやにてあそびをしるす

耕書堂

ムスコヒヤ　全一冊
此書ハけいせいの心いき客のいきぢ柳花にくわしく手をつくす本也

新美人合自筆鑑　彩色摺
並吉原傾城の自筆をあらハす

新板
東海道狂歌名所雙六　をり本一冊
さいしきすり

江戸通油町
蔦屋重三郎梓

令子洞房

令子洞房叙

京傳に水破の革の息子部屋あり。是を胴乱にせんとすれば。放蕩の唱にかよひ。これを巾着にせんとすれバ　彼欠債に苦あひ近し。其欠債に勞せんより。寧放蕩に遊バむにはと。すき〲しき心のすさびに。昔し雨夜の品定を撰し。かこの品しものきざみ。有趣人の規矩につきてとあれハかゝりあふさきるさに。あしといひよしとさだめ。よし原女郎衆のはりをゑらみ、遊子のあなを穿ぬればバ。とこに一箇の嚢入となれり。予嚢中を探て作者のもと代を窺に。意味ハ仙袂の巾着よりもかるく。論ハ珊瑚樹の巾着よりも尊し。所謂女郎買の虎の卷と。傾城の智

悪嚢と也。底を叩て口訣を説。疊を扣て口舌を辨ず。通計都て十二篇。壹兩二部を一巻とし。以て新吹の楠廷尉が櫻井の巻に比して。海内の令子に授。郭中の花娘に與よと進む。書肆何がしそれを奪へるがごとく。遂にひつたくれんげの革細工をなす。いんでんや此世にうまれたる。士農工商。入込の遊治郎。是を佩て廢ざる事。助六が印籠のごとく然らば。期月にして通と成。女郎の涙を緒〆とし四角な玉子を根つけとせん。豈囂〻洒落本の胡麻胴亂。此息子部屋に逮んやと。貴賤上下おしなめてこなかんせん縫のいとくちをしるす。

戀川すき町

自序

革の極品なるを。ムスコビヤといひ。女郎の革羽織なるを。ミジマイベヤと云。粧餝部屋の仇口に客の名たてば。息子隔室の無多口に。女郎の魂膽をはなす。印傳ならぬ京傳が。面の皮を製したる。虚言の皮を。又名号て。無粋語歴夜といへども。素より遣手が前巾着の。名代をも勤ず。むなしく箱に久しきを。頻にこふしよ堂の主人が。提物にあたふ

作者京傳述

目録

なじこの辨

後朝の客五ツの見やう

女郎五ツの見やう

初會もてたる様子

床と座敷との叓

わるあそびの事

思ひ切の叓

女郎虚實を知事

つとめの事

いろの事

客女郎慎用心すべき事

女郎身のうへの叓

馴染の辨

或人問曰女郎買ハ貳十會位にすぐべからずあまり心やすくなりてハ內證の相談何かのもめ合諸わけ手くだこんたんりくつ心をつかうばかりでなくさみハなししかればなじミふかゝらぬうちがあそびの花ならんか答曰女郎買貳十會くらゐまでハあそびのうわ水也そのうわ水をながしすいひしあげたるこんたん諸わけむづかしくからむか遊びなりなんそうわ水をよしといふ事あらん又問女郎ハぜんたいなぐさミにかふ物なれバおもしろく興になるこそあそびなれこんたん諸わけ心づかひがあそびとハ答曰されば其花をとるものあり其實をとるもの有女郎の虛實にかまハず我ひとりのあそびに新造をいくらもあげ藝者をよび太鼓持をつれどつとさわひですつとかへる是たのしミの花なりかやうに花やかならずとも座しきもしづかに遊びたがひにかざる心なくくめんごと諸わけ万事かたりあいともにたのしミともにくろうする實情をたのしむ是あそびの實なり此ふたつハ客の心にあるべき事なれども其實をたのしむハ客の心ばかりでゆかぬ事なればなりがたし花をたのしむハどこでもなる事なれば仕やすし同事ならハ初會やうらよ

りなじミの所にてさわぐハ家内も心やすくひとしほおもしろかるべしなじミなきをあそびの花といふ事非ならずや又問床をこのむハやぼらしく座敷の内があそびなりと云人有いかゞ答曰是もおなじ道理也座敷ハ遊ひの花床ハあそびの實なりいづれあそびならさるハなし又問しからバ其實をとらんか其花をとらんか答曰花も實もともにとるにしかずたとへば座敷のあそびハ風袋也床のあそびハ正味なり床にて我實情を見せ女郎の誠を掌に握らバ座敷のあそびも求ずして面白かるへし是正味多ければ風袋おのづから重くなるがごとし問人揖て去

後朝の客五ッの見やう

もてたる客とふられたる客と口舌したる客とあやなされたる客と一通にあそんだる客とハ歸のやうすにてしるゝなり其見やうハもてたる客ハおとろへてねむそうな顔にて物あんじ姿にて粋らしふられたる客ハ腹立そうな顔にてつかれもミへず茶屋船宿などのなんでもない事をしかりなどしてやぼらしあやなされたる客ハ何かうれしそうににこ〳〵してつれか茶屋などにふつゞかなはなしをしながらやかためいて見ゆ口舌したる客ハ腹ハ立ずして連か茶や船宿などゝしづかに理屈をいふ一通にされたる客ハ顔色常のごとくあまりねむそうもなくいそひでかへる躰也

見わくる人ハゆびさして評すべしはづかしき事なりもてゝもふられてもかけられても口舌しても平氣にて有べし平氣にてゐれバ口舌しても理屈能ワかりもてゝもはまらずふられても腹立ずかけられてもあやなしにのらず四ッの德あり是身をまつたふする寶なり

女郎五ッの見やう

凡女郎の氣質ハ百人百色なれとも其大がいを見様あり見世に居女郎を見るに表に人の名をよべばきよろ〳〵し立てかうしより覗く又かうしへ人來女郎の名をよべばにつこりとわらひうれしそうにうろたへて立てひそかにはなしなどするハふかき色客有女郎としるべしおもてにうた上るりのこゑあるいはこわいろ尺八ふへなどの音をきひて見世に居ながらそとをさしのぞき〳〵見るハ地色のあるなり又むだ口をきいて高わらひをしだまつて居れバ口などをあき鼻をいぢつたりそこらをかいたり身持の愼うすきやうに見へるハとりしめて色をするにもあらず色せぬがせぬにもたゝずたいもなきむだ女郎なりわらうにもすましたやうな顔をし物を言にもつくり聲をしなんでもない事を何からしくいひなし流し目をしむしやうにつんとするハ見へをこのミしつたふりをし其くせ智惠のないつくろいものゝうわき女郎なりもとがこしらへもの故きよ

うこつに見へるものなりあまり物もいわずいふときハ小聲(こごへ)にてよそ見をすれば横目(よこめ)で見笑(わら)うときもにつこりとした斗(はかり)で聲をたてず眼(め)の内(うち)に色をふくミ物事たいそうになくしつぼりとをちついて見へるハたいていものにあらず此女郎に實あらバ誠(まこと)のいろにてすへをもとぐべしかけられたらバ身代分散(しんだいぶんさん)におよぶハ目(め)のまへになりおそるべし〱

初會(しよくわい)にもてたる樣子(やうす)

初會にて座しきへあがりたばこぼん燭臺(しよくだい)盃(さかづき)すゞりぶたなど出(いで)て茶や船宿などはなしして居るところへ女郎來り客を見てすこしわらひの色をふくミ座(ざ)になをりてかたちをとゝのへ酒(さけ)をもおほくのます客しいればこわそふにすこしわらひなから半(はん)ぶんものミたばこなどのむにも麁相(そさう)なきやうに諸事(しよじ)をつゝしミうれしさうなていあり笑(わら)う時(とき)は脇(わき)をむいてわらひ口に手(て)をあてなどする客のいふ事なす事ミなきにいりたるやうすにてわらひはづかしそふなていありてくらき方(はう)へ顔をむけそばへよりたけれども何とかおもわれんとしんしやくして見ゆるなり是ほどなれバ客の酒のむを其やうにのミたまふなどゝとめる事あり其時のあいさつ先(さき)の氣(き)にあたらぬやうにすべし彼是(かれこれ)するうち床(とこ)おさまるなり扨(さて)床になりてもはやく來かぶろに行(いつ)てねよといひそつとは

令子洞房

な紙を出させちよつと座敷を出隣ざしきなどへ行鏡にむかひをしろい口べになど心をつけて見てくる也扨こわそうに床へ入たばこをつけて出すまた外のきせるにて四五ふくものゝ客の枕をつけるを待客枕をとれバ（枕へハはながゝあてる事なり）女郎もはな紙を取まくらにあてすこし客の方へよせうつむくねるにあらず顔ばかりうつむひてはづかしそふなり是ハ上ゝの出來なりワが枕の下ゑりのあたりへぐつと手をさしこむハあやなすのかしらねどもこつちの物と思ふべし

床と座鋪の事

座敷にてよくて床にてあしき事あり是ハ外になじミある事などかまたハあしき人なりなどゝつげる者あれバ座敷にてハよくしたれども其譯を聞て床にてふる事ありざしきにてハあしく見へても床にてうつてかわりしやうに能事もあり是ハ何ぞやすく見たかワるく氣どつたかきミがわるひかなれども床になるまでにあしからぬ樣子のしれたるなり又何そ氣のもめる事があつて座敷つきあしくともそれがすミて氣がすミたるゆへ床にてハ能なる事もあり又一座あれバ座しきにてあしくとも一座の女郎と相談のうへ床にてよくする事もあり生れついてあいそうワるき女郎にても至極我氣にいれバ笑顔になるものなり又女郎の氣によりてうちつけて物いふもありた

とへバ某がどきものハ御氣にいらぬはづなれどもせめて今一度御こし下されかしなどゝいふ事よろしきなりしかれどもこふした女郎ハすへのほどたのミかたしまたあやなしかもしれず能く〱心を付あやなしならバはやくきれて仕廻ふべし先からつき出されたるハ見ぐるし

惡遊の事

此あそび今ハ世上にあまねし其行跡一樣ならずといへどもまづハ日和下駄の類なり此惡病をうくる女郎ハなかく丸裸といふ病となる事女郎の難病也うらか三度めくらいに夜見世へ來て其女郎を呼出しなれ〱しい噺などしかけとめられたそうなくちぶりをいふゆへぎりにもあがれといわねバならず其所へ付込工面がないのふところが中の丁のそこハ御しんにある事などゝからんで見たりどふぞするならあがらうなどゝあつかましく仕かけられぜひにおよバずそのばんハ女郎の損となり平の色に仕かけて口先ではまらせのつ引ならぬ無心をいゝかけむりにこつちから色事にこぢ付て引たをすなど情の戀のといふさたにあらず又茶やの男船宿又ハ友達なぞにたのミていひこんでもらいむりに色客にこしらへてあがりこすく斗立まハり物いらずにあそびたまく〱物まへなどにわづかな事でもそうだんしかけれバさま〲にからんでにけたがりぜひや

らねバならぬやうになると色を物どりにするの慾心女郎のとなんくせをつけてそれぎりでおさらば共うへあの女郎をバとんだやすくかつたなどゝ拂物でも買たやうに手柄そうに我恥をふれあるく人情をしらぬといへバ人らしけれどもつらの皮あつき獸なり中にハどふもくめんも出來ず友達中をかりあつめて紋所の黑つむきの小袖すりこ木程な袖口縄のやうな縞なゝこの帶すこしハ綿もちらつくを內の方へ廻し黃色でこそあれ緋縮緬の繻伴毛ハなしとも黑天鵞絨の半ゑり赤くなつても共むかしは黑ちりめんの頭巾あたらしい物にハはゞの廣ひ日和下駄やう〳〵形ハ出來ても嚢中をのづから錢なしぜひにをよハず繻伴と頭巾をぬぎ捨てもたらず友達の母近所の女房などをなげき布子帶などをかり出しやう〳〵こしらへて行などはかなき遊ひと言ながら女郎をはぎさへせねバ哀なる方もあれどもかやうの身のうへの者に女郎をたをさぬハまれなりにくむべしくわしく云たけれども筆とるもうるさければあらましにてやめぬ

思ひ切の事

或人問曰四代めの高尾が詞に此里へきたらぬものこそ粹なるべし來るハミなやぼなりといひたるよし當世の通者といわるゝ人の新造かいてむだにしやれるハよく此詞にかなへり奧州がてう

ちんにてれんいつわりなしとひらがなにて書せしも客におもひつかせん爲なるべしさすればけいせいにまことなきに極りたり 答曰 けいせいの一代にあふ客何千人といふ數の內實にほれるハ十人か貳十人なり共內にもうわ氣も有男の方からだますもあり緣のないもあり眞實に一生の身の上をまかす所ハ壹人にとゞまるその外の何千人にぬしの所へいきいすよハミなうそなり爰にてけいせいにまことなしといふ事至極尤なりおゝくの中にて一人に誠あるを以てけいせいに誠ありとハいひがたししかれ共誠をつくす時に至つてハ娘子ともけいしやなどの色をするとちがひめつたに脇へハふれず共代に實とおもつてだまされる事またげいしやや地女よりあやうし是をいやがりて女郎をこのまず地女をうれしがる色師ハ町人の商をきらいて盜するを好と同じ事なりもとでをそんをせんとあぶながり只取の算用なりかく云へばとて女郎に誠ある事をよく知りても安堵するハゆだんなり我に實有女郎と思ハゞなを〳〵心を付て色の出來ぬやうに用心すべし右も左も色の中なれば我に實あれば外へ心ハうつさぬものといふたしかな證文もなし年久しく馴染たるうへハかくべつさもなきうちしばらくも遠ざかれハ共內に了簡のかわる事有ものなり 又問 女郎のほれるハいかやうなる所へほれる物にや 答曰 まづ初會にあがりうらに行三度めにも行女郎もずいぶんよくつとめ段〻なじミがかさなるにしたがいそばからきまつたのほれた

のといわれもとがあまりいやでもない客ゆへつい本にほれたやうな氣に成段ゝと馴染ハかさなるゆきからハ何のかのといひ立られしばらくあわぬとよびたいやうな氣に成もの也そこを久しくゆかねバ眞實ほれぬいたといふでハなしいつか其やうにもおもわぬうち又外にそんな物が出來もはや初手のはゆすれてしまいいやに成物ぞかしいきな人じやの男がよひのすいたのとてほれるハうわ氣にて中〳〵すへハとげず見へがよいの金があるのとてほれるハ慾心なりほれたにハあらすこの女郎ハ年より出家あさぎうらなどをすく物なり名の高ひ人じやの通り者じやのとてほれるハ名聞なりいづれもすへたのミがたきほれやうなりすべてはやくほれるハはやくさめるはじめなり貨さかつて入るものハまたさかつて出る道理しるべしいづれ此方に實なくてハ女郎にも實ハないと思ふべし又問しからバ此方よりほれた躰にもてなし實らしくするが粹なるべしや答曰粹といふハそふした物にあらず女郎のかくす事を知りてもしらぬていにてすまし女郎に不實な事あれバさつばりときれわけの立た事ハ何もいわずにをんくわにして此方の實をもつて女郎の實を得る天然自然の徳あるを粹とハいふなり女郎のあなをいひほれもせぬにほれたふりをし口さきおもしろく女郎をはまらせるをすいとハいわず女郎も同じ事にてだますばかりが女郎にもあらずもとより情を賣物にする身なれバうそもいわねバならぬハしれた事ながらうそ

もうそによるべきなりすかぬと思ふ客にてもよくあいしらいおもしろくあそべするか商賣なれべにくいとおもふてもかわいそふな身ぶりをしそつちへのけといひたい口からこつちをむきなんしといひよこつらをくらわせたい手でたき付れ尤なうそなり此虚ハうそにてうそにあらず勤の道をまもるのなりかくつとめるも何の爲ぞ世渡りの爲なれバ物日を仕廻わせ物まへのそうだんねだり言客の身分により相應〳〵のことハ有うちなれどもあいたる時にハ辯にまかせてかけのめし歸つた跡でハあいつが人の氣もしらずにこんな事をいふのあんな事をきくとくやしいのとわるくいひしかも地色の仕きせをする金迄をひつたくるいかにつとめのならいなればとてあんまりにくいしかた天道ゆるし給わんやかやうなる不實の心なきものならバたとへ岡場所端〳〵の女郎なりとも高尾薄雲が下に出べからずいかなる全盛の太夫なりともどうよくな實なし女郎ハうその皮はぐ穢多の女房となすべきなり女郎をさへ共不實をにくむいわんや客の身としてほれぬ女郎にほれたふりをしてつとめを出させむしんをいゝ口さきで一ぱいくわせしまいハたゝきばなしにするなどゝハあんまり情ないやつなりしかし客にどろぼうあれバ女郎に追剝あり罪ハ五分〳〵と云べし凡客の心得女郎にほれたらば實をつくしほれずハはやくやめてほれた所へ行べしいか程實らしくほれたふりをしたればとてうそハすへにあらわれぬ事なしほれた共

令子洞房

ほれぬとも我生の通りにしてそれで氣の合女郎にあふべし我持まへでその合ぬ女郎ならばやめにして脇へ行に手間もいらず女郎も我も互に氣が合實があらば勤の身なればとて戀も情も有べし是天の道理莊子が所謂造物者のあたふるなり女郎いかほどよくするとも折〳〵心を付て見べし實じや〳〵と思ふ内いつかぽんとしためにあをふもしれず何ぞ心にすまぬ事ありて一通りりくつをいひ女郎の方よりいゝわけなどして譯とくしんしたらばはやくきげんをなをすべし一旦腹立にてきれてしまふはそゝうなり腹立たらばまづ心をしづめとつくりと考ていよ〳〵心すまずは其時にきれべしきれるからはいかやうな事ありとも立かへるべからずいかほどほれたりとも女郎に實がなくばむだなり其女郎ばかり女郎にもあらず氣のすむ所へなじむべししかしきれみをおくるは大事なりよくかんがへ了簡きはめたうへにてやるべしきれみやるからはいかやうな事にてもふりむきもせぬが思ひ切の第一なりきれみやつたらあやまるであらうと思ひの外女郎はあやまりもせず行たくてもしほがなしをしい事をしたとくやしがる遊人の鼻毛の寸尺いまだしらず

女郎の虚實を知る事

女郎の虚實をしらんとならバまづ其所帯をしるべし座敷不相應に夜具あしきか禿見ぐるしきか或ハ年たけたるか衣裳とゝのハざるか又ハうわ氣に見ゆるか地色のあるやうすかふかひ客があるか此るいハあやなす事多しうそか誠かを知るハまづ床にてあいたる後はやく鼻紙を取ハうそなりしかし若取はづしたる時ハ客の心をかねて手廻しをする事も有是ハ女郎の氣質による也又あつて仕廻うとおふあついなどゝてうしろをむきあるいハぢきにたばこをのミ又ハさつそく小用などに行ハうそなりぢき立もせずはづかしそふなるハ實なり小用に行ておそくるハうそなり横に行ておそき事も有心付べし口にまかせてほれたといふハ皆うそ也實にあふ女郎ハことバに花ハさかせねども此方に思ハぬ事にも心付しぜんとふびんの情あらハれさま〳〵の心遣ひしてかへしたる跡にてハ物をおとしたやうにうつかりとなり晝見世をわすれてにわかやまいなどをおこしやりてにうたがハれん事をおそれていたくもないあたまに鉢巻をし翌日迄の氣あつかいもぬしゆへなればと苦勞ハかへつてたのしミとし傍輩にもしのびて跡や先に成たるみをかいて半切の一卷もつかひかへす〴〵とかいてもたらいでおつて書をかきそれでもたらぬゆへ書添をするあけて見れバミなをなじ事なりきのふのうれしさよいからのくたびれ心ハもだ〳〵いひたい事ハやま〳〵人めハつゝむ氣ハてん〴〵するゆへかんじんの事ハおとしてやくにもたゝ

ぬ同じ事をいくらもかくものなり是れ實なり又わが座敷へ女郎多くあつまりてん〲の位客の
はなしをするはよし一通のはなし斗して居るはよいにもあらずこれにはいかふわけあり又夜
見世の出ばなに格子よりそつとのぞき見世におらばつれに我名をよばせて見べし其時急に立て
されぎまはるは實なり少しもいそぐけしきなくふせう〱に立てあたりを見るはいかほど座敷
や床にてよきとてもにせものなりつれもなくは自身格子より其女郎の名をよびて見べし實なれ
ばにつこりとしうれしそふにとる物も取あへず立て內へ入りぞうりも片あわせにはいて客そと
にをれば早ゝとかけ出御無事かいかゞと問客をば我座敷へいれ其身は外の座敷へ行て鏡を出し白
粉をぬるやらふくやらべにを付るゑもんをなをす氣遣ひのやうになり人のいふ事も耳にいらず
とんだあいさつなどしていそがしそふに座敷へ來りたばこ入も鼻紙もわすれ今思ひ出したやう
に禿をよび見せより取よせすわりはすわつたがなぜか人が居てはなしがないやうにして居る
皆實なり心をとめてあいとぐべしさりながら女郎の氣により是程にしても又外へうつるやうな
うわ氣もありあてにならぬは此里ぞかし心こゝにあらざればくらきにまよふ戀の闇これで闇な
らしやうとがない

つとめの事

ふかくなじミたる女郎にふぐ汁葱あさつきなどすゝむれバ女郎も心よくくふを客うれしそふにうち笑ひ我にへだてる心なきゆへとうちとけてふたりが床のかねどを友だちなどにはなしてよろこふなどこけらし此女郎ハ何の氣もなく只はしたなくくいたるおかし又かねどなどさういしてさもなき方へ賞をつくしつい共方へ二世かけたるをはらたちいかる時のありさまばからしかんざしに客の紋を付たるを何本もこしらへ置客によりて紋所ちがうも是皆世渡りなればもつともな事なりしかしすべて女郎のことバに客のはなしを聞てそりやほんにかへといふ程つまらぬあいさつハなしいつても客ハうそをつく物と心得たるもおかしつまる所女房にして見ぬうちハたがいにいつ迄ろんじてもうたがいハはれまじ又女房にする氣もなくとうざのなぐさミにかゝ客ハなをさらいゝかげんにうたぐつておくべし

色の事

あわでやミにしうさをおもひあだなるちぎりをかこち夜をひとりあかしとをき雲井を思ひやり

定

あさぢが宿にむかしをしのぶこそ色このむとハいわめとあれどあハでやミにし心ほどうき事ハあらじ春の夜の夢ばかりなるもながくおぼへおなじ里にちかくすまひてもしばしたよりきかざれバとをきくもゐの心地こそせめあいぢやくの道其根ふかく源とをし六塵の樂欲多しといへども皆厭離しつべしその中にたゞかのまよひのひとつこそ座敷持も部屋持も廻り女郎も新造もかわる事なしはじめハたがいにしのんでの事なれバ內證のしゆび傍輩の手まへ迄つくろいしが色ハ分別の外といふ事が身にしミ〳〵と聞おぼへ孝行のために身をうりし親の事も世話にして貰ふてかたじけないと思ふたなじミの客も恥も人めもきこへもおもわれずあんまりよい男とも思ハなんたがなぜこんな心になつたやらとおもひながらも思ひきられずわすれんと思へバおもふほどおもひ出しどふも思ひなをされぬものなりそこをおもひなをすハもとがあんまりほれぬのなるべし思ひ切たる後ハふたゞびいろをせぬこそ誠に女郎一疋なりはじめハふかくおもひてもついとをざかれバさるものハ日〻にうとく昔の貞女ハ今のたわけと思ふが當世女郎の十人並の心なり心やすひからおこりつい手がさわり足が障りはじめきたないやうに思ひし顏も見れバ見るほどすいたやうで其男のわるひくせ迄よく思ハれ無心いわるれバけつくうれしいやうな氣に成りくめんしてはだかになるをしらぬハ傾城の氣しやうそれをそまつにする客ハばちがあた

るべし又客をわるひと思ひて見れバ見るほどいやに成物なれども色といふ名がつけバはじめいやと思ふても色といふ名にひかされてついいやでもなくなるものなり女郎の口さきでほれて心で舌を出して居るをバしらず實になつてかよふ客をすこしハむごいともおもひそうな物なりそれを思ハぬ女郎ハとても行末よかるまじさりながら兩親ハ下に居る二階で出合屋根舟で色をし親をバ椽へ出して竈の番をさせ飯焚同然におもひしかり廻して不孝するとも思ハぬ床藝者踊子などからくらぶれバ傾城ほどまこと有ものハあらじとおもへとも色をも香をもしる人ぞしるなるべし

愼の事

客の愼べき事名代とりてはら立ハむりなり女郎の仕方によるべし。もらひかけたる女郎をやらぬハわるし。きれて又つれか茶や船宿などをたのミ手をいれて立かへるまじき事。同じ家の女郎と色ぐるいせまじきなり。我氣にぬけめがなくとも顔へいだすべからずかほハやぼらしく見せておくべし。我あいかたの女郎とちわするハやぼらし。新造やりて廻方禿などを詞きたなくいふハやすし。ゑもんをつくろい帶をなをしあせ手拭などをゑりにまくハいやミなり。せい

たいをぬりをしろいをつけつくり聲して物いふればか〳〵し髪さかやきハせずとも身にあかを付べからず髭爪のびたるハきたなし。身のうへ身代諸藝衣類男ぶり自慢顔なるハむねわるし。ぢんぢやうふるハ初心らし。心にもなきすへのやくそくすべからず。外の座敷のうた上るり三味線などそしるべからず。よくねたる女郎をおこすべからず。初會にふられてはら立べからず。女郎のたんすの中などあけて見まじきなり。名代の女郎に手を出す事なかれ。横に來たる女郎久しくとめておくハ心なし。客をせくハ心せまし。金銀の約束まちがハぬやうにすべし。はじめより我身のうへをあかす事當世の女郎買多くする事なりよろしからず。女郎のおさな名はやくとふべからず。長居つゞけすべからず。女郎の愼べき事第一地色すべからず。げいしやたいこもち茶屋の男などゝあまり心やすくすべからずうたがいうけるたねなり。色になづミ客をそまつにすべからず。色にかまけ氣のもめるにまかせ髪かたちとりミだす事たしなむべし。腹の立時すかぬ客科もなひ新造禿などにあたるべからずはしたなし。禿の行義詞いやしからぬやうに仕付べし我新造の人から禿の行義にて姉女郎の身もちまでしるゝ物なり。髪を切起請をかき爪ハはなすともゆびを切ほり物ハせまじき事一生の疵なりほり物ハたとへやきけしたりともあとハきへがたし。わかいものゑこひいきすべからず。むり酒ひや酒きまゝ酒第一身の毒なり。

茶碗ざけのむ事客の氣によりてあいそうのつきる事もあるべし。はづかしからずともはづかしきていをするハ女の情なり。大口などきくハさがなし、すそ高くまくりてあるくべからず、客のまへにて耳こすりすべからず。女郎の氣によりてなじミもなき客の見る所にて外の客へやるみをかく事ありよからぬ事なり。客の紙入ことわりなしにあける事愼べし。

女郎の用心すべき事。初會よりふかくほれたやうな事をいふ客、はじめより我身の上あしきといふ客。初會にくらうそうな顏色又ハ至極色あしき客。女郎をはやく寐入らせたがる客。口先の至極おもしろき客女郎のお所帶のあしきかよきかをしりたがる客

客の用心すべき事。口へ出してほれたような事をいふ女郎。宵から女郎のそわ〳〵する夜。度〳〵座敷をあける女郎。内のこしもとあるひは茶やの女若ひものなどゝ耳こすりする女郎。裏茶屋と心やすひ女郎。男げいしやをよばせたがる女郎。小用に行ておそく來る女郎。はものを手ちかくへ置女郎

女郎の身のうへ

花ハ櫻木人ハ武士なぜけいせいにきらわるゝ共行義たゞしきをこのまぬ情を云たる付合の句な

り女郎の身うへほどあわれにおかしき物ハあらじ朝夕のめしに物のいらぬばかりその外ハ世帯もちにかわらずそれさへあふらげなすびづけそば切なんど座敷持部屋持も襖障子のはりかへ畳がへ部屋座敷の代の算用迄いづれか身のあぶらならざるハなしもとより手道具調度ハいふに及ばすあぶらもとゆひべにおしろいくしかうがいもさすがまがいハにげなし折〳〵時〳〵の小袖も同じものきてハ中の町いぶせく夜見世もつらきものから禿つかへば子もちのごとくはながみたばこハいもと女郎のまで重荷にこづけとやいわんまわり女郎や新造にいかい事部屋ばいりさるゝも来るなとハいわれず心よくよべばりくつのきつうちがう事なり帯や上着をかりらるゝもならぬとさすがいひにくし大事にでもきれバよいにと小言いふさへ小聲なりちやうちんながへのはりかへこま下駄上草履までよくはやくわるくなるもうるさし茶すミらうそくのかんりやくのならぬもぜひなきならい茶屋のつけ金船宿わかい者やりてお針かふろかミゆひまで折にふれての心づけ衣の奉加ハまだしも上るり太夫の會のすり物もつらやくにもらうハうしとおもひきや親方の祝ひ事あるひハ法事のそなへ物もまさかすてゝもおかれず女衒がゆすりハしめ木にかけらるゝおもひこそせめことに親里のかなしきたよりきけバひとしほつらさもまさりむかふの人とよぶこどり禿がつかひのやりくりもあわたゞしやう〳〵客がひとりついたと思へばうろ

たへたらはがれそうなとゆだんせぬもくるしきぞかしわけて紋日のうきかづゆどふふの胸にこたへる晦日〳〵のかづかさなりて大つもごりのちやうちんはむねをこがすほのほとや見んたのもし客のくめんさへまちがいの𛁈見て𛂁流に楫をたへたるおもひなるべしいかにぞや胸つぶるゝ身のうへかなと未練がおこるとはまるが一時人間萬事中用にしかず

繪本
客(きやく)衆(しゆ)氷(ひ)面(め)鏡(かゞみ)　全一冊　出來

山東京傳作
北尾政演畫

耕書堂
白凰堂　合板

天明五年乙巳正月

通油町
耕書堂　蔦屋重三郎板

珍らしき新板諸品追々出來申候御求メ御覽可被下候

江戸通油町

書林　蔦屋重三郎

令子洞房　三五

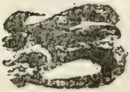
無駄酸辛甘

無駄酸辛甘叙

沈醉先生。立於川上。顧秀我錦洲曰。足下樂何哉。答曰樂滿登有。出門次酒家青樓之街。盡矢種者。內眠居。唯世之歡樂無嫉。科頭箕踞。踒躂誓子。艷書之暇書之矣

巳之
初春

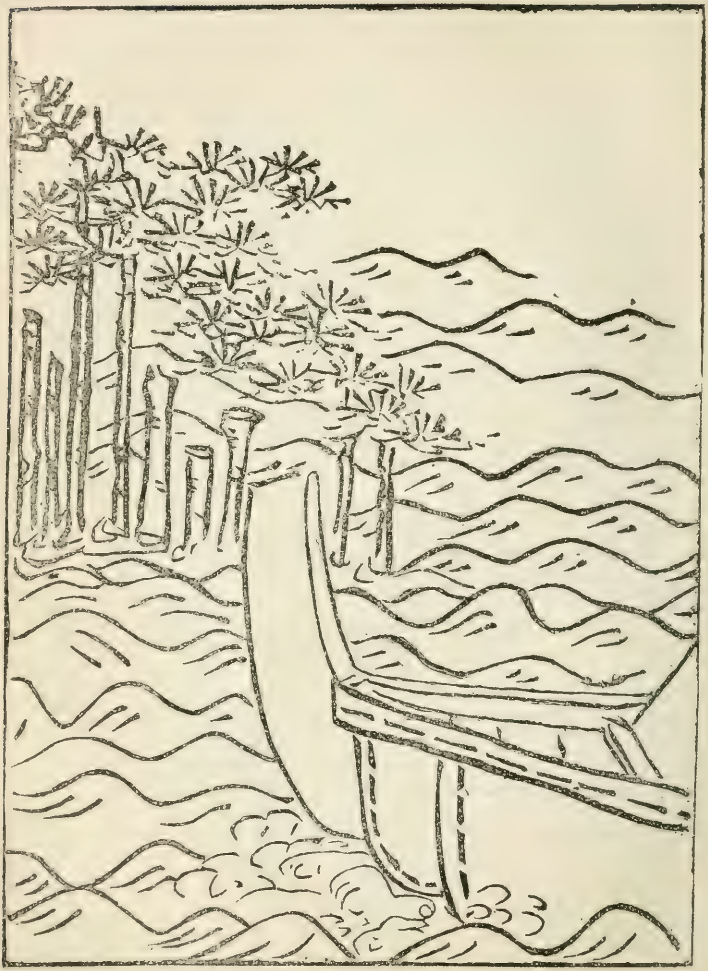
千差万別著



雲のミねのたゝすまひ。あふさきるさの其中に。年の比。三十四五の男。髪ハつゝ込ミほんだおゝ額。いなづまがたの縮緬の袷に。黒純子のはゞ廣の帯。もん際少しよごれたる。黒さやの袷羽織。あいざめの長脇差。是もつかまへ少しよごれ。前鼻緒のゝびたはきにくそふな裏付草履。懐中にハ黒羅紗の丼に。何やら書出しまでもさらへ込ミ。しやんと小褄をよいとつてといふ立廻り。我より外ヵに。通ハなしと無上に高慢らしく。邊りを見廻して行。向ふより國侍と見へて。一文字の菅笠に誇りゝしくため付ヶて。來る「秀我」見付ヶて錦さんおまへどつちへゑゝびなさる「錦洲」是ハどうでござります。其以後ハ。まち合以來。御意得ませぬ。「しうが」是レサ人間の悪ひ。御意得ませんとハ。なんの事ッたな。そんなこつちやうふさぐからよしねへ。けふハまた。つがもねへ。えゝ日和だから。まづぶら〳〵と。出たが。なんとおめへも。是レから北國の新宅。岡本やの。見世明キなぞといふ所ハ。ねえかの。「きんしう」されハ。少ゞ其工面が「しうが」ヲツトなきにしも。あらずといふとこか。そんならおれも。點便舩無レ定と。對句に。ならびてへ。とこだから。すぐに爰から舩に。乘うじやあねへか。中洲ときてハ。ちとけむつてへ。もんだと。言ながら。功者らしく。舟を云付ヶ。マアけふの汐ハ。四分おくれに。八分がそこりとくるから。願ヵつてもねへ。てふどゑゝとこ

さ。ノゥせんしう。此比のしけに山水が大ゥぶ出て。水かさがまさつたから。ちつとあげい太ゥ儀であらふ。そして汐とまゝづじやあ。こぶぎに骨折ッが逢ふよ。しかしあげ汐の時キなんざあ。内チ川と逢つて。知盛の出そふな。浪に乘から。餘ッ程かすりに。廻られると。噺しの内に。みなと鼠の。へんてつに。大キな油扇キを。かざしながら行キ過キ。互に顔を見合セ

【秀我】足レハ先生。いづれへの御入來。【づふろく先生】イヤいつれにでもなし。けふハ友なりが趣向で。かぼが所に。【しうが】へ、、夫レりやァおまへゥ。狂哥の御趣向かへ。うつちやつて置キねへノ。狂哥三伏ク。變たけて。秋キ風ノ吹てきた。狂哥をよまずとも。今から岡本の。おやぼうが所ハ。どうだろう【先生】サア何ハともあれ。先共ノ舩に便舟を申さふと言ながら乘りうつれハ。【舟頭】おたひらにお召なされませヨイ長やァヨおもかぢだよちつと艫をはつてくれろといふ内ニ。舟ハ大川へ出ル【先生】つく〳〵と。四方のていたらくを詠敲レ舷喟然歎曰歎ゝ諸君集レ中洲容籠宿女上家根舩。さはかりに美なりし納凉も秋果ぬればかく土ぶねの住家となり。今ハ誰ひとり古を思て雛綾袂をかへし歌舞するものなきハ。世のうきしづみとハ言ながら人間萬事かくのごとし。今大通壯士顏色を惜ども。節物風光不相待朝ニハ落花を踏夕ァにハ道を聞ながら涅槃の雲にかくれ行も。凡慮につかわるゝ一



生涯のまよひぞかし。ア、たんずべし〱。去年まではさしも流行せし。ゑびす哥も。悪凶年ンニ及んでは。皆ナ連ン中をまぬがれ。會へも不レ出して。狂名ィをけづる。是をおもへば。兼好が口ずさミに。としの暮レはてゝ人ごとに。いそぎあへる比を。又なくあはれなりと。いつしも。今身上くらぶれば。歎息すとも。涙水ッきれたりといへば「しうが」へゥまたおめうは兼好が。酴醿瀌のむだを。云なさるか。兼好不背の玉ときては。此舟中ではとんだ。さしだ。コレ錦さん。おめへはさつきから。向ふ斗リを見ッ詰メて王義子が。綱の伯母にばけはしめへし。そんなに。ふさぐ事はねへいな。なんぞ思ひ付が有るならば。言つてミなせへ。おゝ引にやァ。おれがいるから。こわひことたあねへ。「きん」たとへ今。身不肖の菜。不辯の語路を以。こじ付るともいけず。夫でも。思ひたつところは。いざさらば。雪見にころぶ。所まで。なんでも。口のつゞくだけは。やりましやう。夫倩おもんミれば。八ッ宗兼學の寮僧は。知識とあをがれ。文武両道の士を。一將と頼む。たとへば千里を蒐。駿足有りといへども。ゑらぶ人なく。糞擔桶を付ヶれば。ほてつぱらめと。しかられる。月に村雲。花に風。鸞鳳伏竄。鴟梟翱翔。といふ所を。いへば。蝙蝠や。暮るゝを待て鳥になる。爰をかんがへて見れば。とんと當時の人心。今先生の。古はすたり。新しきは。愛せらるゝのたとへも。世のへんくは

なれハ。是非もなし。さらばとて。今江に神崎の白拍子。又ハ都路勝山が。ごときの。遊君。せんやぞめに。長きせるをもちて。出口の。柳のもとに。たゝずむとも。今の花扇七越が。道中姿にもかへ。さるためしハ。廣澤鳥石が筆工多シといへども。猨山ほどハ。かけかんばんを出さず。古金ハ穴にうづもり。両鐐は。世界の寶となる。實悪ハ。女形で入リを取り。敵役クハ。女形から役につく。松本古大助がふりは。土作淨瑠璃の。まぬけをおしへ。藤間ハきぬたの。れんまをおどる代地の文ン魚。高麗やをしきりにとゞめけれどもやむ事をゑずして舞臺を引キ。大坂中村久米太郎座へ。のぼる。然レども御當地。なじミの事なれは。殊の外ニ。なごりをおしミ。すなハち御ひいきのあつき所を。紅葉のすりものにして。

御ひいきをかざしの花の紅葉かな

といふ句を。名殘リとす。今の俳諧師ハ。法ッ橋とむりに書キ。むかしの名人ハ。發句を書イて。名をのせず。ふるき活花は。生れながらの。ふりをいけ。當時の人ハ金ナあミのはそんから。思ひ付キの枝か出來ル。吹キ繪がさ。すたつて。盆畫はやれハ。きやりのふしを。三味せんで引ク。武士の遊ゥ人は。ちりからを。しよくとなし。町人ンつ一。せめ馬をなす。文ン五ゥ孔子の道は。片田舍へ引キ込ミ。蘇信張儀が。奥義ハ今はやる。高尾が亡靈も。時キうつれ

は。堅牢地神ンと。あがめられて。頭痛の守ッ神となり。野嶋の地藏は。いのかわらの。せわをやめて。此世で奉公人の。世話をはじめる。まづかふハ云つたものゝ。とかく今の浮キ世は。此樣ゥな事で。なけれハ。能ノ事ハならず。ア、惜哉〳〵。御まへのやうに。何もかも能イかげんに。通ゥ連な御人ハ初てにいふごとく。鸞鳳の樣ゥにふしかくれハなんとも知らぬ。わたくしなどの樣ゥな。とびやふくろふハ。何も見へぬくせに出しやばり。剰水の水に身をこやしながら。其不レ及をハかへりミす。人の目のきかぬを幸に。どふやら〳〵かうやら雨露にもぬれず。人の眞似を致タし。安樂に。おると申ハ。なんとマア有難太平の御代でハ。ごさりませぬかと。眞顏でいへハ。【秀我】フ、ゥこいつ日本。とんだゑゝ句を言なすつた。そふやらかされてハ。すゝはきの。米櫃。といふ所で。すミにや置かれねへ。是レからハおれがばんだから。なんでも。すきをいつて見よふ。所詮おいらが身の上に。靑表紙ハねへ所だ哥人ハ居ながら古跡を知るとやらいふから。まづ舟の内から見へる所を言ふ。コレ向ふの德さんの内を見な。とんと二番目のまくあきといふ内だ。あの男も通の樣にもねへとんだ句づくりのあしい男サ。へ、へけふハ馬が内ハ定會だがなぜか人がよらねへそふだ近比ハ馬も紺屋のなか引をするから。世間ンでとんだ惡シくいふよ。夫レで思ひ出した事が有ル。おめへ白鳳堂が悅中合を見なすつ

たか。すとんだェ、思ひ付よ。是〻それ。斗園がゆかた合から出た思ひ付だよ。何が斗園が。
諸侯をあやなし込んで。連ン中に入レたからとんだ大そふで有つた。そこで皆ンがまけねへき
になつて駒さんをだきこミ。京ゥ傳が妹の黒飛式部を。會頭にして。故一とゑんばを遣つて。
路考に抜をかゝせ。花扇とおやを入レたの〻。ひろひ世界をいつぱいに書いて。跡の半切ッ合
を仕様ゥといふ。ゑんなの趣向だ。是〻どふださつきから。ぎちご〳〵と斗ッいつて。米つき
ざるの。こよりのぬけた様に。らちのあかねへ舟だよふ〳〵まきがしに。きたそうだハ、アま
だ。秋葉は出入が濟ねへそうだ。是レサこちらのかけづくりを見な。とんだおつかねへ立テや
うだ是りやあ夫坂倉のいんきよ所さ。又こちらの出テは、た内〻。去ル御屋敷の金持いんきよ。
此人なんざあ。どばしから中丁にも。大ィそふにかねになる所が有るのさ。しかし伊勢丁の。
もめニ〻。ひいやりと。きたそふさ。コレ錦さんおまへも。どふぞ。三度飛脚が。ことふれ
に。なつたといふ。身をやめて。願く〻。いきにしなせへとんと髪なんざあ。きのきかねへ。
蝘を見るやうに。ぐんにやりして。ミとうもねへから。ぐつとねをつめて。つゝ込ミにゆいな
さゥへ。つゝ込ミの上ゥ手なら。京の喜太郎に。代地の安ス。いきな小紋ンの。しんがたな
ら。北新ン道の。越川に有るよ。今もいふ通り。とかく。いまの通ゥとやらが。いけもしねへ

で。ちりからを。習ふそふだが。ちりからよりハ。ぐつと飛ヒ違ッて。河東節に。しなせへ。夫レともに。ちりからが習たくハ。通り町の内田より。坂巻にしなせへ。三味せんの。こんたんが。覺へたくは。左吉よりハ。彌十郎がいゝよ彌十ときてハ。ちつと一ッ國たけれども。あやまつて。習ひせへすりやァ。覺へている所ハ。おそろしいよ。万葉家の。哥ならハ。羽倉ラでも。ちかげても。ミんなおれが。知つているから。どれなりと。すきなのにしなせへ。めくらでの。物知りなら。谷友文の。詩さくに。はなわが哥あやふちが。こきうに。長谷富が。琴。城艶が。三せんに。養碩があんま。女郎かいの。藝づくしなら。濃紫キが。黒繪に。夕ゥばへが琴。瀧キ川がうらないニ。誰袖が。たはれ哥。半太夫か火いじりに。かたらひが。しやくもち。仕きせ衣裳なら。大海老屋の。くろじの梅に。くわるん玉屋の。ほたん。丁子屋のがくしぼりに。松葉やの。くじやく。四目屋の。くわげん道具に。扇キやの。十二ひとへ。役者の。かくし藝でなら。松本がまりに。秀鶴が茶の湯音羽やが。ろくろ細工に。納子がてならい。伊與大夫が万葉哥ニ。喜代大夫が。ときき細工。女のうつくしい。のなら。馬道チのせつたやに。天王寺屋の妹。男のきれいなハ。いしがしの呂丁に。櫻川の熊。おつかねへさいくハ。花色うるしの。硯箱にびいどろ細工の。もじ障子。思ひ付な料理ハ會ィ席の。ざせん豆に

かぶらぼねの。三しまのり。聾のおもしろい。人ならア水戸ッはうの六に。明神下の傳ン公。いたくつて。ならねへものア。五靈香の目藥ニ堀どめの。きりてん見返シの。うらないなら。品川の右京ニやはずいなりの。別當うまいものを。食たかあ濱田やの。即席につ長谷川のゆづけ。まずい物ときてア日影町の竹輪團子ニ。引キ札の付ィて出るなら茶。もしざん米を食ゥたとおもつたなら。吹キ上ゲのこんにやくか。よかろう。高い物なら中洲の四季庵に。川向の伊勢富。座敷のきれいなア。洲崎の舛やに。新ン道の地獄。ぶつちやうが。付ケてミたかあ。竹町の本行寺に。明神の御供所。けいどうの會所なら。あたけの橋十に。土手下の八。ぜげんの內チならア三げんやのとらに。どぶだなの權次なんでもかでもおそらく。おいらが知らねへ。事たあねへと。めつたに高慢をいふうちに程なく。ふねア堀リへつく。【舟頭】こいつア火が高ぶつたそふでねつから横ぼりに水がねへと。言ながら【舟頭】モシヱ旦那。どけへつけやすへモシ【三人】ナントどこがよかろう【秀我】三河やにしようか【先生】イヤ尾張やにいたそう【秀我】あいつアとんだぶにんそうなやつだ【三人】そんならア。吉野やのさん橋へつけろ【舟頭】ヲイ吉野や〳〵

跋

子川の上にいまして曰。ゆくやつれいかくの如きか。晝夜を捨ぬ。猪牙の艫先は。礠石の劒先。北へ〳〵と押やれ男。二挺だち合三ン人乗たる舟中の。無駄と晒落とを膝組の。咄を編て小冊とし。櫻木に堀の棧ばし。霜でづるりと。上ルすべりの。上べばかりで。しつかりセぬハ。そこが突出し新造作者。新姿婆の書物なり。其筈の。事でもあると。さらりと柳橋に見給ふ上。首尾の松の評判よく。中〳〵おつだとの給ハヽ。師匠と名の有ルやつがれも。嬉敷の森であろそいな。ヲヽ〳〵夫レもさうかいなと。いふ事しかり。時に天明五の年正月の元日恵方に

向ッて書　万象亭述

客罌肝照子

猩猩能言不離禽獸鶴市雖不異中車素非人矣頃山東京傳寫郭中遊人聲音行移輯爲一卷殆迫於眞矣蓋三樂一瓢及白兎富士藏如在等不能出其右矣今也欲上梓賣于世焉於是乎鵓鳩爲之閉翳猫兒爲之止踊答在既有役者氷面鏡之作今又磨之而作客衆肝膽鏡爾

風燒猿人序

雨の降夜は一しほ床しゆかし雨夜の品定め無て七つの癖と穴京傳が振附の身振こはいろ坐しき藝人のふり見て我ふりも遁ぬ業のはし書ハちよつと後の附拍子これに洩たる後編はのち程お目にかけましやうさらバア

江戸浮世師
傳藏序

自叙

春は若艸うつくしく生て。梅の咲たるながめあれどおそき梅は櫻にさきあひて。覺へをとりけをされて。えだにしぼミつきたる心うし。そら長閑にはれて日のくれかねたるこそ。深窓にやしなハれし娘のあけほの染し紫の衣裳着て。紅の霞のかゝへしめたるにひとしく。はなやかなるのミにて。物の哀をしらず嬰子のはしたなくはし居して。肌見せたるハ夏なり。かこわれたる女の。うづミ火のもとに。行末を思ひ。そこのつめたき雪のつもりて。とけざるもうるさし。世の無常を思ひ出せるハ秋なり。月の光りものすごく虫の聲あわれに。萩薄のうつくしく咲たるが。露にミだれたるさまおもしろし。遊君の名をはぢたるこそ。これにたとふべし。よろづものおもひがちにうちしをれ。涙もろくあすのたくはへをしらず。一度着たる衣類調度など。ふたゝび目にもかけず人にうちくれ。金くれる男なれども。愚癡なるにハすりぬけ。請出さるゝ場所をはづして。はづむたる男の一言に百年の富貴をかへたるこそ。こゝちよし。されハ泰山を挟で北海を超るは手重しといへど。ちうさんを引連て角田川を渡るよりは心安くちうさん買とよべるゝ人何所の馬の骨なるべくもなし一分を買てひつばりの誤ことを知り。三

分を買つて籬の片なるを耻。こゝにおゐて見識愈高く。かふろハ傍に眠の顏に愛宕の山の如し。柳巷の榮へを十寸見の一曲ハ女郎の花の言にひとしく。蘭州誰家の遊冶の郎牛臺に聲を嗍て番新を呼出し。柏やに人細き方の格子へ廻つて何言か聞く淸攪の調子ハおゐいが絃桐に合せ。七軒の瓦家根ハさながら青樓をまなぶ衣紋隥より見皈の柳を移す松葉やの鞠場。ちよと百筑た堤高し中の町の舂米屋ハ灯毬の門次をのがれず權門駕茶屋の前によこたわりて邪魔也藝妓の宿札ハ貸睦襖の方燈にならへ。林藏の油の香ハ大椛焼の匂ひを散す。揚屋町の湯明日休新町の藥湯今日現金居續御客不仕。商人二階へ登るべからず身しまひの手巾。紅粉に染て紗羅紗の如く。髮結へヤの疊ふきから落て鹿子に似たり。振袖障て琴自鳴。櫺子の炭俵見るに寒し色男雛妓を揚て中座をしめんことを思。猫兒廓下を窺て贈物を引かんと欲。ふミのさき目の口紅ハ人情をまどわし泪にとく白粉ハ己をくやむ。奥二階のめりやすハ松藏が根〆なるべく内所のこハだかハ次判の間違ならん艾匂ふ屛風のうち。かふろ泣明洞房のくらかり。杉箸折れて小便所に捨り。金柑のほうづき煙盆に殘る廊下の拍子木寐耳にひゞけハ男來ッて油をつぐふけ渡る夜や按摩はり。ねむさうな三ッ下り茶立虫なく障子の腰田螺のなく蟇蛙の聲。わけハ聞へぬ睦言に。火の要心さつせへませふと鉄棒のちりゝんの音ハ五町にさへわたる顏の油を落

すに蠟燭の呑をもつてし。頭痛を治すに鬢へ生塩をはる。待人を呼ふ咒文あれハ。いやな客をかへす咒あり。百杯の酒一杯の袖の梅。百疋の花一輪の最中の月。吉原細見諸國名葉。上餡巻せんべい蛇の目ずし。甘露梅。アンヂイ湯。平二そば。みのやのそば山屋尾張屋の豆腐治丹房が膏薬ハ竹門にその名高く。ミちなしが占ハ箕輪にかくれなし。つるやのすがハらいせやの筒井いづミやの泉子ときゝてハ手跡におそる。土用見まいの芋七升もらつて勘當のたねをまき。寒見舞の昆布巻盆の上ヶそこ宿の鳴居とともに高し。伏見町のぬけ裏を覺るおいらん。箱てうちんを邪魔にするへやもち。こわめしくさひ新造油くさい禿。しやらくさい率頭もち。人物くさひ親仁客。女郎手をとれバ客の足近し。愚痴有りミれん有り。かんしやく有り通有り。不通有り。情の有る有り無情有り。遣り手が尻の店衆ハ源兵衞さんなんど呼べるゝあれハ。はむきの町人國猿を伴ひ來る有り。吐きやくにあらぬ小間ものやハ。格子にあだつきやとひお針月見のてうちんをもらつてかへる。旅人衆ハ敷初を切かけられ。引くに引かれぬゑり元ハ。羅生門をそゝる有像無像の日和下踏。十色で三文の飴ならて百人又百色也。千万人入込む客のその中に似た人さらに無しといへとも己のミ皆色男の氣。のみ込ミ姿しやうちの介。きいたふう。しつたりぶり。うぬほれ。まのふりいゝ子のふり。ぐうたらべい。わかるやつ是面彼面の影う

つす。木地蠟色の格子先キを鳴てうれしき子規の聲色を假り。笑てつらき首尾の松の木ぶりを移し。たそや方燈をかゝげて雛妓が歯をそがくてふ消炭をもつて漉返のはしにかいつけ侍ることしかり

まのふきいゑ花の里中の所

山東京傳二十五歳之暁書

年〳〵や

廓ははなも

かけ流し

三和

仕着 振袖出　振新　名代

出に帯のとけたをかた手にもち。いつそためいきをつくきどり。まへかミのかほへかゝるを。おりく手てよけるくせ有リ。じれつてエよといふせりふの時ハ。かほをしかめて左リのかたとともに身をふるハせ。左リの足をとんとひとつふむ思ひ入。よしかねきゝんしたハなどふもこゝろならねへよ。いつそうれしひしかしいふめへす。こんだいゝんしやうなどゝいふせりふ有。ちつと手ぬくひをおかしなんし。といゝて。中こしにて。取上たつまを両ほうのひざにてはさミぬれた手をそろへてむかふへ出し。かたのあたりニて。すこし。ぶるぶるとふるへて。はきしりをかミ。ヲ、さむひといふしうちなどしかるべし　すべてしんさうへけしすミにてはなはだかく也

同せりふ

アレサモウきうがいたふおつすよ。万里さんおよしなんしよ。マァいつて來んすよおまさとんにいつ付て。二階をとめてつかれしんすにへ。ヲヤとんだ山寺だね。ヱヽいけねへ人だよゥ。コレサあの子やあと尻におゐらんのかけすゞりがあるから持て來やきり〳〵しやな。ずう〳〵しひぞよゥ。万里のふとつてうへ。ヱなんでおつすとへ。うつちやつておきなんし。よふすにヨウ引とかけて行

ねまき出　あの子　かふろ

出に雨てんのはなかんざしにてあたまがおもさふにふりむくきどり有ッねまきひとへ帯のときれ。雨てんの花を取。中さしばかりさしている㕝あり。ふり袖をおびへはさミ。土びん=て湯をはこぶ時などきとり有。おやのあたまに松三本のどに十のじ。おがミのごしやうでござんすなどゝいふせりふ有ッ。

さつきね。中の町へいきんしたら玉屋のいぬがいつそほへんしたで。これうさんすよなどゝいふせりふにて。ずいぶんあどけなきしうちよし

同せりふ

ときやうさんに。おゐらんでおつせへす。今ンはんれよく御出なんした。今きやく人を中ノ町へ。おくつてまいりすから。のちにあすびにおいでなんしと。そしてあさの戸さんがおつせェ

すやくそくの物をもつて御出なんしたかと。あいさつせに御いでなんすれまきの戸さんも見世。きくつるさんも。アレサおよしなんし。〳〵。まだいふ事がさんすヨアレつさ山さん。ぬしがどふもならつしやらねへヨ

一二

襠（うちかけ）の出

おゐらん　中座

出はしつとり品よく道中ハその内によりそのけいせいによりいろ／＼のくせあり扇やハ左の袖をちよつとつまむ是花扇がよふう也丁子屋ハ少しかゞむ方。松葉やハ少しはや足。たハらやハ帯か上りうちかけの両ほうをもち少しそるきミつたやハ右にてつまをもち左の手にてつまをちよつとつまむ。四ッ目やハうちかけの両方をもち角玉屋ハ帯のうへに手を置。あらひ髪なそにて出る。いしやうのきやうハしゆハんのうへへ下帯をうしろニてメしんさうなぞむかふニてつまをそろへてもつて居ると。上のほうへたくり上人さしゆひと中ゆひニて。

上ハまへをもちくすりゆびと小ゆびニて下まへニもちそへるなり帯のむすびの中へたてにあふきをはさむ也。尤したてハミなあげつま也。たとへハ中ノ丁ニて茶やの女ほうが。おゐらんおはやふござりますとあいさつする時。アイとおもく口の内ニてあいさつしいのしそふひた斗ニて行過るなとよし。茶やの見世によそのしらぬ女郎の出ている時。じふんハおくの方にゐるときなぞハ。しんさうに云付て。たはこを吸付てやる事有リたがひニさうする事也。他所へ出る形リハうしろ帯白ちりめんのしこき也

同せりふ　おゐらん床へはいる時かふろかうがひ箱を持來る事有

コレサおきなんし〳〵。ねかし申シやしんせん。女郎のばちもあたりイすまひ物でもおさんせんにへ。マアよくもつもつておミなんし。ぬしか京町へ御出なんす時分も。付とゞけのみを一ツ不遣した事ハおざんせんそれにはづミ。あふミやのきやく人の事斗リ。云イ立なんすが。しんざうしゆで二かいを明ケてつかハしんしたも。一坐のまへ斗のぎりておさんすわつちが内しやうで。あふだろふと思ひなんすハほんにまハりぎでおさへすにへ

小袖　大小出　　きほひはだ　　山手

出五分さかやき上しうのとび八丈の小袖くろさやのはんゑりしゆばんなしのゆかたを下着つかの光る大小おとしざしもん付でとつたためのさんばさうのひより下駄ゆびのあとの付たやつげいれ長うたこれいろちりからなぐさミれ手まへこしらへの爪(たこ)まと下の大かくら茶屋くゞりのやくしや付を一日はやく
見たれ下町で
はつかつほを
くつたよりも
ちつとミそをあげるしうちあり

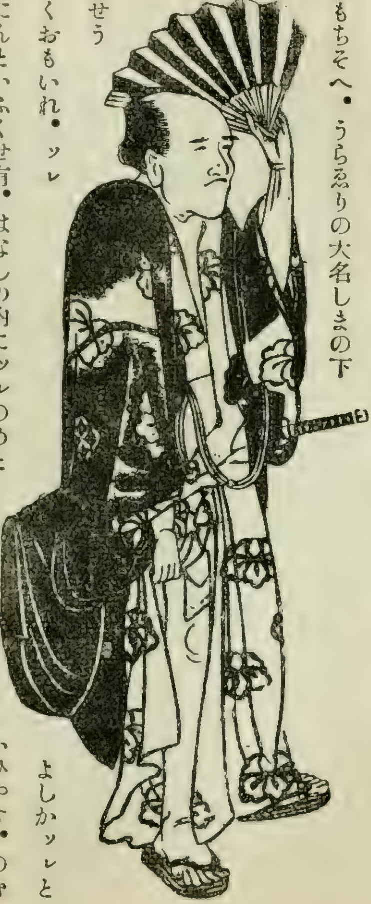
同せりふ

夕ァ坂下の里蝶(りてう)が所で。まくら獅子(しゝ)を一ばん打ッたら。あふぎ屋の。細見の。花といふ字を見るやふに。むせうに女ともがならんできくやつさ。ァノ熊とやらいふ。これいろをつかふやつ

ア。くめ吉がおとりぞめに。雨こくで見たやろうだ。コレ久ぼうまちやナいめへましひ。下駄のはなを丶ふん切ッた。（トてん水おけのわきくらやミニてはなを丶たてる）モウ新町へながしてけへろうぜ。大三屋のまがきのほうの。はじに居る。そらいろのきものを着ているやつが。トトがかつた女郎だ。又ぬかるミへふんごんだ。おきやァがれくやしんぼう。手ぬくひをおとした

長羽織出　はんか

呑込姿



出ハ晝寐(ひるね)をして。枕をはづしたといふミへにて。かほへたゝミのあとの付たやつ。きせるにたはこ入をもちそへ。うらゑりの大名しまの下着に丸くけの帯目をこすり〳〵。むせうにおちつくおもいれ。ツレよしかツレといふ事をたんといふくせ有。はなしの内にツレのめといひやす。のむめへといふと。のってはなす時。口にてきせるつゝをぬきながらひばちで一ッはたく思ひ入。是ほどもすいた事ハねへのさといふ時銀きせるの吸口を五分ほど出してミせる。夕ァの女郎がねつからねかさへねへで。とろ〳〵とするとはなの穴へこよりを入たり。はなをつまんだりし

て。大にうたせたと。とんだうそをつくきどり有るべし

同せりふ

なんだ寐なんしたか今じぶんうしやァがつて。コレヘおらァよいッから。あつけにとられた。もくらもちをミるやふにト。あつちへころ〳〵。こつちへごろ〳〵しているれへ。こんやのきやく人れほうさんで御さ候のぶざて御ざ候のと。うそつきめ。源とやら犬のくそとやらが来ているこたァしつているれへ。あんまりやすくしやァかるな。うれ着にかふろもので。壹兩貳分。むくが貳分ッつの通用といふ事まて。しつている通人だぞよ

ひとへ帯出　河岸　四六

出に兩ほうの小びん。梅干のかわをはつて。まへかミをふつつり切ッた引ッ詰（つめ）のしまだ。いつそ油しミたそらいろちりめんのすそもやふ。金糸のぬいのすれたやつ丸くけをしりのあたりへすつこけてむすび。どふかわきがが有るさふで。わるくさひにほひふくろをかけている。うしミつともおぼしきひちりめんの下おび。ふとも丶のあたりにかのこのやふに何のかあとが有。壹本通川のぎんのかんさしをまへかミへよこにさすひるしふんにミせへ出て。つぎものをしている。かミさまとならんて。身こしらへをしているなり

同せりふ

此がきやァいけさう〳〵しひ。あんまりしやれめへよ　と。小じよくたしかる　花よさん聞てくんな。アノ吉やろうがしやくつたさふて。とんだあつくなつて來たから。もふこつちがぐつとかんしやくで。けんもほろゝなあいさつをしてやつたれな。こつちやァ氣のきいたらしひきやくだとおもつて。弐朱と三朱の立引までして。呼で遣りやァいゝかとおもつて。ノゥさうしやァねへか。

コウ〳〵きくやとん。此みをいつものかミゆひ床へとゞけてくださへ

二〇

前帯出

堀　舟やど

出はしにもミきれの結ひ付て有ル・手ぬくひをかたにかけて出・せりふ有・コレ平やあなた方ハ柳はしまでめすのだから・お上ヶ中たらすぐに・代地へ此みゝをとゞけてくりや・わすれめへヨと状さしから取ッて渡す・そこりでござりますから・大さんはしからめしまし・きのふのふりですへりますから・おきをお付なざりましさやうなら御きげんよふといふとき・ミよしをぐ

つとつき出すなり

同せりふ

アノ屛風に張ッてござりますのかへ。アレハ去年雪見に御出なさりましたおきやくか。ほつ句をしたとおつしやつて。書てくだすつたのを。すぐにはつて置ました。私ともにやァ何ンの事だかしれませんへヱ、そふ巾心かね。アイアノ屋ねのミへるのハ。扇屋のりやうでござります。アノとなりハぎんざのりやうてござります。今かわら釜をたき付ましたから。まだ五ッでござりませふ

まへたれ出

茶屋　かゝさん

出にやしよくをくひかゝつて居て。口をむぐ〳〵しながらミせへ出るおも入。きやく人のわきさしをとつてたいぶ道がおちかふこさりますなぞといふせりふ有り此おしたぎの小もんハおあんじのかへ。とんだよふござりますねといひながら。らうそくのしんを切る事有ッ。だい所へ用をいゝ付ながら客のはなしを聞。とほうもなひ所へあいさつなとするいそかしき氣取有てよし。何か附ておりますと。きやくのはおりのちりをとつてッレおはきものよといふしうちあり

おまらなさりま

同せりふ

おきよ。此御みをもつて行ッて。まつ葉やのへんしを聞て玉屋に清八さんがいさつしやるから。ちよつとかわつてよこし申しや。おさまつたらぢきにけへろうによ。此おくりものが扇やへいくのだよ。いきがけに平二そばをあつらへてもらわうしの。政やかご屋か來たら。七ッに三てうだよ。源さんちよつとさら〳〵と。おちやづけをあがりませんか

尻はしより出

願ィ人金兵衛代　喜七　　日済

出なめし皮のばつち火事はおりの形ッ高はらのせつたのさきで。石ころをいぢりながら。ふところ手で。それじやァ金主めへにたゝねへなぞといふせりふ有り。ふところから小サな帳を出し。ふでのしりで。やたての中を豈ッかきまわしてんをかけるしうち有ッ手ぬくひに錢をくるんでちよつとかたに置ひる過にあつちのよこてうこつちのろじへぬけたりしてこそくあるく也

同せりふ

そういふこつちやァ。どふも金主めへにたゝねへ。いやても御家主へとゞけにやァならねへ。せめて三八のほうてもさうおうにかけさつしやりやァ•又りやうけんも有るものだ•アノささらづから來た女が賣れたら•五七のほうハかたを付ヶやふといつて女ハ賣たさふだがそれもらちやァあかず•しやう人ンかゝりのほうも•切ッかへにでもするがいゝ•かミさんけへらしつたらそふいゝなさへ

さんとめ布子出　やりて　誰どん

出ハあつたかさふに。わたのたんとはいつた布子かハたびなぞはいている。そんならしきそめハいよ〳〵ぬしにきまりやしたかへと。ばんとう女郎にねんをつくきとりありサアきり〳〵して中ノ丁へ御出なんし。〳〵と。しんぞうをしかりなから。はしこのそばにとりちらかつている。おくり物のからなぞを。ちよつとかた付るくせ有リ。どふもあの子たちをあゝしておくとわたしかしめしがきゝやせんなぞといふせりふ付有るへし

同せりふ

ミんなおきなさへヨ。何ン時だと思ひなさる。モウさかなやどんかさつき来やした。サアおきなさへ〳〵。こゝハ誰さんだ（と屛風を明ケると居つゝけの客）ホ御めんなさりまし。今日ハよく御とうりうてござ

ります。アノ子やごせんを上たかサァおめへかたァおきなんせんか。それだから。ひるミせがらちが明かねへヨ。ア、南無めうほうれんげきやう

きながし出　きいたふう　爲知振

出ル着ものゝ半ッゑりに。青く茶しぶなぞわざと付ヶて半ッへらの紙はさミの中に。茶ふくさなどあり。どんふりのおもミにてきものゝせがまがつているミゑァノ女郎に口が有ると。水さしにも花生にもなるやつだなどゝせりふ付ひねつた物だ。

とんだねきなやつよなどゝいふせりふの時ハ。お定りの通りうるさく。はんゑりを合せるくせ有り又やうじをつかひながらむかふしまの土手なぞを。高こゑでしやれてあるくしうち有

同せりふ

此どう裏を見さつせェ。左リの袖が丁字屋のから琴が禿の書ひた絹だ。右の袖が花あふぎ。下のてん字ハ瀬川。あんしんをよく書キおほへたョ。くわんぼうの印ンハ水なるかなといふ字だ。中ハ玉屋の紫夕だ。しらず心たれをかうらむ。玉樓遊女小紫もとめにおうして是を書す。楷書ハへつして見事だこつちらの。せうが心まさにたんぜつすと書たのハ品川の村田の非哥といふ女郎だ。すぶくわんしきやうてかきおつた

振袖布子出　引込

かふろ十四五より内しやう引込ませる是を引こミかふろといふ

出ハくろさんとめのふりそで。半ンゑりにおしろいのあと付たやつ。むらさきのあさの葉小もんの帯。わる紙を帯のまへにたてにはさミ。きんかんのほうづきをならしなから。こしもとの名をよび。たんなさんがかこひのろへすミをつげといひなんした。からついでしまつてほうろくたなへすミとりを置て大にしかられんしたどうもわつちがせへハとぶかねへから。ほら床のかけものをはつしてくだせへなとゝいふせりふ有リ。次の間へ出て。かたつきしねふくつてなりんせん。などゝいふせりふの時ハかほをふるおも入有。中の間にて手ならひをしている時内しやうの女ほうなどによハれ立て行時つん〳〵としてミせる。おかしミのおも入などよし

同せりふ

モシ旦那さんへ〳〵（とゆりおこす）すミよしやがまゐりィして。此間のぞうがんのきせるハおきに入ィしたか。おきゝ申てくれろと申てまいりィした。アノのべの事しやァござりィせんぞうがんのほうでござりィすとさ。そしておかミさんが。さつきの哥をなをして下さりましとおきくどふけふハいく日だのふ。はりがね〳〵が來たから十二日ださふだ

上下羽織出　　何氏　流粋

出紋所の大キひ黒羽ふたへの小袖八丈のはおり茶やへ行てのミへれ。はおりをぬきてはさミ帯の形リおそれ入といふくせ有リつき合にれ。名もひやうとくもよべずミなめうしをよぶ也新役の古やくのといふせりふ付有リ。

此間岩木こん〳〵か作の。くりからのりやうのつかを見ましたが。とんと京橋と見へます三まいに付てつかれしたなとゝいふせりふ付あり。かん所へ汗ぬぐひをおとして来て。むせうにそこらをたつねるおかしミなどよし

同せりふ

へ御代のめでたの若松さァまァよゥ引おゐらがのおあいとハおそれ入の。きこうが一ッすひもならぬとおつしやるハどふもそのゐゑぬてさ。御めん候へ今夜ハ大めれんじゆによつて。かふよこになるじや。扇やのより合といふと イヤモウ たべるです。ケイ、プウ 河東へかふろハそばに ケイツプウ いイねへむゥりイ、の。コレ五町〳〵。おうらがやぼじやとおもふう茶にすなャイ

やつし出　商人

中屋山崎

川にさんとめのひかる布子
こくら
のおび
ねこし
やらしにむすび鼠
のつゝながたびこしにやた
てをさす別にしうちなし

同せりふ

わか葉どん〳〵。そふ巾て下ゞせへ。夕ばへさんの。此間ひながたをつかへされました。地をひびろうどに。貝屏風のおあんじへずいぶんはへませふが。どうもひびろうどの色がわるふござります。そしてむくもあらいその。ぬいになされべせつくまでへ中二日と巾ものでござりま

すから。まにあひませぬ。いつそ此ほうから御目にかけました。ひながたの内におきめなされませぬか。もしわからすれ。菊そのさんにちよつとおめにかゝりませふといつて下ゥせへ

羽織出　きめつきん　坊主

出くろはぶたへの小袖くろはふたへのはおりもん所定紋にあらず。ふじのすそのゝまくにありさふなぼたもちほと有る紋所なぞ有りミじかきワきざしをぬき出してさしこいこうしのたびさうり取にかいきのふくさつゝミをもたせるなり是しやァおやくがつとまらぬといふくせ有りて。たりてちよつぴらとつまをとる身とらずミさだめなきしうちなり

同せりふ

きのふハはいたん。へんう。せんう。ちやうか・なぞと升屋（しやうおく）へ行ッて惣介が出てのませる。し

ゆくあミが出て。ばんうがついぜんだなぞとむかしはなしを仕出して。それから土橋(どきやう)のとミよしへいつて。てうかゞ。二タきやから出る。ひなまちをかつて。れいの口をたゝひていやがられる。へんうにかづたやの小きつが出る。あいつらもゆひワたや。かのこもちばかり。ひるきにしおるさふだ。跡が春七ミち藏。千蝶に左六なぞが來てしやれた。惣介にすき成が作の大小をもらつて・どこへかおとした。是しやァおやくがつとまらねへ

湯行出

おとり子

出上田の小袖きがら茶どんすの柳茶しゆすなぞの帶。くしまきのかミを元結紙で結ハへこまげたの出さらしの手ぬくひにへになぞ付ているなぞあり茶やのまへに立ッていてはなしなどする事ありちよつといつてまいりやせふといふ時少しはやあしになる也

同せりふ

おゐいさん夕ァハおやかましう。御ざりやした。アイサけさハ駒次さんとかんのんさまへあさ

まいりにいつて。今かへりやした。いつそね。夕ァのがもちこして、けさのふら〳〵しやす。
けふのあげや町の湯がやすミだそふさ

廣袖布子出 仕立七五三　地まわり　俠者

出にかり着のはんてんのうへ女。手ぬくひを帯にして。らうのわれてやにの出るきせるに紙をまひたやつを。さかしまにこしへさし。またをひろげてあゆミ。よこねかてきたといふきどり。わきの下のやけあなより。ひじがミへるきどり有身はゝせまく折〳〵まへを合せるくせ有り。又いゝちく生だといふせりふの時ハ。手ぬくひをひざではたひて。かたにかける。あんまりアノ女郎をふむなよ大引て下ざんが出來るぜといふしやれなどよし

同せりふ

へあまりそゝるなョゥ。下駄のはがかァけるョゥ。コゥ鉄やけふ山のしゆくの大まとひを。もつてミたが。とんだおもひぜ。是から鉄ぼうをそゝるべェ。まご〳〵してつかまるなよ。ワがなりやァ。べちやァねへ。てうはんのくずれか。かつ込をおつかけるといふものだぜェ。聞ィてくりや。いゝちく生じやァねへか大家からハ店立テをくふ。かゝァハゐて吉でふさつている。證人かゝりの日なし逍しよい込ンで。とうくり廻しても。おへやァしねへごうのつきた。

四二

もゝ引出　　かゝへ町

川に三尺手ぬぐひをメ・女郎のしきせのゆかたなどきて・とうろうにれかのじぶん豪てうちんを左りの手にてかつき・右の手をひろげて人をおし分ケて行しうち有り又女郎のてうちんいくつも一度にもち七けんのするがやのよこ手のあたりへおろしてそれ〲の女郎の出ている茶屋へくばる事あり・松はやのだいてうちんれ梅はちに相印まつばつなき也丁子やれ・ふくむすひの相印也角玉やれ三がいひし・たれらやれくわの内に下り藤也

同せりふ

ヲイたのミやすく／＼。コレ喜八どん聲をかけていかつせヱもしやかましいやつが有るなら。ふんじはつて。くわい所へつき出すがいゝ。さつきも侍が瀧さんにつきあたつた。けふはにわかの初日だからとほうもねへ見ン物だ。モウあけ屋まちへ獅子が來たさふだ

羽おり着ながし出　通　色男

出くろ仕立ハ。くろちりめんの小袖黒上田のはおり。八丈の下着なぞなりすこしそけて來てハりうきうつむぎの小袖かんとうしまの下着女郎のほうよりおくりしきせ小そでにあんじの小もんの。へりとりむく。ちりめんのなるミしぼりのあわせじゆばんなぞの出も行ッひたいのぬきやうハころがきにぺろりをかねて。ひんよくかミハひんをまつすぐに少シつまるほう也しうちずいぶん人がらよくきどり有てよし

同せりふ

このもや。先へいつて。おゐらんに今いきやすといや。いつしよにいかずともいゝよ。お梅。權や介は丁子屋へ行たろう。こゝへ來ると大事たから。ちすけにてうちんをつけさせて。くりやれ。ちよつと。きり屋へいつてくる。みんなが來たらモウ江戸町へいつたといつてくりやれ。なんのたわへもねへ事にわるしやれだぞ

跋

あしびきの山東と名乗れ箱根からこつちの野暮でないといへる言にしてとりがなくあづまに生れ出て京傳とよぶも其名を都までにつたへんといへるの意なるや三めぐりの鳥居も心なければ大棧橋へつくちよきの數をしらず水道尻の火の見番もおいらんのかほを見しらぬれ燈臺もとくらき闇の夜もよしれらばかり月の夜と先のあかるき秀作れ所謂岡目八目ならん

[illegible]述

天明丙午新版

狂詩選諺解
四方先生著
全一冊
狂詩をおかしく解す

小紋新法
山東京傳作
全一冊
おどけ小もんづくし

狂歌評判 誹優風
作者自作
全三冊
狂哥師ひやうばんき

客衆肝照子
作者同上
全一冊
あそびのことをこゝろ付たる本

天明新鐫 五拾人一首 東都曲狂歌文庫
當時高名の作者肖像をさいしき摺ニ仕立上に自詠をあぐる
宿屋飯盛撰 全一冊

天明六歳丙午正月吉旦

御江戸通油町南側

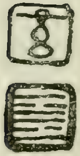
耕書堂 蔦屋重三郎

經華葉參

短華蘂葉序

溫石なんぞ大病の心をしらんなどゝ。九軒に遊ぶものは。南島をいやしめば。渠また。西を指て。しゆんだりと。わらふも。雅客の眼から。百萬遍の珠數くるのは。蛸洗ふのじやと。なじれば。念佛者の氣では。生花の會は。法會立をするのじやと。思ふて居るに等し。夫岷江のはじめは。卮にぜにの廻り程も。楚に入て。底ぬけ上戸となれば。打切けたをしは。色道初門の灌頂にして。諸客損に入の門なりと。先ふもとのちりひちより。かきあつめて。高價のまつのことの葉の。つきせぬをも。次〱の卷して。書なさんとは。いまださめざるのこ

丙午秋



短華蘂葉大意

色里のあそび。絶ずして。しかももとの粋にあらず。帳尻のかつ消え。かつ殘り。來迎寺黒谷。音をいれ。社樂國元。時を得て。遷宮砂持大きにはづミ。祭禮各舊例に復す。嗚呼太平の御代なれや。後紐の兒が。粋につかへば。溝またげて尿する禿が傑なりと。自ゆるす。當世□□べし播清。京惚が。店に十會富の。さしばんを望むも。ミな遊金の手當。風呂屋のなつの休ミに。小人島の桶伏をかなしむ。これらの徒も。粋の巻にハ顔附すべし。爰にはなめづらしとよめりける。新屋鋪は。弓手に洛陽にかよふ。心齋橋筋の大路。連綿として。馬手は桃源に至る。澱水の下流を帶びたれば。かの唐伯虎も。爰に筆を投べししかれども。榮枯浮沈は。常の道にして。去年は南地のやけ出され。軒をつらねしも。今はた寂寥たる隱栖となれり。しかれども西廓南島の。權式の高ひがよひと。いふ人ばかりもあらず。月の隈なきより。すつぽんの味さにはしかす。やはり此里の。氣のつまらぬこそ。能けれと言人あり。人間万事さいたら島。新町に三月蚊帳つれば。新屋敷に木津なんばから。三月なすびくれる客有。中にねり物出せば。

爰に見世物の仕打方有。困快止動の。間違ほどにも非ず。千變万化の遊び氣質。いづれなさけの端た買ハ。傾城も夜發も道ハ一ッ也。意氣地あれば。込引有。以南鐐一片換日柄一日と。此所の風姿も。見盡さずんば有るべからず

たんくわずいゑう

【半兵衛】ナントいにかけに。おとがい。ぞめこふか【庄八】イヤ〳〵立木〳〵 此二人せんばのぬしやの弟子也 【彌吉】おれははやふ。いなねバならぬが 是近邊の。木地屋の小むすこなり 【庄八】久しいものじや。そふは立あわぬ。今夜ばかりハ。とまつていんでも。高砂のゝ宮さ【半】鯉万も。今はうつくしいものハ。ねいからないぞ 住吉の。どろゆの。たどりなり 【庄】木綿屋の娘ハ。どふしたいなァ。野がわの福屋に。濱の三ッぼしに居た。料理人がいたが。又此ごろハ見へぬナ【半】貴様もよふこそ〳〵。しつているものじや などゝいふて新やしきへくる 【亭主由兵へ】これは庄様よふ御出被成た 紺やの染本の木めん切で。こしらへし。ひとへものあいしほりのふんどし。まへおびにむすび。へりなし。こんごうおもてにみがきかけていろ内しよくなり どなたもよふ御出被成ました。すそよしも。いかゐまいりで。ござりませふ。おさの〳〵 とよぶ 【娘さの】アイ と近所から戻てくろ。木綿そらいろ小紋のひとへもの。もん所糸輪ニ桔梗山ごしの彌陀見るやふなのぞきもん也髪をたせのしまだくずし。やき杉のこつぼり どなたもよふ御出なすつた。庄様ゆふべは。はやふいになさつたなァ【庄】イヤれいのとく意まわりで。なんち四五軒ぞめくうちに。夜半じや有た【さの】おまへ様のよふに。茶屋はき廻

る。御方いない。マアどなたも御上り（とむりに引上る）【半】モシおじやまながらたばこちつと（と、かなぐのこしさけ）
（出ス身躰かきりの見てくれ也）【亭】ハイ八こくかへ申【半】イヤあかつぼに。しておくれ【庄】ヲットおれにも
【さの】庄め。あなた方ハ。おなじミでもござりますか【彌】コレ庄八ャわしハ爰へはじめ
てじや【半】どふして。おまへがたの來るところじやないもの【彌】モゥねつじやな【亭】ハイ
おたばこ。コレおさの。おものすきでもできたか【さの】イヽエイナ至躰庄めがわるひわいな。ア
ノナりきめはいやといな【亭】ハテお氣に入ッたよふにせいャイ。申どなたも庄さんは。久し
いおなじミで。御ひゐきに被成て被下ますが。あなたがたも。手前へ御出被下ますと。附ヶが
やすひかわり。寐間（ねま）で鼻息（はないき）かたかふござります【庄】イャひくいきが。つよからふ【さの】わ
るひ太鞁ナア。マア庄さんどふしなさる【亭】おさの。ゆふべさし紙の來た。丹波やの新造さ
んは【さの】ホンニアレよんで見なさらんか【庄】ソレよかろ。そして半兵へャは【半】へな
しミよしミもないわたしを（としげたゆふぶしでかたる）【庄】エヽすゝどひかま入。おやじ。てきは大梅へも。
ゆくぞや【亭】どふりで。お見かけ申たよふにも。ござります【半】アヽマヽヨ何理ノぬいめ
聞ておくれ【さの】ハイあなたハどふしやふいな【庄】むすこにか。コヲッまづ此嶋で。とび
きりの鹿めかい【亭】ソレはやふ聞ておじや【さの】アイ（しりたれ帯ゆすりあけ〳〵出てゆく）【亭】庄め掛あんとう

のかきつけしておくれなされャ【庄】藤吉りうで。ミしらかそか【さの】ハィぬいがは往てゞ
ござります。外ハおふたりながら。見へます。どれぞほかに申【半】そんならおめきゝで【亭】
みつが聞てミやらんか【庄】はりまやのかい【さの】ハイナア【庄】はやひこと〳〵【さの】ハイ
【庄】おやじけふはもん口じやが。チョビやからすと。一丁入れふじや有まいか【亭】よふご
ざりましよ ととたんもつて出る けい子が見てさんじよか【庄】されバァ【半】うけて居ます〳〵。はやふ
よびにやりいな【亭】いまおさのが。かへります【さの】ハイミつがつれだつて。かへりまし
た。ミつが上ヮ【ミつ】アイ【亭】これ。けいこが見て。おじやらんか【さの】アイしばらく
まち。きてうがに。小里がハいてなり。たんばやの子どもしゆハ。しんちの見せへいきた。春
野がハ他所ゆきじやわいな【庄】はるのハどこへいたへ【さの】河きよの御客で。とり源へ
【彌】もん口じやほどに。たれになと。しておきいな 此里ハせき四五人のけいこ也むすこ此わけをしらず【庄】ないもいつそ。
氣さんじか ととりなす【亭】何かなしに。ひとつ。おあがり被成ませ とてうし硯ふた持て出る一ゑひはじかミ骨板の組合せ也【置屋の
むすこ】ハイ新造が。鹿が。あげます とこんにやくのよふなふとん一ツじやうかたげて竹の筒からほそひせんかう出し釜の下へたてる【亭】ヲット そこは。
灰がおゝひ。火入へしよ とわざと客へ聞へるよふにいふ【置】アイおたのミ申ます【女郎】どなたもよふ御出被成
た【さの】鹿があちらへいき とむすこのそばへやる とくがなんぞおさかなヲ【亭】ハイ、 と娘にていねいなへんじする【さ

の】そして利介ゐにもらふた。共なんきんの。ちよく。おくれ【半】いふてたもとのわけふたつ。くれないはうつり氣な とすかたん文句を律ちがひてうたふ【庄】チツトいたゞきかさのひも【亭】ハイちよく といふてとんぶり鉢に よりものゝいつたを持て出る よふわる口。いゝなさる。お前ハ口からさきへ。うまれなさつたそふな【庄】イヤ足から先へうまれて。母者と。取上ばゞの。やつかいに。なつたものじや【半】鹿ゐあげよか【鹿】ハイチヨツト申【庄】おさへのあひや。たちくづへ【半】ミつゐおまへハ。どこやらで見たよふなが。とんとおもひ出さん【ミつ】サイナわたしもいな【半】コヲトまちや。なんばの。ひぜんゆでかいな【ミつ】イヤイナよふおぼへていじや【半】そのときから見るとヱラウうつくしうなりた【ミつ】アヽいゝひやの【庄】どふじや盃をまわさぬか【彌】わしがひらハふ【さの】申イッソ此ちよくでまわしませふ【庄】よかろく【半】庄八ャゑらふ。こけいそぎをするな【庄】なんのマアおれがいつ。そんないげちない事した【彌】どふしてそりやないのサ【さの】新造ゐ一ッのミ【新】ハイ中もふつるでおくれな【力】せんからもつて跡眉にくる愛はべつにかり子もなくほうばいの女郎が花を間にくるなり おさのゐ。たてゝいのナア【さの】アイりきゐか此間ハ【力】アイ とのふれんよりのぞひて見て臺所へあがる 庄ゐじやないかいな。アノ新造ゐよびたハ。おまへかへ【庄】おれでござんすが。なんぞ用でごんす歟【力】

コレそれでハおまへ。すむまいがな。アノおさの身もエヽとつとモウ〔さの〕申イナこれには何やかや。譯があるわひなァ〔力〕イヱヽなんぼ爰らじやてゝ、あんまりやミらみつちやじや。おまへマア譯もたてずにおいてから。マア當分のきやせんほどに。そふおもふておくれ〔庄〕何んじやぞい。退ののかぬと小むつかしひ。ヤモウ是からわれハ買わぬのじや〔力〕エライ悪鬼せりふナア。そふいふておまへ。すもふとおもふてか〔庄〕すむの濟んのとい。川水くミか。なんぞのよふに。おけやい〔力〕そんなてつくハ。言たかてゝ。なんとおもふ物てイナ。夫でハおまへハよかろふが。コチノくがひが立んわいな〔庄〕くがいとハ。なんの事じやイ。くがゐくかゐハ十八がい。大師がいなら廿四日。くがゐが立にやねさせておけやい。そんな事コヲには。とんぢやくのとの字も。富の札やのとの字もないわれ〔亭〕モシくお二人とも。何もおつしやらずと。モシりき身今日の所はよろしうナァ〔力〕よからふてゝ、どふするものでいな〔庄〕コレ貴身たちも。アノずんばたにかまふなイ〔力〕エヽホンニわしも京のとゝ身ハ、くげ身でわしハおとし子じや有たによつて。ちいさゐときハ。物見のちんからおまへのよふな十左衛門ハ。遠目鏡で見たばかりイナ〔庄〕コリヤヤイ六十六部ほど。仕替られてホンニ。くだんハ、はちのすのよふに。なつてけつかつて、何じや。くげのおとし子じやァ。こりやイ。くげとい

ふこじきは。大坂にハないわな【さの】コレりき匂、なんじやあろふと。ちよつと御出【力】マアまちいナホンニけたいくその。さほ竹じや（といゝ／＼くろじへゆく何かむりにのここませすぐにりき を内へかへす）【さの】ア、どふやら。こうやら。重荷がおりた【庄】おさの匂どふいふて。いなしなさつた【さの】それハおまへさすもんかいな。しかしりき匂もエラごたくじや。行つたけれどナ。庄匂がいゝなさるにハ。けふはちつとおもわくが有によつて。いれこミの。新造をよんでくれ。諸事ハはをりのひもで。むねに有と。言なさつたによつて。ソレテハ私がすまんといふたら。庄匂が言じやにハ。おれもそのくらいのこミ引に。どんなながれをつけふと。おもふているかと。エラきねでなんちへ徃くと言なさるし。初のおつれハ有リ。じやよつてせりふハあとでも出來る事じやと。言なさるとをりに。したわいな。おまへもけふらハ。ぬきはなの貮木や三木は。せぬかてゝ。大じないかほじやものと。立テのぼせに。じゆつながらせて。いなしたわいな【庄】太郎しは。たろしじや。所のおやまさへ。その位じやもの【さの】なに言じやとおもや。きかんぞへ。此らくさくは大久で【半】ヲ、きつと。そふじや。おれも諷經に立のじや【彌】いつそ。ねりものでも。見にゆかうか【半】立テ見の。足ふまれなら、よしにしたがよい【庄】エライ大いふナ【亭】どなたもしばらく。上へ御出被成ませ【さの】サア鹿さん。彌しう匂をつれまして【鹿】

アイサア申御出【彌】アイ今いくわゐな（とくずくたばこのむ）【牛】コレ鹿﨟エラウつれていきたがるのふ【さの】つれて往たがるじやない。おまへもはやふ上りいな【牛】どふでも。ねさゝにやおかぬか（と二かい上る）【鹿】（たばこぼん片手ニ紙さけてあかる）いとしかわいとなでしこの。よれつもつれついと櫻（とうたひながら屛風へはいる）ねていなさるか【彌】イ、エ【鹿】（ものもいわずもたれかゝり紙を枕えやつて）ア、しんど（といふてかほのぞきにゆくよい客と見てつとめる仕打也）【彌】ヲヽ暑ッ【鹿】おいやかへ【彌】なんのまあ。これはうつかりあいそづかし申ました【鹿】おもわねばこそ。君はまどろむじやなァ（とひやうぶまろうしてまつくらかりにする）【彌】なぜに。そのよふに。くらふしじや【鹿】ねるに。あかりが。いるかゐナ□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□小笠原じや□していかゐな。【彌】これがかつてゞござります【鹿】うそつきいな。とく所じや。ときじやけれど□□□□□□□□□□□□【彌】わたしがときます【鹿】マァわたしにとかし。□□□□□□□、□□□□。むしがつくぞへ【彌】アノなつでもかへ【鹿】爰らのかしぶとんに。そんな。とんじやくれいな。いわいなァ【彌】そんなら。そふしやうかな【鹿】おあつかろふが。□□□□□□□、□□□□□□□□□。内でねじやとヨイニ【彌】アイどふなりと□□□□□□□□そしておまへ。ほり江ゝとこニじやあつたへ【鹿】どこといふて。おまへ。私らがいたところが。いわれる。ものかいな。それをきゐて何しなさる【彌】ハテマア聞て見るまでいな【鹿】アノ北の新

屋敷に〔彌〕三ン木にかへ〔鹿〕ならつまに。ちいとの間〔彌〕アノなら妻の。嶋の内の見世
ハ。酒見やかいな。その鹿ゐでもない。馬ゐハ。道頓堀のいせ夏とやらへ。片付てゞ有つたげ
なナア〔鹿〕サイナ茶種からもナあんなお子が出てじやさかいナ〔彌〕おまへ新地の。三町目
には居ずかへ〔鹿〕イ、エ高津新地の八町目に〔彌〕坂町うらの。天神のあたりでも、見たよ
うな〔鹿〕ひげそりへ。二タ入レ込ミした事が有わいな〔彌〕いか様ふし併で。友達がおまへ
よんだ事が。あるかと思ふた〔鹿〕イヤイナそんなところへ。いたおぼへハないわいな〔彌〕
よふほう〳〵へ。いきたのふ〔鹿〕かんにんしておくれ〔彌〕馬場先には居ずかへ〔鹿〕おま
へも人の事言ながら。よふどこもかしこも。しつて居じや。馬場先でハな（といわふとして）ほんに。ど
こまでくり出されやふもしれぬ。マアなんじやあろとその馬場先の。おなじミのところへ。い
た氣になつて。ふせうしてあそんでおくれ。〔彌〕ナア二エラたしなましの。いやミな事を
〔鹿〕いやミじやないけれど。そのしやうこハ。とかくそちらへよりじやもの〔彌〕ヤア半時
うつじやないかサアこへじや〳〵〔鹿〕はんじのりんふりや。どふするへ。此嶋ハさミしうてこ
ぶつそふなゆへ。初夜過から。半時うつわいな〔彌〕それで氣がおちつゐた〔鹿〕ヨシまたよ
なかゞ。八ツかと。いふたてゝ。いなすものかいなア〔彌〕それでも。いなぬと手形がやけま

す【鹿】わたしがかへさぬと。いふたら。どふしひじや【彌】そふじやてゝ。いなにやならぬわへ【鹿】そんならこふしていなしませぬ □□□□□□□□□□□□【彌】ァ、御言葉にあまへて。いにませぬでござりませふ □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□ ○ しはらくしてたはこのこはらばいにおきかへりて【彌】さつきに庄八がいざこざいふたが。新造㒵はなんにもいわずと。よふ逢たナァ【鹿】おまへ夕ァいれこんだ子じやによつて。そこらㇵいさゐかまわづさ【彌】それでかねまがきつうしつかな○【庄】ァ、ようた〳〵。つゐづる〳〵と。ねてのけた。彌しう〳〵【鹿】ちと御出いな【庄】フゥなんにも覺へず一寐入した【鹿】新造㒵ㇵへ【庄】マァ聞ておくれ。伊達が關が脹滿わづらふたよふな。どんたいで。くるからして。きつねつきのおちたよふに。ねたがさいご。ゆすつても。どふしてもおきるものじやない【鹿】氣にㇵ如才あるまいぞいな【庄】アレニ如才があらふなら。からすもつゝかぬ。【鹿】おゆるしや 下へゆくついでにとなり屋風へはいり これ〳〵。新造㒵ちつとめをさましいな。おまへの御客ㇵさつきにから。こちのねまへきて。はなして居じやぞへ【新造】ゥフゥニャ〳〵。ぎんのかんざしㇵ。利上ヶしておこナァ【鹿】ヲ、おかし。この子ㇵねごと。いゝじやわいなコレ〳〵利上ヶじやない。おきいな【新】ヲ、よふねたナァモゥいになさるか といゝなからのびをしてその手であたまのどうぐをかぞへて見ろこれハ人かちのわるいきやくにもしたつあげられへせんかと見世つきのくせののこり也【鹿】ヲ、いやゐな。まだ目がさめぬかいなァ【半】ァ、もう〳〵。

夜中ぎつち〳〵と。本町のかり橋わたるやふに。鹿ゐも親出の。きむすこを。よひかげんに。こだれさんせ（とおきてくる）【ミつ】（是もおきて出てくる）きつゐ蚊で。ねられる。ものじやない【半】庄八ャ新造ゐハ【庄】どふじや。しんだそふな。ミつゐエライ蚊ナ【ミつ】サイナア【半】こゝは。かやハつらぬかへ【ミつ】紋日じやものかんにんしてやりいな【新】モシどなたももふいになさるか【庄】ながふはやりましよ【半】サア〳〵いなんか〳〵【彌】どりやおきよか【庄】エ、このしつぶかゞ。ひきづり出すぞへ【半】彌しうも。ゐらほとびで。とふ〳〵こゝへ。水尾がつけかわつた（とゞな〳〵二階ゟおりる）【さの】（ねていながら）もふおかゐりなさるか。お近ひうちに【鹿光新】どなたもよふ御出被成たと○鉄眼の鐘ハごん〳〵

短華蘂葉大尾

まあんか

共あむかの序

遊をしらぬしかつべは。花の爲に笑るゝと。李太白が金言。眞に通夫子と稱すべし。吾尾竹屋のあんかにあたり。此卷をつゞるによつて。共あんかと題し終ぬ。庶幾太白か笑にあわさらむ。

午のはつ春

其あんか

中橋散人著

其大概

春の花秋の月、とかく遊のことなるへし、しかし青樓ハ、ありんすをざんすこじれつたし、南樓は、似て芍藥の花なれハ、もとより齒牙の間にはさむにたらす、唯深川の任俠、しんに東都のきしやうといふへし、猪牙搖〳〵としてかろくあがり、やね船悠〻としてようやくゆく、うぬぼれのなかはをりハ、ふりむかれてもほれたとおもひ、臺所てあふあたまは、とれもそろつてきれいなり、おちつきの茶ハ枇杷葉湯をあざむき、吸もの丶おしきせさためてあちわいなし、火鉢のほのうえん〻として、燭臺のひかりくわう〳〵たり、さけついではをりきたつて、むだようやくせうし、絃なり哥高して客しばらくだまる、こどもの顏まつしろにして、船人のいろます〳〵くろし、しゆす鬢の一藤治ハ師子をもつて興をそえ、ばん頭の傳七けんざけにてかまびすし、なまにえの唐なす尻をいだき、京だんのさつまいもだまつてねる、天非を見る夜ハ烏

の聲嬉しく、枕をおわるゝ曙はおいだしのかねを恨、懐中ともにきゆ棧橋の霜、身上おなじくかたむく曉樹の月、鷲へゆく樓船どこのさるまつぞ、春をしまう大臣いづくのとんきちぞ、豈おもわんや而後につきだされんとは、いかんともすることなしかぶつて田舍へゆく事を、やんぬるかな黄金再きたらす、いきなる哉あすびまたやめかたし、

其二階

【きんろ】おいとすつぱりきれてくれろ【おいと】あきれしめへが【きんっろ】あきた【おいと】ほいこれハしたり【きんろ】つらァミるとごびようきにさわるろうけへいけ【おいと】いきやすめへ【きんろ】いきやァかれ【おいと】いやだ【きんろ】このこじきあまめへいけぜんせへなさるしやァねへかかゝとうもんだりけつうけへでもこのきんろさんによばれるなァめうがなこつたとおもやァかれがんくひからすいくちまでくじらやしやちほこがをうらへするちよつとせりふういほふならだつこなさるしぶんにやァごほうそうのまじねへとりゆうさ川のいけすをくらいちつとをむしのいてへときやァ八百やてうのいしやかくるごせへじんあそばすと傳八彌兵衛をこしきんちやくてうどこととしで十万兩つかひはたしたせうがにやァきんたまがかいけり

やァてうしていわしがたんととれかゝとでむしのかぶるときやァ米のそうはがいくらするうぬらかようなとんちきにばかされるやろうだとおもやァがるかべらぼうめもつてへしごくもねへなせおかほをよごしたこのはつつけめへしるめへとおもふかそつちのうでへミせやァかれ「おいと」ゑゝそがつきたからけしたのさ「きんろ」まくらをもつてよこつらをなぐる「おいと」よごしてもあらうことをしつていやす「きんろ」おきやァかれうぬが「おいと」わたしがあらいやすマァきゝなせへらへねんのなつといつたがまつにまたれぬうきつきひどふぞしようもあろうかとあのたこやこのたこをにたりやいたりすにしたりめうがやしやうがゝしつかりきゝおせへつけてこうらァはゞきりとてくだのいとすしをひくにひかれぬてうほがいかなしいくやしいいやだともえやはいぶきのさしもぐさかんにしねへやきけしたもあんどかはやくしてへからと金をしつかりだす

「きんろ」よしやァがれうぬかなミたもひさしいものだ「およし」もし／＼きんろさん藤さんがおいでなさりました

内ではかねておいとをきをつけてゝるにまくらでなぐられたかほのきずおゝきにせかれふミをたすにもあらためられたよりをする事もならず外にわけもありしばらくひつこむきんろもびようきにてひさしくいかずたよりのねへもいめへましい

其いほり

春をむかへては欄前の花匂を飛し秋にあふてハ庭上の紅葉色をそふいしまの水きようして風のをとすゝしくまどの雪深して竹爐のかま浩蕩たるいほりのあるじ［きんろ］これはおふたりさま［き十ば十］此あいだハこちそうときにこしようろういかゝ［きんろ］まづいゝほうてこせへすきのふ友交がきて五十いんをいたしてゆふへ八ッまてさ［き十］たれでん［きんろ］とせずにき十それかようこぜへす［きんろ］は十さんゆうべハ青樓としやうちいたした［は十］いや青樓でおゝわれへさん公がおくめへかつたらをかばしよのきやくハいやだとのぜんせい［きんろ］よこつつらァなぐればいゝ［き十］おくめもいつてへくろうセう［きんろ］あいつァあゝなるはづよきゝねへほんてうのやろうをくづとだゐてこともまでかわせそのやろうかかぶるとどんとつきだしそいから三丁がぐつついて品川へ見世へだしてもらつてそして京橋のやろうをおりふしよぶか三丁がかぶつていなけへいく時もよつぽどおいていつたにあいつァ手拵一ぽんやらずそのばちでうんのつき品川のミせがさつはりやけそれからうろついてむたミちへでゝまたやまづけへりをしたところがあゝいふめいゝきミとはいふものゝかわへそうでもありしかしおもし

らへあまわかつたものよ「は十」めつきたけのこたァある「き十」お富はまたてるがなをきれへになつた「きんろ」あいつも歯をそめはをみがくいくたびの春ぞたよ「は十」あゝいゝくだ「き十」きんろさんへおきくてなけりやァしやうちしねへ「きんろ」またはつがつほといふむすめだそして茶やはなもしやうちでへいちおやかう〳〵だからいゝ「は十」ほめるもんだおらァどうもむしがあわねへおすてならひときれいきてへ「き十」きれへになつたよ「は十」おつまかことう古道にきかせてへはるにならさァけへるめへ「きんろ」古道といふもなァいゝものよ「き十」おいとたァひつこんたそうだノ「きんろ」はての「き十」おめへあのわけへしらずか「きんろ」しらねへおめへきいたか「き十」おめへのとけへなんともいつてよこさねへかどこのかやしきへいくといふ事だとせかせる「きんろ」いゝのさもとんちきだのコレ万吉ごぜんかよくへあげろ

其夜の夢

うつゝなやひとりね夜半のまくらにふきまよふ深山おろしに夢さめてととなりざしきの琴の音をきゝなからうと〳〵まとろむまくらの夢花のかんばせうちしほれなミだなからにかきならす

糸にうらみをくりかえしうたふをきけば

其哥(うた)に

ほにいづる野(の)べのをはなにまねかれてよりくる糸のひとすじにそむるこゝろはくれないの深(ふか)きえにしをむすぶいとしめつゆるめつかわらじとかわすちぎりのながかれとくりかへし〳〵あふさきるさのかずつもりほんのめうとゝがんかけていのるちかひはしら糸のしろきはいろの色〳〵にうつりこゝろのあさぎ糸あさぎに染(そめ)てまたそめてはなだのいろやさま〳〵の手くだのあやのあやのあやいとをうけつながしつ水鳥のうきねのとこのかりまくらかひなきゑんをくゝ糸のうつてかわりしごしんぞとおもへはむねもみだれいときるのがましかえんの糸

【小ぞう】もし〳〵こぜんをあがりませ

きんろは夢さめて唯ぼうぜんとおきあかりさつきのき十かはなしといゝこいつアすてゝおかれめへこんやいかふか

其うつり香(が)

おゆふ およし きんろさん此間はとうなさりましたおうわさはかりとたんこ也【およし】からかみをあけてこれはしたり【きんろ】すくがいゝと二階へゆく今きやくがけへつたと見えて枕もとのあんかに火もありおよしよきをふるいあんかをいれる

其あんか

【およし】おいとさんハひようきてひつこんでいなせへすたれにいたしませう【きんろ】たれでもよし

およしした へゆくおきんハかねてきんろにほれているによつておよしをたのんで出る

【おゆふ】きんろさんでへぶおいろかわりいとうなさりました【きんろ】ひさしい病氣さこんやもこゝろもちかわりゐすくにもふねやしやう【おゆふ】そりやァおわるうごさりますさよふならおやすミなさりましミな下へゆく屛風をたてる【きんろ】お糸ァなぜひつこんだ【おきん】おいとさんハちけへうち梅本の露月(ろげつ)さんの方へいきなさるそうさ　きんろきゐてびつくり【おきん】おめへそんなにいゝなすつてもおいとさんがでたらまたよびなさるであろう【きんろ】それがどふした【おきん】おめへにてだかるこがあるからさ【きんろ】ぢさんきんいかほど【おきん】しぬほとでたかつているからどふぞよんでやんなせへ【きんろ】てめへもなかうどをしていゝじぶんだ【おきん】わたしやァたのまれたからぜひおめへにせうちさせねへけりやァならねへ【きんろ】よしやァがれきんたまがどつこいさとふんばつていらァ

こゝハぜひかミをきらにやアならねへばだミなさまなんとおぼしめす

【おきん】これでしやうちしてやつてくんなせへ【きんろ】どけへのしんもつだやら【おきん】

わたしもしらねへのさ

きんろハおいとがひつこむときゐてをゝきにせきまたおきんもそれなりにもならず又あしがちかくなる
おいと四五日すぎて出る此事をきゐてくつとせき身をすてゝふミこもふかたゞしおきんにわけをいつて
きれてもらおゝかとしやんもしてミたからうらみのほのうたえかねて

其ほのう

おいとずつと屛風をあけながらきんろさんこつか「きんろ」たれだ「おいと」なか丁てたてひきのつぶゝこゝろいきのいゝおいとさんといふこどもしさ「きんろ」はァ「おいと」あかるくしてものういわふ

とあんどんをかきたてどんとすハる「きんろ」とんだきれへだ「おいと」きれへなこをちつとよびなさんねへ「きんろ」しんこのなしやさつまいまァミかけはかりであじかねへ「おいと」ふゝよしなせへとんだひとじやァねへかあんまりぎりよをしらねへなせおれにたまつておきんをよんだ「きんろ」てめへそんなにほれたか「おいと」ほれたかどふた「きんろ」ほれたら金へよこせ「おいと」さるにやるかねへもたねへとんちきめいぬのくそめもふやぶれかふれたこのあまもこのあまだなぜおれにわたらずにでたとんだじようろじやァねへか「おきん」ほれた

からてだかとうした「おいと」なにほれたてめへが「おきん」なか丁のおきんさんがよ「おいと」たァことをつかずとだんぎめへりにでもいけごふさらしめうぬがよふなまじめへむかふじまのどふつぱたにいつくらもいらァゑ、くやしい

ときつそうかえてとびかゝりきんろかたぶさをひつつかむ

是より二ばんめはじまりス。。

人遠承務物

自序

九方皐之相馬也。畧玄黃而取駿逸。非通而何。

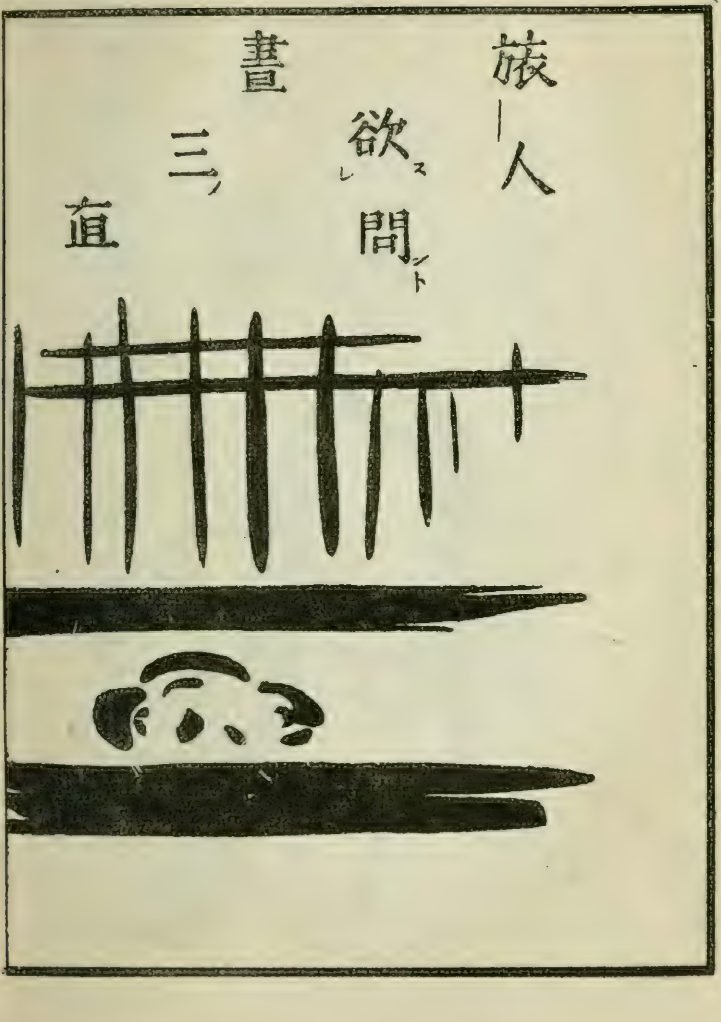
私嘗從長者。聞蘭竹之訣。其言曰。善描者。畫其意。而不畫其象。私深信之參倚墻羹。甚於飯。雖然。徒上滑而行過。不向本通而迷新途。其寫浮世所謂通子生蘭也。惟急于狀態。而不及日鼻。如存如亾。遑不自安。質諸先生。先生咍曰。通則肖矣。夫人物之於鳥羽。花鳥之於光琳。類也。子未睹陰鄽之画壁乎。巨竹特生虎割烟艸。且使南極老人如賣花翁。仙人騏驥疑中鹽漬鳥。不得不挂于牀。而爲悉達者流所美。画之者通也。美之

者亦通也。鈎是通之肖類。各、通其通耳。庸詎傷乎。遂譜授刊者。

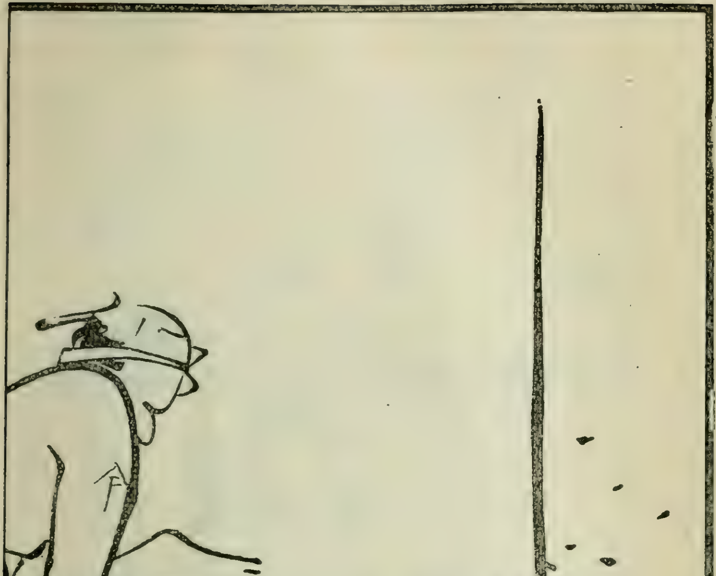
天明丙午春

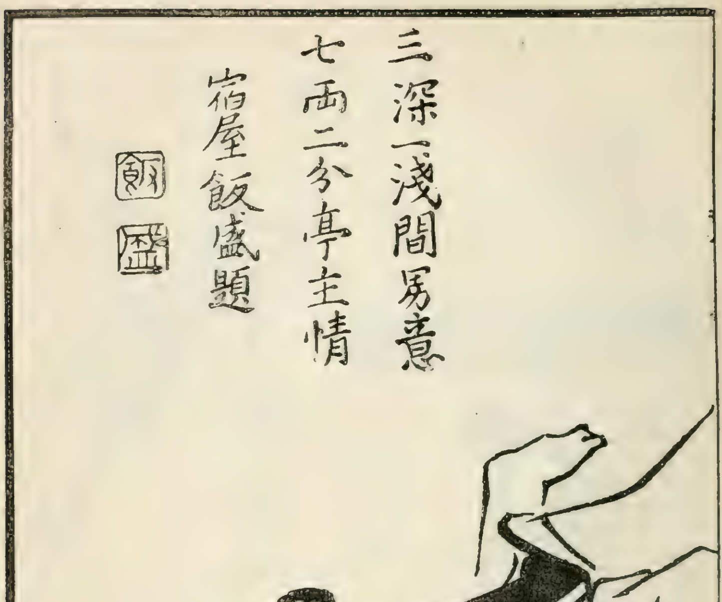
一拂齋識

通人の羽織


旅一人
欲（ス）問（レ）（ント）
書
三（ノ）
直

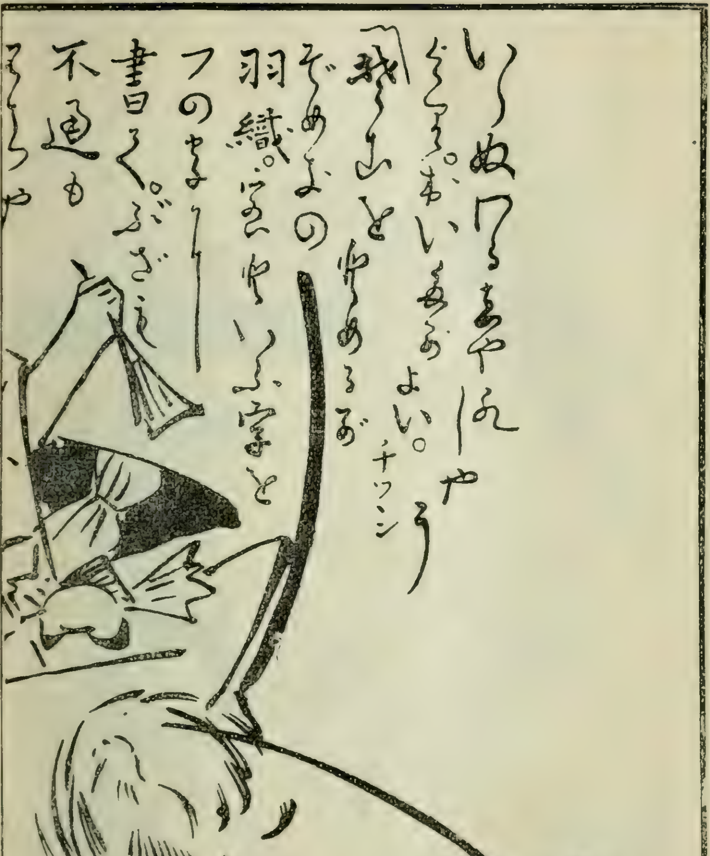
新造
催スレ眠ヲ
引四前
春蟻戲題



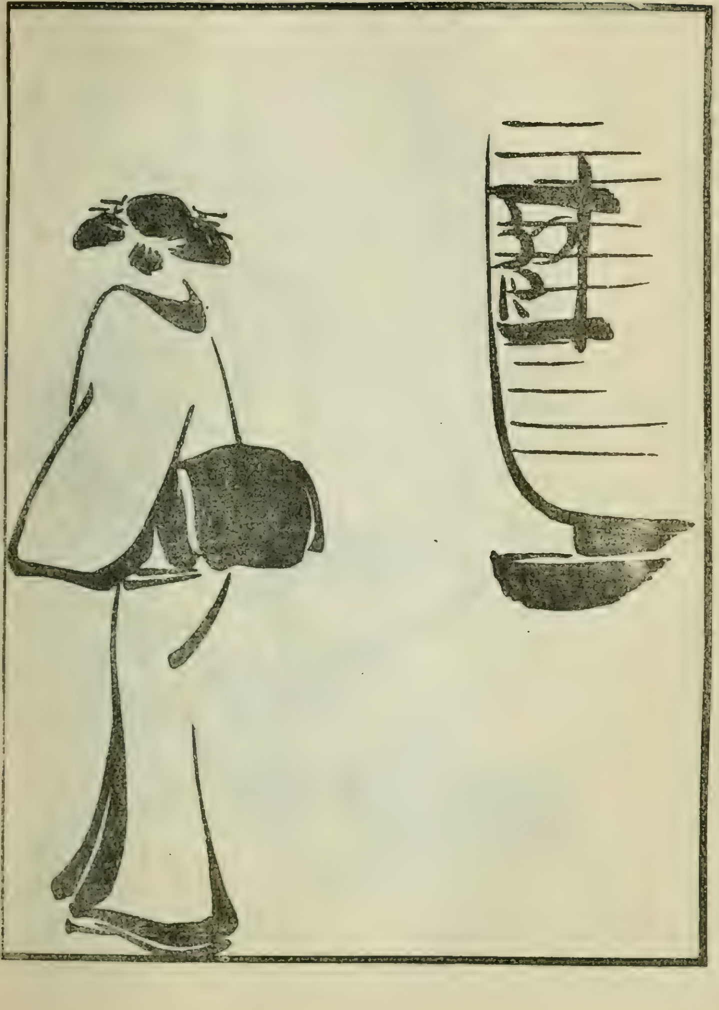

三深一淺間房意
七両二分亭主情
宿屋飯盛題
飯盛

ボニ
口の心の
ボダイ
シユモク

九

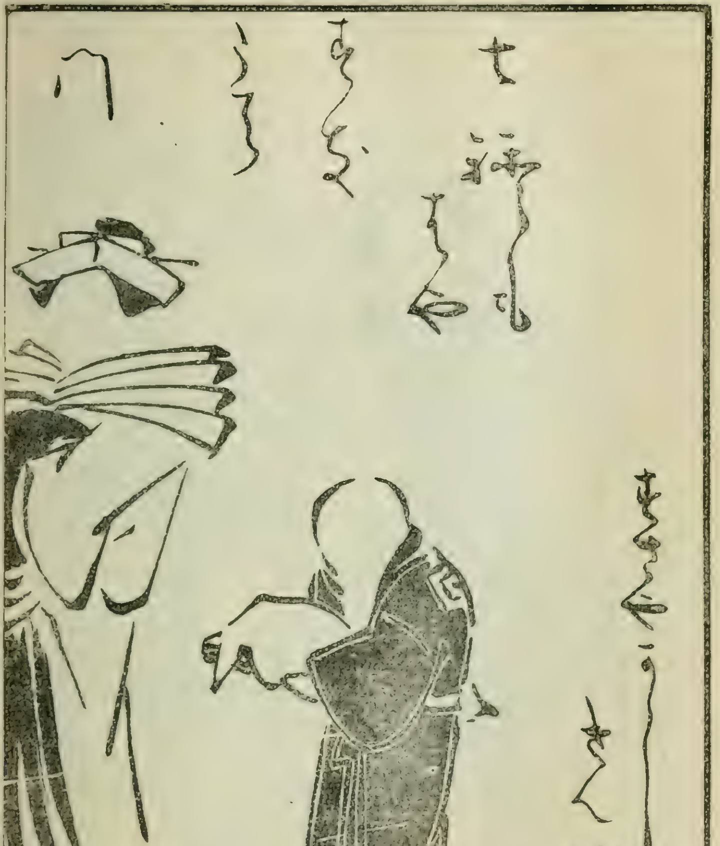


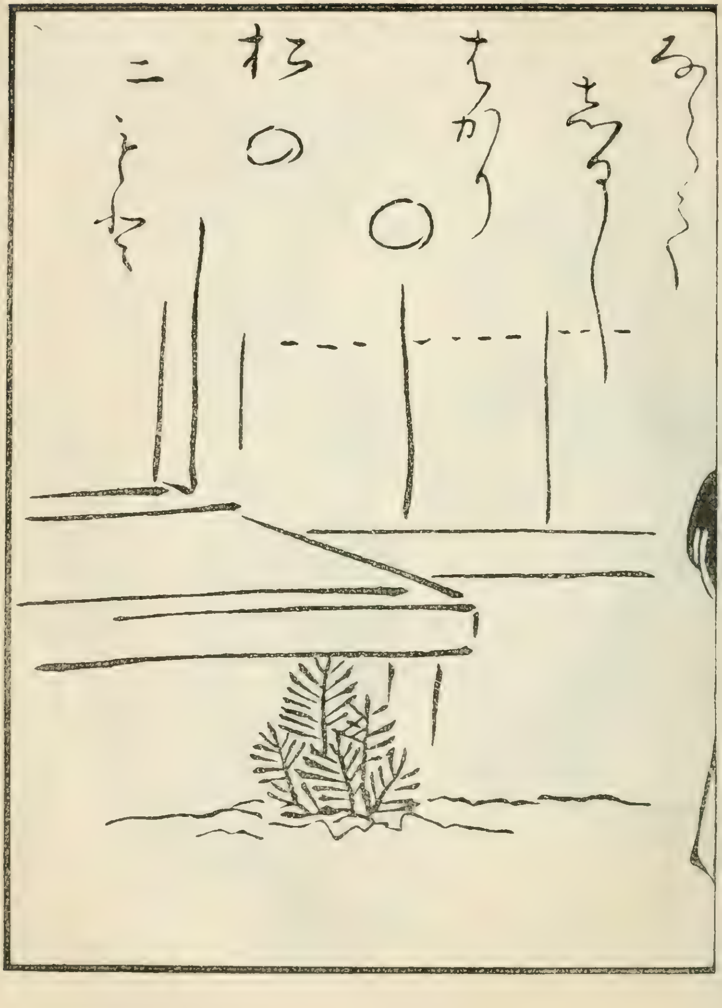
ソヽワリヤア
山東京傳書

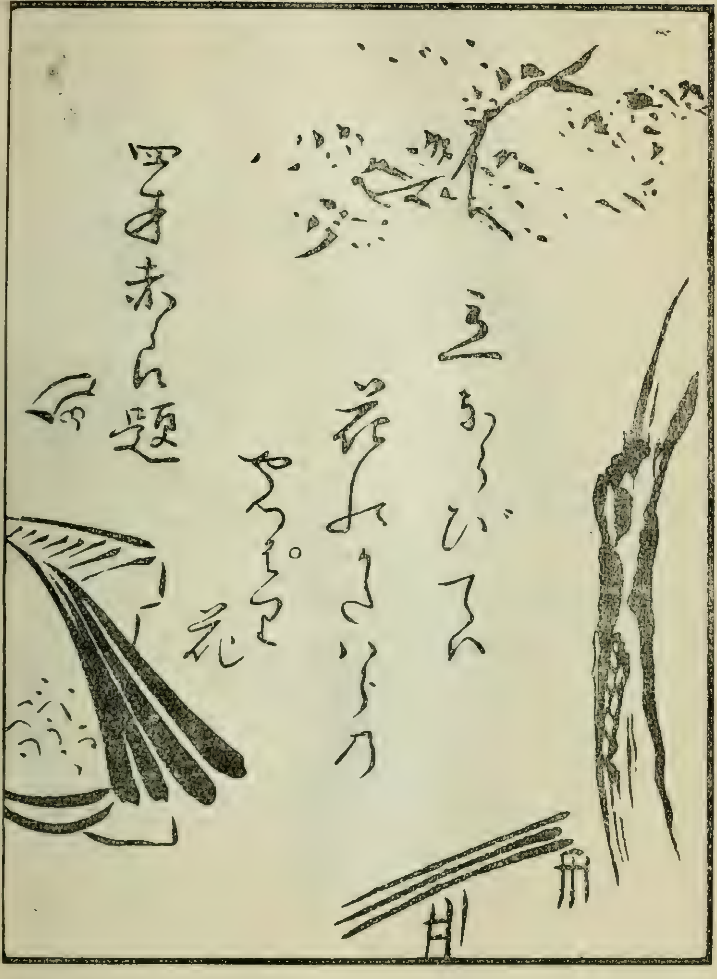


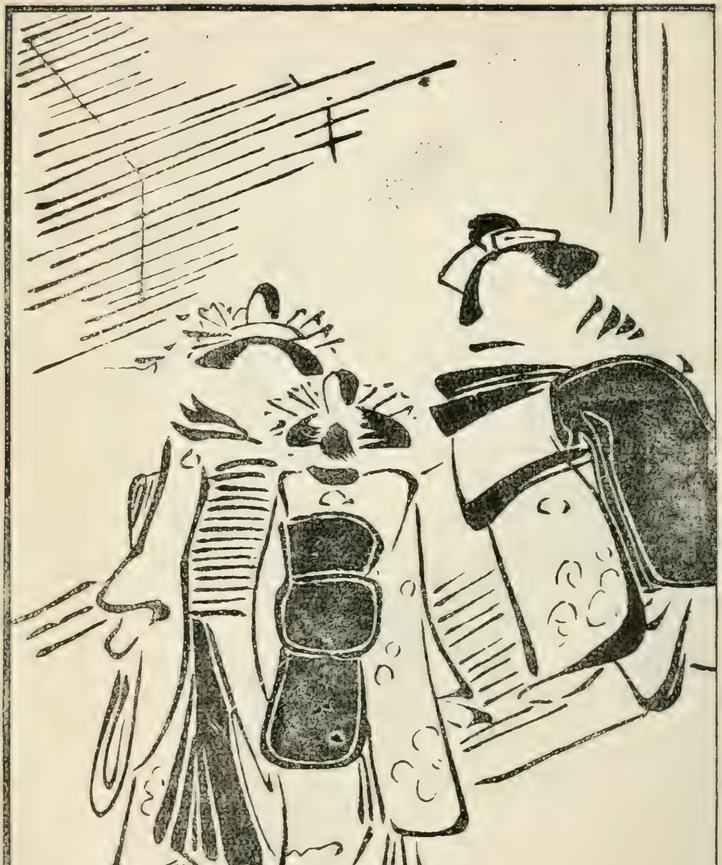
人遠茶懸物

一四

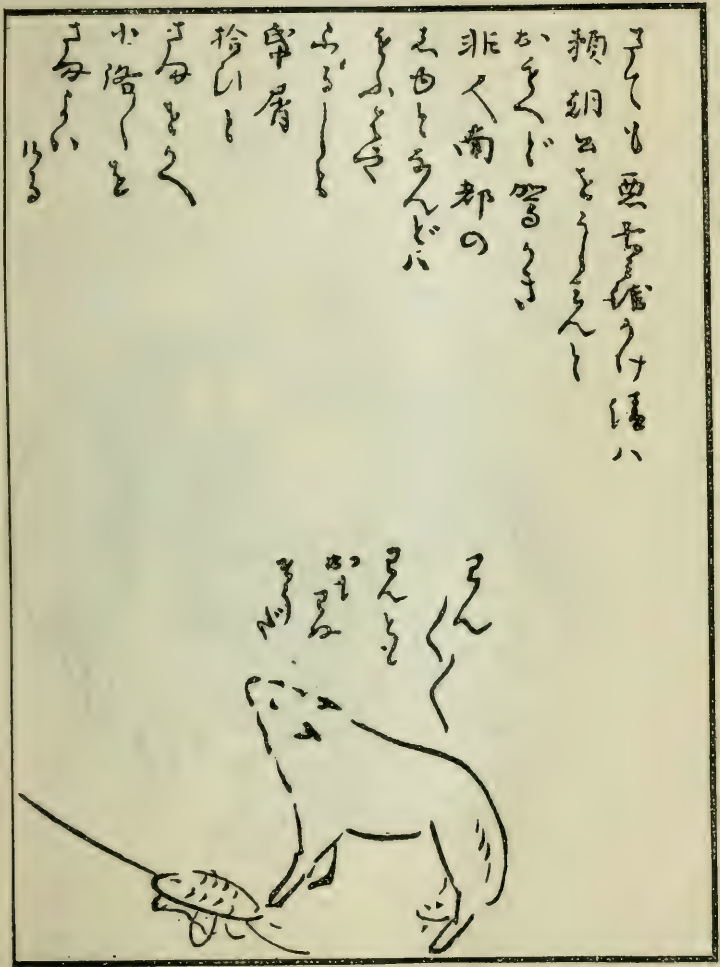


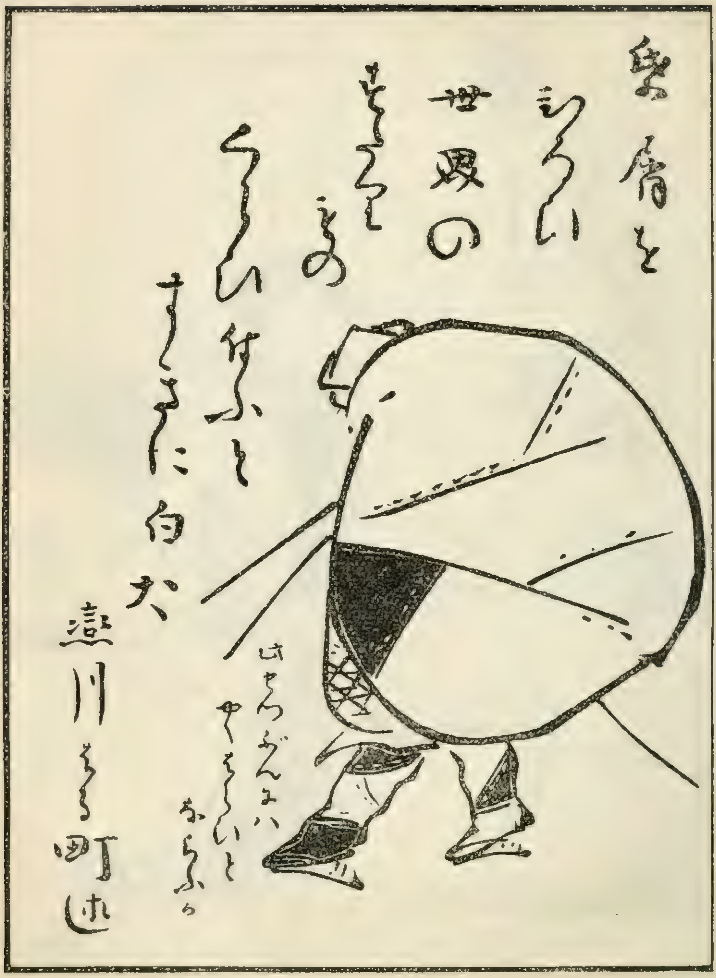


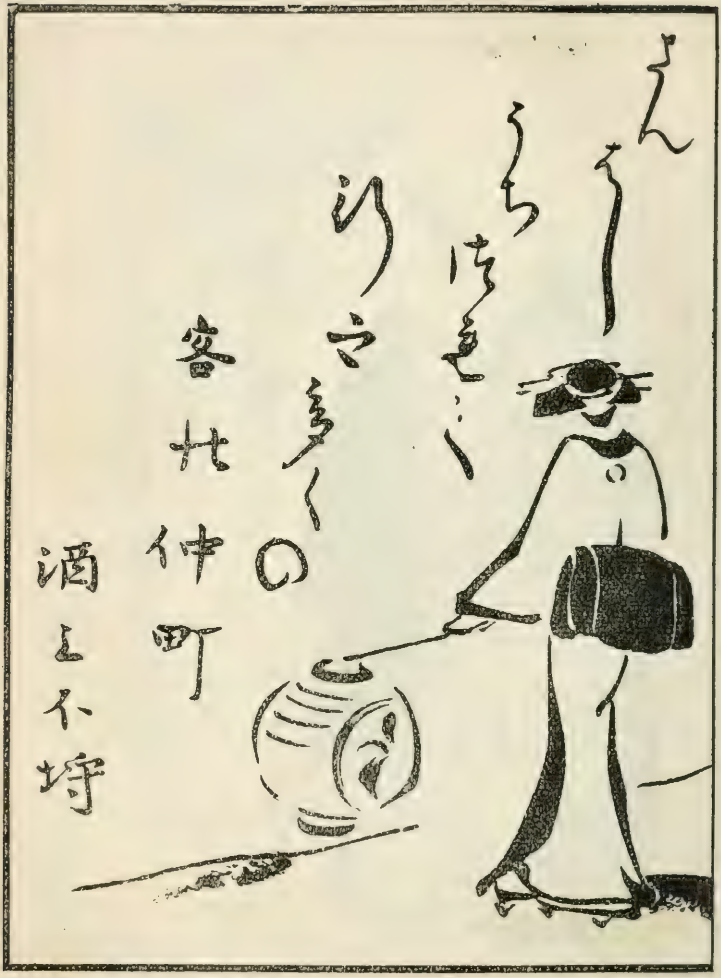


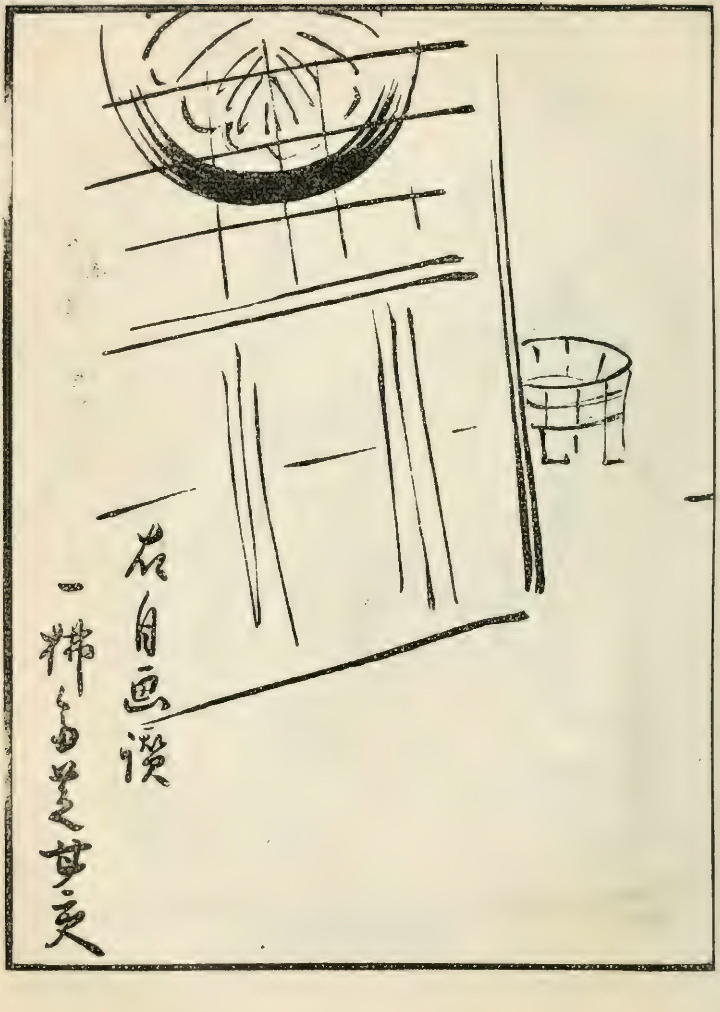


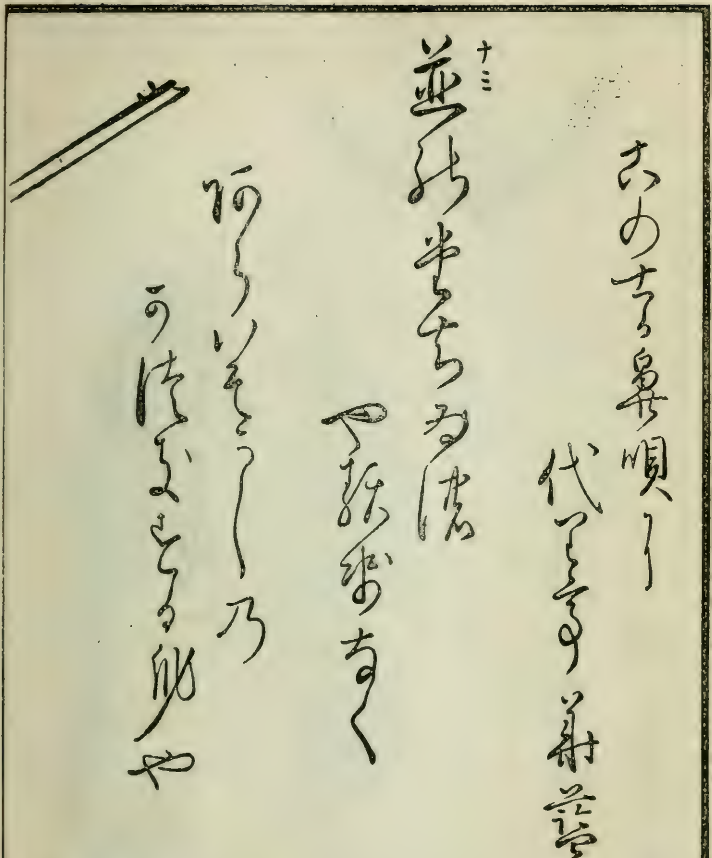
取ㇾ子ヲ取ㇾ子ヲ
薄ク言ニ取ㇾ子ヲ
彼ノ其ノ之ノ子。
実ニ適ニ哉カ志ニ。
取子一章章一句
蔦唐丸賦ス

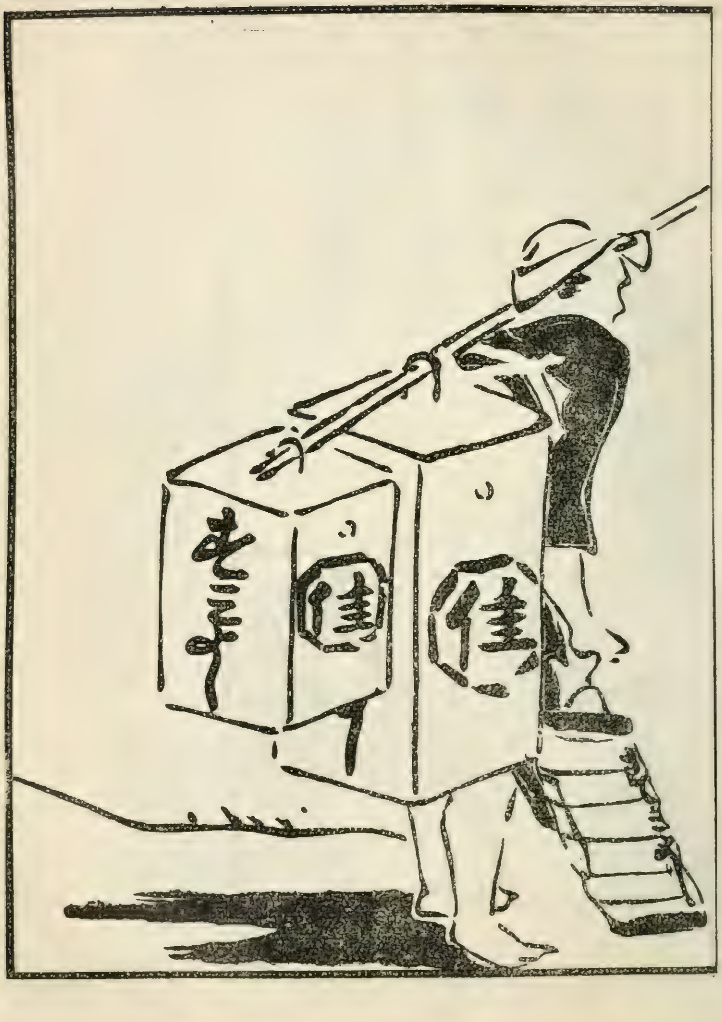




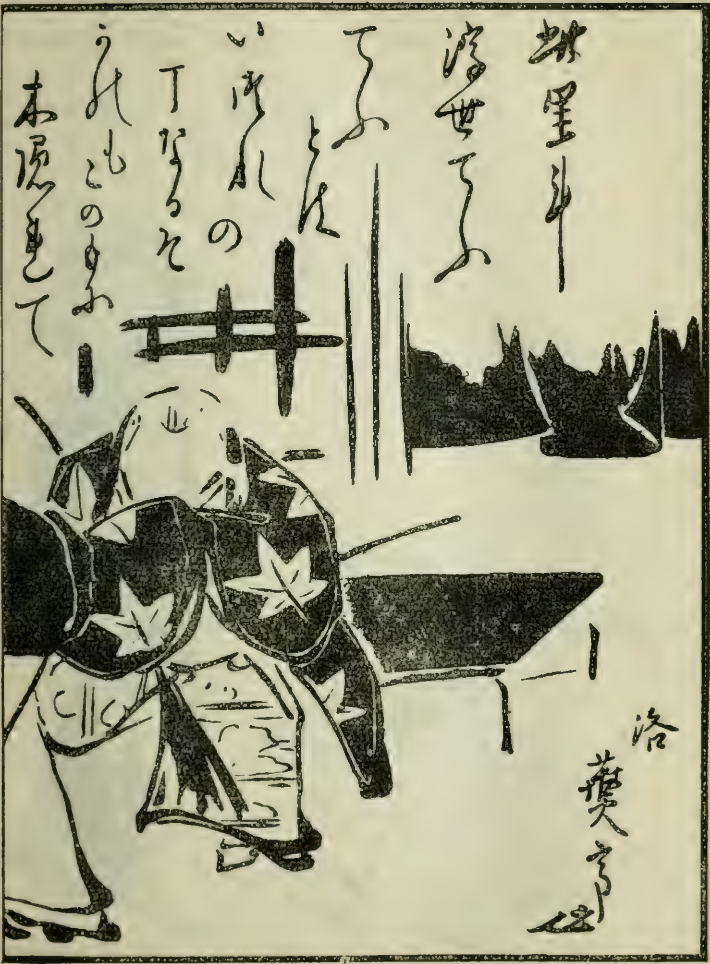

客北仲町
酒よ不埒

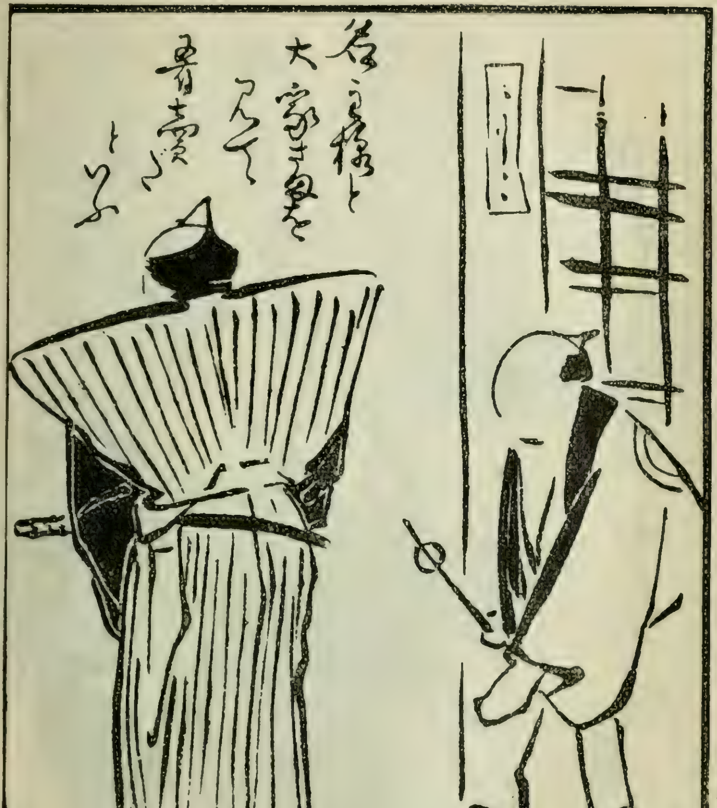




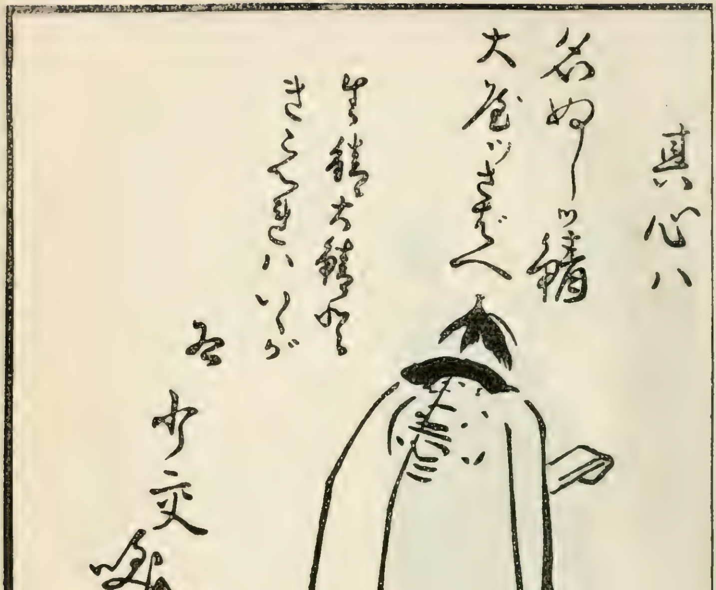


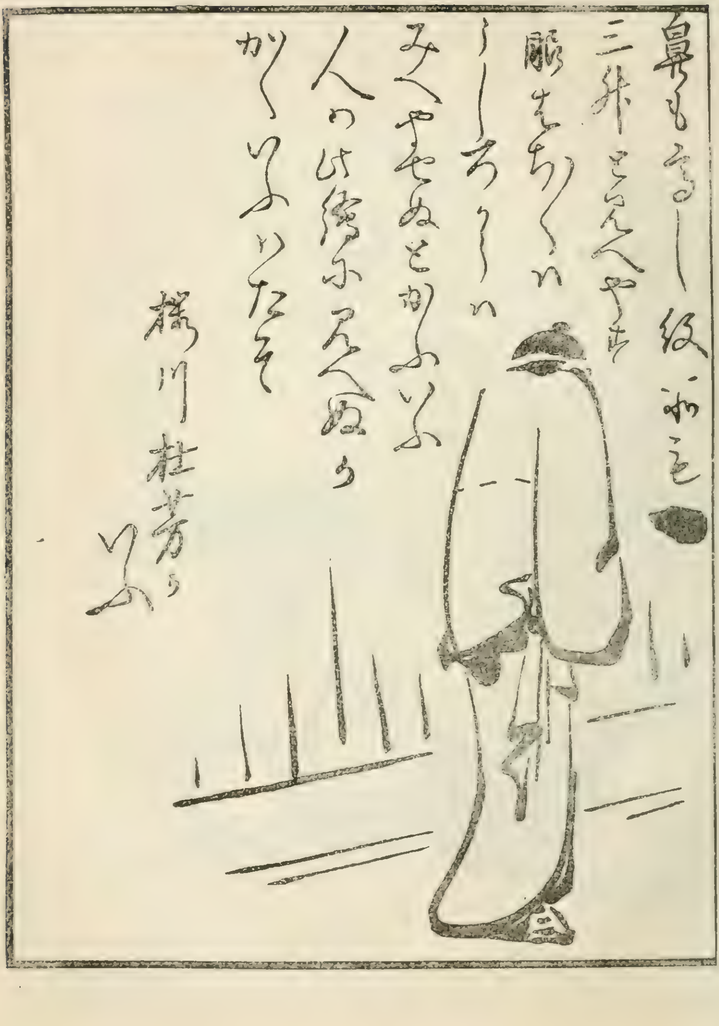
二九



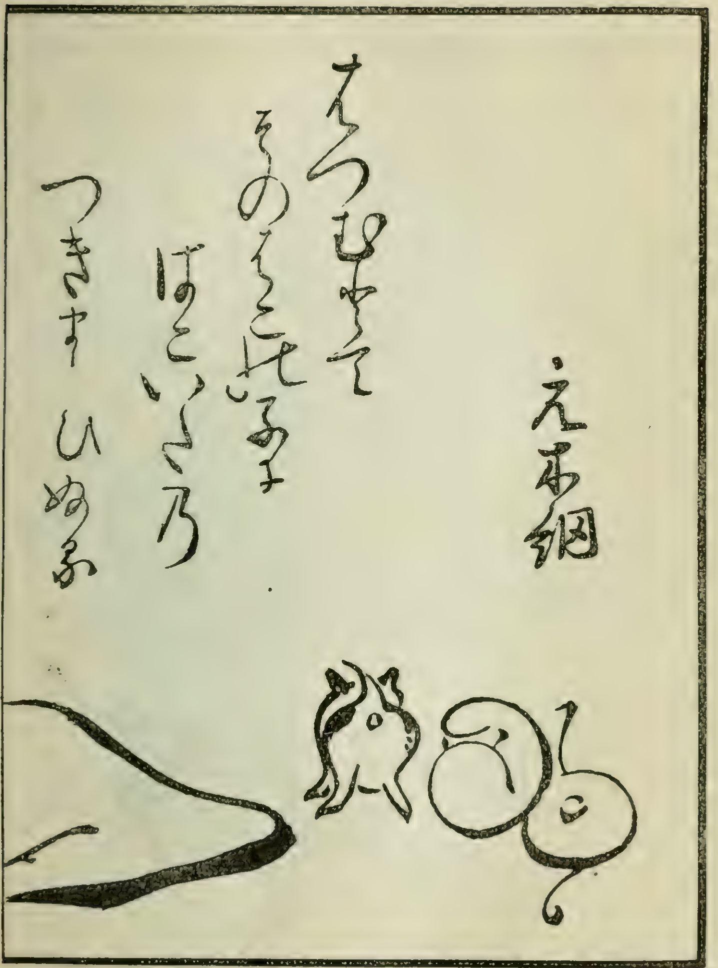


三四



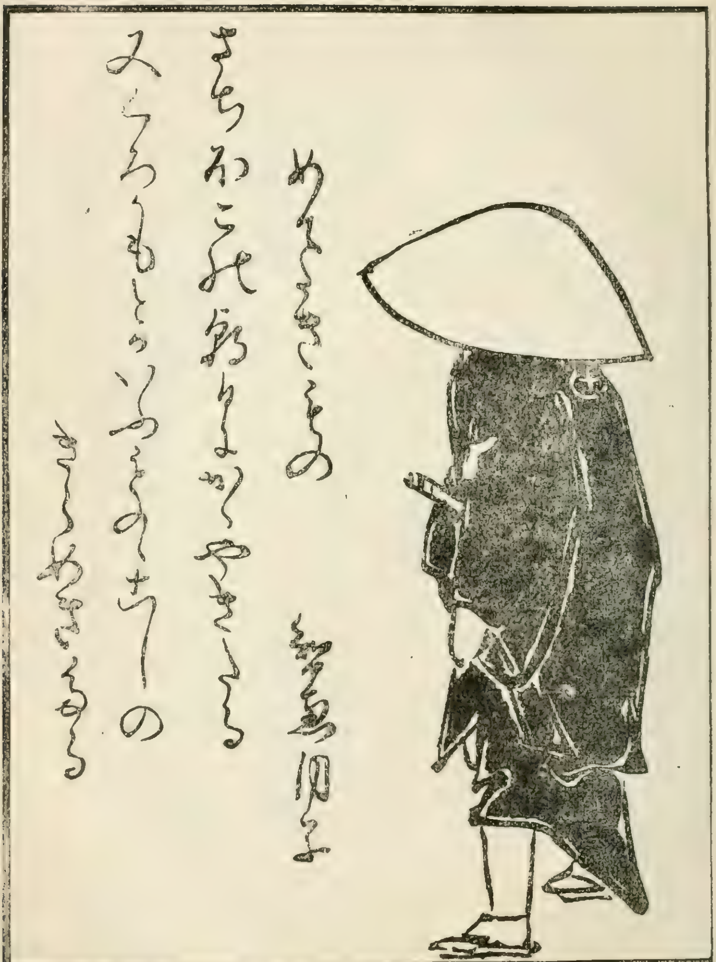


三七



人遠茶懸物

四〇



無遠人眼の工夫ハ漢画より出て今　本邦にて誰も皆承知也其所を又眼も鼻もぐつと略して意て見せる案し聴於無聲視於無形の類歟きついもの急度見えます受取ました依て件の後に書

以美散人

乙巳冬

山東京傳作

讀本
繪入
指面艸（さしもぐさ）
中本一冊

當正月より賣出し申候御覧可被下候

天明六載丙午春王

江戸通油町北側

書林 仙鶴堂 鶴屋喜右衛門

福神粋話録

序

予が先生萬象亭。此無駄書を夜の間に編りて筆を引舟のはつるてう。伏見屋へ渡さんと仕給へる其川端へ來かゝりて。飛乘り見れバ寶ぶね。春のはじめの笑ふ門に待まうけたる福神粹語錄。まづさい先キも萬吉原とうの眠りの長き夜に。枕ならぶる魂膽を書しるしたる小冊なり。先生予に命じて卷首に序セしむ。いなまず書クはふと印太煮の午房くられんかと。彼ひらかたの平たき言葉を筆にまかせてかいつくるも。乘リかゝりたる舟なれバ歷のをもたい三十石と。ゆきかふふねのあくたいいはず。大目に見ゆるし給へれかしと。筆を水棹にとり直して漸く

滯付クるものならじ。

天竺老人述叅

目序

【板元】伏見屋善六で。ござります。お宿でござりますか【作者】池の端の先生か。扨お久しいお這入〳〵【板】あまり御不沙汰致しました申シ譯やら。寒氣のお見廻やら。又御苦勞を懸ヶたい事やらで參りました。ちと手重うござりますが。どふぞ小本ンを一番お書なさつて下さりまし【作】來年の仕込物かの【板】イヱ當年から賣出したいのでござります。もはや日合もござりませぬから。ならふなら今ン晩中になりとも。寫本をお上ヶなさつて下さりまし

予笑テ答テ曰。蕭文琰ハ燭寸ノ詩ニ。年頃生掛ノ才ヲ耀カシ。曹植ハ七歩ノ詩ニ。日頃口豆ノ鞘ヲ彈ク。万能及第ノ進士。微々永和ノ曲水モ。即案ニハヘチヲ捲ル。サレドモ。詩ハ志ノ之所ニシテ。言ニ發スルワザクレナレバ。一ツ斗百篇難キニ非ズ。著述トナリテハ。又殊ナリ。

【板】モシ〳〵御詞の中でござりますが。今夜中に出來ませうか【作】よしさ呑込ンで居ます

實思ひ出たることこそあれ【板】てん〳〵

昔鍾繇ト云シ人。帝ヨリ勅ヲ蒙ムリ。義之ガ書タル千ッ百ノ文ッ字ヲ以テ。一夜ノ間ニ綴リ寄。千ッ字文學ノ名ヲ顯ハス。我ハ拙ナキ戯作者ナレドモ。腕突ハ誰ニカ劣ラン。某鐘繇ニ成リ替リ。一ト文ッ作ツカマツラン

【作】何もこんなに大造らしくいふ事もねへ。小本ッの一冊や二冊なぐりつけるに。手間も隙もいるこつちやァない。世界ハ何が能からう【板】何ッでも目出度がよふござります【作】合点だ〳〵。先ッ正月の賣物で楽じて見やう〽扇〳〵〽さござい〳〵〽万じやらこや〳〵〽春の初のはる駒なんぞれどふであらふな〽猿廻しか〽大黒舞か〽一枚絵草双紙〽白酒〳〵〽大根干大根〽道中双六福神すごろくヲットしめたぞ。

先ニ山手馬鹿人ガ道中粋語録ニ。只輕井澤ノ晒落ヲ述ブ。其標題ニ因テ。福神粋語録ト題號シ。七福神ノ傾城買。

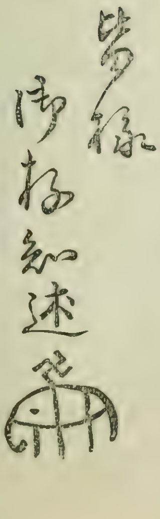
【板】妙〳〵。七福神の女郎買ハ。あたらしうござります。ちよつとしめませう。【二人】シヤン〳〵

是ゾ新版替(カハ)ツタ新作。初夢結ブ寶舟。夜ノ間ニ編ル無駄(ムダ)書ナレバ。ツマラヌ事モ多カルベシト云爾

【作】然らバナニ伏善との【板】いよ／＼明ケ六ツのかねを相圖に【作】しん作お渡し申スでござらう【板】吃度(きつと)ことばをつがひましたぞ【二人】おさらバア。と本やと作者の懸合ぞりふ。すぐさま序文のかはりとす。

天明六年十一月廿日の夜

寒燈の下に筆をとる



新版 福神粹語錄

發端

次第
〽長き夜のとうの眠りの皆目覺浪乘舟の音もよく大棧橋へ着にけり〳〵寶船の福神達。正月二日の初夢に。諸方の人に福をさづけ。もはやお隙になりければ。わつさりと氣を替て。女郎買ひどふあらふと。大黑天の思ひ付。しかし辨才天は女躰故。不承知だらふと思ひの外。どうぞ廓の氣色が見たいわいなと。一端かけての給へば。それでざつと相談がきまり，扨福神の出立チは。大黑天は湊鼠の小紋仕立。夷三郎は黑仕立に。三ツ柏の紋所。多聞天は毘沙門龜甲の憲法褒ね。布袋和尙は三河町仕立のきめ頭巾。お茶道樂の見へに拵へ。壽老神と福祿壽は編綴居士衣の宗匠風。辨才天は寶髻を解て樂屋結び。銀の釵をちよつとさし。八丈羽織に黑縮緬、白ラ茶純子の幅廣帶。板〆の無垢ほら〳〵と。緋縮緬のゆもしを見せかけ。雪の素足に黑塗のこつぼり。何處へ出しても濱村屋の。太夫と見ゆる優姿。寶舟より下立給ひ〔辨天〕向ふに見へる鳥居は。わたしが額と云ものじやな〔大こく〕あれが名にしおふ。笠木ばかりは三圍

の稲荷さ。時に奥方の燈籠見物といふやうに。寶ふねを堀の口に繋らせて置も、手おもいじや
ァねへか【夷】もとよりさ。舩ハ戻しの歸りハ駕としやせう【布袋】ァ、はや。おらや福祿壽
をかつぐ駕舁ハ。御器量増をくれろといふだらう【壽老神】そんなら鹿や鶴龜ハ。舟に氣を付
てかへつたがいゝ【皆〻】左様なら御機嫌よう【七ふく神】サア〳〵あいぼう〳〵

○山谷堀

〽まつちしづんで梢のり込今戸はしとなげぶしに唄ひたる。山谷堀のたそがれ時。舟宿の女房が。家名を書た行燈を掃除しながら。おともあげませうか〳〵といふを聞ながして、土手へかゝり【毘】どふも感心ハ辨天子のけふの出立チだ。辨臺子とハ妙案だ【夷】このきやうげんハおれが書たのさ【辨】不忍の巳まちの晩に聞覺へた。濱むら屋の聲色でするのじやさかい。辛動てならぬハいなァ【皆〻】イヨはま村屋【大】しんどうてならぬハいなァと、腮を出すところがきついもんだ。さりとハ器用な子だぞと。脊中をたゝく。

これより土手八丁の内。かごかきの酒手ねだり。地廻り素けんのむだ。國侍のおかしミなどあれども。是ハつい通りのしやれ本ンにくさる程あれバ。めづらしそうに爰にのせ

ず。さて福神達ハ。はなしもつてゆく内に。五十けん道へかゝる。
〔布〕こゝがお定りの衣もん坂。ゑもんつくりで大門をくゞりやセう〔壽〕時に茶屋は何屋にセうな〔福〕こゝできめるがいゝ〔大〕何やでもよしさ。しよせんこの内に知ッた顔ハなし。つつかけあがりとしやせう〔夷〕何ンでもわらつて居る門トへはいるがいゝ〔毘ミ〕それがよかろう〳〵。

○中の町

六コクマイ へごさつた〳〵。當年の惠方(えほう)から。福神達がごさつた。是ぞまことに福徳や三右ヱ門が見世先キへ。福神どつとおし懸ヶ給へバ〔亭主〕三右ヱ門飛ンで出。〔亭〕これハどなた樣もよふいらつしやりました。おまつお盃(さかづき)をもつて來さつセへ〔女房〕アイト銚子(てうし)盃だいをもつて出ながら。それお吸ものをしかけさつセへと勝手へ云付る娘お竹ハお仕着セ通りの硯ぶたを持て出。辨てんを見て〔娘〕ヲヤはま村やさん。よふお出なんしたね。ことしハまだお目にかゝりいせん〔大〕何さ。この子ハはまむらやでハなしさ。時におかさん。あの子ハ娘子かへ〔女房〕ハイ左やうでござります。それお竹お近付になり申しや。ほんにわたくしもあなたをハ。

浅村屋の太夫かと存しました。ホヽヽト笑ふ内。三右ヱ門夷大黒の顔をつく〴〵と見て【亭】ときにお前さまとあなた衆ハ。どふもお見かけ申ましたおかほでござります。それ〴〵去年浅草の市の時分【夷】盗まれぬよふに。高い所に見世をはつて居る所を。見たのだらう【亭】ホンニいかさま【大】シイ秘すべし〳〵。トいふ内勝手から旦那〳〵とよぶ三右ヱ門ヲイト云つて立ながら女房に目まじをしてゆく【女】ソレお竹あなた方へ一ッお上ヶ申しや。どれお吸物を見て来よう。ト見世を立と中の間のついたてのかげに三右ヱ門待合せ女房とひそ〴〵はなす。【亭】今こざつた客人達ハ。とふも只ものでハない。神と見へるハへ【女】アイサたゞものでハないのさやくしやでござりやせう。旦那なしにかミばかり来るともねへす【亭】何ばかな。そんな楽じやァねへ。とれを見てもミんな見知りのある。アリア七福神のかミ衆だ。ずいぶん信を取つて御機嫌にさかられねへようにするがいゝ。それうがい手水でもして。身を清浄にして。お側へいかつし。何ンでもおらが家名の福徳の三年ン目だ【女】ホンニそういゝなんせバ。只のきやくじん達じやァござりいせんとれ料理番どん。見せへ出る出しものハミんな切火にさつせへ。ト夫婦ひそ〳〵だんじるお見せにても此聞。【寿】何ンだか中の間でひそ〴〵噺すがおらがよふな福神ハきやくにしにくいと。断でもいふのじやァあるめへかの【布】何そふでもあるめへ【娘】もしあなた一ッおあがんなんし。【毘】マァはじめなさへ【娘】さやうならおかんを見まして。トちよつとついでのむ。これ

より酒になるところへ夫婦すいものを持出。【女】どなたもおすい遊しまし。すいぶん清淨に切火でいたしました。トいきらぬ内三右ヱ門目まじをしてだまらせる【毘】先椀中がきれい事た ト福神達吸物をすい又酒になる【大】一ッ申シませう【亭】へイ〳〵いたゞきませう ト盃をいたゞく【大】ちよつと祝義を仕ませう ト打出の小槌をとり出しぐわらり〳〵と振給へバ。こゝに二両かしこに五りやうこれハ夢かうつゝかと三右ヱ門夫婦ありがたがる。【亭】おそれながら御返盃申ませう ト盃をかへす。のこりの福神達いづれもさかづきのたびに延命袋のどんぶりより金銀瑠璃車渠馬瑙珊瑚琥珀の寶ものをとり出しさづけ給へる【夷】コレお松さん誰ぞ呼にやつてくんなさへ【女】はい〳〵。トしりのかるきこと錢こまがはだしなりほどなく女けいしやきたる【富吉】【豊年】どなたもよふお出なさりました【辨】富吉さん一ッあげませう【富】ちよつとお手元【大】さしづめお合ィハ豊とし坊だ【辨】そんならちよつと【豊】さやうなら是を。お手本ンになさりまし。ト見事に一ツのむ【布】とんだ見事だ【壽】しかしあんな手本ンを出されてハ辨天子ハ難義だらう トいふ内盃がもどる辨天一ツのんで富吉へさす此内地廻り大勢見世先へ立【地】はま村屋のこつちに居るのハ。何ンだかごふてきに長いあたまだぜ。別ハねへ。福徳やの見世に駒留石がしやれて居るようだ。おれが犬ならいゝ小便所だ【ツレ】大佛さまのすりこ木といふ所もあるせ トふくろくじゆをどくづく三右ヱ門ハきてんをきかせ【亭】もし旦那方ちと氣をかへて二階であがりませぬか。おまへ方も三弦ハ二階で仕かけたがいゝ【福】二階で呑よりどこぞへ出かけよふでハないかの【皆々】それもよかろう【亭】左樣なら何屋にいたしませう。壽屋と申シます新廓がござりますがどふでござりませう【皆々】壽やの事〳〵【女】お

めへ方ハすぐにお供をしなさへ。といへハ二人のげいしや帯を〆直す【娘】吉介やてうちんを灯さつせ〆【若者】へイ〳〵トてうちんをとぼしはき物をならべる【亭】コレおまつそつちの羽織を出して下さへ。ト女房おしいれより羽をりを出して着せる三右エ門片袖入レながら下へおりる【福神】サア〳〵いかふ〳〵【女】【娘】さようならおゆるりと【亭】サアいらつしやりまし。

○寿屋の二階

ヘ大尽舞を見さいな〳〵。扨その次の大尽ハ夷大黒を先として。七人の福の神。三右衛門が案内にて寿屋へ御らいりん。二階のはしごをあがりながら【大】コレ福禄貴さまの月代をする時。此はしごをかけハどふだ【福】そんな禁句をいふと。やり手衆に云ッ付て大こく柱へしばり付させるぜへ。トむだを云ながら二階へ上る三右エ門ハ廻し方のわかいもの徳兵へ遣手お蔦と相方のそうだんをする。もつけなかほにて寿老神の側へより【三右エ門】困ッたものでござりますが中座のおいらんがお二人外ハござりませぬ。跡ハ部屋もち衆がふたり。その外ハ新ぞう衆ばかりでござります【寿】ずいぶんそれでもよしさ。弁天と福禄寿にさへ。おいらんをあてがへバ跡ハ何ンでもいゝなァ夷【夷】もちろん【大】そうさおいらたァちがつて。福禄寿やべん天ハあんまりどこへもいかねへから。あの二人においらんをさづけるがいゝ【三右エ門】それできまりました。おふくどんそんなら今の通りでいゝ。どこへおいれ申さうの【遣手】に

めしまさんの御座敷へお入レ申シなさへ【三右ヱ門】よしよしサアサア旦那方まアこゝへおはいり遊しましョ。ト座敷へいれる若いものしよくだいをとぼし七へのあいかたのたばこぼんたならへる内にのしまが禿岩や巳待さかづき盃をおろしてうしたはこぶほどなく七人の代方ねりくようの如くならび盃事になり相方だの通りきまる

ふくろく壽
〽龜つる 萬代千と世

びしやもん
〽芝うら かな杉

ゑびす
〽あし舟 つり糸

辨てん
〽江の嶋 岩や巳まち

大こく
〽子の日

壽老人
〽さほ鹿

ほてい
〽唐こと

【三右ヱ門】サアおめへ方何ンぞひかねへか【富吉】豐年さんその箱を取ッてくんな ト三味せんたしかけてうしたあれせる【壽】何ンぞめでたいうたがきゝてへ【豐】何ンにせうの【富】いつそ七福神にしやう トいへバ七福神たち顔を見合せてにつこり【江】三右ヱ門さんあげいせう【三】ちよつと申ませう【江】もしへはゞかりながらお合ィをお頼ミ申シいす ト毘しやもんへたのむ惣へ福とくやの下女長ふたへおくりものたのせもちきたり【下女】内義申ます皆ゐに先ほどハお早

ゝでござりました。是ハおそまつな物でござりますが御酒のお肴にあげます。御きげんようおあそび遊しますよふに申されました【皆ゝ】イヨロ上【夷】何ンだかうまそうだ先見やセう。鯛の塩むし是ハおれが書ぬきだ。尾張大根のふろふきハ大黒子の点だサア酒にしやセう【壽】おれにやァこつちの丼の獨活を下さへ鹿の角ハ妙だ。トいふ内に二人のげいしやうたい出ス。

唄へひけやひけ〳〵ひくものハ品〳〵。さまがきわすミ琵琶や琴。こきう三味セんしのゝめの横ぐも。そこでひけや小ぐるま。子どもたちやござれ寳びきしよ〳〵。ほづな引ッかけ寳舟を引て來た。

【ミナ〳〵】イヨ〳〵【布】これハたまらぬハへ【大】踊りハあやまるぜ【布】ところを一チばんお目に懸る　ト六さもゑご〳〵したなりでおどりしまい【皆ゝ】笑う【布】ア、息がきれる水〳〵【夷】いつもながら和尙の踊りハ大わらひだ【布】あんまり笑ッてもらうまい。ふり附てハ藤間も西川もはだしでごんすァ、つがもねへ【三】いかさま只今の所作は秀窟が布袋といふ處もござります【布】そう見られちやァ一チ言もねへ。あやまはりだ　トお定りのふくわらひになろ。凡人のあそびとちがひ座しきのしやれも神たちの事なれバさまでいきなることもなく只にぎやかと金ぎんを下さろばかりにて座しきハすむ【三】チトお座しきを替まセう【若もの】江のしまさんのお坐敷へおつれ申シなされまし【皆ゝ】サア〳〵おとも致しまセう　トひきつれてろうかへ出江の島が座敷へはいれバ。もはや床がまへしてある福神たちハそこらを見て座敷の物好などほめ給ふ【福】壽老神

ハどふしたい【毘】一ッしよに廊下へ出たつけが【三】見申シて参りませう　トろうかへ出ろとやり手三右エ門をひきとめ【遣】お前のおつれ申なさつたきやくじんだが。つふりの長いお人やかげまのよふなお客や。何やかでどふか見セ物芝居のくづれを見るようでござりやす【三】何さそんな旦那方でハねへのさ　トいふ内向ふより壽光じん來り給ふを見て。只今あなたのお迎ひに参る處でこさりました。とこにいらつしやりました【壽】どふもこんなか呑衆だから。いろ〳〵の物を引ッちらかして置いたのをまとめて來たのさ　トゑん命袋やきせろたはこ入やっち出の小槌をまとめて來給ふハお年かさと云下戸のセいもあるなり【三】皆さまがお待なさつてござります。あそこへいらつしやりまし　トゆかふとする向ふより福神とろ〳〵と來り給ひ【福神】寐所ハとこだの〳〵　トいふところへ亀鶴か禿きたりて【千とセ】ぬしハこつちへお出なんし。　トふくろくしゆの手をとる【福】ちつとおらが處へもあそびに來さつセへ　ト云なから座敷へゆくのこりのふく神たちもそれ〳〵に床を納ろ　三右エ門はじめいとまごひをすれハ引ヶ四の拍子木がチヨン〳〵

○中座の坐鋪

【哥】〽そも〳〵我らハ。西の宮の夷三郎左衛門の尉。色の黒いハ大こく天。顔の長いハ福ろく壽。頭巾〳〵かふりて老ほれ姿のおやしさん。たれじや〳〵いはねとしれし壽ろうしん。布袋ハどぶつその中に美くしいハ辨才天女とほめたれハそこでびしやもんはらを立チ。なぜほめた〳〵

七福神のその中で。辨天ひとりをなぜほめたといふのもやほかいな。笑ふ門トには福きたると中村座の傳らい。猿若の小唄にうたひたる中にすぐれし辨才天。いふにいはれぬ舞臺子風に。相方のおいらんよつほとこさつたようすにて【江の嶋】もしへぬしやァなぜそんなにかたくしてお出なんすへ。ちつと横におなんなんし【辨】わたしはこうしてゐるが勝手じやさかい。かもふておくれなそしてお前の名は何ンとかいふたな【江】江のしまと申いすは。シテ主の名は何ンと申いすへ【辨】わたしが名かへ【江】アイ何ンと申いすへ（トいはれて辨才天ともの給ひがたく）【辨】わたしが名は妙音(みやうおん)といふわいな（ト齊名をの給ふ）【江】妙音さんとかへ覺へいゝ名でおすね。そして紋は何をお付ケなんすへ。まァ羽織をぬいでお見せなんしな（トいふをかこつけにはをりをとり上着の紋を見て）ぬしの紋は寶珠(ほうし)の玉を三ッおつけなんすね【辨】アイ是がむねへ付る紋じやわいな【江】吸つけてあげいせうかへ（トたばこをつぎおよびごしになつて辨天のおひざにもたれ懸り顏を見ながらきせるを出し）どふもぬしのような客人にはわたしらがよふなものは氣がおかれてなりいせんよ【辨】なぜへ何ンの氣をおかんすことがあるものじやぞいな。そないにいふてくだんすときしゆつなふてならぬわいな。是から末はほつとさんす程かよふてくるさかい。にくがつておくれなへ【江】よくあはせなんすね。何ンの主がわたしらがよふなものゝ處へお出なんすものかへ。もふ一度お出なんしたらかけでおすは【辨】きたらどふさんすへ【江】どふもいたし

いせんけれと　トいふてみろうしろの方へ禿岩やきたりたんすのかぎをあけろおとに辨才天へうつかりとお宮にこさる時のおこゝろにて　【辨】コレ印鑰童子(いんやくどうじ)香水(かうずい)を給ふ　トの給へバ江のしまへきもおつぶすいんやくどうじとハ十五童子の内かぎをあづかるどうじなり　【江】もしへ何ンとおつセへすへ　といはれて心づき給ひ　【辨】何さ今いふたのハおどけじやハいな。あの子の名ハ何ンといふへ【江】岩やと申いすハ【辨】そんならお前の名が江のしまあの子が岩や。ま一人のハ何ンといふへ【江】ミまちと申しいすハ【辨】どれもわたしにハ縁のあるよい名じやな。あの子茶〱を一ッ下んセ【禿】アイ今持てまいりいせう　トたんすのかぎをびんとおろし出て行　【辨】そしてお前のつかふ子どもハまだあるかへ【江】アイ外に新ぞうしゆが六人おざんすハ【辨】わたしハお前方も十五人つかハんすかとおもふたハいな【紅】とんだむだを云なんす，さちつとお休ミなんし　トいはれるたびにこまらセ給ひさま〱まにあいその給ひて夜着へはいらぬくめんを遊バす　【辨】マァお前へ先へ寐さんセ【紅】わつちやァいや一ッしよならふセりいセう　トいふ内床の間の三味せんを見て　【辨】お前ハさミせんをひかんすかへ【紅】ィェわたしハねつからひきいセんが新ぞうしゆハどれもよくひきいす。主ハ定めておひきなんセうね【辨】ィ、ェ琵琶(ひわ)ハひくけれど。三味センハよふひかぬハいな【紅】亦むだをおつセへすサァひいておきかセなんし　ト三味せんを持て来てむりにセがまれ辨才天ハセうことなく三味線を琵琶の心いきにて膝へ上ケ

〽下乙(けへおつ)。乙乙(おつうノ、)。甲(かう)カケスカシテ。マアテ。甲(かう)ギヨウ

と琵琶の符(ふ)をうたハセ給ふ。心耳(しんに)をすます妙音に紅のしまハ聞とれておもハすしらすねむりを

催(ちよふ)す。扨福祿壽の座敷には。相方のおいらん寐まきすがたにて床へはいりながら【龜つる】お休ミなんしたかへ　ト云ながらびやうぶをぐいとひきまハせバ　何かつかへるをじれつたがつてくいと引よせれバ【福】ヲ、いたいわいな是さあたまがつかへてゐる。さりとハじやけんな女郎衆だ　トいはれてびつくり　【かめ】おやく、おゆるしなんしどこも痛(いたく)ハしいせんかへ【ふく】何ンともなしさ　ト云つてゐるところへしんぞう来たり屏風の外から　【新造】おいらんお休ミなんしたかへ【龜】唐松さんか何ンぞ用か【福】唐松さんとやら用かあるならはいりなさへ【新】そんならおゆるしなんし　トはいりながらふくろく壽のあたまにけつまづき向ふへこける。　【龜】おめへもそそうな子だぞ。もしへまつぴらおゆるしなんし【新】おやぬしのおつむりかへ。とふいたしいせうね【ふく】何さすいぶんくるしからぬ事さ。度〻ござる義さ【龜】そして何ンだ【新】ちよつと耳をお出しなんし　ト何かさゝやく　【龜】ムゥそんならの　ト又さゝやき　そうしてくんなんし　トざつと用事ハすむ　【新】もしへおゆるしなんしまたざいすよ【福】おつとまちな、まァ一ッぷく呑ンでいきな　トいはれてまくら元へつく　ばいたばこを吸つけながら　【新】おいらんへぬしハどふも似た人かおざんすハ【福】何いゝかげんなとをおれに似たものなら。秋葉山の天狗の鼻だらう【新】とんだ事をおつせへす。主によく似た人ハね【福】神だなのれいこくか【新】ふき出しながら　又たばけたことをおつセへす。ぬしによく似たのハね。せんべい折のはんこうさ　是ハ竹むらかせんべい折のはんこうにハふくろくじゆがすつてあるからなり　【龜】この子ハいつそおしやべりでお

ざんす【福】そう見へるおしやべり女郎しゆハよい女郎衆だ【新】わつちよりぬしがおしやべりでおつすハ。又のちにまいりいせう。やつておくんなんし（トゆかふとするをあたまにておさへ）【福】どつこいもちつとあそんだり【龜】あの子ハ用があるからおやりなんし【福】そんならかんにんしてやらうそのかハり願ひがある【新】何ンでも叶へてあげいせう【ふく】そんなら枕をもふ一ツもつて來てくんな【龜】何ンになんすへ【福】あたまのこぐちへおつかつてもらうのだ【新】又おたばけなんすアイおいらんお休ミなんし。もし主へ【福】何ンだ【新】たんとしやへりや（トいゝながら上ぞうりを引ツかけてはたはたと廊下をかけてゆく）

○部屋持の部屋

（ヒヤウシ）へそんもく西の宮の夷三良左衛門とのハ。毘沙門てんと壁ひとへの隣部屋寐そべりながら大聲にて【夷】どふだ毘沙公まだ寐ねヱか【毘沙】寅待の癖かついてとふも夜ルは寐られねへ（トの給へハ相方のけいせいとらまちをきゝちかへて）【芝浦】主ハとりの町へ夜お參りなんしたかへ【夷】酉の町もありかたへ【芝】とりの町ハ正月もおさんすかへ【毘】あるとつて【芝】正月ハ何をうりいすへ【毘】おセちにつかうさと芋をうるのさ。そしての霜月のとりハちよぼいち。正月の酉ハさございの寶

引さ〔芝〕とんだ人からのいゝ事をおつせへすね〔毘〕人からのいゝはつよ金杉うまれの芝ッ子だものを〔芝〕そんなァわたしが名にゐんがあるね〔毘〕それさぬしに緣のあるよふに芝浦で生れたのさ〔芝〕いゝかけんな事をおつせへし。しよせんぬしの口にハ叶いィセン　ト云つてゐると夷の相方かべごしに〔あし出〕もしへびしやさんとやら〔毘〕びしやさんもあやまる。ふミつぶしたような名だ〔あし〕さりとハよくおしやべりなんす。わしらが客人ハぬしとちがつてにこ〳〵わらつてばつかりおいでなんすに。ぬしハ達者におしやれなんす〔毘〕洒落るはづさ海ッぱた產たものを〔あし〕さりとハたつしやな口だね。モシぬしもちつと噺でもしなんし〔夷〕どうも初會といふものハおかしなもんで何もはなす事もねへ。はやく噺すことのあるよふに仕てへもんだ。つかぬ事だがおめへ釣ハすきか〔あし〕イヽエついぞ釣ッたことがおざんセん〔夷〕釣といふものハ面白いものよおらァきついすきだ　トいゝながらきセるを持直し　まづつり竿をこう持て鯛めがびく〳〵と引クところをちよいと針やわセをして。そろ〳〵だましながら水ぎハ迄引キよセて〔あし〕そしてどふするのだへ　トいへべしかたばなしのひやうしにのり　〔夷〕そこでこふ釣りあげて。と脇の下タへ引ばさんだ處ハどふもいへぬ　ト云さま相方の女郎をつきこかしわきの下へはさめバ相方ハびつくり　〔あし〕ぬしやァ何をなんすへ　トいはれてちつとこまりながら　〔夷〕こうして寐ようといふ事さ　トちやかしてしまい給ふ折からとなりハ大さわぎ　〔芝〕ヲヤげじ〳〵が出いしたわつちやァきらいで

おす。どふぞ取ッておくんなんし【毘】とんだ事をいふこりやァ百足(むかで)だものを【芝】ヲヤぬしやァさミのわるひつまミなんしたら喰ィつきいせう【毘】何くいつきゐへるものか。むかでと云ふものハどふもかわいゝもんだ（卜手のひらへのせて發し給ふ）【芝】ヱ、モゥはやくすてゝお仕舞なんしな。

○廻り座敷

哥〽大こく舞を見さいな。福大こくを見さいな。大こくといふ人ハひやうひやくな福神ンにて、大穴持の名にも似ぬ。小まち新ぞうをどつとあつめ。つかハしめの白ねづミを見セびらかしきやつ〳〵と云つてほしがらセ給ふ。（相方のしんぞう）【子の日】どふぞそのねづミをわつちにおくんなんし【大黑】こりやァおれが大事のもんだッ。まァこのなじんでゐることを見さつし先ッさいしよの取組が谷風にみの嶋。中入過が小野川に關の戸ッ。どこひく〳〵（卜ミじかい手をまくりあげてあちらへあるかセこちらへあるかセて見セびらかし給へ）（パ外の新ぞう口〳〵に）【しん】子の日さんそれそこを取ンなんし（卜けしかけられて子の日ハ鼠をひつたくり）【子】もふ〳〵ほつてもけへすこつたやァおつセん【大】どふぞけへしてくんな。その替りいゝものをやらうッ。壽老神ちつと出て來さつし。大事のものをひつたくられた（卜の給へべわりどこにねてゐ給ふじゆろうじんせきたごほ〳〵とせきながら）【壽】よくさわぐ人だおらァもふセつかくあつたまつてゐるにをきることハごめんだ【大】つきやいしらすめ。そ

んなァ名代(みやうだい)に相方の衆をよこさつし【壽】ナァニおらが所のㄟ。いかにおれが鹿がすきだとつて。あしかのように寐てはつかりゐるしんぞうしゆだ【大】インニヤねるほうもましだらう。おらが所のㄟあんまりをきてゐすぎてさわくにㄟこまるよ【子】よくそんなことをおつせへし。ぬしㄟこゝへ寐にお出なんしたかへ【大】インニヤ寐にㄟ來(こ)ねへが子の日に來たのさ【子】よくしやべらつしやる【大】しやべらつしやるめへから鼠をけへしな。しんぞう子の日さんけへしなんすな【子】何さけへすこつちやァおつせん【大】いゝ物をやらうからどふぞけへさつし【子】そんなら何をおくんなんす　しんぞう　何さうそでおつす。めつたにけへしなんすな【大】又そんな一ツしよになつてからに。そんならセうことがねへ。おめへ方にもいゝ物をやらうからけへさセてくんな【折ゝ】そんならはやくおくんなんし【大】合点(がつてん)だ〳〵と打出の小槌を取出しふり給へバ。かんざし笄(かうがい)芥子人(けしにん)ぎやうびいどろかゞミ繪半(え)きりしまだ紐(ひぼ)をはじめとして。ばらり〳〵と出ければしんぞう大勢(ぜい)われ勝(がち)に。ひろいあつめるその折から廊下の方より布袋のこゑ。

〽ことしや世(キヤリ)がよい。ちい〳〵がかんむりを。ちい〳〵がかんむりを。ちい〳〵がかむりふりやァどふもこうもならぬちい〳〵がかんむりを。ト

音頭の聲ともろともに。相方の店ことに拍子をとらせ。夜着包のゆたんの中へ二階中の禿を乘セ引キずりながら來たり給ひ【布袋】サア此子どもにもやつて下さい【大】合点だ〳〵大こく樣ハはやすがおすき。はやせや子共はやしたものに寶をとらしよ。わい〳〵とはやせ大さわぎをやり給へバ。壽老神ハもとよりにて。のこりの福神皆あつまり給ひ種〳〵の寶を蒔給ふ。折ふし下タ屋さわがしくよい〳〵わい〳〵の聲とひとしく。二階へどつと押かける何事やらんと見給ふ所に。揚屋夫婦をはじめとして家内の男女衣服をあらため。てんでにさゝぐる神酒せんまい。廊下セましとならべたて。實ありかたき福神ッの御らいりん。とてものことにいつ迄も神だなにながさせ給ひ揚屋繁昌はんじやうまもらセ給へと相祈れバ。福じん達チハ莞爾やかになんぢがこゝろ正直のこうべにやどるかミばなの。かさねかさぬる此家のさいわい。

謡 へいで〳〵このついでにたのしうなるようかたりてきかセん。朝おきとふして慈悲あるべし。夫婦の中にてはらたつべからず。いかにもおぶくをけつこうして。扨中酒にハふるさけいやといふ程もるならバ〳〵。たのしうならでハかなふまじ。

とうたひの聲ともろともに神ハあがらセ給ひけり。

後序

○頼ミましよ【万象】ふしミやか。イヽヱ馬喰町の柳郷でござります。寒中のお見舞【万】只今起た處だ。サア〳〵おはいり〳〵。お頼ミ申ます【万】伏善かへイごめんなさりまし。時に昨日ねがつたお作ハどふござりますな【万】ゆふべ貴公が歸ると早〻やりかけたが。急だから不出來だぜ【柳】時に伏善にハ間違つて【板】ホンニおはつにお目に懸りました。【柳】先生それハ何ンでござります【万】きのふあそこから頼まれて。急にしあげた洒落本ンさ【板】どふぞ一ッ遍讀ンでおきかせなさりまし【万】コレ番頭おれが飯をくふ内。讀ンでくんな（トこの内柳きやう本よミをする）【板】妙に出來ました。サテ筆工にこまります。しせきハ遲し。勘兵衛も彌五郎もするけて間にあいませぬ。アノ此頃鶴喜へつかハさつた。田舍芝居の筆工ハどこでござります【万】とりも直さずその柳郷子さ【板】コレハ逢た時に笠ぬげとやら。初對面から申シ兼ましたが。どふぞあなた筆工を願ひます【柳】きたなくつてもよくハ書やセう【板】とんだいそぎますから。ちつとも早くいたしたふござります。ナントいつ出來ませう【柳】然らバ今日鎭地門跡の暮六ッの太鼓を相圖に【板】そんならアノ門跡の暮六ッを相圖に【柳】

板ン下タ吃度(きつと)おわたし申さう【板】へエかたじけない【柳】先それ迄ハ伏善どの【板】りうきやうさま【二人】おさらバァ【万象】チ、チン〱〱

時に天明六年霜月廿一日の朝。本屋と我等がかけ合ゼりふ。書して以て後序とす。

月池門人

狐面堂柳郷　卍

戲作目錄　下谷池ノ端仲町　伏見屋善六版

放屁編　風來
同　後編
痿陰隱逸傳
天狗髑髏鑒定緣起
里のおた卷評
飛んだ噂の評
右ニ而六部集ト云

佛法奇端 菩提樹之辨　風來
當世さよ嵐　近刻　全五冊
同　後編　全　全五冊
仙術金のなる木　全
虛實山師弁　全　全五冊
當世野夫論　全　全五冊
遊里やまと言葉　全
諸國しまん　全

金神論　風來
木に餅のなる弁
秘術工夫箱　仝
風流出來料理　仝
世間腰の鍵　仝
賢愚氣性競　仝
當世袖の振合　仝
產物虫眼鏡　仝
風來かな文集

蛇脫青大通
導通一人案內
飛花落葉
菩提樹種
役者相生双六　色ずり
繁花地金儲之傳
縮本三幅對　色ずり
同　美津の糸　同
福神粹語錄

無弾砂子

目錄

正月の里
稲荷山
雛村が崎
松魚が浦
かぶと塚
祭澤木
鳥の町
奥山村

眞菰が崎
燈籠村
月見が崎
菊見村
恵比須が浦
角力川
おぢいが雨
狂哥山

棧敷が嶽
師走川
橘村
地獄谷
羽織ケ嶽
毛古路橋
しやれ村
赤藏山

酒に醉た市

會　　關

德平村

盤　　鐘

誹諧村

兼房櫻

ひつぺ河岸

藪入村

日町の里

正月の里

○此里はづれに風流の里ありて別荘などに能所なりその名をねんしといふ

○寶引村庄屋佐五左ヱ門むかし作りの達者おやぢなれどたんもちにてつねにぽこん〳〵といふ

○唐土より日本へわたりたる七草四郎古跡火ばしせつかひなどにてたゝかひたる所なり

○喰摘村勝栗大明神安置

社領此ところにてだい〳〵領之　神主橘柑の太夫扇箱のはらひを行ふ

○日なたの里穴市村堺論ありし所なり

でんぎに曰小僧でつちなど此所にあつまり勝負を爭ひたる所なり

○里の子門松西行より猫玉ワりし所なり

由來にいわく此里にてみどり子を寐勢付るに今にぎんねこ〳〵〳〵よといふハ其ゆゑん也

稻荷山

○此山正月から子供が松茸名物
○傾城横笛禿哥口出生の所
○山の東に神樂堂有名物鈴な其外ねぎかんぬしおびたゝし
○いたづらものゝ大將押寄てこれめしの城を落たる所也
○あづきめしちやんぎりに山のごとし
○大だいこ名物ありしかしふろふきにならず風吹ニなる

雛村が崎

○賴朝が白酒の跡あり
○娘があだつきなます名物
○對の公卿ぜんじの古跡いてうにあらで櫻の木がくれありし所といふ
○舟月亭古跡なり見る人目をおどろかす
○賴朝多くの犬張子をあつめ貝合せありし所村の東にあり
○景清囚れとなり食事をあたへけるに源家の飯をはますかつすれどももふせんを喰られすとい

ひしとなり此所重詰手詰のせんぎありし所なり

○七里が蛤見ゆる月にも闇にも砂多し

松魚が浦

○初荷の商人帆かけて走る風景よし

○兼好かいましめを用ひず多くのあたいを出してみえに喰ふほふぐわんの古跡

　みえばかりひとしく建て萬代に

　　今ぞ榮んかまくらの海

○此毒魚に見入られ折ふしかの淵に衣類をしづめ其難をのがるゝよしおそろしき淵也

　評に曰其毒魚ハふか鮫にあらず醉覺に後悔すといふ

○あら煮の御關所見ゆる

○差見の松あり俎橋忠彌此所にのぼり雲氣を考たる所也

○古瀬村きじやき藤太が舊跡なり

兜塚

○猿が番場の名物此所にもあり

○おき大将頼朝の宮あり鳥居の外に制札みゆる其文ニ

草履ヲ脱テ下馬ヲ突

○節句村お目出鯛とれる名物なり頭の方に七ッ道具ある

○股野石投ありし所なり此魚多く煮うり晝にもちゆる

○五月雨村にちいさなる庵ヶ見ゆる庵室かととへば庵室でハなしそふじつと答う此所鎧傘を張出す

祭澤木

○一躰合の宿にて花麗なる宿也

○東の方にヒドイ山あり工面仙人の古跡麓にマァ襦半を着て宮あり神主すかんぴん懸取は來れども水無月のはらひハなしされ共喰泰平の御札ハ出ス

○西の方に道成寺見ゆる見物窓からのり出の松あり
○宿はつれに祇園林あり松杉にあらでほれられる木多し
○夜に入ば御輿入道出るその聲よい〳〵わい〳〵といふおそろしき聲なり
○榊村庄屋猿田彦右ヱ門至て貧にしてかけとり來れハあしだこいといふ
○奥州二本松のつゞき二本棒馬鹿ばやし何がし古跡
此所に宮あり鼻の下に黒髭大明神安置寶物

春慶丸盆　壹枚
手鞠　壹ツ
袖なし羽織　壹ツ

此袖なしれいがミの權太褒美として梶原より下されたる羽をりの同切にて太皷のぶちやゆかしきぶちぞゆかしきと記したり

眞菰が崎

○此所に座頭あり名を革市といふけんぴきをもミ大こんうぬぼれにみそはぎをあげ三味線も中

〱おもしろく上方唄をうたふ

其文句に

たま棚椿添ふしの

○亭売左ヱ門戀事をいましめたる碑あり

哥に

うつものもうたるゝものもかはらけの

ふざけてすへは元のちゝくり合

○南の方にあたり白なす野の原あり夫婦の狐石となり其上を懸取飛行すればたちまち地に落る

といふ

○源三位よりばす眞菰を玉ワりたる古跡といふ

由來に曰ある勅によつて弓おつ取抹香にかざし一ト矢まいらせ過去帳ならで怪鳥を射

おとしたる功によつて昇進をゆるされたるといふ

燈籠村

○日本一チの湊なり遊君あまた袖をつられ來ぬ客を筆の命毛につなぎ留んと硯の海より光をはなちふたり禿に三ぞんの姿　笄かんざしの後光留木のかほり實只ならぬ花麗の里也

○風俗いきの松原を過て通人の宮あり祭禮にハ末社なども賑ひてたいこも出る

○此村の東に床花紙花などありて詠めよし床花ハ山吹に似たる花なり紙花はとかく實のならぬ花なり

○西の方にやぼの峯ありきやくのたへま中性姫の古跡なり高山なれバ雨ならねどとかくふられる事有

○村はづれにみ塚あり苔むして殊勝なり

其碑の哥に

來ぬ客を眞乳の山の朝なきに
なくやもしかによもかゝれつゝ

月見が崎

○だんごの十五日上下ともに賑ひておもしろき里なりげいしや暮にのぞミ花の袖をひるがへし

あんぽつといふ駕籠にていそぐ

○こつぽりが峠 板〆の紅葉うるわしく景色詠めにあきず

○名物 蛤びんの色男中の町に至るぶんごぶしの男げいしや來る能〻見ればおやぢなりさてこそいつきゐれいくつといふ

○身たり村の西つゞら石の右の方にたんす石あり和ものにあらずからもの也

紋所　蒔繪五質の借

○哥人首をかたむけ詠をもよふす

哥に

此扇ほしくはやろふなつすきて
秋風吹て雪の降るとき
眞黑の月見

○此村はづれに折ふしぶつそふの事あり旅人のうしろより其丈一丈ばかりのおぎはぎ穂を揃て招く

菊見村

○村の東に菊慈堂あり古き伽藍なり周のぼく王の頃建立ありしといふ

○きせ綿村大論寺古跡也むかし白きくといへる兒衆道の契りをなし去ル事ありて其あたりの淵にのぞみ身を投んとせしが大ひなる岩ありけるにおそれ入水を思ひとゞまりたる所なり

其歌に

もろともに身を投んとひおもへとも
むかふの石であたまあぶなし

評に曰此哥はどこでか聞たよふだと思へばさればこそ去年辨天の開帳ありし時道案内のやろふがはなしで聞たるなり

○村の南に庵主ありませ垣しほらしくむすびほどけし仕折戸の風流後世一さんまいに晝夜かんきんならでかん菊を勤る

○村の内に菊たばこの名物ありはつばの菊王が古跡なり

恵比須が浦

○此浦に千兩あるひハ百兩といへる漁師ありてむせうに鯛を商ふ

○此所相州鎌ぼこ郡のつゞきにて割海老村に寺あり宗旨をとへば送り膳宗のよし

○獻立村色ゝの吸ものゝ見ゆる吸口ハ大根をろしか店おろし

○此浦より東にあたり大屋山のふもとに小娘あり淨留理ハなく聲ぬへに似て猿眼なり

角力川

○小野川といふあり流れせわしくして名に高き川也東の方にけんその山有谷風吹上ておそろしき幽谷なり

○此川上に木村の庄といふ所あり甲斐の信元戰ひありし時の軍ばい此所にあるよし晴天十日のあいだ見物をゆるす

○前づけ勝負附名物又味噌づけもあるよし是ハ直ぎらねど負たる事をいふ

○せきれいせき烏などいへる鳥多しかたちいづれも大きくしてさへづる事なくつばさおもくし

で四ッ手かごにハ入かたし

○川下に中入リ村あり辨當を開き小結びを喰ふ

棧敷が嶽

○峯けわしくして綿ぼうしの雪たへず又西の下のふもとに名木のかほりほのかに此みねを香爐峯といふ

○ひつ立村三拾三所の札所あり寺号久米寺といふ彈正のお所化の開起也宗旨ハ淨土共上手ともいふ

詠哥に

しばらくや岸うつ浪とあり

○てんつゝ村あぜ道花道につゞき百姓あまた出る

○じやま方村庄屋つんで兵衛

○此所の名物菓もの多し先柿の素袍きんかんむりこれハなます髭のけんに用ゆ

○ふもとに町あり三舛西の下へ入ル町共つゞきに市川といふ流れありアゝつがもねへ川也船頭

棹をかづいてやつとことつちやァうんとこなといふ

師走峠

○上州のからす川につゞき誠に流れせわしき川也むかしゆへありて裏白ゆづり葉のかゝミを水中に投入レし所といふ

○川上に商人屋あまたあり節季節用なとをうり出すこれを塩引節用といふ

○懸取來れバてんてこ舞を舞ふかねたいこにてはやすこれを欠落の舞といふ

○此川下に大なたありァ、何と船頭寄合頭痛をやむ

○年忘の里おもしろき所也其由來を尋るにむかし智仁勇を兼たる孔明大敵を引請只一人籠城してやぐらに上り琴をたんじ深き手だてこそあらんものと敵におもんはかりをなさしめ戰なくしてとゞまりたる所也其例を引て懸取の大敵を引キ受ざゝめきうたい大なだを越る事のよし

○煤取村に鼻の下黒主の古跡あり一つの碑ミゆ

哥に

疊山ござ立よりて見てゆかん

年へぬる身ハやれやしつらん

○此里つゝきに大木あり引ずりもちの木なり右の方に制札あり
其文に

一升卷ハ一升可卷

○木根川村に一ッのほこらありこね取大明神毎年十二月中旬より晦日迄開帳下戸道おもに郡集す神主松貝木何かし社領も道せいろふも有よし

寶物　鉢卷手拭　一筋

たすき　一筋

○右の方に碑有假名にて是より左ッちんもち

○餅花郡柳の名所なり

折助あそんの石碑あり

青柳や二筋ミすじ柳原

橘村

○古き平氏の其昔大相國のてうあい有し岐王妓女あるひハ嶋のせんざい和哥まいなどの流を汲んで今專世に行れ其名をおとり子となんよひ春夏秋冬のわかちなく賑ふ町也東の方に高き山あり登り詰れバ其名をころび峠といふ又西の方に振袖が浦柳腰の風景至てよし 西行の哥に 待わびてしぼりかねたる袖が浦柳新葉のかれるまでとは古今の名哥也といゝ傳ふ夏ハ日毎の舩に暑をしのぎのこふかひハべつこふならでもしかといふて能寐たがる客よりひきたくれんげの革羽織じよさいのなき事煮ても燒いても喰ハれぬやつ五とくてつきう鉄火ばしの名物あり

○座敷へ出がけにかち〳〵山あり雨ふりにハ下着にばけもの出る

○上田村鼻紙の安置なり例年あらたにしてばちのあたる事八ッ乳の革のごとし

○留守居坂隨分高けれどもだまして登安き坂也酒中花あるひハ大小の名物あり燈籠をねだられてずいいきの名物けいはくに上ミ下を疊いわしあり

○晴たる日ハふじびたい三味せんの箱根山などミゆる

○牛嶋の秋葉鳳來寺の寫しありて其名を惚られ寺といふいやともおふともわからぬよふに請川流しつてんびん棒六尺ぼうの名物あり

○高尾山見ゆるこれハ諸人のしる所なり

緣紀に曰

年明之樂漸於字名附

○雉子川

○時酒村

右ハ間の宿なり

○客のきせるをかりがねぶしつけの古跡是をわつちにくんなんしとハふとい市右ヱ門が塚あり

印に植たるハあつかま椎の木

地獄谷

○行水ハ流れハたへずしてしかも元の水にあらずそれハさる事ながら來る客の勤ハたへずしてしかも元のきやくにあらず照る月のめぐり絶ずして水にうつろふ景色遠くハ西湖の秋の空近くハ明石須摩の浦千里もゆけ万里もゆけとは五郎がせりふ長芋松茸此獻立ハ三人詰め南鐐一片上人の古跡一ッの碑あり

其句に

おやしきか地獄の町のとろゝ汁

○きやふくわん大きやうくわんなどいへる額ありてけんばん大王の帳にしるさんとほつすおそろしき所也

○修羅の迎ひのせわしき事光陰せん香のどし

○ひんさしの角ひけらかしそふハ虎の革のふんどしならで緋ぢりめんの火ゑんおそろし

○罪人を見かけて煮ばな拵へほうじが悪いゆへかとかくゆふれいたへずゆふべの客ハ爲になりそふだと思ひつゞけて寐言にゆんべ戀しやほやらほうといふ

○蒲團ハ甚三紅の血の池損料をかりきの山ミゆる

○うそつきのきやくハ淨破離のびいどろかゞミにうつされて其罪をさんげす

○番頭手代などの罪人此界に落入夜をうつし朝がへりに敷居高く朝めしに小言のほのふもへ上り喰ふ事叶ハずかき道のくるしミ目のあたりなり

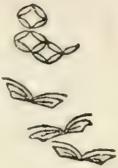
○午頭馬頭の日なし押寄て催促す古借のせめ也

羽織ケ嶽

○此所黄色なる嶋多し八丈に似たる嶋也日本橋より西の方山の手にあたる長唄三味せんの名人あまた有

○名物朱鼻緒五枚裏附

○紋所



此類染出す名物なり

○夫妙てこぜんすといふ此里の言葉なり

○鼻紙袋をとんぶりといふてしやれ専なれとも夜見せにハすけんばかりにて女郎をかわすかへりには大おん寺前の大どぶへ落たるよし

女郎をかわづ飛込とふの音　　はセを

○片ばしよりばつち峠羽織の紐につまづき登かたき山なり

○みか売あるひハ富の売札をとり出すきせるのそふじにもちひてよし

毛古路橋

○此橋至て短し二筋にて渡る三日十八日に渡錢おびたゝし

○日本橋より北にあたる花の頃至て賑ひ三角のめしくびれたる酒に時をうつしさいつおさへつの花軍茶辨當のたて幕串のほこをかまへいどみたゝかひし古戰場なり

○塗下駄前だれ花かんざしの名物あり

○此所泊りなし常に白鳥の聲ハきけどもとつくりと遊ふものなし

○此所に遊びすごせバついにハすつぼんと出かける

○かばやき冠者のりよりの古跡なり

鳥の町

○ちよぼ市といふ座頭有幸を得て一夜牽行となる

○日本橋より道法よつほと十の芋名物

○此所より三先の六あミた道あり

○屋根舟の賑ひ火燵の中で手かものいゝ舩があたれハ板〆びつしよりと酒をしぼり鼻紙の山雪に似て風景よし

○小鮒の名物雀やきならぬ雀おどり此川の名によつてあやせ〳〵と唄ふ此里の風義なり

○舩頭切手を忘れ江戸へ歸る氣のきかぬ舩頭也名をとへばすご六といふ

奥山村

○此所眞桑爪がどぜうに化し之介豆と徳利の名物

○御代參の女中奥山にてでんがくの狐色にばかされ馬のふんならぬ馬道の出合にふミ馬でしらせた返事もなふあんまりつらいぬしさんと大くぜつになりうちの女房取さへに入り大きにあぶミはてたり

○水茶屋ありその名を廿軒といふ甚だ賑ふ片足あげで休ふ此所の風義なり

○南の方に数珠屋あり家名梅川や

○色黒もじ新五左エ門柳ごしの色の白きにうかれようじのたけハミじかけれど長居して凡東西かんぼくにおれほどの色事仕ハあるまいとうぬぼれの出ほふだいにようじのかな鎚であたま

をこつきりふしに向つてふとゝき千万女の事なら相手にならぬと鳩をも見ずしてかへりたる所なり

○白子屋丈八が守本尊の地藏あり常に參詣たへず山号お駒山

○落葉の頃馬道の君奧山をぶらつきしよし其きゝ至てふとりたるをよミける

どぶつめがしづかに歩行落葉哉

○巾着きり多し此木下駄にならずどろほうニなる

○裏の方に榎木あり古語に裏のゑの木でけん毛をむしるといふ

評に曰此堂頼朝建立なり其頃梶原日毎に此所に詰かの榎木に登り髭をむしりたかよし其頃よりいゝ傳ふ

酒に醉た市

○朝からばん迄骨を折介が得手もの茶碗酒のいきほひに顔ハもミぢのすいもの名物

○女郎に見かぎられたる革羽織革たび出る

○紙たばこ入名物いづれも古切に似たれバ其名を竹屋町と云

○昔あんこふ此所にてつるし切りにあいたる所なりあたへ千兩となんいへる其頃むつといへる
魚流行すとかく豆腐にゐんあつて名木を失ふ
○紀州山橘柑寺大地なり霜月八日開山記御朱印あれどもびんぼうなり
○按摩ほふねん上人足力の古跡由來書二十二銅三つぼしの井
由來に
此水古濕古借或ハ借金横寐などにもちひてよし麹町の井とハ雲泥の違也

會　關

○此關開及びたるより越安き關也石舫遠州千家などゝ三國にまたがり名に高き關なり
○鴛ちん柄杓位述を直切れバ喧嘩になる共惡たいに濃茶ァふてへやつだといふ
○坂のをり口せわしくたんけい急なり
○ふもとに林ありて能眞木出るあめじまきといふ
○向ふハ鱠の山見ゆる
○吸もの紫のふくさ味噌

○待合の辻中立か浦万福寺といふ禪寺ありおつ附菓子を喰んとほつすあり此寺の寶物也

○此峯に時として怪ありその所の井戸茶碗に變じたはこぼん釣瓶となるむかし釜をせめたる隠元なりといふ

徳平村

○此村つゞきに遊女町あり六八文字のくり出しあゆミはなやかなり

○其外古跡はなけれども只赤切彌七が塚あり其所より奥列仙臺道あり

○川より東にあたり膏藥師堂あり寺領ねつからさつはりなし寶物に二本の矢あるよし

評に曰此矢奥刕責の頭用ひたるよし其名あれ矢これ矢といふ

おぢいが雨

○唐崎の雨せう〳〵の雨は諸人のしる所おぢいが雨また絶景なり

○子供が朝からまつ並木あり

○はけなが左エ門景清の行衛せんぎの爲あこやをせいばいせし所といふ右の方にはたけ山見ゆ

○とつふらが崎は夜の飴なり

○日本左ヱ門が舊跡其子孫一本四郎兵衛今に有と言ひ傳ふ

狂哥山

○朝日の詠四方の赤羅風景よし

○大たばの冬な名物

○ふちとをおりて舩着あり夜每に舟行こぎ渡るよし

　青樓にあらでふねなるまんぢうの
　誰がむすやら夜をうかすらん

○折ゝ樂師堂地口村などあり此道迷い安し

○漁師町あり投あミあるいハ元の木あミ名物

盤鐘

○手兒金山龍王院境内にて每年四月桂馬の神事ある

○漁場にて釣人あまた出る下手のかんがへ休むににたり舩で出る

○八ッ目うなぎ四ッ目殺しなどかゝる二目三もく本牧の鼻につゞく湊なり
○岡目八もく干大根なと名物

誹諧寺

○歳旦町のつゞき左の方に名高きばセをミゆる
○点取か池附合の濱見ゆる風景よし
○西の方に廿五てん山あり
○書ぬき五郎古跡
別當中冨のはらいを行ふ
○春興和尚來つて說法ある
○傾城おだまきが塚あり参詣の人なミだに袖をぬらしさて〳〵季立のよいものハ若死をしますといふ

兼房櫻

○吉野より東にあたり紺屋山あり弘法大師の
御哥に
わすれても染やしつらん通人の
紺屋の奥の藍瓶の水
○阿波の鳴戸より染出せるうつあられ
宮の渡しの脇道より出るをさやかたといふ
○色ゝあつめたるを小紋形天文がたといふおもにけんさき小紋はやる
紋所丸の内にこんてん木
○晴たる日ハ遠山小紋ミゆる
○ふせん龍かねかけ松の由來あり
○無名のはし無名の小紋あまたある
○仲人ハ氣を通し小紋の上下でひらく
○雨やあられと降かゝる矢はつ小紋これハあいけんぼうの軍やぶれし時より染出せるなり

しやれ町

○くさやのひもんやで茶ずり鯛名物

○のつけにそりの艀宿見ゆる

○東の方にむな高山雲を帯たる風景よし

○きのふも向嶋へ行平左エ門ありし古跡なり松風村雨が鯉あらつていありし所といふ

○ゆふべ江戸げいしやを書ころばし大ころばし名物むた口村高慢寺御朱印四の國で百萬石

○女郎が身上りでまねくれどふりこそ尾花やなればこそすいなあそひハ梅本か扱ちはなせる女郎ハ誰〳〵とゆびが折村膝折村ハ次の宿也

赤藏山

○小ずにくすね河津三ヶ庄のあるじ左エ門すけつね角力のいこんにより赤藏山の四文錢三本小だてにとりねらひすましてごさんすなれと大引はなつ其矢先ねらいもそれずあやまたずすゞたの馬ハ事なればくらより下へ釋迦さまに五円のさいごぞあわれなる物がたりあり

○赤七兵衛景清頼朝ならで大あたまの大臣をねらふ

○青ぎりといふ傾城の石碑あり

施主

藤屋とも見す屋ともある

○西國札所一ばんに見ず天山海ふく寺住職四文錢一本ゝにて寺をひらかれたる所なり至てあれ地なり

○宿はづれに餅やありかたいおやぢといふ

ひつへ河岸

○此所四文錢の浪打よせおそろしき淵也とつくの駄六が舊跡あり此川ほね川のつゝきにて坂東太郎の川上也

○船頭馬方などおもに集り喧嘩たへすとかくつらをはる

○此所に娘ありてはりあてる事あり東の方に大きなる堂見ゆる風にはりあてられてつぶれる

○此所鶴の吸もの名物吸口うづ

○ある人道をとへハつら道といふ其由來を尋るにだいやのつら道あそんの古跡なり

哥に

面と出てつらからめとハ思ひしに

さりとてハ又そつぽふ目とは

○へがしの方にしわんんぼう辨慶の古跡あり干大根の名物

○此里女房をおかゐといゝ又いかさまともいふ

藪入村

○青梅棧留なと名物豆藏に隙をとり上野淺草を見ずのミ百姓多し

○芝居へはいり小遣錢さかしてもなし役者の

○名をとへハ山下巾着切

○南の方にミやげ村あり庄屋せんへい

○茶袋坂のつゞきに只今かへりまし田ありその次にけふハどこへいつ田あり穗にあらわれ顏ハ

赤米のよし

○小錢で五百羅かんハとんだじやまになりひら橋見ゆる

○でつちどもけふばかりハにぎりこぶしのねつとふもなく心の儘の白雲に打のりあたごの方などへも行

日町の里

○大勢あつまりてにぎやかな町なり

○座持の座頭いくらさわいでもざしきが廣けれハこぶの出來るあぶなげハなく名をとへハ平市といふ

○今ひとりの座頭ハぐつ市とふふからよびよせたるなり茶めし五人組か六人前程

○手妻權現の社あり神躰しかとわからす

評に曰不動のかなしばりとも天狗のかぎ錢ともいふ

○身ぶり小猿が舊跡折ふしハどろぼうのよふなのがある

○朝までおきて居るとはふさぎの虫あさがへりもあるよしこれらハかんの藥なり

○町はづれに夜中のやきめしあり

由來に曰

丑ミつ年中の事のよしたいつ山空腹寺の住僧やきめし地獄へ落たる罪人をたすけし所といふ

無彈すなこ卷　終

的物日待草　無理なる道理を八卦になぞらへたるもの也

通俗文撰　風俗文せんの意味を加へて當世の姿を書あらわしたるなり

通暮之石文　通と野暮との争いを書あらわしたる也

右追々出板仕候間御求御覽可被下候

国書芸展

序

先に遊子法言辰巳の園の二書出てより。年ン々歳々其糟粕を啜つて。似たり寄ッたりの洒落本斗升を以ッて量るとも量り尽すべくもあらず。其洒落本を閲するに底の底を穿んと欲して。八万ン奈落の汚泥を堀り出し。膕の膕を探さんと欲して。六万坪の塵芥を掻出し。見ぬ事清しの影穿鑿。くら闇の事をあかるミへ持出されて。娼妓の身の上にハ迷惑に及ふ事少なからず。是見に興なく見らるゝに害あり。実に笑を取に失して。苦笑を惹出すに至らしむ。是をや過たるハなほ及ハざるが如しとやいハん。予か兄弟子の万象亭謂事あり。凡稗官を編に一ッ

の書法あり。能ク近く譬をとらば立役眞ン釼を拔イて實に敵役の頭を刎。やつし女形をとらへて前をまくりはたえをあらハにしてゐならぬ事を仕出し。道外褌をはづして睾丸を振リ廻さば。目を驚かし片腹を拘ゆべけれど。正の物を正で御目に懸ずして。しかも正の物の如く見するを上手の藝と云つべし。戯作も亦然り實を以て實を記すハ實錄なり虛を以て實の如く書成ハ戯作なり。洒落本の洒落を見て洒落る洒落ハ洒落た所が洒落にもならねば。只可咲を專とすべしと此語戯作道の確論といふべし此頃万象亭書捨の小冊あり。洒落本にあらずして野夫本なり。其筆先の穿所ハ。生得田舍の芋頭にして。是を讀是を味

へゆれば。忽然として屁を催ほす。放る所の屁高鳴して聞ク人の耳を驚かしめ。大となく小となく男となく女となく。頤を解腹を捧て一ツ笑を發せすといふヿなし。倘鼻を撮ミ袖を覆ふて。糞の如しといふ人ありとも。そこへ万象平氣なものなり。

天明七年未のはつはる風來山人門生無名子神田の寓居に樓遲暇久し振にて筆を採

後序

神代卷曰天照世界の親玉速素盞烏尊の惡晒落を疎ませ給ひ。大疳癪の磐戸隱れより以來。世ハ闇雲のめつた晒落。次第〳〵に增長し。五月蠅如無駄言を小冊にさへ書著ハして。世に行ハるゝもの八百万ヽ卷。何レも似たり寄たりにして。阿那面白き趣向もなし。爰に我師万象亭。鈿女命の昔を思ひ俳優ならぬ業くれハ。世間の晒落の裏を行キ。端出繩の横なまれる。夷振の可笑味にして。天照神に吹出させ。しかも磐戸の差合なく。笑ふ門には福來る。その福神ヽの神等の。員に合たる七珍萬寶。七尺下つて後に書す。

未のはつ春

作者
万象亭

東西〳〵。暫く〳〵。夫珍奮韓詩外傳に曰。昔黄帝の御宇かとよ。鳳凰出て東園に來儀す。豐年時に大當り。田舍芝居始りて。百姓等遊樂す。その古事を其儘に。どつさり居た大名題。爲先ッはつ春の序開に恵方に向て書キ初メの。万硯ハ近江の虎斑石爲持たる椎の實三文筆。曾我兄弟のせりふまで。万工藤ハあらずさら〳〵とひつかく猿隈小林の。朝日に羽をのす鷹屋が板。爲齡ハ千代の竹杖が。師匠白慢。鼻の先キ万高い山から谷底見れはお萬にあらぬ万倍が。同じく息勢はる霞。ひゐきの引キ幕切リ幕を。爲あくる岩戸の一番目。万互ばん續の一チから十迄。二人評判願上まするとホヽ敬白。

田舍芝居

万象亭 著

〇序開

越後の國ハ寒ン國にて降積雪の高入道。ミこし路の一ッにして。夏さり來ば首筋も。縮の帷子暑をわするゝ。田休の畔道を。ふら／＼行若者ハ。大沼郡。妻有の口。南鐙坂村の百姓與五七。立ッ浪に水車を染メ出したる。手織木綿の單物。花色太織の厚肌たる帯を瓢簞くびりに引ッ縊り髮は先ン年はやりたる。疫病本ン田に。癲眉。江戸土産に貰つた自慢に。天鵞絨の龜の甲の附ィた腹懸を見セ懸。更紗團扇をさしかざし。山挽の下駄をがら付ヵセながら。

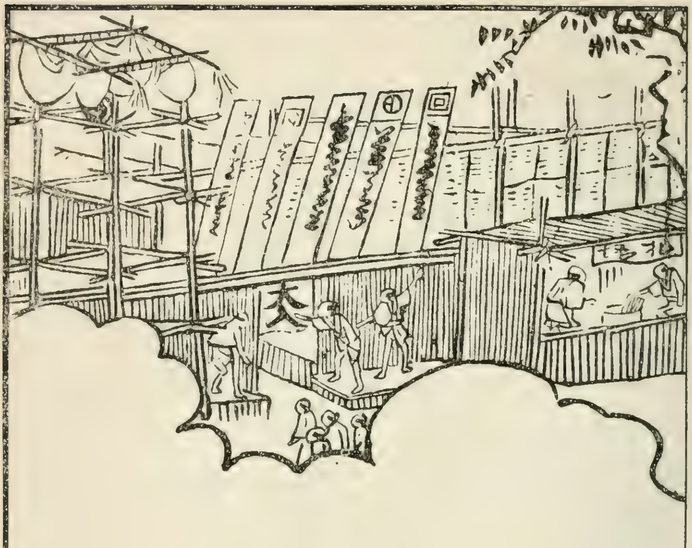
〽殿さァ殿さ毎晩きやァれぞんきがならてもいとし。しめて寐た夜ハ猶いとし。とのこうといな

と小唄まじくら行跡より。所鐙坂村の勘太郎といふ若者。縮織の孀婦をちよろまかして拵た

る。柿縞の大極無類といふ縞の浴衣に。去とハ不釣合なる黒桟留の帯の猫じやらしに結ひ。五十三ン次の駄賃附を摺たる油扇をかざし。草履下駄を引キづりて來懸りしが。夫と見るより。

【勘太】與五七どこへいぐしばやだら同士にいぐべい。（ト呼懸られてふり返り）【與五】勘太かおらァはや先へいんだんべいと思つたァ。さあ〳〵一ッ所にいぐべい。何ンでもはや今度はないたわたりやァ。去年ンの簾明に來たよりやァ大入だァ。（はないたとハはじめた事。わたりとハわたり芝居とて旅芝居の事。簾明とハ八十八夜過にハ越後の國のならハしにて。家〳〵に見世をひらき。縞市とて縞の賣買あり。此時分ハ江戸よりも商人入込て殊の外賑やかなり。その節ハいつでも芝居あり。）【勘太】其筈てもあんべいさ。新方の山下作兵へが座本で。櫻川豐次郎だァの松本濱次良だァのといふセうよたろが來たからいゝはづたァ。けふハ何ンのうしるな。（醬油樽とハすぐれてよき女かたの事をいふ。何の事か詳ならず）【與五】よんべ太皷が廻つけか。今日なァ豐年踊曾我田植といふ江戸狂言だげだァ。【勘太】おらァ早九日目だァから。忠臣藏だんべいと思つたァ。（田舍芝居の九日目ハぜひ忠臣藏をするなり）【與五】そりやァおぶちやつて。（うちすてといふ詞なり）小泉の太左ヱ門のお袋が。どうかしられたじやァなかつけかの。【勘太】ヲ、ものしけ。あるべいこつた聞ヵつせへ。此頃の晩景あのお袋が。刻昆布のうこしらつて喰ふとつて。年の氣で目のわりく成ッた上に。暗紛のこんでハあり。刻煙草と取違へて。三ン年垂へぶち込ンでしよつからく煮たやつのう。（三年たれとハ醬油の事、しよつからくとハしほからくといふ事）飲の菜に頬張て。がらゝうん飲ンだァから。咽中へ脂がこびり付いて。落すべいし

一〇



かくかねヱから。只はァ目眼のうさつくり返して。ぎつくりしやッくりしてべへ居るから。太左ヱ門もお方も。あんと仕べへあんと仕べへと方角のう失つたァよ。おかたとれ女房のとなり【與五】そりやァはァ珍事ちうやうだつけなァ。夫からどう仕けな【勘太】そこへおらか親仁殿か逝合セてコレ太左ヱ門どの。こかァ動天しる所じやァござんねへおらが隣の大海傳龍様を頼んだが能くござると云ハれたら。何がはァ千年町の馬市に。伯樂殿の中繼で。壹分五百で買ッた栃栗毛の馬に郷士殿から借リ寄セて。置鞍のう懸て迎に遣たらそんま傳龍ゐが。わつらわしと乗付さしつた。何でもはァ傳龍ゐ御功者だァ。お醫者の八宗兼學たァ。こりやァへへげへろの脂のう背たァと違つて。五臟六腑といふ腸のうさん出いて。洒ぎ洗濯なァなるめへ。爰がはい頓智發明八算見一の入る所だァといはれて。暫く考て居られけが。何のう思ハれたかお藏半紙のはな帋のう取出いて。破てハ捻り〳〵。くわんぜんよりのうこしらつて。お袋の口のへし割て。そのよりのうおしこまれたァ。【與五】夫からどふ仕けな。【勘太】サァその跡のう聞カつセへ。共よりこんだくわんぜんよりが。しんなゝへ抜出いたハ。夫から尻のうぼつ立テさセて。づる〳〵と手繰出いたら。咽首にこびり付ィた煙草の脂が皆ナとれて本腹のうしられたァ。なら程醫者殿の居ない村には住ないものだァといふが。おらなんどが親仁殿なんだァ仕合セで。生キ

藥師の傳龍の隣に居られるお蔭で。疝氣の虫の根絶しのうしられたァ。【與五】そりやァへへお袋なァ半死半生の日に逢れたな。そしてあの傳龍の娘子のお匕どなァどうしられたな。【勘太】お匕どなァ茂作と色事よ翁ぞろへの日にも しや敷へ來て居られたら。向しやじきに茂作めが來て居て。こつちから手まねぎをしれば。あつちからはほつくりを仕懸てねこしやめ踊の最中に。二タ人ながらどこへかおつぱづしたつきやァ。よくたんだへてきゝやァ去年の盆踊の時からの知音だけだァ。【與五】そりやァへへとんだァこんだァしかしはやきものやけたァこんだ。トむつとした顔はこいつおさじに氣かあると見へたり【勘太】そんだらにしも氣があるか。【與五】あにはァさうでもねへけんと。トはなしもつてゆく内に段々芝居ちかく成ツてくると見物はとろ／＼田舍噺子ともの手を引立テ。【見物】アレヱ芝居がはねへたげでてへこが。してれこ／＼と鳴はへ。早くあいべェ。【見物】はやくいがじやァいゝしやじきがふさがるべい【二人】おらもいそいでいぐべへ。

○二立目

抑田舍芝居の構といつぱ薦垂にて四方をかこみ。栗丸太を繩ゆひにしたる鼠木戸。看板は松板に役者の名を書付たるを打付。狂言名代は紙幟に書たるを押立テ。此のほり前のはんに太皷ゑまはすとき先へかついであるいたのをすぐに

木戸へ立る也 太鼓櫓ハ木戸の際へ高く組上。座元の紋所丸の内に三ッ笹龍膽の幕をはりて。間拔千万なるしやぎりを打。その下に札場あり。頭といふハ近在近江名を知られたる通り者。切竹を染たる伊達浴衣に。虎班を打たるもんばの帶郡内縞の褌を見せかけ。藥研鍔の長刀をぶつこみ。錢ばこに褥を敷てむんづと居懸り。傍を睨で扣へたり。木戸番ハちぐはぐに。思ひ〳〵の半点を着し。結綿と三舛の紋を。胡粉にてべつたり書たる。茜木綿の投頭巾。揃へて見えて一ッところに引ッかぶり。【木戸番】ヤァはねへるハ〳〵。此まくが對面だァ。石橋の角兵衛獅子だァ。今ッからお仕廻のふち拔迄たんだ百だァ。安いもんだァ。見ば早く這入て見さつしやりましやう。ふちぬきとハ大仕懸の事也。【見物】コレ元〆との一チばんしやじきはいくらし申な。【かしら】一番しやじきが八百。二番桟敷が七百。三番桟じきが六百。並桟敷が五百。土しやしきか百ッゝもし。つちしやじきハきりおとしの事【見物】そりやァへへげへに高くござるそんだら並しやじきを三百に負なさろ。【頭】負るのへすのといふハ只のわたりのこんだァ。關東八十八櫓のてつぺんといふ芝居だァから。一もんだれ二文だれねぎりこぎりハごさんねへ。【見物】そんだら辨當の運上ハ負なさろ。【頭】いつせへいんにやといふきミのことば。辨當が一ト組で二百。酒が一舛で七拾貳匁ッ、の運上ハ。わたり芝居の式目だァ。したがはい。モウ翌切ッになつたこんだァ。まけてやりますへ

い。サァ割印のう持ていがつセへ。ト木戸札さけ辨とうの割いんをわたすあとへ來る〳〵六十あまりのはゞ々のかくしをかぶり珠數袋から錢をひねり出しながら。【婆さ】コレお頭どのよ。冥加錢なこゝへさん出し申た。其お札のういなゝかせてくれさつしやりましよ。【田舎嗅】わしれ此頃毎日つゞけて來た嗅でござります。けふれはや札錢のしがくかござんねへから。御ていどのに隱して。引キ割のう貳外たらず持て來もした　是で土棧敷へいれてくれさつしやるべいなら忝くござります。【頭】こりやァへへ仕づらい相談たァが。毎日來めさるこんだ。サァ札のう持ていがつせへ。ト引わりと取替る其外あまたの見物くんじゆおしへし合木戸口へ與九七勘太も來る是れどふらく〳〵のゆへ呼も叫たかほなり。【與五】【勘太】親方どのけふもはいで〳〵盛ます。【頭】なんとしてかおそくござる今がてうどこひりだァ。こびりとハ中入の事。此まくで櫻川豊次郎殿をほめてくれさつせへ。【二人】譽べいとおもつてゐさわさ　わざ〳〵といふ事　來もした。木戸番どの大義でござります。ト云ながら木戸をはいろあとにつゞいてうさんらしき男はいろうとするを引留メ。【木戸番】コレ侍なさつふだ錢のうよごさつしやい。【かれかし】おられ山屋むらから來たのだァ　ト云ながらはいりにかゝる。【木戸】なんぼ隣村のわかいしよでも。神事芝居たァ違ひ申す。しいなれなり申さない。トやり合ている所へ同村のわかいもの二三人來懸る。【ツレ】惣六じやァねへか何のうやじり合ゥのだ。【かわかし】何ンだァ角だァのしやべちやァござんねへ。おれか木戸を這入るべいといふ事もし。夫を錢の出さしやァいれまいといふからおこつたもんちやくたァ。【ツレ】そんだらいゝれ。コレ元メどの去年の出來秋に。おらが

村へワたりの來た時。こゝの村かたから來めされたわかいしよれ。おらが木戸ばんのうして居たが。皆ンな只入レもしたれ。こかァあいみたがひだァ、やさくさいふことれござんねへ。通しなさろ〳〵。【頭】わりゐたちやァはい。こつちの水帳にない事をいふ人たちだァ。去年そつちの村方の芝居のときやァ。おらが村方から薦張の筵を百枚。杉皮のう百把。積物にしたから。夫ではい只見物のう仕たのだァ。今ン度こちらの芝居にやァ。一文げが物もよこさないで。見物なァたゞ仕べいとか。そりやァ成申すまい。油虫だら焼畠へ付めさろ【かわかし】ならじやァならぬでよくござるれ。油虫と云れてれ一チ分がたち申さない。【ツレ】ヲ、一分所じやァござんねへ。二分も三分も立チ申さない。通セる事がならじやァ。かふして通り申すれ。トこさま木戸をやぶりにかゝるを木戸ばんとび下りたゝきのける。是より大つかみ合になれども元〆少しもさわがず。うしろにかけたる拍子木をはづし。はやひやうしぎふうでば。かねて相圖のふせぎと見へ。村はづれの穢多ども竹やりにておつとりまく。【穢多】外の村でほたくとれあての横槌がちがひ申すぞ。ほたくとれあばれる事。だまつていがじやァ。おらが相手に成て突留申すぞ。ト頭ふすまにてこゝまかれさすがあはれものもぐんにやり。サァはやくいがつセへ。【かれかし】いぐめへたァやねへれ。コレ元〆どのきつとやげいしをもつて來もすぞ。【頭】ヲ、持て來めされべ。やだァとれ云申さない。おしやらくの長介だァ。よくつらのう見知ていぐがいゝ。トひげもとあげて太平らくへ何かたも！しいきかたなり。【かわかし】一チ期わすれ申さないよく見知申た。【ゐた】いがじやァ突留申すぞ。【か

わかし】いざ中ハ。【ゑた】いがつせへ。ト村さかいへおくり出す跡へよび皆いさましく【大戸】せウ喧嘩ハ済申たァ。今ッから晩氣まで百だァ。

○三立目

芝居の内ハ開扇を見ることく。舞臺を以て要とし。先廣に棧敷をかけ。舞臺の上と棧敷の上ばかり。杉皮にて屋根を葺。落間の上ハ青天井。切ッ落シの處〳〵に。大木立樹ぬんぬつと生てゐる。棧敷ハ何れも中二階にて。間ィの仕切ハ簾を懸。前の手摺ハ新川の前垂の如くなりたる。花毛氈を懸たるが。代官殿の役棧敷。引つゞいて文字入の打敷を懸たるが旦那寺の棧敷。其次に机懸の破れ毛センを掛たるか醫者殿の棧敷。夫より外ハ花莚莚。澁紙。大風呂敷なんどを懸しもあり。花道ハ土にて築立。兩方へ芝を敷。瞿麥姫百合をあしらひて植付。扨引キ幕は色いりにて。地獄極樂の趣想を染拔たるハ。中條姫のお曼陀羅とも云つべし。【切落】【見物】どれこびりの間にばりのうこいて來べい○おらァハこひのうぶんぬくべい。ト居たり立たりする。中うりも木戸番の如くあかね染のなげ頭巾かわごのふたへくひ物たいれ。【中賣】おこしごめや〳〵。あめの棒や〳〵○麥湯や〳〵。ふつたおれ餅や〳〵。あへかわもちの事。○稗團子やもろこし團子。○濁り酒や。あま酒や。○握り飯や〳〵。米の飯の握りめ

しや。本ンの飯のにぎり飯や。【見物】コレ〳〵こゝへひろだんごのうくれさつせへ。〇おれにはあめんぼうのう呉さつせへ。ト飴を買江戸のあめとはちがひいなかにてはもミぬかにてつめてあるゆへまつ黒なつめでこそげおとしてくふ。【勘太】あんでもでかい見物だァ地頭屋敷へ强訴の來たやうだァはいあくとがさわりますべいよろさつしやりましよとすはる あくとゝはかゝとの事。【與五】一番しやじきが代官どの。二番しやしきが等行寺な。三ばんしやしきが傳龍なだァ。しかもおさじどのも來て居られらァ。代官なとおてらなとお醫しやなはや。とごでも威光が强いは、角力も芝居も錢なしだァ。ト二人はそこらのさじきなどハ見まハしてゐる向ふの方にて何かこうろんの聲がする。【又六】是孫作さつきから百万陀羅いふこんだァ。なんぼ札を先へ取てはいつても。お身はおれが尻へ付べき筈だ。跡へさがつて見物のう仕めさろ。【孫作】又六どのそんな横車はやねへ物だおんじやる。【又六】無理も非道もござんねへ。お身が家筋は。おらが曾祖父殿の代に。普代女郎のづばらんだ庭子だァから。おらが先へたつべきはづしやァござるめへぞ。【孫作】亦六殿わりなも地面の見て物なァ云なさろ。大飯振舞の座席たァ違い申す。遊所で席論なァ入申さない。先へ這入ッたものが先に居べき筈でござらァよ。こかァ悪所でござりもす。【又六】ヘテあく所も灰小屋も入申さない。此南鐙坂の村中では指折の又六だァ。等行寺なの正月參りにも。おらが箸をとらない内は。名のし殿でも・庄屋とのでも。一チ番汁粉の親椀の蓋のう。だれも

明る事ハ成り申さない。代々大姉代々居士の家柄だァ。【孫作】代々大姉九年母大姉でもとんちやかァござんねへ。そりやァへへ。場所と所に依たらいへ柄も入申べい。今も云通りこがァ遊所だァ。遠くて見づらくハ早く來て前の方へ這入たがよくござるハ。【又六】夫をおどれにならうべいか。【孫さく】知じやァ教ますべい。ト二人とも聲高になる折からまくをあけて口上云罷出。【口上】東西〱さァて。此所に置まして當村他村から役者色子へ下さつた。積物のかき付のう讀上ます。しづかにしておきゝやりもし。東西〱。トいへバ棧敷も落間もひつそりとなる。當村方孫平次様團兵衛様ゟ錢廿四匁。倉橋熊吉へ下さる是で酒ても呑とつてへ。此とつてへたなかくひいていふ。小泉村のお鼻ゟ方より。ぼた餅一トじきりやう手作の醴一トとつくり。惣役者ども色子共へ下さる。よつぱら飲喰て働けといつてへ。よつぱらとへしたいかといふと すがた村吉藏ゟの御隱居ゟより。絹紅二三尺。内山金三郎へ下さる。越中褌にでも仕ろとつてへ。同饂飩の粉一ト袋。櫻川豐次郎へ下さる。是を顔へぬれとつてへ。小泉村。稻葉村。山屋村鉢村千手町右ヶ五村のわかいしよゟ方より。麥一トかます。茄一ト籠。かぼちや十。玉味噌五ッ懸。葉煙草三ン斤。竹川三郎右ヱ門へ下さる。隨分かセいで働けとつてへ。當むら等行寺の和尚ゟ。線香五把。五種香一袋松本濱次郎へ下さる。衣裳母衣着をふすべろとつてへ。ぼろぎとハうちかけの事。同大海傳龍ゟより。枇杷葉湯百服。暑氣に當た役者ともにふり出してのめとつ

てへ。同お娘子ゐ方花紋りの手拭一ト筋ひずッ、。櫻川豐次郎松本濱次郎へ下さる。是をかぶつてじよなめけとつてへ。山屋むら高井浦之介樣より。酒一樽縮一端銀一封。森山平介へ下さる。ずいぶんかセへでぎしめけとつてへ。同村わかいしよゐかた方。寒生姜一ト袋。黒砂糖二夕貝。評唄の富士川久兵衛に下さる。是をねぶつてうたへとつてへ。この外にいなゝかつセへた物ハ。又跡で讀立ますべいもはやこびりも濟ましたから。押付曾我兄弟對面のきやうげんのうはないます。左樣におもわつしやりましよ。東西〳〵。

○四立日

代官殿ハ高宮縞の帷子に紺生絹の羽織。木欄色の野袴。しやちこばつて居られしが。隣棧敷の箏行寺の和尚と咄をする【代官】時に和尚ゐけふの狂言も面白ふござりました。拙者も若い時分ハ至て放蕩で。所〻方〻遍歷致して。旅芝居をも見物致したが。銚子の浦方の芝居でハ。何の狂言でも。大切に張子の赤鬼を出さねば見物か立ませぬ。仙臺の釋迦堂などの芝居ハ。見廻りの役人が參ると。樂屋から居合拔の形に拵た役者が出て。やつとふ〳〵のしなへ打と申て。居合をぬく眞似をするので。藥賣の体に成ます。又三人芝居といふハ役者三人切の云立で

ござるから。舞臺へ役者が三人から上並ぶ時ハ。セりふの廻て來ぬ役者ハ。小さな屏風を膝の前へ立て置ます。又女形ハ女形の面。立チ役ハ立役の面を腰へふらさげて。人形芝居の体に成て居るのもござりますて【和尙】はてなもし。此村方でハそんな法度がなくつてよくござりもす。そしてあの幕をお見やりもし。稻葉の紺屋の惣兵衛が染たげでござる。芝居の幕に地ごく極樂の体想とハ。能思ひ付でござりもす。則是が狂言綺語も讃佛乘の緣でござりもふすと。唱シのとなりハ傳龍老。急病用でそこら迄ゆかれ。跡にのこるハ娘のお匕。所名うての品ものにて　朱ぬりの櫛に燒付の釵。六齋市に買つた匂ひ油をべたくとつけ。江戸の娘子から貰た鬢差を曲もせずにその儘で差。髮ハ鳶の巢のやふニ摑ミちらし。駄白粉をこてくと面をかぶつたことく粧。仙臺花の取立テの紅を口から頰べたへぬり。かすり越後のふり袖に。根古や絹の小六ぞめの帶を吉彌結ひにむすび。忍び男の茂さくが切落から目遣ひをして立て行ケば。其儘合點して手水に立ッふりにて。小便所へゆくと茂作もそこに待て居る。二人ハ小便桶の際にたゝずみ【おさじ】おらァはやさきつから逢たくてやるせがなかつけが。とつ爺が付て居さつしやるから。拔べいやうがござらなんだァよ【茂作】ァニおらに逢たかんべい。小甚太節に唄う通り。さつさせうく秋の風だつぺへ。トつんとする【お匕】何としてそんなしよちつぶりをさ

つしやりもふす。わしがこなさァにいつあき申た。おらハ一日も早く夫婦に成べいと思つて。戸隠様へ願のうかけたから。今年ハ生年で脊戸の青梨が鈴生に成て。見るたびにぐい〳〵と唾を引てかじりたいけれど。それを辛抱しるのハ。立チ物だァからでござりもふす。おらァそれ程心中をたてますハよ。トなミだぐむ【茂】そりやァいつわりでござんべェ。そんだらなゼセうよたろどもに手拭のうやらしつた。大方は次郎か濱二郎に氣があるだんべェ。【おさじ】ヤレハァありやァわしが分にして爺様がやつたのでこさり申ス【茂】いつセへ。さうじやァござるめへ。トセり合うしろに與五郎がつかゞいよつておさじがしりべた【おさじ】ア、是尻のうしねるハだれだかなと。横へしやくつたたなつちり。振飛されてひよろ〳〵。心得茂作が身をかわセば。小便桶へまつさかさま【お匕】これハ【茂】かまわすとござりもふし。

○五立目

【口上】東西〳〵。さァて此所田植曾我豐年踊對面の幕でござりもふす。左やうに心得さつしやりませう。但是が切りきやうげんでござりもふす。チョン〳〵

舞臺正面松林を書落したる簾をかけ。大臣柱の方へそこらのいなり樣から借て來て眞物の鳥

居を繕つけ目付柱へ杉の皮を卷、眞物の杉の枝を取付たい鶴が岡八幡神前のてい。後谷黒彌五。海野紙でこしらへたる素袍　張子の立烏帽子万歳扇のおや骨を折懸て末廣にしたるを持。宮神樂の心意氣なれど。何だかつまらぬ鳴物にてまくあく

【後谷】イヤコレ二人の衆　今日ハ此鶴が岡八幡様へ、工藤左ヱ門介經殿が惠方參をお仕やるげでござる。その待うけのうすべいと思つて。此後谷の蔫次郎ゑさわさと。出はり申た【黑彌五】此黑彌五も其分別でござり申【海野】おらもそうでござる。時にはや工藤殿ハ遲い事でござり申。大方朝飯の仕かけやうがおくれたァからでもござんべへ。ト云ているとき切まくの内ゟ○梶原平三出はつたアトいふ【三人】アニ平三どのがお出やつたァとか○梶原平三出はつたアト梶原さいしうじまのおめんどてらに黑もめんのくゝり頭巾山かたなをさしくわへきせるにてうしろ手をくミ江戸なら太鼓謡といふ所なれどきつねつりのやうな相方になり花道の見へもなくぶら／＼と本舞臺へ直るコリアヤ梶原どな(殿)ァ用もござるめへに、なじよにお參りを仕やり申た【梶】今日ハ此頃にないぬくとい日だァから。奢戸のめぐらを野良廻りいうするとつて。ついぶら／＼と爰迄來もした。お稻荷殿にでもばやかされたげてござる。そして又にしたらやァとつとき(取置)のきり物のう着て。なじよにそこに居やり申【後谷】けふハ工藤どのがお參りのうめさるげでござる。夫を待受るのでござるハよ。トいふ内梶ハら切まくの方を見て

【梶】時に三人の衆。向ふの方からしよなめきが來もすハよ【三人】ホンニのんし　ト皆／＼向ふの方を見ると

ぺこ〳〵三味せんの相方になり。ふし田久兵衛さろの子だんのうをうたひ出すと。とら少将御にけまりにぶう〳〵貝を染たろもめん長袋。いんきんさらさの帯をむすびさげ。おさじ殿からもらつた手ぬぐいをかぶり。朝比奈は纐の丸をそめたろ半てんをめんづきんをかぶり。太鼓をたゝきながらおたすけおどりの見へにて。すつとこおどりごな〳〵おどり小ぶないよこのをおどりながら本ぶたいへ直りとゞ慶兵へ獅子ぢくゞりのしよさことすむ。【見物】ヤウ〳〵櫻川松本のせうよだろ

熊吉殿も太義でおんじやる　ト ほめる内與五七助太花道へあがり　【與五】東西〳〵。狂言半へ邪魔だつぺへがちくとんはかり讃申そう。豊次郎殿のいとしさハ。天にたとへバ星の數。七里か濱でハ砂の數。召たる小袖の糸の數。五反畠の芥子の數と。ホヽ、敬てつん出るこんだ【勘太】つゞいておらかも讃申そう。濱次郎殿の形振ハ。立バ芍藥居れバ牡丹。ありく姿ハ百合の花。熊吉殿をも讃申。顋さに頰さに生へた髭。いわバ野に咲薊の花よ。日なたぼつこをめさるなら。産毛屋鑷でおぬきやり申と。ホヽ、敬てぶんぬいた。このほかひきつゞいて五ツ六ツありこれを略ス。【梶】おらァはやお助だァと思つたら大磯の虎化粧坂の少將太皷ぶちなァ朝比奈か【後】【黒】【海】コリヤァへへたまげたこんだァ【朝】げへに笑ひめさるな。けふハ工藤殿が恵方參りのうさつしやるから對面のうすべいとおもつて。曾我兄弟が出はるげだ。夫のう聞かじつて。此二人のおしやらくが達しべい用かあるから。逢せてくれろとせがむから同道のうしたのだァ【虎】小林さァの云つしやる通り。おらが知音の十郎さァに逢へいと思つて。少將さァと云合て人の眼にたゝないやうに。こんな形にむくれて來もふしたァよ、むくれるとハやつす事【セう〳〵】虎さァの云つしやる通りだ

ア。おんじいたちよ。戀にハ身をやつセでござり申ス【梶】夫で別つたァよ。したがはい曾我兄弟なァ貧乏神の申子だげで。お夷にもお大こくにもうとまれた青野良共だァ。正月御だァの田うへ浴衣だァのといふ物ハ。夢に見た事もない。三百六十余かんにち。野良着のぼうた一枚で。水ッぱなのうすゝり上る貧乏野良に心中つくすハ。悪い分別だァ、なァわかいしよさうじやァござり申さぬか【後】夫さもし、虎セう〳〵にハ介つね殿が氣が有げた。貧乏神なァおぶちやつて。工藤殿にねつれるが。沼垂の水糖のうなめるより味いセんさくでござらァよ。（ぬつたりの水あめハ當國のめい物也。）【黒】【海】さうでごんざる〳〵【朝】だまりなさろ。曾我の貧乏がお身達が厄害に成申か。人の七難より我身の八難だ。お身たちが身代がどれほどよくござる【梶】なんほたれが身代がわりくつても。曾我兄弟にハ叶ひ申さぬ。なゼと云めさろ。兄弟にかつ惚た虎少將も。尻押のうめさるお身さまも。共ざまハ何でごんざる。お助の眞似のうしるとハ嘘だんべい。やつはり木ッに錢のう貰つて兄弟にミつぐのでこさんべい。太鼓ぶちの朝比奈。お助踊の虎セう〳〵。こつちの村方ハ三年が内法施留だァ。脇の村へ通れ〳〵【虎少】小林色なァあんな雜言のうつきますハよ。肝か焼て成ましない〳〵。（トなく小林大はだぬぎになり。）【朝】げぢ〳〵殿よ、お身色なァ年に耻たがよくごさる。何の意恨が有ッて今のやうな雜言のうつきめされた。そしておらやとら

せう〳〵にいゝ名をつけて下さつて忝くごんざる。禮なァこうして言ますべい。トよこぞつほうをはればこ三人取さへる「虎」ヤレハァ存分いふだら口でいふがよくござる。手を出したら負に成ますべい「せう〳〵」虎さァの云つしやる通りだァ。虫のうへさへておつこたへなさろ「朝」ァニハァ堪忍袋の緒がきれ申た。はなしめさろ〳〵「虎」「少」もつけな事がおごつたァ。だれぞ來て取さへてくれさつしやりましな。ト大聲てがなり立るときりまくの内ゟばた〳〵にて工藤左ヱ門何かつまらぬ惣かミのかづら火うち入の布子ばおり同じ仕立の大とてら尻をまくりながら「工藤」共喧嘩ハおれがもらつたァ〳〵。ト花道の見へもなく本ぶたいへかけ付朝比奈を引留　是あにいせく事ハねへ。此工藤左ヱ門がおつ留た。一番留てくんさるなら。忝茄子の鴫焼だァもさ「朝」すけつねどのが留さつせへても。聞申さないやだァ〳〵はなしなさろ「梶」工藤どのいゝ所へ來て下さつた。ちくとん斗りの間違ひではや。朝比奈殿がはんけへのうおこされて。なじやうにも仕べいやうがござらなんだァ「後」「里」「海」よく挨拶のうして哭さつしやりまし。ヤレハァつらいめに逢ましたァよ「工」あれ程にいふこんだ。よろしてやりなさろ。皆ナ土べたへ頭のう堀込で。誤りめさろ〳〵「皆〳〵」朝比奈ゐ。眞平よろさつしやりもし「朝」よくござるりやうけんのうしますべい。その代に工藤どの。ちくとばかり頼たい事がござるハよ「工」あんでも聞ますべい「朝」そんだら云ますべい。別の事でもござんねへ。曾我兄弟の

青野郎どもが。お身らに對面のう仕たがり申す。逢て遣つて哭めさろ【工】朝比奈殿待なさろ。曾我兄弟のやつられおらにれちつとさし合だ。是れよろしてくれさつしやりもし【朝】そりやァ詞がちがひ申ス。わりらの云事なァ聞カセて。おらが云事なァきくめへとか。夫じやァ損徳なしじやァござんねへ。そんだらよくござる。又けんくわのうおはだつべへ。梶原そこへ出され【工】ア、是きくめへとれ云申スめへ。なら程逢てやりますべい【朝】又嘘言じやァござんねへか【工】君子に二言なしでござるれよ【朝】待めさろおれが爰のう退たら。介つね殿が逃べへもしれ申さない。お身達二人で押へて居めさろ。ト とらせう〳〵工藤がそでを引ツぱり【二人】死力なァ出してへさへ申た。【朝】どりや二人のものを呼出しますべい。ト 切まくの方へむかい そこなァ灰小屋の陰に扣へた二人のせなご達。介つね殿を歴状ずくめにしたら。對面仕べいと云こんだ。早く出て逢めさろ【十良 五良】切まくの内より 心得申シた。ト 江戸なら對面三重といふ所なれどどふいふあつらへかきゞすのめりやすになると見へみの笠にて十郎ハ木ニてこしらへたる鍬をかたげ五郎ハ顔を眞赤にぬり両方へ長く下つた前がみのかづら竹にてこしらへたろ弓矢をもち花道の眞中につくぼりと立て案山子の思入この見へ火おちにて切落しよれどろ〳〵とかけあがり十五六人ほめことばあり。【梶】曾我兄弟なァどのやうたざまだァとおもつたら。苗代の案山子が。道祖神殿のう見るやうな出立だァ。あれでも虎少将が知音だげだァ。そんなわらひなさろ【皆々】ワァハ、ア〳〵 ト 大口を開て分別もなく笑ふ【朝】そこにたかつた烏のう見るやうにやかましくござるれ。サア〳〵二人のせなごよいふべい事があらバそこで云めさ

ろ。トいふ内とこともなしにさう〳〵しきゆへ東西〳〵といへどもしずまらずそれゆそのはづ切おとしの板のうらにせミがとまつてなくのなり後見竹竿を持て来て追ちらす。

かけ合せりふ

曾我十郎　守山平介
同　五郎　内山金三良

へ十夫桃栗三年柿八年。梅ハ酢とて十八年五けふ吹かへすあまぼしの。かきたくる程肝玉が焼て頰さが赤澤山。十おらが親仁の河津殿。柏が峠で猪狩の。列卒に出られた歸り懸。椎の實取てくふ所を五蜂に珍寶さゝしつめて。放いた矢さきがあやまたず十ふんぐり玉なァ射かぢつて。横寐所へおつ立たァ。五疝氣の虫なァ音を立て。十ぐうとも五すうとも云べこそ十そのまゝそこで五おもいば〳〵十これ。おもひ懸ない災難で。河津どなァお死にやつた五車前草どの〳〵御ンともらひ。土午房を見るごとく。穴さァ堀て埋込ンだ十夫から代々取付の。掃除旦那の頼朝公十今ハ掃除をすけつね殿。糞附馬のうま〳〵と。人のかぶら菜引ッこひて。漬大根迄納るげだト賍のおもたい頰の皮。川津。宇佐美に。久津美の庄。合セて三ヶの庄屋殿。紋の庵りにもつこうに。さゝへ込だる寶の山五寶の山へ入りながら。只ハ歸らぬ介つね殿十親の敵をうつ鍬柄。天びつかりの天ぢよこを五てつへんさァへいたゞかぬ。仇矢ハ放さぬ此弓矢。腰の骨なァぐつ

しやりと十立たら大事かそつ首を。五其儘取てとりおどし十まァさう思つてくんされと二人ホヽ微て白ス。

【朝】ヲヤがァおつたこんだ。川つかへなしに能クしやべつたァ【工】コレ朝比奈殿よ。あんまり譽さつしやるな。あんだかはや氣味のわるい口上でごんざる。おられもふいぎますべい。便氣が付申シた【虎】【少】なつぽうでもはなし申さない【朝】ヲ、さうだぞ。もしかけ出いたら。褌の下りのう引たが能ぞ。コレ二人のせなごよ。ちつとも早く爰へ來て對面のうしろ〳〵【二人】呑込申シた。さらバそこへいぎますべい。ト本舞臺へ直る【梶】ヤレ鳥居先へよるな。せつかく掃ちぎつてある所が。藁簑のこミになるわよ【朝】こゝに成てもよくごんざる。すつこんで居めさろ【工】そこへねまつた二人の若者。ねまつたとハ居る事 先へ出はつたハ何んといふ【十】舎兄の一万いつかく成て。曾我の十郎祐成と云申ス【工】次に出はつた甘塩ハ。前がミの五【五】舎弟の箱王でつかく成て。曾我の五郎時宗と云申ス【工】兄祐成ハお袋のまんかうに似て。ぼやらこく。弟の時宗ハ親仁の川津に似て。若疊な生れ付だ。親ハなくてもがきつ子ハ育とやら。ハテでかばちなく大きく成たなァ【二人】介つね殿【工】二人の若ィしよ【二人】ハテめづらしい【三人】對面だなァ【朝】何と工藤との久しふりでの參會だァ。二人のものに盃のうやつてハお

くりやり申さぬか【工】盃なァ仕申さうが。酒のう呑でやだをふんだら。大事だんべい【朝】ソリヤァ氣遣なござんねへ。此小林が受合申ス幸腰へ付て來た。德利酒がござる。サァ〳〵ぬしから始めなさろ。ト腰付のびんぼう德利に石ごきをそへて突出ス【工】そんだら辭義なしに始ますべい。慮外ながらついで呉さつしやりましよ。トちやわんにうけて一口のミ顏をしかめあたまをふりさま〳〵うまきこなしあり【朝】あんといゝ酒だつぺい自慢でハないが。おらが手造りだァ【工】ァ、いゝ酒でござる。近頃ハ不作でどこでも酒ハ造らないが。いゝたしなミでござり申ス。祢成さし申さう【十】ヲ、ト返盃をして側へより竹の子笠をぬき茶わんを受つゝとほし舌うちをして工藤へもとす【工】時宗【五】あんだァ【工】石ごきのうさつくれべへ。こゝへねまれ【五】ヲ、ねまるべいトつか〳〵と來て茶わんをうけ三寳こわしの思入にて石ごきをかぢりわる【朝】ヤレハァあきれた肝癪だァ【見物】ヨウ〳〵五郎やつたり〳〵。もちつとぎしめけ〳〵とほめる。此所かけ合にて股野川津角力もの語りあれど。丁數の登るをいとひてもらしぬ。【朝】時にはや余義ないむしんでござるが。二人の者に肴をはさんでハおくりやり申スまいか【工】わしもはァさう思ひますが。何も持合せ申さない。トそこらを見て　よくござる。ト十郎がぬいた笠を取上げ片手にハ朱ざやの山刀を持　十郎にハ竹の子笠。五郎にハ此山刀。是が肴だつまミなさろ。ト二人つか〳〵とよつてうけとり思入。【十】【五】ァニ是が肴だァとか【工】笠のうふせればふじの山。半夏過ての竹の子笠。五月の末は駿河の國。富士の裾野の陣屋の內へ【十】夜這ハ仕付たおらゝが兄弟、錢笠か

ぶつて忍ひ込ミ【五】親仁の敵と名乘懸。すの子も通れと切り付たら【朝】血ハまつかいなさび刀【五】此赤鰯の出刀で【十】本望とげろといふことか【五】とてもの事だら今爰で【朝】ヤレハアせつ込事ハない。此場ハ別れて歸りなさろ【二人】わかれづらい所だが。せう事がないいぎますべい【虎】咄が有て來申シたが。取紛て云ましない【少】是から内へ歸り道。咄しながらいぎますへい【朝】サアいゝ道連が出來申シた。行道筋ハ向ふの田の畔。トいふせりふたきっかけに正面のすだれかばつたり落ると。見わたし二三里の天地自然の大仕かけ是ハ江戸でハ出來ぬことなり。見ぶつぶちぬき〳〵と云てほめる。ソレどこぞいゝ麥畠が有たなら。ころけこんだがよくござる【虎】【少】朝比奈さァ【朝】二人のおしやらく【十】【五】介つね殿【工】二人のわかいしよ【皆〳〵】さらバてござり申ス。ト見へわるくならび【工】先今日ハ是切でござりもふす

打出し

右之本以作者書捨之原本。令校合一過畢。師如大象弟子如猿松採不足三本筆毛。補其脱漏云爾。

門人　千差萬別

天竺老人

跋

此小冊ハ。江戸前の隱士。萬象亭の戯作にして今世に行るゝ洒落本の。或ハ妓の耳の垢。又ハ娼の臍の脂を穿鑿仕たるよふな。片づんだる物とハ殊なり。通となく野夫となく。一トたひよめば腮のかきかねをはづし。數腹すしのよれて。その可笑さやめとなし。予に清書セよとの師命に任せ。筆にも紙をくらハする。未のはつ春。大高檀帋の威に押れず。おめずおくセず。書ちらせハ。狐めん堂の主人。其由をしるして跋とはなしぬ。

風來山人之孫弟子

筆者

狐面堂柳郷（印）

高軒之侶

遊里雲談

松數之娼

陶淵明菊寿帯青楼捨僧慧遠遊
南驛稱山陸子静乗猪牙入油堀

古契三娼自叙

潮光や浪速の葦は伊勢の濱荻。北廓にふるといふ言あれば。河東にてらすといふ言あり。所かはれば南驛有の蕈も。朝艸の名によぶ。さりやこつの女肆言風俗各異にして人ゝ情亦異也り。今ゝ中。吉。品。の人ゝ物をこしらへて。楚の人情をかたらしむ。これを知るものはこれを好むものには如ず。これをこのむ者はこれをたのしむものにはしかず。我未樂何ゝぞ竹邑が上臈を饗ひ。白菓梅家が黄䱉を喰ひ。大木戸の傳飥餅の大ィなることをしらんや。誠にしかり。こや古契の三ゝ娼にあらで。こけの殘笑とも見たまへかし。ときに天明七ッやのひどくめん。

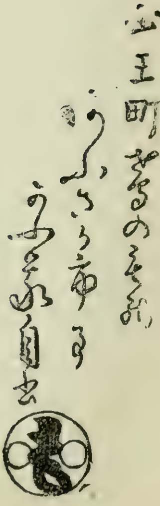
紙花喰ふひつじの年。通人の羽織長き春の日。花川戸羅月が別業。松風亭に毫をとる

作者

京傳誌

序

京傳きはめて三ッの色町にあかるく。今一冊子を著す。是をひらけば。ゆふべけの晝寐の具のをほひとなり。これをたゝめば傾城の酒あたゝむるあふぎともなれり。されど大纏ふりにし代より。竹ばしごくだれる今も。人の口に戸ざしなければ。何某是をうれひざらんや。我はな鳶町抱の身のさちなれ、もしあぎとをならすぼんくらあらば、腕づくをもて是をふせがん、そのこゝろざしを、此書の鼻のさきにむすぶてふ、たなだひのはしにしか。いふ



吉原
北方有佳人

深川
晋謝安携妓遊
東土

品川
上下往来船
北尾政演画

古契三娼

鐘ひとつうれぬ日はなし江戸の春、されば御江戸の繁榮を申は。大引の手赤の助言をするにひとしかるべし。誠に土一升金一升と申せば。塵塚を穿ても金のなる木の實生はあるぞかし。わきて遊里の全盛はいふもさらなり。大門の仕置場たえて。堤に飛びこふ螢も刑鞭の朽たるなるかと思はれ。櫓下の火の見櫓に風見の烏おどろかず。馬を四ッ谷の新宿につなぎ。牛を高輪の南にはなつ。かゝる江戸にすみては。夕に笛をふいて朝に紫の衣を着し、きのふまで櫻あきないし番太郎も。けふは地主の花をさかするぞかし。通町のほかに横町あれば横町の外に新道をひらき。八百八町は深川本所の中にもかぞえたらず。町鑑にもれ江戸繪圖にかきつくしがたき小路〳〵又すくなからず。稻荷新道に白虎湯の看板かけしは所の名にめでし間違なるべく。下踏新道と聞ては燒鮪のにほひなつかしく樂屋新道を通りては見たきものといへる清女のとのはを思ひあたる。藥師新道も壺のゐんによらば朝鮮の弘慶子か住べく。不動新道に繩暖簾かけしはばくもの屋の門、口ならん。猫屋新道に鰹ぶし屋はなけれど。厩新道にみごと厩はあり、瓢

箪新道に鰻屋はあれども鯰のなきこそ残念なれ。觀世新道の童ハ有難の影向やとうたひ。狩野新道の藏の壁に馬を畵しは。勸樂院の雀なるべし。かゝる名高き新道にもあらず。爰にきんご新道といへるハ。金吾中納言の住給ひぬる古跡にもあらず。主馬の小金吾が所縁もなけれど。園ものゝ多くある故にかく名づけしも尤ぞかし。人通りハ常にたえずらうのすげかゑ世帯のやにを通し。鏡とぎハ佛の日〻にかわるをかなしミ。祭文となふ山ぶしのこゝに哀をとゞむれバ。長〻の浪人來りて御子孫も御繁昌と祝す。ちやらつく雪踏のおとハ日なしかしの歩行ふり。駒下踏の虚無僧ハ藏のむだ書よりぬけ出たるかとあやまたる。川越極樂寺本堂建立。たがァ〳〵。かし本屋の風呂敷包ハ片〻へかしぎ。鍋釜ゐかけのへな土入れそばやのうどん箱なり。鷄ハ砂水に羽虫を拾ひ。日間のぺん〳〵艸は犬の屎をつらぬひてはゆ。己とふるき軒のつりしのぶやれたる竹すだれかけしゑんさきに。將棊さしていたるがお手にわと問へば金銀二枚に墨のすりかけ一ッとこたえしハ歩のたらさるなり。勝手よりそばやのかつぎよびかけてぶつかけ二ッとあつらゆるに。女房が盛にし給へとすゝめしハ。殘りたるしやうゆをひや飯へかけてくはんのぞミなるべし。大屋どのゝ娘子が寒弾に目を覺し。向ふの親父が看經にねむけを催す。つねに目のめさへ見ぬ新道の住ひも。園生に植てかくれなき。くれなひとよばれて。きのふま

で川竹をつとめしも　其身の果報とてさる大盡にうけられ。けふはおのじの名をつけてよしとあらためさせ。ゆく〱は内の首尾とゝのえて御新造さまともよばせん心ざしなれと。しばらく爰に圍となりけるに。およしは早や歩行ぶりにも八文字のくせをかくして急に白地めかすれど。また里言葉の折ふし雜もおかしかりき。男女に小僧までつけおかれ一日のわざとては芝居咄と飼猫のせわやかるゝのミ。はち植のまんりやうは愛せど己が身をうけられし代金の事ははやわすれ。淺草の梅ぼりに人仕事してその日をくらすは母。文づかひの間には紋附持てあるきし兄も。泥龜がおこし米見つけし如く。一度にうかミ出。日なしの七口をかたミに殘し去年世をさりし親父まで草葉のかげにかた肌ぬいで鮪のさしミ引寄て茶椀酒あをる身とはなりぬ。日の本は姫氏國とやらんきけとからもやまともととく女の世の中にこそ。此圍の向ふは表に藍にて古文字書たる障子を立。大山石尊の御札にならべて打たる宿札に女中御かミゆひ伸と筆ぶとに記しは。もと深川下モ木場の川並鳶の娘にて。おさなき時はまさきの葉で拵たぴい〱を吹。雛草で嶋田わげこしらへて遊び。ぎし〱なるあしだはいて舩虫のはふうどんやの汁つぎ持て醬油買に行し身の。おやはらからのためとて十七のとし新ン子となりて土橋へ出てより。あたまのうへは日ゞにふえ藍上田の光りも夜ゞあきらかになりて。呉服屋の屋敷通ひをつけの

ぼせにさせ新川の澁染を宿あづけにさする程の全盛。其後じまへとなり仲町へ出てより藝者衆とよばるゝも所の習ひ也。光陰は三間ッ堂の通し矢よりも早く。はや中ゥどしまといふもふるくなれば。又かしをかえて表櫓へ出。はを白くして新造と化てより。額に小じわができ。ばゝあお仲とあだ名され。ばゝあ〳〵とよばるれば己がことゝて返事するもうきつとめぞかし。ゑちご縮のめきゝするにはあらねど。たゞかすりへのミまわりて情なしといはれしも。さすがまきのそげにもあらぬかして。わぐらといふ所に下モ三ッの何某とて。句拾ひしたりうかしのはなつぱりして渡世を送り。あだ名で幕の通つたる男と夫婦のやくそくして。去年の春より務をひき此新道の住ひ。昔は人に結せし身の今は人の髪に浮世をむすぶ世渡り。九尺二間の借家に疊四疊敷て。のこりの二疊はうすべりにてくろめ。越張は三庄太夫の淨留理本にてはり。さる程に哀也かべ一重隣は丸竹のぶつつけ格子張物の戸板に隱て見えねど相州箱根御藥湯。二度入廿四銅四五度入四拾八銅。一ト廻り六十四銅としるせし看板をかけ。四百四病のなをるしかけもひんしの病は請合れず。信濃の一ト季奉公人相手にしての夫婦暮し亭主は金川在で名にふれた長屋門づくりの。大百性の獨息子にて。蕉風の面白くなき誹諧も少しはやり。碁も下手といはるゝ程にはうちて。江戸の流行唄も先此人がさきへ聞出し。稻毛。厚木の。作左エ門天王

丸の。五郎介。なぞハ直下に見くだせしかな川での通もの、女房お品ハ伊豆の大嶋の生れ。新嶋村といふ所に鳴薪あきなふ者の娘なりしが。何故にや十一のとしかな川の宿へ賣られ。いづミやといふうちへ抱られ。實の入ッたとうもろこしの毛ミる様な髪をそつて坊主にされ。ひろ袖の布子にこんのたびはいて。ひぜんかきながら小ぢよくつとめしも。いつしか爰のうちの通り名をついておしよくとなりしが。ふと今の亭主となじミてより。燒蟹喰合ふ中となり。榎堂で取れたなまこのけて置ておまする程の直實ニ。外心ハなかりき。あるとし品川宿の夏坂屋の亭主湯治の歸りがけ、此女郎に見所ありてより、相談極めて品川へのくらがえ。品川の水にミがきあげてから掘だしものとよろこび。野風。すゞしの。村芝がれつにならべて。名も袖うらとあらためられ。九曜の星の合印付らるゝ身となりけれバ。今の亭主ことさら此袖浦が事わすれ兼神奈川より馬で通ひ鳥ハものかわ馬のいなゝくにそのわかれをおしミしがこうしてより。五百石の田地を質入レして。出來秋の勘定合ねバ。おやぢ今はたまりかね。庄屋宿老の耳へ入レて勘當し。在所を追はらわれければ、袖浦も薩摩の何がし山のたれさんに。うけらるべき場所をはづして。まことをたて。其年のくれ年ン明ケて。南ばんばに海苔をとつて渡世する。伯父をおやぶんにして此新ン道の借家も、今ハ袖うらのおく口したる住居なり。女郎ノじミたるハく

せとてむしやうにしわきものなれど、さすが座敷持のはてとてせたいのくりまハしよく。風呂の薪にふすぼりていつしか家のすミ〴〵ちくろミ。棚のはしの蜘も住家をかゆれば。夫婦もはや江戸なれてミゆれど。女房ハ古郷忘じがたきや。一チばん塩二ばん塩とて嶋干魚の目利と。日和見る事の上手なるもおかしかりき。貝寄の吹春の旦より鰯雲の雨催す秋のゆふべまで。貧乏とをつかけくらのミするぞやるせなきせたいなり。されバ人のゆくえと水のながれ程さだめなきハなく。ことさら川竹の身ハなくと笑とに一トとせをおくり。まつとわかるゝとに一日をすごして。いづこいかなる人に身をまかせんもしれず。たゞ出雲の衆議評にまかする事ぞかし。孝〻にうられ不孝にうけ出さるもゑんのあるのが實なるべし。此三ン人のふじん所ハかはれど。おなじ川竹の末葉とて合借家同士の心安さ。折ふしハうしとミし流れの昔をかたり合て暮ぬ。ころハ卯月の半心なしにハやとハれなと。心有人のいひ置しも尤。圍れのおよしハあまり樂すぎて一チ日を暮かね。近所のおさな子かりよせても人ミしりして。こはく丹後の藍縞に小便を置キ土産して歸れバ。せんがたなく悶雨にゆげのたつ手焙引よせて。富士のすそ野ミるやうに灰をならしながら。旦那にねだるべき下タ心袷小袖の模様の案しにせいをつかし。木地ろいろの用だんすにたてかけし三絃とつて　禿だち〽人の末水のながれと身のゆくえ。禿だちから廓

に住ば。たゞいつとなくあけくれて。暦くり出す品さだめ。けふはかねつけ袖とめのもん日〳〵をかぞえてあかす里の花。との子待夜はひさしうて。首尾のなるよのみじかさよ。ふかう成程なれそめ心（おゐひにそわでおもわぬに。そふもゑんなりやしやう事がないぞへといふ。すえの文句は。旦那へきこえてちとすこしゑんりよゆへ。口のうちにてうたひ居る折ふし。むかふの女かみゆひお仲きしじまのあふらでよごれたる袷。かたはだぬいで房は青茶のいあげ。つたのもんの付たぬの子のたすきはづして。長らうのきせろくはえきせろにして。たち出て）

【お仲】モシ お品さんけふはうちでもるすだから。又はなぞふじやァねへかね（トかべごしにいふとなりのくすりゆの女）【お品】ム、わつちも今ちつとはなぞふと思て居たのよ。マァみねへ此ながい日に一チ日臺所もとにかゝつて居るわな。喰物こしらえほどうるさいものはねへよノゥ【お仲】せんてへおめへは奇麗ずきだからよ。そしておしなどんが氣がきゝすぎて居ると。いふもんだから。おめへがてへ〳〵じやァねへよ。モシおむかふのおよしさん。ちつとお咄なせへせんか（トお仲は三人のうちでのおしやべりゆへ。ほう〴〵をよび出す。およしはきゝ付て三味せんを下におき。かうしの所へたち出て）【およし】わたしもけふは休屈して身にもちあつかつておりいす。けふはさんをば梅堀へつかはしいしたから。小僧と久介ばかりさ。（トいふ所へ小僧たばこぼんへ火を入てもちきたる）此子をごらうじいし。ゆふへねぼけてながしへおちて。此様に疵をつけいした【お仲】ヲヤ〳〵あぶねへ。小僧どんきのふの事を。いつつけまうそふか（小ぞうしたを出しながらひつこむ）【およし】けふはお休かへ【お仲】けさいつそしやくがいたうござりやしたから、休みやした。おめへさんもあすはおいゝなさへし。ぜんてへおめへさんにはしのぶが（しのぶとはかこのふつの名なり）よ

〵お似合なさへすよ「およし」みんながそふおつせへすが。わたしはあつちにいゝす時から。手がらが（これもよしはらのかどのふうなり）すきさ「お品」お仲さんはよく廓の風をのみこんだよ。品川なんぞじやァむすび兵庫がはやつたよ。まへどくら田のひめづるといつた女郎しゆが。すきでいつたつけ「お仲」としまの風には。しの字わげ。こしかけ。京ぐる。なぞがいゝふうさ。深川でまへどはやつた。天神むすび。まおとこ本ッ田は。きざな髪よ「およし」稲城むすびは扇屋のおかねさんが。いゝはじめた風ゥさ「お品」およしさんなぞは品川といふ所は。おしんなさるめへね「およし」ぞんしいせんよ。道中ゥ双六で見たばかりさ。それでも湯治から歸た客人ンに聞イしたが。氣色のいゝ處だとねへ「お品」先高輪の茶屋からして。新かとく中かとく一チ力七チ力なぞと。他所にない家名がござりやす「およし」石橋萬とやらは。留守居しゆの咄で聞イした「お品」そして女郎しゆの名に三ッ字名の中に。おの字名がござりやす。六七年跡はいゝ女郎しゆがそろつてござりやした。さど屋でつき出しのたいそふであつたは。榮山ッさ藏田でひな菊。りよ。松坂にはいゝ女郎が揃てをりやした。柏屋で。なには。花まち。津の國で。豐山。なゝえ。げいしやでは新内で鶴賀がはやりやした。河東は秀彌といふのひとりさ。哥に荻江惣介といふがありやした。高輪には壽樂さんが坐本で。おどり子がだいぶござりやした。

義太夫で春治と云がいゝ浄るりさ。ぜんてへ宿のげい者ハ高輪へゆかす。高輪のげいしやハ宿へ来ぬといふが法さ。げいしやをよぶと新造がひとりづゝつきやす。男げいしやハ明朝坐料をとりにまわりやす。引ヶをとられるもんだから。銭でうけとるのさ。それだからどんすやびらうどで。いきなさいふをこしらへて。自身にとりにまわりやす。人にとりにやつてもよさそうなものだが。そうするとしさいらしいなぞといつてやかましい所さ。女郎も今ハうつりかはりやした。今でハ新松坂の。此春。其君。佐渡屋で。町づる。あやぎぬ。村田で。その哥。ましてる。大松坂で。其朝。野の芝。新叶で。三ッ花。鳰瀧ときわ屋ノ。から哥。梅崎。なぞがきゝものさ。はやる女郎ハ初くわいニうらやくそくをさせやす。新造がふたり付て晝夜さ。もの日もそふさ。わきとちがつて若者の祝義も三ッくわい目さ。そしてたれが御仕廻誰と下タへ。その女郎の名を書てかげミせへはりやす。それを仕廻札といゝやす。ミせをおもてミせといゝやす。どこのうちもミな三人つゝさだまりでミせへ出やす。それをミせばんと云やす。五ッにかはるのさ。此ことを正めんをはるともいひやす。ミせばんでないものハミな内ミせにおりやす。お見たてといふとミんなかげ見せへならびやす。よしハらハ中ヵ座といつて。まん中に居るがいゝ女郎しゆだそうたが。品川じやァ両方のはしへすハるがいゝ女郎さ。見とうしの事を

濱といひやす。穴ぐらの様に下タにある座敷を下タ家といひやす。天王のじぶんがにぎやかさ。六月の七日から十九日まで〻ござりやす。そして燈籠が出やす。廿六夜ハ大もの日さ。妙國寺の仁王さん岸行寺のぢうやなぞハべつしてにぎやかさ。恵美子構をはでにする所さ。大見せの若ィ者ハ橋向へあそひに行やす。よしハらなら川岸へ行クといふものさ「お仲」つる吉といつた新内のげい者ハとこに今ハおりやすへ「お品」やつぱり村田屋のむかふに居やす。モシそして旦那やかミさんの居る所を。お部屋と申やす「およし」ヲヤよしハらじやァ。ないしやうといひすよ「お品」ほかに客のあるのをまわしといひやす「およし」それもよしハらじやァ。名代のきやく人ンといひすよ「お仲」深川なんぞじやァそんな手おもい事ハねへが。よひどまりを付たきやくのくる間にっぬすミといふをうりやす「お品」ム、はてね。品川の法でなじミのきやくがほかへかくれて行のをしるとその先キの女郎の所へ。臺の物をおくりやす「およし」よしいらしや。そふいふときハ。つけとゞけのふミと云をやりいすョ「お仲」深川じやァなじミ茶屋へかくして。外の茶やへ行てその事をけどられると。ちきにその茶屋から先へしらせやす。そふするとくわしなぞを女かうちの娘がもつてくるのさ。そふすると跡がむつかしうこざりやすまたいろ客があつて子ともやから。茶屋へあの客へハだされぬなぞといつてやかましい

と。そのきやくが名をかえて。外のちや屋であふ事がありやす。しれると大かふりさ「お品」品川はおとまりの有ときがなんきさ。今じやァほう〳〵の亭主たちが。茶をすることがはやるそうさ「およし」まへど美月さんや萬千さん。賀達さんなんぞが。くら前をおつき合なんすじぶんは。よくよしはらへきなんしたよ「お品」そのじぶんは品川も。さかりさ「お仲」ふか川じやァかゝえをしてやるといふがきやくのはできさ。廓ではいはゞ新造を出スといふやうなものさ。そしてしかけやなにかのさミしいことを。黄楊だのといゝやす。是は都合のわるいときさ。あたまのものもミんなまげてしまつてつけの櫛をちよいとさしてゐたり。何かするから。それが通りになつて。つふりのものでもわるいかしかけがさミしいと。このごろはとんだつけさなどゝいひやす。きやくが茶屋のおんなにまへだれなとを出しやす。しん子をだすにももん所や名をそめたまへだれをくばりやす。春子ども屋から抱にわたすしかけは小袖二ッヅゝさ。繻絆を付てわたすうちもござりやす。そのあとはミんなてん〴〵のきりやうさ。それだからはたらきのねへ子は。下帯なんぞも下タのほうばかり三尺あたらしいのをとりかえて。きざなことなんぞもするのさ。山びらきは三月廿一日から廿七日まででさ。八まんさまのまつりは八月の十四日十五日さ。十四日は舟まつりといつて。木場を舟て御輿がわたりやす。それはなぜといふ

に。木場ハ橋がせまいから御輿がとをらぬのさ。一ノ鳥居ハ代ゝ木場からおさまりやす。まへと木場ゟ概家臺と云まつりが出やした、わつちらが子どものじぶんハ。恵びすのミやのこつちらに、そバきり稲荷といふがはやりやした。そのじぶんハしほばまがはつかふしやした。今ハすさきのざるそばも名ばかりさ、ふお棚い石やき豆腐ハ。お膳じやうと岡釣のたて場になりやした。いまじやァ舛屋がはつかふさ。いまの惣介さんがりかうものさ。かミさんハおさち、むすめハおゑつといひやす「およし」祝あミさんハゐんきよしやしたかへ。一ト節ぎりとやら云ふえをふきなんすそへ「お仲」土はしのげいしやじやァ。春吉。小吉。三喜藏　お見さなぞかうつたものさ。おとこげいしやでハ千蝶がふるいものさ。新次。五介。清二喜六。なぞもとをつたものさ。ふた見やといふ子ども屋から。どれもいゝ子が出やす「およし」ひなまつとやらも。そこから出たじやァねへかね「お仲」土ばしの子ども屋ハ、ミんないゑきといふところになりやす。仲町の。梅むら。生松。山本。がいゝふしんに出來やした。をり〳〵よく家名のかはる所さ。梅もとのていしゆハあたま七といつていろしさ。おもてやぐらにも地がござりやしたつけ。今居る所もてまへの地めんさ。今で口きゝハ子ども屋のうちできま屋七右ヱ門。六十ッたんといふかし元。白ロ舟の清七なんぞさ。仲町のはおりハ。大きち。八十吉。今きち。

乙竒ハ廓へいきやした。仲きち。だん子。ぢんす。太夫で。八重太夫。三吉。伊八。千てふ。長治。ぜん次。喜三。つる太夫。なんぞさ。【およし】磯八ハよしハらへまいりしたね。去年ッの悪びすこう二。長七いせ屋の筒井さんの。きやく人のおもひ付て。介六を磯八がしいしたつけ。そのときうちのむすめが。ほめことばをしいした【お仲】おもてやぐらへ出た路考かめがはまむら屋ハあかるいものさ。さかい丁の安五郎が半四郎と。ひこべい。なんぞてやると。ごふてきさ（ひこハいとハ。かけあいの事なり。これいうのとなりくせり）二ッやぐらでも。ばゝァおたきなンぞが。とをつたものさ。ふる石じやァ今ハ與介がはやりやす。いゝ子どもがあるからさ。あすこはふせ玉さ。はやる子は四ッあけにいつちやァござりやせん。新石場じやァ金子屋かにぎやかさ。けいしやれ。奴嶋八。さミせんか文てふ。哥で五郎治。三味せんが宇八。はおりで。さよ吉。むめ吉。さ。佃四けんもまたできたそうさ。まへど仲丁へおくめといつて出た子が。やく年ンで廓へいつて。大かな屋とやらの。粂川とやらいひやしたか。およしさんしつてお出なるかへ【およし】その女郎しゆハたしか。二丁めの新見せのきつかう屋におりひすよ。わつちもちつとよしハらのはなしをしたふすが。ことし總籬といふしやれ本に。書盡しひしたから。いふハむだでおすよ。このぢう旦那がもつてきておさいしたから。よんで見いしたが。すつぱり松葉屋ノせかいさ。女郎衆の

くせまでかきひした【お品】品川で宿のうちへ出る。かごかきハ横目をするがやくさ。かごかきにもいろ〳〵ふてうがあるそふさ。またげん。正六。なんぞといふがありやす【およし】よしハらのかごやにもふてうがおすよ。茶屋なぞへいつテきいておりひすに。ふりまし。をもたまし。ミちまし。あぶれ。なぞといひす。五とくといふハ。夜かごの三てふならんで行ときいふふてうさ【お仲】きをつけてごらうじやし。深川通ハ。よしハらきやくとちがつて。ちよきにのりやうがちがいやす。ともの方をむいて。さかさまにのりやす。これハ船頭とはなしをするに勝手がいゝからさ。いそぐ時はふたりせんどうにするのさ。深川にも三十年ほどまへハ。米蝶。べんてんおかん。木綿屋おきち。なぞと云名とりの床げいしやがあつて。そのじぶんハをしなへて仲丁のことを。八まん丁といつたそふさ。ふるい深川通ハしつて居る事さ。【お品】お仲さんもじ五郎ハどふしたねへ【お仲】きつねが付てから死やした。深川じあァおとこげいしやがわり合で。八まんさまへ護摩經あげやす。仲丁や土ばしの子どもハ。山からかよひ帳で喰物をとりよせるのさ。地めへの子どもハ十二もんめのうちを。茶屋へ六もんめとられて。子ども屋へ腮を（あごとへぞう 川のことなり）三百二十四文とられやす。そして人をだました事を。とうがらしを。くハせてやつたと申やす。久ものゝけつちやくせぬ事を。ふがきれねへといゝやす。こいらハ櫛こ

のめきゝから出たことばさ。今じやァ堤側や六軒でもいふそうさ。八まんの鐘ハ茶屋から。やくでかわりばんに。つきに出やす【お品】品川でまつざか屋の野風といつた女郎しゆが。わかつたものさ。そのしぶん芝に介といつて。けしからず手のあるきやくがあつて。その人の友だちが。まつざか屋へなじんできやしたが。その介といふ人ハさのミいろおとこでもねへが。どこへいつて一チ坐しても。とかくひとりもてるそふさ。それだから折ふしハかうまんもいふそふさ。それを友だちがにくがつて。どふぞ一チ度たれぞにふらせて。此末かうまんをいはせぬやうに。してやりたいと云ふ咄を。野風が聞てゐて。わたしがところへつれてきなせへし。なもひれふつて見せやしやうと。ふとうけやつたから。さいわいにして。二三人ですゝめて。つれてきたのさ。先さかづきがひととをりすむと。そのきやくがつね〴〵ハげこたそうたが。どふ云氣か。茶わんでさけをはじめて。野風にさしたのさ。野かぜもかねてたくんで居る事だから。たべやせんといつたばかり。うけつけねへでてらしたのを。むりにしいるとつて。ついそのきやくが。銚子をひつくりかへして。野風が着物へぐつつりさけをかけたのさ。きりたての八丈のむくもうちかけも。黑びらうどの帯も。さけだらけになつたが。さすが野風だから。へい氣ですつトたつて。又きらびやかにきかえて來て。そふかふするうち。床もおさまつて。一

チ坐のきやくハ。いよ〳〵こんやハ。とんだめにあふだらうと。となりのまわし坐敷に。聞てゐると。思の外野風が。大ぼれにほれたやうすで。とんだもてるから。一チざの客があつくなつて。野風をよび出して。やくそくがちがつたと。うらミをいつたのさ。野かせが云にやァ。なるほどあの客人ハ。女郎かひにミやうをえた、人でござりやす。おまへがたのさそひやうで。さとつたかして。さつきざしきで。さけをわたしにかけたのハ。そゝうのふりでしたきやうげんでござりやす。それハなぜと云に。こんやわたしに振れても。あの女郎ハとんだけちな女郎だ。をれがそゝうでかけたから。そのゐしゆにふつたのだ。酒をかけねへと。ふられやァしねへと。ぬけ句にするつもりでござりやす。わたしもまた。此宿でハ。まつざかのたれとをり名を、付られたふしやうにハ。名がだいしだから。手だとしりながらどふも今夜ハふられやせん。それだからこんやハぐつとほれたかほで。うらやくそくをしてかへしやす。そふしてうらにきたとき。おもしろくふつて。ミせやしやうといつたから。ミんな野風がはつめいを。かんしんしてそのあさハかへつたのさ。それからやくそくの日に。その介といふきやくのところへ。そのいちざがいつて。けふハぜひあゆびやれとすゝめたら。そのときその人のいふにハ。こんやうらに行とあの女郎ハ。たしかにふるから行まいと。見ぬいたやうにいつたとさ。そのこと

を野かせが聞て。その手にほんとうにほれてきて。たび〳〵ふミをやつてよひたがりやしたが。とんとそののちハきやしなんだ。【お仲】深川に黒さんといふきやくがあつたがね。とんだじやうなしで。そのくせぶ男さ。仇名をびわえうとうとも。能のめんともいひやした。あんまり情なしがとをつて。だれもとりとめて出たものがねへのさ。ふつとお鷹といふ子が。わつちがよんで見せやうといつて。黒さんに出たものさ。そふするとお蝶といふ子も。よんで見せやうといつて出たのさ。それをおたかが聞て。ぐつとしらぬかほでおてふにいふにやァ。モシわつちやおてふさんおめへと。きやうでへぶんになりたふごぜへすと。いひ出したものさ。おてふがいふにやァ。わつちやァどふもおめへと。きやうでへぶんになる。わけハごぜへせんとはねたのさ。又おたかゞいふにやァ。そのわけといふハ黒さんの事でごぜへやす。ぬしハわたしがせんでごぜへやす。それをうつくしくおめへに。黒さんをかしてをくから。見事によびとげねへ。そふするにハ兄弟ぶんのよしミがなくつちやァ。かす事もならねへから。さつきのやうにいふのさと。おたかもさるものだから。おてふをしばりにかけて。たか見でけんぶつをしやうといふ。あくしんさ。それからおてふハ黒さんをよんで。いふにやァ。おめへといふものァ。わからねへものでごぜへす。わつちやァおたかさんを。よびなつた事ハしりやしねへが。どふもこふな

つた日にやァ、此うへおたかさんをよびなつちやァ。わつちがたちやしねへから。おたかさんをきれなせへしときめたのさ。黒さんがいふにやァ。どふもてめへにやァ。忠(ちう)といふきざがついて居るから。いやだといふから。なるほど忠さんと云きやくもごぜへすさ。ごぜへすがそれが氣(き)にくわざァ。忠さんをきれやしやうといふうち。八まんさんのをひだしがなるから。ぐつとせきこんで。なんでもあさなをしにして居なせへし。このかたをつけて見せやしやうと。いつて。その忠と云きやくのところへ。手がミをやつて。けふはなしてへ事がちつとあるからこいといつてやつたから。忠がきたといふやつさ。それから忠ハはおりを二三ッめへ。かつたり何かしてさわいで居ると。おてふがしやくがいたいとかなんとかいつてたつたものだから。忠がぐつとかんしやくで。これへなんのこつたへ。用があるのしまつてゐるのとよびによこしやァがつて。をいて。しやくがいてへの米がたけへのと。とんだやつしやァねへかと云と。おてふハこゝがかミすりといふものだから。モシ忠さんあんまりてへそふな。こハいろをつけへなさんた。いんばぬまじやァねへが。あとでうまるめへによとつよミをいふ。忠ハなを〳〵あつくなつて。ム、そんならうまるめへとハ。きれると云事か。これへわれときれたといつてな。他所(たしよ)いきにきせるをもたねへほども。ふしゆうじやァねへわへと。いひつのつタから。おてふハさ

いわいにしてつきだしてしまつたのさ。それが忠ハいろおとこ。黒さんハぶおとこだが。おたかゞめへの。たてひきばつかりでそふしたのさ。それだから深川といふ所ハ。客人のあそびにでへぶあんばいのある所さ。いろ男にかえても金にかえても。子どもどうしのたてひきを。おもにする所さ【およし】よしハらでも今ハとをり名を付て。たいそうにして居る女郎衆が。ミんな子どもさ。そしておしよくの女郎と二まいめの女郎とハ。どこ うちでも中ヵのわるいものさ。今ではんじやうなのハ。ひなづるさんきしやうのいゝのハすがハらさんさ。まへど手をとつた女郎衆ハ。松賀屋の。はつ嶋さんさ。いろきやくがくら前からまいりしたが。あるときくら前のきやくのやくそくのばんに。かねてためになるさる大盡の客がまいりしたのさ。くら前のほうへハ心やすだてをして。その大盡をざしきへ入レたものさ。河東ぶしなぞでしやれて居る所へ。くら前のがきて見た所が。やくそくだに。坐敷にきやくがあるから。ぐつと大がんしやくで。ざしきへふんごんで。その大じんをさん〴〵あつこうしたのさ。大じんもやくそくで居た事を。いはずにざしきへ入レられたものだから。まわしかたややり手をよんで。おほそふどうになりひしたが。はつ島さんハぐつとへい氣で。その大じんのまへゝいつて。モシヒこんやハぜんてへくら前のきやく人の。やくそくでおりひしたが。くるまでもまづざしきに。おきまうそふよ

おもひして。ざしきへ入ﾚまふしひしたが。やくそくの事をいひしないのハ。わつちがわるふをした。ぬしもあのきやく人に。あつこうされなんしてハ。たちひすまいから。これでぬしのかほゝたつておくんなんしと。ゆびをきりひしたのさ。そのひやうしにゆびがどこへかとんで。見えなくなつたのさ。これでハきがすミひせんと。又ひだりのゆびをきらうとする所を。しんぞうやたいこもちがよつて。もふそれで心ン中ゥハ見えやしたと。やう〳〵とめひしたのさ。それでその大じんもとくしんして。さかんになつてまいりしたが。それでハくら前のきやくが。はらをたつてきそうもないものだに。是もやつぱり。そのまへよりもけつくしげ〳〵にきひして。それほどのそふどふもしづまつたのさ。どつちかひとりハしくじるばだが。なるほど手のある女郎しゆだ。大じんのきげんのなをつたハ。きこえたが。くら前のがよくだまつてくると。ひやうばんしひした。あとできけばゆびを切つたとき。なくなつたふりでしんぞうといひ合て。のゆびをかくして。藏前のきやくの所へもたせてやりひしたとさ。はつ嶋さんがうけられていきなんすとき。ぬしのくちからはじめてあかしておはなしなんした。それでわかつたのさ。ツヤさんかはやかつたの下女「さん」たゞ今かへりました「お仲」ホンニもふあぶら屋がきた。もふ日がくれるそふだ「お品」わたしどものうちてももふかへるたらう。およながのした

ぐでもしやしやう

○女といへる文字を三ッ書て姦とよむもむべなるかな。予ひとゝせ池魚のわざはひにあひて。此新道にかり居せしとき。此三人の物がたりヲきゝはべりしを。今そのまゝにこゝにしるしぬ

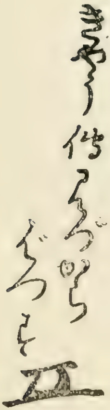
作者　山東京傳

閲　同　けいこう

古契三娼大尾

〽きゞすなくのべがねのきせるハ。はい吹をたゝいて。かんしやくのつけびやうしとなり。おもひにハどうしたはなのさくらばりも。くびをながくして名代のきやくのことし今はりわけし三ツのさと。すいつけたばこのすいなるも。あげぎせるのやにこきも。とをるととをらざるたがひハ。たゞくわんぜよりの一すじに。たのむハほかにないぞへ

テツンシヤン



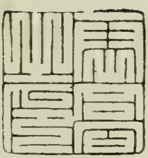
通言總雜

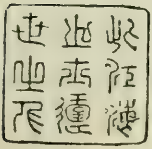
通言總籬叙

彦國佳言を吐こと。鋸木屑の如く霏々として絶ず。粤に京傳靑樓の通言を酸痟に呑こんで。頓に茶表紙の一冊を吐。是鉄拐が仙術にあらず放下師の小刀にあらず。閣之象牃中に顯れ聽之言文面にとゞまる。闇に引出す牛臺の騂廷り。中街に駻る駒下踏の音耳にちかし。實にも籬といへば。朝顏の泣腫たる淸楊に昨夜の疳積を殘し。二十七明の長を慷慨てハ花の蔫を愁ず。逢夜の短を恨望てハ穠久しき花を羨。旦〱の笑顏晩〱の泣皃も。色無垢の衣領にさし入たる容に。皷子花の閃屍も壺盧の色白なるも纏ひ咲。總籬ハ善花街に通じて然も花實相對眞に膓

を斷。我かの籬の下に店三弦の一チを打て。番新の萬を知るに至ずといへども。二と三ンの緒を肇。猿人郷と共に京傳を愛の一曲を唱て。糸卷をチトひねること爾

文きやう自書





自序

我嘗いへること有。青樓は我爲の雪隱なりと。夫如何なれば。持たが病の腸痛に腦金屎をひらんが爲。尻をぼつ立て。此鄽に通ふこと繁故也。若貧客我屎を喰ば。蕎黄金の蟯蛆となるらん。一日例の長屎に退屈の餘り。此妄作書をなしてかた屎の堅をして。びり屎のずるきに和らげ。世に其屎の撒樣を傳ふ。通客といふとも我胯を覗ずして。何ぞ尻の穴の廣ことをしらん。吁屎が悃にあらずや。于時天明七年丁未孟陬

山東屋のひとりむすこ

京ばしの傳述

通言總籬凡例

○此書ハ論語ニ所謂。損者三友ヲ以テ大意トス。蓋總籬ト題セルハ。流行ニ後タル古句ノ。雜无ヲ以ッテ也リ

○艶治郎ハ青樓ノ通句也。予去々春江戸生艶氣樺焼ト云。冊子ヲ著シテヨリ。已恍惚ナル客ヲ指テ云爾。因テ以ッテ此書ニ假テ名トス。氣之介志菴共ニ彼冊子ニ出ル所ノ名也リ

○姝妓及雛妓少妓ノ言。其儘ヲ記ガ故ニ。詑ヲ不ㇾ改假名違ヲ正ザルハ。其音ノ訛ヲ知シメンガ爲ナリ

樓上奇談　吉原楊枝

京傳作

全一冊

來春出版

通言總籬

金の魚虎をにらんで。水道の水を。産湯に浴て。御膝元に生れ出てハ。拝搗の米を喰て。乳母日傘にて長。金銀の細螺はじきに。陸奥山も卑とし吉原本田の髪の間に。安房上總も近しとす。隅水の鮊も中落を喰ず本町の角屋敷をなげて大門を打ハ。人の心の花にぞありける。江戸ッ子の根生骨。萬事に渡る日本ばしの眞中から。ふりさけミれバ神風や。伊勢町の新道に奉公人口入所といふ。簡板のすゞむこふハ。いつでも黒格子に。らんのはち植の出してあるハ。芝蘭の友を旦那と稱す。江戸がミの。北里喜之介か住居。鮑魚のいちぐらに同じ門口。くだすだれの外トに。仇氣屋のひとりむすこ【ゑん次郎】黄の無地八丈に。けんぼうにてとめがたの小紋をおいた上着。三ツついに嶋かんとうの下着。こんちりめんからせんしぼりのしゆばん。下着ハミな黒なゝこのうらゑり。うらハ花色ちりめんがすそ廻し。胴うらハ白羽二重。身はゞひろき仕立。あわせばおりくハの無地八丈。まへ下りながき仕立。五丁ひもゝあやまるとかいつて黒のひらうちのちよんがけ。帯ハおなん戸茶どんすの小もようづきんをゑりまきにして。中の町ぞうり。八わたぐろのくつたび。花かいらぎのわきざし。かミハよし原ほんだ。すハ町のおやじがぬいたひたい。二日めのさかやき おしやうさきへはいらつせへ ゑん二郎かたへ出いりのたいこいしや【わる井しあん】くろちりめんの小袖。おなんど茶なゝこのはおり。酒さいにはなのさきあかく。ちかめなり あさがほのあふぎにてつくだすたれかたむけ 喜のぼうお宿か。ゑんさんがきさしつたよ トうちへはいりミれバ。あがりはなにたばこぼうがさしづをうけながら。あたちやがはげた石子に。ゑん所のついていろきれではんゑりをかけたやつをきた。小女に しもやけだらけな手で。たゝきつちのながしのうへで

釣ちんにゆたあびせている【小女】こうしているもんだよぢつとしていやァレごろうじまし。いつそうれしがります女房【おちセ】つやなしうへだ。あぶらじみた小そで。くろなゝこのはゞのひろいはんゑりこびちやなゝこの帯。わきのほうへまわし。まへだれのかわりに。さらさのふろしきをおびへはさミ。かミへいなぎむすび。おはぐろをおとしてしらは。これへばんに。おはぐろをつけやうといふしたく也。まだ左エ門といふ字のつかぬかゝあ。此女房もとへ松ばやのさるおいらんのせわしんぞうなりしがねんあけのゝち。かねて久しいいろきやくにて。喜之介が女ぼうになりし也かミの毛のうすい所と。ミゝのわきのまくらだこにて。あらそへれず。まだ里の言葉がやまず　そのまんま二かいの日あたりへつれていつてはさセや。ヲヤ志庵さんよくおいでなんしたね。ゑんさんかへ。此間ハお早〻でござりやした。うちでござりやすれ　ト仕かけたしごとをかたよせる

【ゑん】こゝのうちのながしハ松はやの湯どのといふもんだの【しあん】本町の棚したもありやす　喜之助ハ中じきりのはしらによりかゝつていて。さゝせんたしのびごまてひいている。なりハつむぎじまのそで口のちときた〳〵うらゑりの小そで。もへぎさなだの。下タじめを帯にしている三味せんを下に置【喜之介】これハおそろいなすつて。さあこちらへ【ゑん】てへぶねむそふなかほの【しあん】きやくをにがしたしんぞうといふかほだぜ。丁子屋だと帳場てしかられたといふかほだ【喜の】ゆふべハつまさんの茶ばんで。舛屋へめへりやした。けさ八ッにけへりやして今をきやした【ゑん】つまさんハやつぱり。深川のせかいかの【しあん】おみなもごふてきなやつだよ。このごろもどこのか番頭にかゝへを仕て。もらつたそふだ　深川にてかゝへたしてもろふハ吉原でしんぞうを出すにひとしきことなり【喜の】此間も御供て尾多喜やの。およふ。五介。靏太夫。長二。いんす、仲吉。なぞといふ。うぞうむぞうを引つれて。むこふじまがこざりやした【ゑん】ときやうさんや。ぶんきやうさんと。ちがつて靑ろうへハ

とんとござらねへの。はいかいと義太夫ハきついもんだそうだの　トいゝながらこしから。ゑち川屋が化の、あんぺらの。内ぬひ りうさのねつけの。ついたさげのたばこ入からきせろを出し。すい付る女房へせんとくの火ばちにかゝつているひろしまやくわんのちやをついで両人へ出す。喜の介ハよりかゝつている。たハらや宗理がかいた きくのはん戸だから、豆のはいつたこんへいとうをいだし【喜の】これでもあがりやし　トゑん二郎がまへゝをく　【しあん】ゑんさんが酒をのまつしやらねへれ。玉にきずだよ【喜の】めいよう今の通ハ下戸さ　トうれしがらせる　しあんさんにやあいゝものがある。きのふ長崎屋のこはんが所から隅田川をもらつた。おちセかんをさせや、しかしさかなが何も。あんめへす【しあん】かん見まいのこぶ巻ハなしか。あのなべのハなんだ【ゑん】よくげひをいふやつだ【おちセ】おいしいものでハなしさ。けさのおつけでござりやすハ【しあん】ずつと立てなべのふたをあけ　おきやあがれ。とうふ汁(じる)がかじけている。きつい松葉屋の晦日どうふだこいつァ。つめたくちやいかぬやつだ【喜の】おうたがひハ。はれやしたか【しあん】うなぎをとりにやりハ【ゑん】どうだろうといふ事かもふいぢめるの　トきんからかわのまへさげから。なんりやうを一片ほうりいだす　【喜の】青か白か【しあん】やつぱりすぢを。長ヵやぎの事さ　あをゝ白。すじつとなうたぎの名なりうなぎくひのつう言也。女ぼうへ小女にいゝつけてほりへてうへとりにやる　【おちセ】早くよ【喜の】ときにゑんさん京町の新造けへの色事も見だしになつたじやあござりやせんか【ゑん】それでふさいでいるのさ。二かいのうちに。こゝのわりひ女郎があるからよ　ト化よしやがはつた青きんとやきがねのこぬのめぞうがんかの。のべのきせろでむねをたゝいて見せる　【しあん】ぜんてへ万ざくにしよささをつけて。とつしが相手にするから。は

山東けいこう画

いらねへわな（トちやうすやうにうれしがらせる）【ゑん】けさもおわりやの男がみを持てきたがけいせいも内せうとたて引になつて引込ているそうよ。何かあはれなくさぶえ入のうしろてよまうといふ。ふミだつけ（トふたへづろの两口の引かけのかミ入レから。やけばのゑづをミるやうにミよしへべにずりの半切へ書た。みをほうり出す。喜の介へとつてひらき。として書た所からさきをよんでミる。何かいろ〳〵なてんとりを書。しよせん中の丁でのあい引もきをつけるだろうしわたくしめたて引だから。江戸丁のかたをつけて。いつそはれてきてくれろと云ぶんてい。末にぜひ〳〵といふ事が十斗かいてある。じつへばんしんとのなれ合て。ゑん二郎をいろじかけでよぶきやうげん此ごろはやる手也と。さとつていれバきのすけハふとい女郎とおもひよんでしまひ）【喜の】出戀のすへぜん何かありがてへ句ね。あの女郎ハたしかにはんごろしに仕て置なさると。狄をしやすにへ【ゑん】やりてがいふにやあ。はれてお出なさるとも二かいを御ゑんりよなさるともと。かわ羽をりのひもをみるよふに。两方へくゞらせていふからどふもならねへ。こふなつてみれバふびんだよきついことをきりかけもしめへから。江戸町のかたを付て。いつそをもてむいていつてやらうかとも思ふよ【喜の】そふなされば。きついくどくさ【しあん】戀つれてむまい所。ア、いろおとこにハ何がなる（トそばにある三味せんをとつてつめのさきでめりやすをひく）哥〽水無月も流れハたへぬ浮世のきしに夜舟こぐてふふり袖のかほにまがきのあとつくほどに。はてなうきなのてならひもくさめ〳〵のやるせなく。【おちセ】モシそのめりやすが此ころひろめのあつたすがほとやらかへ。そのあとハどふだへ【しあん】泰琳がミやうにふしをつけたよ　哥〽みのさきめの口べにもほかへうつさぬ心とハ。神〴〵さんもどこやらも。とふにせうちであろけれど合

万ほれたしやうこをいつみしよと思やかたきしわすられぬわすられぬ身ハおもひいだしもせぬほどに。思ふているぞへわしやほんにさつしてくだんせわしが名におのじを付ていつかさて。つくろひのなき夏のふじ【喜の】京傳がいつぱいに。うがつた文句だ【ゑん】かなやの白妙がついぜんのめりやすハ何ヶとかいつたつけの【しあん】それハなつ衣さ【おちセ】花ぐもりハ四代目の瀬川さんの。ついぜんだそうだねへ【ゑん】まへの瀬川ハどふしたの【喜の】かんのんの地内にいやしたかかこわれたそふでごさりやす【おちセ】玉の井さんハやつぱり仲町にいるかねあの子もふしやわせだねへ【しあん】そふだそうさ。ぢめへだそうだから。そふおふな所をミたてに出て居るのだろう。このぢういくよしのおいさに。ことづけをして。よこしたつけ【おちセ】ぜんてへうわきから。をこつた事さ【しあん】おめへのやうに喜のさんにじやうをつくした人も。あるにノゥ【おちセ】ヲヤばからしい【しあん】よしハらいらいばからしいを。ひさしぶりてきいたわへ トわらふ。女房ハはごいたの茶ほうじて。しあんをしたゝかたゝく。此うちゑん二郎ハ京町のいろ事のうぬぼればなし喜之介ハウ、ありがてへウ、そうさと。いゝかげんにあいさつしている所へ下女へらなぎをかつてくる。にようぼうハかんをする【喜の】御心安ひからそのまんまだしや【おちセ】ヲヤそれでも【ゑん】いゝわなく〵 トいふゆへはかまのないちろりのまゝいだす【しあん】こいつァ着ながしのちろりだの。しやれたもんだ 此あいださけになりうなぎもあらかたたいらげてしまふ【喜の】ホンニ住よし町の川治から。茶入を持てきておきやした。ころう

じやし（ト戸棚から茶入を二ツだしてミせろ。土いろ糸ぎりくすりのかゝりあんばいをミて）【ゑん】こいつあ京がまだハへ。新兵衛か万右ヱ門だろう金一枚くらいかの。こつちらハいつかふなものだとんだねき物だ。此ぢう數奇屋川岸の伏甚から瀨との玉川と灘波を見せによこしたが。尤遠州の書付があつたが。四十匁だいだ目がでるの袋ハ白地の小ぼたん。一ッハ權太夫だつけどれもはくさきハよかつた【しあん】此間橋場で江月のよこ一行をミやした一片の雲自西自東といふ語さ。ひやうぐもようござりやした。天地ハやつぱりふとじけだか。風帶一文字ハあんらくあんさ【ゑん】をれにゆづッてくれめへかの【しあん】はなしやすめへよ【喜の】角町の惣六がかうらいの御所丸さんかいをもつていやしたつけ。品川の万千がもつている松花堂のほていハとんだ出來のいゝものさ。萬千といへばモシまだおめへさんにはなさねへが。柳郊さんか村田屋て大いろごとさ。何とかいふ女郎でござりやした。此比ハ村田屋の部屋ハ扇屋といふもので。萬千もおつまもうたをよミやす【ゑん】あそこのその哥といふ女郎をおれがかつたよ新宿からこした橋本ハ又あつちへかへつたそふだの。おいろといふいゝ女郎があつたつけ。妙國寺の仁王にてふちんがあがつていたつけ【喜の】たゞあさのけしきばかりの所だよ。問屋ばて馬のいなゝくにハ。あやまるて【ゑん】大木戸の石かきにせきだの金のはさんであるのハ。なんだの【しあん】あれハ何ンのかぐわんを

かけるのさ「ゑん」おいられあの土地におひてれふ通だよ。ちつとたびもしてみやうす。とうじにいつた時賀達か所へ。いつたまゝだ「喜の」御ぞんじなくつてもな所さ「しあん」しかしいてきだもきさありだよ。吉原ならつけとゞけのみをやろうといふ所へ。臺の物をおくりやす「喜の」いやもふ臺の物がきちやあおゝさわぎさ。こわがるものれお鷹匠の御留いやがるものれ五ッがれりに正めんをはるの。にぎやかなのれゑびすこうさ。みこしをこしらへてにかい中をかづく内もあり。めしたき男をゑびすにこしらへて。はやしたてゝありくうちもありやす。ぜんてへしろうと芝居のはやる所さ「おちセ」モシまへかたれ松ばやでも度々狂言がござりやしたねへ「しあん」丸ゑびやなぞにもよくあつたよ「おちセ」ぼくがさんが工藤で、玉屋の山三さんが五郎で。大門の四郎兵衛さんがすけ成で。おかしい事がござりやしたつけ「喜の」狂言といへば宗十郎松が六けんのおさくをされて。ふる石のとよくらへこつていくそうさ。おかしいじやあねへかチエ「ゑん」あいつが中洲てめつかちの地ごくをかつたときほど。おかしいことれなかつた「おちセ」モシてへぶきなつくさいよ。さんやそこじやあねへか「ゑん」ほんに芝居のゆきがらうそくへふつたといふにはいた。それおしやうぬしのはをりだそふだ「しあん」さあ／＼こいッァ大されぎだかゝあにしかられることを仕だした「喜の」もちつとの事で

もろせをたのミにいく所だ「しあん」しやれ所でハチエハな「ゑん」やけぼこりでいゝのさ
此間女房の手りやうりにて。たまごのあつやきにわさびじやうゆ。古なすにもり口のかくや梅ざけのあんばい。ゑん二郎しあんへ茶つけをいだす「ゑん」なるほどおしやうハよくくふぞ。ぬ
す人にハ極つた「しあん」もし松ばやじやあ小梅の青いのを出すノゥ「喜の」あれハつけめさ。
扇屋のせんべいの。丁子やのてうあしのぜん。四ッ目屋のかすていら。竹屋の水貝(みづがい)しづか玉屋
のゑましむぎ。こいらハつけめさ「しあん」丁子屋じやあねへが。はてなといゝてへ所だ「喜
の」はやり言葉もあぢなものだ。ちよつといゝだすとむしやうにはやるよ。此ごろのはやりハ
扇屋のきかふさん。丁子やがはてな。ぶしやれまいそ。おたのしみざんす。松ばやがじやあお
つせんか。玉やのおにのくび。大文字やのしらァんもよくいふよ。さまといふ事をせといゝや
す。ゑちぜんやハしんにといふことをたんといふね「ゑん」丁子やの日(にっ)てんさんと　きれいで
ざんすよと。松ばやの山寺と。さかことハ。いつの間にかすたつたの「喜の」今でもぼう〳〵
ていふものハ。しつたかさ「しあん」おちさんおめへハよくしつてるだろう。大かなやの正月
の仕着(しきせ)ハなんだつけの「おちセ」たしか地が黒で色入の花たてワきさ。角のつたやが鷹(たか)のもやう
さ。ワかなやが若松にかすミ。中あふミやが花ごうしでござりやす。靏屋ハぼたんのすそもや
うの時もあり。ひぢりめんの無地の事もござりやす。角の玉屋ハぼたんさ、松がねやがさくら

川さ。松ばやのくじやくしぼりと、大ゑびやのほうわうがよくまちがひやしたつけ「ゑん」あふぎやの十二ひとへ丁子屋の若松にがく（額）れよく人がしつてる「おちセ」瀬川さんのつき出しの時れ、いつでもかれいで八ッはしにかきつばたのもやってござりやす大文字屋のつき出しれいつでも。とかくさかなのもやうさ「ゑん」正月元日に禮にでるのれ。大びしやばかりだの「おちセ」さやうさ「喜の」つき　しの時へ屋もちばかり。うちへのこるれどふしたわけだしらん「おちセ」あれれさわかりやせんよ松ばやれぜんてへかてへ内でござりやす。女郎衆にうれぞうりをはかせやせん今でもはくものれ。瀬川さん、松人さん。へ屋もちてふたりばかりござりやしやう。そしてれい日にれみんなぞうりさ。くしかふがいも中座迄（まで）ぞうげまきゑでござりやす、さんやでへふいぶるによ。ちつとさしくべれべいゝ「しあん」丁子屋もかてへ内だよ。きやくのまへれうれぞうりを手にもつてとふるの。きやくのこねへ女郎れつるしがとぼると中の町へだされへね。二かいに小便所の二ところ有と。はしごを庭からあがるやうに付てあるれ。丁子やばかりだ「喜の」まるゑびやにれはしごが二所あるによ。扇屋の小便所ほど遠（とを）ひのれあるめへ。さむいじぶんなぞれてへぎだよ。半七がかつぱを着てとこをまれすも久しいだらけだ。玉屋もかてへうちさ。そしてはやく見せをひかせる内だよ松ばやじやあね女郎の事をわ

つちらんといふね扇」じやあざしきでといゝやす丁子やじやあね女郎のそのあね女郎の事をおほきいおいらんといゝやす【ゑん】玉屋といへば紫夕が（小むらさきがことなり）將棊ハあがつたかの【喜の】こんぢう我物が香角のまぜで。二ばんまけたそうさ【ゑん】琴碁書畫をやるきだの。けいせいにもいろ〳〵なくせがあるものだ。きさかたが。水かゞみのめりやすがすき。瀬川が茶のゆ。哥ぎくが地ぐちのてんとり。すがハらが梅をたち。ワかづるがはいかい。ひなづるが團十郎びいき。松人がどふしたのだへ。丁山がちよつとミな。たき川が三ッ七寶の紋所をかへす。九重がかふろの外に男の子をかゝへておくことなどハ。今でのうがちだ【しあん】こんちう今戸の濹賀がりやうへめへりやしたら。いづゝ屋のせつぺい。くわれき松屋のぎよミんいづミやのこゑん。いの字いせ屋のせいら。長崎屋のこはん。おハりやセつ久。かんぼくといふいしや。そうしやうのとりう。なぞがきていて。梅枝点の（ばいしとハすがハらが事也）はいかいをしていやした。いなぎも源氏の書入にこつていやすよ。地内のおたミがしんでちからおとしさ。ぼくがもつりに斗かゝつていやす【ゑん】けふハ廿六日だのあさつてハ三河じまのふどうへいこうぜへ。喜のぼう【喜の】めへりやしやう【ゑん】あとげつのふどうほどけいせいのでた事ハおぼへねへ。ノゥ喜のほう。まづきさかたか。たハらやのよしのにしき戸の若づるがでるし七こしがでるし七

里がでるし扇屋のかたかたがでる〔喜の〕岩越もてやした。からこともたしかゞかけやした。げいしやもでへふ見かけやした。あさをに駒次。おりせ〔ゑん〕ひやうごやのおくにもきたつけ。なるほどげいしやはんじやうだ。けんばんにそばがたへぬはづだ　ざしきへ十ウでるとけんばんで一分がそばだかふなり〔しあん〕もし羅月がいもうとはいつ梅と。やうじやのおいくを。そうじめへにしたといふかほだねへ。あれでうすいもがねへといゝ娘さ〔ゑん〕何いゝものかうすいも所か。ひめじかわの紋がらといふつらだ。ときにちよつとよつて大ばなしになつた。ちよふどいゝじぶんだの。もふ甚ミせのおミきどつくりもひけたらう。喜のぼうあいばつせへ。こんやは一町目のつもりだノゥおしやう〔しあん〕おちさん喜のさんをあづかるによ。おれといつちやあふりしんのいちやつきでもさせるこつちやあねへいろ男のていしゆを持と心づかいだよ〔おちせ〕だいじいもんだがおかし中やしやふ　トはいへども。此ごろよしはらからきたみたゝ。ちらとミたゆへ。喜の介がいろ事のできたゝたしようちている〔喜の〕おともをいたしやしやう。おちせきものをだしてくりや　ト喜のは一町目ときいてあいた口へもちなり。女ほうはつうゆへいろめにもださず。立て戸だなのかされだんすの。ひき出しから。ゆうきじまの上着くじやくしばりにゆきちくあられのへりたとつたゞ着。ひぢりめんのじゆばん。くろ上田のはおり。これはゑん二郎にもらつたゆへ　女ぼうのつうにておはむきにきせこゝる。喜の介は着てしまい、かミ入をふところへ入レ〔喜の〕ちよつとびんをなでつけてくりや　女ぼうはさしている。二分ほどするつげのくしでなでつけ。松ばかんざしで、びんの所をまきこむ〔しあん〕哥へむすぼれし。千すぢをわけてみだれがミ手にとりぐのもの思ひ〔喜の〕おきやあがれ〔おちせ〕サァよふござりや

す。あれせわしない【ゑん】こゝのうちの戸だなハ。丁山がつぎの間といふもんたの 喜の介ハゆからびやうふにかゝつている若松屋のわかつるが出したおちつきのてぬぐひをとつてたもとへいれ 【喜の】サアお出なさりやし ゑん二郎しあん立てかつてへいづる 【おちセ】ヲヤしあんさんやけあなが目にたちやせんハ。モシづきさんハよしかへ【喜の】こふともし四蝶(してふ)さんの所から人がきたら。たつの口へでもいつたといつておきや。それもよしこれもよし トそこらを見廻しながらかつてへいで 何かハすれたやうだハへ ト少しかんがへて ヲ、それ／＼ふくい町の豊國(とよくに)が所から人がきたら。わすれずに此ぢうのやしきのを二分やるのだよ トだんはしごの小引だしからうら付を出し こいつもはかなくなつたす トはいて出る狆(ちん)が跡について。出そうにする小女へだきながら。ゑん二郎としあんがぞうりをなをす 【しあん】これゆひぬきがをちてるよ【ゑん】ちかめがとんだ物をこ・つけ出したおちさんいつてきやす【おちセ】さやうならごきげんよふ。ヲツトおつむりがあぶねへ【喜の】サアおさきへ 此間柳ばしへ大さんばし迄船中のしやれよしへらちうじのふさたりであまり長〳〵しければこゝにもらす

○其　二

けふ此比ハいたこやかるい澤(さハ)てはやる時分(じぶん)。きうへ田ぞろいにゆかたを下タ着(き)。こび茶ざやの袖くち。もへぎさなだのうら付でとんだあやまるなり西のくぼのがぜんぼう谷や。本所のわりげすいあたりて見かけるてあい。くら宿でいやかられるなま通ども二三人。兩方へわかれて土

手のはしを通りながら。ひとりのにほんざしくわへぎせるをはたいて【里風】アレ／＼ミさつせへ。田中のほうから。三まいの早かごがくるが。いまじぶんなぜあねへに。いそがせるたろうの【花暁】ほんに何者だろうのこいつハげせねへハへ（トいふうち。早かごへ土手のきへ来てきたり。また田中のほうへ。かつぎあとす）【友次郎】あれミさつせへ。かつぎもとすぜへ、きこへた。あれハたしかかこをかき習ふのだ【里】なるほどそふいへバ。中にへんなやつかのつて居る【花】なんになつてもならひのいることだの。これ公が所に孔方ハ少／＼なしか。小ぎくを一帖かいてへ。をれハすこぶるすこぶる秋風だて【友】青楼のきやくが。そんなけびなものを持ものか。きんならいつくらもある。けいせいのわるがミを。かすりごうしとさつせへな【花】それでもかミかねへと。何かふところがいねへやうだ【里】コレかミをゆふなら。こゝのかミいどこがいゝぜ　こつちらのかミいどこハ。へたたぜ【友】此高札場ハよくできたノゥ。八十両かゝつたといふことだ。どふいふもんだらうの【花】こうとくじのもんじやあねへか（トしやれながら来り。跡よりわるいしあん。きたり善之助まんなかにはさまれてゑん次郎。きたりうのでんがく屋にて。夕日をよけながら。きれいごとにてゆう／＼と来る。なまつうどもハ。跡をふりかへり／＼見て。ゑもん坂をゝり。中ゆびとくすりゆびで、ひたいをくるりとなでゝミて。はなをちんとかミ。うハまへのゑり先を一ツひつはり行すぐる）〇川竹の流れハたへずしてしかも元のきやくにあらず。さとにうかるゝむだ人ハ。かつきれかつなじみて。久しく来る事なしといへども。つき出しからなじみて年のあくる迄くるきやくもまたすくなからず。何が

どふだかわからねど。たゞ人のきをつりあぐる大よせ小よせのくるハの名とりが。すらりとおならびなされて。よい中の町の夕景色。左りの竹村に比して。右側の七けん軒をならぶ。はでな遊びを駿河屋がまへ。此時まじめなるらんとしやれながら。門口より【しあん】此間ハおせハでごさへした【ゑん二郎】おしやう。むこふの兵庫やに居るのが。丁字屋のつき出しだ。よつぽと瀬川といふばがあるによ【喜の】かほるとハ先名がうつくしい（トいゝながら。二人あがる。下女ハ手をふきながらいで）【下女】これハおそろいなすつてよふ御出なさりました。モシゑんさんがお出なさりましたよ（女房おふじかつてより出る。おなんど茶つむきのふとで。黒七子の帶。かミハ京ぐる）【女房】よふお出なされました【ゑん】主人ハどこだ【女ぼう】たゞいまおざしきへ。まいりました。ホンニ江戸てうから度々お人でござりました。よほどお久しぶりてござりますね【ゑん】久しぶりもてへそふだ【しあん】吉原じやあ四五日こねへと。久しぶりのよふだそふさ【女房】モシゑんさん。京町に何かおせかいが。おできなすつたそふでござりますね。あんまりおうわきをなされますな。それでお久しぶりだと申ますのさ（ト三人がこしの物をとつて中ごしになつていて）ねへきのさん【ゑん】いんにやよそれにもわけのある事。どふてしまいハろくな事にハ。なるめへと思つて。こつちへハさたなしにした【女房】それハよふごさりますが。もし江戸丁へでもしれましてハ（ト少しまじめでいふ）【喜の】そのおせけへもすんだ事だそうだ。もふこゝ切り

の事さ【女房】さやうなら。よふござりますけども　ト立て神だなのよこ手かたなかけへわきざしをかけ。しよくだいをともし手あぶりをかたよせて。盃(さかづき)だいをまん中へ出ス【ゑん】いのじいせやの二かいにうしろをむいているのはだれだ【女房】扇屋の扇のさんで御ざります【喜の】ぶたいはなれたものさ【しあん】つたやのさんしう。霜屋の在原。此春のつき出しはどれもあたりだ。丁字屋の名山を此中向嶋で見かけやしたが。七越といふきミがござりやす【ゑん】丁字やといへバ。ミさ山もとんだうつくしくなつた【女房】松ばやいをはやく見たふござります。　北内吸物すゞりふたどんぶりいろ〳〵出る　ちつとおすいなされまし【しあん】サアはじめなさへ【女房】さやうなら　ト酒になる。ゑん二郎へ又盃まはる。女房へさし祝義をする。ミな一通り盃すミ　此間ニ松田やをしまいニやる　【ゑん】むかふ通るは藤兵衛じやねへか【しあん】藤兵衛〳〵が三人通る【喜の】おきやあがれ【ゑん】コレ〳〵藤兵衛〳〵【しあん】でたがねへ藤兵衛〳〵【喜の】藤兵衛ます藤兵衛はまゝの紅葉哉【ゑん】これちつとだまらねへか　藤兵衛はいのじいせやのまへあたりできゝつけかけてくる　【藤兵衛】これはどなたかとぞんじました。ごきげんよふござりますか【ゑん】とこぞへ行のか【藤】ひなづるさんのおざしきへ参ります【ゑん】ざしきでなくバはなそうと思つてさ【藤】それは残念(ざんねん)でござります松蔵。藤二。三味子や。我物(がぶつ)がまいつてをりますから。ぬけにくうござります。今晩(こんばん)はやはり一町目でござりますかモシさのさまとらけんはどふでござります【喜の】又まかさうと思つて。いそくならいつてきねへ【藤】さやうな

ら御めんなされまし　ト何かせわしくヌかけて二丁目へはいる二町目ヘ竹屋の哥ぎぬ出てくる跡ヘ哥菊出てくる　「ゑん」おしやうむかふからくるのハだれだと思ふ「しあん」竹屋の哥衣さ「喜の」こいつハきつい。それでハ近眼(きんかん)とハ思ハれねへハヘ「しあん」顏も提燈(てうちん)の紋所もわからねへが。禿がミヽのわきへ黑い糸をさげているのハ。哥衣と。大文字やのはた卷斗さ「ゑん」あじな所にめきヽがあるの「女ぼう」お二人ながら竹屋の千雨箱で。ござります「しあん」哥菊が地口ハどふだの「女房」もふ一ッあがりませんか。ゑんさんお茶づけわへ「ゑん」腹中(ふく)まん〳〵さ　しあんてうしたいぢつて見て　「しあん」もちつとあつくしてくんなさへ　いわしときすハほうろくやき。かわりの吸物出るふたをとつてミて「喜の」イヤアかもせんば。粟付大根。ありがてへわへ「しあん」料るもんだよ　ト云所へ瀧川がかふろ來る「めなミ」若(もし)へお藤(ふぢ)さんに。おいらんでおつせへす。あのけさのふミをとゞけておくんなんしたかと　のれんたひつハりながらいふ　「女房」ム、そふ申てくりや。けさ程三保藏にもたせて遣しましたが。おるすだと申て御返事ハ參りませんと。申てくりや　トかつての方ヲむき　ノウ三保藏御返事ハこなんだのう　勝手より「三保藏」まいりません〳〵「めなミ」そんならあの。そふ申しいしやう「女房」ちつとあそんでいかねへか「めなミ」しかられんすよ「ゑん」コレあの子やい「めなミ」なんでおざりいすへ「ゑん」おいら「女房」めなミあなたがなんとかおつしやるよ「めなミ」アイそふ申しいしやう　ト出て行く「女房」とんだ利んとふちさんによくいつてくりや「めなミ」アイそふ申しいしやう　ト出て行く

口な子でござります。三保蔵や共送り物ハ。玉やのたが袖さんのおざしきへ行のだよ。そしてミつさんハ七ッにかへらつしやるそうたから。かごやがきたら三てふだよ そつちこつちするうちゑん二郎があいかた松田屋のおいらんおす川むかいに来ろ眉如ニ翠羽ノ肌如ニ白雪ノ腰如ニ束素ノ歯如ニ含貝ノ嫣然一笑惑ニ陽城ヲ迷ニ下蔡ヲ其ふぜい。田丁のかたばミや久兵へがぬつた。からいとの惣ぬひにだてもんのうちかけ白じゆすのへりとりむく。かミハ手がらわげ。かミのうへハ小間物屋の見せの如く。禿のかミ一人ハ はりうち。一人ハやつこしまだ、うつくしくかミゆひの長ニがてぎわをミせ。ふり袖しんぞう。川波せわしんぞう玉夕っつきそひきたるばんしん玉夕。おいらんのゑもんをたゞし。打かけの下りたるをなをしゑんさきへこしをかける。おす川につこりとわらひ【おす川】おふじさんどふなんしたへ トいつたばかり【女房】さあおいらんお上りなされまし【おす川】こゝがよふすよ【玉夕】ゑんさんよくお出なんしたね【喜の】いつもうるハしいおかほつきね【しあん】何かむしやうにきれへてござりやす【玉夕】なぶつておくんなんすなおかミんすにへ 引 トいふうち松田屋わかい者清二。てうちんをけし。おたのミ申ますと出て行。玉夕ハ茶地のろきんの長づゝから、きせるを出し。たばこをつけておいらんにわたす。又つけてゑん二郎となく\へやるおす川禿のミゝへ口をつけて。何かいゝつけてやる【おす川】いの字いせ屋にときやうさんがいさつしやるから。おれがいふとつて。よくお出なんしたといつてきや 禿ハむかふへ行。あげゑんの下から犬がのひをして出る【川波】ヲヤァわつちといへば。びつくりしいしたよ【女房】此お盃ハわたくしがおあつかり申ましやう。お雪やすぐにつれ申しや【ゑん】五町と万里と。おしづ八百吉をよびにやつてくだせへ【女房】かしこまりました 下女ニうちんをともし先へ出る。けいせいも立ミなく\いづる【女房】さやうならおいらん【おす川 玉夕】おやかましうござりいした【女房】どなたも御きげんよう ミなく\一町目へまがりさきへ行喜のハちよつと松田屋いミセ先へより【喜の】非川さん。夏里さん。どふなすつた。何かしんになッて

かきなさるね【非川（なつ田）】でへぶ道がちかふおすね【喜の】こんやゐんさんのつきやいさ　ト云所へ。ち廻り二三人ミセさきへきたり　【地廻り】ナンだあかいべゝに青いべゝに白ひべゝをきてこゝの見せハなんの事ハねへ。げくわの藥箱といふもんだ　トあくげんをはき行過る　【夏里】エヽ、すかねへぞよゥ引【喜の】後程お目に懸りやせう。　ト松田屋へはいる。ミな〳〵のうれんのそべを行。うちハどん〳〵とにぎやかにともべやのまへにおいらんたちのてうちんならべてありながゑハかべにおいたかけてならべ。廻しかたへたき火にあたり小がさのうへの十二のとうミぶうへけんびし。川十九とびやうの山たてらす　【茶や女】源兵衛どん〳〵　トいゝながら。ミな〳〵のはきものをそろへ上ル。そう花の札のはってある下の。そばに。番頭伊平治いで　【伊平二】源兵へ〳〵。お客人だぞよ　ミな〳〵はしごをトる。跡じりにて女郎四五人のこへで。ゑんさんよくおいでなんしたと。くち〳〵にいふ　【源兵へ】すぐにざしきへいれ申そう　ト先へ立てゆく。だれぞ禿大ふうじのみた。ひやうし木にうちながら　【禿】たのもどゥ引そつちでさきつからよばつしやるぞよ　ひとりの【禿】こんたあどけへ行【禿】長崎やへ行ハ【禿】さがりい引す　おす川ハいつの間にかどこへかなくなり。ばんしん玉夕。ふりしん川波。つきそひざしきへはいる。かふろハおいらんと。しんぞうと。じぶんのこま下駄たもつ。梅はちた禿た。天水をけのうへゝたく　○そもおす川が坐敷のこのミ。中の間の飾夜具ハ錦の山の如く。一面の琴ハ遥に見る瀧に似たり。圍の常釜ハ松風の音かと驚き。ゆこうの小袖ハ楓の紅葉したるが如し。本間の天井にハ四季の艸いろ〳〵。その〳〵花の手柄をミせ。はりつけにハ朱簾を畫て雲上にちかしちん金彫の机に。義之の墨帖をちらし。湖月萬葉のそうしを並異香四方にくんじて大盡の紙花こゝにつき。龍のくひなる玉。つばくらめの子やす貝も。こゝに持來るべしと思ふばかり座敷の眞中に銀しよくをてらし。朱蒔繪の

たばこほん。さんぼうの盃臺。かけばんなをしてある

「しあん」家名ハ松をもつてし。紋所ハ柏をもつてし。床柱ハ栗をもつてす「喜の」サアむづかしい事をいゝだした。此からかミれだが書た「玉夕」辨州さんがおかきなんしたよ「ゑん」もふとまりハしれたから。大のミにするがいゝ　此うち廻し方盃てうし持来り。らうそくのしんを切て行所お定りの通、なかい吸物持来る、茶やの女てうちんをけし、はきものと一所にらうかへたく喜の介にあがるふりそで「夏濱」政さんよしなんしいつつつてはしごへ札をはらせんすにへゝ　ㇳいきたきつてかけする

「しあん」休日の湯屋を見るやうにでへぶはしやぐの「喜の」そんなにさわいだら又。やりてがミせ三味線の一といふ聲で。りくつをいをふが「夏濱」それでもからかいんさァナゑんさんよくお出なんしたね。お雪どんとふした　ト茶やの女のかたへとりつく跡左しあんにあがるふりそで夏いろ来る　「ゑん」此子達二人リハむしやうにうつくしくなつたよ「玉夕」あいさいつそいろけづきんしたよ。禮日もふり袖の跡おさへハ。ぬしたちふたりさ「ゑん」早くつき出しになつた所をミたい。其時ハしらぬかほだらうの。夏いろさんの初日ハっをふかたおしやうがするだろう「しあん」アイサその時になるときものゝあんじがござりやす。うハぎハまぐろのたきのぼり。むくハぼたもちのちらしさ「夏いろ」よしておくんなんしばからしい「玉夕」お雪どん一ッのまつせへナ「夏濱」どれおれがついでやらうよ「茶女」イヽエこゝへおくんなさりまし「夏いろ」一ッのまつせへ「喜の」おい

らんハどけへいかしつた今迄いさしつたやうだか。もふどけへかミえなくなつた。ほとゝぎすのようだ【ゑん】松田屋のけいせいもだろうそくを見るやうに折ふしたちぎへかするてあやまるよ【玉夕】わつちらんハ今一生のきやく人の所へ。あいさつに。下タざしきへお出なんしたよ。琴のやよび申てきや。川波さんたばこを。出しておくんなんし【川波】此引だしかへおつせんよ【玉夕】エ、じれつてへ。そこにあるからおミなんし【しあん】きゝようかるかやをミなへしときこへるハへでへぶ地口が御上達だ【玉夕】それてもしれつたふおすアナ　トゝ所へ、するかやの男。おくり物もち來る。朱のりんきんの丸ぼん。あらいこのかくひらへたまごほり。さんぎてのどんぶりにへ。はつけにきしやうゆをかけたやつ。これでちやづれといはぬばかりけいせいへのてんとり。ちや屋かつうなり　【茶や男】ゑんさんに七右エ門申ますこんはんハよふお出なされました。只今玉やのお客人を納ましてそれへ参ります。まつぴら御めんなすつてくださりましと。申付ました。そして玉やで小紫さんかあなたへよろしくと。をつしやりました　トちち／＼してかへる所へおめてざしきのをいらんかミへしのぶわけさゝりんとうのへりとりむく斗うちかけにして來る　【とめ山】ゑんさんよくお出なんしたね【ゑん】イヤアとめ山さんとふなさりやした。はなしかあるからちよつとこゝへお出なせへ【とめ山】マアちよつといつて後にまいりいしやう　トかたのあたりてちよつといろけをミせ。おく二かいのほうへゆく入ちかつておす川ミすのはなかミてむねをあふぎながらきたる　【おす川】もふなんたか　わからぬ事のきゝてに　なつて　まいりした【喜の】【しあん】おいらんこれハとふでござりやす【玉夕】これ／＼ハまいりしたかへ【おす川】きい

したく〳〵【玉夕】じやあおつせんかへ【おす川】あいさ【しあん】おめへかたハしやあねへかの蚊ハねへかのと。大音寺めへのとふしやあるめへし ミな〳〵わらふ 【おす川】もしへ下タでめりやすの本をもらつて參りした。長崎屋でぶんきようさんがおひろめなんしたのでおすいつそあだでようすよ【玉夕】ヲヤおミせなんし。すがはとやらいふめりやすかへ。早く覺へとふすねへ【おす川】まあのりにおミなんし 此うちぜん出る。きうるしのわん。せいひつむしくいのくわいせきせんにて二つき松田屋ゆへしよく物ハびなり。こん立ハこゝにりやくすちよくばかりハ松田屋のつけ目にて、れんこんのらん切也、はしハはこねからとりよせろ萩の先をけずつたの也。これもこゝのりうぎ也。ミな〳〵はらハよきゆへ。茶ひんとともにならべたはかり、ぜんハさしきの捨小舟となる。こゝへ女げいしや。八百吉おしづ。たいこもち五町万里。するかやていしゆ。七右ヱ門來り、たさハぎによる。此所のしやれ、あまりそう〳〵しくて。きゝとれぬゆへ。こゝにりやくすそふこふするうちひけをうつゆへ。ゑん二郎がとこをおさめ、喜之介しあんも。それ〳〵のさしきへ行けいしやたいこ持ミな〳〵かへる。おす川が次の間をたてきりてうあしのぜんをとりまき、しんぞうとこ、けひぞうをはじめろすゞりぶたの上にくわへの丸にハ。こほうかのゐしやのあたまの如く。しゝたけのうまにハ手習ぞうしを引きさいたるに似たり。ようらくでのふた茶碗のなかハ。ふろなすのつけたのにきじやうゆをかけたやつ 【川波】しあんさんハどふなんした【夏いろ】いつそもふよいきつてねてしまいゝしたいつそすかねへちかめぼうづて。おすよ。すかねへぞよゥ引【川波】おやばからしい。何もたべるものが。おつせんよゥ引【夏いろ】となりへ梅づけをとりにやれバ。ようしたねへ。これ〳〵その子ハだれだ。此土びんへ茶を一ッもつてきてくりや。いゝ子だぞよゥ引 トいゝながら。はしのかわりにしたゞ松ばのかんざしを、あんどうへ。つつさして。ふいてさすおす川がかぶろハ雨ざしをぬいて。りやうしのふたへ入レて。ちかいだなへをき。ねまきを帶へはさミ。おいらんのくしかうがへをしまひ。火を入レて來りそこらをかたつける 【玉夕】もふいつてねや。まあた長火鉢へあたつてべん〳〵と起て居めへよ 長火ばちといふハ惣禿のあたろひばちもつとも下にあり 【禿ことの】さやう

ならお休なんし くろもじのやうじをくひながら〔嶋浦〕玉夕さん〳〵ちよつと顔をお出しなんし〔玉夕〕何ンでおすへ〔嶋うら〕あのね〳〵。これ〳〵がさつき見せへ参りしてね。あさつてこやうと申しいしたよ。ぬしにもよく言(いつ)てくれと申て。おしやべりをだしきつて参りしたぬしにもとんだうらみがある言(こと)のはのと言(いつ)て参りしたよろこんでおくんなんし〔玉夕〕わつちといへバかたつきし主のきなんすのを待切(まちきつ)てをりいさァなァ。此中のみを届(とゞけ)てくんなんしたとおつせへしたかへ文さんもあんまりすかねへふにんじやうだよ〔嶋浦〕はらをおたちなんすな。ぬしがつれてきいすとさ。あさつてハしまつていろとつて。まいりした〔玉夕〕ぬしといへば。うれしがりきつているの〔嶋浦〕それでもうれしうおさな〔玉夕〕それハそふと川波さん。さつき山崎の人に。ひな形をやつておくんなんしたか〔川波〕もつてまいりしたよ〔玉夕〕けふハ廿六日だね。うれしうおす。あしたハかミあらひ日でおすよ ト云所へしんぞういつてふ。しやくをおさへながらきたる〔いつてふ〕玉夕さんへごしやうでおすから。なんぞくすりをおくんなんし。いつそもふしやくがいたくつてなりんせん トかほゝしかめていふ〔嶋浦〕わつちらんの所にきわう丸がおすから。まあざしきへお出なんし〔玉夕〕ぬしのきやく人ハ。おかへんなんしたじやあねへかへ〔いつてふ〕松さんハかへりしたが太兵衛どんがをくりにしてやろふから。でろとつて。夏花さんと民の戸さんと。いちざておす

よ【玉夕】ム、はつか【いつてふ】あいさ。ざとうの坊主で。さけをよくのミひすよ。さつしておくんなんし。わつちといへバなぜこねへに。びやう身ッになりいしたらうね【嶋浦】ゑいじんさんに。見ておもらひなんしたかへ【いつてふ】やつぱりしやくだとおつせへしたよ。それでもあんまり引込と腰元にするとおつせへすから。けふもむりに。ミせへでへした【玉夕】しま浦さんこゝの次の間へしのびをおとめなんせんか【嶋うら】よしいしようよ トはなすうち時ハうつり、ツもすきこ宵まへりのひやうし木かつち〳〵と打ツて廻れば。皆〻いつくへかなくなつて〳〵まひ。小亜所のきわにハ、かけばんと丞だいおくり物のから山のことく、水だいのかめつんとしてうしろたむき。江戸丁二丁目相生屋㐧ざんめんるい所と書た。そはの、いろう れんじにさ〻しく てふつ〻ミごばん人形のさへぎもいつしかしづまり。おくざしきにて琴のね。さへわたる。きくじとうへ、なつんどかつき浴ト今たしやたたるざしきもだまりの天神いびきのおとハかいるのなきごゑにまぎれ。火の用心いかなほう。あんまのこゑもしづまり、くさきもけいせいもねて ばけものとほと〻ぎすとねこばかりおきているころ 夜へしん〳〵とふけわたる折よしとしんぞうがあいづにけいせいのうしろ姿きたり喜之介がひやうぶの内へはいる此所の如意作者しいらくあづかりなり。此本をよる人。たいてい御すいさつあれかし。むかふさしきハ死ね外なふとんの中と〻へ廻しびやうぶのたいこうぼうもよだれを流すばかりのむつ言。ほつち〳〵のはなしごゑ【女郎】それおミなんしふとんの外へおちなんすな。ヤアこつちらうをお向なんし〳〵【客】あやまつたら。ふしようながら向てやろう。むかせられるハ恩ならず向てやるのを恩にしてだ【女郎】男心のにくいのも嬉しほどのやぼとなりいしたのさ。サア誤すから。お向なんし。さミしうおさァナ。ぬしにきゝ申しいす事がおすにへ。ゆふへどけへお出なんした。京町かへ【客】フゥおつな事をいふの。京町のねこがあげや町へ通つたら、わさハ聞たが。おれが京町へいつたさたハまだきかなんだ【女郎】よして おくんなん

し。とめ川さんか中の町て見かけたとっ。おつせへした。サア本とうにおつせへし〳〵。おいゝなんせんと。くすぐりいすにへ【客】これさよさねへか。ぶちのめすぞよ【女郎】そりやあうそでおすが。ほんに主ア。わつちをよんでおくんなんすきかへ【客】此比ハでへぶ。ぐちになつたぜ【女郎】それでも若。ぬしのとつさんやかゝさんが。ふしようちな時ハ。どふしんしやつねへ。それを思ふと。死たふおすよ【客】それよりまだ先が丸二年三月といふ物だから。其中にハそつちに。とんだ事ができるだらう【女郎】よくつもつておミなんし。五年このかたハつちがミのためにもわるし。ぬしのためにもわるいと。たび〳〵あきらめて見ても。思ひ切れんせんものを。ほんにあく縁でおつしやうよ。ぬしもそふ思つておくんなんし。あれさまたねなんす。はなへ小よりを入レんすにへ【客】これさあやまつたよ。こんやハむしやうにねむい。たばこを吸付てくりや。てめへおれが事ばかりそんなにいふがをれが顔のたゝねへやうな事をするなよ。こんなのろい句を出すやうになつちやあ。たまらねへ【女郎】まだ其やうにおうたがひなんすなら。此うへゝゆびの二木や三木ハ。いといゝせん【客】てめへに指を切てもらつたとて黒焼にして。むしぐすりにハなるめへし。しほをつけてやいてもくれねへ【女郎】そんならどふすればよふす。じれつたふすにへ【客】何かあじにゐきもねへ事をいゝ出した。少

しはらがきたハへ。さつきそこにあつたのハなんだ【女郎】仕切場でおすよ（仕切場とハ帳もちの事也）【客】そいつハあやまる。れいの小梅のかり〳〵するので。ちやづりにしやう【女郎】これ〳〵太兵衛どん〳〵。これさごしやうになるからの茶づけぜんを一ぜんこさへてきて。くたせへ（かゝるせかいに引かへてとなりざしきハ大かんしやく）【女郎】あれさおよしなんしししやくがいとふすよ。さわつてもおくんなんすな。けがれんすぬしやあわるいしやれだよ【客】そんならどふしても。あの客をきれる事ハ。ならねへな【女郎】それがきにいらねへで。主がお出なんせんでも。きれる事ハなりいせん。わつちやしやうじきぬしのすいりやうのとふり。あの客人にほれていんすハな【客】てへぶてめへハ白ラばけに。ごふてきをいふな。それじやあもふりやうけんがならねへハへ【女郎】りやうけんとハ。両方の手にけんをもたせる事かへ。あぶなふおす。およしなんし【客】何ンだこいつァ。いゝかと思やあがつて。おれがこふいふ句を出ス日になつちやあ。かくごうしろ。まづでへ一チこの枕の紋所も氣にくわねへ。此きものゝ裾もようのあたりもはくじよう仕てしまへ【女郎】これさそねへに足げにしなんすな。大事の色男の紋でおさァナ【客】こふすりやァどふするこれへ。しやうぶ刀の身をミるよふに。白ィこばかりぬつてつら斗うつくしくつても。いきしにのねへ女郎ハきれへだ此女郎ハ此くらいなやつ。こいつハ此位なやつと。てへげへ女

郎のねうちをしてつきやつてやれバ。いゝかと思つて。をかへあがつた河童(かつぱ)をミるよふにぐにやく〳〵する女郎ハこつちから。おさらバだれへ【女郎】サァ〳〵それをきこふばつかりでおすそんなに入らぬ女郎なら。はやくおさらバをして。おかへんなんし【客】けへらうがけへるめへが。うつちやつておきやあがれ。おれがいちやあそねへにこはいか。どふりでぶる〳〵ふるへるな。これへ中の町の何屋のうらにやあ。せつちんが何軒(げん)あつて。何やの裏(うら)にやあはきだめがいくつあると。四ッ手にわかざりのかゝつている時分(じぶん)から。きつねのまいこむ時分まで三ッぶとんの上におしつまつていりやあ。どけへいつても色男(いろおとこ)一疋の役(やく)ハしてくる男だ何手めへの顔(かほ)をふむにハて間隙(ひま)ハ入らねへ跡でうまるめへぞよ【女郎】ぬしやあ紙屑拾(かみくずひろい)かへよく関所(かんじよ)やはきだめを知てお出なんす男一疋といゝなんすかられたゞし犬(いぬ)の生(むまれ)がハりかへヲヤきミのわるいじゆすかけとやらなべかぶりとやらじやおつせんかへもふいゝなんす事がなかァ。ゆるりつとお休(やすみ)なんし　トいゝながらまくらとはなかミをもち出て行。きやくハはらがたつてならねども。せんかたなく。ねるにもねられず。あんどうのむだ書をよんでまち〳〵しているうち。七ツのひやうし木もなりて時うつり。田中の方の寺〳〵にてハじやん〳〵のはんしやう。思ハれるのもあきられぬのもつまるところハミな遊びのもよう。ゑん二郎ハよいより。京丁のわけにておす川とおふくぜつそれもおす川しやうとくゑん二郎をすかぬゆへ。いさゝかな事を手にしてねるつもりの。ミなきやうけんにて。うちのまへの松かざりをミろやうにうしろ合せの白川よふね夜ハさらりとあけてれんじのすきまからさしこむあかりに。長持のほこりきらめくかわたれどき。下でハどつし〳〵と米をつくをとねずの男ハあんどうをひきにくろいれかハつて　【茶や男】ゑんさんおむかいに參りました【ゑん】フウアヽもふその時分かの【茶男】おつしやつたよりハ少シおそいく

らいでござります【ゐん】喜のやしあんハどふした【茶男】喜のさんハ只今。おしたくをなす
つてお出なされます　ト云所へしあんがあいかた夏いろざしきへ置たはおりをとりくる。跡よりしあんをきてくる。喜之介もこすのかどにてかほをふきながらをきてくる。なつはまゆあとよりきたる　【ゐん】さ
あすぐにかへろう【夏濱】羽織のゐりがおれんせん。お待なんし【しあん】おいらんハてへぶ
おつかれの　トいへともおす川ハたわいなし。ミな〳〵らうかへ出る。ねずハ二かい中の紙くづをはきあつめ。あんどうハせんがくじのせきとうのやうに。ならべてある　【喜の】此紙屑をもやして置
とおぎやァ〳〵といふやつができやす【しあん】こふ紙屑をはき集た所ハ。羊のへどゝいふも
んだ【ゐん】いゝ〳〵　トはしごをおりる。板はなにみがならべてあり。はしごの下にハおくり物のからつミかさねてある茶屋男ぞうりをなをす　【茶男】おまへさんのハ。此
二重ばな緒で。ござりますかね【夏濱 夏色】此間にお出なんしへ　くゞりをがら〳〵とんとミな〳〵出る　【ゐん】おほきにお
そくなつた。かごハはいつているか【茶男】いれて置ました【しあん】とんだわるい心持。二
日ゐひになりやした　玉やにてハもふ大戸をあけ。こうしをきれいにあらいて。しきいにしほをもつてある。りやうりばん肴をかつている　【りやうりばん】此いかハあをりじやあね
へか【肴賣】なに買いかさ。かな川だァミなさへ。此あついことを。あをりやするめいかだと。
安ひハな【りやうりばん】だれがれんつに。したがいゝ【肴】何さとんだ事をいゝなさらァ。此ちくセ
うめしつ〳〵。このあぢやァどふだへ。いゝいほだァミなさへ。なまむぎだあ。はねだでもこ
ふいふ丈長ハねへハな　トいふをよそにきく。三人ハするがやのまへまで來る　【ゐん】こしの物を出してくりや【茶男】マァちつ
とおよりなされまし【喜の しあん】すくがようござへしやう【ゐん】そふさ〳〵【茶男】さやうなら

と（くゞりよりうちへはいり二人のこしの物を出してわたす。むかふのひやうごやなぞにてハ。もふミせをひらきわかいものあげゑんをふき。のうれんをかけろ。竹村のまへにハ不札をはがした。跡のあろせいろうつんである。かしのきやく八ツを打て上るてやい。ふしミ町のかた右二人つれにてかへる一人ハきりやのよこの小便所へむかふのはめへ小べんで。のゝ字をかきながら）【鬼勝】コウ鉄へまてへ。いつ所にゐゝべゝ。ゆふべハが女かきてないふにやァナ。きいてくんなさへ。鉄さんといふものハわからねへものでござへやす。こんぢうさよじさんに一本ッかりてたて引キをしてあげてやつたに。今夜もしらんかほをしていやす。あんまりおしかつゐゐ。八ッを打てあがるきやくハミんなあのくらいなもんだ。なんのかのといやァがつたからな。をれがナいゝかげんに戸尻を合せておいたぜ。あいつァとうもろこしを。よこぐわへにしやうといふ。つらだナァ（ふしミ町がしハ八ツにミせを引ゆへ八ツを打てあがるとすへ一本にてすむこれこミづなきやくのする事也）【鉄】ほんにそふいつたかとんだきまぐれじやあねへか。こんぢうハ二朱銀をほうり出して。酒肴付てあすんできたァ。あいつがいふなァ五年ほど跡のこつたあ。こん中もナ。きらずにあミをいれていつたやつで。ほぞを七八へゝつけやあがつた。あすこのやてへぼねハ。をゝかたあいつがくらいつぶしてしまうだろう。あのすうてへをミやなまとい持にすれハいゝぜ。エ、くさびをそぎたくなつた（ト云ハせつかんへ行こと也）【鬼勝】なんでもばんにやあ虎やへあがるべゝざへ。こいつァおもひつきだつけなく（エゝ引と行過ろ。大門の口番人の火をたいてあたつているてすりによりかゝつて。こぶまきのにこゞりといふしんぞう。しやげたやうなかふろ。きやくをつけているこれましりミせ以下の女郎とミへるなり）【新造】（おつなてうしのこゑにて）ヲヤ喜のさんどふなんしたへ【喜の】お久しいの何今時分までうか

〳〵している客があるものか。いゝかげんにしてけへりねへ。とんだねむそうなめだ。ミつのへさんによくいつてくんねへ【新造】おさらバへ ゑん二郎しあん喜之介三人ハ。江戸ぶしたうなりながら、大門を出る 【茶男】かづさやア々【かご】アイこゝでござりやす ト白玉やのたな下のあたりにてへんじをする 【ゑん】なせこつからのせねへ【茶男】高札ができてから。大門のきハへかごがなりません むかふより泉やの娘下女をつれ朝参りよりかへる 【ゑん】お夕さんでへぶお早いお出の【ゆふ】ヲヤゑんさんどふ被成ましたけさハ山谷のしやうぼうじのびしやもん様へ参りました【ゑん】こゑんさんによくいつてくんなさへ【ゆふ】さやうならおしづかに【かご】サアめしまし【茶男】おはき物ハついたかさやうなら此間ニ【ゑん】よくいつてくりや【かご】こつちらのだんなお羽をりをもちつとおいれ被成まし【かご】ぼうぐミよしかどつことな トかご二てふともニあぐる ○をくられて行てうちんとわかれ路にきくかねとハかたげてみれハつりあハぬ大じんきやくにこいとらうおくるけいせい道心者のもらひ同士朝咄し。口よりけむの出る比。立や今戸のかハらけむ。すハる四ッ手に三人ハ。にほん堤を一ッさんに。いそがせてこそ三重引へ行室の

總籬大尾

山東京傳戲作

四方先生著

狂詩礎

唐詩礎明詩礎にならひて初心の人
狂詩をつくる便とす席上の早作に用る

四方先生撰

古今狂詩删　近刻

本邦古今の諸名家の狂
詩をあつめたる書

東都曲
百人一首

狂歌袋　宿屋飯盛撰

右の名たかき人また今の人の
歌をもあつめてこれに畫像を
くわへて彩色ずりとなす

通言

總籬　山東京傳作

吉原の人情をのべ五町のあなを
うがちて手のある遊をしるしちつ
ともすいた事のなきほんなり

百人一首
馬鹿講釋

初衣抄　京傳老人作

小くら山床の色紙百人一首の和哥に
和漢の書を引當世にこぢつけ
おかしき詩を印ス

狂歌觴　鹿都部眞顔撰

此書ハ當時諸家の秀逸をあつめ
一家〻の風調をしらしむはやくハ
狂家師の家の集ともいふへく
又自賛哥集とも見るべし

示仁埜夫鑒

野夫鑑序

穴の中に貉ありこれを得んと欲する事かたし一人曰貉ハ睡を好むものなり試に枕一ッ酒一徳利生姜味噌一片細引を付穴の中におろすべし貉酒をのところ／＼と枕を引よせ一トねいりする所をかの細引にて縛る時ハ貉を得べしと一人曰これ甚迂遠し井戸へ釣瓶を落せしごとく細引に碇をつけ穴の中をかきまハすべし貉の目鼻か體の中へ引かけぬ事あるまじとり逃しハ仕方なしと一人曰所詮むじなハ人を魅す獣なり人間の智恵才覺にて効を奏する事かたかるへしその細引を綰にして穴の口にて三線ひきつろな／＼貉をつろなとうかすときハ万に一ッもまぐれあた

り貉を得まじきものにあらずと按ずるに腹の中の病ハ穴の中の貉にあらずやはじめの一人後世家也其次の羅漢ハ古方家なり跡の〳〵せんじやふ常のごとく七加減古方でもなく後世でもなくせう事なしの山師の玄關見脈ぴん〳〵たる時ハ胸だく〳〵たる牽頭坊主のはやり醫者なり駿河の國の富士の人穴穴のむじなの野夫鑑化生のもの歟魔生のもの歟いざ立よりて御覧候へ

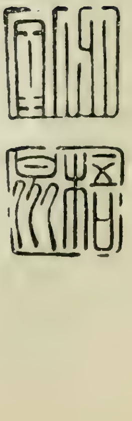
雪才山人誌

序

神農生出給ひ而のちに百草いや生出けるにや呼子鳥の覺束なくて聲をしるべにおほろ〳〵と徑つたひに杖を曳しか透垣の間より梅か香のしきりにうちにほひしはした丶すみ扉をとなひけるに鬢かき撫て童の答るにはあるしれしか〳〵のことのさむらふて明に出給ひぬるところまやかに述けらしさはかへらんもほゐなけれは伴ひ入ぬ釜の松かせ凪わたりたる臺司の傍にひとつの草稿あり野夫鑑としるされたりひらき見るに艸根木皮をあけつろひておのつから金玉の聲す也跋は因ある遠津あふこの故人周竹入道のこと葉清らに山吹に似たりといふめりいさ丶川い

不仁野夫鑑　四

さゝか冊の始に駿陽竹室梧泉かいつけ侍る



自序

言ものハ知らず知ものハいハずとハ荘周が眼玉に見さがされたる肺肝の腐臓腑に蓋をして彼紫の朱を奪ふいにしへにかハりし薬師の道今世に盛なる世智辯僧物換り時移る風俗ハ莫邪ハ鈍して鉛刀が疾といふも智者ハ萬人に一人愚者ハ千人に千人あなかしこ僞巫の長羽織にかならず油斷仕給ふべからす睫を濡し給へやとしかいふ

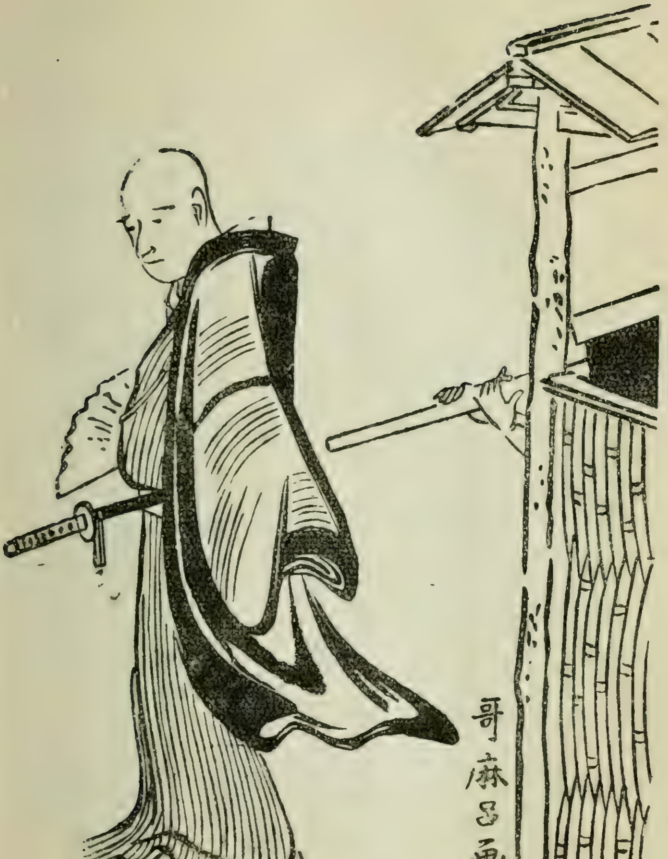
駿陽　東湖山人書

不仁野不鑑

矢人ハあに函人より仁ならざらんや巫匠も亦しかり故に術ハ愼まずんばあるへからずとハ誠なるかなもろこし楚といふ國の御城下此方ならば四日市欺柳原ともいふべき床ミせに楯と鉾とを賣商人ありかの楯をうらんとする時ハたとへ干將莫耶が劍たりとも此楯をたやすく通る事なしといひ又鉾を買んといふ人あれはいかなる鐵の楯なりとも此鉾を以てつく時ハ通さずといふ事なしと口にまかせてしやべりけるをかたへの人これを聞て汝か鉾を以て汝が楯をつらぬかばいかんどいひければ此返答に行つまり楯と鉾とをせたらおひ面を赤めて歸りしとかや夫よりして言葉のてにはのあハぬ事を鉾楯といふと尸子にミへたりわが日の本にも是を和らげてけいあんともまた醫者坊ともいふなり當時醫者の風俗をミるにそのかミ醫を學ぶものとハ事かハり其術つたなくして務口給にありといひしごとく唯便佞を以て病家をたぶらかし名利をのミつとめ其技を外にすかの楯と鉾とをうる商人にことならず夫醫ハ仁の術にして人を救ふの敎なり故に易に所謂大地の大德を生といふ葢大地人を合するに其生命より重きハなし其また命を生する者

れ父母にして其命を司る者れ君といふ又師といふ其君父師の權を總るものれすなれち醫也
故に周禮にも醫師を以て天官の部に入られしれ蓋活人の業にして其生道を學ぶものなる故
也然といへども其術つたなき時れ却て不仁となる近世此道をまなぶものれミな是仁の仁たる事
をしらず不仁の道をまなぶもの多し孔子も人として恒なくれ醫となるべからずといへり上神農
黄帝を祖として巫咸伊尹扁鵲倉公耆婆仲景華佗思邈をはしめ古の世に名醫といれるゝもの或れ
異人かまたれ天子の宰相よりして諸侯に及ぶまたわが日のもとれ大己貴命少彥名命よりし
て和氣丹波の二家に及ぶ是我日本醫道の鼻祖なり和氣れ垂仁帝の末にして丹波れ漢の靈帝の後
なり是皆王子公孫ならずや又佛道も是にひとしく忝くも釋尊れ天竺摩竭陀國の大王淨飯王の太
子也我朝にも此道をつぎそのかミ名僧知識と仰れ給ふ行基菩薩をはじめ良辨僧都傳教大師弘法
慈覺元三惠心性空圓光大師その外碩德高僧の古に名ある人ゝミな是碌ゝたる小人にあらず然る
に近世醫師と法師と此二筋の道をまなぶものをミるに飛鳥川のふち瀨にかれり家を賣り身をす
て家業にたよりなくまたれ孤あるひれかたわものゝ行衞覺束なしとて皆身のよるべなき世に
草臥者のあつまりなる故後世此二道に名ある人ゝ世に希なるもことれりならずやまことに南山
の竹れためずして自ら直れ性の善なればなりいにしへの出家れ私に剃髮する事かなれず出家の

不仁野夫鑑



八

望あるものハ其國の國分寺或ハまた德行ある僧のもとへかゝり居て髮をもそらず俗躰にて居ながら學問を修行す此間を行者といふ是役の行者の類なりそれよりして學問の功つもりたりと師が目利して國司へ訴へ剃髮の願ひを立るそのゝち國司へ召て法花經と起信論とを不時に所ゝを問て滯らさる時に國解と云て添状を出すその添状を以て京都へ登り鴻臚館に逗留して玄蕃寮へうつたへ治部玄蕃の官人立合てまた法花經と起信論とを碩學の出家をもつて吟味させ滯らざるとミれば度牒といふ者をわたす度牒ハ唐帋の五枚重て畢竟其國郡本姓何年何歳誰が弟子出家を許すといふ事を書て治部玄蕃の官人のこらず花押をすへて渡すなり是を得るを得度するといふ是をもつて居されば たとへ剃髮しても諸國を往來する事ならざる也是今の虛無僧の本則の様なるもの也また右の度牒を所持して受戒といふ事をせねば法師とハいハれず法師といハれねば人を教化する事かなハず受戒ハ筑紫の觀音寺と下野の藥師寺と南都の東大寺と此三ケ寺の內へいづれへなりともたよりて戒を受る故に是を三戒壇といふなり夫より法師とよばれて人を教へミちびくとなりかくのごとく學問行跡の揃ふたる人を撰で出家とする故古來ハ秀たる名僧知識もおほかりしとなり夫佛道の大意ハ上求菩提下化衆生とて戒定惠の三字ハ三毒を治め衆生を濟度せんこそまことに出家の本意たるべきに名聞を先とし利慾を本として三毒の罪猶

ふかくたゞ俗の一大事を投よ捨よとすゝむれども其教を用ゆるもの出家にもなし況や在家に於てをや吾朝の風俗ハ神代の古より名聞にて世間をかざり利欲を以て今日をいとなみ子係相續いたす事是神明の掟也又佛道ハ天竺の教なり其國あくまでに勇猛强盛にて大惡無道の惡國なれば君臣父子のわかちなく强きは弱をとりひしぎ慢心甚しく或ハ淫酒に長ずる時ハ父子兄弟の分ちもなく畜類を犯し殘害五相の惡國なりこれによつて釋尊生れ給ひ王位をすてゝ雪山の苦行身を捨髮をそり愛欲をはなれて慈悲をたれ世のあじきなきさまをかたり三世の因果をとき愚劣强惡の衆生を濟度し給ふ當時の出家ハ我慢つよく淫酒にふけり奢に長じその身ハ王公大人の上にもたつべきものと思ひあがれる事笑止千万なる事なりかの緋衣木蘭色のさとりの拂子も神の御末の五法をそむき給ふ時ハたとひいかなる智識たりともその罪のがれ給ハざる事是また神國のおきて武威の貴き御事ならずやさて又當時發行せらるゝかの慶庵坊の捷徑をミれば雀大水に入て蛤となる竹田のからくりまづ八百屋の久兵衛ハ久庵となれば道具屋の万八ハ道伯とあらためかの刺立をなでながらいかめしき角入の跡の青きこそ遺恨なれたま〳〵病家よりむかへ來るをうれしけにはや小脇指長羽おりたま〳〵一人を治すれは自ら耆婆扁鵲が思ひをなしもしその藥あやまる時ハ咎を一口の食一衣の寒に歸して己があやまちをかれに讓り大切なる人命をもてあ

そぶ事いかんぞや東坡が言にも書をまなぶ者ハ紙を費し醫を學ぶものハ人をついやすと漢書に曰病ありて治ざるハ中醫を得るとこれやぶいの藥をのミ却て病をますよりも飲ざるが中の醫といふ事也またたまさか學者とミゆるわろハ自ら大醫と稱して素難の語を口にしちんふんかんのねごとを持こミ一切理屈の加味加減もその効のなき事ハ當時の病も世につれて文盲になりしやそのからことをきゝしらねばしぜんとまハりも遠くそのうへ遠き比古方後世のそしりありて古方家ハ後世家をそしり後世家ハまた古方をおそるゝ事蛇蝎のごとし夫醫ハ神農黄帝の流を汲ものなれば古と稱するハ神農黄帝よりふるきハなし古方の鼻祖たる仲景ハ戰國の末後漢の長沙の太守なり建安年中天下大に疫病はやり万民死するもの多しその宗族の横夭して救ふ事なきをいたみ自ら憤發して古訓を求め黄帝内經をもとゝして則傷寒雜病論をあらハし万民傷寒疫死するものを救ふにその効また少からず後世ハその傷寒と時疫とを療するに古にたかへり近比京都に我流我慢の闇雲先生の古方家ありてその門戸を建立せんとて上神農黄帝をはじめ聖人の經書までをミな僞書となし古方の祖たる仲景ハおろかかの神醫たる扁鵲華佗をのが眼下に見下し唯奇をこのミ人を疑惑す一犬吠れば万犬ほゆるのならひその門に入りその風をまなび京の水を一二年のむやのまずにもはや京學めかして古方よばハり表裏虚實のわかちもしらずやみうち

の血まつりにまづあたまから下しかけそろ〳〵と欠が立て眞元の氣か盡たちまちに冥途の旅立しかるをへらず口にて病ハ愈たが命がない死生命あり天命ハ醫のあつかる所にあらずと傍若無人の大言を吐ちらす事にくむべきの　甚なりそれ司命の二字ハ周禮に出て聖人民の夭死を救ふ術也しかるを醫のあづからざるとハいふべからずかの暗雲先生出しより京も田舍もおしなべて古方とさへいへば下す事と素人ハもとより醫をまなぶものまでもふるひおそるゝハ此故なりそも〳〵日本古方家の首魁といふハ元祿年中名古屋玄醫（丹水先生）はじめて仲景傷寒論を見ひらきその後後藤氏をはじめ追〻世に行ハる其丹水先生の療する所ハ則我師につたふる所の古方にして今世に用る暗雲先生の古方にあらず古方ハ汗吐下和の四法より外になしといふハ金の張子が涎を舐る古方家にて我師の用る眞の古方にあらす仲景の法を設るや何ぞ四法のミにかぎらんや猶くハしくハ長沙の書にミへたりわれ又そのむかし田舍にありし時はじめて醫に志す時ハ則宋朝以來の後世家也き近世さかんにはやる古方家都鄙ともにこれを恐るわれも是に聞おちせしが是非を辨ぜずしてにくむハいかゝと京師にのぼり吾師鳴鶴先生の門に入てこれを窺ふに先生毎朝講する所の書ハ則古今の醫生祖とする所の黄帝內經なりまた今日用ゆる所の方書ハ仲景傷寒論金匱要略をはじめとし魏華佗靑嚢方中藏經東晋葛洪肘后方劉涓子鬼遺方姚僧垣集驗方備濱

深師方陶弘景本艸集注巣元方病源候論孫思邈千金方及千金翼方甄權脈經甄立言古今錄驗玄宗皇帝廣濟方謝士秦刪繁方王燾外臺秘要その外丹水先生の家の家の書にて隨分と方書ハ事たりぬしかるに古方今方とわかちてそしりながら互に古今の方をとりまぜ用ひらるゝハ何事ぞやこれを名付て何とかいハん何の仁の術とかいハんわれも不仁の道を學び稚より京師にあそび其道をきくといへども好る方に心ひかされ手の舞足の踏事をしらず祇園ばやしの白狐にうかされよるひるなしの學問にのぼりつめ昨日の夢もけふさめて沅湘の水しばらくもとゞまらずちり行し山吹の花もたゞ一年の榮花をなして百年の身をあやまりあらたなる六根も六塵の爲に汚され無明の闇の宿醒もやう〳〵夜明の心地してそれより師家に隨身して心を古書に潛る事また八年しかりといへどもかの無恩子ハ三年磨でも黒しといふわが鈍才もこれにひとしく仁の仁たる道をしらずいたつらに不仁の仁を學ぶそれ醫者仁愛にして聰明達理にあらずんば任すべからずといへりその上ひろく群書に渉る事ハたれ人も及なき故にたゞ野夫醫者の籔原にまた出ん筍もおなじ野夫とならんこそ不仁の沙汰のかぎりなれ中づく庸醫のために非業の死を遂る事溫疫と食傷の二症にあり此二症の毒の深き事時刻をうつさず變災をなす事掌をかへすがごとし此時後世家の柔劑をもつてハ救ひがたし先飲食のためにやぶれその毒不ㇾ消ときハ胸膜の内苦

痛する事劍を以て割が如しこれを吐ども出ずまた瀉さんとすれとも下らず六脈たへて手足氷のごとく人事をしらずしかるを後世家ハ先元氣を復して一身を暖んとて人参附子を用ゆる事頻なりその藥重きが故胃中に停滯して胸腹の中ます〱苦く暫時の中にのたれ死に斃るものこれミな其治の迂遠にしてゆるかせなるが故なり此時に古方家の用ゆる所ハまづ備急圓或ハ大承氣の類を以て其毒を吐下さすこと速なり脈絶手足冷るものハその毒胸腹に有て陰陽升降の氣ふさがる故也これに巴豆大黄の類を用てその毒を吐下せば諸經開て陰陽の元氣升降し上下通達して忽然と醒るがごとく脈出一身あたゝまり暫時の中に快氣する事必せりかの溫疫のごとき二三日にして斃るものハその毒甚敷によりてなり一日の内異症傳變する事再三或ハ四五度に及事ありその時數日の方を以て一日にこれを行ふ事ありもし此時緩劑をもらひその邪を驅ことゆるかせなれば忽熱毒裏に落その盛なる事火に近くか如く五臟骨肉熱毒のために焼れ舌卷唇かハき面赤あかづき兩便不通して狂人のごとく立さハぎ或ハ口血はしり耳聾皮毛焦大張厥張の終經をあらハし悶絶してもだへ苦むしかるを其毒を浮さんとて人参附子を頻に用ゆ是六月炎天に火を以て炮るにひとし或ハ漸黄連黄芩の類にて是を防がんとすれども是一滴の水を以て大火を防にひとしく阿鼻叫喚焦熱地獄のくるしミしてつゐにハ蒸死にして骸ハ黒ふすぼりとなることミな

人參附子の害をなせしことをしらず其治のゆるかせなるが故なり眞の古方家の手に入しものハ此時に至て石膏芒硝大黄の寒藥を用ひて其熱毒をとること速にして其藥もまた黑白の相違なり内經に所謂熱淫所ㇾ勝治以㆓寒凉㆒とハ藥の事也われ此のごとくの急症にかけつけその病を治しその功を奏せし事くハしくハ予が異錄に載すさて又當時後世家と稱するもの古方ハ唯攻擊をのミ用ゆる事と一筋に思ふハ甚愚也その變化に應ずるこれを名醫といふかの闇雲先生の門下朝夕攻擊をこのみまゝ斃るゝもの夭なんぞこれをにくまさらんやその邪氣いまだ去らざるにミだりに溫補の藥を用ゆる時ハその邪ます〳〵かたくして正氣日ミに鬱し或ハ煩しあるひハ熱し骨立してつゐに斃るゝもの是參附の過る故也彼人參ハ元氣をたすくるといふを便に醫者も素人もそれ人參これ人參といふハ何ぞやそれ人參ハ靈草にしてこれを用るに時あり野夫醫のよく用る所にあらず風俗文選の俳人すら人參の利害を論ず醫としてこれをしる事なきハあたまばかりの醫者にしてほとんど俳人宗匠にだもしかざるべけんや

南美紀之程

美丸画

序

御殿山の櫻ハ散と奥坐敷には白帋の花を咲せ茶やの迎ひの挑灯ハ谷山に散動サツサキセ〱ノ遊船ハ中の岸木に繋く客と間夫との往合橋も己かさま〱別路に宵の口舌を呫てお内の首尾を鐘鑄の松迷ふ心の淺黄裏ハ天王洲の深ミへはまる此時妙國寺の二王十面も忽品川寺の地藏と變る爰に予か先生著す一書ハ穴の稲荷の穴を穿て不至通の輩にさつく豈戇ミさる近世の滑稽何ソ此小説に及んやと

自序

先陣の魚鱗金杉を走れ後陣の鯨六郷を渡る三縁山の鐘鮫洲に落大龍寺の太皷江ヶ之臺に響木枕の一睡も按摩の笛に驚旅客の浪枕は横雲を催す白雉山のジヤン〳〵ハ目黒歸りの足を早め ナアミ引 ヨウミ引 の馬士節も東雲の烏と共に別をつげ口舌の松に彳白洒の手拭は戀別の首尾をぬらす夕し御けんの程ものふ亦もや御宿の御やうすと書し文のさきめの口紅へ粉を萬客常る情の南門イツ來なんすをゆふ汐に問答河岸の名殘を惜こ憎や可愛や裏表僞言と實情と附合と義理一篇の戲契に命を延る無苦傾契ナソレおちかひ内にといふこ
としかり

於二萬字樓一見通

南畝山人醉中識

面美知之娌目錄

○第一回
小鄽傾契　加德祭穿言金重舌震段
○第二回
大鄽傾契　床口舌亭主悲娼教訓段
○第三回
別莊傾契　戀病床爲男謬身段

以上

面美知之娌

南朝山人著

第一回

すゝしさや爰も南方無苦世界と亀成か愛しも昔石山寺に籠し君か名月のさやかに湖水の浪にうつろひしと書せ給ふも思ひ出されていとおし此廓に入ときは東山に妓を携し毛唐人もかゝる楽は知るへからす岡安杵屋か一曲には忠臣も迷ひ孝子もうかれ八ヤ権も神跡に残す柳當所の繁昌といつぱ朝に魚の市あれハ夕に乗込の駕あり紋日物日の廊下の音ハかまひしくして紙砧に不異宵泊りの客ハ袖か浦に碇を下して居續を催し夜舟漕新造あれハ梶を取部や持ありいやな風にも身をまかすハ年季の灘をのかれんか爲也連子に掛し手拭は眞帆かと疑ひ片帆に笑ふ娟飯盛の懐へ手を入舟は一夜泊りの契をかこち通と野夫との乘合も岸によるべの夜の世界獵舟の篝ハ正面の唐紙に似て七星九星の形をあらハし茶屋か迎ひの吊燈ハ二日醉の頭の如くふら

つかし谷山のかたへ急く後から【金十】いつたいどうらくはだのふうさらしの手拭をこしにはさみまさの下駄に宍のはなをゝすげ髪をちやせんに結ひまかひこくらの帯を貝の口にしめこうじちやい木綿ちゞみの單物たはこ入へなめし皮にせうふ皮のさんとひきせるははりみけ【加德】これハ山の手のちりからぐさかやきハ黒ひろうどのとくしてへをはまくりにぬきあげ髪をこつかこにゆひ花色しゆすのひろすきとおほしき帶めんちりの中古の單物はらたのうらつけたはきそろばんしぼりの手拭をくだにまき尤ほそ身を一本きめ年ハ二十二三長唄にてくる【石遊】年ハ二十四五いしやの内でしとこえてせうかんろんを懐へいれ是もばらをのうらつけさらし嶋の單物ホツ過といふ黒ろの羽織あゝたんずべしふくちう大ひに北山の豊心丹ときいたふうにてしやれなからくる【石遊】月の出汐は千金〳〵擧頭望海月低頭思娼婦 ともいゝてへ所さ【加德】コウ金公アノあかりハ何だろう親舟にしちやア遠ぜおはやし町から出る獵舟かの【金十】何さありやア順風の入舩さホイ南無さん犬乃くそをふんだと おきやアかれすいくりの皮だ【二人】イヽ〳〵ト笑ふ【駕】アイ旦那宿へ歸ためしやしねへか【金】おれヲ、むこくひんかうに見立るナ乘ハ内から乘てくらア【加】ひんかうもたかづへもひらすはとふた【石】奇哉妙〳〵めうはりの鏡さ【金】鏡に殘る松竹梅ハ【石】甚哉滑稽の大ひなる實に當世可恐だ【加】アレ〳〵向ふからいの字伊勢屋の吊燈と丹州やの吊燈とこくらかつて來るへちやアねへ芝居の魂といふみへた【金】ありがてへ【石】妙言〳〵【金】妙言年代記か【加】出すもんだノコウチツトおきばふか所で休でいかふしやアねへか【金】そふ言點もよふこせへしやう是ハ谷山のよしずゑんしうやのおきぬが事也品川通のしる處也【加】後をこなせへ駕か五まい並て大急て來やす【石】アノ駕にやア吊燃か子エゼ【金】ありやア月のあかりを用るかん略だハナト【三人】おきぬかこせへはいる【きぬ】ヲ

ャとなたもお揃ひて【金】トゥゞあねへ賑やかゝ【きぬ】アイとふても祭の内だから子【金】祭も燈籠の出來た時の樣しやァあるめへのゥ【きぬ】アイ左樣さ 三人にマアおッとだす トいゝながら茶をくんで【石】加德さんハあの時の出しものを覺ているか【加】アイ覺ていやすはなしておきかせ申やせうか【石】【金】サラハ聽聞いたさふか

加德祭禮乃穿
金十舌震の段

それ谷山のよしすか鱗吊燈の揃ひ坂の八軒が揃ひのとふろうハ紙細工の千羽鶴利根川か狐忠信の人形三河屋が鹿子道成寺の人形兵庫やがわしに洞の猿生松屋か座敷を廻りとふろうにして春か花見の躰に幕を張てミせ夏ハ泉水の菖蒲にほとゝきすを鳴せ秋ハ薄の中より月を見せ冬ハ竹に雪のけしきをミせやした此菖蒲ハ切細工すゝきははね元結雪は何てしたかミてる内にとけやした京やか萌黄天絨の細工て孔雀をこしらへやすし錦大和かつくりものゝ鷄かおのれとけやひをしはだか子藏か行司ャサ黒門前の茶やから善福寺門前の茶や迠か櫻の大木を燈籠にし

て内を花見座敷の見立星聚菴が内を夕良棚にして男女の下冷の人形短冊のとふろふへ雲峯が手と覺しくて樂は夕良棚の下冷男ハてゝら女はふたのしてといふ歌をさげやしたマァあらましこんなものさトゥタきついか【二人】能覺てゐるの【きぬ】ホンニ能覺ておゐてなさる子ヱ【加】チットきなつくせへ【石】ヲレダ〳〵芝居の雪か火鉢へふつたやうな匂ひだいめヱましひ【金】サアチットト居らッしやいましと若者めかう【加】アイいきの廣嶋と仕やせふ（みな〳〵たつ八十茶代をおきてはした錢をとんふりの中へいれる）あねへおせハよ【きぬ】アイおかえりに【二人】おさらハ〳〵【石】時にあの駕ハ來ると思やァ跡へ歸らァ【加】アリヤア駕の稽古だハナ【加】おきやァかれ跡のハ初音やだハへ【石】ドレなる程横もつかふにたきめうかの紋の付だ挑灯かミえる（程なく谷山もすき新宿も通りぬけて本宿へかゝる）【石】あすこに高くてうちんのミへる所ハ何だ【金】あれハおかりやヨ【石】時に今夜の世界ハ何處た【金】加徳か馴染の桐屋とやらさ【石】ハァてへふ賑やかだと（ひいとろミせへより）此骨杯ハいくらする【商人】ハイ百八十で御座ります【加】夫を買か【金】何さなふるきだろふサア〳〵こむから早くいかふぜそしてもふ五ッたそふて奴かちやら〳〵を引てきたゼ（本宿にかきりて時たかな棒てしらするなり）【石】ヲイ待せへナ是百にまけねへか【商】もそつとお召被成まし【石】いゝ値だゼ【商】よふこさりますあげませう【石】ヲイ錢ハねへがくれるならもらつていかうといゝなから逃る【二人】わろ

ふ【商】忌〳〵敷（程なくおかりやのまへあと　ふりきりやの前にかゝる）【金】爰かく〳〵【石】唐紙の印ハ何たト 此印を
ミてヲツトよし〳〵サア加徳さんあかんねへト【三人】トロ〳〵ト（アカル）【若者】先へたち子供やお茶
をあげや【子供】アイ、、、（引）【娘】おこしを【加】ヲイトぬいてわたす【娘】モシお小柄が
【加】なし〳〵【若者】先爰へと（二階の引つけ部やへ入あん　とんをりきたてゝすへる）思召てもござりますか【加】去年爰てお
しづといふ子を買たァ【若者】今ハお出成りません【金】【石】そんなら見立も咄したぜ【加】そ
ふしやせふ【若者】左様ならしはらくと（したへゆく）【子供】アイお茶を【金】おやッかねへこの
小蔵ハしよほ〳〵雨に出れハいゝになんだしつをかいてるなてめへの手ハきんつばやきをつふ
したやうだナ【子供】きついしやれさ【金】ヲツトこほすハ御免た是へこほすと年を入させる
ぞてめへも年一ぺい五両六両くらひなものだ【子供】しつたかすかねへぞヨウト（これもしたへ行）【中
居】おミたてがこさります正面をへへんなせへよ【正面の】（女良とせきそきたまんま二　人かけこせのすミへすへる）【若者】ハイお
見立被成りまし【三人】サア〳〵待かね〳〵（手拭をかむり若者うしろへまハるは　しこのちうたんからのぞいてミて）【金】コレ若衆アノすミ
から三番目に外料いしやのかうやく箱をミるやうに赤ィ切ャ青切てまげへ綸をかけて浅黄の三
尺をメている子に仕やう【若】ハイお吉さお立なさいまし【加】おれハ團扇にむた書をして鼠
鳴をしているのかいゝ【石】不佞ハ丈長て鉢巻をしてみをかいて居るのを【若】おまきさんお

らくさんお立なさゐまし（みな〱二階へかえる）【加】マァ下に居子ェカ棒でものんだか【金】やてへぼねハいゝが玉ァくそだ【石】トントト言語も變て外國夷狄の如くだ子【二人】（比とはワからぬゆへだんまりにてゐる）【子供】（てうし硯ふたもつてくる）—（ミたての女良三人来る）【若】サアお盃を【加】（盃をとつてちよいとうけさかづきたいへのせる）【若】おまきにさす【若】（盃を金十かまへゝたす）【金】（是も呑まねにておく）【若】お吉にさす【若】（又盃を石遊にわたす）【石】（是も盃をとりおなしく臺へおく）【若】おらくにさすとなたも行ておいて成りまし【女良三人】アイト立て行【金】ホンニおれかやつあ美さ美ひかチットけてへふるヨ石遊子ナァおとなしそふていゝ【石】共代には手も足もありやすめへ【加】光交か書たさらさ繪ありやァあるめへし（このしやれいつかふわきへへおちす）時に酒を取にやらふしやァねへか【金】手を叩ねへナ【石】若衆ハ今そけへいつたコゥ若衆や〱【若】ハイ【金】貴様酒肴を一片そふ言てくだせへ【石】コゥ酒ハいゝのかいゝせへ【加】木倉屋て琉球の三ノ字か谷やの白菊かいゝにた（やとはりうたにやのとなり）【若】ハイト下へ行【金】アレミさつし鴨居の間に目黒土産の餅花かさしてあらァ大方ひるの客のをよい〱女良か晝飯にはつれた時食ふのたろうおそれるぜ【加】能惡口をいふナ【石】此屏風ハ誰だムゥ南溟かとふばくさい手だコゥト君暗舊府歸明月滿前川後の屏風ハ何たと明てミて是ハ雲山か【加】そりやァ何所の人た上州屋の【石】そうよ是も唐詩選た春眠不覺曉處〻聞啼鳥夜來風雨聲花落知多少へゝゝ（引）和漢まぜこせくらが沖だ節分の晩に

やァチト恐るス〔逢方〕（三人着かへてきてあんとんの後へすわる）〔加〕そんなに氣色どらすとこつちへよんねヱ〔娘人〕ァイトいつた斗（なじミのきやくのうわさのミしている）〔子供〕酒肴持て來る〔金〕かんをしてきたか〔子供〕アイ〔金〕てうしへあけてくりや（かむろ白丁からてうしへあける）〔石〕ソレこほれるもふよし／＼〔加〕をせは／＼時に大平ハなんだ玉ふわか丼ハホイこいつもお定りの通さ〔金〕一盃はしめやう〔石〕つぎやせう〔金〕これハお世話（トくつとのんで）をめへヱ上やう〔らく〕チツト上やせう〔金〕サアおあひ〔まさき〕これハお見立にあつてめへわくねお吉さんおりよけへながら（ト盃をたす）モシへあいは手本てこすへソヨト（くつとのんでわたす）〔金〕ヲソロ／＼コレ／＼こぼれるハナサア上やす〔らく〕（も一ツのんで一座をミまハして）上やせう（トかとくへさす）〔加〕チツトおせへやうかの〔ちく〕マツおとりあけ〔金〕おとりあげ名代か〔石〕緑飴と聞へやす時に硯ぶたと出やう〔金〕はせの小ぐしかコイツモ亭主のつりだめだ〔石〕はせめつらしいノ〔金〕はぜでも（ミな／＼わろふ）〔加〕そのかまぼこを壹ツいかう〔金〕ヲイト（はしを取て）此はしれよたかそばのヲ上たのでれねへか〔石〕つミのふケヱ〔子供〕おまゝをたへなせへし〔加〕そこのすミへ置て行キャア〔石〕腹中ハ空ミたスコ茶つろうか〔金〕おいらがくはねへと外の客へ廻さあおなし錢ならくれねヱハそんだくわつし／＼〔加〕あんまり淋しひ三味線てもかりにやろふか〔石〕能イ妙計／＼〔加〕おめへおりよけへなからかりにやつてくんねへ〔お吉〕

アイト手をたゝく【子供】アイヽヽ引下よりくる【お吉】三味線をかりにやりや【子】アイトしたへ行【金】おらァ飯のかわりに茶と出やうやかんをかさつし【石】とつてやる【金】ヲイありが〳〵何た此茶ハお寺て呑やうだスコ間屋場の溜水といふはもある【石】そりやァ何の言だへ【金】小便くせへといふことよ【石】ありかてへ【子】三味せんをもつてくる今一人のかふろとこをまハしにくるサアあつちれヱ御出なせへし【加】床といふ所か【金】代地ハとこへ出た【子】アノ下てこさります【石】林奥片里ハおそろ〳〵ト下へゆく【女良】三人も一所にたつて行【子】硯ふたのくいあらしてうしくいのこりのたいのものをもつて跡ゟくる【お吉】となたもはおりをおよこしなせへしまつておきやす【加】【金】羽織ハなし〳〵【石】不佞斗かとはおりをぬいてわたす【逢方】二人チツトおよりまし【客三人】よかろふ〳〵是より女郎はてんての客を床へいれてしまいてうづにゆくとかなんとかいつてミなたつて行ミせへいつて若者にサアいきなと聲をかけるこれハちやのなき客ゆへ此ときつとめをさけにやるきつかけ世夫ゟ【若者ゆき一ツ二ツしやれあへせかゝミあつてつとめもさけてしまうと見せへきてモウゝ引やうこせへすの聲をあいづに出てくる事なり【石】わりとこの屏風越に隣屋の兩雅人娼婦未來是何の謂ぞやァ、可嘆〳〵【金】何さ大方あんとん部やかお針部やて用水場のめだかをミるやうに壹ッ所へおつかたまつて出しッこのおでん白菊あんばいよしそはィ〳〵にうめんやそうめんうて玉子するめのつけやきてしやれてけつかるか但シハなめかかたても始ているだろうそして硯ぶたのはしをミさつせへやきばのたきつけをみるやうた床の間の花ハ十月斗り跡のお花三文をいけて掛物ハ開帳の鬮取に出す畫ハとうたおそれるの【加】恰も立板へつまり小便た【金】おきやか

れ此枕をミねへ廻し枕の名代に恩にきせて出すやつた比翼紋ハ氣さハりの金箔の古へも霜かれのやかん燒原場所附といふもんたの 此ときうはそうりのおとやかましくして【まき】【らく】來ル【まき】もしねなんしたかへ トたはこを吸付なからきく【加】おめへのこぬ内ねられるものか【まき】おつういふ紋の上下子そして勝手かわるいからそつちの方へね子エアレサ蚊やをそうすると蚊かへいりすよモシエ煙艸〳〵【加】いや〳〵【まき】ヲヤきついあいそつかしさそんならおよし トうちはをもつて加徳の方へ風のゆくやうにあたる【加】ア能風だ【まき】是斗きに入たかへ【加】マタありさ【まき】何かへ【加】何でもよ【まき】言ねへとこすくるよ【加】ゆふよ〳〵【まき】サア【加】美しひ所か【まき】フウすかねへ トきせるてたゝくまねをする【加】あやまつた〳〵【まき】そんならたまつてねなさるか【加】サアねやう あとハひそ〳〵聲にて作者もきゝとすれ【石】塩茶を一ツもらつてくん子エ大ふ醉た【らく】アイ今取にやりやせうコレヨ廊下を通るハミとりか【子共】アイ【らく】爰へきやアノナ火入を持ていつて能いけてそして塩茶を壹ツ持てきやまたこがすめへよ【子】アイト行【らく】モシエぬしの内ハどこだへ【石】此方ハきのしれねへ所さ【らく】とこへ【石】麻布さ【らく】おやそんなら里曉さんを知ていなさるかへ【石】きいたふうゆへしらぬものも アイ知る人さ【らく】畫師の北明さんハへ【石】あれハ畫の方の弟子兄弟さ【らく】アノ狂哥師の山道さんハへ【石】是ハ至てこゝろやすしさ【らく】ほんにかへ

と言なから立て行（しはらくあり て若衆来り）〔若〕モシヱあなた名ハ麻布の北明名とお兄弟そふにこさりますそれでハあのおこハどふも出されませんあのおこの所へ御出なさるからおきのとくなからおミたてかへになすつてくだされまし〔石〕たとへおれが兄弟ても一座を仕ねへから出てもいゝちやァねへか〔若〕イヱ左様ちやァこさりますかあの子もモウ此八月年か明ます終ハ北明名の御世話になりますのてこさりますからとうも（トいゝなからあたまをかきてぬく いをひねりまへしたりなにかして）また能子もこさりますから何分にもお氣毒なからおくれなさりましわるいやうにもいたしますまひ〔石〕（今ハしらぬものを知た かはをしたともいわれ すせんかたつきて口もきか れすたゝましり〱として）そりやァ虎丸かたてをするやうにひらつたく出てくれろといふのをならねへといふやほてもねへかまかつて言ふならうりものは買物たからおれか買てもいゝハさそれてもならのはやこのてしやァいかねへとまた新手を出すのかヱヨハ此上ハせひもねへ足下にまかせて（築地か聲色ニ而）今宵一夜を明しがたすまぬ心をとりなをして明六の鐘を相圖に〔若〕（荒五郎か聲色ニ而）まつ夫迠は此一間て〔石〕若衆〔若〕あなた名〔二人〕サラハア、、引〔引拍子木〕カチ〱〱〱 カチ〱〱〱

（金十か座敷先より女良も来らすとなりの石遊かいさこさもみゝへはいらすひとりちれたりてうつにいつたりあんとんへむた書をしたりしてまつてもこすいさをおこせはつれに一生のいはれ艸とかまんへしていれともあまりおそきゆへさつきそんりやうでかりし三味せん一人もしすかりたまんまくらもとにあるを引よせミつてうしにてめりやす水かゝミをうなる）〽人めもしらぬ男なら恨も戀もあるまひものを（折ふしとなりさしき のくぜつきこへる）〔女良〕忘れもよもやしなさるめへ初會のとき十六人一座て來た中てまんさらてねへと思てまよつ

たかわつちかいんくわ其時思ひ切たらよかつたろうに〽なまし近江の水鏡寫て見れは水底ハ堅い堅田の石山と「客」なんのこつたそりやァみんなこつちからいふことたうらにきた時からおれか身ハおめへにまかせるのャレつれて逃てくれろのとへきつうのせたにわしやのせられて思ひすこしはわれ唐崎に一ッ前帯しとけなりふり「客」ァ、ふさいてきたサァ歸る／＼「女良」（涙こゑにて）そりやァ、とふよくたマァ待ねへ〽譬へあハつと三井寺の鐘ては思ひいるさきの矢橋の風に比良のか雪の暮「客」コレ能聞よ此やうに氣強くいふのもみんなてめへの身の爲たハおれといふ虫かあつちやァいゝ客もつくめへしそうしちやァてめへのつまりハテ當分きれた分にしていれハ部やの前も能なるしまたはふはい衆かなんといはふかかといはふが〽人の噂も七十五日浮名きのとく山時鳥「女良」それハマァそふいふもんたけれと〽はてそふしやれへ／＼「客」たとゑたふゆふうきかんなんをしのひても〽末ハひとつに元の水何のこつたこつちて諷て隣りて口舌をされてハうきらねへせんさくだ此ちくせうめは何をして居やァかると（トすこしおこりきこゑゝの所へお吉やう／＼くる）

「お吉」ヲャきたねなさんねへか「金」くそてもくらやかれ是耳の穴を能かつほじつて聞ァかれ忝も配所の月をミるきになつて此嶋へ天降りやァこんな貧乏やてへて勿體ねへ此金十さんの紫磨黃金の肌へをよごしやァかるかへ先うぬか面を鏡てミろ姫路皮の小紋形かとぶへ落たこ

んぺいとうさらさ畫の鬼といふもんたはそんな大な口てくせへいきを仕と七里もうそはふだろふ洲崎へ上た鯨のやうに目はかり細くしても金十さんといふ通人にはうゐらは手をとるたろうこれへ神奈川の馬と傳馬町の御用挑灯と大井猿町六郷りやうの人足と此金十さんか通らねへ内は品川の夜は明ねへハヱそんなに三助まつたりをミるやうにからた斗りふつてもいふことはてねへあんまりきをもむなへヱ品川の事は谷山から三丁目迠の内は何やの唐紙は何を付る相印は何て紋所は何を付る谷山の小便たこか十一有も高輪から宿の入口迠石橋か七ッ有も知て居るしやてへミせの出來合しつぽこは料理番のほまちになる仕舞日ニ提る簾も小ミせは四ト六トのかね合から出て四六の印に子持筋を付る信濃やの水の赤いも居木橋の蛇か天昇したもミんな金十㒵の胸におさまつて居るはへヱ「お吉」ミんなワつちかわりいからふせうしておきにはいるめへかとふそ今夜はねておくんなせへモウ七ッたから若衆でもきゝつけて起てきちやわるいしとなりの衆もミんなよく寐ていなるのに「金」やかましいわへ若者か起て來やうか太神宮か起て來やうかおれかこれへものといつちやァ雪踏の皮の付やき四文錢のはり〳〵半鐘の丸漬かはれんのしたしものかな棒のきんひらかとふへふん込だ皮足袋よりこれへものァねへはへ「お吉」それてもふいゝかへそんなにならへちやァとふり道かふさかるよそしておめへのこれかるもの

ハまたあろふ店賃の滯つた大屋ゐと日なし借と米やの借金乞ハこわかろふチェ馬鹿らしい【金】ナンタ此あまめハ　ト枕をとつてたゝきにかゝる處へ【加德】【まき】ヲヤなんた【加】マァおれに預けさつせへしつかにいつてもわからふに【金】ナンタぬし斗りもてたとつて雛棚の犬張子ちやあるめへし向ふへならんておれをひせん德理の腹かはきためへすてた天狗の鼻をミるやうにへこませるとはねへあんまり此あまめかおれを馬鹿に仕やかるからのこつた【金】マア〳〵夜更たからおれにあつけるがいゝぬしをつふすやうなこともしめへ　石遊ぬ起てくる　【石】なんたか今夜ハつまらぬたらけだ時に金さん夫慮那懸河か辨を震て畏りに逆論することなかれマァ機嫌を直しねへ〳〵【金】何さ機嫌を直せの直さねへのとやゝゐの寐起てハあるめいし【まき】お吉さんおめへもなんたな　おきち何をかいゝにかゝるをうちけし　おめへか爰にいてはわるいからマァあつちへいつてゐねへ【お吉】アイそんならわつちも立ぬしもきのすむやうにおたのミ申やす　ト立てとなりのさしきへはいりつまをまたくらへはさんで　【お吉】おとなさんおやかましうこさいやせう【おとな】アイ何だかむつかしいね煙艸を吞な【お吉】ーアいつてこやう〇內ハ漸〳〵しつまれどおもては賑ふ馬士ぶしにくゝり戸の音くハらく〳〵御機嫌よふの一聲ハ〳〵後胡の夢やさまゝすらん〳〵

第二回

「中の間」の（七ッ時） かけこせ残らすてんての部屋へ引く足よりねるもあり外をかくもあり琴三味線のけいこするもまたおはりの女郎〔へやへあつまりきやくのうはさをするあり其女郎のきゝ也にかひの「此あや」かさしきへひる遊
ひの客とこへてせうしをたてゝひつそりと尤色客とこへたり 「此綾」モシヱ人目か有やすから笑ひ顔もしておりいすがねおめへさん
の事を思ひ出しいすといつそモウ死たくなりやしておまんまも胸へ通りやせん トうつむいてなミたくむ 〔座敷踊り
新造集りて哥かるたをとるところへて此綾の新造「此花」か聲とおほえて 哥かるた上ノ句 へ心にもあらて浮世にながらへは「小鶴」下ノ句 へ戀しかるへき「片
里」アイ爰に有した「哥の」ちらさぬやうにおとりなんし「此花」上ノ句 へあらさらん此世の外の思
ひ出に「五柳」今一にひ勘當もゆりて此三階へも晴て來てへものだしかしてめへもまだ丸五年と
いふ長へ年季をもつてゐれハ「哥の」下ノ句 へいかに久しきものとかハ知る「五柳」モシ夫迄にひよ
つとマア「此華」上ノ句 へ忘るゝ身をは思ハすちかひてし「此綾」人のこゝろの替るといゝなんすの
かへそんなうわきなとはおさいせんハナ「此花」上ノ句 へ逢ミての後の心にくらふれハ「片里」下ノ句 へ昔
ハものを思ハさりしが「此綾」ホンニ毎晩逢れる時にはたくさんさうに思ひゝしたかそふいふ
身になんなすつてから人の目つまを忍んても逢てへか一はいてもしもひろふ神もありやんすか
と夫を樂しミに死てい命もなからへておりいす トハつと泪にむせかえる「五柳」もゝ泪くんでハテ 死て花ハ咲めへし命

有てのものたねたそんなにくよ〳〵思つて短氣（たんき）なとても仕出しおれにかならすなけきをかけてくれるなよ　しへしうつむいて人めた忍ふおとこなき【此花】へ（上ノ句）君か爲おしからさりし命さゑ【小鶴】なかくもかなと思ひける哉【片里】そこにありいす哥（うた）のさん取てくんなんし【小鶴】おやわつちも手をつけたからふせにしやせふ【此花】まんがちに仕（し）なんすなへ【此綾】とは思ひゝしても【此花】へ（上ノ句）花の色ハうつりにけりないたつらに【五柳】此年月をうかうかと雨（あめ）か降（ふる）ふが鑓（やり）か降ふが此地へこれへとはなく內の首尾を小女に賴ておゐてそんじよそこゝとこしれへことして出てくるのを內ては何ともいわねへとお慈悲にあまへてつけ上り夢の間も逋たく此樣ナ身の上になつても恥も外聞も忘れて爰に計いてへ譬この上との樣ナことになるとても【小鶴】へ（下ノ句）身をつくしても逢んとそ思ふ【此綾】それは眞言かへ【五柳】是さ聲かと　袖た口にあてる【片里】へ高しの濱の仇波ハ【哥の小鶴】掛しや袖のぬれもこそすれ　めはや哥かるたしまいとゝへて【片里】ヲヤさつきゝへなんだ二枚が夜着の袖から出んしたよ【此 】ソレ見なんし【此時中の間の】

此後ハ作者も用あつて下のさしきへ行しゆへつゐきゝもらしぬ　○　評ニ日石遊か物しり顔にてふらるゝも金十か悪黠の遊ひもいきたいたらさるにおのれのときハたふにてつゐまゝしくしろたますハ女郎のならいなれハにくむにたらすかつまた女郎にたまさるゝハ客のならひゆへ遊ひハ無口にてうちばなるこそよけれ

第三囘

爰に蓮本やが別荘ハ東海寺の門内にして垣の内に一ト本の柳茂り枝折門に虫喰の額をかけ千蔭か筆に蓮本舎の三字を顯ハすかの陶淵明かむかしをしたひ東籬に菊を摘悠然として望二南山一と云しうちなり身のはてをいかにと人に問ふもうし問ぬもつらし武藏鐙さすかにとのかけ硯頃しも秋のすへつ方思へとまゝにならの里妻乞ふ鹿の夫よりもいとゝ悲れの【増花】ハ思ふ男に別てよりうつら〳〵の戀病に此別荘の假住居松にからまる蔦かづら垣根にまどふ槿も獨りハ立れぬ世の中にまして便なき虫の音もいとしん〳〵とつけ渡りはや寺〳〵に鳴渡る諸行無常の鐘の聲里の全盛ひきかえて此林奥の侘居ひ引詰髪に取あけるこのほとの煩に髪おそろしく色青さめしんに苦勞をするゆへに目のくぼミたるをハひのと又思ひ出す吸付たはこありしむかしの口舌にはふたれたりふまれたりやつはりそれか嬉しさに知つゝ腹をたゝせたも今でおもへは後悔と思ハすなミたほつちりと鏡の上に落たる躰 となりのかミすきや【幸治】かミて おいらんお心持ハよいかへ ト きけへ【増花】しんせつによく尋てくんなんす何はき〳〵と致しいせん【幸治】かきねからのぞいて 髪を結ふのはおわるかろう反古かいるなら上やせうにへ ト庭にふしたるかミくつをくれけれハ 【増華】おかたしけへ トなに心なく引のはすほごの中に【秋朴】が手に似た手かミありこれハミろ程まかひなく「増花か方送りみなり文日

まつとやすきし御わかれのふしより内かた首尾あしくたゝいまはうちにもおり不申淺草の馬道におりいつれおちつき處さたまり候ハゝさつそく御しらせ申候まつは右のやうすまてにしめしら〱

あら〱　かしこ

十三日の夜　しれしゟ

はなゟ

御もとへ

とよめはよむはと我身の上につまされて思ハすこほすなミたしつくおりから寮あつかりの〔た助〕ハイ増花ゟさそ御たいくつて御座ませうモウ寺中の鐘かなりますからおしつけ日もくれませうお茶を拵ましたからサア〱おあかり被成まし折から〔法禪寺〕の〔勤行の聲〕南無阿彌陀佛〳〵〱〱〔木魚音〕ホク〱〱〱〔五助〕私も段〻の不仕合てたつた一人の娘を親方へおたのミ申ましたか只今ハあなたの新造になりまして千代花〱と御ふひんがつて下さりますけなそれて今もいまとて千代花か所からおまへゟを随分御大切にいたせト申てみかまいりましたかならす〳〵御氣遣なさらす御保養なされませ〔増花〕

千代華さんといゝ親こさんといゝ何から何迄氣を付てくんなんすが此度ハ能ハなりやすめへこの御恩ハ死ても忘ハいたしません（トなミたなから手を合ておかむ）【五助】ハテ全盛のやうにもなひやほをおつしやりますなとうしてみてもコリャかけおちなさるより外にしかたハこざりませぬやう〳〵と秋朴さんのありかを尋ね相圖を致して置ましたから心静にしたくをなされ今宵の内ナソレ合点がコレサ参りましたかハテ私が獨りかふりますれハとこもかしこも角がなひ【増花】（さしうつむきて暫くことはもなかりしか）もつてへねへとしよりに難義をかけては行末が思れんす【五助】私も跡からお供を【増花】そんならにけても【五助】コリャシイ、、、（引）【按摩乃笛】ピ、ピ、、、、（引）【金盥の音】くわァん〳〵【此所黒幕忍ひの三重大臣柱に柳の立木あり枝折戸の前に井筒の井戸有り脇に篠竹の垣あゝて】幕明【秋朴】急で來た程に爰がモウ蓮本の別莊さいわいあたりに人もなしソレヨト（懐へ入ておいたよふこをふく）【五助】夫と心得戸をひそめ善ハ急と増花を連出し戸をぴつしやり【秋朴】増華か【増花】秋朴さんか御無事て【秋朴】健固て【増花】嬉しうこさんす嬉しひと（いたきあふところを）【金十】【加徳】扨こそナのかすながてんと邪魔する二人【秋】すかさす合点と身かまへしャァ邪魔ひろくおのれらハ【金十】【加徳】ヲ、神田の客に頼れて増花を盗ん爲の廻しもの【金】此頃聞ハ別莊の住居是幸と忍ひこんだか今日只今【加】ぬれ手てあわ餅あんころ餅すつぱりまいつて上あんばい【金】じんしやうに渡せ（トかゝるをくるまなけ）【金】（にまた飛つくをかたすかしそれありあふすきくはとつて）雨

方から二挺立〔金〕〔加〕か相打してたかひにうんとそりかえる　かゝる處へ以前の石遊ふらてうちんにてみえかくれにきかゝり　〔石遊〕〔五助〕兩方見かわす顔と顔胸にきつくりはつと落すふら挑灯今のは慥に胸と胸ム、それよと　行んすろとろうしから加德が脇さしをぬいて　〔秋朴〕眞かふへ切付られ〔石〕たア、、く〱く　トわきへたおれる　〔五助〕經死人ハわたくし是か娘か御恩かへし跡にかまハすと少も早く　トいふうしろから〔亭主〕の聲にて　主の目をぬくふとゝき物切てもあきのねへやつらナツレ五助跡にはおれか殘居る少しも早く追手にゆけまだそこらに居るてあらふナツレ

ト投出すさいふのかね〔五助〕　月のあかりにさくりあけて　お旦那さま是ハ〔亭主〕ツレハあの二人へ心附のかねイヤサ兼て二人に心を付ていたか今此しきナツレ五助譬一年か二年立ても見付ぬ内はおぬしも内へ歸らすに二人か事をきをつけてイヤサ氣をつけてさかしてくれと　すゐもあまひもかみわけた亭主の詞に　〔増花〕〔秋朴〕もかけたゝふしおかむはかりなり　〔五助〕左樣ならお旦那さま〔亭主〕五助との〔五助〕落付先ハ〔亭主〕手帋の便りて〔五助〕おしらせ申ませう〔亭主〕先夫迄はさらは

ヘア、、、引

門人　南曉庵笑蕣書

面美知之娌尾

跋

南朝うし艶婦の情を述て一ト筒の小説を著す予是を閑に才ハこすかみの薄よりして意味ハ娼婆の巾着よりも輕く論は三會目の花よりも尊し所謂此書ハ天眼鏡にかけて能傾城の心を探りせかれせかるゝ妙計を以て知惠袋の底を叩き柏子を打て口舌を辯す是や冥中にひとり曉を得たるものか予其あかつきにはらひ清めて烏とともに憎口を七尺去て後にしるすものは

[illegible]

一向不通詩翁選

序

思ひ寐の夢の枕に契る明がた覺てはもとの冷酒も別れにぐつと一ト呑ハ硯蓋にも九ねんぼの實に川竹にいとしやとかわひ加羅連天運の盡といへと君傾城にかぎらず地物にも惚られたらかぶる元と其中にもかゝれてあつくなるも有またむかふからほれられてこつちですやすもありとり道あればぬけこちあり何れじつとしてハいぬものなり今時の色事ハ出來ると思へバ迯ねバならぬよふにこゝろ得むかしハしれぬを手からとし今ハしれるをほまれとす時代替れハ品かわると此晒落本の題号をかわりせんと記せし事一向不通の小册にて通用せざる戯作ゆへかくあら

わすことしかり
評判ハ千里も走るとらの歳
齢ハつもつて二紀の春

山跡蜂滿述

意氣真人寫

振頭發音聲

低頭催涕泗

○振頭を音聲をはつすとハかうべハすなハちかしらのことにしてあたまをふつて豊後ぶしをかたる通人をさしていふ事か

○低頭を涕泗をもよふすとハあたまを色男の膝へもたれてぬしハきこへやせんといふ恨ミの通言なるべし

一向不通替善運

井中の蛙ハ大海をしらずとハむべなるかな地物の通者ハ稽古所を大なる世界と心得傾國の廣大なる事をしらずと昨日まできせるさうじの丁稚ハ仕きせの松坂を着ながし月並を賄りすつへがして而後鼻の下ハ茶ミぢんの袷をあらしとせず番頭大王の帳めんを迷しほうばいの見る目をしのび茶ばんのかぐ鼻をおさへてかよふのも青ひやうしの二巻をおぼへて連月の會行にハ彌生の紙雛のごとく赤毛氈に座してかたる一節にしくもうせんけふハあたまへかぶるのもおのれがすき〱さま〱の其中にも稽古所の門弟ハいく千萬といふかずをしらねども太夫の号を取んとするハ百に一ッの富の札あたりはづれもせまからぬひろい世界にみじかひ命野夫にくらさぬ色事のむすふえにしも長町にいでその比は繁榮年中とかや浪花といへる繁花の地に西國橋といへる一ツ橋あり此邊のにぎはいハさま〱の契情のまことハうき名を四ッ竹ぶしにのこし宇治の哥人といはれし喜撰もむなしく茶屋の懸行燈となりしもまことに孔子も時にあハざるもむべなり早つぎの石うるしハかたひおやぢの心を打わりりかげにやハらぐつぎ直し闇も月夜もきら

めく提灯ハ星のごとく口上のからくりにハ富樓那の弁をふるひてもわか身上のぐあひの糸ハ竹田近江かつもりでも金のまうかる思案なしといへどもなか／＼足もとに金のなる木もあるぞかし誠つくされ玉子さへ燒ハ四角な屋臺見世天麩羅胡麻揚の匂にハをり介丁稚のこゝろを迷ハしおでゝこの一幕にハ使の口上をワすらしめ生捕に龜山のばけ物にハ江戸見物も足をとゞめ腰の巾着ハむなしく髪結所のぶら／＼ものとなりいはんや目て見る斗でなく鼻でかくにほひにさへこゝろをうばゝるゝを見ればたほのひかりに氣を失ふをミればまんざらのこけ共思ハれずとかく思案の二字をかんがへてミたときハまよハぬにしくハあるまじとこそおもひ待る此西國橋といへる所より日本橋の方へ貳三町もへたゝりて長町の新道に舂米屋と仕立屋の路次口に留本三勝と家札かけて音曲を營とする一ッの稽古所あり此三勝が内ハ路次のぐつとつきあたりにて入口にハ鋲をたんと打たりつはな腰障子に丸に抱茗荷の紋どころをうす墨入に付たる家にて此近邊名うてものなりミづからも今ハたれにもをとらじと心得て父母の孝恩などといふ事ハ一向なものにて我ひとりで覺へしとこゝろえて親にむかひおぢさんおばさんとよび夫にむかつて兄さんと唱るも此道のならひぞかし此親仁の商賣は身をちゞめ骨をくだくからかさ屋なり【傘屋のむすめゆへ所でかさや三かつとよぶもむべならず】此家の道具たてをミるに　左右の壁ハ藍水玉と松葉紙てはりまぜにしてひだりのかべにハ狂歌師の短册が二三枚ちらしはりにして右のかへにハ黒ぬりの小札に〱

子の長徳た書月の行事啓花•週車•おふで•おちよ と書しるしこちらの柱のおり釘にハ遠州純子の細ながき首まもりが引懸て
側のかけ竿にハ絹さなだのねまき帯と紅粉の付たさらしの手拭ふすまのはいつた糠袋ときぐ
すり屋の徳さんにもらつたにほひ袋も香がぬけたかして此掛ざほにむなしくくゝし付て有へ最
早けふも朝飯すきと見へておやぢは二階で傘の破を直してゐるとお袋ハ板の間を雑巾でふい
てゐる所へ來るは近所の子供朝げいこに來る お松お吉お年三人内をのぞいてミて おばさん御師匠さんハへ【お袋】ム
、今かへるだろうからちつとまちな【三人】アイト是ハ新たるりが出しゆへにかつハ太夫かたへうけてにゆきし也 【お吉】おまさんあか
んな【お松】サア お上りと ミなく上にあがる傘をなかしのそれへ置てはんとうくはちをとりまいてあたる 【吉】コヲ おとさんとんだけふハさ
むいね【おとし】アイけしからぬさむい日だよアノ わつちらかとなりじやア雪で子大きな兎を
こさへたよいつそよく出來たよ【お松】アイ わつちも見ましたよアリア だれがおこせへだへ
【おとく】アリア子かし屋の善さんと子次郎どんと二人りでこせへたよ【お吉】コヲ おまさん
ちつとおミせ とおきちハおまつがけいこ本をもめんのつばくろ口から取出し おこへおなつをおはじめだのモウ おしめへか と今はしめたのといふ口の下からモ
ウおしめへかとハまことにあどけなし【お松】今こゝの所だよ【おとし】コあの硯引よせ といふがむつかしからうの 【お松】アわつちや
アそこの所よりこゝの所がどうもひきにくいヨそしてまだむつかしいものがあるよ鴛鴦ハまだ
ならわねへが子獅子の相の手ハおそろしく引にくい【おとし】コ、、コウ わつちもさうだよミ

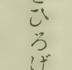
んながァおしどりハむつかしゐ〳〵といふがァをし鳥より獅子のほうが引にくひョおきちさん
おめへ新浄留理はおあげか【お吉】イヽへ今たて山さまの所たよいつそおもしろひかんがある
ね【おとし】ァヽ我影にさへおどろかれゑゑゑ（とひざをたゝきなから一口上ろり）ァヽとんだおもしろいねへそして門之助
が幸介ハとんだいゝよあんな男を亭主にもちてへもんだね【お吉】さうさァ【お松】ヲャ〳〵
此お子たちゃァとんだことをおいひだよと子供でも三人よれバかしましくとかく女子の子ハこ
しやくなものなり（とはなしをして火ばちのはいをかきまハすゆへ火がはねてたゝミをこがす）ヲミなおまさん【お松】ヲャ〳〵わつちじやァねへ
ョいふゆへにおふくろがこれを見て【お袋】此子たちやァわるひ子だぞちつとマァじつとして
ゐれバいゝに（と小言をいひながらごうきんで火をふきけす）すると程なくあるじの三勝ハかへりくる（おなんどちやのしゆすの帯をしめふとりのあいびろうどのワたいれ）
（をきて左りの手をたいはくの糸でゆわへあたまへ白のかんざしの足へ三ミせんの三と一の糸を二ツはさんでまへゝさし敷居をまたいで）【三勝】ム、ミんながおはやいのけふハ手習ハお
やすミか（とあしをさうきんでふきて上へあがりてたばこ二三ぶくのミながら三ミせんのこうしをあハせて）【三かつ】サァおきさん【お吉】ハイト新上るりの
本をとり出して黒ぬりの針箱の上になをしておなじやうに引はじめる【三勝】へたて山さまへ
願たてゝたばこたつのもわたしやおまへにそひたいばかり誠をいはゞ此ミちハ親のまゝにもな
らぬがならひ女子のすひた女夫ど【おきく幸助名酒盛色の中汲】とくりかへし〳〵二三べんも
をしゆる跡の弐人の稽古ハ長〳〵しきゆへに爰に略すほどなくけいこもしまひ【三人】ヘイ

師匠さん明日木明日〳〵【三勝】コゥミんなが糸錢をわすれなさんな（とこれハ女の子ハ三ミせんおならゐゆへ糸せんとて毎日に廿四文づゝ御定りなり）するとひる時分に來る甘酒屋【これハうら店の九ツとけい】醴千代井アマイ〳〵〳〵【三かつ】コゥかゝさんあまざけが來たからモゥお晝ださうだおまんまにしやうと（そこのあミ戸だなからてうあしのぜんおとり出しお茶づけちやわんのふたにならづけの香物が二きれお分あるを取出シお飯を初る）【三かつ】サアとつさんおまんまだヨ【おやぢ】ヲイとんだ此ごろは日がミじかくてなんにもてきぬことたぞと下へをりて御めしをたべる三勝ハめしをくひかけて箸をそこへ投ててうづに行【お袋】アノ子ハ行儀のわるひ子だぞいつでもおめしをたべかけてから手水にゆくと小ごをいふ程なく三勝ハ手水よりもどり門口にうち田の壹升樽のかゞミのぬいた手あらひ桶で手をすゝぎそとへふつて掛竿の前たれで手をふき【三勝】ア、むしがかふると（そのまゝそこへねころびてざうげのばちではらをおす御ふくろ小とをいひながら）三かつのたべかけた膳椀をかたつけてしまひ親仁も二かいへ上りてこれで晝飯もかたつくとそこへ來かゝるハ木綿屋の手代榮介うへに青梅縞のちやミぢんの綿入を着てかたにしぼりの手ぬぐひをかけ來る【榮】おかさんてへぶふさいで居るの胸に手をあてこゝろに異見がどうしておもひきられる物か【三かつ】おもしろくねへ榮さんワるくしやれなさんなそんなところじやァねへと（ぐつとはらをおすひやうしにざうげのばちかぽつきりおれる）【三勝】いめへましゐけふのやうな日ハねへじれつてへ（とじれるもむねに思つたことがあるゆへそこ〳〵していろもむりならぬことに十九匁ぐらいのいたごとね）と榮助ハしやれ三勝ハじれてゐる所へ來るハ向原

立右エ門（いとざんのはかまに白のついたお太刀をきめ付）表徳を通志今ひとりハ向宇水之進表徳を稽無（出立前に大かた両しことたるべし）【両人】イヤ此間ハおひさしふ御座りますャ榮さんすつきり【榮】おと〻〻しい（子とミな〳〵上へあがる）（此稽無通志ハ一こう野暮介なれども此ミちハ覺へてよりすこしつう人のきどりきんざらてもなし）【通志】榮さんおめへ此中どこやらでミかけたつけありやァどこへいきなすつた【榮】エ、アリヤ豐科か所のさらゐにさ（これハ月ことに所〻にさらひ會がありこれへ丸印一〻じづ〻もつて行て一段づ〻かたりかへるなりするとあれハどこ町のだれとか名が通る此ミちの付あひ也）【稽無】コお師匠などうぞワたしに淺間をはじめておくれなせへ【三勝】アイト（はらのいたきも直るゆへに三ミせんのてうしを合せ引初るとけいむも口のうちでちいさなこへで）ウタニカ、リ〳〵あハれいにしへを。思ひ出れバなつかしや。行としウタ、、（とけいこをしてゐる）【榮】通志さんなんとァノ淺間ほとよく出來た上るりハねへ（子そしてとこも落月に關あれバ。花にあらしのせきもりも。よい〳〵事の白ゆきハ。あかねさす日にとけて行がねへまことに留本の千兩道具だねへ【通】どうぐだねへハ切ミせのある所じやァねへかとしやれる【榮】通志さんが又しやれるよ（ト三かつハこれをきいて少しおかしく）【通】コおかさんおめへでへぶおかしな顏をするのおかしゐかおかし〳〵あつたとさか【榮】だら〻いとば〻あ（しやれるゆへけいこをしまひ）【三勝】アハ、、、、、とわろう（か〻る所へ榮介が渇があまり長ひゆへ此けいこ所をかぎ付て迎ひ來ル）【小僧】モシワたしどもの榮介さんハおまへにかえと（これをのぞき、て）【榮】うつ手のか〻る身の上だとしやれながら表へ出てコ安ャあすこにゐたといふなよ【小僧】アイ（とハいへども榮介ハわるひしつぽをかくされたゆへ此小そうも大かた〻介がかぶろときにハ犬にもなるべきことにわざハいハ下よりおこるとかや榮介ハ此小僧のきけんをとるやうにすれ共たがきけ日のうちにハいふことをきかれバあたまの一ツもついはろ）

べければ此小ぞうハ此事を手にしてあるゆへ案介がいふ事をばかにしてきかぬこともあるべしまことにおそろべしつゝしむべし隠すべし 桒助ハうちへかえるすると雪駄屋の手代文治表徳を美光餅屋の手間取勘次二人づれで來り【美光勘次】イヤどなたも【三勝】ヤ勘さんお人がらだねとこへしやれなすつた【勘】そんな所じやァねへおばごの病氣見めへさト二人ながら上へあがる【三勝】あやまるね【美光】サアく大人になつて來た【勘】なんだおゝいりをたつて二拾里上ミ方【通】相劦小田原かこいつァわりゐ【三勝】通志さんなんぞおごらねへか【通】またねだるよ此子ハどうも跡ねだりをしてならねへわりゐ癖だ【三勝】夫でも先頃節句のあづけがあるぜへ【通】頂けといへば文公おれが左をおこらうから貴公なんぞおごらつし【美】サア笊がまハつて來たよし〳〵ばそをおごりやしやう【勘】ム、そはといふやつハ音ばかりして賑やかなげひじやァねへか錢のいらねへおごりださういつても文公じよせいのねへもんだぜへ【稽】ヱ定齋といふものハ夏ばかり來るくすり屋しやァねへか【美】こいつァいゝしやれの惣出來だト いつてある所へ酒やの御用來る【通】コウ御用〳〵これで酒をもつて來てくれべし トふところからそつと四文錢のはしたを二百斗やる【御用】ヱかしこまりました【美】コまだ用があるぜヱきさま角の伊勢屋へいつてあつくしてかけを十二今もつてこいといつてくれべし【勘】コ文公〳〵蕎麥ハ伊勢屋より横町のまさるやがいゝぜへそしてついでにそば湯をいつてやらつし【美】そんならまさる屋へいつてきさつしそれ湯をわすれめへ

よ【御用】あい〳〵と出てゆく【美】勘公が蕎麥湯をかすりも久しいもんだ【勘】ヲイトごく
らうサこゝの火鉢でかんをしやうと三勝ハてうしへさけを入て火鉢へかける【勘】サ炭をつぎ
ねへトさけのかんをする程なくそばも來る【通】サとんだ事をやつた酒へ火がはいつた【三かつ】そこのをうめねへな
トそばを出してみな〳〵さかもりになる【美】サアとつさんに一ッやんにねへな【三勝】サとつさんやトよぶゆへにおやじハ二かいより
おりる【親仁】これハ〳〵大きに御ちさうでござります【稽】ナニさあ〳〵ト此間しバらく口に用か入なれハむごん【親仁】
そばをたべて口をふき、ぎ戸たなの佛だんから印を出し羽織を引かけきのへねの大こくまいりにゆく　どなたも御噺なさいコ跡を氣をつけさつせいとかゝあにい
ひ付て圓通院へといそぎゆく【御袋】ァ是ハ御影で大きにあつたまりましたと　そこらのそばのぜんを片つけるこれよりさか
もり初る【美】なんと拳でいかふ【稽】サよかろうなんでも此筒ちやわんへ一ッついでおいてまけの
ミにしやう【美】サアう、ヨ【稽】ろ、デ【美】とうろ【稽】なゝデ【美】はまヨどうだ〳〵【稽】こい
つれかなわねへきついもんだトちやわんの酒をぐつとのむ【勘】コ此ごろみなみではやる大佛の拳をしつてる
か【三勝】ウンニヤどういふもんだかしてミせねへ【勘】シヨン〳〵〳〵ト手を三ッうつてノひだ
りの手をひろげて右リの手をおや指と人さし指を輪にしてあとをひろげるが大佛よ



そ
してまたチヨン〳〵これが

兩ほうの手をもつて合羽をぬぐまねが細工人ヨそしてこう
おがむが參詣の人ヨ

ノ大ぶつとさん詣の人じやァ人がまけ大佛とさいく人じやァ大ぶつ

がまけさ細工人がさんけいの人にまけよョシカ【通】こいつァおもしろい【ミな〱】アハヽヽヽヽト（大わらひになりてしばらくさかもりになるたり）【稽】きのふノ生玉のくわんおんへまいつたがうら門のところにうつくしい光がひとりあるぜへ【美】ムヽ難波かおいらァあれよりわか嶋がとりもんだ【三勝】ナニワか嶋よりなにはがいゝそうして人がらいくらにもいゝわさ【掛】ムヽおきさもつらァいゝがあいきやうのねへあまだ【通】でへぶくはしいの【掛】そこへいつちやァミそじやァねへが是もんだト（ひけたなでゝ少ゝうぬたいふ）【三勝】掛さんあんまりすやさねへがいゝぜゐたれもとりもつこつちやァねへぜへ【掛】それでもこの中おれにほれて付みをしたぜへ【三勝】そうだらう色おとこだから【掛】これがうるせへとおもしろくしろくねへしやれをいふもとかくたぼのうき世なり【美】さういへバ通志さん此ぢうのいろ事ハどうした【通】いやあいつハおかしな出入よ通志ちがひサこんなうまらねへことハねへ【稽】通志ハ色おとこだから色事の身かハりァありかていさ掛公壹ッのまつし【掛】イヤおりやァ此頃きん酒だョ【稽】ヱきんしゆもすさまじゐきん酒きんの字ハちかひさけとかくわなトミナく大わらひするとはや日もくれ〱稽無。通志の兩人ハおびメ直してかへりける【稽無通志】イヤけふハおほきに長あそびと二人リづれで歸る【三勝】まだ日ハ暮ねへわな【通】ゐてきちがしまるハなトハ（門の出入六ツぎり）【掛】おいらも大きに遊びすごし

たよくしやれるてゐへだぞァイ左様なら【三勝】マァはなしなせへきうにさびしくなるわな【勘】又いつてきやしやう【美】左様ならト勘次も出てかへる美光ははしごの下へねころぶ三勝はそこらをかたつけしゆろぼうきではき出す【三かつ】美光さんサァおきねへナ日がくれるはな【美】ム、そんならひとつおしゆんをけいこをしてくんねへ【三かつ】サァト三味線を引はじめる美光はかたりかける【美】にくかろふとも渡り合なげの情の一夜さの枕かわして下さんせやいの〳〵トくりかへし〳〵三べんばかりさらひてしまひ三ミせんそこへたてかけ【三かつ】ア、さむいトそこの掛竿の木綿さら紗の袖なし胴着を上に引かけてきのふいつた天窓も色男にこはされたかして丈長でかミ上をしてほたるほどに消のこつた火を吹おこす美光は見ぬやうにミるやうにしてそつと三かつが手をにぎるアレサトいふひやうしに美光はみをつかませる三勝は手にもとらずつきかへす又つきつけると三かつはづゝと立て茶をのミに行美光はふしやう〳〵にその身をふところへ入てアイさやうなら明日と【三かつ】これはおさう〳〵ト此三かつは半七とふかきゆへなか〳〵この美光などがつけみをとり上るやうなしろものならず大きにはぢをかゝせてへこますところをさすがは名とりとてたゞわらひですませしはまことにはたりたるしろものなり　程なく日もくれぬれば御袋ははりの穴だらけな行燈を出し油をつぎてかたはらによりて苧をうミかけるとほどな〳〵きたる色おとこはあかね屋橋の左官の棟梁のむすこ半七とてあたまを少しきめ中の丁うしろかつきに結て此三勝がけいこ所の世話やき但しけいこ所のせわやきはいつでも師匠といふことなりとこゝろえべしけいこじよ通のよくしるところなり　此半七も三勝とはふかき中なり色男でなけ

れバ身にしミて世話ができずむすめの母を手まへの親のやうに心得かゝさん〳〵ととなへるもむりならずしかし一点ばりに來る青にさいのおなじやうにかゝさん〳〵といふハなめすぎたものなりなれど深い色ごとでむすめをつれて逃てもむかふの親が得心せぬときにハかゝさんおばさんと思ひしもたちまち鬼のごとく思ふも替りやすきハ人こゝろもあすか川と定めなき浮世なりさて半七は木綿太織をいろま色に染て紋所ハさくら草をかけにつけ繻半のかハりにひとへものを下に着てねずミごはくの帯を貝の口に〆水淺黄の手拭をかたにかけて姫路革の三度を腰につけ朱ぬりの皮鼻緒黑ぬりの足駄をはき蛇の目の傘をさして小さきぶら挑灯に藍で豐といふ字を付たるをかた手に持ふところに青表紙のぐつとひねた八重霞との上瑠理本を入たもとにつかひのこしの四文錢が五十ばかりがら〳〵ならして（半七が此身ごしらへも半ぶんハ三勝が身のあぶらで出來た物なりいろおとこハいつてもそがにて大方女をはく事也ヲ）（へ手エあくにだ）鼻うたを唄ひながら此路次口にいたりてからかさをすぼめてはいるひやうしに寢てゐる赤犬のしつほを踏で大きにほえかゝりおつかけられて路次へにげこむ【犬】ワント飛をき首を上て半七にむかひワン〳〵トいふゆへいめへましひ畜生だぞとろじを欠こむ足駄の音がガタ〳〵〳〵三勝ハ御持佛さまへお燈明を上てゐたりしがこれをミて【三かつ】半さん又おつかけられたの【半】いめへましゐ足をどろだらけにしたとざうきんでふいて上へあがりてうちんを吹

消て【半】コおかさん此中ハおかたじけと提灯をかへしコウあれから此ぢうの出入ハけふよう
く中直りをしたと噺てゐるだきにお持佛さまの燈明がきへる【三かつ】かゝさんあぶらがねへ
さうだ【お袋】ム、そんならかつてこようと油をかいにおふくろハ出て行跡にハ半七と三勝と
兩人のこりてだいぶいりくんだはなしがなんでも一物ありとハミへいれどおふくろ是を見すて
ゝ行はまんざら娘といろ事の譯もしらぬでハなけれども半七ハ稽古所の世話やきゆへに御袋も
しやうちで色事をさせねバうちがをさまらずむすめゆへにおまんまをたべるゆへにきげんまか
せにすることか大きに有なりまことに男女は魚と水のことくなればどんなかたい女でも好たと
かなんとかいふ男がひとりづゝハあるならひなり【三かつ】此ちうのものをおめへ見たかトハ
半七と色事ゆへはらみしか跡月より月やくをとめねバきにかゝり半七が所へふミにてしらせこやりしなり【半】ム、おれもあれかきにかゝつたから共くすりをかつて
きたト何かかミにつゝんだくすりをそつとたもとへいれしハてつきり仲條流なるべし三かつが腹をいぢつて見ながらヲ、なるほどコリアそうだがおめへ先頃噺た事をど
うしてくれる【三かつ】アリアもうちつと待よトこいつハ師しやうに丸印のむしんなり三かつハ此色男にきものをはがれる【半】コおかさんお
めえアノ榮と何かわけができたじやァねへかと少しやくきミ合有【三かつ】まじにうけとんた事をおめへ
いふもんだぞおめへとのわけハワたしか手へきづをつけるくらゐな心で居たものをトこいつがひだりの手に
半の字がほりてありおめへといふものハもつとも榮さんがわつちにはなしたワけもあるけれども夫を取上

るやうなわつちじやァございせんハなさういふおめへこそ此ごろハどこのか女郎衆になじミが出來たさうだ（トすこしなきごえなり）【半】そんならいゝがおれもそんなことハマアうわきだがこちらの事もよく了簡したそるにほんに大きくなれべいゝが【三かつ】ソリアまたなぜへ【半】さうするとおれも大きに仕いゝよなせといつて見やれてめへをおれがつれて逃てからがはらんでゐるといやァ女房にされやうといふもんだそこてそうするだんになるとにげずに譯かつけられるといふもんだぜへたとへさうするとおれも手めへゆえに苦勞をするから肩に棒をあてゝもおやぢと御ふくろハすごすといはれて（三かつハぐつとほれて）【三かつ】おめへそれがしんじつさういふこゝろならハたしやァ嬉しひと思ハず涙をこぼして半七がひざに抱つくと半七はそばの行燈の灯をふつと吹けすひやうしにふたりしつほりいだきつくとお袋の足おとが路次へきこえると二人ハこれをきゝてびつくり左右へとびのくと路次の板の音がガタ／＼トいふと通町のほうでかねのこへが【五ッ】ボヲン／＼／＼

甘露庵山跡蜂滿夢中戲作

並書畫

天明八申歳正月吉日

馬喰町
江崎屋惣兵衛版

若奥様の枝櫻

虚實情夜櫻

心こゝにあらざれバ見れども見得ず喰へども其味ひを知らずとハ實なるかな遊女にうつゝをぬかす杜人ハ己れが夜食を忘れ廻し部屋の獨り寢に初て空腹をしる亦夕を思ふ朝歸に下を見て行ながら向ふに高き石あるを不知これ惡道へ踏込て挑燈をうらやミ大道に巾着を掏れて内のかゝアに當るのたぐひなるべし予いまだ流身の實を知らずしらざれバ深く通ふ事もなし亦通ハざれバ其穴を知ず故に虚も實と題せり足わぬがちのわつちゆへ皆さんお賴んもふしんすと顏を赤めてお笑ひなんすとつめりんすよと云、と

虚實情夜櫻

時中はつ春

月もなを

朧に見せつ

華の雲

梅松亭

三庭鶯

宵の虚言

爰もかしこもすがゞきに武藏野が格子の模様うわきながらも東路がこがるゝ人の來るぞらとハ白雲と見る

虚の夜櫻

夜中の實言

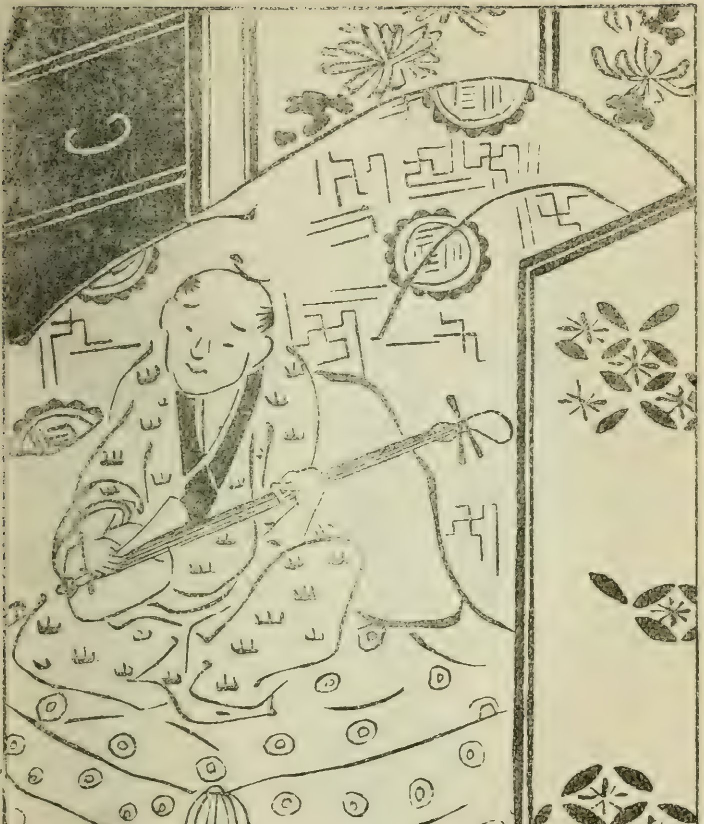
だましあふせた獨り遊にとなり座敷の咄しの模樣貞女を立たり花町が戀しき人のあるぞとハ白雲と見る

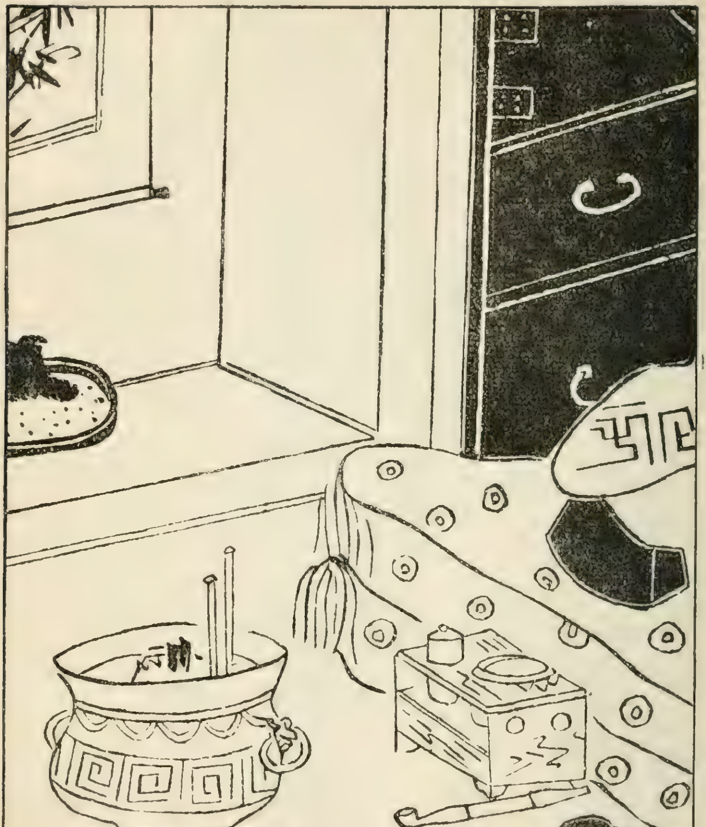
實の夜櫻

明の情言

逢て別るゝ人目の關にふすま一重此方の模樣殺す氣で來る武藏野かかく氣になつてかゝれるとハ白雲と見る

情の夜櫻





虚實情夜櫻

宵の虚言

庭鶯述

明行春の山見へて花を見すつるかりかねのそれハ越路われハ又東にかへる名殘かな〳〵ト〔下〕ハアイ　ヤア（居で諸本をたゝいてしまう折から）【下女】モシ旦那さんへ只今銀蝶さんがいらつしやひまして外に待なすつていらつしやいます【言次郎】ナニ銀蝶が來たとか。はやくこつちへあがれと言てくりやそして茶を持て來いまだ用がある火も消てしまつたハ早く持て來い【女】はい〳〵ト（かつて出行入かわつて）【銀蝶】言さん此間ハイヤモゥたいへ酔て内までむちうこう〳〵でかへりの子ハおたまじやくしハどうだト（ひとりしやれながらすわる此うち下女ハ茶を持て出銀蝶がしやれにこらへかねてふきいだし茶わんの茶をばら〳〵とこぼし顔を赤くしてちりがミだしてそのかミ）【女】ちん〳〵〳〵ト（はなをかむを笑ひながら）【蝶】なしの紙て一トつぶかの子の鼻をかむとハよつほどあたらい【女】ヲヤかわいそふにト（かつての方へにげこむ）（此内言次郎ハ茶の小もんちりめん二まい尤も一まいハ化むくなりうへにねづミゆうきじまいづれもうすわたにてほそきほつちをはきくすべの二まいうら付羽おりハりうもんの小紋前さがりみじかくけぬき合せの黒うらにさらしの足袋をはき白のじよしんのきせるでたばこを呑ながら）【言】サアいゝかへ【蝶】こつちハとうからいゝで御たいくつさ【言】マア内じやァちつと

しづかにしてくんなゝ【蝶】小ごへになつて静かにしたら義經ハ尻をはしよつて欠落だらう【言】コレサ親ゆびを出して知とわりひから見つけられねへうちはやく出かけよふ折しもゆくボヲン〳〵く暮のかね辻〳〵の鴉かきども旦那おかごハめしませんかへおやすくめへりましよふ雨人ハ足ばやにゆき過るゆへあとにヲイ鴉ヲイ〳〵〳〵爰で名にあふ日本橋西に鶴城高〳〵として夕霞たなびき東に入海瀰〳〵として白魚の篝うすしといへども空をいろどる足ばやに行違ふ人ハ三拾八文の櫛の歯をひくにことならず。市中の肴ハ板臺のうへにおどり勘定の外のなすびハあわれ土足に踏つぶされ腹のきたつた小でつちハ屋たひ見せのごまあげに出かゝつた鼻をすゝりこむ二人が足のはやき事二十四時のひきやくの如し折しも向ふよりびくたかつぎ四尺ほどの刀たさし下に嶋ちりめんた着こ上に黄八丈のもへぎじまもちろんゆきたけともにミじかし長し其上一日照付られこ日ばかりひかりよふすハ知らず作者の眼にハ千里さあらん遠國からの勤番のおへとぞ見へたり然る處此二人た見付知らぬふりにて行過るを【言】ヲヽイ〳〵六さんじやァねへか【六】せつかく逃あふせたとおもつたにだいぶおふたりともおきまりだね【蝶】おめへなぜそんなにつれない今朝からおめへの所へ七度熊野へ三度あたご樣へハ月參りじやァねへが足の裏が豆だらけさしかもがん〳〵ひ豆でけしからねへ大きひよホイ其間に日ハ暮るサァ北國へあつたまりに行つもりよマァ其なりですぐに行事サ【六】すん〳〵らいつそ。ふうをかいて。ぐつと。いじんでいかう【蝶】なに。いじんかいつたら。たんぼで雉子がなくだろう【言】モウ澤山だよ六さん〳〵わつちが咄た事を。今夜なぞのようなとき。うまくやらかすと。

大出來だぜ【六】なにも遊びだ。やらかして見よふか。あつちのわけをくわしく。もふ一ヘんきゝてへね【言】ナァニわかりきつている事さわつちが花哥の姉女郎が華町さよしかへ其花町の客を武藏野と言女に色事じかけでとられたのさ。そこで今ハむさし野のほうへ通ふと思ひなせへ。華町もくやしがつて。ひつこんでいるけれども。どふもしかたがねへだろうぜんてへ内おわりいのさ。いかにむさし野がおや玉でもありよう。うつちやつておいちやァぜんてへつまらねへのさ【六】そこでおいらが其武藏野をかつて。そうして花町と色事をしよふと云もんだの【言】うめへ趣向しだらう【六】首尾よくいきやァおなぐさみだ【兼】ナニいくのさあいた口へぼたらもちもじい時のまづい。なしといふたとへのとふりおいらのようなものハそんなにくるしきづと色事ハしあきていろわな【言】それまたはじまつた【六】なんとでも云なせへかふいう藥へつかわれるのも色男の役だと思へばさ。さのミくるしもねへのさ ト是にまかせて行ほどにはや見世を組てあふと結こト地内にかゝト盛道を急ぐと早く行ほどにはや日本づゝミにさしかゝる是までのミちにいろ〳〵面白きしやれあれども道をいそぐゆへ爰にりやくす【六】おめへたちやァちつと爰に待て居てくんなヽ鳥渡三谷まで行つて來るから【言】なにしに【六】着物の事にさ 是ハ中宿へ着物をあづけ置きゝ見へほどなくきたり【六】おゝきにお待どふ【兼】どふだ内に居たかへ【六】ほんにみんなによろしくと云やしたつけ。どなたも此ごろハさつぱりいらつしやりませぬと云て。いたつけそして。おいらのなりを見て。笑ふ

から。わけを咄したら。そりやァ面白いしゆかうだと。笑ていたから壹分だして是で知ん貞をして來てくれろと云たらこりやァ面白とひとりてよろこんでいたつけ。時に足を洗つていかふ（松の尾と云茶やへはいりながら）【言】おさとさん此間ハ【お里】ヲヤ言さんモウきついものでございますねへ蝶さんも。けしからねへおはやくいらつしやひました。二三日ハけしからずおあつたかで。ようござひますト（茶を六三郎がところへ先へもつて出。なりを見ながら）【里】あなたハよふいらつしやひました【六】アイ／＼ト（茶を取てのむ）【里】蝶さん。おめへさんのお口合もひさしくうけたまハりませんねへ【蝶】そうさひさしぶりのせへかさつぱりでやセん【里】おめへさん此間向ふをおとふりなすつたから。およひ申たに知ん貞ハあんまりで。ございますゼ。何かけしからずおいそぎの御よふすハどつちいお出なはいます【蝶】やつパりさ【里】御深切でありますねへ言さん【言】ソウサ蝶さんのような。しんせつな人がなくつちや。廓に月の夜ハねへといふものゝあんまり人ハ笑われねへ。手めへの鼻の下は棚のすみにごミだらけでイヽ、サちつともはやく出かけよう【里】さようならおかへりに【蝶】すんならお里さん此間にト（出行三人とも大門をくゞれば）右も左りも春氣色人間わづか五十年を爰にくらさばかんたんの夢よりもなを面白からんと（うかれゆく向ふより來るおいらん禿やりてを引つれ箱ちようちん行違ふ）【言】コッ／＼六さん今のが今度淺草へ額をあげたっよそほひかの【六】ソウサまた別なものだのおいらを横目で見ていつ

たがどうだ蝶公いろ男ハどうもうるせへもんだよ【蝶】ナア＝おめへのなりがおかしいから見て笑つていつたのさ。だれが見ても。ゑぞ松まへのお方とほきやア見へねへものを艶次郎もよつほど。できだぜ ト笑ひにつれて又一ツ門をくゞれば 天人のあま下りたもふとく新造禮義をみださず。みをかくおいらんあれバ。天窓をかく。ふり新あり心に笑ふあれバ眞になミだぐむのがあり。格子に客をひく禿あれバ。壁にもたれてすがゞきをひく新造もあり。よりとり。見どりの。かうし先にたゞすみて【蝶】六さん／＼あの新造は千手觀音か。げじ／＼を見るやふな女だのゥ【六】なせだ【蝶】べらぼうに手がありそふだと云事よ【六】おもしろくもねへ。そんなとをいやア狆のつらへぬひあげか唐茄子へあて身をしたと云のかこつちらのほうの角兵衛獅子のくさめといふのがまだましだろふ【蝶】いやもふ六さんなアどれともそろつたおぶしやれだ トやう／＼來かゝるかうし先ム[illegible]なれども女郎もおゝくのれんに武藏屋とあつて内のようすハ大見せにとならず新造に至るまで玉揃と見へたり 【言】サアおざきへ トのれんをあげてはいる六三郎も刀をぬいてはいらんとするを【若者】モシだんなおこしを【六】ヤヽヽこれサヽさむらのことヽしのもゝのへテヽ手をカヽかけるリヽりよぐわひやつ ト大きにはらをたてる若者きもをつぶすゆへしづかに【言】ナ＝六右ヱ門様あれはなにもぞんしませんもので御ざいます。ゆりしてつかアさいまし。お大小ハわたくしへつかアさひまし。こちらにおきますところがこざいますから【六】ウヽたゝる程。ゆうしよでハコヽこしのものハアヽあづけるとモヽ申す事ウヽうけ

タヽたまわつたがヲヽお身にシヽしつかりアヽあつけヲヽおく【言】よろしうございます。おあすかり申ましたサア上へおあがんなさいまし ト六三郎を先にたて其あとより二人何かさゝやき笑ひながら言次郎が相方花里の座敷へいたる程なくちようし盃持來りて 【若者伊八】是れ皆さまよふいらつしやひました 此内言次郎ハろうかへ出て 【言】コウ伊八とんちよつと來な トしバらくさゝやき又座敷へ來る六三郎が相かたのみうだんと見へたり程なく 【花哥】となたもようお出なんした言さん此間ぬしにお咄し申いした事でわつちまでくろふがましいしたわないつそ氣がもめてなりんせん トはなすハ花哥か姉女郎華町の此頃ひつこんでいるゆへの事なり折しも入來る 【武藏野】【東路】 あつまじハ銀蝶なじみのことゆへ少しそばへ寄て 【路】どなたもよふお出なんした蝶さん此間のものはどうなんした ト笑ひながら云 【蝶】どうするものか守りぶくろへ入て寒いめハさせやァしねれな 【路】そうして其替りハどうなんすへ持ておいでなんしたかへ 【蝶】どつこい其かわりハ色男がする幕だから。こつちハ鎌と椀だ 【路】おぶしやれなんすな今になつて。ひきようでおすよ。色男とハなんのこつておすへ トしたゝかつめる 【蝶】アヽいちゝ。ひとをばかにしたモシ六右衛門さん是ハ持あわせましたからはゞかりながら。さしあげます言さんちよつとおとりつぎを 【六】イヽヽいやミヽ身どもサヽさいぜんからスヽ、すごしてヲヽヽおるから 【蝶】すんならきしづめ言さんのおあいだ 此内げいしや。たいこ持人かハり。ちようしの替りの。しげきに。まごつく料理ばん居ねむる禿ハ新造の耳つゝうに。きもをつぶし。すかねへよ。知つたかよウに。かけ廻る眞のめりやすにハとたり座動まで情をまさせ程なく座敷もひけんと思ふ頃廊下へ出て 【蝶】モシむさし野さんちよつと ト言を若者がよびしとおもひ 【武】ヲヤだれだと思いんしたらぬしやァ

なんでおすへ。わつちに用があんなんすのかへ【蝶】あるだんじやァねへ。大ありさ。おふあり大根の切ぼしとれちつと。てめへでこしらいた。かたちだネ時に今ばんの客人ハ（トロをたゝいて）是だから。どふぞお頼みだよ。ありやァだいじな人だから。どふぞはらァたゝセねへようにしてくんなセへ。そして共はらの下のものハたつても。こつちハ知らずトどつこひ口がすべつた【武】なんでおすへわつちやァしやくでなりんセんかんにんしなんし（ト帶へ手をさしこゝとなり座敷へはいりしやうじひつしやり銀蝶も元の座敷へきて）【蝶】言さんおかしくねへ【六】（ぐつと立てろうかへ出る）【太こ持】モシおてうづにッいらつしやひますか（ほどなくむさし野が座敷もかたつきッげいしやもッそこ／＼においとまをいたゞき。六三郎をつれて銀蝶むさし野が。ざしきへはいりながら）【蝶】おいらんお樂しみだネ【武】是も。しようはひなら。しかたがありんセんわなおめへさん。もうちつとはなして居て。おくんなんし。今にじきしまいんすから【蝶】マァそりやァあしたの事に六右エ門さんさようなら。のちほど

【六】コこれ／＼銀蝶コヽ此華はナヽなにリりうでいけたかッヽぞんじてヲヽおるかコヽこれハセヽ石刕りうでィいけたのだかワヽヽわるいワヽヽわるい【武】もしへサァお休みなんし（おりしもげいしやたいこ持しようじのそとから）さようなら御きげんよう（むさし野が座敷のようすを。見るに十疊に八疊片ヽに四疊半のかこい。あつて旅だんすに利休このみの茶入に。ちようセん風爐懸物にだる磨の畫ハ不伯がふですくなに書たり武藏野ハ風爐のそばに居る六三郎ハ床の中から首をいだし）【六】ゲイフウコヽこれ／＼ハヽわしにもチヤヽ茶をイヽいつふくヲ、おくれんカ、へ【武】（小ごへになつて）みよし野さん。爰へ來てくんでおあがんなんしと云ておくん

なんし【三芳】一ツ穴のきつね爰へきておあんなんし　ト大きな聲でいらゆへ六三郎はむく／＼とおきてよろ／＼しながら風爐きわへ来るゆへ武蔵のずつと立て。しようじを明たから

【武】アヽいちゝ。わつちやァしやくがおこりんした　おりから。六三郎が手に持し茶わん風爐のなかへぱつたり　ふう／＼／＼

火はまつくろ座敷はいだらけ【三芳】ヲヤどうなんすへ　むさし野が障子をたてるおと　ばつたり　廊下をあるくうはぞうりのおと　ばた／＼／＼

夜中の實言

夜はやひけ過むさし野が座敷には六三郎たゞひとり。宵のしうちも我ながら。なにかおかしく思ふおりから。ふりしん三芳野障子をあけて【三芳】ヲヤまだおやすミなんせんかへ。おいらんで。おつせんすお氣のどくざんすが。しやくがおこりんして今くすりをたべて。ひらきしだひにまいりんすから。ぬしによく申セと云なんしてそして。あすこで寐ておいでなんす　トいきをきつてせつこんで云ゆへわさと【六】ウヽヽウソヽそだロヽろう　トよふ／＼皃を赤くしていふ【こよし】ヲヤおかしうおすよ　ト笑ひながらしようじをたてていづくともなく出ゆくは此新ぞうませものにて六三郎が。どもを實とおもひなゞさゞに来るなるべし六三郎は。にくきしかたとおもへども又おかしくひとり床の中に色としあんの折から。となり座敷に二三人の咄し聲【華町】是花町の姉女郎なり　今のいまゝでなんにもおはなし申いせんが。ふしぎな御ゑんでマァわつちがようなものでも姉とおもつておくんなんして何からなにまで。身にひきうけて。セ話をしておくんなんす事はもう／＼死んでも忘れいセん。ありがとふをす。ぬしのようなしんじつなものを妹といふはほんに

もつたいのうおすが。わつちがしやわセ。又わつちのよふなにんがいを。姉とおもつていてお
くんなんす。ぬしハふしあハセとも思ひなんしようが。何もうき世と。あきらめておくんなん
し【哥】ぬしハ今夜にかぎつてなぜそんなに心ぼそい事をお言なんすへそしてマァ其はなしな
んすと言なんしたとハへ【町】其事でおす。今までハおかくし申いしたけれども。是ほどにまで
わつちの事をおもつておくんなんすぬしゆへ。おはなし申いす。よふきいておくんなんし。
わつちも元からこふ言。いやしひ身でもありんせんけれども。ふつとした事から去〻年の春。
深川へうられんして。つひ付だしの其時から思ひそめたが身のいんぐわ。二世とやくそくしい
した人ハ其年の暮の事。親たちが。やかましくかんどふをうけなんして。かゝろうしまがあん
なんせんゆへ。どふぞわつちが身のつゞくたけ。みつぎ申てあげんしよをと。つらいつとめの
其なかにも。ぬしばつかりの樂しみと。すこしづゝの。小遣ひまでおくつてあげんした。其内
にふつと。風をひきなんしたのも。ひとりの身ゆへおしなんしたゆへか。だん〳〵と。おもん
なんして人參や彼是で。とゞのつまりハ身のなんぎ。難義ばかりハいといんセんが。それから
してハどふなんした事やら。おとづれもセずみの返事も人を賴んで書て。もらいなんすか一日
〳〵と。おもんなんすよふすゆへわつちもつく〴〵思ひんすハ。なんのいんぐわで此ようにうき

が中なるうきめを。見る事よと。眞にかなしうありんして。夫からしてはぶら〳〵と。わづらいんして勤はいや。ほうばいさんの咄しをしておくんなんすのさへ。めんどうで〳〵だまつてばかりおりいしたが。旦那さんの言なんすには。おめへもそうわづらつちやァとふもならねへちつと氣をたしかにもちなせへ。おめへはぜんてへ外の者とちがつて。氣がちいさひから。もつと大きくもつがいゝのさ。そしてどこぞへちつと出る氣になんなせへと。度〻言なんすゆへわつちも。若や外へでも出て。かんのんさんへがんがけでもしいしたら。ぬしの病ひがなをんなんして。又逢事の叶いゝしよふかと。淺草へめへりんした其時に。旦那さんのおいゝなんすには。おめへもきけべ新さんがわづらいなさるのを氣にしての。病ひだ。そうだが聞べ。此頃はだいぶいゝそうだ。それについては此あいだむさし野やが來たからおめへの事をはなしたらちつと。保養がてらによこせと。言たからやるつもりにした。ちつとおめへも所でもかわつたら又あんべへもよかろうと。おもうからまァいくつもりにしなせへ。夫ともおめへのむねも知れねへものだから。兎もかくもしなせへだか爰の所をきゝわけて。ちつとあつちへいつて見るもよかろう。若新さんのほふからたよりでもあつたなら。內證で知らしてやろうから。心づよく思ひなせへと。事をわけて言なんすゆへ。わたしもびつくりしひしたが泣にはなか

れずとほうにくれんして。すぐに死のうとおもひんしたが旦那さんが。それほどにとをわけて。お言なんすし若またこつちへ。まいりんしたならべぬしにはれて。あわれんすともありんしようかと。其日すぐに爰へ來んしたが。マアどうなんした事やら彼是一年になりんすが。旦那さんの。どこからもよくなんく〳〵したとも。またわるいともなんとも。さつはり便りはなし。ほんに死にでもしなんしたらわつちやア。マアどうしんしようと思ひんすりやア。いつそ死んだら此うきめはありんすめへとおもひんす【哥】（なみだをふいて）なるほど。そうお言なんすりやア。おめへさんも色〳〵くろうをなんした。其おはなしわつちも。かなしい身のうへでおす（ト又なみだをふいて）聞ておくんなんし。ちようどわたしが十三のとしおとつさんは。人手（と言かけて）かうしんセつにしておくんなんすぬしたちゆへ。若も便りになつて。おくんなんす事もありんしやうかと。うちあけておはなし申しんす。わつちが内より一里ばかり。はなれておりんす所の郷士のむすこで。ありんしたがわつちとアノ言さんの言なづけのありんすのを。知ながらわつちを。むりむたいにもらおうと言なんすのを。おとつさんが大きに腹をたちなんしてことわりにおいでなんした。其かゑりに誰とも知らず。やみ〳〵とひがうにお死なんした。其時はどうしんしようと思ひんして。ともに死のうとかくごをきわめて。かへりんしたが。わつちが此うへ死にんしたら。はゝ

さんもとも〳〵おしになんしようとおもひんして。おしからぬいのちをながらへて。今此うきめにあいんすなかにも言なづけの言さんにお目に。かゝりんした時のうれしさかなしさ。どれからまァはなしんしようと思ひんしたがが今ハこうゆふ身のうへに。ぬしもわたしもなりんして大事のある身の行すへがおぼつかのうをす【町】ぬしもマァそふゆう苦勞な身でおすかへ。そしてマァ其かたきと言ハ知れておりんすかへ【哥】その事でおす。おとつさんの切れなんした其夜から郷士のむすこも。おりんせんゆへたしかに。夫とも知れいセんけれども。うたぐるのハ。此人ばかり外にハなにも。ありんセんそしてマァ聞ておくんなんし。いとゞさへ。よわつて。いなんすかゝさんの夫からしてハ。月にまし日にまし食もたべなんセず。おはづかしい事ざんすが少しの。田地をうりしろなしてもたらぬ藥料。おぢさんに相談して。わつちがねがいの此つとめ。おやのため妹のためとハおもへども。元のおこりハみなわたしゆへと思ひんすりやァ生れぬ先がこひしうをす【路】なるほど。おめへさんがたの。おはなしなんすのを聞んして。つく〴〵おもひんすりやァわつちほどばちの。あたつたものハありんセん。夫ゆへで此うきめを見んすのも。今よう〳〵と思ひあたりんすりやァおめへさんがたにも。おはづかしくつて。はなされいセん【哥】から打あけてお咄し申んすうへハぬしも。うちあけてお聞セ

なんし【路】かならずお笑ひなんすナさんげに罪もはれるとやら。申んすからおはなし申んセう。ぬしたちの孝行や貞心にうつてかわつた。身のしだらをいたしんしたが。今おもいんすりやァよくマァこう生ておりいしたがふしぎでおす　ト又跡をはなしかねているゆへ　【哥】なにも此なかで。おかくしなんすとはありんせん。つゝまずはなしてお聞せなんし【路】お咄し申んセう。聞ておくんなんしわつちのおとつさんも。此商賣をしておいでなんす折ㇵ。川崎におりんしたが。わつちがてうど十四のとき。品川へきなんして。茶屋を出しなんしてから二ヶ月ばかりおりんすうち。近所へ居そうろふに。來ていなんす松さんと云色の白ひ目はなだちのいゝ。男でありんしたが。ふつとして心安くいたしいして。まだぬしの心も知れぬ内駿河のほうへにげて參りんして。そこにわづか三十日ばかりくらすうち。年のいかぬ心から又内が戀しく江戸から來ておいでなんす。御加番の衆をだまして。よう〳〵江戸へ迯てかへりんして。本所にしばらくおりんすうち又　トはなしなかばへ廊下ばた〳〵しようじを明てはいりながら　【蝶】六さんホイおかどちげへ御めんなセへ　ト障子をたつて外へでる　【哥】モシちつとおはなしなんし【蝶】イ、ヘはなすとにげやすわりひくセさ。今もちよつと。はなしたらこけへ迯て來やしたから。もうつれてかへつてかじりついて居ねへけりやァなりやセん。どうも女ㇵいゝがうㇵつくだけがきづさ　ト火ばちのきわへよりひばしをとつて　コウてめへそりやゥなにをつけて居のだ【路】

どこにへ（トあたまへ手をあげそうにする）【蝶】どつこひふるめかしいが。ぼうずになる氣か（トぎん蝶が口あいにこなし〳〵笑ひになろあつまじもなこだを）かくして【路】モウじようだんもいゝかげんになんして。いつてお休ミなんし今じきにめへりんすから【蝶】ソリヤもうお𛂞出すくめんをかんがへるハ。行すへハ思ひやられたもんだぞ。いゝかげんなじぶんにお𛂞だされるのだろう美しい。をひはぎのよふだ【路】にくらしひ口だぞ、すんならわつちもいつて。ねんしようサアおいでなんし（ト障子の外へでろ折しもかすかに）迷ひ子やアイ〳〵（桝のそこたゝくおと）こと〳〵

夜明の情言

夜ハしん〳〵と更わたり二階も下もしづまりてつ。いびきのほか音とてハつるべもる水カン〳〵と。枕にひゞく軒の小雨のしよう〳〵として。物あわれなる其中に。武藏野が座敷のようす。宵にかわりしめりやすの聲高〻と

さけ今のあた合

めりやす〽うき中の。ならひとしらべかくばかり。花にゆふべのちぎりとなるも。はじめのなふすま一ト重こなたにハ。浮世をうらむ心から。今ちりかゝる華町の手に持筆をとりおとし

【町】いまのはたしか。いや／＼心のまよひから　トふでとりあげて
巾上たき御事ハ海とも山ともかぎりのふおわしまし候へともさいこをいそきらぐまゝあら
／＼巾のこしらく／＼かしく

はなゟ

しん白
御もとへ
かへす／＼くとう候へとも

こなたにハまた
めりやす へいつそあわねバこうした事も。ほんにあるまいよしなやつらや合
みらいハかならす一ッはちすとそれのミたのしミらぐおんなのぐちなこゝろから筆のたて
ともおほへのふおしきふでとめらぐ

ふすまへだてゝ
めりやす へあだにくらせし月日のほども。いわす思ひの涙(なみだ)の雨(あめ)に。いとゞくちなんよつのそで
チャン
【町】なむあみだぶつ　トすでにじがいと見へし折からふすまをへだて　【六】これはやまるな　ト右の手をしつかとおさへかほつく／＼と見て　お花じやァね

へか【町】しんさんでおすかへ。どうぞはなして殺しておくんなんし【六】血まよつたか。お
花わけいくわしくとなり座敷で聞ての。しぎマァおいしやァ何のために死ぬのだ トいわれて氣がつき手をあわして
【町】ほんにわつちとした事がぬしに逢たいばつかりの。思ひがあまつて死ぬかくごマァどう
して爰へハ來なんした【六】是にはだん／＼わけのある事。後にゆるりとはなして聞そふ夫ま
でハ。かならずともに【町】さとられぬようにしろうと云なんすのかへ。わつちもさつきたし
かぬしのお聲と思ひんしたが。是も心のまよひからぬしのお聲と聞へんしたのでおつせうと思
ひなをしてたつた今 ト折から廊下をうハぞふりのおとにひつくりして 【六】すんならのちに【町】うれしう御ざんす トふすまはつた
り折しも来るむさし野障子をあけて 【武】ヲヤなぜお休ミなんせん ト床の上へあがり ぬしやァさぞ。お腹がたちなんしやうかん
にんなんし。實にしやくがおこりんして眞にくるしうおつしたからつい今まで ト言かけて サァおや
すミなんしな【六】うそにもおめへがそふ言なさりやァうかむと言ものだ。しかしもう夜が
あけるそうだ御ゑんがあつたら又かさねてと。いふもんだそれだからしやくがあるなら跡。でゆ
るりとおすとも。揉ともかつてにしなせへ ト床の上に多ばこをのせけむりたわにふいている 【武】ソウおいゝなんすならほ
んとうに巾んしようが。ぬしハマァなぜにわつちをおだましなんした【六】わらいながらかねておめへ
の噺を聞て。とふから來てへ／＼と思つていたがしよせん。おめへ方の所へとげてこられるよ

うなっ　わつちでもなしおめへも又わつちがような。しミつたれをよぶ氣もあるめへ。そうすりやァいくらおもつても外にしよふもねへのさ。そうして又おめへだますのなんのと言けれども。ありやァよくつもつても見なセへ。外の者ハ。たがいに深くなじんで來る。なかへわつち獨り初けいで來るのに。あんまり手がねへと言もんでくるしい思ひで。あんなまねをして來たのサそれと言も。おめへに聞ぼれがして。來たくつてならねへゆへさ（トおつにからんで言ゆへじきに言ばをとつて）【武】ヲヤなんとおいゝなんすへ。ぬしやァきゝぼれがしてお出なんして見なんしたらあいそうがつきんしたのかへ。わつちがわるい事がありいすなら。いく重にもあやまりいすから。どふぞかんになんしてマァ少しのうちお休ミなんしナほんにぬしが今おうたひなんしたのを。聞ておりんして。じつに（ト跡を言かねて疊のちりをひねつているゆへ）【六】はらが立たといゝなさるのか。所詮わつちらァおめへたちの。お氣にやァあわねへのサ【武】どういへばこふ言といつて。よく人をこまらせなんす（ト小聲にて）よび申てへと思ふ客人ハなぜ。こんなだやらもしへぬしやァ今日おいでなんしちやァわるうおすかへ【六】わつちもじつハ居てへのさだけれども。いやマァけへりやしようよ。そして又此頃にきやしよう。かゝれて居のもあんまり知恵がねへ【武】ぬしやァこれほどに申いしても。まだおうたがひなんすかへ（ト用意の剃刀とり出し枕にあてゝ小ゆびふつゝりいたさをこらへ紙につゝみてさし出す）【六】手めへがそうゆふ心ならうたぐ

りはれた【武】マァ是をとつておいておくんなんし【六】すんなら是れとつておかう　ト出にそきりたるを　す紙を手に取あげてふところへ入るふりにてまくらの引出しへそつといれるをしらず【武】それでわつちもおちつきいした。ぬしハマァどこでおすへ。どうぞお聞セなんし【六】てめへまたそれを聞てなんにするのだ【武】もしやぬしがこれぎりて。おいでなんせんときハ。ぜひ人をあげ申いすマァすわつていなんせすと。よこにおなんなんしな【六】笑ひながら　よこにもなろふがいゝかげんにかいておいてくんなせへ【武】なぜておすへわつちがいつかきひしたへ【六】そふゆうけれども。おいらがひとりで來る客じやァあるめへし。言だの蝶だのといふしつかりとした。なじミのてやひがあるから。跡でわかる事だ【武】いゝへそれにやァちいつと。いりくんだわけがおつして。此ごろハ花哥さんともあんまり。心安くしいせんからどふも聞にくうおす【六】そりやァまたなんのこつた。色男出いりだろう。むりに聞も思ひやりがねへが。またきかねへじやァふたゝび來てもおもしろくねへ。初めて來てこんなヿをいふのも。あんまりだもふだまつていよう【武】いゝへさ。もうかふなつちやァぬしにハなんにもおかくし申いせん。おはなし申いんせう。其かわりちつとぬしにもおねがひがおすが。かなつておくんなんすかへ【六】そりやァおめへが咄したらねがひもかなつてやるまひものでもないが。まァそりやァなんだへ【武】マァもつとこつちへおよんなんしな。あれさあつ

かましひ帶をときなんしな。此手を爰へこうおやんなんしト六三郎か手をまくつて見てさァ此ぬしの手にある花命をどふぞト言ゆへひつこめんとすれどもおさへてはなさぬゆへそらさず笑ひながら【六】そりやァそつち次第でどふとも今でもほりなをそうが。よくつつても見や。まだなじみもなし。たがひに。心もしれねへうちそんな事を。したつて。何もわかつたと言こともあるめへじやァねへかへ【武】ハテぬしでもおつセんわつちが是ほどまでに思ひゝすに。ぬしハ。じやすいでうたぐんなんすのかへ【六】なァに。てめへをうたぐるのじやァねへが。もふ夜もあけそうだ。今にミんなが來るだろう。又いづれ此頃にこよふよ【武】いゝへ。どうおいゝなんしてもおかへし申いす事ハなりんせん。言さんとかァわつちがいゝように申しんすから。明日ハぜひおいでなんしておくんなんせんけりやァなりんせん。時節にはづれて今夜ハさむうをすァレサまァこうなんし。どふしんしようばからしひとひつたりかじりつくゆへ【作者】是からさきを聞ずんハあるべからずとかたずをのんで聞いたるしかれども跡は何のおともなし折しも【蝶】サァ六さんどうだあかるくなつたぜ言さんハけへらねへとさ【六】さァいきやしようとなり座敷にて花町がためいきほッこなたには作者がつれ呑こむおとくびり

跡は居つゞけ輩遊びの咄し華町と六三郎がこんたん花

哥か敵武藏野が客となる末のすへまで葉ばかりながら
まち玉へと

跋

北國樓の魂膽小冊數多秀作の中へ云猿事とお笑ひをかへり見申と御呵りを聞ざるふりは誠に猿の人眞似と顔を赤くして其席をさるもの狒ゝさうとし

一貫土堤

口演

東西〻〻高ふハ御坐りますれ共。是ゟすらりつと申上ます。御ひいきの御方様より御このミにまかせむかし語りの怪談を坐しき狂言にとり組まして御覽に入奉ります狂言名代の義ハ▲今様一目堤第一番目役人替名の次第

通人三綱　市川門之助　　同五常　澤村宗十郎
同揖譲　市川八百藏　　同進退　坂田半五郎
哥樂先生　松本幸四郎

其外女形あまたに御さりますれハ役わりを則略しまして御さりますか第二はん目八丁縄手一目堤の段まではハ春の日とともにこどのふ永ふ御坐りますればゆるゆる〱と御見物のほどをひとへに奉希上ます其爲口上左様ニおぼしめされてくだらぬ事を垣根の外へハ白拍子ニさし舞の袖頭巾一目堤のこんたんハうそじやござらぬ茶ひやうしの本の事にて本名をミんなかへ名に齒朶杯葉なのる事をもかくし題わからぬ无娜の一まひハよしなにくませ玉章の露のかごとの口上がすめバチヨン〱付ヶを打ッ下坐でのみ込はやし帷幄の内の道具建念に奉ン入念ヲ候上

書肆鼻冷房

一日土堤自叙

夫劇場の不寢見木戸を。鼠木戸と心得。封彊側之寐子を。猫と呼ぶ。猫に小判の喩も空からず。金猫の名有れバ。鉾かと思ひ。銀猫とは香爐かと思ふ。回向院の猫の石塔天王寺にねこの欄間。公家に猫間中將有。女三の宮といふ猫あれバ。蕎麥に寐粉有。物乾に根子あり。似た物者烏ねこと熊女。雛娘鷺孃。猫の女郎に客の帶。猫じやらしとハ有難山猫其傀儡の見番ハ。猫の眼を以て迎をかけ懸れは左右ハ虎猫也。猫舌有れハ猫脊。猫の杜子美が詩にも。麝香眠石竹。睡が如涅槃會に。畫落されし猫魔の。それ唐猫に鰹節。左有者清原深養父が。猫を詠し哥に。

小夜更て。あさくさまぬに逢ぬるかこくゐさも其うらふれて鳴。猫の首玉ハ虱紐の看板と成。猫足ハ兼太夫が見臺と成る。かゝるおりにや深川を淺く見て。猫を壁と三毛猫にして屋上より猫を投じたるごとく。やむわりと。ねこなて聲の言質ハ猫にあらず。天木蓼にあらず。御旅にあらぬ異き妖怪有。不審なる哉此化生。鼈を禁物ならむ。手の音を恐怖。毛志之助が呪咀にハ耳を抑へ。めんない千鳥に手の鳴方へと云ハず。神拜をなすに。柏掌ならずして疊とん／＼飛た叓と。能見届るに。一ッ目の妖也。化物伊勢屋ハ南驛の。猫が臑を神田の臺の。能智恵帒の底ひなき。作者も骨を折にふれ。戀と情の二國や一

一日土堤

日土堤と大師さまの御籤も。日にハ幾度浦右衛門。頗洒落本。預屬湛有中に。今將土塘の和哥松に辨呑やしきの光りをバ。春のながめの徒然に。猫ならぬ女兒ハよけれと。玉の盞を八郎兵衛へさして。壹ツノ目と言「爾り

于時

天明八戊申とし

孟陬

總目次

○哥樂が菴室

○通言の原始

○うゐろうの演文

○三子の遊談

○書家の名譽

○娼家の異見

○無心の階梯

○鄰壁敷の噂

○哥骨牌の興

○きぬ〴〵のさま

畢

一目土堤

一ッ躰風雅なる坐しきの躰西の新道へかけて枝おり戸あり東のかたにうへ込石とうろう柴かき石の手水鉢きれいにかざり付榑椽にまハし雨戸竈雞のこゑに上野の鐘にて夜が明くと向ふの方揖譲進退両人出て來る揖譲ハはおりゐしやう着ながし脇さしおとしさしふところ大キく進退もはおりゐしやう長脇さし馨花の出立艸履とり二人つれしん道のまん中ころに立とまり

【揖】五常ハ何處へいつた【進】あそこで小通だ【揖】少通といふハたしか四皓の内に有ッたハへ【五常】しづかにいかねへか（とこゑをかけながらはおりゐしやうきながしお太刀をきめかこゆひどこのわきより出てくる）【揖】ながへ小べんたぜ今のひかりをミたか。者だの【五】ゥ、ありやァおいせだ【揖】ム、德町のか【五】ナニさやバ町のさ【進】先生ハ内だろふか【揖】又しやれころバしてふさがせやふか【五】夫が能からふ【供のもの】サァおいでなさいまし（とてんツヽになるとなくしぼり戸の外にたゝずミ）【揖】先生おやどか（と戸をとん〱とたゝく内より）【哥樂】たゝく迚。やどのつま戸を開たれバ。人も來ずへの水鶏なりけり（となりの娘が琴うたミこ。しやうしをひらきあるじの哥樂先生立出る。床の間に文臺からろ。書籍をならべ掛軸ハいかの浦定家机に歌書あまたのせかたハらに吉備やき手あふりなど置ゆら〱とたはこを呑いる）【揖】是ハ當國かたゟ出たる通にて候【哥】そふ

いふ聲ハ揖讓子しやァねへか。サァくずつとはいらッしやェ【五】ハヽと笑ながら【揖】ハヽ内へはいる【進】ハヽ【五】供をかへすが能からふ【揖】大げへしさ【五】立ツて供のものに向ひ手めへたちやァけへりや。こんな爰にゐるといつたがいゝ。谷平ハばんに迎に來イといゝ付る供へこなかへる【五】時に先生。よい哥でも出ましたかな【哥】いや此間ハ徒然なるまゝに。壹人竹檠のもとに肘をまげて。枕草帋にして狹衣をかたしき。夢にもいざやしら玉か。新古今を口すさむのミ【進】私も些哥をはじめたふそんじます【哥】おはじめなさひ。まづ哥に六義あり。難波津淺香山ハ哥の父母とし。神代の風義にして我朝にてハしらすんハ有るべからず。今やうのきいたふうに。三十字一もしとハ冬葱味噌と心得腰折とハ咄の中へ邪魔を入た事と思ひ。連續とハ坊主が野郎に成ッた事と心得。旋頭哥とハ船唄と思ひ。三ン鳥の傳とハ。松介が仕事師の役かと思ふ。探題とハ大内へ登城する事兼題とハ本を載せる物。長哥短哥ハ博奕の哥と。早合点の壹人で濟ます。聽取傍聞でハ。哥ばかりハまいらんて。たとへハ。わがやどの花見がてらにくる人ハちりなんのちぞ戀しかるべきといふ哥ハ。當世によく叶へり。その心ハうつくしき通としまの女ぼう。十六七の意氣にしてはすはにあらぬ。娘さかりに手がとゞきしを懸想し。或ハ妓者などの宅へわかきおのこら。晝夜たゞ分たずはりに行。自腹など切ッておごり色男通の氣ぐらゐニて有しかども。人の女ぼうなぞハ。不幸にし

一目土堤

八

九

てまかれるか娘ならば嫁して他へ行。妓者ハ圍れなどして。今ハはりに行く力もなく。散りなん後ぞ戀しかるへき。なんと聞へたか子（五常進退かん心の躰にて聞ゐる）【揖】（わきのほうを向て小サなこゑにて）しれたこつた【哥】揖讓子もちとおはじめなさい【揖】ヱ、不佞も少ゝ讀哥ぐれへハ仕ルて。シタガ當世ハ哥連哥俳諧柳だるでもねへてナ。とかく諸事狂哥の事さ。わたしが歳旦にとし月をかさねたんすの引出しも明てうれしき節小袖かな。まづざつとこのくれへな物さ【五】なるほど狂哥も時の興になり。善不善にかまハずはやくおちの來るやつだて【哥】さゝ竹の大宮人にもむかしゟ狂哥の名人ハいくらも有つたて。といふ内にからす丸光廣の卿などハ本哥も左禮哥も名人さ。アノ猫のつまといふめりやすなども。正親町公通の卿のよまれた。猫のつまこひしぬるより三弦の。かわいやそれも色に引かれんといふ狂哥から出たじやて【進】ハ、アそれで解せました【五】時に足下の狂名ハ【揖】八張棟梁【五】フ、ウどうりで狂哥福神双六にも名が有ッたと思つた【揖】アノときやァワかなの狂哥だ【進】棟梁でハどうが雲霄に聞へるハヱ【哥】そのはつさ。在原の中納言棟梁といふうたよミが有つたて。此人の哥ハもの字を下に置つれバ。かならずつよくて。言葉をつくと申てほめられけるとかや【揖】そのおつかぶせに附たのさ【進】私も此十五夜ハ月見の狂哥をいたしましたて【哥】ム、なんとおつしやつた【進】下戸どしハミな望月をなが

むなり上戸ハ酒の盃をみる【五】ッ、ゥおもしろふござへす【拝】酒の盃はどうか有さふな所しやァねへか【哥】イヤいゝのさ進退ハ狂哥ハ出來るて。【進】ほめられてのり物町しやァねへが。先ッころ探題を取合やして。むしやうに口から出次第と。狂哥を詠じました。詠しましたもすさましひが。わるひ所ハ直しておもらひ申ませふ。まづしよて取ッたのが寄箒祝。こいつハ大にてこずりました〽君か代ハ八千代といわる玉はゝきたぶさもゆらに蘭をはくはつ

目黒のはつ雪

初雪をあかずながむる目ぐろ道おもしろたへと醉ふ田圃はた

隅田川の白魚

白魚を我おとらしととり拝の舩ハ一しほ氣も角田川

不ㇾ逢戀

俤の目にちら〳〵と三重の帶とけてぬる夜にいつかあふべき

吉原時鳥

宴の中の町にて郭公さすがおあいと聲をかけたか

【哥】マァ狂哥ハそふいふものさ。なをすといつた所があんまり違ッた事も無ひ物だて。イヤ

どれもよふござへす。【五】だいぶ出來ました【拇】三ツ日向顔のせされバ其智はかりがたしと。しバらく謁せぬ内だいぶ御上達だ。中〳〵不佞およぶ所にあらず【進】イヤ是ハ御あいさついたミ銀山ねづミとりかぶと【哥】しかし最はや狂哥も一ッ花はやりてもとの何とやらで。今やうハ狂哥をあんじる隙に。寧迫哥をよむが能ひ【進】ヘヱつめ哥とハ【哥】迫哥と申ハごがいかにきよとのさじよとりけぶすればじくこくのにぎよとべけとくろほがトいふやうな物是も分かるやうに申さふなら。五月五日に京都の三条通リけんぶつすれバ。神功皇后の人形に辨慶と九郎判官の人形をミたといふ事さ。ヘ、、、、浅黄うらが萬葉哥てしやれをいふやふな物で。一ッ寸聞てハ何たか分らねへてな【五】それておもしろふござへすネ【拇】コリヤア何もむづかしひ事ハ無ひ只云ひ廻シばかりだ【五】きのふ油通汚といふ洒落本を見たが吉原大全ニ有る事をヅブ書たネ【進】ハテナ【五】傾城のはしまりハ前漢の李延年が妹から始るとして有ッた【拇】李婦人ばかりでもねへて。詩經にもといつたら又吉原大全を見ていふやうだから。だまつてゐやう【哥】契情の詩哥ハしバ〳〵有るが中にも寄遊女といふ題にて定家卿の御哥

に心かよふゆきゝの舟のなかめまでさしてかばかりものハおもわじ

是浅妻舟の客をまつ風情を詠し給へり。又野上の遊女をよミし哥に へ不破山をあさこへくれバ

かすミたつ野上のかたに鶯ぞなく。泊遊女といふ題にて實陰の哥に
夕波にこゝぞとまりとうかれめのうたふ聲にや舟もよるらん
なとゝいふがごさる〔揖〕狂哥にも有るてなへ傾城にうそとまことはありそ海のはまのまさご
の客のかず〳〵〔哥〕フヽゥ夫はへ我戀はよむともつきじありそ海のはまのまさごはよミつく
すともといふ哥から出たのじや〔進〕左様ミへます〔五〕唐にも女郎屋が有かの〔揖〕隨分有
のさ。あつちで吉原といふような所を。花街などゝ云てナまづ唐の世に北里といふが有り。明
の世に板橋といふが有ッたて契情の事を倡婦と云突出しを靑妓といふ〔進〕通といふ事は唐に
も有る事かす〔揖〕有るとも〳〵孔子老子をさして通家と云〔進〕なるほどどうりで司馬通達
といふ名が有ッた〔揖〕おきやァがれ〔五〕シテ大通といふ事はいつ頃なはやり出す〔揖〕大
通といふ事は前かたよりいふ事にて。分て明和六七の頃なんどは。粹なる人はより〳〵いふ事
ありといへども知るものなし。里な人には勿論也。しかるに安永六西戌のとしなは。大通とい
ふ事。江府江中に專ら流布す。樽ひろひまでしやれにいゝ。夫なだん〳〵遠境邊鄙にいたる迄
此事大に流行す〔進〕又地ごくといふ事は〔揖〕五六年此かたにて最初は地ものに極りしゆへ
名號て地ごくと申也。今はのこらず革羽おり故。皮極といつて可ならんか〔五〕まつた手の長

ひ人を二ッ目の道具といふハ〔揖〕その心といつパ。舞臺がいつも黑幕ゆへ。うしろくらひと
いふ事也。〔進〕小ぬす人をバ〔揖〕内氣といふ是高麗屋が云はじむ〔五〕ちよんの間といふ
事ハ〔揖〕三味せんより出たることバ〔進〕野暮を壁とハ偖いかに〔揖〕女郎もかわず夜ある
きせず。内に居るのを野暮といふ家のほとりをぶら付くを則家邊と申也〔五〕苔なやつとハ〔揖〕
青ィといふ事〔進〕茶にしてゐろとハ〔揖〕向ふのやつを呑でかゝれといふ事也〔五〕水にし
ろとハ〔揖〕ながしておけと申事〔進〕はしよるといふハ〔揖〕なぐるといふ事〔五〕どうい
ふもんハ〔揖〕廣德寺〔進〕興福寺とハ〔揖〕隅田の牛嶋。奈良にも有〔五〕東福寺とハ〔揖〕
通天橋〔進〕透頂香ハ〔揖〕小田ハらうゐろう〔五〕演文ハいかに〔揖〕ヲツト合点ヱヘン▲
拙者岡場所の咄と申ハ。お付合に先達て御そんしのおかたく\/も御ざりませふ。御江戸を立ッ
て見通し平澤ばせをかうやく玉屋の花火。いからしを左右にはるか。向兩國。總州岡場所辨天
講と申ハ。元町尾上町をおすぎなされ。土手川にわたせる。貍橋をおわたりなさるれバ。千劢
屋旬介苗字ハ升井只今にてハゐんきよをいたし。悴清助となのりまする。御旅か清澤やしきへ
とまりにお出なさるゝか又ハ。回向院へ御参詣のせつはかならず角違被成まするな。御のぼり
なればバ左りのかた御くたりならバ右のかた。軒にハ暖簾片波のもん。子供御洒面でなくて行儀

たゞしひ所てござる。ャレ近年ハうれるハ。はやるハとあつて所〻ほう〲に似せかんはんを出し。イャ富永町の大富町のといろ〲に似たる名を申せども。ひらッたく八郎兵衛屋しきとしるしたハ。山田屋。山くら。堺井。のう劦。せんしうや。はかり。御そんしのない御方にはたとへ百兩遣ひなされうとも壹人も揚ハいたさぬさるによつて客のまいることに。錢金を肌足と遣ふ。ソリャ〲〲廻つて來たハ〲馬鹿やうそ。くだらぬ舌にかけられごん。玉のひかりハ口癖に狂言書たりされやかに。うそつくの空生醉。つぎかけ〲つぎやんしよ小言の長酒〲。こん魂膽の小長み。アノ客たのんで金たんとかりよ煮ても燒てもくわれぬものハ。としまに自まへかわはおり（といひかけて揖讓せきをせき出しアヽ〲といふ）【こな〲】どうしたく〲【揖】あんまりしやべつたら。口が六あこだへまいつたやふだ。咽が引ッ付てならねへ。茶を一ッくだせへ呑口一ッはいと出かけやふ【哥】おもしろし〲揖讓子の口ハ鵝毛よりもかるく。いにしへの魯の子華。晉の孫楚も此席に坐さヾ。おもてぶせならん。我丁の高麗やもかく屋へ逃。おや玉は淺黃頭巾を脫て大キにあやまらせるのといわん事まのあたりなり。仕かた咄ハ。吉原の磯八か身ぶりのことし。中〲きく事でござつた【五】サァ茶をのんだらその跡が聞キてへ【揖】イャモウ此跡ハよしにして咄にせう。遠文でなしのさいつころ。土手がハのじやくしやうへまいりやした。

〔哥〕じやくしやうとハ若升屋か〔揖〕さやうさまづあそこではしのやなミやから尾小野まで。十軒の内じやァ若升が一番〔進〕ひまか〔揖〕ィャ中ぐれへだ。そこでおつねがどなたをおよびなせェすといふから。だれでもいゝ。うつくしいのを大げへ手めへせうちたろふといつたら。お吉といふ婦人を出した。所がなんぼおれが通に口をきいても。おもしろくねへから。げいしやをよびにやつた〔五〕はおりか〔揖〕ゥ、お來に梅吉に豊政をよんで。どんとさわいでゐると。源次に錦や勝次がおしかけて來て。初手の閑靜に引かへて、大ゞ講かおどり初のやふさ。その後よつほどまいりやしたがどうも手のねへやつだから。此ごろハおとよにした〔五〕若でハおれも咄が有ルて〔進〕ワたしもごぜへすて〔五〕マァ／＼おれに咄させねへ。此ごろのことさ三人連で開帳へまいつて。夫からかへりに。遠文へ行氣で何の氣なしに若升のまへを通るとおつねが見付て飛で出るとあとからおなかとおかねが出て。女護の嶋へいつた男を見るやうに。おれをつかまへていごかさねへ。ぎん猫のやつらハきもをつぶして見てゐる。連ハ若升はいつて腰をかけてゐるし。にげられぬと思つたから。なま醉のけんくハといふ身で。二階へ引ずられて上つた。夫からお定りの通り。婦人がむかふへ。おつまとおかんとおりよといふが三人ならんだ所が。中の婦人をよく／＼見ると　ィャこゝが事さ。久しいあとにおれが

足を付て置た娘だて〔進〕イヤアツリヤアどこで〔五〕梅むらで娘分のおせいさ〔哥〕とんだ事が有るもんだのァ、おせいハ。十ばかりのじぶんから梅むらへ來て子共の時ハいゝ子でごぜへした〔五〕わたしが仲丁へ行じぶん。きやうけんをかひてくつと足を付やした。所がむかふでも大せうちて。近ゝ御すつもりにきまつた所へ。寸善尺魔が〔拝〕よく有るやつさ〔五〕カノナ用が出來て三州へいつたといふもんだから。どふもこゝであかぬわかれの鳥ハものかハと成た。此こたァ伊三や幸次がよくしつてゐるョ〔拝〕アノ藝者のか〔五〕ゥ、そこで若升て思ハずめぐり合しハまことに夢のごとし。こつちでもわすれねへからむかふでもわすれるはづハねへハさ。おせいもわたしをミたが何ゝともいひにくひさうで。見ぬふりをして只うつ向て何ゝともいわず〔進〕ゥ、お半といふ身で〔五〕とふも合点がいかねへからよく見りやァ。雨がんになんだをうかめたやうすで。なをうつくしひ子。とやかふいろ／＼おもふ内上の方から間盃と出たもんだから。こゝでざんねん閔子騫な事が有つて。おれが中にゐると何の事ハねへが。端にいたのがあやまり。とうぞめんくをして取りかへてもらいふと思つたが。盃がすんでしまつちやァどふもならねへてのそこでそのばんに名のり合もせず。だん／＼咄しを聞た所が。おせいにちがいなし。あとで聞ゃおせいがいふにハ。五常さんもまへかたからしつてゐる

しどふも連しゆへハ出られやすめへといひ出して。そつちこつちと内しやうてもめたのを。かゝしゆのおミよやおつねが。團子をいつていゝやつとでむりに出したと。おなかゞはなしたつけ。夫から度よいつたけれとも〔揖〕邪魔な嵐や雲が出たか〔五〕出たのくれへ連が買に行。又ハわきへ出てゐたり。その外間がわるくなつてあハねへ。はなハだうすきゐにしとあきらめた〔進〕ナニそふあきらめずといゝ事だ〔哥〕さいぜんた五常が咄しをもくねんとして聞ゐたりしが何思ひけんふでおつとり ○ あひしりける女のっほどへてのち。ことかたにすミけるをしらでおもほへずっともとちとともなひて。その里にあそびぬる折に出あひぬ。見まがふへくもあらねどかの女のしらす良なるに。まよふ心のそら目にやと、おほつかなさに。こゝろおかれてためらふほど。はやことひと、さかつきなんどとりかわしかたらふにいとゞ心あつしく口おしさかきなかゝき くミてめしもとのちぎりをわすれ水あさくもよそになどながるらん と書て五常にミせる五常おしいたゝひて是をよミて〔五〕是ハおもしろふよふ出來ましてござります〔進〕なるほど御秀逸と申さふか當意卽妙〔揖〕おそろ韓退子〔五〕此通りかいてやつて見やうか〔揖〕また壹ッ狂言をかきャ〔進〕あそこでもやつハりおせいといつて出るかね〔五〕イヤおかんと云て姉もかたミと云てあそこへ出やす。何でも二人ならべた所ハ。姉妹とハ云ながらァ、も似るものか〔揖〕そういふのが有るものさァノ淺くさのくわんおんの脇の方とうしろにゐるが。柳屋平十郎といふやうし見世に。姉をおもん妹をお吉といつて二人ながらちよつと見てハ分かりやせん。見ちかへるほど似ている子。くハんおんのむきのほうに出ているのが姉のお門さ。去年げんぷくをしやした。妹のお

吉ハどうのうしろに出てゐやす。まへどハ三社ごんけんのわきにおりやした。此ごろ今の所へ
出るてなっ【五】いてう娘のおつかぶせをしやうと思つて【進】やうし屋といへハ。随身門をは
いると左ッかハの中ほどに。柳屋八右ヱ門といふやうしミせハ。いつ通つてミても。はりてが
四五人ッ、たへねへ。伎倆かいゝといふほどな娘でもないが。諸人あいけうのあるのだ【五】
アノ娘ハおいくといつてのおやぢハ八右ヱ門といつて上かたものさ【進】よくしつてゐるの
【五】なんでも淺くさ通といふもんだからかなふまい此ころおいくハ見へねへ【進】そのはつ
さいゝしりもちが有つて。去年の六月じぶん。家内中が日本橋のほうへ引こした【哥】おしひ
こつたもちつとあすこにゐたら。柳屋おふぢをミるやうに錦繪に出やうに【揖】サア是から進
退の唱しを聞かふ【進】おれがのもへんだて。三綱とふたりでまいりやした【五】三綱だから
いゝ【揖】三綱とハ君臣父子夫婦の道をいふ【進】そこでまづおく二階へすつと上ると。お常
が來て今からハ半派だといふから。そんならまつがいゝと口をかけさせて。その内須賀太夫に
岸澤金藏米吉に文字八。豐きのと谷吉をよびにやつてかけ合をかたらせてマァのミやした。夫
からお常が是から向ふに見へる藏がわたしらがくらだの。かしのやうきう場のならびに。格子
に玄關かまへの内がわたしらのゐん居所て。おかミさんのいもうとのおいわさんに。さる鍔師

を婿にとつたなど〻。おもしろくもねへ噺しをしてゐると婦人が來た。どなたもこつちらへお出なせへしといふと。兩婦が來てすハるト壹人の婦がぢきに立ッていつた子。どうもがつてんがいかねへと思つているとおつねをよんで進さんにやァどうも出られやしねへ。土橋のてうやでまへかた一坐をした事が有るからと。とんだ事をいひ出した。こつちにやァおほへがねへから。出てもいゝと思ふなら出たがいゝといつたが出ねへ。そこてかハりにおこんが出た。三綱がおりるときまつてたん／＼例のしやれなとが出て。もはや床へまハらんとほつした所に。下からおなかゝ來て。三綱が側へ手をついて【お仲】どふもおきのとくでござりますが。おりへさんハおなじミがほていやへおいでなすつたから。おもらひ申てくれろと申てまいりましたおきのとくでござりますがね。どふぞ【三】くれろといふ事かッりャァ事と品によつたなら。やるめへ物でもねへがあんまりばか／＼しひ。進公かのハすハるかすハらねへに。かへるか。おれがのハくれろといふ。うそにしろほんにしろ。なしミの客が來たにちがひハ有るめへけれど。かうばんくるハしか有つちやァ。こんどから女郎買に。八卦てもおいてよく日でもミてこねへかならねへ。二人ながらさう入かへるといふハ。夏冬の七ッやしやァ有るめへし。手まへたちもおれがむりかかんがへて見やっ【仲】おつしやへす所ハしごく御もつともでごぜへすがねナ＝あ

なたがたにうそをついて何ッになるものでごぜへす。たとへ又うそを申たとてほんになさるやうなおめへさんがたでもなし。おなじミの客しゆがござつたから。もらつてくれろとほていやからたのんでまいりやしたうそと思しめすなら。下へいつてころうしませ。あそこの女中が來ておりやす。是が又おなしミといふじやァなし御初會でごぜへすから。又外にいゝ子共しゆがいつくらもごせへすからおよびなをしなすつてもよささうなもの。そうおつしやつちやァ通ゥじやァござりやせんと。しばいのお月さま。こけの釣をミるやうに上たりおろしたりするから三綱もぐつとかんしやくでとんな事をいつてもやる事ハならねへといゝ出したからわたしもつき米やか鍛治屋の隣にゐるやうでやかましひから　中へは入ッていゝやつとで弱よく鬮をせいしやしたて。下でかゝしゆのおミよも。すこし氣味がわるひとミへて　見番から札をとりよせて。その中で子共ゥよつておつねを喚にやつた所が。かわりがほどなく來て坐に付くとうつくしひ子。中〳〵おりゐなどれよつ付かねへ。そのはづさ馬や道から鞍かへして來たとき夫から三綱がきげんも大直リで大きかづきでぐつとまれしい床へまいりやした。その晩ハ大酩酊でいつ幮の中へはいつたかしらねへくれへ。そうするとおこんが來たからりきんだ浴衣を着たのといふと。コリヤァ新かたでごぜへす此ごろあつらへて染やしたといふから。夫までハもめん

の氣よく〳〵見ると縐紗の單衣だから。ワたしも少しへこんだて。夫から咄しがねへからおかよとかいふ女郎が。色容か地色とか。けんくわをして。あたまをぶちのめされてくしやかうがいが微塵になつたといふ事を坐しきでちらと聞たから。何ンでも妓者といつたら。おこんがほんとうの所をいふたろうと思つて。今夜げいしやのおかよとやらが客に顱會をくらハされて。べつかうのくしかうがいが。石こつぱのやふになつたといふ事だが手めへしつているだろう【おこん】げいしやしゆにおかよといふハございせん。又こゝいらのげいしやしゆがへつかうのくしかうかいをさすのハひつとりもござへせんノゥおミなさん。ミんなつげのくしに花玉簪ぐらへさ。くしといへハ久しいあとに愛のおくさしきで五人一坐へ出やした。夫にげいしやしゆ子。大勢だから。わたしらがゐところがねへからァノ床の間の子。ふくろたなの下にすハつておりやした夫からしまいに立ッとき。ふいに立ッたから。上のふくろ棚へあたまをふつ付て。とつしりといひやした。此くしがおれたろふと思つて。ぬいてミると大にきづが付たはかり。よく折ねへ物だ子。その時のきづがコレこゝにござへす（とあんどうのひにくしをすかしてミせる）【進】是ハわたしにしよてちりめんをゆかたと見られたから。梳やしのぎも朝せんや水牛と見られちやァうまらねへと思つて。わざ〳〵咄しによそへて櫛をミせるやつさ【五一　フ、ゥ　妓者の黃楊のくしも夫で分ッ

た【進】夫からイヤ向嶋へいつた時ハあげや町の利八が來てヤレどうしたのかうしたのと夜中はなしてねかさねへから。ゐかうゐんの八分を聞てかへろふと思ッたらものほしでねこがなきやす。ワたしもふいと猫の戀やむ時ねやのおぼろ月と口ずさむと。此句をおこんがむせうに氣にかけやす。ナゼ手めへそのやうに氣にするといつたら。猫のこひ停といふ所が氣にかゝりやすといふやつさ。よつほど手まへの心でも手の有る氣。何ッても皮はおりにはつびを着せて。下馬でもぶちころさふといふ女郎さ【拼】あそびハさふいふのがおもしろひものたて【五】始終中〱一ッ興をしたの【ミな〱】アハヽヽヽヽ【哥】まことにけいせいほど世にふびんなる物ハなし。夫に近年の略語本を閲するに女郎の穴を書バよひかと思つて。おゐらんの内しやうのやりくりかされたんすの引出しの。隅からすミまであらひざらひを櫻木に彫るゝけいせいの身にとつてハ剃刀針の呵責よりもくるしふあらん。又けいせいが見聞くならバ。素人となつて。むかしの入ぼくろを入込の浴室にて見らるゝよりもはづかしからん。遊も木端女郎じやァいかねへて。殿方もちと樓へ御登なさい。高妓の頭上ハ怪知な小間物やの荷箱ゟもおもく。玉の龞甲ハ日に映して輝く。されば美婦をさして光ッといふも是ゟはじまるか。小便無用も東江のなかれをあらいし。二階の御手洗場にハ居續無用と書て大盡にはらを立たせる廓中の全盛

かつて護にむ爰に學者も御ざるが。アノ唐詩選に花近二高樓一傷二客心一萬方多難此登臨いづれも此心ハ御そんじ有るまひ。言ハ如月の末つかたより。彌生の節句が苦になり。中ノ丁の櫻も近ふして心をいたむる客。江戸中に多ふして目上の瘻の如くなんじうに思ひしが。やう〳〵面工が出來て。まんと有ルつらて樓に登臨す。有御坐の妙音を聞くといふ詩夕し婚眩のも塩中ハ。たてひざを几案とす。四季おり〳〵の戯と執着に云しも此園をさして也。松金屋の一丸や正六が居ねへ物だから。燈籠でも俄でも臨時の事に付てハ。今じやァ衰だつて世話のやきてもなし。イヤまだ予がぐつとわかひ時でござつた。玉屋の花紫といふがこま下駄に鈴をしこんで。道中をする時コロリン〳〵とかすかに鈴のねがしてイヤモどうもいへねへあんじたて〔拝〕鈴のはらこもりだ子〔哥〕さうさ。駒下駄ハ五十間の。てうや次郎兵衛が所で拵やした。〽居續の夜着遊べせて櫻哉といふ句も此花紫が句でござへす。そのじぶん。山本やの坐敷に其角が何がござへした。まへ書が傾城よ客よ。かりにも無常を觀すへからずとして〽時鳥只あり明の狐落。おもしろひてな。此山本やのむすこが今の中あふミへやうしにまいりやした。何ンでもけいせいのへや子ばかりが。五丁町に五六十人あつたハサ。その時代から見てハ。今ハ大キに〔拝〕ちがひ〳〵〳〵なミしづかにて〔進〕ヤァハァ〔五〕とうか青樓へいきたくなつたハヘ〔拝〕時におつな所へ

女郎屋が出來たの。【進】どこへ〳〵【揖】つまこひいなりの大超坂を上ると【五】ゥ、ゆしまのやすがい町かあすこ〳〵【哥】あすこハ惣名を三くに町といふてな。鎹町ハ小名でワたくしに付たのさ。わたくしが見た時ハ。山升や。あふむや。野倉や。丁壽屋と四軒出來て有やした。一番はやく見世ひらきをしたのが。去年の正月から始た山升とあふむやサ。是ハ畑からこしてまいりやした。そののち野ぐら屋といふが下谷から出やした。內の子共ハミんなけころさ。夫だからちつと行義のいゝやうな所もごせへす【進】品川へうらがの女郎屋が子供くるミこして來たやうな物だ家名ハつる屋といゝやす。【哥】丁壽屋といふハ大はしのさ。まだ六月じぶんハふしんさい中でこぜへした夫に神明などからも出居主に來ているといふ事。いわくあつて六七月のころまで。藝者といふがなかつたて。そこで深川の男げいしやがまい日ひる過から來て。夜の四ッにハ又深川へ歸りやすサァ四ッをチョンと打ッとげいしやといつてハ一人もなし。俄に引手ちや屋が出來るやら大さハぎ。【五】なんでも見通しハつがもなくよからふ【進】なるほど品川ハ海。あそこじやァやねだ【揖】明甚の伊勢喜で妓者をあげてさハぐ〳〵手かるひハへ【哥】さやうさちつと夜の明ヶやうが早いばかり。まづ新ミせといふものハ。はやる物さ（とはなしなかばへさしての戸をさらりと明て）【谷平】ハイ御迎にまいりました【九】ヲ、今かへるまつてゐや【哥】やつかれもそこ迄

いつしよにまいろうか〔揖〕とこへ御出なせへす〔哥〕桂舎の所へ〔進〕へエ、だが所だ子おまちなさへ。わたしがあてゝ見やせう。かうだからト此近所にハなし。徳町五丁め六丁めてハおミよか所かね。上かたへいつたおいそかト。揖讓といろ事のおこよかお八百かおきくかおきよか舟吉か但ハおかめか。うつくしひのが喜代吉。輕吹町でこゑのいゝのがひな吉うつくしひのがおとめおゆんおくめ品川で此はまたゞしハすじかいの長丁のおふミが所かへ〔哥〕なにさ桂舍主の所へ行のさ〔進〕エ、、わたしやァ又げいしやとうけ給りやしたァハ、、、とんだ耳だ〔五〕サァ御一ッ所にさんじませふイヤあしたの事にいたさふ〔五〕なぜへ〔哥〕あしたでもいゝ用さ〔五〕左やうなら先生〔揖〕たいしゆつと出かけます〔哥〕是ハむかしはなしで御たいくつだろう〔五〕イエおもしろふございましたとこなく（外へ出る）〔揖〕是から三綱が所へいつて遠文へおもむかふか〔進〕左様なら爰で御別申ませう〔揖〕五常さん〔五〕揖讓。進退〔進〕供の谷平〔揖〕かた〳〵〔五〕〔揖〕〔進〕さらハチョン〳〵〔揖〕六半だ

○一ト目堤厶呑屋鋪の宴

子曰。三人行。必有我嬬。擇其善者而。從之其不善者。而改之

りかへろといふ事じや　晋の恵遠法師ハ。陶淵明。陸修靜に訪れ。大キに左リが過キ溪橋の誓を忘れこいつ
ハ大笑だといひしを今に三笑と云其三笑にあらぬ三綱揖譲進退といふ上上吉の通ゥ手合宛如ニ
盜足ニ無レ逃の縛と碁太平記の六ッ目に見へしもむべなるかな【三】堅しま八丈の袷はおりに黒ちりめんの小袖下着も八丈帯ハ黒はかたさめさやのわ
きざし【揖】堅しまあいかへしのちりめんの小そでけんぼう縮紗のあいきころうのあハせはおりひもハいわすとひら打にて茶つかに錫粉さやの脇ざし【進】御なんと茶ちりめんのあハせに下ハたんごしまの小袖黒斜紛の袷はおりなつめの柄糸黒銀
圖子粉さやの脇さし【三】又こむだろふす【揖】あそこじやァ山田屋か遠文だ【三】ナントおゆんハきれい
しやァねへか【揖】アレモもとハあそこの女郎さ【進】四季あんのおいとゝいふつらが有るせ
へ【揖】あれよりいゝ進公ぬかるぜへ【進】わりいあし場だ とむかふへとぶ【三】とんだ小屋がかるひ
の【揖】あれで中かへりが出來ねへハサ【進】おせきハ神田ものにちがいねへハへ【三】ナゼ
【進】とらや永閑や俵や宗理か事をよくしつているから【揖】おれもさうおもふて何ンでも東
の方とミへる東とハ東神田也【皆々】とやかふいふうち雨ごくもほどなくすぎ稲荷やしきへつきゑんしうやがまへにいたる揖譲おもてのこし高のしやうじを明ケ内へはいる【内義】たはこをのんでゐる　是ハ
おそろいなされました子【嫁おゆん】【娘分おきせ】御出あそばしませ【揖】でへふこむの【ゆん】マァちつと
こゝに御出あそばしませと下の四畳半へいる【下女お春】三人をとるとおきにうらへかけて行【下女お千】茶をくんでくる【きせ】さかつき臺をもつ
てくる　進さんお友さんがいつそまつておいてなせへすよ【進】有がてへな【揖】夕ァハどこへい
らしつたお日にかゝらねへの【き】さくばんハゐんきよ所に用がござりまして。ひるからま

いつておりまして。すぐにとまりましたから。御出なすつたをごぞんじませんといふ所へお春手に木札をさげてくる【き】となたも御出なさるか【春】アイお友さんとおせきさんハお出なせへすがお美江さんハ晝から山田屋へ出ておいてなせへす。泊かどふたかまだしれやせん【き】そんなら此内でどなたぞおよびなせへしトお春か持てきた札三綱へわたす【揖】いかい事まへご札か有ルの【三】とれ〳〵と札を手に取フ、ウ。おりよ。お花。おミね。おけん。おかね。お八尾。おりきミんなよりつからしだ【進】何ンでも此中でハおミねがいゝ。花のよしの山といふから。お花もよかろふ【三】花よび團子としやうか花よんでにしきいごとしと。お花にせう〳〵【き】お春どんお花さんだヨ。と札をお春にわたすアイと起ッてよせバへ行此所へ硯ぶたてうしすいもの鉢さかなひろふたその外南京ちん介の器物きれゐにいろ〳〵出る酒ハたひんにしてかん、のごく得且好との方炉ハいきにしてくらからず【三】此屏風ハたれた【揖】知鍵サ【進】ム、筆法ハ妙だ。當時瀧本流でハまづ猿江の慕正堂具頓さ。又芙蕖峯ともいゝやす。【揖】フゥ瀬戸もの町の芙蓉ならおれが心安ひ【進】今ハ海邊大工丁へこしてゐるが。かやバ町にゐる時分ハ。山寺宗助といつて。マァヤツトウがよし書ハたれもつゞくものなく。瀧本流のちやく〳〵で百布袋といふを畫て夫ハ。いともかしこき雲井の御かた〴〵の賛も有り。万國の貴人高位、書生書家方のこらず賛をあつめ。百布袋畫賛とも成就して。具頓先生祕藏いたされし所おしひかな猿江で燒失したてマァ第一長崎に迄門弟が有らァスもはや齢七旬に及んで大れんちよくの人

也瀧本坊池の坊の本阿彌にして茶道の名器書畫何によらず其鈍が目利でなければ納らねへ【三】
頭取ハ其鈍から何ぞもらつたさふだといゝてへの【進】評判記じやァ有るめへし。【三】此屏風
でとんだかうしやくが出た【揖】でへふ咄しが自におちたの【三】自におちとらにおきる（といふ所へお
たお園の雨舟るとなく／＼にハかにだまるお友ハ三河小もんのけんぼうのちりめん下着ハ緊しま八丈ニツかさねかハた茶ゆすおとハきうく田の小もに下着大縞の八丈のちりめん／＼にくろしゆすのおび）
御出なせへしたァ【揖】友遠州より出たる事なり。又たのしからずや【關】進さん御出なせへ
し三さん夕ァおかしうござへしたァ【揖】夕ァハむごくしやァかつたナ【關】ちつとあんな事
もいゝのさ【友】今夜ハお美江さんがゐなさんねへで御わるふごぜへすね【三】いゝのさおめへ
がたハおうれだろふ。こつちハおふさだ（このおられとハおうれしいといふ事おふさとハふさくといふ事ゝのしやれことば）【友】牽頭におげんさ
んてもおよびなせへし【三】今めう代か來やす【き】揖譲さんちつとおはじめなさいまし【揖】
酒か（といつて坐ぶ／＼ほと【三】へさす段／＼盃まハる此内おとゝ門なと有所へお美江くる）【美江】どなたもよふ御出なさいました【揖】お美江さん
けふハ隣か【美】アイひるから出ておりやすがねとまりかとうたかまだしれやせんがね、ひよ
つとゝまりだとわるふこせェすからだれぞよびにやんなすつたかへ三さん【三】お花をよびに
やつた【美】お花さんをかァノ子ハうつくしひにわつちら方手が有といふもんだからどふも
（といふ所へお花くる）【花】どなたも御出なせへし【友】お花ハ爰へ來な【關】お花さん／＼ひるまハどこへ

出た【花】さかミやへ【揖】サァこつちらへ入らつしやへ【美】そんならわたしハいつてまいりやせふハイとなたも三さんのちにまいりやすよ。お花さんおたのミ申やすよ（とかへりにかゝる）【揖】おミゑさん〳〵【美】ヱ【揖】そのやふにかせぐと死ぜへ【花】ヲツトつる龜〳〵（といゝながら大和やへ行是もこゝのことはにてつるかめとハいわゐをなす事をいふ）【春】三さんそのお盃をお花さんにおあげなさいまし【三】左やふならおちか付のため（と盃をお花へさすお關とお友さいぜんゟ何かべちや〳〵と耳こすりをしてゐる）【揖】お關ヱ、【關】何ンでごぜへす【揖】何ンのこつたヱおもしろくもねへミゝッこすり斗してゐて。いろ事の咄しならあしたしや。何ンだかあじにするのおらァもうかへるぞ〳〵〳〵かへるがたれぞとめてハねへか【友】揖讓さん何のこつてこせへす【關】內しやうはなしをしたら色事だッ。大笑だ。そんな事をいつて吉原へ行かいゝのさ。おいねへ枇杷葉湯だ【揖】いゝのさ。いかねへでどふするものか。どこへいつても色男といふ物だから変でかなねへてな【春】揖讓さんあんまり口をおきゝなせへして夕ァのやうに【關】大キな目に合ふと思つてのふ（是ハ揖讓よし原へ斗行て久しくお關がほうへかよハざりしゆへ前夜たま〳〵來りしゆへほうばい女郎といひ合揖讓をまつはたかにしてきるものをとりあげおせきがきものを揖讓に着せ夜明けぬれ共かへる事をできずにこまらせしゆへなり）【揖】おいらがやうな通にあんな事ハしねへがいゝ。手めへも土橋にいた程もねへあんまりちゑのねへしやれだぜへなじミのきやくが久しふりてくれバ笑ひかほで出るか又ハ頭痛がするのしりがいてへの。氣しよくがわるいのといつて出るも有り。又なじ

ミのきやくのそばへだまつてすハりの。小ごゑて御出なせへしをいつて氣のおもさふなふさいだかほをして居るも有るてんだ。さういふのハゑて床でむつかしひ咄のあるもんだて深川の女郎ハ八まん參りか。山へでも行時か土手側の女郎なら（さしが行る故ねこといわす）御閉帳をおがんてかへる時うしろから來てあたまのものをミんなぬいて迯ていきやした。くやしくつてなりやせんが狂言の山て少しないて。しのきのかうがいや斑なしの櫛を買ッてもらふと今迄のくしかうがいハ七ッやから出るか。色事のほうへとぶか小づかいになるか。又年が明くと。おまへの所へきつといきやすが子。まだ壹年ヾ有の二年かゝつているのとまへ置が有ッて。五兩や十兩ハ出しかねなひ客とミると。年ゞをつめるにやァ廿兩有るとどふともなりやすが。十五兩ぐれへて。おやかたさんや。判人のほうをのミこませてどふぞこのくれから素人になりたふごせへすなどゝ。こんたんの鉄ぼうを引かけると。ぢきにのミこむ客が有ッて。金を出してやるとその金を引たくつてそのうへで長棹さ客ハぐつとあつくなつて。やけをおこすと内の首尾がわるくなる。所で國へ付ヶのぼせといふ事を女郎の方でしつている物だから。又外のきやくへ狂言をかきかけて。起請に入用だと。ほうばいの耳の寒瘡の血をもらひ。たりねへ時ハ隣の白責がのまでせんさくし。足のゆびのハちつともつたいないと氣の付く所がまだ殊勝さ。彫ものをけして金を取も古ひや

つだて出居主の地ごくハ三ッ賣ッてつく〳〵一ッはいに行。五ッからうる抱ハすこしッヽ、我まゝをいひ。茶を付てくわせねへと口小言をいふ女衒が女を見やふハ。かたから先へ見て足の大小を考へる。二三度も䗄に付た女郎でなければおゐらをかくの引のと。いふ事ハ出來ねへこつた。ナントそうしやァねへじやねへか　といつはいをいふ所へおゆんが來て　【ゆ】二階が明ましたサァ御出なさいまし

【進】さらば二階へ上ヵろふか　【三】トッテトチンツンツ　と口三弦をひきながら　【皆】二階へ上り物干ゟ見はらした所が

詩ニ曰瞻ニ彼ノ淇ノ澳一ヲ竹猗猗有ニ斐通人一　目前なる竹やぶを此君と見てハ。我身を王子猷にたくらべ一日もこの君なくてはとなじミのそばをはなれず

【揖】こゝに吉原出のおはまといふ女郎が此ごろまで有ッたが。大ちよちよらものさ。かくといつちやァ。泥鼈をくらつたしつッかきをミるやうだ共くせ至ッて有物で。どんな客でも。おはまにハころされたて。夫に妙な事にハ床でかの時に大聲を上てなきやす。なかれるにハ客もこまつたて。夫だからおはまが隣にゐる客ハ氣色をわるくした子。第一大酒でとによると一日めしをくわずにゐる事がいくども有るハ。去年とやら中橋の方へ圍ハれたといふ事た　【進】ハテナ　【揖】うそだと思ふなら聞てミな。此五けんの内でハおはまが事ハミんなしつてゐるてな　とはなす所へ下ゟ内義くる婦人どもミな行義をなをす　【内義】でへふおしつかでござりますね　【友】たはこをついて　ヘイおかミさん　といつて出す

【内】ちつとおいたゞき申ましやう【三】持合ました一ッあがれ【内】ハイ（といたゞくおせきつぐ）わたくしハ本がすきでどうもなりません今日も千本櫻の木を見ておりましたが下へおくがおしひやうでござります【揖】いゝこつてござへす。見ぬ世の人を友とするの本文だ書簡を展時に逢故人といゝなぐさミだっ【内】此間もそつちこつちと、お美江さんの客衆が山くらやにもござへすっ私が所にもお客か御出なすつてっ雨ほうてもめが出來ました所で此壚がいゝやうに致しました。有がたひ事にハ。どなたも千しうやく〱といつてお出なすつて下されます。おまへさんがたもあまりまい晩ハおよしなさるがいゝ。そのかわりながく御出なすつて下さるがよふござります。ナント此壚アが申事がわるふこせへすかへ【進】又御袋がいふもんの【三】上下か【内】イエ上下で思ひ出しました。わたくしどもの清助が上下で毎日開帳場へ。世話やきに出ます（とはなすと奥のほうで■をとん〱とたゝく）【内】ハイ（引）（下からお千がおて）【千】おかミさんへ文さんがちよつとあハふとおつしやりやす【關】【内】ヲイ左やうならゆるりと（といひながら下へ行）【ゆん】（下ゟ來り）ちつとおあいをいたしませふか子

おゆんさんハ酒をのミなはるといつそ笑なハるよ【揖】久しく笑を聞かねへ【ゆ】エへゝゝゝゝゝゝ（と笑ながら）お關さん一寸おはなし申たい事が（とよぶお關立て行）【揖】何かいぶかしひの【ゆ】エゝ内しやうの事さ（といひながら何かさゝやきお關と二ッ三ッに下へおりる是ハ下の四疊半へお關がなじミの客がきている故呼おろしたり）【關】ハ（なにに浮衣下りたいたいたりするからわざとふさいだやうなかほをして下の客のそばにすわつてゐる客ハふたり）

（連にて米やの手代てあい）【米客】此ごろハまい日いそがしひけふハほう〳〵歩行(あるき)ました【闘】とこへお出なせへした【米】まづ朝伊勢丁から小綱丁をぐるりと廻つて夫から大豆を二百俵(へう)ばかり。こんなまハしをしてすぐに茶船で艜下(はしけ)てやると。跡へ又米が來た夫をくら入に來ての序(ついで)に取殘したかけが有るから。相生丁の方へよつて。夫から爰へ來たからおそくなつた【ツレ】アリヤアくらの鍵(かぎ)を大屋へ預(あづけ)てはやくこつちへくれバよかつた【米】ホンニばかな事をした【闘】もしへ【客】ナンタ【闘】おゆんさんからてへげへ聞なすつたろふ子。今夜ハどふもわるひからね。どうぞ名代におれんさんでもよんでおくんなせへし【客】大せうち〳〵しかたもねへ名代でも取りやせふ【闘】イツソもうわるひねへ。左やうならゆるりツとハイあなた（と連にあいさつしてそこ〳〵にしてお闘ハ二階へ上る二階にてハ）【三】揖讓さん盃ハとうする【春】一ツおあかりなせへまし【揖】わすれてゐたつぐまいぞ【進】つぐまいそ酒のませふ（とお春が手をもちそへて一ツつぐむりにつぐはり合にすこしこぼす）【三】こぼした黄菊と【進】白むくの【三】うへにむらさき藤のもん。中着緋紗綾にくろしゆすの帶。としハ十七。はつはなの。【進】イヨ〳〵くきつひもんだ。八重太夫がそけへ出たやふだ。【揖】おいらハやぼたから。義太夫ハしらねへ賓頭盧(びんづる)のめりやすでもうたハふか【花】一ツ上ツて御うたひなさいまし【揖】どふして是かのまれるものか【闘】わつちがすけて上やせう（とのむ）【進】うつとう鴫(しぎ)のやき鳥だの（お闘のんでお花へさす）【揖】

ドレおれがつがふ【花】イヱたべやせん【揖】一ッのミねへ（と手で銚子の口を切てっくお花のんで三綱へさす）【三】チットおゝさへ申やせふ【花】おいやでハござりませうが。お美江さんだと思しめして一ッおあがんなせへまし【三】是ハいたミもろはく。いたミせうちいたミましたヲト、、、、いたミことついだの【揖】ア、おらぐり出してハむつかしひ【春】ちつとおやすミあそはしませぬか。【進】なるほどそれがよかろふ（トミな〳〵床へは入）【友】お春どんお茶を一ッもつて來てくだせへ【春】ハイ（といって持てくる）【友】揖譲さんお關さんがいなさんねハで。おさむしうごぜへせう【揖】ナニサひとりまろ寐の油壺。たがこまくらの髪わげもヲ、（引とうなりなから床へはいる）【春】ハイ御茶とお火を持ッてまいりましたハイ御きげんよふ御休遊しませ【進】アイ〳〵【友】あした朝參りに開帳へつれて御出なせへせんかまだ一どもまいりやせん【進】うそをつくぜへおきにそばにゐなから【友】ほんに錢湯へもいかれやしねへヨ。内で居風呂ばかりさ【進】口にやけねへでいゝ【友】進さんやくそくの物をもつて來ておくんなせへしたか【進】ウ、持つて來た【友】ほんにかへ【進】どうだか（お友つめる）【進】イヽナ【友】おさゐさんハ引こむし【進】フウ【友】おいのさんがあつちらへ行時も今まで心やすくしたものハミんな。ミやげ物をやるからわたしもちつと氣をはつて遣ひやしたが是にもやがて二歩ほどかゝりやした。マア名をとりかへるにも。五軒の茶屋へくは

り物がいるし。どんな事をしても月に二歩づゝハ髮結さんに遣らねへかならぬ夫に白木屋の拂が三兩ほど有るし小遣ハいる。内からといつてハ何ンにもしてハくれやせん（此所へお關下ヘくる）【關】まだ御寐やせんね（といつて床へは入）【揖】名染が來たな【關】ナニサありやァ久しく來ねへ客さ。何を思ひ出したか今夜來やしたナニ來ずともいゝ物を【揖】來ずともいゝハあんまりうぬだの。手めへおれが所へ來ずともいゝ下へいけ〳〵【關】大キな聲をしなはんすな【揖】奥の客ハお屋しきだな【關】アイ【揖】隣坐敷ハ旅人かこゝへハよく來るて（といふ所へおみゑくる）【美江】まだどなたもおよりやせんね三さんお花さんハ【三】今どこへか行た【關】お美江さんやまとやのきやく衆ハ【美】今けへッたョ是から三さんの御そはにおりやす【友】三さんおたのだね【美】三さん又哥かるたをおとんなさいせんか【三】取ふ〳〵【進】こいつハよからふ今夜ハまけたものハぶちッこだョ（ととなく〳〵おきる）【關】サァおはなさんはやく來な哥かるただ【花】わつちもとりやせふか【美】お花さんおめへどこへ行た【花】てうづに。あつちらハもふいゝか【美】今あいたョ【進】サァ札ハどこに有る【美】爰にござります（と出すこんなよつてふだをならべる）【三】おれがよミ人だぜ【進】揖讓さんとらねへか【揖】いかに藝者のねへとこだといつておもしろくもねへトいつてハ。あんまり一ッ國だからそんならわたしも。もつともに【關】あハれとおもへ山櫻。【三】花にあらしの雪ならで

【花】ふるとふらぬは床の内【進】義理一ッぺんのあだ波は。【友】かけしや袖のふり合【美】是も他生の遠しうやへ【揖】行衛もしらぬ戀の道【關】身をつくしてもあわんとぞ【三】おもひ口から夕ざれは【花】門田のいなばおとづれて【進】芦の丸寐の寢もやらず【友】ついまつへんつき十種香の【美】その御夜つめに似もやらぬ【揖】爰は所も本庄の【三】一ッ月ならでいふよしも【美】鳴つるかたをながむれば【花】只あり明のともしびを【友】此かんざしでかきたてゝ【進】百物語に引かへて【關】百人一首の哥かるたを【揖】七人連て【揖】【三】【進】どりや【美江】【關】【友】【花】とりやんしやうかいナァ【進】今のはまだしれねへか【美】どつこにもござい せん【關】お花さんおめへのひざの下に一枚有るはな【花】どれへといつてとるおとめのすがたしばしとゞめん是でごぜへすといつてとる【三】乙女じやァねへお花だ【友】あの子はいつでも。あんな事をしちやァ。まご付かせるよとだん〳〵よもふけるいつまでも哥かるたをとつてゐるゆへしまひが付かずミんなあきてくるされども我まんにてたれともねやうといわずなまけ出すお美江こうづに行く【友】ちつと寐やふじやァごぜへせんか【進】ねふつたくなつたお花哥かるたをしまふ【揖】モウ七ッだろふすといひながらミな〳〵床へは入【三】お花さんちつと爰ではなしねへ【花】おじやまだろふから。あつちへ行てふせりやすゆるりッとおしげんなさいましといつくへか行暫閨中漠然たり春宵一刻も。夏の夜のまだよひながらと思ひしもいつしか。東雲のやんまかづら。あさまになりぬはつかしの森のからすは塒を出れば【進】

サア〳〵夜が明過たけへろう同穴にしやう三綱〳〵【三】ウ、〳〵（とミな〳〵おきる）【關】いつ御出なせへす【揖】いつでもあさつて來やう。宵とまりをしておきや（と何レもおさだまりのせりふ故是を略すミな〳〵すてせりふ有つて下へおりる下てハまだとんなねてゐる）【友】（おくる）【揖】【三】【進】（外へ出る）【進】ア【揖】【三】【進】（はおりを着し脇さしをさすわかいものさうりをなをす）【美江】【關】【友】ゝねつからねる間がねへ【三】お美江ハちつとよめるて【揖】はなせるの【進】お友ハおしつけどこへかかこハれるそふだ【揖】フウ三綱名代をぎよしたナ【三】（わらひながら）何とんだ事を【進】すきのねへ手ゑゝだ【揖】かうつけやしきによる所が有るが（とかんがへて）へ此ごろにしろ【三】そんならこつから舩でいかふ（と一の橋のかたハらなる吉川やといふ船宿ゟミな〳〵猪牙にのるせんどう）【松】だんながたおはやふござへす子すぐによしハらへ御出なせへせんか【進】又松が河岸へでもいかふとおもつて（おりふし陸を四手駕キヤツ〳〵と飛て行を聞て進）（退とりあへず）猪牙の間やミな此舟に乗もせで心にくしの駕舁の聲

舟ハだん〳〵沖へ〳〵と漕出します

内新─好囊─中空─々〳〵而

任閒─暇閑─窻ニ獨所

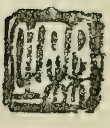
浮茶而無レ據書レ之

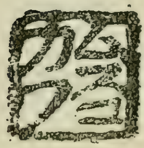
跋

客者舟也。君者水也。水則載舟。水則覆舟。氷川に轡駕を稅。土隄側に橫網を撤。薄情と云娛婦有りとかや。左有悅極而愛情多。然後に馴染の深間に至。居續の耳に者。聞常念佛衣ゝの眼にハ。見るもの皆涼し。時ゝ間部川岸の岡鈎を肴に一盃繼竿と晒落るといへども。未長竿の危を知らず。動魚笥の浮沈なすを愀ゝ然として。卒にハ餌をとられ。連枷を擔で含粿予が子分新好。思其力之所不及。憂其智之所不能而。吾に跋を乞。予も亦一ツ穴一作者。未澁皮も椋露子の。磨く力も中嶋屋枸杞之油之香に愛て。青ひ處者堪忍の信濃新好主に替ッて

一目土堤

南都餘霞樓主人神田の八丁堀の
旅宿に筆を采る





傾城緒

傾城鱂

出戀の突出しより。名殘のうらの季明まで。百員が百人ながら。買色の手柄おなじからず。裏移りの床華に月を結びし初みには。打越しのさしをもつかず。戀連れて馴染のうまこは。先達の發句を待たず。わきおこりの口舌にれ屏風のうちの拾五点。書拔の妙句に。てのおり合の手をとりては。判者も增点を加ふへし揚句の終には雨に風にうかれ通ふとも。此道に遊ぶ人。觀念の第三にして。言妙切の妙あるへ。他の了簡に及ふべからず。表八句に紫竹の川竹。堤八町に口八調をくらべ。月華の坐に中坐をゑらび予がつたなき筆句をもて。小菊の折端に評記し。

彼の俳諧觽に比して。傾城觽と題す。觽れ買の横訛にして。女郎買といふにひとし。蓋似た山。半哥仙の入句を愁ひ。色をも香をも知る人にまかせぬ

山東庵

京傳述

天明八ツのとし

戊申の正月買そめ

目録

○松葉館　○鶏舌楼

○玉楼　○五明楼

○大菱亭　○鶴楼

附録　松。丁。玉。扇。　四家言語解

凡例

○此書にしるしたる遊君ハ予つねにともにあそびてよく其氣質をしりこのむものきらふもの或ハ諸藝幼名等までをくわしくしるしていまだ馴染あさき遊客の一助とす

○長柄傘もやう挑灯合しるし等ハ正寫しをもつてしるし中の町にて何屋の誰といふ事をはやくしらしむ

○定紋替紋等ハ衣裳の雛形よりうつし八重ひとへかげひなたのわかちまでくわしく正しのす

○自筆ハ草紙扇面短冊文章よりうつし載たれは筆力をうしなひし所も有るべけれどもたゞ正筆なるのミ専らとし又印鑑をのす

○番頭女郎といふハ萬事姉女郎の世話をあづかる女郎をいふ又世話女郎ともいふいづれも新造なり

○附録に載たる四家のことばハおの〳〵一軒にかぎる通り言葉のミあつめくわしくしるす

山東京傳正ス

松葉館

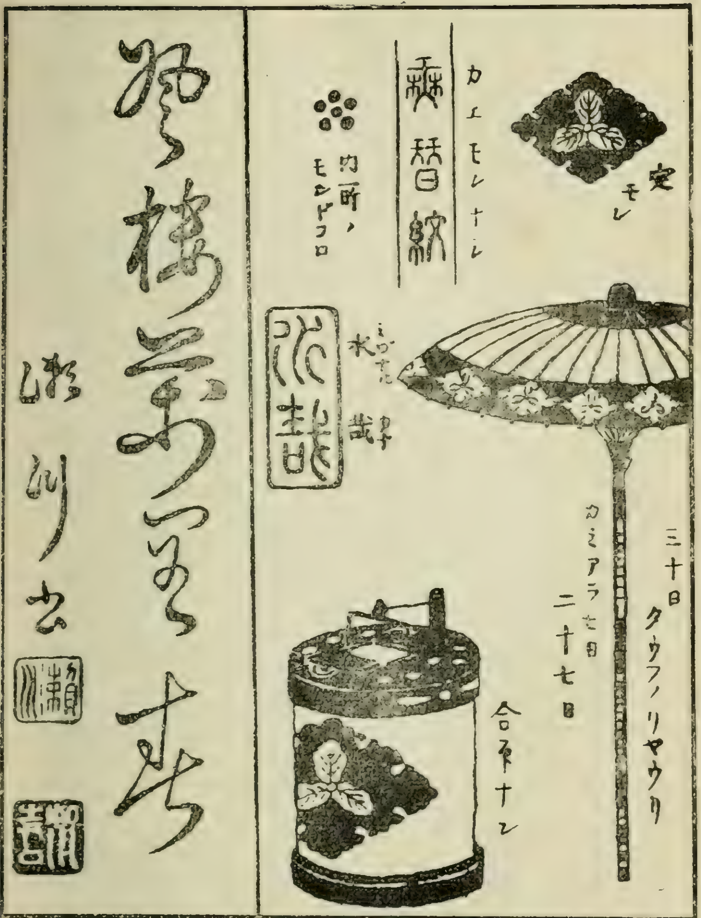
きしやうのけた
かき事をこのむ
人がらよきを
第一として
おちを
とる也

書　安親門人
茶　遠州
哥學　二茶家
香　いづれも
けいの
琴　とうぐ也
禿　さゝの
竹の

ざしき表
左りの角
ばんとう女郎
川ゆう

松葉屋瀬川

當時七代めの名跡この君の風俗衣通姫小町にもおとらず不施粉黛自然ナリ松野といひし引込ミのころより萬事の藝にきようニして太夫しよくのくらゐそなハりければ瀬川の名をつがせけりされバ今くるわニならびなきぜんせい万客山をなす常に茶事をこのみきしやう風流也まんめんに笑をふくんであいきやうこぼるゝごとく松葉やの万兩箱也是神仙中の人なるか


定モン
カヘモンナレ
替紋
内所ノモンドコロ
三十日
タウフノリヤウリ
カミアラヒ日
二十七日

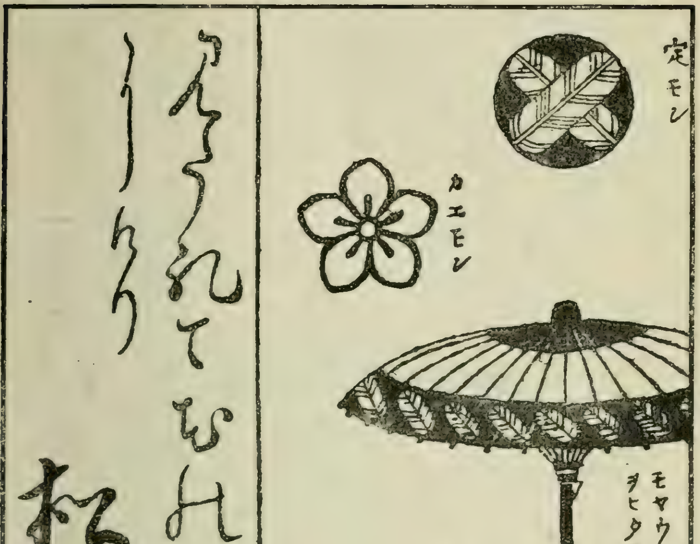
松葉館

強弱交るべし
うハきな
何を
きらふ
琴　鞠
茶事
いづれも
げいの
道具也
トウシタノ
ダヘ
と
いふ
詞あり
かふろ
いろね
しらべ

ざしきおく
右のかど
ばんとう女郎
松はな

松葉屋松人

此君の器量風俗いやさしきハ万客のしる所にしてせいハすらりとして楊柳(やうりう)のごとくべつして道中の風俗此君にとゞめたり常に琴をこのミてしづかにたのしミいつたい氣しやうけ高くして人がらいたつてよく少しもしもさまの事をしらすされバ萬客此君の爲に心をいためかよふもの多く全盛廓(くるわ)中にひいでたり


定モン
カエモン
モヤウ
ヲヒタカノ羽
合ヤ紋キヤウ

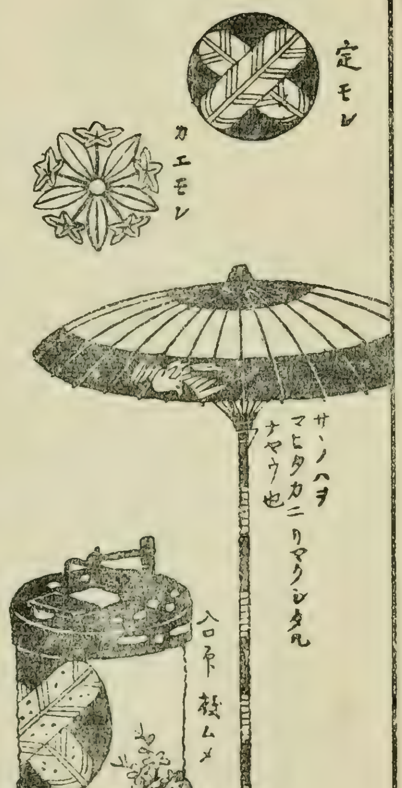
松葉舘

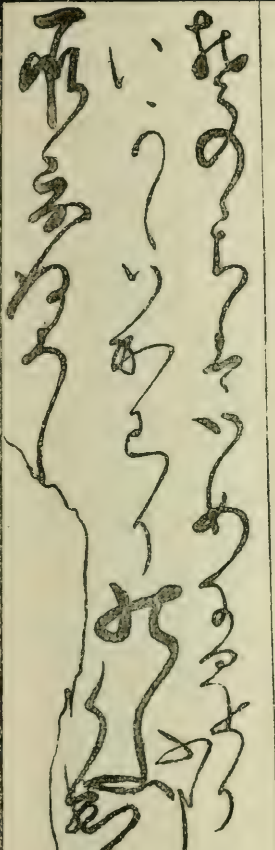
一句をりこうに
とりまハして
かんかふべし
少しおかしミを
くわへて
高点有
けいの道具ハ
琴　茶
歌三味せん
生　花
神祇よし
下を
見合べ
し
かふろ
もミぢ
にしき

ざしきおもて
右の角
ばんとう女郎
しバうら

松葉屋染山

一躰あいくろしき生れつきにてゑくぼ花顔にあらハれ嫣然一笑ハ惑ニ陽城ヲ男ハいふもさら也婦人も此君の風俗をほめぬはなく別して道中のすがたよくはつうらといひしころより一身にいろけありて他の傾城も此君のふいきやうをうらやミし也人にあいさうよくひゐきつよくいたつてはつめいにして万事氣のつまらぬ方也常ニ神をしんじて客の安全をいのる又琴をすきいけ花をこのむ


定モレ
カエモレ
サンノハヲマヒタカニリマクシタ九ナヤウ也
入口戸 殺ムメ



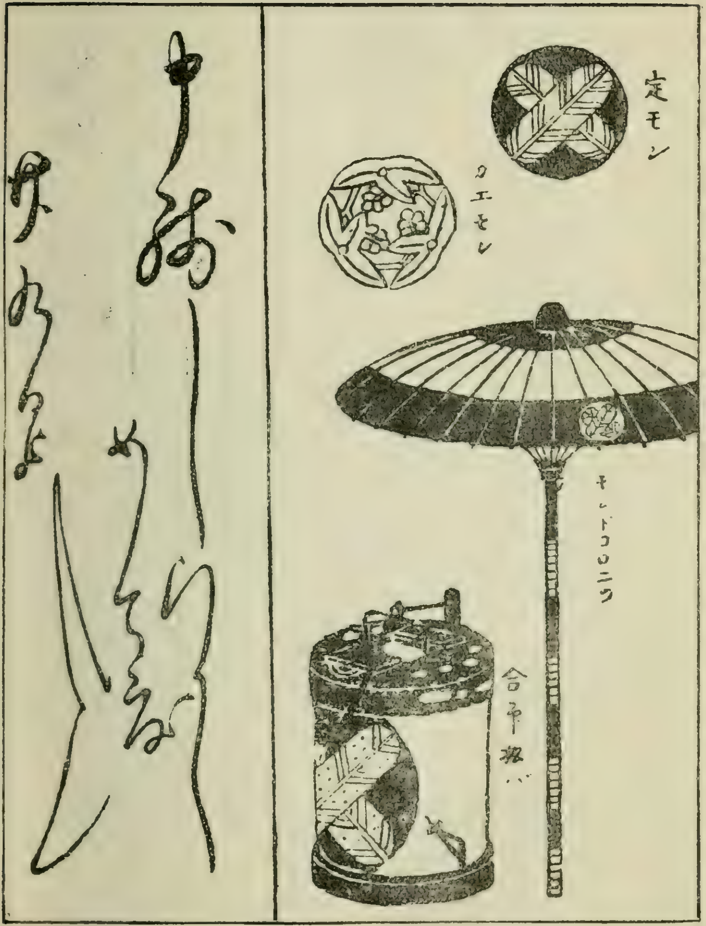
松葉館

しつぽりと
とり入って
うまゝ有り
手ゝしかな
句ハきかず
長キ句に
手から
多し
琴
茶
香
かふろ
おなゝ
めなみ

坐しきおく
右より二けんめ
はんとう
いわたき

松葉屋染川

万客かよひ來て全盛法にすぎたり中の町のひやうばんよく風俗のびなるハ人の知れるところ也きしやうしづかにして人からの能きハまつば屋の風義なりいつたい人づき有てひゐき多し此君ハ染山の君といつしよに坐しきを持しが兩妓ともまけずおとらず全盛のいきほひ龍虎ともいつゝべしまつ葉やのはんゑいとこしなへ爰にあらハる


定モン
カエモン
モンドコロニテ
合羽挟ハ

松葉館

屋ハらかく
はづミに
かんかふ
へし

琴　茶　香
いつれも
道具也

かぶろ
よしの
たつた

坐しき右
らうかおくの角
ばんとう
松さと

松葉屋歌川

ふり袖のころよりさんちやのゐふうそなハり今その全盛ことばにのべがたくきりやう風俗ゆうにやさしくいつたいものしづかなる生れ付にて人にさかられぬきしやうなりことになさけふかくその情を愛し通ふ客かずをしらず哥川のながれたへずしてしかも花美口〳〵にいやまし加茂の長明とてもさすがぶんしやうに書とりかたき風情なり

定モン
カエモン
イタドリ
合卩四ツメビシ
春風桃李花開日

松葉舘

弱く　仕立べし
あどけ　なき
句に　高點　あり
茶　琴　香
かふろ　いろか　ゆかり

さしき表
右より二けんめ
はんとう
いそうら

松葉屋瀬山

いつたい此君の風俗きりやうまんめんにあいをこぼしやさかたなる姿にて少しの事にもおもはゆくかほに錦袖(きんしう)をおほうれまだ娘氣のうせざる所尤ゑん也高位の姫君となすともはつかしからす萬事心さしやさしくいたいけにしてはなはだはつめい也川岸(きし)といひしころよりそのくらゐそなはりて今若ての第一全盛日〱に増れり

定モン
カエモン
ユダカシハ
合トコボシ松ハ

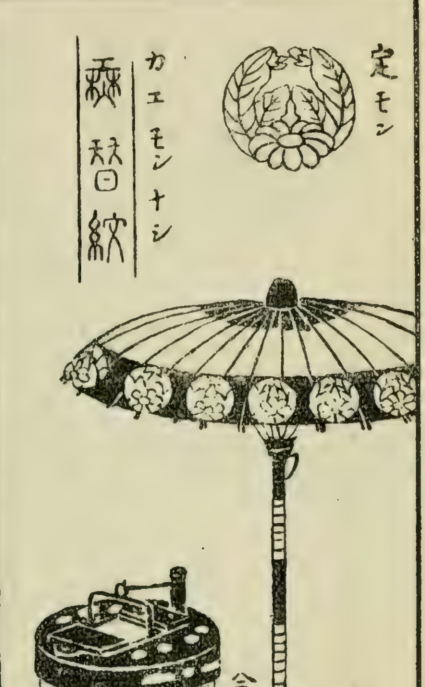
松葉館

松葉屋若菜

さしきおく
右より三けんめ
はんとう
すがうら

眉色不加黛如望遠山去年の春突出しとなりてより万客やくそくの前後をあらそひ未役所のつらきをしらず二ッ躰うち上ッたる氣しつにしてものしづか也ぼつとりとしてひんよく万事とり廻しものなれたるしかた也むかしたれかゝる子だねをさづけて吉原をはなしのくるわとれなししけるや誠に國色也

和らかミを
第一として
つけを
とる也
・
一句ひん
よく
仕立ツへし
げいハ
琴　茶　香
尺八
禿
子の日
小松



ふきぬきこゝゑるとの
よきたる物しこしめ
ひとえしふしたる

一八

鶏舌楼

ざしき中らうか
左りのすみ
ばんとう
八重つる

丁字屋雛鶴

ひんのよき事を
このむ一句
けだかく
あんずへし
歌學　茶
はいかい　琴
香
このむもの
哥かるた
團十郎びゐき
はやりことばを
きらふ
かぶろ
こてふ
つるじ

莊子曰鶴不㆓日浴㆒白云ゝむべ也きりやう心ばへ高尾薄雲にもおとらず糸瀧といひしころより太夫のくらゐそなハり哥の道にこゝろざし深くいやしき事をきらふされバさしきの新造もおのづから行義よくはやりことばをいわずたゞしき事をこのむきしやう也よつて客人のやくそくも五日十日前より云込ますしてハあふ事あたハす

▲去年の春興自作の句に

へとふ人の袖引とめよ軒の梅

定モン
カエモン

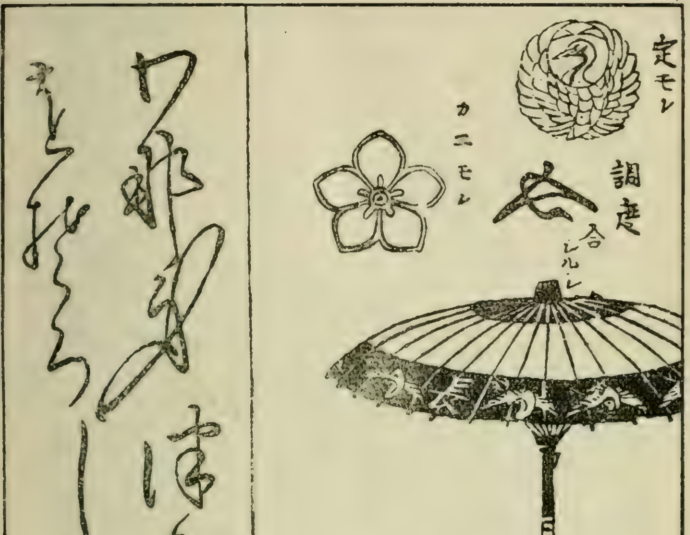
鶏舌楼（けいぜつろう）

時によりてハ
つよくもよハくも
付べし
いたつてむつか
しき点也
げいの
　道具ハ
河東三味せん
琴　茶
香
ことば
　ちよつと見な
物にかまハぬ
きしやう
おもしろき　点　也
かぶろ　よしの　はぎの

ざしき中らうか
ひなつるのどなり
ばんとう
つまきく

丁字屋長（ちやう）山

きしやういたつてひろくはりつよくなさけふかし此君ハはしめ
やんごとなきかたにミヤつかへせし人なれバきりやうふうぞく
ことにひんよく人に心安くつき合ふて萬事かざる心なしされバ
丁山のきしやう高きハ不二もおよぶへからずと万客いひもてた
つとむ事也千金を積共心にそまさるにハ随かハす誠にけいせい
のきしやう備りて全盛日ゝにはなはたしく
万客断骨之斧迷心之毒也


定モン
カニモン
調度
入合レルレ
元組長山、菊ヲ好ラ、モヤウ
合ジレルシ、ヤズリニ有シユヘ、代々コヲ用ユ

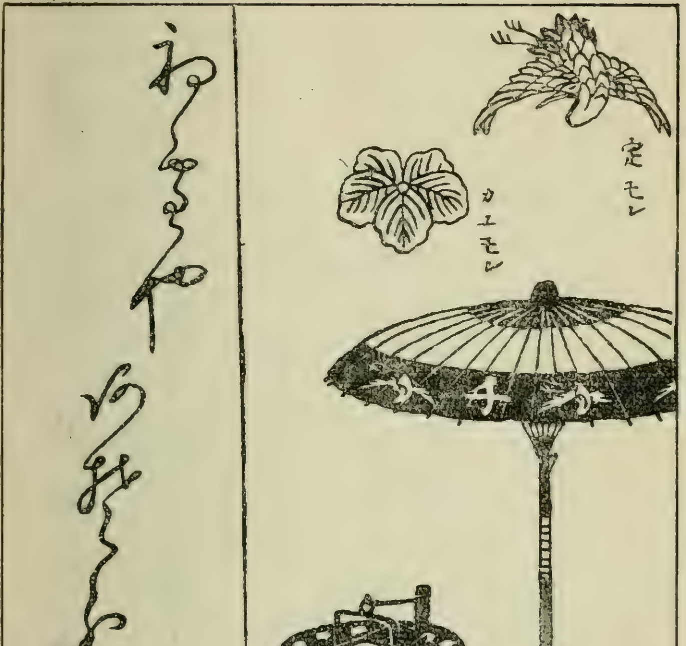
鷄舌樓

さしき右らうか
おくつきあたり
ばんとう
きよ山

丁字屋千山

此君の風流ハ万客のしるところ也きりやうふうぞくゆうにやさしくたのもしき氣しやう也ぼつとりとやハらかミありて又ひんとしたる所あれバふかくとり入ていたつておもしろミ有されハ此きミをしたひ來ル客人くしのはをひくがごとし新造のくしの象牙も此君のくろかミにつながれ駒下駄のおとにハ金屛に畫キし鹿もぬけ出べし

いやミな句を
きらふ
ふかく
あん
して
手を
とるべし
げいの
とうぐハ
琴　茶
香
人形をこのむ
かふろ
やそじ
いそじ


定モン
カエモン
合卜セイゾル

鶏舌楼（けいせつろう）

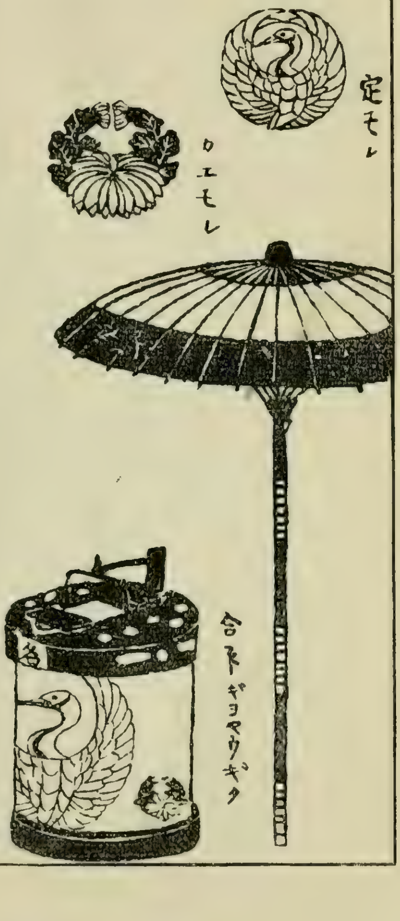
よわく人から
能く付あふへし
そら〳〵しき
事をきらふ
さして
道具
なけれども
茶事
琴に
名あり
かぶろ
小てふ
あげは

丁字屋名山（めいさん）

さしきおく
千山となり
ばんとう
まんぎく

こぞの春より久々やまひにふし給ひしが日々に心よく同しき秋めてたくしゆつきんし給ひけれハその姿別してきよらかにふようにに雨をおびしごとく風俗のしなやかなるハ土手の柳も見かへりて已をはづ万客しゆつきんのことぶき万々歳をしゆくして一日も中の町をかく事なく全盛帳場のぬり札にいちしるし

願（チカハクハ）作（ナツテ）輕羅（ケイラト）著（ツカン）細腰（サイヨウニ）


定モン
カエモン
合下ギヨマウギタ

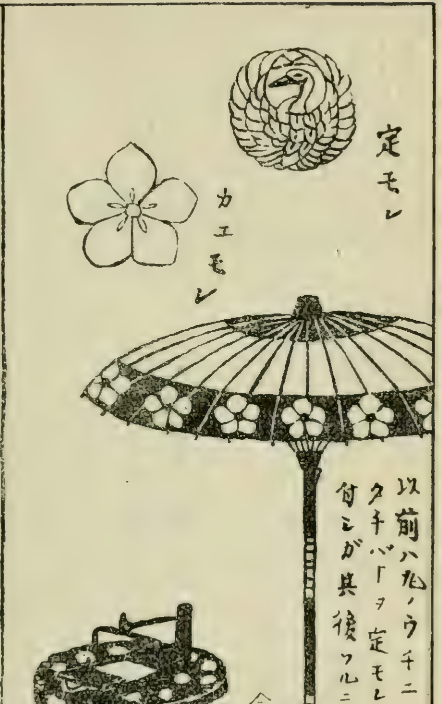
鷄舌樓(けいせつろう)

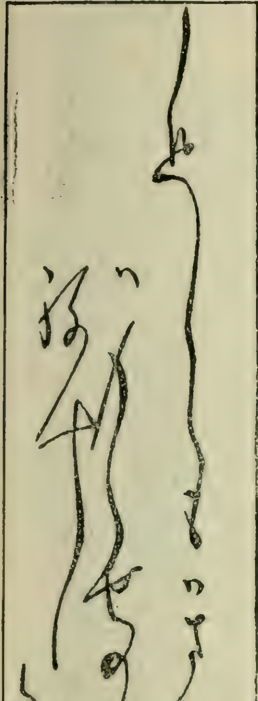
ごくおもしろき
点也
どうぐさして
なしと
いへども
哥三ミせんに
名人の
名あり
このむものハ
酒事
よくとり
廻して
高点也
とりし
人多し
かふろ
きくの
うたの

さしきおもて
右のかど
ばんとう
哥波

丁字屋錦戸(にしきど)

至ッてたのもしき氣しつにてたのまれし事など一寸もあとへ引かず又ゑんりよふかき所有り日ゝに全盛なれハふだんくわんくわつをきハめて酒事をこのミたいこもちげいしやとうに目をかくる事ありがたき所有りきりやうことにすぐれほつとりとふとりしゝにて人の心をまよハす風俗なり能くとり入ッて甚手ありけち〳〵したる事ハ蚰(けちく)よりもきらひ也


定モン
カエモン
以前ハ丸ノウチニ
タチバナヲ定モンニ
付シガ其後ツルニ改ム
合トキニヤフ



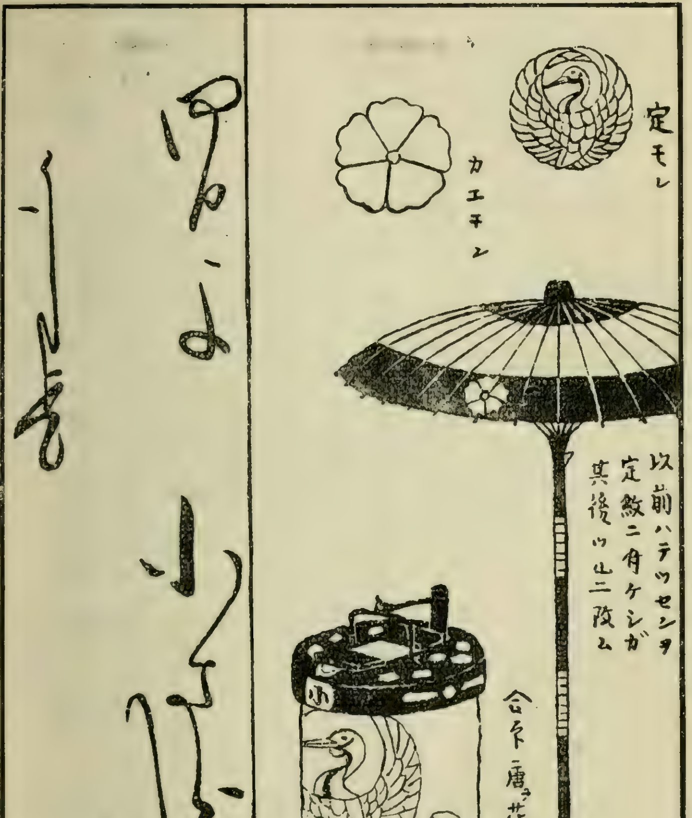
鷄舌樓(けいぜつろう)

强弱交るべし
ものしつかに
附べし
琴を
このむ
かぶろ
やよひ
もミぢ

さしき表
左より二けんめ
ばんとう
山しな

丁字屋小晒(こさらし)

きりやうふうぞくけ高き生れつきにてばんじ物やはらかに人あいさうよくたゞしき氣しやう也全盛いわんかたなく客人八重にかさなりたがいにはでをあらそふしつほりとはなしずきにて萬事に能く氣の付く生れ也さればゆかり無き人も一度つき合ふときはたちまちひゐきとなり人づきの有るこゝろばへなり


定モン
カエテン
以前ハテツセンタ
定紋ニ付ケシガ
其後ツル二改ム
合印ニ唐ノ花

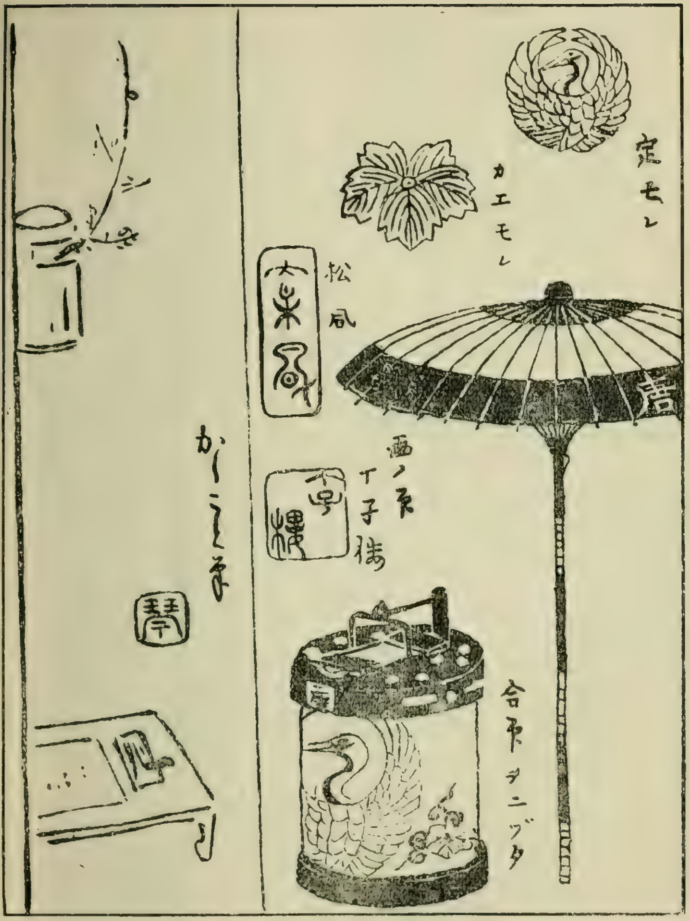
鷄舌樓

さしき表
左角はんとう
唐おり

丁字屋唐琴

しつとりと附を
かんがふべし
ぶしやれを
きらふ
氣ミじかに
せず
長キ句に
高點あり
琴　香
書上手なり
いづれもげいの
道具也
小鳥をこのむ
うらじ
かふろ
きくじ

諸げいきやうにして畫を好ミ上手の名有り又琴をつねのたのしミとすきりやう風俗世にすぐれしつとりとおち付てけいせいのくらゐ有りその情になづミかよふまろうど多く十日の雨にゐつゝけの客の心にたがハず五日の風にちよきのあやうきをあんじいにしへの龍田山夜半にや君がの心ざし有て情いたつてふかし全盛廓中にいきほひ有り


定モン
カエモン
松風

丁字屋御射山

さしき表
にしきとむかふ
はんとう
さよづる

御射山ハ信州の地名也此君は丁山いもと女郎なりしがきりやう風そくちうさんのくらゐありて今さしきもちとなりし也いたつてはつめいにしてあいきやう有りゐくぼかほにこぼれ人をそらさぬ氣しつなりつねに冊子をこのミて見給ふなり手跡ハむかふ嶋の先生の門人也別して道中のふうぞくよし此君のあいきやうにハあいせん明王もゆびをくわへかほハ丸きかたにてきめこまか也

雞舌樓

あどけなくりからうにとりまハすへし
しやうきをこのむ
げいのどうぐハ
琴　香　物よミより入て
高てん有り
かふろ　せきの　ミやの

定モン
カエモン

鶏舌楼（けいぜつろう）

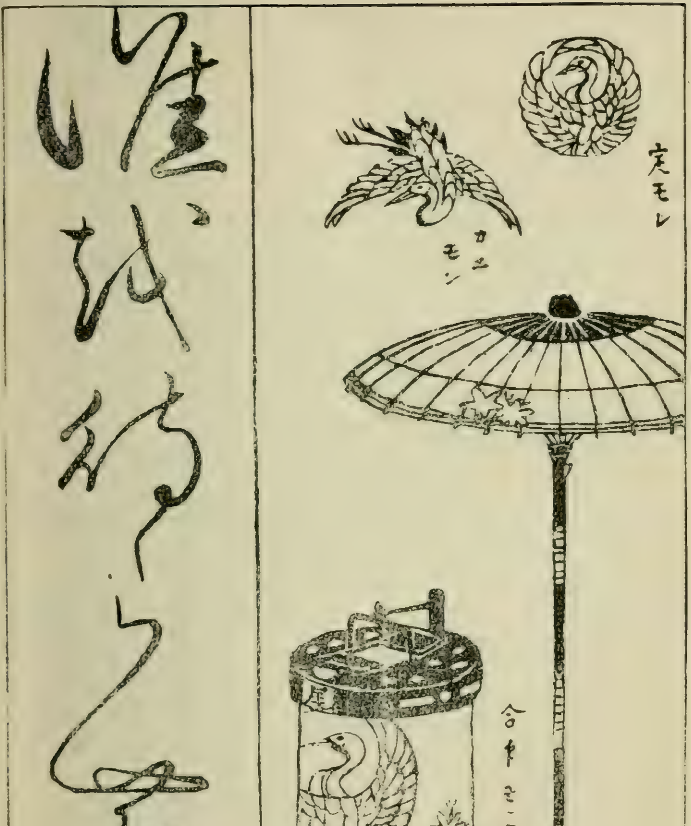
よわく付へし
おたのしミさんす
なぞいふとへを
かけ合すへし

琴　香
茶
かふろ
あやは
くれは

さしき左り
らうか角
はんとう
二の瀬

丁字屋錦尾（にしきを）

かほはせのさくら色にこしつきの柳をこきませて錦尾と付しも尤也こぞの正月つき出しとなりてより客人ゝ前後をあらそひ一夜ももうせんのうへにすゝらす中の町をよくはりて全盛法にすきたりことに評はんよく萬事うちはにして少の事もかほにもミぢの錦をちらすゝまたむすめきのうせさるところもつともゑんなり


定モン
カヱモン

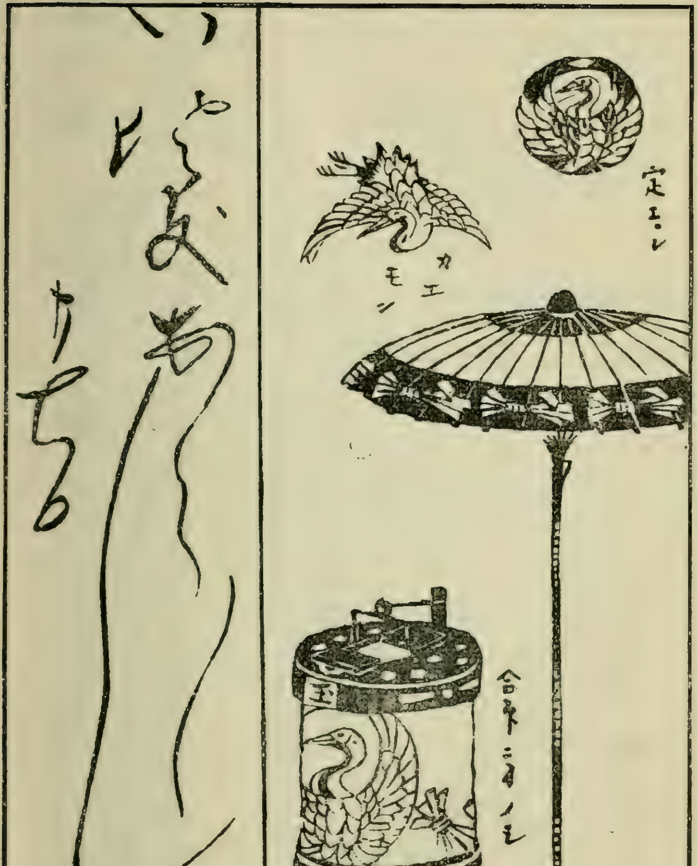
雞舌樓(けいぜつろう)

くらまへ
曉雨か句
「木母寺へ
　ことゝひかハせ
　京さくら
此句を
　かんかふ
　べし
京地名よし
　かぶろ
　あてき
　いぬき

さしき表
右より二けんめ
ばんとう
玉の井

丁字屋　玉葛(たまかつら)

此君ハ花のミやこの生れなればきりやう風俗ことはつかひいたつてやさしくものやわらかにひんよくだいり上ろうといふともはつかしからずされハこその夏突出してより客人の山をなし一日もやく所のつらきをしらず哥道糸竹にもくらからずさすがミやこの風流そなハり又よくよしハらのはりをおほへてしつとりとおち付たる風なり


カエモン

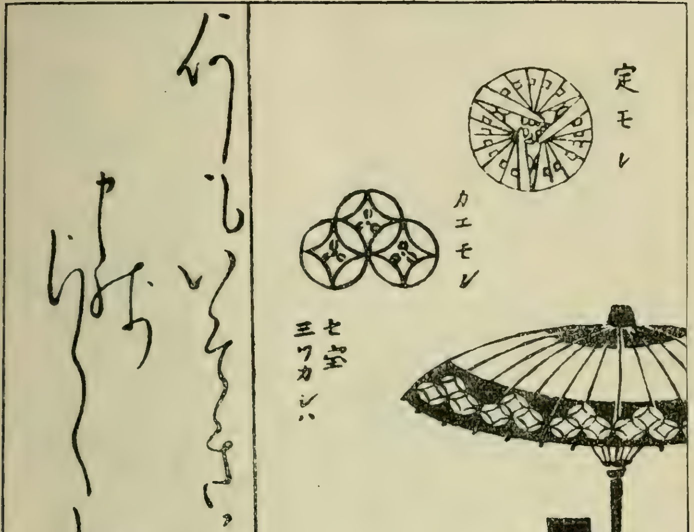
五明樓

扇屋　瀧川

さしき表
右の角
はんとう
白ぎく

貴客此君のもとに鴛をうつして去年の夏新造を出し給ひしいまことにためしなき花麗(くわれい)にして廓中の目をおどろかしめづらしきゐしやうを着給ひし事見物山をなしけり風俗万客の心をとらかし妖嬈(やうけう)として芳容窈窕(はうようえうてう)たりいつたい氣くらゐ高くして松の位のゐふうそなハり此大島にはおちてハはり付のほうわうもくちはしをとぢ羽をすほむべし

强弱交るへし
月の夜を　このむ
一句
いやミなく
丈夫に
仕立べし
茶　琴
香　碁
双六
かふろ
おなミ
女波


定モン
カエモン
七宝
三ツカシハ
合羽
七ホウ

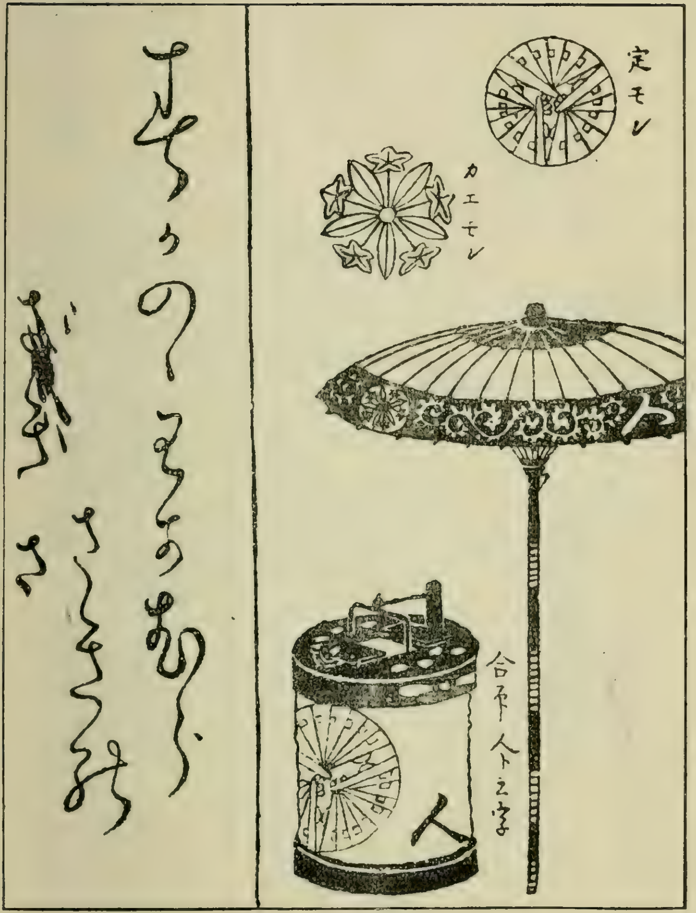
五明楼

しづんで
かんがふべし
やハらかき
句に
手から
多し
琴　茶
香
いづれもげいの
どうぐ也
かふろ
さくら
もとぢ

扇屋花人

さしきをく
右より二けんめ
はんとう
にほ波

不知古今にかゝる美婦ある事をいつたい氣しやうおんくわにしてそうぐしき事をきらひしつとりとおち付きて物やわらか也まことに三月の桃花のものいへるごとく李花にたましゐの入りしかとうたがひ花人とよべるもむべなりときこゆ花れいをもつハらにしてせんせいのいきほひ五丁町にかくれなく人ともてはやす事也


定モン
カエモン
合印人ト云字
人

五明樓

さしきをく
右より三げんめ
はんとう
はつさき

扇屋容野

口あいよく
にぎやかに
はづんて
かんがふべし

酒事をこのむ

茶事
香道
どうぐ也

かふろ
しげの
さよの

氣しやうおもしろく。にぎやかなる生れ付也はやく人に心やすくなりてさつぱりとしたる氣しつなり酒事におもしろミ多くとり入て手とり也きりう風ぞく人のしるところにして万客是がために心をいたましむかるか故に全盛日ゝにいきほい有て人のひるきつよし萬事いやミなる事をきらひ給ふ也

定モン
カエモン
合印 容トモ字
容

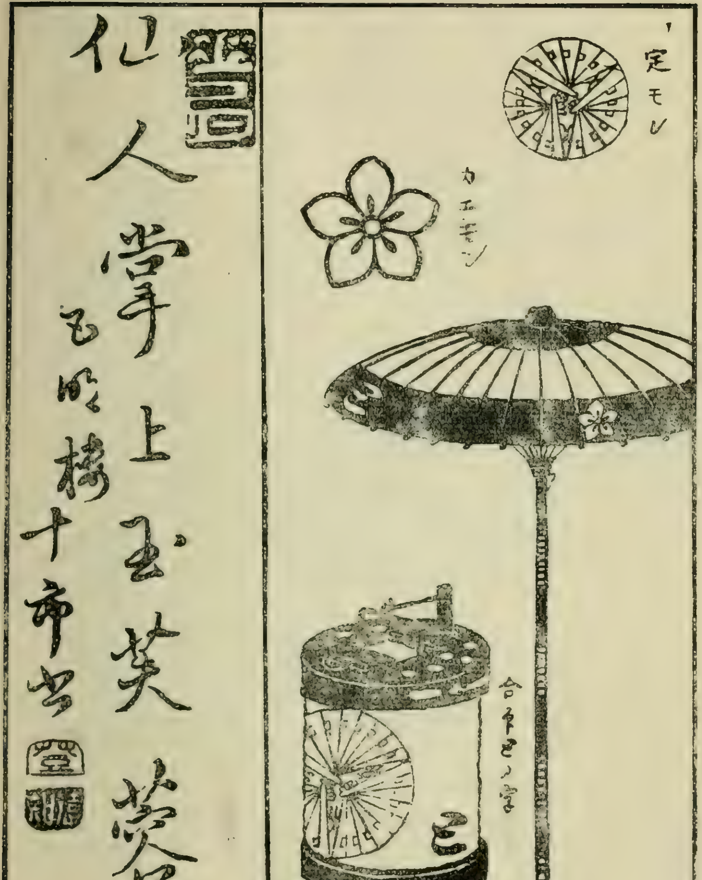
五明樓

句がら
ひんよく
作るへし
げいの
とうぐ
書　琴
茶　香
双　六
かふろ
里ち
村ち

さしきおく
左の角
はんとう
花つる

扇屋十市

十市ハ和州の名高き地名也此君諸女にひいでたるをしやうびして其名によぶ先にほてるの禿にて波路と云ひ十四才の時三園のいなりへ大字の額をほうのうしたる事人のしる處也沈魚落雁の姿うつくしく百の媚たをやかにしてしつとりとしたる氣しやう也いつたい氣くらゐ高くして全盛やくそくの臺のもの坐敷にたへず


佳人掌上玉芙蓉
定モン
カヱモン
合印ヒノ字

五明樓

一句
やハらかに
仕立ツ
べし

茶臺
香
かふろ
ミねの
たかね

扇屋七越

さしき表
右より三げんめ
はんとう
七おか

かんばせハ三月の桃花のことくにしてひそかに風のなさけ月の心をかくしぬいつたい物しつかにしてとり入ッておもしろき氣しやうなりまんめんにゑミをふくんで至ッてあいきやうそなハれりよつて万客やくそくをあらそふ事毎度なり此君嘗て巧言令色をきらふ

定モン
カエモン

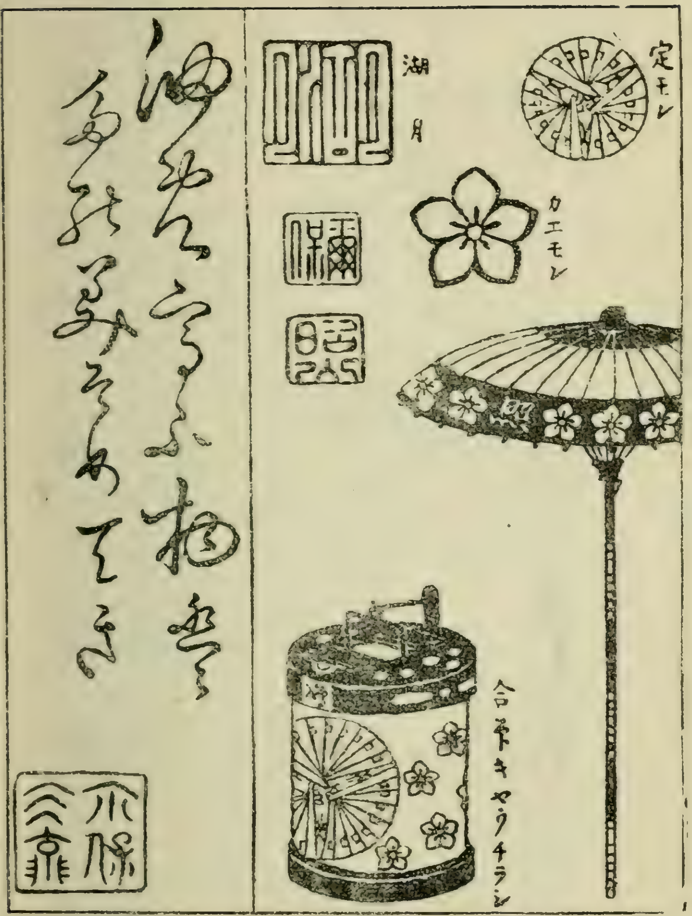
五明樓

たをやか
なるを第一
として
附を
とる也
茶事 書
琴 三味せん
香
いつれも
道具也
かふろ
なゝち
千鳥

さしきおく
右方二けんめ
はんとう
はつ梅

扇屋湖光

まがきとよびし時よりしてよび出しのゐふうそなはり今にほてるの名跡をつぎいよ〳〵ぜんせいいきほひあり常娥月宮を離飛燕新粧に倚るおもかげもかくや有けん中ノ町をよくたり給ひて一日もかく事なしいつたいあいきやう有て氣しやうしづかにしてよく書をなし万事しとやかなり不知いづれの深窗より出たるや


定モン
カエモン
湖月

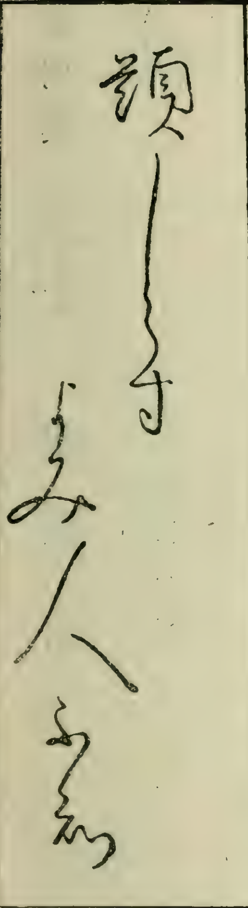
五明樓

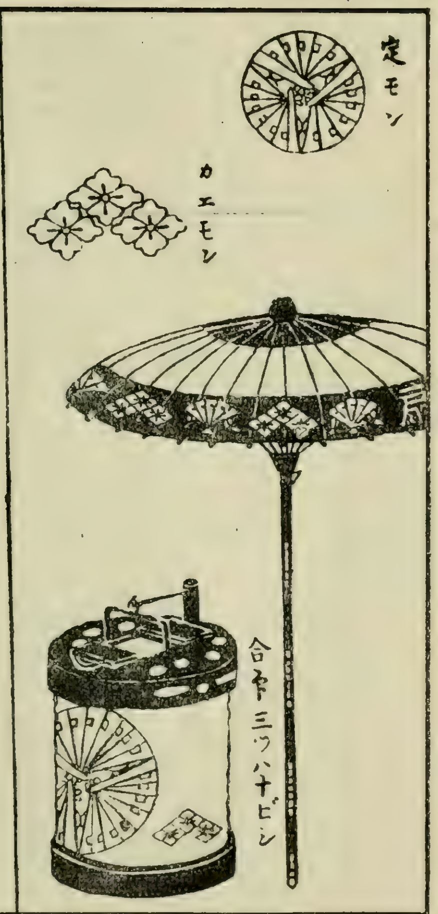
つよき
よわきを
かけ合せ
かんがふ
べし
茶事を
このむ
しつぼりと
壹句
仕立べし
尤
高點
あり
かふろ
いさゝ
すさみ

さしきおく
右の角
はんとう
花とり

扇屋扇野

ぼつとりとやわらかミ有つて人あいさうよくされバ中の町のひやうばんよく茶屋のひゐきつよし此君のすかたのたをやかなるにハ土手の柳も見かへりておのれをはぢ朱唇(しゆしん)のくれな井には三ッふとんも色をうしなふみのぶんていことに上手ニてふんしやうに艶をほどこすされバまろうど情をあらそひおもひをはこぶ事しげし




定モン
カエモン
合印三ツハナビシ

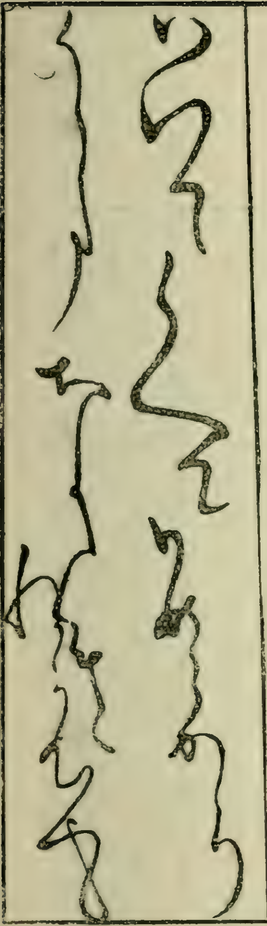
さしき表
左の角
はんとう
にほ山

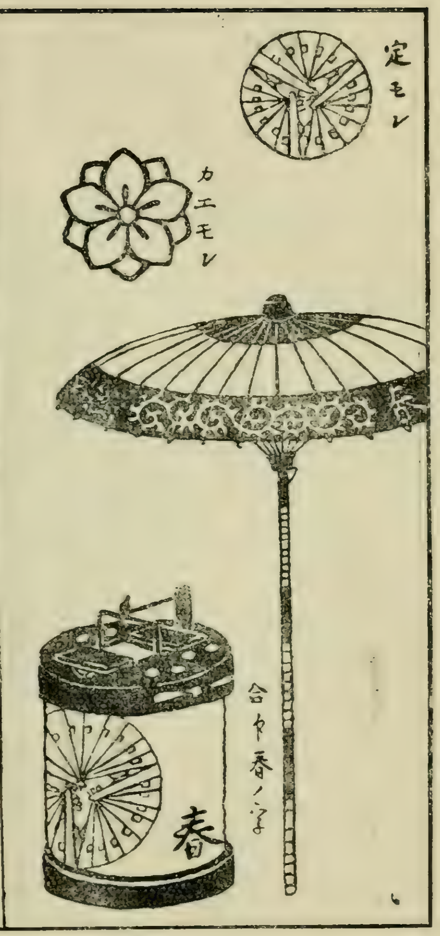
扇屋春日野

ときつると呼びしころよりゐんしよくうるハしく心ばへやさしかりけれバ今ちうさんにならの京春日野と名づけてつき出しの華を咲かせ五町にひらく天地金のあふぎやの名物とはなりぬ一躰きしやう萬事うちばにしてものにさからハず心だてゆうにけ高しされバ萬客この君のもとにかよひ來て全盛たぐふべきものなし

五明樓

世話を
かけ合
おも
しろく
手を
とるべし
琴
鼓弓
いつれも
道具也
かふろ
ワかな
胡蝶




定モン
カエモン
合ヤ春ノ字
春

五明樓

含(ふくんで)レ情(しやうを)　無(なし)二片言(へんけん)一
尤かんがふべし
げいハ
書　東江流
歌學　茶
琴　香
好むもの
手飼の猫
禿
龍田
吉野

さしき表
春日野の向
はんとう
きくぞの

扇屋花扇

けたかき生れ付にてひんよく五ッ衣を着するとも恥しからず去年の夏古風をまなび大ふり袖の突出しめづらしき事也萬客やくそくを争ひ全盛ならぶものなし白齒(はくし)含貝(かんばい)のごとく楊家(やうか)の深窗(しんさう)を出し貴妃(きひ)がむかしもかく有けん當時四代目の名跡にして幼名をおかど〻云けりつねに手習を好ミ希有(けう)の婦人也

定モン
カエモン
五明
五明楼
サクラ色入
五明楼 花扇書之

玉樓

坐しき表
左り角
はんとう
小のはな

角玉屋濃紫

雲上をこのミ
氣のつまらぬ
つき合に
手がら多し
けいの道具
書 東江 畫
歌學 万葉
はいかひ 茶
香 米川流
將棊 楊弓
このむ物
あらひ髪
禿 はつね
うたの

此君諸げいにきやうなるハ人のしる所也手跡ハ羲之の流をくミ能書の聞へ有りされバ古來よりの太夫の名跡をつぎ全盛すぐれたりしかのミならずきりやう廓中にならび無き艶色也雲上を好ミて氣しやう高しといへども高ぶりをおもてにあらわさず人の付合心安し去年の春興自作の句＝

へ日のあしにつれてのび行く柳哉

俳名を紫夕と云しが今改柳枝と云

定モン
カエモン
内所ノ合印
合印紋ノ字

鶴楼

つよくはでに
仕立べし
さつパりと
した
句に高點
あり
書東江誹諧
たち物有り
梅干のるい
たいこには角力取なぞ
交ゆへし
いやミ有を嫌ふ
堀の内をしんじ
釋有り
禿梅の
竹の

坐しき表
右の角
はんとう
そのはら

鶴屋　菅原

一躰くわんくわつなる氣しやうにてはでな事をこのむもつとも
おもしろききしつ也とかくいやミある事をきらひよわきをたす
けつよきをくじきはりつよく一寸もあとへ引かぬ氣なりきりや
ううるハしく風俗他にこへたりことに道中の名人ゝ也松葉や松人
と此君とを道中の二ふく對といふ溫而厲威而不猛恭而
安よく此語にかなへり全く盛ン也俳名を梅枝と云

定モン
合ト
カエモン
合ト 梅ヲリエダ色入
ツタアイ色入

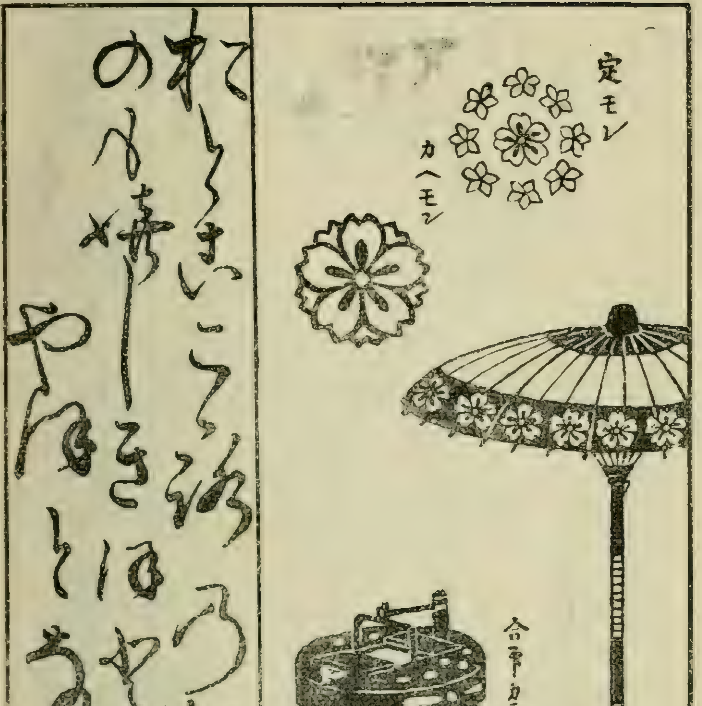
大菱亭

むつかしき點也
はでな句を
このむと思へハ
じミな句にも
高點あり
道具ハ
哥三味せん
好むもの
手かどミめりやす
長ばおり
うぬぼれを
きらふ
かふろ
さゝ野
澤の

大菱屋象潟

さしきおく
右の方
はんとう
花のか

象潟ハ羽州由利の郡の名高き地名也此君氣しやうくわんくわつにして名代の手とり也取入ッていたつておもしろしはりつよくよしハらの風けいせいの氣くらいそなハれりことにゑんしよくうるハしく螓首蜂腰閉月花を耻のよそほひあり蛇ハ寸ッにして其氣を得とむべなりこの君禿だちのころよりそのきしやう立引をこのミ今その全盛いきほひ五町まちにあらハす


定モン
カヘモン

附録　松丁玉扇四家言語解

○松葉屋言

【おす】ございますといふ事也 【さつしておくんなんし】【わつちといへれ・かたつきし】【つかわす】からしてつかわす・あゝしてつかわすと。いふ所に用 【これ〳〵】万事物をさして・これ〳〵でおすなぞ云 【きいした〳〵】来た〳〵と云ふ事也 【出しきつて】げびぞうを出しきつてうぬはれを出しきつてなぞいふ所に用すべて出しきつて・おこしきつて・うらミきつて・なぞ云也 【しのびをこめる】ひそかにといふことばにあたる【じれつたふす】ようすとも又・じれつたふござります・ようござりますといふりやくこ也・おすを又おのじをりやくしたることば也

○丁字屋言

【ざんす】よふざんす・わるふざんすなぞいふ所に用 【三味せんばん】毎夜ミせの三ミせんをあづかる・しんぞうをいふかわり〳〵に此役をつとむ・尤ふり袖のやく也・是へ家〳〵に有丁子やにかぎらず 【さつひぶしやれやうだ】【わつちやァいや】【どうともなんし】はくらかすことばなり 【いゝむしだつけね】【つれへのふ】【何ざんすか】なんでござんすかといふ事也てのじとごのじをりやくしていふ 【きれい】通り言也 【おたのしミ】上ニ仝 【きちげへじミた】わつゝけのきやくをな上に仝 【何とでもおいゝなんし】なぶられる時いふことは 【ちよつとミな】ほめられる時ちらす言 【いゝあめだつけね】ろふとば

○角玉屋言

「こんな〳〵」是な〳〵といふ事也人をよふとき用ゆ「はなしが有るよ」はなしのなひときも用ゆ「あきれけへるよ」ことはの内に是を多く云「こんたァの」茶やの男なとをさしていふこなさんといふ事「ぼち〳〵」もてた事也「ちやき〳〵」ふられた事也「おまへさん」「にくらしひ」

○扇屋言

「ほんだんすかへ」人のはなしをするあいさつにいち〳〵是をいふ「だんす」はゞかりだんすなぞといふ所ニ用「わたくし」「あの人さん」名のしれぬ客をさしていふ「きふう」きいたふうといふ事・いのじたのじを中りやくしたる言也「きさんじなもんだね」いけねへもんだね・しやれたもんだね・なぞと云ふ所に用　ひねる　おもむきの有る事をさして云

大尾

【角玉屋】
松浦
誰袖
哥浦

【大俵屋】
吉野

【中万字屋】
名にしほ

【鶴屋】
在原
鶴の尾

【大文字屋】
黛

【竹屋】
哥菊
哥衣

【佐助卍屋】
おふ州

【姿海老屋】
小夜梅
七絹

【若菜屋】
白玉

【越前屋】
勝山
千山

【大菱屋】
三ツ花

【丸海老屋】
江川

【庄兵衛玉屋】
しつか

【若松屋】
若鶴
なひき
みとり木

【桐菱屋】
万菊

【岡本屋】
岩越

【彌八玉屋】
白糸

後編 傾城艣

右にしるしたる遊君其外全盛の遊君数多に候間前編にもれたる君ハ部屋もちまて委しく記し近日後編出し申候

大槻正二
大槻尹一
高木好次
山本錬藏
渡邊幸
秋元千重子
吉田折子

校

昭和六年六月二十日印刷
昭和六年六月二十五日發行

洒落本大系第六卷

非賣品

著作權所有

編纂者 高木好次
編纂者 山本鍊藏
編纂者 渡邊幸

東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
發行者 林平次郎

東京市牛込區辨天町一五七番地
印刷者 本間十三郎

發行所
東京日本橋區吳服橋
振替東京二三七一
六合館

印刷所 清揚社

京傳筆

[illegible]

[illegible]

[illegible]

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02995 1720